
使徒の使い魔

マスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使徒の使い魔

【Nコード】

N5159M

【作者名】

マスター

【あらすじ】

オタクの一般人が神様との取引で「ゼロの使い魔」の世界に転生をして、神様からもらった能力を駆使して生き残っていくお話です。

この作品は誤字脱字が多い為、そのあたりを許容できる人が読んでください。

原作チームが劣化している為、原作キャラが好きな方は迷わず戻るボタンをしてください。

主人公は、鉄壁の守りを手に入れた。(前書き)

初投稿で色々と不手際も多く、文章も稚拙ですがこれから頑張っていきたいと思います。

主人公は、鉄壁の守りを手に入れた。

私、鈴木哲夫の趣味は映画鑑賞であり、現在も映画鑑賞中である。見ている映画は、新世紀エヴァンゲリオンの劇場版破である。

アニメオタクである私がいうのもなんであるが……エヴァは万人に受けるアニメだと思っている。

ロボットが敵を粉碎するアニメは実にイイ。

そんなこんなで、映画終盤のゼルエル戦をみている最中に事は起った。

「あれ？停電か？」

先程まで部屋が明るかったせいで何もみえない。

「眼が慣れてからブレーカを見に行くかー。いいところだったのに、マジでうぜーー」

誰もいない部屋で愚痴を漏らしているとだんだん眼が慣れてきたせいかあたりの様子が見えてきた。

おかしい……。

六畳しかない部屋なのに壁がみえない。

「あー！。ヤバイな仕事の疲れがとうとう頭にまできたか・・最近残業が多かったしな。これは、神が俺に休めという神の啓示に他なら「そんなわけあるか！！」「」

そんな、声のする方を見ると上半身裸で筋肉質な露出狂が……。

「違う！露出狂とか決めるでない。これは、お前ら人間が神に持っているイメージが具現化しているせいでのように見えるのだ」

（やばいよ・・・このオジサン、住居不法侵入だけでなくオツムのほうまで逝っちゃってるよ。黄色い救急車って何番だっけ……）

（ ）の内容は、俺の心の声だとおもってくれ

「だが、オツムが逝っているだ。失礼極まりない奴め。せつかくワシが直々に来てやったのに感謝の意も示さぬとは人間も落ちたものだのー。まあ、とりあえずは話を進めるためにお前が持っている神のイメージを再度想像してみる」

何を言ってるかわからないが、とりあえず神のイメージを再構築してみるか…… 確かに、神と言えば上半身裸のおっさんだが実際見るならばロリ幼女の神がイイにきまっている。

そう考えた途端、露出狂のオツサンがあらうことか絶世の美幼女になっっていた。

おれは今、神の存在をほんのちよっぴりだが体験した。

い……いや……体験したというよりはまったく理解を超えていたのだが

……。

あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『おれは奴の事を露出狂のオツサンだと思っていたら、いつのまにか絶世の美幼女に変わっていた』

な……何を言ってるのかわからねーと思うが おれも何が起こったのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうだった……。

超スピードだとか催眠術だとか。

そんなチャチなもんじゃあ断じてね。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

「どうじゃ、これで少しは現状が理解できたかのー」

「神様、なんでもお申し付けくださいませ。私は、あなた様の忠実な下僕でございます」

幼女は人類の至宝であるため、命令に絶対服従なのは俺のジャステイス!!!

「変わり身が早すぎのは、まあこの際気にしないでおこつ。簡潔に用件だけ伝えるとだな……。別の世界に転生をしてくれんかの」

（転生……よくあるSSのアレか。でも、あれは神の手違いで死亡等の前提を満たしてないと発生しないイベントだったと思うが……俺もしかして絶賛死亡中ですよ!!!）

「いやいや、おぬしは死んでないから安心するがよい。今回は、転生は神の手違いではなくあくまでもこちらからの要望だ。神族で前のいる世界に転生をしたい者がおつてな……。そこでお前さんの世界の人間の数がいきなり増えると厄介な為、誰か一人を別世界に転生をさせて、その抜けた穴に神族を転生させようと考えておるのじゃよ」

（なるほど、SSなどでは神の手違いとかが多かったが実際は神様つてすげーまともなんだ。しかし、いきなり別世界に転生といつてもな・正直メリットが少ない気がするぞ。）

「なーに、安心しろ。当然何も特典を用意しないわけではない。転生予定の世界は、『ゼロの使い魔』と決まっておる。もちろん、その世界で魔法が使える貴族に転生をさせる予定だ。後、一つだけ願

は苦手なもので……」

「注文が多い奴じゃの・・まあ良い。もう会うことともあるまいが、あっちで元気にやるとよい」

こうして、鈴木哲夫の転生記は始まった。

主人公は、鉄壁の守りを手に入れた。(後書き)

誤字脱字のご指摘や感想等お待ちしております。
アイデアも常に募集中です。

主人公は、新天地に舞い降りた。(前書き)

ご指摘いただいた点をふまえて1話の主人公の名前や誤字を修正いたしました。

主人公は、新天地に舞い降りた。

「オギャ　　。オギャ　　（まぶしいぞ、そして体がうごかぬ

）」

なんやかんやで気がつけば、俺こと鈴木は新天地に転生を果たした。その時、俺の横にいたと思われる金髪／イケメソ／高身長／筋肉質の男が俺を抱きしめてきた。

「おお！！　男の子が生まれたか。これで我がヴェーグル家も安泰だな」

満面の笑みを浮かべている父親？には悪いが、俺は男に抱きしめられて喜ぶホモじゃないと激しく抵抗を試みせた。

だって・・・どう見ても30代前半の男にだかれて喜ぶ男がどこにいる！

「オギャー、ギャー（離せよ。イケメソ死ぬ）」

そんな俺の抵抗も父親にとっては、子供が喜んでいるようにしか見えてないらしく。

どンドン、俺の顔に顔面を近づけてきた。

まてまて・・・。それ以上接近をするでない！！

明らかに俺の顔にKISSする気満々な最悪な予感がぶんぶんしてくる・・・

俺のファーストキスがイケメソに奪われるとかそんなの転生特典に含まれていないぞ！！

父親の顔まで後5センチ！

(さよつなら。俺の純潔；；)

「貴方。レイアが嫌がっているではありませんか。貴方のお顔がきつとこの子には怖いんですよ」

さっきのおやじと対比してか・・母親若すぎる！！多く見積もっても20代前半・・下手すりゃ1歳だぞ！！

後、おれの名前はレイアというらしい・・なんか女々しくありませんが母上。

「何を言うか。トリステイン魔法学院の歩くサラブレッドと言われた私の事が怖いなどありえん！」

(歩くサラブレッドだと！！テラ種馬じゃねーかよ。というか、自分で言っただけで恥ずかしくないのか！！)

つい先ほどまで迫っていた純潔の危機は去ったが、父親のアホっぷりにそれ以上の将来の危機感を覚えたのはこれが最初の事であった。

「さあさあ、あなたはもう出て行ってください。私は、レイアにお乳を上げないといけないので男性はただちに退場です」

しびしび、男性陣が退室後に母親の美乳が俺の顔面へ押し出された。当然、男として出された胸を吸わぬは相手に失礼にあたる！！じゅるり・・・。

「オギャー(いただきます)」

(母乳うめ〜〜!!何これ、市販の牛乳とかと比べるのも失礼な位な濃厚で甘い味だよ。)

母乳を飲み干す勢いでしゃぶった後、急激に眠気が襲ってきた。これが赤ん坊の体か・・・ヤバイ・・・眠い・・・。

鈴木ことレイアの転生初日は、このようにして閉じたのであった。

拝啓 神様へ

転生させていただき、ありがとうございます。

私は前世を含めて今日ほどの喜ぶを感じたことはありません。

幾ら感謝してもことたりませんので、今回はこれで示させていただきます。

敬具

主人公は、新天地に舞い降りた。(後書き)

次回は、いきなり飛んで1歳の御話にしたいと思います。

主人公は、専属メイドを手に入れた。(前書き)

リアルで忙しくて更新が滞って申し訳ありません。

主人公は、専属メイドを手に入れた。

ハルケギニアに転生して今日で一年がたった。

赤ん坊というのは、前世で社会人をしていた私にとっては暇で仕方ない。

前世では暇があればインターネットやテレビゲームをやって暇を潰していた頃と比較しまい悩ましい日々を送っている。

しかし！

その暇な時間をつかって、現状把握の為の情報収集に日々勤しんでおります。

そのおかげもあって、家柄や両親のメイジとしての能力が判明した。そして、父親がやはりロリコンであったと判明した瞬間でもあった。後、母の二つ名を聞いて衝撃のアルベルトかよ！と思ったのは内緒である。

【父親】

続柄：父

名前：レイリー・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル

性別：男

年齢：34

属性：土のトライアングル

二つ名：砂塵（別名：トリステイン魔法学院の歩くサラブレッド）

所属：トリステイン

地位：男爵

【母親】

続柄：母

名前：アリア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグル
性別：女
年齢：18
属性：風のトライアングル
二つ名：衝撃
所属：トリステイン
地位：なし

【主人公】

続柄：嫡男
名前：レイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグル
性別：男
年齢：1（前世は24歳）
属性：不明（系統魔法未使用の為）
所属：トリステイン
地位：なし

後、領地の状態もちらほらと耳にしたんだが難しい話は耳から耳に抜けてしまいあまり覚えていない。

一つ言えることは、我が家は貧乏らしい……。

まあ、日々の食事に困るほど貧乏ではないので、これについては将来的に戦争で功績を出して出世することで解決しようと思う。

後、本日から専属の世話係のメイドが付くことになった。

しかも、毎夜一緒に添い寝もオポジションだということではないか!!
もちろん、本来ならば夜泣きやおねしょの対策なのだろうが、精神年齢が前世込みで25歳の私にとってはワクワクが止まらないぜ。

1歳の誕生日を両親や屋敷のメイド達と一緒に祝った。

大貴族とかならば近隣の貴族も呼んで大々的にやるらしいが、あい

にくうちにはそんなお金もないし地位もないのでこじんまりとした誕生日会であった。正直、元日本人として謙虚とか節約が身に付いている私にとってはこのくらいがちょうどよい。

日も暮れて数時間たった。そして、まちにまつたメイドとニヤンニヤ……じゃなかった。添い寝の時間がきましたよー。

「レイアぼっちゃま。ロートでございます。そろそろ、お休みの時間ですよ。ベットと一緒にいきましょー」

「アー。アー（ロートちゃん。まってたよ）」

レイア専属メイドのロートちゃん15歳が私を呼んできた。

ちなみにロートちゃんとは、うちで働いているメイドで今年で2年目の新米メイドである。ちなみに身長は150前後でお胸のほうは推定Dカップ位ある。

後、父親のお手付きではない。なぜなら、父親のお手付きにならないように私の世話をしている時にご機嫌の様子を見せ続けたことで周囲にお気に入りだから手を出すなオーラをかもしだしていたからだ。

いや〜。正直大変だったよ……。ろくに、手足も動かないしさ。後、まだ呂律もまわらないんだよ。

そんなことを考えてるうちに私を抱きかかえてベットに移動が完了した。

「ア〜ア〜（ロートちゃん、おやすみ）」

「お休みなさいませ。ご主人さま」

ロートちゃんの匂いに包まれて眠気が襲ってきた。

女の子の匂いに包まねつつ寝るレイアの一歳の誕生日はこれにて終了であった。

主人公は、専属メイドを手に入れた。(後書き)

今回は、転生特典であった使途の能力発動のお話です。

主人公は、魔法の力を手にしていた。(前書き)

これで主人公もファンタジーの住人の仲間入りです。

主人公は、魔法の力を手にれた。

現在、4歳のレイアです。

やってきました、初の魔法レッスン。

今日この日をどんなに待ちわびたことか。

ファンタジーの世界に転生したらやっぱり魔法や超能力に憧れるよね。

さあ、杖は構えたぞ！！いつでももきやがれ。

「よし、杖は持ったな。まずは、コモンマジック。その次に系統を調べる。準備はできているな？」

「はい父上」

この日の為に、実技の練習は無理だが魔法関連の書物で系統の特性などについては学習済みさ。ぶっちゃけ、ゲームの攻略本みたいで結構たのしかったよ。

「良い返事だ。最初に私がコモンマジックの手本を見せよう。ライト」

父親が呪文を叫ぶと杖の先に光が集まって光っている。

すごいと思ったがやっぱり魔法はすごい・物理法則無視とか神様に喧嘩売ってると思えない現象が今目の前で起こっている。

「これがコモンマジックだ。レイアもやってみなさい」

「がんばるのよ。レイアちゃん」

キターー！。おっし、気合十分やる気十分。行くぜ俺の人生初の呪文！！

「ライターー！！！」

……

シーン……

アレ？なにこれ？何もおこらね〜。あれだけ気合いを入れたのにウンともスンともいわないぞ！！
ハ！もしかして発音が悪かったのか。

「なーに。一発目から成功することのほうが少ないから気にせず続けなさい」

「そうよ。ママだって一発では成功しなかったんだからレイアちゃんもそんなこと気にちゃだめよ。魔法はイメージが大事なんだからもう一回やってみましょう」

そうだよね。やっぱりイメージが足りなかったのか。
光のイメージか……蛍光灯！！。
おっし！イメージは固まった。

「ライターー！！！」

おお！！光ってるよ。

しかし……杖に先に光が集まるのではなくて杖が光ってるよこれ！！あれか？俺が蛍光灯をイメージしたせいなのか。

「レイアちゃん凄いわ。二回目で成功するなんて」

「うむ。さすが我が息子だ。これなら将来楽しみだ。今後練習すればちゃんと杖の先に光が集まるようになる」

なんか納得いかないが、まあ人生初の魔法はとりあえずは成功としておこつ。

「では次にお前の系統を調べる。一通りの系統魔法を使ってみてコレだ！と思うものがあればその時に言いなさい。それがお前の系統だ」

なにその適当な系統調査は！普通ハンターハンターみたいに水見式とかで正確に判定するもんじゃないのかよ。六〇〇〇年もそんな適当な測定方法してるのか？

改めてこの世界に不安をおぼえたぞ。

「ここからは私が教えます。最初は風の系統魔法からいきます。ウインド」

どこからともなくそよ風が吹いてきた。

涼しい〜。まさに環境に優しいクーラーだよ。

夏場に最適だし、これはこの時代で生きるには必須のスキルだよ。

「いきます。ウインドー」

……

……

シーン……

あれ？デジャブがする。

「私と同じ系統じゃないみたいね。残念だわ。では、次いくわよ。土の系統で魔法を試します」

母親の杖が足元にある石を刺している。
まさか！これが究極の物理法則無視のあの魔法か！

「錬金」

あら不思議。足元にあった石ころが青銅に変わっている。
原子配列変換か……。どうせ変えるなら鉄とかがいいよね。
おっし！

足元の拳位の大きさに石めがけて、燃える俺の小宇宙！！

「錬金！」

呪文を唱えた瞬間、全身に何かが流れるのを感じた。
前世での経験をいれてもこの感覚は味わった事がない。
まるで全身に冷たい水が流れるような感じだ。

足元に石を見て見ると先程まで石ころであったものが何と黒い塊へと変貌を遂げていた。

「すごいわ。今度は一回で成功させるなんて。しかも鉄を錬金してしまっなんて」

「どつやら土系統みたいだな。しかし、鉄を錬金してしまうとは・
。鉄はライン以上でないと錬金できないのだがな。すでにライン並
の精神力があるということか」

おっと、忘れるところだった。さっきこれだ！と思っただものがきた
ら言うように言われてたな。

「父上。おそらく私は土の系統出ないかと思えます。魔法を使った
瞬間に全身に何かが流れるような感じがしました」

何やら両親が俺の魔法をみて今後の教育方針を検討しているらしい。

……俺の話きいてね〜じゃんかよ。

すでに確定済みとして話がどんどん進んでいる。

なにになに……魔法学院入学前にトライアングルにするだの……武者
修行にだすだの・・なにやら不安な言葉が聞こえてくるぞ。

「旦那様、奥様。そろそろ昼食のお時間です」

GJだよ。ロートちゃん。

あのまま会話が続けば、きつと杖一本で武者修行に出されるところ
だったよ。

飯でも食べて興奮がさめてから話せばきつとまともな教育方針にな
るはずだ。その場のノリできめられちゃたまつたもんじゃないぜ。

「もうそんな時間か。では、午後からは精神力が尽きるまで魔法の
練習をするぞ！」

「そうね。魔法学院に入学までにトライアングルなれるように頑張
りましょう」

もう決まっちゃったのですかorz

少しは私の意見も聞いてほしかったよ。

Noと言えない日本人……そんなフレーズが似合う私の回答は決まっていた。

「はい。がんばります（本当は頑張りたいくないよ）」

結局夜まで魔法レッスンは続いたのであった。

これにて（魔法）初体験は終了であった。

主人公は、魔法の力を手に取れた。(後書き)

次回は、転生特典の使徒の能力発動です。

主人公は、使徒の力を手に入れた？（前書き）

誤字脱字多くてたびたび申し訳ありません。

主人公は、使徒の力を手に入れた？

初の魔法レッスンから早3年が経過しました。現在7歳レイアです。毎日鬼のような特訓のかいもあり、やっとこさ土のラインの上位まできましたよ。想像以上につらいぜ。魔法の特訓を実体験してスクウェアがなぜエリートであるかを身をもって理解した。

父上が領地運営で色々忙しいので魔法レッスンは基本母上がしてくれます。

母上の攻撃は、実にえげつないです。なんていうか・・・手甲を使って殴りかかってくるんですよ。まさに、前衛系魔法使いである。

しかも、空気を圧縮して手に集めて相手に殴りかかり、ヒットの瞬間に相手に向けて解放するんです。そうするとどうなるかわわずともわかるよね・・・人がトラックに衝突したかのごとくぶつとぶんですよ。マジで危険極まりない。

「レイアちゃん。逃げてばかりでは訓練にならないわよ。ちゃんと魔法をつかって攻撃してきなさい。それにラインになったんだから早くゴーレムを作れるようにならないと土系統として恥ずかしいわよ」

そんな優しく言われてもできない事はできないんですよ。なんでゴーレムが作れないんだよ！！土の系統と言えばゴーレムを主体とした自動戦闘がメインだというorz

あれか！またイメージの問題なのか・・・ぶっちゃけガンムを作ろうとイメージしまくってるのが原因か！？」

後、ラインメイジだけど私7歳児の子供ですよ。

殺傷力の高い風系統のトライアングルとどう渡り合えというんだ・・・。

「いやいや、母上。それでしたら手加減をしてください。我が子を撲殺する気ですか」

「だって、最近レイアがママにかまってくれないんだもん。さびしいんだもん。だから、一杯看病してあげるね」

やべー。

魔法レックスとは名ばかりで実の息子を亡き者にする気だ。くっそ。

本来ならば使徒の能力を使って逃げ切りたいんだが（主にATフィールドとかで）・・・なぜだかまだ一切の能力が使えない。

このまま色々と能力不備のまま魔法学院に入学だけは避けなければならない。

「奥様、お茶とお菓子を食堂にご用意いたしました。そろそろ休憩を入れてはいかがでしょうか？」

さすが専属メイド。

このまま亡きものにされる前にささず手助けをしてくれるなんて実に気が利いてるじゃないか。

これで既婚者でなければ側室として迎えちゃうんだがな・・・。

実は、昨年にもうロートちゃんは父上の秘書とされている男と結婚したのであった。

自分の女を寝とられた気がしたが、さすがにロートちゃんの婚約者

を亡きものにするのもいかず私が家族代表で結婚式に出席し祝辞を述べたよ。

寿退社とかするのかなと思ったけど、この世界ではそんな事したら生活ができなくなるため今も私専属メイドとして働いております。

「そうね。さすがに少し休憩を入れたほうがよさそうね。レイアちゃん、手をあらってから食堂にいきましょう。」

「はい。」

一時間後。

おやつも食べて、お腹いっぱいやる気なしのレイアです。

また日が暮れるまで魔法レッスンか。

せめて、週休二日は休みが欲しいです；；

「午後からは、魔法の訓練の続きをしようと思ったのですが領地の山で山賊が居座っているため退治して欲しいという依頼がきております。」

なに・・・その依頼がきておりますとか他人事口調・・・凄くいやな予感がするんだけど。

まさかね・・・まだ7歳の俺に山賊狩りもとい人殺しをしると申されるのか！！

「本来ならば領主の仕事でありますがあいにく別件で不在です。その為、私達で討伐に向かいます。これは初めての実践になるのでレイアは私についてきて魔法とはどのようなものか、そして貴族としての義務、戦いの場について色々学んでもらいます。何か質問はありますか？」

「いくつか質問があります母上！」

もはや、討伐から逃げる事が回避不能な空気ならばやることは一つだ。

自分の力でどこまで戦えるか、そして襲われたときに何をすべきかだ。

「山賊の規模と私の力量で対応できる相手の人数と逃げ切る際にはどのようにしたらよいか 以上の三点について教えてください」

「良い質問です。まず山賊の規模ですが30人前後と聞いております。メイジがいるかいないかについては情報がありません。次にレイアの実力で相手にできる人数ですが平民なら3人、メイジならラインメイジー人までです。次逃げる際ですが、子供の足で逃げ切ることは困難でしょう。」

え！逃亡は出来ないだと。

それは対応人数を超えた場合は必然的に死ぬしかないということなのか母上。

「レイアが不安に思うのも無理ありません。しかし、この母上が付いて行くのです安心しなさい。貴方は命に代えても守ります。」

やばい。不安にさせた後にこの心強い言葉は心にグッとくるぜ。俺が女だったら惚れちゃいそうだよ母上。

しかし、死亡フラグ立ててませんか母上？

更に三時間後……。

領民の案内により目的に到着した。

「あそこが山賊が根城にしている砦です。貴族様どうかどうか山賊を討伐してください。これ以上、村に被害を出したくないのです。このよう不躰なお願いをした以上わが身はどうなっても構いません。どうか私の命で村を救ってください。」

涙を流しながら村を救おうと命を投げ出す領民をみて不覚にも私も泣いてしまった。

某首相曰く 感動した！

「後は私達が引き受けます。貴方は村に帰り、私達の報告を待ちなさい。それから、命を粗末にするものではありません。領民を守るのは貴族の務めです。」

「ありがとうございます。このご恩は一生わすれません。」

領民Aが山を下るのを見届けた後、私達・・・といっても母上、俺、ロートちゃん、護衛（平民）2名の五人PTでしかない。

「では、これより山賊討伐を行います。相手の人数は魔法で調べたところ28名です。うち2名がメイジだと思われま。おそらく二人ともライン以上でしょう。」

なんだって！！メイジが二名もいるだと・・・
相手の戦力が予想以上におおいな。

「母上。山賊にメイジが二名もいる以上いったん引き返して父上の帰り待ち討伐に来るのがよいと思います。」

「レイアの言うとおり安全に討伐をするならばそれがいいでしょう。」

しかし、すでに遅いのです。相手には土のメイジがいるらしくこちらの事がばれました。一度引き返せば山賊は逃げてしまうでしょう。そうなれば、先程の領民の村は報復をくらいみな殺されてしまいます。」

「いいですかレイア。私達がやらねば多くの命が犠牲になります。領民を犠牲にして逃げるなど貴族として恥です。貴方はメイジ以外の山賊を相手にしなさい。私はメイジを片付けたあとに貴方と合流します。」

いつになく真剣な母親の顔をみて私も決意した。

領民の為か・・・この世界の貴族は性根が腐っているやつばかりだと思ったが俺は両親に恵まれたなど実感した。

「命に代えてレイア様をお守りいたします。」

「奥様ご武運を。私には皆様な様な力はありませんが山賊の弓よけに位はなりましょう。」

護衛はまだしもロートちゃんまで身を捨てる覚悟を決めてしまった。貴族として！いや、漢としてロートちゃんは守らねばならない。

「母上、お気をつけて。私の事は気にせずメイジのほうをお願い致します。」

そうこうしている間に山賊が散開をして各方面から襲ってきた。

「『衝撃』のエリア参る！！」

突風と共に駆けだした母上を見送り、我々4人も行動する。

すでに母上はメイジとの戦闘に入ったようだ。離れていても母上が放つ衝撃音が響くぜ。

「こちらも行動に移す。護衛Aは前をその後ろに私、ロート、護衛Bの縦に並ぶ。基本一对一の戦闘を行うよう。」

護衛に指示を出した後、皆に向かって全速力で駆けだす。

母上が外でメイジと戦闘を行っているということは皆内部にはメイジは多くても一人、もしくははいはいはず。

叩くならば今しかない。

皆まで残り20mあたりまで来たところで背後からいきなり世紀末に出てきそうなモヒカンが襲いかかってきた。

「くたばれ。」

一瞬、ここ別世界！？と思ってしまった。

「アース・ハンド。」

呪文を唱えた瞬間地面から手が生えてきてモヒカンを頭から抑え込んだ。

「ごめんね。本当は殺したくはないんだけど、私達も死ぬわけにはいかないんだ。恨んでいいよ。」

ゴキ。

そう言い終わるとモヒカンの頭をあらぬ方向に曲がっている。

180度回転をして背中を向いている。

同じ要領で砦に付くまでに数人殺した……。人を殺せば罪悪感とかがあるかとおもったが、特に何も感じなかった。

あれだ・・アドレナリンが大量に出ているせいだ。

「砦につきました、しかし入り口は堅く閉ざされており。いかがいたしましょう。」

ここにきて、山賊は籠城作戦にでたか……。

山賊メイジが母上を倒して戻ってくるのを待っているだろう。しかし、甘い！
母上の攻撃音が聞こえている以上戻ってくることはないのだよ。

「問題ない。何も入り口から入る必要などないのだよ。」
入り口から10mほどはなれた外壁まで移動をした。

「入り口がないならば作ればいいんだよ。錬金」

砦の外壁が砂になり崩れていった。

その要領でどんどん砦の外壁を砂に変えていき、しまいには砦が崩壊してしまった。

「すげー」

「さすがご主人様」

しかし、砦が崩れてもなかにはまだ山賊が20人以上残っている。油断は禁物である。

「ブレット。」

山賊があたふたしているうちに数を減らすべく土弾を大量に放った。それに続いて護衛も剣をもって生き残っている山賊にとどめを刺して行った。

「アース・ハンド。アース・ハンド。ブレット。」

来る敵をちぎっては投げちぎっては投げ・・・これなんてレイア無双？みないなことをしていた。

あたりをみると死屍累々の光景が広がっていた。

ふう・・・片づいた。

見渡す限り立っている人間は我々4人だけだ。

その時、ひときわ大きな衝撃音がした。

振り向いてみれば森の木々が数本空を舞っているではありませんか！！

護衛もロートちゃんも同じ方を向いており、きっと皆同じことを思ったに違いない。

相手のメイジは死んだな・・・。

全員の緊張が抜けきった瞬間に、ハンマーで殴られたような衝撃が私に襲ってきた。

5・6 m程見事に放物線を描いて吹き飛ばされた。

「ぐぁーっー。」

「レイア様！」
「ご主人様」

すぐさま、護衛とロートちゃんが私のそばに寄ってきた。レイアの右腕があり得ない方向にまがっておる。その他にも全身打撲や擦り傷等の怪我也も負っている。

「痛い！痛い！イタイイタイイタイイタイイタイイタイ……」

もはや痛みでそれ以外の言葉が出なかった。

一体何が起こったんだ。なぜ吹き飛んだ。

なぜこんな痛い思いをしないといけない。なんで……なんで……なんで……

「チ、まだ生きてやがる。風の魔法で気配を消して一撃で殺してやるうと思ったのにしぶとい奴だ。まさか、自分は狩る側で狩られる側になるなんて思わなかったか？」

こいつが私の腕を。こいつせいで私が痛い思いを。こいつのせいで皆が危険な目に。こいつのせいで……こいつのせいで……生まれ初めて明確な殺意をもって人を殺したいと思った。

「コロシテヤル。」

「殺してやるだ？そのぞまで何ができるんだよ。あっちの化け物が来る前にお前らを殺して逃げるだけさ。これでお別れだ。エア・カッター」

山賊メイジが魔法を放つと同時に護衛A Bとロートちゃんが私の目の前に立ちはだかった。

なにしてるんだ……。私には理解できなかった。この一撃が防げ

たとしても相手は次の魔法をうつてくるそうすれば次こそ回避できない。
だから、早く逃げるんだ。全員がばらばらの方向に逃げればおそらく誰かは助かるはずだ。
なんで私の前にいる。

「さようなら私のご主人様」

ふざけるな、死ぬのは俺のはずだろ。頼むから逃げてくれよ。
風の刃が迫ってくるのを感じる。

動けない私にできることは、一つしかなかった。
体力のすべてを使ってかつてないほど大きな声で私は叫んだ。

「大バカヤロー!!!」

護衛とロートちゃんが死を覚悟した瞬間、皆の前に大きな壁と1・8 m程のゴーレムが出現したのだ。

「これは、レイア様のゴーレム？」

護衛もロートちゃんも驚いているだろうが、かくいう私も凄く驚いている。

なんていってもそのゴーレムがゼルエルなんですよ。
まさか、このタイミングで力が目覚めるとは思ってもみなかったのだ。

これが主人公補正というやつのか！

おっと、そんな不謹慎なことを今は考えている余裕はない。
まだ、能力の制御がうまくいっていないのが現状だ。

ならば、早急に相手を倒すだけだ。

ちなみに、今も全身が非常に痛いです。

しかし、この痛みにも堪えて言わねばならないセリフがあるのだ。

「勝ったな（某司令官風）」

「ふざけたことを！ゴーレムをだして一撃をしのいだけのくせにいい気になるなよ。これできたばれエア・スピアー！」

相手のメイジが魔法を放つと同時に私はゴーレムに頭の中で指示を出した。

ゴーレムの右腕が円筒型になり、その瞬間凄い勢いで相手のメイジに向けて伸びたのだ・・・。

劇場版破のゼルエルが二号機を撃破するのと同じ攻撃が今まさに行われたのだ。

山賊メイジの頭部がきれいに吹き飛んだ。

頭のあつた場所は血の噴水になった。

数分後・・・

向こうにいたメイジを始末して戻ってきた母親と対面をした。

「良くやりましたと言いたいのですが、その前に、すぐに屋敷にもどって怪我の手当てをします。貴方達もよくレイアを守ってくれました。」

私はてっきり護衛A Bとロートちゃんに御叱りがあると思っていたが、理解のある親だなとつくづく思った。

「もったいなきお言葉です奥様。弓よけになると言いつつ何もできないままご主人様に大怪我を負わせてしまいました。」

「貴方達がいなければ私は死んでいたかもしれません。本当にありがとうございます。」

屋敷に戻るまでの間、戦いについて母上に根掘り葉掘り聞かれました。

戦い方に問題があるとか油断をするとかゴーレムについてとか。

しかし、そんなことなんでレイア的能力発動は無事に終了です。

主人公は、使徒の力を手に入れた？（後書き）

次回はゴーレム運用方法について検討します。

主人公は、ゴーレムの使い方を学んだ。(前書き)

いつも誤字脱字大変申し訳ありません。

そしていつも読んでくださっている読者の方々

ありがとうございます。

主人公は、ゴーレムの使い方を学んだ。

現在8歳レイアです。

着々と年を重ねていくうちにあることに気がついた。

それは私の容姿である！

今までは、誰かに似ているな・・だけど、喉元まできているのだが
思い出せなかった。

「誰かに似ていると思ったら渚カヲルにそっくりじゃないか！」

神様よ。容姿については多少考慮してくれるとかなんとか言っていたがこりゃやり過ぎじゃないか。

他に転生者が居るかわからないが見る人が見れば一発で転生者って
ばれるじゃんか。

まあ、容姿については文句のつけようのない位美少年だからこの際
許そう。

今更考えてもどうしようもないもんね。

鏡の前でorzのポーズをとっていると父上が私の部屋に入ってきた。
た。

「レイアよ。今日の魔法の訓練はワシがやるう。同じ土系統として
色々アドバイスできることもあるだろう。」

日ごろ領地の仕事で忙しい父上がこのような申し出をするときは必
ず何かある時だ。

「父上。一体何をお考えですか？父上が私の訓練をしてくれる時は必ず何かある時だと私は思うのですが……」

父親の眼をまつすぐにみて私が答えた。

「く……訓練に行くぞ。さあさあ表に出なさい。」

逃げたな。あからさま過ぎてもう何も言わないよ父上。
父上に連れられて屋敷の庭へとしぶしぶ移動をしました。

「今日の訓練の内容は、ゴーレムの運用方法についてだ。レイアはラインの上位であるのにもかかわらず未だにゴーレムを一体しかだせていない。これでは戦闘時に自分が守ることも厳しい。」

分かってますとも父上。

しかし、どうやっても一体しか出ないんですよ。

そりゃ、ゼルエルが何体も出せたら俺だって自分を守るのに苦労しないと思うよ。むしろ出たら逆に怖い。

後、ゴーレムって自分が思った通りにしか動かないからゴーレムを動かしているときってどうしても自分の周囲に対しての警戒心がなくなるんですよ。

しかし、ギーシュはゴーレムを複数体を同時操作できるからな。

あいつは、才能の塊だと実は俺思うんだよ。

「父上、おっしゃることも十分に理解できますが。しかし、ゴーレム運用時にはゴーレムに指示を出しているため、どうしても自分の周囲に対しての警戒心が薄れてしまいます。今の私には一体以上のゴーレムの運用は無理だと思います。後、理由はわかりませんが一体しかだせません。」

なにやら、父上は頭を上下にふってウンウンと相槌をうつている。

「現状を理解しているか。それならば解決策は簡単だ。解決策は二つある。」

なんだって〜!!

現状の問題を解決する策が二つもあるのか。さすが土のメイジの大先輩だ。

「まず一つ目だ。平民が使う武器や武術で身を守るすべを手に入れるのだ。そうすれば、ゴーレム運用時に本体が狙われても対応ができる。」

至極まともな意見だ。

確かにそうだ、ゴーレムばかりに頼っている間に本体が攻撃されて死んだらおしまいだもんな。

しかし・・・使徒の力を手にれいた私は人間が使う魔法や武器の攻撃で死ぬことはないのだよ父上。

本物のカラル君ほどではないが、自動でA・T・フィールド発動できるくらいにまで成長したのだよ。

「二つ目は、一体のゴーレムを極めることだ。ひとつ例をあげよう。『土くれ』のフーケという盗賊メイジがいる。その者はゴーレムを一体だけしか出していないがそのゴーレムは魔法衛士隊でも倒しきれない。その理由はゴーレムの再生能力にある。土のゴーレムの為壊れた個所から即時に作り直すことで魔力が切れない限り不死身のゴーレムなのだ。」

ふむふむ。実に勉強になる。

前者は将来的にやるとして今は後者だな。

うっくん・どんなゴーレムにするかか・ぶつちやげゼルエルを倒しきれるほどのメイジがこの世界にいるかが問題だよな。ありえそうなのが虚無使いだよな。

あいつらも存外チートだから・・・。

あ・・・今凄く名案が浮かんだ。

そうだよ！あのマンガのマネをすれば身の安全も守れるしある意味ゴーレムの完成系？になるのではにか。

「父上！実は名案が浮かびました。ゴーレム一体で実現可能で且つ身を守ることができます。」

「では、その案をやってみるといい。この『砂塵』のレイリーが相手をしてやるぞ。」

フッフッフ。後悔せてやんよ父上。

「では、参ります。」

「いつでもかかってきなさい。」

では、気合をいれて出てこい俺の分身。

「ゼルエル！！」

魔法を使った瞬間、私の目の前にゼルエルが出現した。

相変わらず物理法則無視してるな・・・質量保存の法則はどこに・・・。

「今までと変わってないではないか？」

いえいえ父上これからですよ。
恐らく実現できるはずだ。

私は、ゼルエルに向かって一步前進をし、ゴーレムとの距離を可能な限りなくした。

「殖装」

そう言い放った瞬間、ゼルエルが布のような形状になり私に覆いかぶさってきた。

そうだそうだ。これを望んでいたのだ。

ゴーレムが一体しか出せない。

しかもその際に自分自身が注意不足になる。

それならば、ゴーレムを身にまといばいい!!

「ほう。そのようなゴーレムの使い方をするとは思ってもみなかったぞ。ゴーレムを身にまとったということは多少の攻撃では怪我はしないな。少々本気を出すぞ。」

えっ。。。

母上に続いて父上もですか！

このバトルジャンキーめ。

「先手必勝！錬金」

きたね〜。いきなり始めやがった。

いきなり、手当たりしだいの地面を砂に錬金してきやがった。

突然の事で不覚にも逃げるのが遅れてしまい、砂に足取られてしまった。

今はゴーレムを纏っている為、重量がある為足を取られてしまうと

砂地獄にはまったかのように抜け出す事が困難であった。

「父上、いきなり始めるとは卑怯です。正々堂々と勝負してください。」

「甘いわ！戦場ではどのような卑怯な手をつかっても相手を倒せばよいのだ。」

言ってることは、もっともなのだが・・・なぜか釈然としないな。くっそ。とりあえず、ここを抜け出さねば負けてしまう。

抜け出そうともがけばもがくほどドンドン砂に沈んでいく・・・

父親が砂に沈んでいく私をみてニヤニヤしている。

マジでぶんなぐりて〜〜と思った。

そっちがその気ならこちらもやってやるぞ！

「父上。全力で防いでください。フィールド展開！」

その瞬間、レイアを中心とした半径5mにクレーターができた。ついでに、父上もきれいに吹き飛んで行った。

手加減はしたが、さすがA・T・フィールドだ。

先程までであった砂がきれいに吹き飛んだ。

「思ったより威力があるな。」

そんなつぶやきをしているうちに父上が戻ってきた。

少々砂埃を被ってはいるもの大した怪我はないようだ。

「二つの魔法を魔法を同時に使うとは、思ってもみなかったぞ。それに今のはエリアと同じく風の圧縮魔法か？」

しまった。この世界では、基本的に魔法の同時運用はできない設定だったな。
訓練を積んだ魔法使いで何とかできるとか・・そんな話を聞いたことがある。

「き・・禁則事項です。父上。」

A・T・フィールドで吹き飛ばしましたとか父上。

とか説明できるわけもないし、俺もA・T・フィールドについて口頭で説明できるほど理解してないぜ。

「次は先程のようにはいかぬぞ。錬金！ストーム！」

土の魔法に続いて風の魔法をつかってきやがった。

先程と同じように地面の地を砂へと錬金してから、ストームを使い巻き上げている。

何も見えんぞ・・30cm先も見えないぞ。
まるで砂嵐に巻き込まれている気分だ。

「これぞ。『砂塵』のレイリーの由縁だ。」

自信満々に叫んでいる父上をみて、子供相手に本気出すんじゃないよ！

何やら父親が新たに呪文を唱えようとしている。

え！

この状況で追い打ちをかけて来ようとしているのだ。

「錬金」

父上が砂嵐に向かって何かを錬金してきた。
とっさにいやな予感がしたゼルエルの腕を使い飛来してくる物をつ
かんだ。

私に向かって飛んできたのは鉛筆ほどの飛針だったのだ。

いやいやいやいや、こりゃないだろ！！

視界ゼロの中でこんなもの錬金して相手に投げつけてくるなんて何
考えてるんだ。

ちよつくら文句をいってやる。

「ちよつ」

「錬金錬金……錬金」

父上が飛針を作っては砂嵐にとらわれている私に投げつけてくる。

A・T・フィールドとゼルエルの性能があるおかげでこの程度やり
過ぎせるがやり過ぎですよ父上。

ちよつと管理局の白い悪魔風にOHANASIをしなければならな
い。

「父上。怪我をしてもしりませんからね。」

右腕を父上のほうに向けて、A・T・フィールドを数枚重ねるイメ
ージをつくった。

「フィールド展開」

父上に向かってA・T・フィールドが展開されていった。

A・T・フィールドに押し出されるような形で直撃を受けた父上は、

今度こそ見事に転がって吹き飛んで行った。

私は心の中で、体張って2号機が弾き飛ばされるシーンを再現しているなんてさすが父上と不謹慎なことを考えていた。

父上が気を失ったようで魔法も途切れてしまった。

やばい・・・やり過ぎてしまったかと冷汗を流してしまった。

この年で親殺しとかお先真っ暗じゃないか！！

「父上ー！大丈夫ですか？」

すぐさま父上の方にかけていった。

頼むから生きていてくれよ俺の未来の為に。

「誰かいなか。」

すぐさまメイドAがこちらにやってきた。

メイドAに母上に事の顛末を伝えることと水のメイジを手配してくれるようをお願いをした。

父上は、うんうん唸っている問題ないとは思うが素人判断は危険の為である。

とりあえずは、現状の場所から動かさない様にしよう。

後、このままでは日差しが強く、父上の体にも悪いだろうからゼルエルの体を使いキャンプのテントもどきを作成して日陰になるようにした。

2時間後・・・。

水のメイジの治療が終わり無事に父上も意識を取り戻した。軽い打撲と強い衝撃を受けたことによる脳震盪だそうです。

「貴方も子供相手に本気になってどうするのですが！それに貴方達の戦いのせいで庭がめちゃくちゃではありませんか。」

「すまん」

「ごめんなさい」

確かに庭はめちゃくちゃだが、私わるくないよ。

全部父上がやったんじゃないかよ。

そうとわかっていても口にできない・・・日本人って謙虚だよな。

「それに貴方。レイアに何かお願いがあったのではなくて？それとも用事はもう済んだのかしら？」

ああ。やっぱり何かあったのね。

どおりで父上が私の訓練を率先してやってくれるはずだ。

「そうであった。そうであった。すっかり魔法の訓練に夢中になって忘れてしまっていた。」

不安はあるがここは空気を読んで聞いてあげるか。

「父上。私に何か頼みたいことでもあるのでしょうか？」

「領地の東側にある川沿いの村の治水工事をお前にやってほしいのだ。」

は？何言ってるんだ。

治水工事を8歳の子供にやれと申すのか父上。

ちなみに治水工事とは、河道の浚渫・拡張などにより水流を円滑にし、築堤を行うことで河川の氾濫などを防ぎ、運輸・灌漑の効率性をあげることが目的とした工事である。

「父上。大変申し上げにくいのですが。ラインの私が行くよりトライアングルの土のメイジである父上の方が適任ではないのでしょうか？それに私はまだ8歳ですよ。治水工事がなんたるかも知らぬのに行っても工事ができないかと思うのですが？」

なにやら母上が笑っていらっしやる。

一体どこに笑うポイントがあるのか教えて欲しいぞ。

「レイアちゃん。実はパパね。かなづちなのよ」

・・・

・・・

・・・

・

「プ」

思わずふいてしまった。

あのイケメンの父上がかなづちですよ。

笑っちゃうぜ。もう笑っているがさ。

かなづちだから治水工事の川の水も怖いということか。

「くっ。かなづちで何が悪い！大体、人が水に浮く方がどうかしているのだ。」

さすがにこれ以上父上をいじめるのも可哀そうの為、治水工事についてあげるとするか。

父上の意外な一面もすることができたしね。

「分かりました父上。私が治水工事を行ってきます。ただし、工事の際にはちゃんと専門の人を用意してくださいよ。私にできるのはゴーレムを使った機材の運搬と錬金ですから」

「分かっておる。出発はあすの朝になっておるので今日はゆっくり休むといい。なぐにほんの2週間ほどの工事予定だ」

2週間だとー！

なにそれ聞いてないぞ。

そんな長い期間、メイドと一緒に居られないのは嫌なので断ってやるぞ。

それに汗水たらして、男に囲まれた土木工事なんぞやりたくない。

「父上、やはり私は・・・」

と言いかけた時父上が私の言葉を遮った。

「そついえば、お前の専属メイドをしてた者は確か出産と育児の為、一時実家に帰省していたな。」

父上がニヤニヤして話ってくる。

「確かに専属メイドのルートは、実家に帰省中ですがそれが何か関係あるのでしょうか？」

「そのメイドの実家がちょうど治水工事を行う先の近くにあってな。実は、工事の際のお前の滞在先にするべく、すでに手はずを整えてあるのだよ。そのメイドから『お待ちしておりますご主人様』と伝

言を貰っているのだが・・・レイア何か言いかけたがなんだ？」

きたねー！。

いつもお世話になったロートちゃんにすでに依頼をしているとか公明も真つ青な罨だぞ。断れないじゃないか。

「ヴェーグル家に恥じぬよう、完璧な治水工事を行ってきます。ち・ち・う・え」

覚えてやあれ。いつかこの恨み果たしてやるぞ。

こうして、newゴーレム運用方法を手に入れたレイアの一日は終了です。

主人公は、ゴーレムの使い方を学んだ。(後書き)

殖装のネタが分からない人は、強殖装甲で調べてみてね。

次回は、ロートちゃん実家におじゃまします。

主人公は、メイドの実家にお邪魔する。(前書き)

ペースが遅くて申し訳ありません。

色々指摘等をいただき改善しつつ頑張りたいと思うので生温かい目で見てください。

主人公は、メイドの実家にお邪魔する。

「幸せは歩いてこない だから歩いて行くだね。一日一歩 三日で三步 三步進んで二歩さがる」

歌はいいね。歌は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ。

偽カナル君としてこのセリフを言わざる終えないよね。

誰もいないから音痴な私でも気にせず歌えるぜ。

なんで誰も周りにいないかって？

現在、上空500m付近にいるからさ。空の旅は想像以上に気持ちがいい。

私が空の旅をしているかという事の顛末は出発の時に起こったのだ。

- - 2時間前 - -

「父上、母上。そろそろルートがいるイル・ボツロ村に向かおうと思うのですが・私の護衛と道案内はいずこに？」

治水工事の出発の準備をして玄関まで来たのだが、父上と母上と執事と手提げかばん程度の荷物を持ったメイドAしかいない。

キョロキョロあたりを見渡すがやはり他には人がいない。

父上と母上と一緒に来るはずもないので除外する。後、執事も父上の仕事の手伝いがあるだろうから除外。

メイドAは・・・連れて行ったらむしろ私が護衛役じゃないか。もしかして道案内？

「非常に言いづらいが、我が家は財政状況は芳しくない。」

そりゃそうでしょ。

なんといつても滞在先にメイドの実家を指定する位だからね。

「それに、お前の実力はラインメイジにも関わらず、トライアングルのわしを倒すほどの腕前だ。むしろ護衛など要らぬと判断できる。」

勝てたのは、使徒の力使ったからね。

魔法の実力だけでやれば、勝負にならなかったよ。

「後、村までの道だが屋敷出て東に1時間ほど歩いた処に河川が流れている。それ河川を上流に向けて歩いて2日程度の処に目的地の村がある。現地に着いたら村人にロートの家の場所を聞けば問題ないはずだ。」

大体歩いて2日程度で付く距離か・・・。

しかし、なんで歩いての時間なんて説明するんだ。

「父上。何となく言わんとしていることは分かるのですが、なぜ徒歩での時間を説明するのですか？」

父上がニコニコした顔で言い放った。

「それはだな。お前が護衛なし且つ徒歩で村に赴き治水工事を行って帰ってくるからだ。」

ありえな〜い。

貧乏ここに極まりってか？

そつだ母上に助けを求めよう。
母上は私を愛してくれるよね？
うんそつにきまつている。

「母上、何やら父上がご乱心のご様子です。母上からも何か言つて
ください。」

「レイアちゃんは強いから護衛は要らないし、それに護衛を用意する
のもタダじゃないのよ。それに、歩いていける距離なのだから馬
だつて必要ないのよ。平民がどのような方法で日ごろ暮らし町など
に移動しているか身をもつて体験する事で今後の領地の発展に役立
てるヒントがあるかもしれないじゃない。」

実にまともだ。しかし、平たく言えばお金がないから我慢しろ。

母上のありがたいお話が終わるとメイドAが私に荷物を渡してきた。

「その荷物の中に道中に必要なものはすべて揃えてある。後は回せ
たぞレイアよ。」

「レイアちゃん頑張つてくるのよ。ママは信じてるわ。」

「行つてらつさはいませレイア様」

「行つてらつしやいませレイア様」

父上、母上、執事、メイドに口をそろえて行つてらつしやいを言わ
れてしまった。

もうやけくそだ。

行つてきてやるよorn

「いつてきます、（T T）ノアーウ…」

歩き続いて1時間経過。

河川まで1時間とかまるつきり嘘じゃないかよ。河川のかの字もみえないぞ。

疲れを癒す為近くの木陰で横になり空を見上げた。

「鳥はいいな。自由でどこにも行けて羨ましいよ。俺も空を飛んで……空を！！」

飛べる！

思いつき俺。使徒の殆どが空や宇宙を飛来してきたヤツらばかりじゃないか。

そういう原理で飛んでいたかは定かでないが、恐らくA・T・フィールドを利用した方法に違いない。

推測の域を出ないが重力を遮断するイメージでA・T・フィールドを展開すれば恐らくいけるはず。

そうときまれば臆は急げだ。

重力を遮断・重力を遮断・重力を遮断・重力を遮断……
イメージは固まったいくぜ。

「燃える俺の小宇宙、フィールド展開！」

叫ぶ終えて恐る恐る足元を見ると地面から30cmほど浮いていた。

「キタ
（ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ）
（ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ） （ 〃 ）
……！……！……！」

初めて魔法が使えた時以来に感動だ。

またひとつ前世で憧れていたことが実現できたよ。

みんなは、ドラゴンボールを見て【かめはめ波】とか【舞空術】とかやろうとしたよね？

「後は、万が一空でドラゴンやグリフォン等の幻獣に襲われた時の為にゼルエルを着込めば完璧かな。殖装」

準備は整った。後はルートちゃんの実家に向けて出発だ。

「レイア、ゼルエル発進します。」

カタパルトがないのは残念だが空の旅に出発です。

- - 回想完了 - -

河川に沿って遡っているが、まだ村は見えないな。

まあ、空と飛び始めて約1時間くらいしか経過してないから、速度から考えて村まで残り半分くらいの距離かな。

しかし、まったくと言って程民家がない。

前世で都会に住んでいた頃は、どこまで行って民家やマンションで町から町の間には森があるとか信じられないよ。

ルートちゃんの村は一体どんな村なんだろう。

RPGにでてくる中世ヨーロッパ風の初期村なのかな？

ちよつとワクワクする。

そんなルートちゃんの村の事や向こうに着いたらまず何をしようかと考えているうちにあることに気がついた。

手土産が何も無い・・・。

幾ら貧乏貴族といってもお世話になるうちに何も無いわけにはいかないでしょ。

どうしよう、どうしよう。

考える俺・・・お金が掛らなくて相手に喜ばれる最善のお土産を考えるんだ。

案1：お土産は、ワ・タ・シ

案2：錬金で貴金属を持っていく

案3：晩御飯のおかず

案4：手ぶら

案1は、男がやってもうれしくもないので却下だ。後、恥ずかしくてできるわけではない。

案2は、ラインで錬金出来る物がない為。却下だ。

案3は、川魚や森で動物を捕獲する。可能だ。

案4は、私のプライドが許さないので却下だ。

考えるまでもなく案3しか残らなかった。

ロートちゃんと産まれた？もしくは産まれてくる子供の為に旨いものを食べさせないとね。

まずは、晩御飯のお肉から確保しに行こうかな。

「どこかに、おいしいお肉はいないかなー。」

飛んでいた高度を下げて森の中を探索する。

沢山捕まえるのは面倒だから一匹且つ程ほどに旨そうなのにしなないと。

上空から眺めていくとちらほらと獲物が目に付いた。

へび・・・　まずそう。カレー粉がないと食べれないと聞いた記憶がある。

芋虫・・・×　くいたくない。

フクロウ・・・　量が不足気味。

ネズミ・・・×　伝染病になりそう。

ゴブリン・・・×　いやいや人間みたいで食べたくない。ついでにうまくないでしょ。

イタチ・・・×　前世のペットでフェレットを飼っていた経験がある為、無理。

イノシシ・・・　牡丹鍋最高でしょ

「イノシシ君、君に決めたー。」

イノシシにターゲットを決めた瞬間、急にイノシシが走り出した。動物的直観で上空にいる私の殺気？を感じ取ったのだろうか。

逃げまとうイノシシの前方に陣取りイノシシを待ち構える。

イノシシが意を決したかのように私目指して突撃してきた。

「悲しいけどこれって、戦争なのよね」

ゼルエルの体を使いイノシシを捕獲する檻を作成する。

突撃してきたイノシシをそのまま檻の中にご招待した。

「晩飯確保完了。」

我ながら素晴らしい手際で晩飯GETをってしまった。

生きてまま確保したのは村まで後どのくらいか分らないし、ついでにイノシシを解体出来ないからである。

続いて魚を確保しようと思ったが・・・魚はさすがにいけどりは難しい

いからやめておこつ。

しかし・・・右腕の触手もどきを作成した檻の中に生きたイノシシがいてそれを持ったまま空を飛ぶ仮面をつけたゴーレムか・・・。

絵的にシユールだ。

とりあえず、お土産も確保できたしまずはよしとしよう。
再び空の旅へ発進だ。

飛ぶこと更に10分後。

ようやく村つばいものが見えてきた。

お昼の時間が近いせいかわくからでも煙が見えたからね。

朝に家を出発して、途中寄り道をしたにもかかわらずお昼ごろに着村に到着してしまった。

村まで大体80km位だったから、1時間程度で飛んだから飛行速度時速70〜80km程度か。

予想以上に早いな。これならアルビオン編がきても主要メンバーに加わらず陰から参画できそうだ。

後は、村でロートちゃんの実家を行けばモーマンタイ。

おっと、村に着く前に殖装を解除しておかないとね。

ゴーレムを引き連れて村の入り口までやってきました。

村の中に入り、あたりを見回すと先程までいた人たちが急に余所余所なくなり、家の中等に逃げ帰っていった。

あれ？

なんでみんな逃げて行くんだ？どこの貴族様みたいに従者とか引

き連れていないのに。
服装も気を使って平民スタイルにしたのに。思わずorzのポーズをとってしまった。

あ……。

後ろを見てみるとゼルエルがイノシシを捕獲した檻をもって突っ立っていた。

そりゃばれるよね。

ゴーレムを引き連れて町に来るヤツなんて貴族以外にいないし下手すりゃ盗賊とかに思われるよね。

うっっん、道を聞くにも人がいない。

寂しい……。

歓迎されないだろうと思っていたが、ここまであからさまに避けられるとは思わなかった。

くっそー、貴族の嫌われっぷりを身をもって実感したぜ。

この世界の貴族は領民を家畜と同等の扱い位しかしてないもんね。悲しいけど、私も同様に思われてるんだろうな。

このまま考えていても仕方ない。

少々強引だか村人を尋問もとい強制的に質問し案内させるしかない。一番近くにいる村人はだれかなー！

お！

誰かがこちらに向かって歩いてくるぞ。

村の外からたつた今帰ってきたであろう少女が私に後方から歩いてきた。

近くの山で山菜を採ってきたのだろう。手の籠には山菜らしきものが沢山つまっている。

山菜がたくさん取れたのがうれしいのか籠ばかりみて、まだ私に気づいていないようだ。

「すみません。この村にロートという女性がいる家があると思うのですがご存知でしょうか？」

「ロートさんの家なら村の西側にある赤い屋根の家でっでででで」

籠から視線を上げながら答えてきた。

なんか壊れたラジオみたいだな。

視線は私でなくゼルエルを見つめている。

おいおい、見る方が違くないかい？

そんな私のゴーレムを見つめないでくれで、ここにいる美少年（笑）の方を見てくれよ。

「キヤーー。化け物!!」

ああ。やつぱりそうなるのね。

もちつけ、村娘。

まずは、ゼルエルの横にいる私を見てほしいもんだ。

このままではあらぬ誤解が広まってしまつのでそろそろ誤解を解こうかな

「おちついてください。これは、化け物ではなく私のゴーレムです。」

「キヤー、犯される。私なんて食べてもおいしくありません。助けてください助けてー」。」「

悪化している・・・果てしなく悪化している。
駄目だ こいつ・・・早くなんとかしないと・・・。

仕方ない、この際手段など選んでられない。

ゼルエルの左手を使い村娘の口を塞ぐ。

村娘の口を塞いでから顔をこちらに私に向けさせる。

「いいか落ち着いて聞いてほしい。私はお前を襲わないし食べもしない分かったか？肯定ならば瞼を一度閉じる。否定ならば瞼を二回閉じる」

村娘は、泣きそうな顔で瞼を一度閉じた。

「よし。私は、ロートという女性の家に滞在予定の者だ。すでに相手方にもその旨は伝えてあり了承していただいている。だから不審者ではない。分かったか？」

先程と同様に村娘は瞼を一度閉じた。

「ロートの家は、西側の赤い屋根の家と言っていたが。どこもかしこも同じような家ばかりで分からない。家までの道案内をお願いしたい。」

村娘の顔はすでに真っ青になりながら瞼を一度だけ閉じた。

べ、別に脅してるわけじゃないぞ。平和的に話し合いをしているだけだからね。そこそこ重要だからね。

村娘を解放すると村娘を先頭に私、ゼルエルの順番で歩き始めた。

周りの視線が痛い・・・。

村娘は半泣き状態で歩いており、後ろの貴族（私）が脅しているよ

うにも見える・・・。
誰か助けてよ！。

周囲に耳を傾けてみると
あの子も可哀そうにとんでもない貴族に眼をつけられて とか
道案内がおわったら手打ちにされてしまう とか
売り飛ばさる とか

誰もそんなことしねーよ。
お前らの眼は節穴かよー！
見るこの純粋な眼を！
ダメもとで言ってみるか。

「お願いだから泣かないでくれないかな？なんだか周りからの視線
が凄く痛いんだけど・・・。」

「私はもう家には帰れないんですね。このままお持ち帰りされて人
には言えない事をされるんですね。そして、使えなくなったらきつ
と殺されるんだわ」

だから、殺さないって言ってるだー！！
もう駄目だ・・・こっちの話すら聞いていない。

「君が何を云っているのか分からないよ！？村娘」

「遺言だよ」

・・・えー！！

なんでお前がそのセリフ言うんだよ。
私の名台詞たるそれ！

なになに、こいつもしかして私と同じ転生者か！？

そんなアホなやり取りをしているうちに目的地に到着したようだ。
中世ヨーロッパの民家のような家にきましたよ。

相手方に会うにしても第一印象って大事だよな。

「村娘。ここまで案内ありがとう。少ないけどこれを取っていてくれ。そして、お願いだからおとなしく帰ってくれ」

村娘にちよつとだけお駄賃を上げた。

あらぬ誤解をなくすために村娘には帰ってもらおう。こいつがいるともめる・・・。

村娘がさつさと帰らせてから、ゼルエルを後方に移動させた。

ゼルエルも顔が怖いから・・・さっきのようになると面倒だからね。

身だしなみOK。

手土産OK。

ドアをノックして

「すみません。本日からこちらでお世話になるレイアというものです。どなたがいませんか？」

誰が来るかな？やっぱり、ロートちゃん？それともロートちゃんの旦那かお母さんかな？

すると背後から声が返ってきた。

「お久しぶりです。ご主人様」

なんで後ろにいるんですかロートちゃん。
しかも微妙に笑ってません？

は！
もしかして・・・

「ロートちゃん、どこら辺から見てた？」

「どこら辺からと申しますと・・・村の入り口でご主人様が近所の子に道案内をさせる為にゴーレムを使って脅しているあたりからです。」

殆ど最初からじゃにかよ！

見てるなら最初から声かけてきてよね。あの子の相手をするのに無駄な体力使っちゃったじゃんかよ。

「見ていたなら助けてほしかったよ。あの子の相手本当に疲れたんだから」

「ご主人様があたふたしているのが可愛らしくてつい・・・」

何がつい・・・ですよ。

「とりあえず、今日から2週間よろしくね。後、このイノシシはお土産だから後で皆で食べよう」

「分かりました。滞在中のご食事としてご用意させていただきます。

」

その手に抱えている可愛らしいお子さんがロートちゃんの子供なの

ね。

「それと、出産おめでとう。ローちゃん」

「うして、ローちゃん実家に到着したレイアの一日は終了です。」

主人公は、メイドの実家にお邪魔する。(後書き)

今回は、治水工事編で行きたいと思います。

後、主人公の二つ名も随時募集中です。

主人公は、治水工事 + を行った。(前書き)

短くていつもすみません。

主人公は、治水工事+ を行った。

今日も元気に治水工事を行っているレイアです。

ロートちゃん実家に遊び・・・じゃなくて、お仕事に来てから今日で2週間目。

長かった工事の最終日でもある。

思い起こせばむさ苦しいおっさんに囲まれた日々だったが存外悪くなかった。

「貴族の坊ちゃん、そこにある木材と石で防波堤を作ってくれ。」

30過ぎた工事現場のオッサンみたいな容姿の男が声をかけてきた。最初のうちは余所余所しかったが、同じ釜の飯を食べているうちに打ち解けて今じゃ畏怖のいの字もないさ。

「わかった。でも、いい加減に坊ちゃんというのやめてくれないかな。名前でもんでくれっていつてるじゃないか」

「何言ってるんだ。貴族様を名前で呼んだ日には、首と胸が永遠にお別れしてしまうじゃないか。ハッハハ」

周りにいる男性陣も同じように笑っている。いい雰囲気だな。身分も関係なく、対等の立場で付き合うことは気持ちがいい。

貴族全体の意識の革命は無理でも、せめて私が領主になった暁にはもっと平民が貴族と対等な立場になれる場所を用意してあげようと思った。

では、川沿いに移動をしてお仕事を始めますか。

工事の流れを簡単に説明すると、私が石を切り出してからそれを河川沿いに敷き詰る。

おっさん達が河川においた岩の隙間と埋めて木材等で補強を行う。最後に私がコンクリートもどきに錬金をして固定化をかけているのだ。

「さてさて、今日も頑張って働きますか。」

岩山の前に向かい気合いを入れて

「殖装!!!」

ゼルエルの触手を刃のように細くしなやかにする。
その周りをA・T・フィールドで覆う。

「カット…カットカットカットカットカットカットカットカット
ットカットカットオ…………!!!」

ゼルエルの触手が縦横無尽に飛び交う。

岩山はあっという間に長方形のブロックの山に変わってしまった。

「またつまらぬものを切ってしまった…。。」

「もう終わったのか。相変わらずお前さんのゴーレムは凄いな。岩山があっという間にきれいなブロックになっちゃうまんたもんな。」

様子を見ていた周りの人から拍手された。

はっはは、オッサンもつと褒めてくれ。

「大したことないよ。魔法使いなら皆この位出来る…。。」と思うよ。

(ボン)「

魔法じゃないなんて言えないぜ・・・。
下手すりゃロマリアあたりの変態どもが来ちゃうからね。

「後はいつも通りこれを河川岸に並べればいいんだよね？一応、設計図持ってきて貰ってもいいかな？」

そういって、オッサンが工事の責任者の処に設計図を取りに行った。そう、以前にも少しふれたが私は治水工事の知識がさっぱり無いのである。

今まで工事したところと大体同じだろうけど、やっぱり確認してから工事しないと駄目だよな。

そうこうしているうちにオッサンが設計図を私に処に持ってきた。

「もってきたぜ。坊ちゃん。」

「もう、坊ちゃんでもいいです」

やはり、前に工事を行ったものを同じか。

「オッサン。これからこのブロック岩もって積み上げていくから、近くの人に退避してもらって」

そうおっさんに指示するとオッサン大声で叫びながら他の人たちに伝えに行った。

「これから坊ちゃんが岩持っていくから、近くにいる奴は離れてい

る。」

オッサンの指示に従い河川岸にいた人たちが退避していった。

では、運びますか。

ブロック岩を2・3個づつもち上げてそのまま河川岸まで移動する。ちなみにブロック岩のサイズだが縦3m横2m奥行1mのかなりのサイズである。

持ち上げたブロックは、A・T・フィールドで重力を遮断してるから実は全部一気に運べなくもないんだけど、あまり目立つと後々困ることになって嫌なので手を抜いております。

1時間後。

ようやく全部のブロック岩が移動完了だ。
後は平民の方々に任せて私は少し休憩だ。

「坊ちゃん。うちの補強が終わるまで休んでてくれ。」

「了解。すこし町の方に行って休んでくるよ。工事が終わりそうになったら声をかけに来てくれ。」

そう言い残し、町の方に移動を開始する。

町に移動すると、おばちゃん軍団に囲まれた。

この2週間、若奥様がいる家などでお鍋の修理等を行っているうちに家の修理から子供のおもちゃの修理までこなすうちに便利屋まがいの扱いになってしまったのだ。

正直、今になって調子に乗り過ぎたと後悔している。

「明日で帰っちゃうんだって？おばさん達寂しくなっちゃうわ。」

「またいつでもいらっしやいね。」

お礼の言葉などをもらい、ちよつと照れ臭かった。

人に感謝されるのは慣れていないな。

「うん、またくるよ。」

年相応の笑顔で言うとおばさん達もうれしそうだった。

おばさん達と話して時間を潰しているとおっさんの使いがやってきた。

「貴族様、補強工事が完了したので親父さんが呼んでいます。」

「分かった。すぐに行くよ。」

おばさん達にお別れを告げて現場に移動した。

「待っていたぞ坊ちゃん。いつものように仕上げの固定化をよろしく。」

「まったく人使いが荒いんだから。」

そっぽやきつつ丁寧に固定化をかけていく。

こればかりは使徒の能力ではどうしようもない為、かなり疲れる。精神力は、ラインの上位程度しかないとこの規模の防波堤に固定化をかけると殆ど精神力は空になってしまう。

固定化をかけることはや30分。

ふうー。やっと終わった。

「お疲れ様です。ご主人様」

振り向くとロートちゃんがタオルと飲み物をもって待機していた。

「いつも、ありがとう。」

本当によく出来たメイドだ。

でも、子供がいるんだしあんまり私に構っていたら駄目だよ。

「ご主人様は、変わっていらっしやいますね。領民の為にここまでしてくれる貴族様はいらっしやいませんよ。」

「ははは。自分でも少し変わり者だと思うよ。たまたま、私が困っている人を助けるだけの力があつた。ただそれだけさ。」

かなり臭いことを言ってしまった。

俺、はずかしー！ー！。

「ご主人様のそういうところ、私は大好きですよ。」

ちよっと、照れるじゃないか。

そんな真顔で言わないで。

俺が後10歳程、年を取っていたら絶対にくどいてるよ。

そのくらい今のロートちゃんはきれいだった。

「坊ちゃん。幾らロートが綺麗だからって子持ちの女性をくどくの

は頂けないな。」

後ろからオッサンが話しかけてきた。

当然近くには工事をしてきた村人もおり、みんなニヤニヤしている。

おまえらー！。

こうして無事に工事は完了した。

その晩は、町全体でお祭りになった。

工事の無事の終了と私の送別会であった。

気恥しさもあったがみんなの気持ちを無碍に出来ないのも当然参加しましたとも。

盛り上がるにつれて、オッサンが私にお酒を勧めてきた。

10歳にもみたくない私にお酒を勧めるとは・・・何考えてるんだ。

周りからるイツキ！イツキ！イツキ！と大学生バリのノリで声が上げられた。

まずいぞ・・・お酒なんてこの体になって飲んだことない。

周りの盛り上がりは最高潮になっており断れる雰囲気ではない。

おっし。私も男だ！腹をくくった。

「レイア。イツキいきますー！。」

そう言い放って、中ジョッキほどのワインを飲みほした。

周りから大歓声があがった。

そこで、私の意識は途切れてしまった。

翌朝。

「頭がいてー。ロートちゃん水をちょうだい。」

とりあえず、頭がいたい。

これが二日酔いか。相変わらず気持ち悪いぜ。

しばらくして、ロートちゃんが水を持ってきた。

「昨晩ははしゃぎすぎですよ。ご主人様の昨晩あんなにはしゃぐせいで山の地形が変わっちゃったじゃないすか」

え!?

今、ロートちゃんおかしなこと言わなかった？

山の地形が変わっただと!!

一体誰がどんだけはしゃいだら山の地形が変わるんだよ。

すぐに窓から山の方を見た。

あれー？山が半分なくなっているのが見えた。

(。 。)

(っ) ゴシゴシ

(; 。)

(っ)ゴシゴシゴシ

(.;。) ー、ー、ー
…!?

「ロートちゃん。あの山が半分無いのって、もしかして私がやったの?」

ロートちゃんは、呆れたように答えてきた。

「ご主人様、もしかして覚えてらっしゃらないんですか?後、もしかしなくてもご主人様以外にあんなことはできません」

「すみません。おっさんにお酒を勧められて最初の一杯を飲んだあたりから記憶がなくて……。」

ロートちゃんから山が消えた顛末を聞いた。

なにに・・・おっさん達も酔いが回りキャンプファイヤーやら花火もどきで盛り上がっていたら私が突然立ち上がり

「いいかお前ら。これがこのレイア様が本当の花火というものを見せてやる。」

というとゴーレムを身にまとい山めがけて

「ソロモンよ。私は帰ってきた!」

と叫んだあとにゴーレムの目が光ったと思ったたら山の斜面に大きな炎の十字架が出来た。

もう、わけが分からない・・・。

なんでこんなところで全力で破壊光線撃ってるんだよ俺orz

今後、お酒は自重しようと思つて固く決意を固めた。

レイアの治水工事は、これにて終了です。

主人公は、治水工事 + を行った。(後書き)

次回は、すこし領地の貿易に関するお話にしようと思います。
貧乏脱出の為の努力って大事だよね。

主人公は、取引相手兼嫁さがしに出かけて行った。(前書き)

何歳で魔法学院入学か分からなかった為、年齢は適当です。

いつも読んでくれてありがとうございます。

主人公は、取引相手兼嫁さがしに出かけて行った。

今年で12歳になるレイアです。

ちなみにまだラインの上位ですorz

治水工事から早4年も経過してしまった。

あれから4年間色々あったんです。

治水工事の出来が良かった為、父上が領地内のあちこちの村に私を出張させたり、巫人討伐に参加させられたして様々な人生経験を積まされた。

後、働きやすい環境づくり一環として託児所や公衆浴場を作ったあげたよ。

そして、二年前に治水工事を行った村で東方の食べ物を販売している商人がいて、大豆やお米を見つめました。

もちろん、速攻で売ってる物を全部買い占めたよ。

それからは、領地の農家をお願いをして大豆と米の栽培をしてもらい今では我が領地の数少ない特産品として日々領地の利益にして細々と暮らしております。

ちなみに出荷しているのは、大豆の加工品で醤油や味噌、納豆などである。

私が管理販売している特産品の売り上げで何とかうちの財政は、赤字にならないストレスの処を漂っています。

しかし、ここである重要な問題に直面したのだ。

最初の頃は、商人も珍しい品で程ほどに売れたのだが最近取引量も減ってしまい我が領地の財政は赤字に転落してまった。

ある商人に事情を聞いてみる醤油は味が薄い、味噌はパンにつけてもおいしくない、お米はネバネバして食べにくい、納豆は食いものでないe t cなど酷評をいただいた。

そういえば小説でも魔法学院では朝食からあり得ないほど脂っこい料理ばかり食べていたな。

あれか・・・ハルケギニア人の食生活は欧米人を遥かに凌駕する肉食系なのか。

日本の食文化が分からんとはこの野蛮人もめ（ノ、ノ）

しかし、まずい・・・非常にまずい。

このままでは、原作開始までもうすぐだというのに没落貴族の仲間入りになってしまう。

何とかして新規顧客を獲得したいが、味が合わないのではどうしようもないorz

王家の人が特産品を食べてブームを起こしてくれれば財政難は解決するんだが、流石にいきなりお米を食べてくださいなんて言えるはずもない。

他に誰かいないか・・・味の分かる知識人且つお金を持ってそんな人は・・・いたわ。
いるじゃないか！

味が分かりそうな知識人で且つお金持ちかは分からないが相手方の特産品を売れば確実に利益になりそうなものを持っている人達が！！

まずは、家族の了承を得ない流石に今回ばかりはまずそうだ。
そうときまれば行動あるのみ。

ロートちゃんにお願いして皆を集めてもらった。

30分後。

「第一回ヴェーグル家家族会議を開催します。」

現在、食堂に父上、母上、私、父の執事、ロートちゃんの旦那、ロートちゃんがいる。

「一体何を始めようというのだ」

「レイアちゃん、皆を集めて一体何をするの？」

なに呑気な事いつてるんですか。

我が家存亡の危機ですよ。

「父上母上、ご存じだとは思いますが、ヴェーグル家の財政は今年から赤字になってしまいました。うちは、今までも結構ギリギリの財政でしたが今回は危ないです。その問題の対策と今後の展開についてお話したいと思います。」

父上は苦い顔をしており、母上は相変わらず呑気な顔をしている。使用人たちは、既にこの事に気づいていた様子で普段通りだった。

「レイアよ。なぜ今年に入って赤字に転落したのだ？昨年まではギリギリ黒字であつたはずだが？」

「はい。昨年までは私が販売管理を行っていた大豆の加工食品、つまり醤油や味噌などを商人が珍しがって買ってくれてたからです。しかし、最近では貴族の人たちの舌に合わないという理由で取引量が大幅に減ってしまい赤字になりました。」

12歳の子供が管理している特産品が領地の財政を左右するってど

ういうことよ！！って言いたいのはこの際我慢だ。
後、なんで赤字になった原因を父上が知らないんですか。
貴方の領地でしょ。

「でもレイアちゃんは、その問題の解決策までもう考えてるんですよ。だったら安心じゃないかしら？」

父上に続いて母上もですか。貴方達も問題の解決策を考えてくださいよ。

「現状を改善できるか分かりませんが、私の中で二つの案がありました。一つ目は、新たな特産品を考えて商人に売りこむ。二つ目は新規顧客を獲得し商人を通さない取引をする事で利益を拡大する。」

父上がなにやら考え中らしく顎に手をあてて考える人のポーズを取っている。

ようやく考えがまとまったのが父上が口を開いた。

「ふむ。どちらも無難な対策ではあるが両案ともに問題はあるようだな。一つ目の案は、特産品を何にするか、そして商人にどう売り込むか最後に特産品が出来るまでヴェーグル家が存続しているかだ。二つ目は、貴族の下に合わぬ物をどこの誰に売りこむかだ。平民という手も悪くないがやはり味が受け入れられない可能性は高い。」

よく分かっていらっしゃる。

さすが父上、みなおしましたよ。

「父上、腹を割ってお話しいただきたいのですが、正直このまま赤字が続いた場合に我が家はどのくらい持ちますか？」

.....

シーン。

気まづい、空気が重い。

だけど聞かなきゃいけない事だから耐えるんだ。

「2年だ。それも、赤字の状態が今のままを想定した場合だ。これ以上財政が悪化した場合は更に早まるだろう。」

くっ。。。

猶予は最大2年か予想以上に短い。

「ありがとうございます父上。現状から考えて案の一つ目の特産品の開発から販売に至るまでの時間、そして利益が出るまでの事を考えると間に合いません。ですから私は案の二つ目で行きたいと思います。」

「でもレイアちゃん。特産品は貴族の舌には合わないんじゃないかなかったけ？ちなみに私はレイアちゃんが作る東方のお料理は好きよ。」

母上は、良い舌をしでいるな。

味の分かる女性は素敵ですよ。

何を隠そう、お米や醤油、味噌を使って家で私が料理をしていたのだ。

しかし、最近ではロートちゃん率いるメイド達に止められて今では台所にすら入れてもらえないorz

まあ、メイドの方々に料理方法を覚えてもらったから私としては大満足だけどね。

そんな苦勞もあって週に二回は日本料理が出るようになったのだ。

「もちろん、新しい取引相手に心当たりはありません。しかし、ここ
で少々問題があります。」

さてここからが本番だ。

「問題とはなんだ？今更隠すほどの問題などないのではないかレイ
アよ。」

「問題は二つあります。まず、相手方はお金を持っていない可能性
があり、お金を持っていない場合はこちらの特産品とあちらの特産
品との物々交換になる予定です。むしろ私は物々交換の方が価値が
高いを踏んでおります。」

父上に母上、そして使用人も首をかしげている。

「レイアちゃん。何でお金を持っていないかもしれない人達と取引
をしても意味がないんじゃないかしら？もしも、相手がお金を持っ
ていなくて物々交換になっても相手の特産品を売る手間がかかって
しまい利益になるとは限らないんじゃない？」

そうでも母上。もちろんそこも考えております。

「レイアよ。ワシも腹を割って話したのだ。お前もそろそろ隠し事
はやめたらどうだ。先程から聞いていれば、その新規顧客の素性を
明かさないうで話を勧めているな。一体どこの誰と取引を行うつもり
だ？」

父上が険しい顔をして私を睨んできた。

やはり両親に隠し事はできないか。

こちらも腹をくくるかな。

「申し訳ありません父上。その・・・今回私が考えた取引相手というのはですね・・・えーと、サハラに住む原住民です。」

その瞬間、空気が凍った・・・いやマジで。

父上、母上そんな無言でこちらを睨まないで。

ああ視線が痛い。突き刺さるようだ。

「レイアちゃん。ママの聞き違いかしらもう一度言ってもらえないかしら？」

ちよつと、母上にこやかな顔をして杖を私のほっぺを突かないでください。

後、さすがに零距离はまずいって。

「え、えーつと。サハラに住む原住民です・・・平たく言うとエ・ル・フです。」

母上の杖に力がこもっていくのを感じた。

やばい・・・。

もはや零距离とかの問題ではない。

母上の杖が私の口の中にある。

「おふいついてくだあさい。ははうへ」

杖が邪魔してうまくしゃべれない。

「まてアリア。」

父上の威厳のあるお声がかかった。

「お前は、なぜ取引相手にエルフを選んだのだ？」

父上が真剣な顔で私に問いただしてきた。

ならばこちらもちたえねばならない。

「まずエルフは、我々が暮らすルケギニア大陸で一番高度な文明を持つ人種だからです。それに加えてブリミル教の教えのせいかわかりませんが我々貴族を中心とした者たちがエルフをおそれて貿易等を行っていない為、双方で需要のある物があると考えたからです。」

「確かに、エルフという種族を抜きで考えればこれほど取引に適した相手はいないだろう。しかし、相手はエルフだ。お前はエルフが怖くないのか？」

エルフが怖くないかと言われれば・・・怖いどころか愛しているといても過言じゃないぞ。

エルフと言えばロード ス島戦記のデイドリットみたいな子ですよ。

美少女大好きな私にとってエルフは俺のジャステイス。

むしろ、エルフより人間の方が怖いですよ。

「エルフが怖いか怖くないかは実際に会ってみないと分かりませんが、会ってもいない相手を一方的に恐怖の対象として恐れてしまっただけじゃないと思うのです。それにエルフは私達が何かをしなない限りは何もしてこないではありませんか？いえ、私が攻撃をするからエルフは反撃をしてくるのです。私は、エルフより人間の方が怖いです。人間は、自分達より優れた種族を見つけると排除するこ

と安心感を得ようとしませぬ。現にその考えのもと、過去に何度かエルフの住まう地域に攻撃を仕掛けたことがあると話で聞いたことがあります。どうしてこちらから歩み寄ろうとしないのです。」

この貿易には、嫁探しの旅も含まれてるんだぞ。
絶対に許可を得てやる。

「わかった。お前がそこまで考えているのならば私はもう何も言わない。好きにやってみるといい。」

〇(・・〇)(〇・・)〇 ヤッタ！
許可が下りたーーーーー。

「ありがとうございます父上。必ず取引を成功させてみせます」

「あなた！レイアをエルフの元に行かせるなんて反対だわ。」

母上。心配してくれてありがとう。

例えエルフと一戦交えても無事に帰ってくる自信はあるから心配しないでくれ。

「母上。私を信じてください。私は貴方達の息子ですよ。」

おっ！

どうやら母上も諦めたらしい。
肩から力が抜けるのが見える。

「分かったわレイアちゃん。ただし、危ないことはしないでね。後、危険だと思っただらすぐ帰ってくるのよ。」

「はい！」

元気良く返事返した。

「これで第一回ヴェーグル家家族会議を終了します。父上母上わがまま言っでごめんなさい。」

こうして家族会議は終了した。

さて、これから忙しくなるぞー。

先ずは、旅の準備から始めないとな。

先方は何と言っても砂漠のどこかにいる種族としか分からんしな。確か原作ではネフテスのビダーシャルってエルフが出てきてたな。万が一の場合は、その人の名前を出して乗り切ろう。

2週間後。

「レイアちゃん気をつけるのよ。」

「レイアよ。本当にお前一人でいいのか？今からでも護衛の手配をするぞ。」

ここまで心配されるのは久しぶりだ。

不謹慎ながらちょっと嬉しい。

「大丈夫です父上母上。一人の方が何かと身軽でよいです。それに私のゴーレムは他の人と違って少し特殊なのでなるべく見せたくないのです。」

これは正直本音。

特殊どころかゴーレムかすらあやしい存在だしね。

「それにしてもレイアよ。それだけの荷物を本当に持っていくのか？」

父上が指を刺す方向をみると米俵三つ、醤油が詰まった大樽が2個、同じく味噌が詰まった大樽が1個、後は野宿等で使う為のサバイバル道具一式である。

この日の為に道中破損や中身が腐らない様に父上と私で全力で固定化かけた逸品なのだ。

「もちろんです。エルフが何処にいるか分かりませんし、提供するサンプルは多い方が何かと良いのです。実際、運ぶのはゼルエルです。この位の数は問題ありません。」

「父上母上。そろそろ出発したいと思います。必ず二年以内に戻ってきますので安心して待っていてください。後、私がない間に何とかして貿易の許可の方をよろしく願います。」

エルフとの貿易を国に黙ってやるわけにはいかないのです、父上には二年かけて王宮に許可を得てもらってはまずいのである。

色々と問題もあるだろうが、大貴族を味方につけることで何とか抑え込もうと考えている。

ぶっっちゃけ、ラ・ヴァリエール公爵家の次女カトレアの治療薬をエルフから手に入れられる可能性がある事をダシに使いラ・ヴァリエール公爵家を味方につけようと父上と密かに相談を行ったのだ。

後は、父上の手腕を信じて私は自分の仕事をこなすのみ。

まっついていってくれ未来の私の嫁。

「レイアよ。こちらの事は全て任せろ。お前は自分のやるべき事だけにやっつけてい。」

「レイアちゃん。ママは貴方が無事で帰ってくるならそれだけでいいわ。体には気をつけるのよ。」

父上母上ありがとう。

「ご主人様。お帰りをお待ちしております。」

ロートちゃん率いるメイド達が一斉に一礼を行った。

「父上母上それにロートちゃん達も見送りありがとうございます。必ず嫁・・・じゃなかった取引を成功させるからね!。」

さて、本日の魔法の一発目いきますか。

「殖装」

今日も絶好調だぜ。

ゼルエルの触手を伸ばして荷物を持ち上げる。

そして、重力を遮断し空に浮かび上がり手を振りながら大声で

「いってきまーいーす」

レイアの旅立ちの日はこれにて終了です。

主人公は、取引相手兼嫁さがしに出かけて行った。
(後書き)

ついでにサハラってサハラ砂漠から取ったのかな？

今回は、砂漠でのお話にしたいと思います。

主人公は、エルフの恐怖を学んだ。(前書き)

いつも読んでくれて有難うございます。

主人公は、エルフの恐怖を学んだ。

本日も気持ち良く空の旅をしているレイアです。

あれから出発した日から一週間が経過した今もなお砂漠のお空の上を飛んでおります。

まだ、エルフの集落は見つかりません。

集落を探索しつつ砂漠を往来しているうちに日没がきてしまった。

「今日もそろそろ日が落ちるな。野宿する処を探さないといけない。」

オアシスとかがあれば野宿に最適なのだが、そのような場所が都合よく見つかるわけもなく砂漠の上で野宿することになった。

最初のうちは、テントを張ったりして野宿するのは小旅行のような気持ちで新鮮であったが今では面倒になってしまいゼルエルを身にまとい荷物を一緒に自分の周りにA・T・フィールドで結界もどきを張ることで周囲から安全を確保していた。

「はあー。今日の晩飯も干し肉と水だけか。ロートちゃんのご飯が食べたいよ。」

食料は、あるにはあるが商売のサンプル品であるので手をつけられない。

出発前に保存食を買ってきたがそろそろおいしいご飯が食べたいよー。

そんなことを考えていると急に尿意が襲ってきた。

野宿する寝所で出すわけにもいかずので、砂丘の上に移動した。壮大な景色の中、立ちションに向かう私・少し恥ずかしいが、景色のいい中これが案外きもちいい。

砂丘に登ってみると不思議なことに100mほど先に明かりが見えた。

まさか、私が以外にこんな辺鄙なところで野宿しているお仲間がいるとは思わなかったぜ。

ここで会うのも何かの縁だお近づきなって、おいしい晩御飯をごちそうにならないといけないよね常識的に考えて。

スキップスキップランランラン

明かりに近づくにつれて、地面がだんだん砂ではなく普通の土になってきた。

更に近づくと……。

(; . ;)

(. . .)

(. . .) (ゴシゴシ)

(. . .) え？

どう見ても電灯・そしてベンチ・後、何故か公衆便所がある。

「(; . ;) 。 □ (ナン！) ; . ; □ () 。 デスー！() ; . ; □ (

。 。 トー！！！！」

思わず叫んじまったぜ。

この中世の砂漠の中に電灯とベンチと便所があるんだぜ。
ありえねー！！！！

この場所だけ、現代からトリップしてきたのか！？

それとも俺が虚無の魔法みたいに世界移動をしてしまったのか！？

しかし・・・あれだ・・・この光景どこかで見たことあるんだが・・・

ええーっつと、ほらあそこ・・・良く2chで見た・・・

ブルっ！

考えごとにふけっっているうちに驚いたので先程までは尿意が再び襲ってきた。

「そんなこと考えている場合じゃない。トイレトイレ」

早々に男子便に駆け込んでいった。

ジヨロジヨロジヨローー！！

「ふうー。トイレはいいね。トイレは心を潤してくれる。リリンの
生み出した文化の極みだよ」

なんちゃってね。

さて用も済ましたし、早く寝処に戻って飯を食べようかな。

「ユラリユラリ揺れている オートコ心 ピーンチ」

あれ、どこからともなく歌が聞こえる・・・。
いい声だなー特にこの深みのある渋い声が堪らないな。
そうまるで・・・。

・
・
・

(汗)

私の直感が告げている、ココはキケンだ。

キケンキケンキケンキケンキケンキケンキケンキケン
キケンキケン
キケンキケンキケンキケンキケンキケンキケンキケン
キケンキケン

果てしなくまずいだろ、主に俺の貞操的に考えて・・・。
身の危険を感じ、すぐに逃げ出そうと考えた。

入り口は・・・ダメだ。

窓は・・・ない。

懐に常備している杖を取りだして

「出口がないならば作るのみだ。錬金」

壁を砂に錬金して外に脱出した。

全力でゼルエルのいる場所まで走り抜けるしか俺に勝機はない！！

あれ・・・手足が動かない。

why!?

視線を上げて目の前をみると、何故か入り口にあったはずのベンチが今私の目の前にある。

そして、ここ（ハルゲニア）には居てはいけない男が何故かここにいる！！？？

「やらないか？」

「（；。；）ガクガクブルブル」

人間は、恐怖と驚きとがいつぺんに来るとしゃべれなくなるんですね。

ベンチに座っている男が更にこちらに向かってしゃべりかけてきた。

「怯えたその顔もそられる。おっと、私は『薔薇族』統領のアーベという者さ。君たちにとってはエルフといった方が通じるかい？」

「……え！」

作業服を着たのがエルフ！？

俺の理想がガラスのように崩れていく音がした……。

あつてなるものか、いや断じてあつてはならぬ。

お前がエルフであることを私の信念をもって断固拒絶する。

「認めん！認めんぞおおつ！！」

「おっと、そんなに力むなよ。男同士、体で話あつて解決しよう。まず、俺のケツの中でシヨンベンをしる。」

シヨンベンだと！意味分からねーよ。

もう、殺す。

エルフとの貿易など知ったことか！

男は服を脱ぎ捨てつつ、私の尻を見つめてきた。

「抵抗しても無駄だぜ。今お前を縛っているのは俺が編み出した（くそみそ）テクニツクの一つだ。簡単には離れないぜ。」

何がテクニツクだ！

先住魔法の間違いだろ。

「エルフだからって人間をなめるなー！アース・ハンド。」

エルフに向かって地面から手が伸びていく。

エルフに手が届きそうになった瞬間、私の魔法が何かにはじかれた。

こ・・・これがエルフのチートスキル！！

「無駄な抵抗だぜ。無理やりというプレイは好きじゃないが・・・安心しろ。後でしっかり治療は施してやる。」

何をいってるんだ・・・プレイ？治療？

すでに全裸になったエルフは、股間のナニを膨張させて私に接近してきた。

「すごく・・・大きいです。」

じゃなかった！思わず言ってしまったぜ。

「消し飛ば、この腐れエルフがー！フィールド全開！」

エルフに向けてA・T・フィールドを全力で展開した。

辺りの地面ごと吹き飛ばした。エルフが吹き飛ぶと先程まで私を拘束していた力から解放された。

あいつはきつとギャグキャラ属性だから、あのくらいでは死なないはずだ。

「もう一発だ。くらえー！」

今度は、相手が吹き飛んだ方角の上空にA・T・フィールドを一気に地面めがけてA・T・フィールドをぶつけた。

これで相手は押しつぶされたはずだ。

ふふふ、これぞ劇場版のゼルエルの十八番の攻撃方法だ。

「勝った！勝ったぞ。私は、あのエルフに勝ったぞ。はっはははは」

使徒の力があればエルフなど怖れに足らぬことが判明したぜ。

そんな余韻に浸っていると、いきなり物凄い衝撃が私を襲ってきた。その衝撃で2・3mほど前に飛ばされてしまった。

く・・私は何をされたんだ。一体誰が攻撃してきた。

先程まで私が居た位置をみると先程と変わらぬ様子のエルフが立っていたのだ・・・

完璧に油断をした。A・T・フィールドの自動防御がなかったら俺が（主に貞操が）死んでいたぞ。

「ふう。油断した隙に一気に（尻を）貫く予定だったのだが、予想以上カタイな。」

何で無傷なんだ。納得がいかない。

そして、こいつ言動はおかしいがやはり強い。

「あれだけ派手にぶっ飛んだのに何で無傷なんだ。こっちは殺す気で攻撃したんだぞ！」

「なーに簡単な手品だ。偏在を使ったただけだ。正直、油断していた。今のをくらっていたら死んでいたさ。だから、こっちも本気でイかせてもらおう。」

そういってエルフは隠していた長い棒状の武器を取りだしてきた。エルフって先住魔法があるから武器は使わないと思っただがそうでもないのか。

「エルフが武器を使うとは思ってなかったよ。それに・・・なんだその卑猥な先端は！！！」

「これは、『薔薇族』に伝わる伝説の武器で【刺し穿つ尻ゲイ・ホルクの槍】と
いって投げたら相手に尻に刺さったという結果が返ってくるという
因果反転の槍だ。」

はい！？

それなんてFat！？

さよふなら俺の純尻（誤字じゃないよ）・・・

もう荷物なんてどうでもいい！

荷物番のゼルエルを呼び出し防御を固めてやるぜ。

俺のA・T・フィールドとエルフの伝説の武器どっちが強いかな勝負だこのやろつ。

「ゼルエルーーー」

そういつとゼルエルが現れ私を纏まり付いた。

「そちらの武器が強いか私のゴーレムが強いか勝負だこの糞野郎！俺が勝てばこちらの要求を飲んでもらうぞ！」

「ほう。男同士のガチンコ勝負か。だが俺が勝った時は、こちらの好きにさせてもらおう。」

ミシミシ。

相手の気迫と私の気迫が拮抗している。

大丈夫だ。私は強い。やればできる子。そうだA・T・フィールド無敵だ。

心を強く持て！その分、A・T・フィールドは強くなるんだ。

必ず勝つ！！

先にエルフが動いた。

私から距離をとり、助走をつけてこちらめがけて投擲してきた。

「ゲイ・ボルク！」

ズキューーーーーー

正面から投擲されたはずの槍が私の背後に回り込んできた。

やはりそう来たか・・・。

だが、こちらとて負けるわけにはいかないんだよ！

「A・T・フィールド全開！！」

今の私の展開枚数の限界である10枚張りだ！！

パリン パリン パリン パリン パリン・・・

ちよ・ちよつといきなり4枚も貫通してきている。
なおも勢いは止まらず

パリン パリン・・・

きゃー！こないでー！
尻の穴がキュってしまった。

パリン・・・

勢いは大分衰えたが、まだこちらにぬかってA・T・フィールドを
貫いてくる。

私が必死で頑張っているのに相手のエルフは・・・。

「ユラリユラリ揺れている オトコ心 ピーンチ

かなりかなりヤバイのさ 助けてダーリン くらくらりん (やら
ないか)

何もかもが新しい世界に来ちゃったZE

たくさんのドキドキ 乗り越え 踏み越え イ・ク・ぞ (や
らないか) 「

このやるー！！

何歌ってるんだよ。

後で絶対にコロス。

パリン・・・

ゲイボルク様お願いです、とまってくれー！！

「止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ……」

ゲイボルクがぐいぐいと進んでくる。

9枚目が貫かれそうになった時、槍が止まった……止まったのだ

！！

そして、槍が地面に落ちた。

カラン

「勝ったぞ……！勝負は私の勝ちだエルフよ。はっはははははははは。」

緊張の糸が途切れたせいか、急に眠気が……もう駄目だ。

こうして、レイアとエルフの出会いには終了です。

主人公は、エルフの恐怖を学んだ。(後書き)

次回は、エルフの集落にお邪魔しようかと思います。

主人公は、エルフの集落で生活を始める。(前書き)

いつも、読んでいただきありがとうございます。

作者の知識不足等で色々とお不快な思いもするともいますが生温かい目で見えていただけると幸いです。

主人公は、エルフの集落で生活を始める。

チュンチュン。

ああー、小鳥の鳴き声がする。

ベットがぬくぬくしていて気持ちいい。このまま、二度寝するかな。スヤスヤ、さようなら俺の意識。

ふと寝がえりを打つてみると何やら堅いものに手が当たった。
なんだろう？

サワサワ、モミモミ、ニギニギ。

ふむふむ、全長20cm前後で堅さサランラップ芯位か、後円筒型で直径6〜7cm位とみた。

「あああー」。

なんだ・・・なやましい男の声が聞ける。

おかしい、私のベットで添い寝を許していたのはロートちゃんだけだったはず。

流石に結婚してからは、添い寝はしていないけどね。

「寝ている相手を襲うのは趣味じゃないから我慢していたが、誘われたとなつては話は別だ。」

・
・
・

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げ
ちゃダメだ逃げちゃダメだ
現実を受け入れる！

勇気を持って眼を見開いた。

眼の前には、全裸のエルフが……

「く・る・なー！ー！」

無意識にA・T・フィールドを展開させてアーベを吹き飛ばした。
アーベは、壁にめり込んだにもかかわらず何事もなかったのように
起き上がった。

パラパラ

壁に出来た人型の穴から破片が床に落ちる。
どんだけギャグキャラ属性なんだよこいつ。

「痛いじゃないか。そういうプレイをお好みならばこちらも本気で
イツちゃうZE」

なんだこの展開、まるで昨晚の二の舞ではないか……。

「す「すごく……大きいです……」

私がセリフを言おうとした瞬間に第三者の声がそれを遮った。
部屋の入り口の方を見ると……アーベと同じエルフが立っていたの
だ。

お前か……お前もエルフだということのか!!

そこには裸エプロンをした道下正樹にクリソツな人物がいたのだ。

「ダメだよアーベ。ここで戦ったら昨日のハッテン場みたいになっちゃうよ」

「それもそうだな。ここは、ミチシタの顔を立ててお互いに平和的に話し合いで解決しようじゃないか」

お前が襲ってこなかったらこんなことにはなっらなかったよ！

と言いたいがここは、見た目は子供、頭脳は大人の私がつつと我慢だ。

「わかった。そちらの案に乗る。ただし、これだけは譲れない・・・服を着ろ！！」

1時間後。

モグモグ。

用意された朝食を食べつつ、お互いの自己紹介と私が旅をしている理由を説明した。

「なるほど。用件は分かった。レイアは、エルフとの貿易の為にるるる蛮族の国から一人でここまで来たということか」

「。

ズズズズ。

アーベが味噌汁を飲みほす。

「先程から気になっていることがあるのだがいいか？ミチシタは、なんで私が持ってきた食材で料理ができるんだ？」

「細かいことは気にしたら負けだよ。それにエルフにとってはこのくらい当たり前だよ。」

そうか・・・エルフにとっては当たり前のことなんだな。

ふに落ちない部分もあるが取りあえずはエルフという種族だからということに納得しておこう。

「で、正直なところうちの食材や調味料はエルフの舌に合うか聞きたい。」

うちの運命が掛っているんだから簡単には引けないぜ。

実際朝飯で食べてくれるくらいだから問題ないと思うが・・・やはり不安だ。

そう考えているとアーベが答えてきた。

「問題はないだろう。この地帯は砂漠ばかりで食材や調味料は限られているからそういった品物の供給はこちらにとってもありがたい。だが、こちらには蛮族の国の硬貨はまったくと言っていいほどない。その為、こちらからはそれに相当した技術または我々が作った品物とで物々交換となる。あいにくと幾ら私が『薔薇族』統領だからといって勝手に我々の持つ技術を提供するわけにもいかない。」

食料だけでは、取引はむずかしいか。

だがここであきらめてなるものか、私の輝かしい未来の為に！！
そして未来の嫁の為に！！

「まあ、そんなに慌てるな。なにも取引が出来ないと言っているわけではない。我々のような少数部落が勝手に技術を提供するのは、問題があるのだよ。だが、幸いにもこの近くには、サハラ最大組織である『ネフテス』という部落がある。」

ネフテス・・・あの原作にでてくるエルフの出身地じゃねーかよ。

「なるほど、要するにこう言いたいのだな。我々のような少数規模の部落が勝手に技術を提供するのはまずい、だがこの地域の最大組織との取引ならば他の部落も黙認するし、そうなれば『薔薇族』も我々と取引ができる。」

「そうだ。頭の回転が早くて助かる。先日の勝負の際の約束がまもれなくてすまない。代わりにカラダで払おう。」

そういうと、先程までまじめに話していたにも関わらず、作業着を脱ぎ始めやがった。

ジーーーーー。

「だから服をぬぐなーーーー！男の体なんていらねーよ。」

「残念だぜ。今まで体験したことのない快感を味わわせてやること思ったのに・・・。ミチシタ代わりに俺の尻の中でシ

ヨウベンしろ。」

「アーベだめだよ。そんな人がみてるよ。」

「なーに、大丈夫きにするな。ほーら、早く来いよ。」

ピクピク

ヤバイ、頭の血管が切れそうだな。

こいつらと付き合っていたら俺がストレスで死んでしまいそうだ。

「い・い・加減にしろー！。お前らのナニを俺のゼルエルで切断するぞ。」

ゼルエルまで呼び出してしまい刃のようにして周りにはA・T・フイールド纏わした。

「すまん」

「しーましエーン！！」

こいつらのペースに巻き込まれたらいつまでも話が前進しない。

「あの時の約束はまた別の時に使うさ。とりあえず、アーベはネフテス相手への紹介状と俺の新しい滞在先を用意して欲しい。しばらく、集落に滞在してエルフの暮らしを体験してみたい。」

「紹介状の方は、すぐにも用意しよう。新しい滞在先か・・・そこらへんの空き地に勝手に家を建ててくれ。土のメイジなら簡単だろ」

お前らと違って魔法に関しては、こっちは素人同然なんだぞ！

「残念ながら魔法はそこまで得意じゃない。まだラインだからね。そんなわけで誰か人を貸してくれ。」

どうやら、アーベと互角に戦ったにも関わらず私がラインであることにふに落ちないようだ。

ですよー。だってこっちが使ったのは魔法じゃないしね。説明す

る気もないけどね

結局、滞在先の作成には、アーベとミチシタが手伝ってくれることとなった。

「まさかラインにやられるとは思ってもみなかったぜ。まあ、それは今は置いておこう。早速、魔法のお手本をみせてやるとするか。ウホッ！ いい男」

危うくずっこけるところだった。

なんだその突っ込みどこも満載の呪文？
しかも、エルフは呪文の詠唱とかないだろ！

アーベがそういうと地面が盛り上がりあつという間に建築物ができあがった。

「すごいな。さすがエルフの先住魔法………というところでも思っただか！！」

どこからどう見ても公衆便所です。
ハッテン場です。

「どこをどうみればこれが家なんだよ！どう見ても昨日ぶち壊したハッテン場じゃなーか」

もはや問答無用。

「フィールド展開ー！」

便所に向けて全力展開だぜ。

おっしゃー、綺麗に吹き飛んだ。
よこでアーベがへこんでいるがきにしない。

「アーベが家をつくろうとするとどうやってもハッテン場になるんだ。だから僕が作るよ。」

ミチシタ、お前はいい奴だ。今まで誤解していた。
さあ、私の別荘（笑）を建ててくれ。

「すごく・・・大きいです・・・。」

ああー、もう家が建てばどうでもいいぞ！

ミチシタが呪文（笑）をとなえるとあら不思議！

レンガ造りの立派な家が建っているではありませんか！？

「ミチシタ、お前はいいやつが。今まで誤解してた。すまなかった。後は、こちらで微調整をするから固定化をかけないでくれ」

うーん、折角エルフの集落でただ無為に暮らすにしても何もしないのは勿体ない。

そうだ！サンプルもまだまだあるし喫茶店を開こう。

今のうちに優良顧客をGETしておくぜ。

「アーベ、ここに喫茶店・・・いわゆる、飯屋をつくってもいいか？今のうちに醤油や味噌の味を宣伝したいんだ」

「そのくらいならば問題ないだろう。『ネフテス』に行くまで好きにするといい。」

おっしゃー、統領の許可が下りた。

そうときまればいそがしくなるぞー。

目的がかわってないかって？

まだ猶予は、まだまだあるんだし気長にやればいいのさ。

こうして、レイアのエルフ集落での活動を開始した。

主人公は、エルフの集落で生活を始める。(後書き)

次回は、飯屋編かネフテス編で行こうと思います。
原作キャラだそうかなーとおもってます

主人公の父は、息子との約束を守る。（前書き）

なんとなく、父親の事が書きたくなっちゃいました。
本編は、レイアの父であるレイリーが主人公のお話です。

平たく言えば番外編です。

主人公の父は、息子との約束を守る。

レイア出発から1週間後。

「あれから、一週間もたったけどレイアちゃんから音沙汰も無いなんてママは心配だね。」

「レイアなら問題ないだろう。一週間程度で根を上げるような育て方はしてないさ。それにレイアのゴーレムは魔法では無い何らかの力を持っているしな。」

アリアは、息子のレイアが大層心配なようで最近では毎日同じような事ばかり言っている。

少しは、夫である私の心配もして欲しいものだ。

それにしても我が息子のレイアは、いつもいつもワシの予想の斜め上を思考をしておる。

極めつけは今回のエルフのと取引だ。

領地運営がうまく言っていれば、このような案には乗らないのだがな。

「しかし、貴方もよくレイアちゃんの案を許したわね。私はてつきり反対すると思っていたわ。」

「このまま赤字運営を続づけるのとレイアの妙案を天秤に掛けたまでき。将来的にこの領地を継ぐのはレイアだからな。だからレイアのやりたいようにやらせてやればいい。もし、レイアの妙案がダメで領地が破産したら親子三人でゲルマニアあたりで傭兵をやればいいわ。」

「あら。それは楽しそうね。」

妻とそんなたわいない話をしていると執事が部屋に入ってきた。

「旦那様、ラ・ヴァリエール公爵よりお返事がまいりました。」

「思ったより時間がかかったな。御苦労。」

レイアが旅立った日に公爵に面会を求める旨の手紙を出していたのだ。

公爵からの手紙を確認をし、おおむね予想通りの返答が返ってきた為思わず笑みをこぼした。

「私は公爵家に出した手紙内容を確認していないのだけど、どういった内容の手紙を出したの？」

「まあ、簡潔に言うとな『お宅の娘さんが病を治す方法があるかもしれない。だから、面会求む。』だ。」

なにやらアリアがあきれた様子でこちらを見めてくる。

「あなた、レイアが返ってくる前に家を潰す気ですか？ 私達のような最下層貴族が公爵家にそのような手紙をだしたらどんな仕打ちをうけることか・・・」

「大丈夫だアリア。そんなこと十二分に承知しておる。ある筋の情報では、公爵は次女の治療には藁にもすがる思いだという。娘の治療の可能性をちらつかせればあちらから食いついてくる。」

ある筋というのは、レイアのことなのだが・・・一体どこでこのよう情報を手に入れたのかは定かではないが、結果レイアの読み通り

になった為問題はない。

「アリアよ。私は、レイアとエルフとの貿易を認めさせる為にどのような手段でも使う。例えそれが公爵を脅迫しようともだ。」

私は、決意を固めた目でアリアを見た。

「脅迫だなんて・・・そんな勇気なくせに。でも、そんな貴方も素敵ですよ。アリア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルは、レイリー・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルにどこまでも付いていきますわ」

「明日の朝一にここを出てラ・ヴァリエール公爵家に向かう。今日中に出立の準備を頼む。」

そう執事に告げる。

「かしこまりました旦那様。」

不安そうな顔をしたまま執事は退場していった。

まあ仕方ない。私とて公爵家を相手取って交渉などはしたくはないが父として貴族としてレイアとの約束を守らねばならない。

レイア出発から11日後。

「それにしても、広い領地ね。領地にはいつてから屋敷に着くまで馬車で半日もかかるなんて。一体うちの何倍あるのかしら？」

公爵と男爵と比べるなど無意味である。

アリアも分かっているようなことを質問してくるとは・・・不安

があるのだろう。

「大丈夫だ。この案はそもそもレイアが考えたものだ。それに今はわしも付いておる。何があるうともお前だけは無事に領地まで送り届けるさ。」

そう見栄をはったものの、公爵と公爵夫人は、共にスクウェアで系統もこちらと同じである以上逃げ切ることはできないだろうな。

その時、馬車が止まった。

馬車の窓から外を見てみると、ばかでかいお城が建っていたのだ。

貧乏貴族と公爵家との差を改めて思い知った。

同行していた執事が門番にラ・ヴァリエール公爵からの召喚であることを告げると門が開門された。

中に入り馬車から下りると熟年のメイドがこちらに向かって歩いてきた。

どうやら私達を見て品定めをしているようだ。

非常に気分が悪い。

「お待ちしております。ヴェーグル男爵と男爵夫人。旦那様と奥様がお待ちです。こちらへ」

早々に用件を告げるとメイドは自分についてくるようにいい私達を先導した。

公爵家に下級貴族が呼ばれるのが珍しいのか、ちらほらと視線がこちらに向けられる。

メイドが立ち止り、正面の部屋のドアをノックする。

コンコン。

「旦那様奥様、ヴェーグル男爵と男爵夫人をお連れいたしました。」
すると間もなく後発的な口調の男性の声の中から聞こえてきた。

「入れ。」

さて、一世一代の駆け引きの開始だ。

中身はいると熟年の男女が二組椅子に座っている。

一人は、50台近い白くなりかかった金髪に口髭をはやした男。もう一人はピンクのブロンドの髪をした女性。

恐らく、ラ・ヴァリエール公爵と公爵夫人であろう。

「お初にお目にかかりますラ・ヴァリエール公爵とラ・ヴァリエール公爵夫人。私は、レイリー・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルと申します。こちらは私の妻の」

「アリア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルと申します。以後お見知りおきを」

丁寧に自己紹介をすました。

公爵夫妻は、特に反応をみせなかった。

どうやらこちらの事は事前に調査済みというわけか。

公爵は、こちらをじつとにらんで重々しく口を開いた。

「前置きはいい。先日、男爵がこちらに送ってきた手紙の内容について詳しく聞く為に今日は呼んだのだ。分かっているとは思いますが、あの内容に嘘偽りがある場合は相応の覚悟をしてもらってください。」

公爵の問いに対して私は即答した。

「もちろんです。ラ・ヴァリエール公爵」

すると公爵の横に控えていた執事が紙の束を公爵夫人に渡した。公爵夫人は、こちらを冷たい目線を向けて言い放った。

「失礼ですが、こちらで貴方達の事や領地の事を調べさせていただきました。お二人は、土と風のトライアングルだそうで非常にうちと似ておりますね。後、12歳の息子は、土のラインメイジであり将来有望だとか。それと領地運営がうまく言っておらず常に赤字ギリギリであったが、今年か特産品の取引が滞り赤字に転落したそうですね。」

私達や領地の情報は筒抜けなのは、仕方ないが息子の情報まで仕入れていたのは驚きだった。

幸いにも息子のゴーレムについては、ばれていないようだ。あの子のゴーレムは、世間一般的には異能に入る為、下手をすれば異端審問にかけられる。

「どこでカトレアの病気の事を知ったかは知りませんが、高名な水のスクウエアが治療を行っても治ることはありませんでした。ですから貴方達が治療を行ったところでおおるとも思えません。それに付け加え、土や風の系統は私達の方が上手です。」

まったくもっておっしゃる通りだ。もちろん土や風が治療の面において水スクウエアに勝てる要素など微塵にもない。

私が押し黙って考えていると公爵夫人が何を思ったのか懐に手を差し入れながら、こちらを見下しながら言葉をつなげてきた。

「貴方達は出来もしない治療をカトレアに行って我が家から多額の報酬を得る事でここに来たとした思えません。」

どうやら、私の返答次第でこの場で亡きものにする気らしい。
流石に肝が冷える。

早いうちに誤解を解いておかないとこちらが説明をする前に殺されかねない。

「残念ながら公爵夫人は思い違いをしております。まず、私達の目的はお金ではありません。それに加えて、手紙でもお伝えしたように公爵夫妻の次女のカトレア様を治療できる人物を紹介できるかもしれないとお伝えしたはずです。」

私がそういって公爵夫人からの威圧感が多少なくなつた。

「金では、ということとは別に目的があるということだな。もちろん、カトレアの治るのならば私にできる範囲でお前たちの望みものを与えることをラ・ヴァリエール公爵の名に誓って約束しよう。私達は既に国中の名医にカトレアを見せているが、お前たちが紹介しようとしている医者は一切どこの国の誰だ？」

「それを言うには、先ず……」

私は、公爵の横にいる執事と護衛に目をやった。

公爵は私の意図を読み取り、執事と護衛を部屋の外に出した。

もちろん、護衛がいなくなる為公爵夫妻の安全を確保するために私達の杖も一緒に持って行かれた。

護衛が出て行ったのを確認し、私は公爵夫妻に向かって本題を切り出した。

「人払いありがとうございます。ここからのお話は公爵夫妻の胸の

内にとどめていただきたい。」

公爵夫人のイライラも最高潮に来たのか、言葉に怒気を含み始めた。

「早く本題を言ってくれないかしら？こちらは、貴方がたと違って忙しいのよ。」

下級貴族など眼中にないような視線は未だに気に食わないが、先程よりこちらを意識しているようだ。

いきなり魔法が飛んでこない事を祈りつつ、私は一言で言いきった。

「医者は、エルフです。」

公爵夫妻は無言でしまっていた・そして沈黙を破るかのように懐からそつと杖を取りだして

「どうやら異教徒がここに紛れ込んでいたらしい。この場で肅清してくれる。」

夫妻が呪文唱えるより早く、私は声を荒げて公爵夫妻に思いをぶつけた。

「カトレア様を治したくはないのですか！元気にして差し上げたくはないのですか！少しでもそう思う気持ちがおありならお話を聞いてはいただけませんか？その上で納得がいかなければ私達の首を差し上げましょう。それにこのような機会は二度とないかもしれませんよ。」

そういうと公爵夫妻もお互いの顔を見合せ、杖をこちらに向けたまま話を聞くことを了承してくれた。

それから、順を追って説明していった。
領地運営がうまくいなくなると、息子がエルフとの貿易を考えたこと。

そしてそれを国に許可を取るべく公爵家を味方につけるように私達に頼んだこと。

今現在息子がエルフのいるサハラに居ること。

公爵夫妻が驚いている。

12歳の息子が考えた案に乗ったことや自らエルフと取引をすべく一人で出かけた言ったことなど挙げればきりが無い。

公爵は、私達へ自らの疑問を解決すべく話しかけてきた。

「にわかには信じられないな。何より信じられないのはお前たち夫妻が一人息子をわざわざエルフの住まう地域に一人で行かせたことだ。息子が死んでしまふとは思わないのか？なぜ12歳の息子の言葉をそこまで信じられる？」

私とアリアはお互い目を合わせてお互いの認識を確認しあった。
愚問ですよ公爵。

私とアリアは声をそろえて公爵夫妻に言った。

「「息子を愛してますから」「」

公爵夫妻は、私達の顔をみると肩の力を抜いて杖を収めた。
最初に口を開いたのは公爵夫人であった。

「子供を信じるのは親の務めです。まだ、信じられない部分もありますがとりあえずは貴方達を信じましょう。後は、貴方に任せるわ。」

「

何やら公爵は、顎に手をつけて考えている模様だ。

大体想像はつく、カトレアの治療とエルフの貿易を国に認めさせる算段等を考えているのだろう。

公爵の考えが纏まったようだ。

「分かった。お前たちに協力しよう。ただし、こちらも条件を三つ付けさせてもらおう。」

ここまでできたらその条件を飲むしかない為、こちらにはすでに拒否権はない。

「分かりました。どのような条件でしょうか？」

公爵が言葉をつなげる。

「一つ、カトレアの治療を行う際は、公爵家の管理下で行う。二つ、カトレアが完治しない限りエルフとの貿易には協力しない。三つ、期間は本日より二年間とする」

公爵家から提示された条件は、厳しいものの相手がエルフとなればこれでも少ない位だ。

「三つの条件、ヴェーグル家の名に誓ってお守りいたします。では、カトレア様の治療が終わった際には、王宮へのお力添えお願いいたします。」

「分かっておる。カトレアが完治した際には、ヴァリエール家の名に誓ってそなた達の約束をはたそう。」

こうして、公爵家との長いようえ短い交渉は終わった。

レイアよ、父はお前との約束を守ったぞ。

後は、お前次第だ。

「貴方、そろそろ帰るわよ。こんなところにいたんじゃ気も休まらないわ。」

相変わらずだなアリアよ。

公爵家をこんな処呼ばわりとは、もっとも私も同意見だがな。

レイリーのヴァリエール家との交渉はこれにて終了です。

主人公の父は、息子との約束を守る。(後書き)

次回は・・・レイアのお話に戻ろうか考え中です。

リアルの都合次第で更新が不定期におそくなるかもしれません。

主人公は、目的地に到着する。(前書き)

最近リアルが忙しくて、更新が遅れて申し訳ありません。そして、いつも読んでくれてありがとうございます。

作者の知識は、wikiの情報が殆どの為、アドリブを多く含んでおります。

色々と不備はあると思いますが、よろしく願います。

主人公は、目的地に到着する。

『薔薇族』の集落で生活を始めて早一週間。

今日、やっと喫茶店ヴェーグルを一時閉店して『ネフテス』の集落に出発します。

カラン！

閉店作業中の店の中に客が入ってきた。

「すみませーん。本日から『ネフテス』に出かける為、無期限休業です。ってアーベか」

「分かっているさ。『薔薇族』の統領として気持ちばかりの饞別を持ってきたのさ。これを持っていけば相手の方からお前さんを見つけてくれる。」

そういうと、アーベは薔薇の刺繍がされたマントと指輪を二つを渡してきた。

服や指輪の価値などよくわからないが、アーベが持ってくれた品物は素人がみても高価なものだと分かる。

「三つともマジックアイテムの一種さ。指輪の方は、結晶精製で作成した火石と風石の結晶を加工したものだ。使い方は、指輪に魔力を流すことで系統の才能がなくてもドットからラインクラスの魔法を発動できる品物だ。もちろん、これを杖の代わりにすることでレイアの得意な土属性も問題なく扱える。マントの方は、ある程度伸縮自在の丈夫なマントとでも思ってくれ。」

すげー。

マントの方は、良く性能がわからないが指輪は神性能だ。

あの指輪を杖の代わりにしておけば土と風と火の三つの属性のラインスペルまでつかえるということか！しかも風と火は詠唱いらずときた。

やっぱ、エルフの技術は半端ねー。

「何から何までありがとう。初めて出会った時は衝撃的だったが、今となつては最初のアーベに出会えてよかったとさえ思えるよ。この贈り物は大事に使わせてもらうよ。」

素直に感謝の言葉を伝えた。

アーベからもらった指輪を左右に指に嵌めた。万が一片手を失った時の為に両手の方がいいよね。後、その方がかっこいいしさ。

やはり、話を聞いてくれるエルフに出会えたことがこの旅の最大の成果と言っても過言ではないと思う。

喫茶店を運営している時もアーベが通ってくれたおかげで他のお客も来てくれて、なかなか繁盛して楽しかった。

朝と昼は喫茶店で夜はゲイバーみたいな雰囲気だったのは、かなりいただけなかったが十分楽しい日々だった。

「気にするな。いいオトコに優しくするのは紳士として当然だ。」

確かに、アーベは紳士だと思うが、何か釈然としない。

ホ である一点を除けば完璧なのだが非常に残念だ。

「ありがとう。後、持ってきた調味料の一部は置いていくから、皆で好きに使って欲しい。残りは『ネフテス』に持って行ってあっち

のエルフの人にも味わってもらおう予定だからさ。」

「そうか、あつちに行ったら私の尻合いのビダーシャルというエルフを尋ねるといい。『ネフテス』の「老評議会」の議員をやっている為、貿易の話を通しやすいだろう。」

なんだってー！

あのエルフと知り合いということは、現時点で交流をもっていると将来的にタバサ救出に参加した場合に鉢合わせじゃないか。

まずいな・・・。

だが、所詮は未来の事だ。未来の自分が何とか乗り切ってくれるさ。期待してるぜ未来の私。

「ありがとうアーベ。早速で申し訳ないのだが、そのビダーシャル宛にも手紙を書いてくれないか？この間もらった紹介状は相手の統領宛だったからさ。」

アーベがうなずくと、すぐさま紙とペンを取りだしサラサラと文章を書きあげた。

「これでよし、これをビダーシャルに渡せば後はあいつが何とかしてくれるさ。気をつけて行って来い。」

アーベから手紙を受け取るとそれを懐にしまい。その他の荷造りを再開した。

まあ、もともとサンプル以外は殆どなかったので10分程度で終わった。

20分後。

町の入り口についてみると、お店の常連だったエルフの人や調味料を分けてあげた人たちが集まってくれた。

男男・・・見渡す限り男ばかりだorz

くっそ、かわいい女子はおらんのか！

いいさいいさ、かわいい女の子は『ネフテス』で探すもんね（
、。）グスン

それはさておき、別れのあいさつって大事だよな。

しかも、お世話になった人たちなら尚更だ。

「みんなー。短い間だったけどありがとう。『ネフテス』に行つて目的を果たしたらまた寄るから、それまで元気でねー。」

私がそういうと、集まって切れたエルフが各々挨拶をくれた。

「いってこい。」

「いってらしゃい。」

「またな。」

いいエルフ達だ。

エルフ達に手を振りながら、本日一発目の魔法を発動する。

「殖装」

ゼルエルを身にまとい荷物を触手でつかみ上げて、空の旅に出發！。

「みんな、またねー！ー。」

一気に速度を上げて移動を開始した。

エルフの人たちもこちらを見上げてくれている。

悲しいけど、これってお別れなのよね。

「さーて、準備は整った。後は相手を交渉のテーブルに立たせるだけだ。気合いをいれろレイア」

自分に気合を入れて『ネフテス』めざして全力全快だ。

4時間後。

そろそろ、ゼルエルの飛行速度的に目的地に着くはずなのだが……。

見渡す限り砂漠砂漠砂漠orz
とりあえず、降りるてあ辺りを探してみようかな。

アーベは、マントを着ていれば相手が見つ付けてくれると言っていたが……どうやって見つけるんだろう。

もしかしてGPSみたいなマジックアイテムなのかな？

ゼルエルから身を剥がして、ゼルエルの肩に乗って移動することにした。

こんな炎天下の中、体力を使って歩いた日には干からびちゃうぜ。どこか日陰で休もう。そして相手が見つ付けてくれるのを待とう。

「どこかに贅沢言わないからオワシスとかオワシスとかオワシスはなかな……」

有りもしないものを要求しながら、日陰を探して移動中です。

ダメだ……。どこにも日陰がない。早く私を見つけてくれ『ネフテス』のエルフさんよ。

何か気を紛らわせないとやってられない。

おっし、歌おう。

1曲目【メグメル】いきますー！。

「透き通 夢を見てい やわらか 永 風のように かす
かな声 高い空から僕を呼んでい このま 飛び立て 何
処にだって行け・・・」

今日も絶好調で一人カラオケ中です。

10分後。

やばい・・・のどが渴いた。

砂漠で歌うとか自殺行為でした。

しかし、引かぬ、媚びぬ、省みぬ!!

エルフが私を見つけるのが先か私が倒れるのが先か勝負だ!!

2曲目、【明日へのbrilliant road】いくぜ。

「空を仰 星よ満ちて飛び立つ 明日へ brilliantia
nt roa 心の蒼 この手に抱い go far aw
a 羨む事 慣れてしまったら誇れる自分 遠ざかってく見
えない翼・・・」

更に30分後。

はあはあ、まだかまだなのか!

5曲目を歌い切り、そろそろ疲れはMAXだ。

こうなれば、『薔薇族』で覚えたあの曲を歌うしかない。

覚える気はなかったが、毎日お店で歌われればそりゃ覚えるわ。

6曲目【ヤラナイカ?】いきます。

「ユラリユラリ揺れている オトコ心 ピーンチ かなりかな
りヤバイのさ 助けてダーリン くらくらりん (やらないか)

何もかもが新しい世界に来ちゃったZE・・・」

ドンー、ドンー。

何やら地響きが聞こえる。

まるで巨人が歩くかのような地響きが聞こえる。

そう思うと、急にあたりが日陰になった。

ふうー、やっと日陰になったか。

これで少しは涼しくなるかな・・・じゃねーよ。

後ろを振り向いてみると、50mオーバーの巨大なゴーレムが私めがけて倒しこんできた。

あのサイズでは、私の魔法で対応できる範囲を大きく超えている。

「殖装」

私はすぐさま、ゼルエルを身にまとい安全を確保する。

そして、倒れてくるゴーレムに視線を向けた。

「消し飛べ。ゴーレム!」

キュピーーン!

ゼルエルの顔が一瞬光った。その瞬間のゴーレムの上半身が消し飛んだ。

ふふふ、これぞ目からビームだ。

治水工事の一件で山を半壊させて以来、特訓を積んで身につけたのだ。

それにしても一体誰が攻撃を仕掛けていたのだ。

ドゴーン。

ゴーレムが地面倒れこみ、あたりの砂が舞い上がった。
これで一安心。

まったく、けつたいなゴーレムの使い方をするな。

そんなことを考えれると先程倒れこんだゴーレムが黒色に変貌していた。

クンクン。

・・・まじい火薬のおいだ。

その瞬間、大きな爆発音と共にあたりに大きなクレータを作った。
くっそ手荒い歓迎をしてくれるな。

A・T・フィールドがなかったら死んでいたぞ。

キヨロキヨロ

あたりを見回すが誰もいない。

恐らくエルフが襲ってきたのであろう。

ここは、こちらに戦意がないことを見せて話し合いで解決をさせる
しかない。

ようやく、実家を出るときに作成をした秘密兵器を使う時が来たか！

ごそごそ。

カバンから取り出したのは、棒きれに白い布を取り付けたものである。
る。

そうこれは、白旗である。

「攻撃をやめていただきたい。こちらに戦意はない。まずは、話を
聞いてほしい。」

白旗をパタパタ振りながら大声で叫んだ。

・
・
・
・
・

無視ですか。

まだこちらの素性を怪しんでいるのかな？

仕方ない、こちらから自己紹介をするかー。

「私は、トリステインの男爵家嫡男レイア・ド・ラシエール・フォ
ン・ヴェーグルというものです。訳あって、『ネフテス』まで参り
ました。ここに来る際に立ち寄った『薔薇族』の集落で『ネフテス』
の「老評議会」のビダーシャル宛の手紙も書いてもらっています。
これがその手紙です。」

懐にしまっていた手紙のはいつた封筒をとりだし周りに見えるよう
に掲げた。

しばらくすると、どこから現れたのか分からないが一人のエルフが
こちらに近づいてきた。

まったく光学迷彩かよ。まったく気付かなかったぞ。

こちらを見定めるかのようにエルフの視線が下から上に流れた。

「蛮族が『薔薇族』の紹介状を持っているなど信用できん。それを
こちらにわたしてもらおう。」

高圧的な態度のエルフAがこちらに手を伸ばしてきた。

不審者相手には、普通こういう対応だよな。

我慢我慢。

「こちらの信用問題にもなりかねないので、宛名以外の人は中身を見ないでくださいね。」

そういつて、手紙をエルフAに渡した。

手紙を受け取ったエルフは、手紙を受け取り封筒のサインを確認した。

サインを確認し、再度私の方を見てきた。

なに照れるじゃないか。

「確かに『薔薇族』のサインだ。こんな蛮族の子供があんな変態の仲間なんて余の末だな。俺の背後に立つなよ、この変態」

あれ？

なんか私も モ集団の一員だと思われた!?

「違う！私にそんな性癖ない。たまたま、最初に出会ったエルフが『薔薇族』で且つ少しばかり一緒に暮らしたただけだ。」

誤解もいいところだぜ。

俺が男色だといいたいのかよ！こんな美少年が男好きのはずないだろ。

俺の純粋な目を見てからものを言えよ。

まったく失礼なエルフだ。

俺の鬼気迫る説得が通じたのかエルフは少し引いていた。

「そ、そうか。分かった、とりあえずビダーシャルを連れてくるからここで大人しくしている。」

そういうとまた違うエルフBが現れて、私と話していたエルフから封筒をうけとり移動していった。
ふむふむ、あっちのほうがくに『ネフテス』があるのか。

待つこと1時間後。

一体どんだけ待たせるんだ。

あまりにも暇だったので、俺の見張りをしているエルフの人と色々話をしちゃったよ。

私からは、一人旅の目的と『薔薇族』の集落での生活について話した。

エルフからは、『ネフテス』の集落についてと『薔薇族』について話を聞かされた。

『薔薇族』が半端ない集団だということが分かったぜ。
戦時の際は最前線で戦うエキスパート集団だそうだ。

ただし、特殊な性癖を持つばかりに者たちばかりだった為、身を守る為に集落として切り出されたそうだ。

まあ・・・分かるよ。あの集団にいと常に尻に気を配らんとけないしね。

『薔薇族』の話をしているとネタが尽きないぜ。

お！

遠くから人が近づいてくる。

長髪のイケメソが近付いてきた。

まったく、不細工なエルフに会ってみたいぜ（本心は会ってみたいくないけどね）。

「私がビダーシャルだ。蛮族よ、お前があの手紙を持ってきたか？」

「そうです。『薔薇族』の統領アーベに書いていただいた手紙です。なんでも貴方とは知り合いであるから、頼るといいと言われました。」

あれ？

ビダーシャルのみけんに皺が・・・何か地雷を踏んだか！？

「誰が尻合いだ！どうやら死にたいらしいな蛮族よ。」

ええええええええ！何それ知り合いと言っただけで殺されるってどんだけだよ。

もちつけエルフ。

「落ち着いてください。私が何か気に障ることを言ったのなら誤りますから、とりあえず話を聞いてください。」

「話さずともお前の要件は手紙に全部書いてあったから聞かずとも分かる。」

分かってるならこっちを攻撃しようとするなよ。

原作と違い意外と短気なんだな。

しかし、アーベもあの短い時間でそこまで手紙に書いてくれるなんてやってくれるじゃないか。

ジヨバンニも真っ青だぜ。

「とりあえず、お前の口から聞きたいこともあるからついてこい。エルフA、先程からここを見はっている者たちも同行するように伝える。」

おっし、レイアはどこまでもついていきますよ。

まだ見ぬ『ネフテス』のかわいい女の子の為にね。

「分かった。それにしても随分な警備だな。お前の實力は、ネフテスでもTOPクラスなのにわざわざ護衛をつけるなんてどういうことだ？こいつがそんなのVIPなのか？」

大統領も真つ青な護衛をつけてくれるなんて嬉しい限りだ。

俺ってそんなにVIPだったか。

アーベの手紙の効果おそるべし。

「違う……こいつが暴れた際の時間稼ぎ要員だ。こいつは、アーベと互角以上に渡り合うほどの変態だ。しかも、あの槍を防ぎきったそうだ。」

(シーン)

エルファAの私を見る目が変わった。

アーベ!!!!

なんてこと書いてくれる警戒心がMAXになったじゃないか。

「まずは、杖とその指輪とマントをこちらに預けてもらおう。後、ゴレムもしまってもらおう。荷物の方はこちらで運ぶから気にしないでいい。」

武装解除されましたorz

まあ、杖なくてもA・T・フィールド健在だから多分大丈夫だけだね。

後、ゼルエルも最近杖がなくても呼べる気がするんですよ。

ほら・私の心臓にはコアが埋め込まれているからそれが触媒となつて何となくいける気がする。

「では、『ネフテス』に移動する。言っておくが変な気は起こすなよ。」

「信用ないな・・・暴れたりしないよ。手紙もあったように交渉に来たんだからさ」

ぞろぞろと私を囲むようにしてビダーシャル含むエルフ集団が移動を開始した。

VIPどころか囚人みたいな扱いじゃないか。

30分後。

『ネフテス』に到着した。

長かった旅も折り返し地点だ。

『ネフテス』について早々にビダーシャルの住んでいる家に案内された。

そこで改めて、私が旅をする事になった経由とエルフの貿易に関して国に許可を求めていることを話した。

「蛮族にしては、変わった考えを持っているな。我々と貿易をしようなどと蛮族の教えに反することではないのか？」

「ブリミルの教えというやつですか？正直、あんな教えを守っても腹も膨れないし、生活も豊かにならないのでどうでもいいです。」

ビダーシャルが苦笑している。

「なるほど。では、もしエルフと人間で戦争になった際にお前はど

「つする？」

これは、試されているのかな？

それとも尋問されているのかな？

こういう場合は正直に答え他方がみの為かな。

「恐らく、どちらにもつきません。ですが、どうしてもどちらかを選べと言うのならエルフの陣営につきます。」

「なぜ、人間を裏切つてまで我々に加担する？」

そんなの簡単さ、エルフの方が優れた種族であり何より女の子が皆可愛い！

「簡単にいえば負ける陣営には参加したくないからです。エルフは、人間と比べて魔法／知性／技術力などあらゆる面で人間を上回っているからです。人間が勝っている部分は繁殖力のみかと思えます。後、凄く個人的な理由で・・・人間よりエルフが好きだからです！」

ビダーシャルの顔が？（　；）なぬうっ！！ってなっている。

「あ・・・言い忘れましたが、私は男より女性が好きなノーマルな性癖ですよ」

ビダーシャルが眉間に手を当てて考えるの人のポーズをとっている。

「どつやら警戒する必要はなかったようだな。こちらで嘘をついたらばれる魔法をかけさせてもらった。嘘はついてないようだな。」

なにその嘘発見器魔法。

是非俺にも教えてくれ！！

「そんな魔法まで掛けるなんて少し警戒し過ぎじゃないか？こちらは杖やマジックアイテムまで取り上げられたのに状況だということに。」

「ふ、何を言う。お前は、アーベと互角以上に戦っただけでなくあいつが使う変態槍を凌ぎきる程の変態だからな。警戒をするに越したことはないさ。」

私の評価は変態で決定ですか……。

「もう、変態でいいです。まずは、『ネフテス』に入れてくれてありがとう。そして、これがもう一つアーベに書いてもらった紹介状です。一応、宛名には『ネフテス』の統領宛になっている。」

そうビダーシャルに言い、私は手紙を紹介状を渡した。

「預かるう。私は、この紹介状をもって統領に会って話をつけてきてやる。だから、それまではくれぐれも大人しくしている。蛮族と言うだけで、集落では目立つ。おまけにお前が薔薇のマントをしていたせいで他の者の警戒心は高まっている。特に男どもは何を仕掛けてくるかわからんぞ。」

『薔薇族』は一体ナニをやらかしたんだよ。

「聞きたくはないのだけど……一体、薔薇のマントにどんな訳がある？」

「それはだな……。」

ビダーシャルが苦い思い出を思い出すかのように語ってくれた。

20分後。

なんてことだ。

アーベよ、なんて危険なマントを俺に渡すんだ。

どおりて相手が見つ付けてくれるはずだよ。

簡単に要約すると、前線で戦っていた『薔薇族』は薔薇の刺繍入りのマントをしていたそうだ。

なんでも、マントを使い前線にいるイイ男を拘束し、アツーーーーなことをしていたらしい。

もちろん被害者には味方のエルフも混ざっていて、そのせいで薔薇がトラウマになった者や復讐を心に誓った者までいるとか・・・。
しかし、エルフでも切断できないマントか・・・物は使いようだな。

「まあ、そんなわけだ。だから、決してマントを付けて外に出るなよ。」

再度、念を押すようにこちらに確認をしてきた。

「分かった。こちらとしても相手に悪い印象を与える為に来たわけでもないからそこは安心してほしい。で、物は相談なのだが・・・『ネフテス』で喫茶店をやりたいのだが、どこか土地を貸してくれない？」

「手紙に書いてあった食事をするとところか・・・。そのくらいならば構わないだろう。」

おっしゃー。

喫茶店二号店GETだぜ。

『薔薇族』の集落のようにつまいくか分からんがここでもエルフの顧客をGETするぞー。

「ありがとう。後、申し訳ないのだけど家を建てる際に人手を貸してもらえない？まだ、ラインだから家を建てるほど精神力がないんだ。」

「私が手伝おう。ただし、条件がある。なーに、軽い条件だ。先程砂漠であった連中と私を含めた全員にお前の料理を振る舞ってくれ。」

ビダーシャルがニヤって笑う。

もっとお堅いやつかとおもったが、こいつもいい奴だ。

「任せろ！これでも『薔薇族』でも結構評判だったんだ。味には期待していいぞ。」

こうして、レイアの『ネフテス』到着初日は終了です。

主人公は、目的地に到着する。(後書き)

今回は、二つ名取得と帰省編をやるつもりです。

神場 司様から応募いただいた二つ名を使わせていただきたいと思います。
います。

応募ありがとうございます。

主人公は、二つ名をいただいた。(前書き)

いつもご愛読ありがとうございます。

そして感想を書いていただいた方々、ありがとうございます。

お陰で執筆意欲もつなぎ昇りです。(更新が遅いのは仕様です。)

主人公は、二つ名をいただいた。

いつもお世話になっておりますレイアです。

私は、今現在『ネフテス』の集落の端におります。

そこに何かあるかって？

魔法の訓練場ですよ。

そこで今、私とビダーシャルの決闘が今まさに行われようとしております。

暇を持て余しているのか、お店に来てくれた警備の人や通りすがりの人が見物しに集まってきた。

くっそー、何故かいつもいつも戦いに巻き込まれなきゃならんのだ。私は、ただ綺麗なエルフの嫁さんをもらって余生を楽しみたいだけなのにorz

観客席？にいるエルフ達から勇ましいお言葉が飛んできた。

「蛮族の子供だからって油断するなよ。相手は『薔薇族』の一員だ。」

「『薔薇族』に天誅を！！」

「皆の純尻はお前にかかっているんだぞ！ビダーシャル負けるんじゃないぞ。」

「もし、お前が負けやがったら『薔薇族』に身柄を引き渡すからな。」

「手加減なんかするんじゃないぞ！最初から殺す気でやっちなまえ。」

「この間の前線での恨み忘れたとは言わせないぞ！」

「生きてここから出られるとは思うなよ、この変態め。」

「うわー、なんか私が既に『薔薇族』の一員として扱われてるよ。」

しかも、訓練場の周りにいる男性陣から殺気がビンビン飛んでくる。飛んでくるヤジもエルフとは思えないほど下品な内容になっているよ。」

「レイア君、頑張ってるね！」

「ビダーシャル、もしレイア君に怪我させたら皆で袋につめてアーベの寝室に投げ込むからね。」

「レイア君が勝った方が面白そうだから頑張れ！」

おっしゃー、美女、美少女の応援がここに来て初めてきた！！！！
ふふふ、喫茶店で女性客が来たときにこっそりとサービスをした結果がここにきて実ったよ。

やっぱり、日々の努力って大事だよな。

後、どうも私の容姿はエルフ受けがいらし、自画自賛だがやっぱり美少年ってお得だよな。

神様、ありがとうー！そしてカヲル君、GJ。

「ビダーシャル、なんかさ・・・勝っても負けても大変そうだな。どうしてこうなったんだろう？」

素朴な疑問をビダーシャルに向けて質問を試してみた。

ビダーシャルは、眉間に皺をよせ、血管を浮き上がらせるほど鬼気迫る顔をしていた。

アーベとは別に意味でこえええええ。

「どうしてこなっただと！？もともとお前のせいだろ。お前が統領から実力がみたいと言われた時に対戦相手に私を選ぶからこつなっただ。なぜ、私を選んだ！？」

そんな無茶苦茶な事言わないでくれよ。

だって・・・『ネフテス』の知り合いつて殆どいないし、それにさ統領のテュリユークを相手に選ぶわけにはいかないじゃないかよ。

「くっそ、こんなことなら統領との面会など取り付けなければよかった。」

ビダーシャルは、本気で後悔しているようだ。

『薔薇族』の集落に送り込まれる未来を想像しているらしい・・・。

そう・・・事の発端は、今日の朝の事だった。

- - 回想開始（早朝） - -

「起きろレイア、今日は統領との面会の日だ。」

まだ眠い・・・しかし、睡魔に勝たなければならぬ時もある！

気合を入れて起き上がり朝一番の挨拶をした。

「おはようビダーシャル、出来れば美女か美少女に起こされたかったよ。」

「そうか、それは残念だったな。」

冷たく返された。

そついうと部屋のドアのところまで行くと

「起きたら、とつと朝食を作れ。」

居候をする代わりに毎朝の朝食を作らされております。

ほら・ビダーシャルの家って快適な環境を提供するマジックアイテムがあるからさ、むちゃくちゃ居心地よいのよ。だから、無理言っただめさせてもらっております。

「了解、先に行つて着替えたらすぐに行くから。」

10分後。

モグモグ、ムシヤムシヤ

「で、私は統領に会つて何をすればいいんだ？てつきり、ビダーシャルが取引に関してOKを出せばそれで終了だと思つていたんだが」

ビダーシャルもお箸を使つて器用に食事を勧めていく。

当然ながら朝食は和食だ。ご飯、味噌汁、漬物、目玉焼きにベーコン。

最初は、ナイフとフォークとか洋食器しかなかったんでは非この機会に覚えてもらったのだ。

しかし、ここまで短期間でお箸の使い方をマスターされるなんてすごいな。

うちの両親なんて使えるようになるまで2週間以上かかったのにさ。

モグモグ、ムシャムシャ

「その認識で、おおむね間違っではない。取引に関しては全権が私に委ねられている。ただし、一つ問題があつてな。」

常に問題が発生するんでね。

まったく、人生山あり谷ありというが山しかない気がするよ。

「問題・・・それって重い内容？できれば、軽い内容にして欲しいんだけど」

「とらえ方次第だ。内容を要約するとだな、こちらから提供する品とそちらからの提供される品とでは釣り合いがとれないという事だ。」

おもてー、なにそれ！とらえ方次第とか問題じゃないじゃないかよ。

すでに交渉決裂モードじゃん。

「まあ早まるな。この話には続きがある。取引に関してこちら方の要求を飲んでくれるならば、そちらが要望した物での取引を認めるというのだ。」

ちなみに、こちらがエルフに要望したものは3点である。まあ継続的に取引をしたいものは？だからこの場合は2点になるのかな？

？エルフがオアシスを快適な環境にしているマジックアイテム

？『薔薇族』の集落にあつた電灯もどき

？ラ・ヴァリエール公爵家の次女の治療薬

？は、絶対にHET間違いなしの商品だ。貴族に暴利でうって懐を肥やすんだ。なんせ、こんな中世の時代に21世紀も真つ青なエゴクーラーを提供するんだ。そのくらいもらってもいいよね？

？は、町の治安向上と平民の生活向上の為の必須アイテムだ。やっぱり、夜とか暗すぎると治安的にもよくないしね。

？は・・・おまけ？

「なるほど、分かってはいたが欲張り過ぎたかな・・・。そちらの求める品物って何？一応言っておくけど、うちの領地は貧乏だからそつちが望む品があるとは正直思えないんだけど。」

「我々が要求するものは、お・ま・え・だ」

・

・

・

・

はて？

耳が悪くなつたかな？

は！もしかして、こいつらは『ネフテス』になりすました『薔薇族』なのか！？

「まさか、『ネフテス』のこんな奥にまで『薔薇族』が入り込んでいたとは。くつそ、みそこなつたぞビダーシャル！！お前の事をトモダチだと思っていたが実はホモダチだったなんて、詐欺もいいところじゃないか。」

「誰がホモダチだ！？お前は、人の話を最後まできけ。いいか、統領はお前の力を欲しているんだ。詳しい話は、統領自身から話すと

のことだから支度をしてさっさと付いてこい。」

そうならそうと言ってくれよ。

お互いのコミュニケーション能力不足のせいで勘違いしてしまったじゃないか。

しかし、私の力が・・もちろん魔法の方じゃないよな。

腹を割って話すかな、人間と違って出来ている種族だし悪いようにはされないだろうしな。

「わかった。すぐに身支度をするからもう少し待ってくれ。」

エルフの親玉はどんな人だろう・・。

身分の高い人に会うのは初めてだが一通りの礼儀作法は貴族として学んだから大丈夫かな？

多少の不安にかられつつビダーシャルと共に家を出発した。

30分後。

「お初にお目にかかります。私は・・「よい。」」

私が自己紹介をしようとするすると統領ことテュリユークが止めてきた。

「時間がもつたない。早速だが本題に入るぞ。」

せつかちなエルフですな。

テュリユークが話を続けてきた。

「ビダーシャルから聞いていると思うが、我々との取引に関してそちらかの要求する品に対してこちらが提供する品とは釣り合いがとれぬ。そこで、こちらはお前自身を取引材料に追加させてもらう。」

具体的には、こちらといくつか契約をしてもらうことになる。」

すでに断ることが出来ない状況か……。

本来の目的は、私自身ではなくゼルエルの方に用事があるのかな？

「テュリユーク殿も人がお悪いですな。すでに私は断れる状況ではないではありませんか。」

私が断れば、取引を中止するのは確実だろう。

後、エルフの敵として認識され私だけではなく両親や領民まで狙われてしまう可能性だってある。

「頭の回転が速くて助かる。こちらの契約内容は三つだ。それを守るのなら取引を認めよう。一つ目、エルフに対して敵対しないこと。二つ目、有事の際または要請があった場合はエルフの陣営に加わり敵を戦うこと。三つ目、虚無の使い手の情報を入手した場合に報告すること。」

実に無難だな。

一つ目と二つ目は、予想通りだ。

専属傭兵みたいなもんだと思っていけばよいかな。

しかし、三つ目は、予想外だぜ。

ルイズの情報とかまだ流せない……しかし嘘もつけないしな。

とりあえずは、別の虚無の情報でも流してギリギリまでしのごう。

「分かりました。その契約をレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルの名にかけて守ることを誓います。」

おっし、これにてエルフの契約完結だぜ！

長い道のりだったー。

感動に浸っているとテュリユークがこちらさらなる要望を伝えてきた。

「よし、ではこれにて契約は完了だ。では、今から訓練場でお前の持つ力を確認する。なーに、有事の際にお前の実力が分からないと問題であるう？」

ニヤニヤした顔でこちらを見てくる。

まさか、ここにきて私の能力を確認してくるとはな。

やはり、完全に魔法でないことばれちゃってるね

私はしぶしぶ了承した。

「分かりました。ちなみに私が持つ力とは・・・もちろん魔法の事ではなくて、こちらの方でしょうか？ゼルエル！」

そして背後からゴーレムが出現した。

その瞬間、私を囲むようにエルフ達が現れた攻撃態勢に入った。

「やはり、杖や触媒は必要なかったか。それにしても、これが報告にあったゴーレムか・・・不気味だな。我々が使う魔法とも蛮族が使う魔法とも違うようだな。まあ、そのようなことは些細な問題だでは、お前が対戦相手を選べ。ここにいる誰もが屈強のエルフの戦士だ。実力を測るにはちょうどよいだろう。」

キヨロキヨロ

周りのエルフを見てみると確かに屈強だ・・・。

左からアーノルド・ユワルツエネツガー、ブルース・イリス、シルヴェスター・タローン・・・どのハリウッドだよ！

次に右から、愚地独、烈海、ジャック・ンマー・・・これゼ

口魔だよな？何か世界違くないか？
選べねー、というか選びたくないだろ！

どこかにまともなやつはおらんのか・・・あ！

視線を背後に向けてみれば、いるじゃないか私をここまでつて来てくれたビダーシャル君が！

もう、君に決めたー。

「今、私から目をそらしたビダーシャルを対戦相手に選びたいと思います！」

逃がしませんよ。

『薔薇族』にも負けず劣らず濃いヤツなんて対戦相手になんて選びたくありませんからね。

いや、ビダーシャルと一緒にいてくれて本当によかった。

「そうか、わかった。ビダーシャル準備をして訓練場に二人で来い。先に行つて待っているぞ」

・・・回想完了・・・

テュリユークが煮え切らないビダーシャルにエールを送った。

「ビダーシャルよ。ようは、いかような手段を用いても負けなければよいのだ。では、これよりビダーシャルとレイアの決闘を開始する。双方ともに全力を尽くし戦うこと。なお、勝者には褒美を授けよう。」

おお、褒美がもらえるだつて！

是非とも便利なマジックアイテムをもらっちゃおうぞー。

ビダーシャルには悪いけど、これって戦争（笑）なのよね。

「ビダーシャル、悪いけど勝たせてもらうよ。主に私の褒美の為に
儂く（薔薇族で）散ってくれ。」

「なめるなよ。ゴーレムを身にまとっていないお前など赤子の手を
捻るより簡単だ。」

言ってくれるじゃないか。

この試合で私の魔法使いとしての実力がどこまでエルフに通じるか
実験する為にゼルエルを身にまとっていないのだ。

アーベからもらったマジックアイテムも返してもらい準備万端なの
だ。

実は、一度やってみたかった技があるんだよね。

火系統で無かったので諦めていたけどアーベの指輪のお陰で実現可
能になったあの技を！

「それでは………始め！！」

テュリユークが開始の合図を切った。

先手必勝、くらえ某大佐の必殺技だー！！
前に腕を伸ばし指を弾いた。

パッチン！

ドーン

その瞬間、ビダーシャル足元から勢いよく炎が舞い上がりビダーシ
ヤル包み込んだ。

いかにエルフのカウンターがあろうとも周りの酸素を全て燃烧させ

て酸欠にはなるはずだ。

ゴオオオオー

燃える燃える！

そのまま燃えてなくなってしまう！

「これぞ、私が考え出した必殺技だ。名付けてフレイム・ピラーだ。アーベからもらった指輪により実現可能になった無詠唱のトライアングルクラスのスペルだ。はっははははは。」

私が余韻に浸っていると炎の中から声が聞こえた。

「見事な攻撃だ。私の周辺に炎を展開し、空気を送り込むことで威力を倍増させて相手を燃やしつくす技だな。ファイヤー・ウォールの亜種といったところか。しかし、カウンターの前では、いかなる攻撃も無意味だ。」

カーーン

そうビダーシャルが言いきると私が放った魔法が跳ね返ってきた。相変わらぬチートスキルだ。

だが、安西先生も言っているように諦めたらここで試合は終了です。

「やはり、この程度ではやられてはくれないか。」

パッチン！

先程と同等の炎を反射されてきた魔法にぶつけて相殺した。くっそ、無駄な精神力を消費したぜ。

まだ余裕はあるが、長期戦で勝てるほど甘い相手ではないな。

「挨拶はこの位にして、次はこちらから行かせてもらおうぞ。」

ちよつと、いきなり偏在を4体も出すのは卑怯でしょ。

やばい四方を囲まれた。

「ねーね、ビダーシャルさん。いきなり4体も偏在だすのは卑怯なんじゃない？しかも全員ゴーレムだしてるじゃんかよ。なにそれ！私VSゴーレム5体+偏在4体+本体の1対10じゃないかよ。どっただけですか！？」

「あんだあ その目は！ うるせえ おれは魔法がすべてだとは思ってねえんだ要は強ければいいんだどんな手を使おうが勝てばいい！それがすべてだ！！」

ビダーシャルが長い髪をかき上げながら私に向かって言ってきた。

どこのジャ さんですか！？

このやるー、人が下手に出ていれればいい気になりやがって！！

負けねーぞ、こちらはまだゼルエル以外にも奥の手だつてあるんだ。
一撃で決めてやるぜ。

「ビダーシャルよ、そちらがその気ならこちらも奥の手を使うまでだ。そこで見物しているエルフ達。派手な魔法を使うから全力で防げよ。怪我したって知らないからな。錬金！」

足元の地面を可能な限りアルミニウム粉末に変換した。

そして指輪に魔力を込めて空気中の酸素を集め、ウインドでまきあげて砂嵐を作った。

ゴオオオオー。

「ふふふ、どこからでもかかってこい！」

訓練場一杯とまではいかないが私を中心とした半径10m程に球状に展開させている。

「何をしたいか分からぬが所詮目くらまし！これでけりをつけてやる。」

ビダーシャルがゴーレムを私に向けて突撃させてきた。流石に本体と偏在は、砂嵐の外部で待機させているか。

「いつちよ派手なパフォーマンスを見せてやる。もちろんお代は、お前のゴーレムだ！エクスプロージョン（爆発）」

パッチン！

指を弾き砂嵐目がけて発火を行った。

ドガーーーーン。

けたたましい爆発音と爆風が訓練場を襲った。

そう、これはアルミニウム粉末をつかった粉塵爆発なのだ。火薬いらずのお手軽爆弾である。

さてさて、ビダーシャル君は無事かな？

「こ、殺す気か！とっさにアース・ウォールを作らねば大けがする処だったぞ。」

どうやら爆発で偏在もるともゴーレムは、始末したようだ。後、ビダーシャルが吹き飛んでいる処を見るとカウンターで反射出来る上限を突破したか。

「いやー、あそこまで威力があるとは思わなかったんだよ。それにしても、あの爆発の中よく無事でいるね。さすがにここまで無傷でいられるとへこむんだけど。魔法の才能ないのかなorz」

「なにをいう。魔法だけを使った勝負で私をここまでコケにしたのは片手で数えられる位だ。十分誇ってよいほどの才能だ。」

実力に不安があったけどビダーシャルのお墨付きをもらったぜ。

そうか・・・ここ最近勝負したのがみんなエルフばかりだったから感覚がおかしくなっていただけか。

今度、実家に帰ったら父上と母上と勝負してみよう。

目指せスクウエアだ！

「さて！レイアよ、我はお前がもつ力がみたいと言ったのだ。二度同じことを言わせるでないぞ。」

威厳たつぷりのお言葉をテュリユークから頂いてしまった。

まあ、焦るなって言われなくとも使いますよ。

そうしないと勝てそうにないんでね。

「分かっております。私の魔法の実力がどこまで通用するか試してみたかったです。お時間を取らせてしまい申し訳ありません。これより、私の力をお見せしましょう。」

さて、ビダーシャル君、精神力の貯蔵は十分か！？

「ゼルエル！」

私の叫ぶとともに背後にゼルエルが出現した。

おおおおー。

私がゼルエルを出すと周りから歓声が飛びだした。ふふふ、もつと褒めてくれ。周りの反応に耳を傾けてみる。

「あれが、アーベを責め倒したゴーレムか・・・見たからに不気味だ」

「警備兵の話では、あらゆる攻撃から身を守る強固なゴーレムとか

」。

「あの触手きもいな・・・流星は『薔薇族』といったところか」

「きゃ、レイア君のエツチ」

さまざまな意見が飛び交っている。

「まだまだ、ここからが本番だぜ、ビダーシャル！怪我しても恨まんでくれよ。殖装！」

ゼルエルが、くぱあって見事に開けて私を飲みこんだ。

「こちらとて、負けられぬわけがあるのでな。」

ビダーシャルがいつの間にか偏在を4体も出していた。

お前さんの精神力は一体どのくらいあるんですか!?
おまけに、手元をみていると全員火石を持っている。

まさか、こいつら・・・自爆する気か!?

そう思った分間、偏在が私にしがみついていた。

おいおい、男に抱きつかれる趣味はないぜ。

ドドドーン。

一人ひとりが一軒家を吹き飛ばすほどの威力の爆発が起こった。

「甘いよ。この程度の爆発痛くもかゆくもないさ。しかし、自爆攻撃とは予想外だったよ。」

そう・・・N2爆弾の衝撃にも耐えるこのゼルエルにとって家が吹く飛ぶ程度の爆発など蚊が刺す程度の痛みもないさ。

もっともアーベの槍のような特殊なものでない限りは私のA・T・フィールドを破ることは不可能だ。

「くつやはり、無理だったか・・・私の負けだ。今の攻撃が効果がなかった以上、私にはお前の守りを崩すことはできないだろう。それにお前は、ゴーレムを身にまもってからは私を気遣って攻撃をしてくいていないしな。」

ビダーシャルがあきらめたかのように私に言ってきた。

「ばれていたか。正直に言つと・・・ゴーレムで攻撃するとビダーシャルを殺しかねないからね。守りに徹してビダーシャルが降参してくれるのを待っていたのさ。」

A・T・フィールドを纏った攻撃でビダーシャルを殴ればその部位を消し飛ばすしてしまい当たり所によっては殺してしまう。おまけにビームを当てれば、即死確定だしね。

「そこまで！勝者レイア。」

いつの間にかご都合主義で登場した審判エルフにより試合が終わった。

私はゴーレムをしまい、ビダーシャルは服の埃を払っている。

「双方ともによく戦った。ビダーシャルよ・・・まだまだ戦い方にむらがある今後腕を磨いておけ。そして、レイアよ・・・魔法の腕の方は正直期待していなかったが、今後鍛えることで我らとも良く戦いが出るようになるだろう。それに加えお前やお前のゴーレムがもつ絶対的な防御力は驚愕に値する。今後我らの為にその力を存分に振るうとよい。」

テュリユークがねぎらいの言葉を私達にかけてきた。

「「ありがとうございます」」

私とビダーシャルが同時にこたえた。

「いやー、よかったよかった。」

これで胸を張ってようやく実家にかえられるぞ。

「レイアよ、まだ私の話は終わっていない。我はお前のゴーレムをつかった攻撃を見ていない。だから、正直に答えよ。お前が本気で攻撃した場合はどの程度の威力がある？」

あれー、まだお話続いていたのですか。

それにしても攻撃力が・・・実際のどのくらいなんだろうな。
劇場版ゼルエルが放つビームは・・・一撃で天井都市崩壊させてたの
と現状展開できるA・T・フィールドの枚数から想定して劇場版ゼ
ルエルと同等位はいけるだろうな。
どうせ、嘘発見魔法を使われているだろうし正直に答えよう。

「恐らく、『ネフテス』の1/4を一撃で消滅させる事が出来ます。

」

・・・

・・・

・・・

・

(シーーン)

お願いだから無言はやめてくれ。

それに、周りの見物客まで少し怖い顔になってきてますよ。

重々しい雰囲気の中、テュリユークが口を開いた。

「それほどの力がありながら、なぜ我々に取引など持ちかける？力
を見せつければ一方的な条件を押し付けることも可能であったはず
だ。それに、お前がその気になればハルケギニアを力で統一するこ
とも十分可能であろう。」

まあ、出来る出来ないで言われるとそうだろうけど・・・ぶっちゃけ、
面倒。

それに力で統一とかしても最後には誰かにやられそうだしね。
よくあるRPGみたいだね。

「私は、何事も力で解決する必要はないと考えております。お互いに話し合えば解決できる事をわざわざ反感を買つような手段を用いるなど後々面倒です。それに、ハルゲニアを統一なんて面倒なので正直しません。万が一、テュリユーク殿がハルゲニア統一したいと仰るのでしたら、このレイアが全力を持って各地を制圧し、そのすべてをテュリユーク殿に献上いたしましょう。」

政治など面倒なことはごめんこうむるぜ。

私は、平和にのほほんと暮らせればそれでいいのだ。

「はっはははは、そうか我が望めばハルゲニアを統一してくれるか。実に面白い奴だ。なぜゆえにそこまで我々に尽くす？ 自国を愛しておらぬのか？」

「自国は愛しておりません。私は、身の回りの人と領民が幸せに暮らせるならばそれでいいのです。それを叶えられるのが人でなくエルフであっただけですよ。人間は、欲に満ちていてどうしようもない種族ですからそれを上手に管理するにはエルフしかないというだけです。後、個人的な理由はエルフのかわいいお嫁さんをもらって余生を謳歌したいからかな。」

自分でもどうしようもない位本音を言ってしまったぜ。

さてさて、周りの皆さんやテュリユークの反応が気になる……。

ざわざわ

「嫁を貰つ為にここまでできたのか、だったら仕方ない……。」

「見上げた変態だ。『薔薇族』とは別に意味で危険を感じるぜ。」

「エルフのかわいい子が嫁に行ったらその分エルフで結婚できないやつが出るだろう！俺の未来をつぶす気が！？」

「うちの娘はやらん！」

「ミ は俺の嫁。」

「レイア君だったらハーフエルフが生まれてもいいかな。」

「レイア君は、商売じゃなくてお嫁さん探しに来てたんだ。」

「何しに来てるんだお前？」

意味不明な発言も含まれていたがきにしない。

そのエルフのおねいさん一緒に明るい家庭をきづきませんか？

あら？テュリユークがニヤニヤしている。

「『薔薇族』のやつらとは違った意味で危険なやつだと改めて分かった。はっははは、年頃の娘がいるうちは注意しろよ。この変態の毒牙にかからぬようにな。」

やめてくれー！。

かわいいエルフツ子が逃げるじゃないか。

俺の未来をここで閉ざすつもりかテュリユーク！

鬼！悪魔！人でなし！

「お前の血は何色だ！！」

声を荒立てて叫んだ。

「赤だけだ。」

テュリユークが即答してきた。

・

・

・

なんか負けた気がするorz

いいよいいよ、自力でエルフツ子と仲良くなるからな。

「その話は置いておいて、ビダーシャルに勝ったのでご褒美をお願いします。」

話をサクッと切り替えよう。

ご褒美をもらって美女美少女の誤解を早々に解かなければ、私が嫁さがしに来たタダの変態になってしまう。

「分かっておる。そんなにせかさずともちゃんと褒美は用意しておる。一つ目にこれだ。」

そういうと、近くにいたエルフが腕輪を持ってきた。

なにやら高級感あふれる水色の宝石を付けた逸品だ。

恐らくマジックアイテムだろうな・・・どんなこつかだろう。

「ありがとうございます！ぶしつけ質問ですが、その腕輪には一体どの品物なのでしょう？」

良い能力こい！

このまま全身エルフ装備で決め込んでラスボス（笑）に挑むぜ。

「これか？お前たちの国にあるラグドリアン湖にいる精霊の秘宝を模造した物だ。効果は、魔力を込めることでヒーリングをかける程度の代物だ。込める魔力次第では、骨折した腕くらいならば治せよう。」

テュリユークがそっけなく言った。

これもかなり便利な品だともうのだが・・エルフってこんな常時付けてるのかよ。

精神力の消費はあるものの、オートリジエネじゃないかよ！

これで攻撃防御回復とパーペキじゃないか？

おっと、忘れるところだった。

一つ目と言うことは二つ目があるということですよねテュリユーク様。

「すばらしい効果の腕輪ではありませんか。水系統の魔法使いが居ない際の治療に大活躍できます。特に私は土系統以外はさっぱりなもので大切にに使わせていただきます。」

これで領地の人たちを治療して精神力をあげるぞ！！

目標は学院入学までに最低トライアングル、出来ることならばスクウェアだ。

「悦に浸っているのも良いが、話を勧めるぞ。二つ目は、褒美というほどのものではないがお前に二つ名を付けてやろう。蛮族では、二つ名を持つのが習わしであろう？先程の決闘で名乗っていなかった事からまだ持っていないのであろう？」

なんとエルフ最大部族統領から二つ名をもらえるなんてハルゲニア

探しても私だけじゃないか！？

「ありがとうございます。仰る通り、私はまだ二つ名を持っておりません。是非とも二つ名を名付けていただけませんか？」

テュリユークが顎に手をやり何やら考え中の様子だ。

まだかなまだかな・・やっぱり二つ名があるとモチベーション上がるもんね。

母上みたいに『衝撃』とかカツコイイのが貰えたらいいな。

「おし、きまつたぞ。お主に、へ「だあああああああ！！！！」

おっと、いけね〜突然叫ぶたくなつたぜ。

なにやら、これ以上テュリユークに話をさせていけないと神の声が聞こえた。

「申し訳ありません。持病の発作がつい・・・申し訳ありませんが、もう一度お願いしてもよろしいでしょうか？後、先程二つ名が【へ】で始まるように聞こえたのですが気のせいですよ。殖装！」

とりあえず、いつでも攻撃できるようにゼルエルを身にまとうぜ。

もう一度だけチャンスをあげるぞ。

テュリユークの額から汗が垂れているぜ。

今まさに過去にはないほど頭を回転させているに違いない。

さあ、エルフの頭脳をみせてくれ！

「てんがい纏鎧」ああ、持病の発作なら仕方ない。ゴホン、改めてお主に『纏鎧』の二つ名を授けよう。これは、お主がゴーレムを鎧のように纏い戦うことから取ったものだ。」

『纏鎧』のレイア・・・実にイイ!!

響きもいいし、意味も的を射ている。

さすがエルフの統領やればできるじゃんかよ。

最初に言った二つ名を続けるようなら統領が交代することになってたぜ。

「ありがとうございます。二つ名ありがたく頂戴いたします。これより『纏鎧』^{てんがい}のレイアと名乗らせていただきます。」

二つ名をもらいこれで私も一人前?の魔法使いだぜ。

さてさて、後は実家に帰ってこのことの報告と公爵次女の治療をしないとな・・・。

あ・・・治療するならやっぱり医者が必要だよね@@

特に、魔法薬にたけたエルフとかねー!。

「テュリユーク殿、一つお願いがなのですがよろしいでしょうか？」

「なんだ?いつてみる。出来る範囲で叶えてやるぞ。」

おっし、証言はとったぞ。

「取引内容の治療薬の件ですが、薬だけもらっても私にはその効果があつたか確かめるすべがありません。また、相手が治りきらなかつた場合にそのまま治療を続行することもできません。その為、ビダーシャルをしばらくの間我が領地に招待したいのですがよろしいでしょうか?」

横で今まで待機していたビダーシャルが鳩が豆鉄砲でも食らったかのような顔をしている。

「なんて事をいう、私を蛮族の国に連れ出して且つ治療を行えと言うのか！？私はこれでも忙しいのだ、薬だけもらってさっさと帰ればよいだろう。」

逃がしませんよビダーシャル。

私は、お前を連れてかえると決めただぜ。

学院入学まで色々と行きたい場所もあるし、エルフの君がいれば先々で便利なのは分かっているんだ。

「ビダーシャルよ。レイアが言っていることも一理ある。それに例の国の件ならば偏在に行かせればよい。それでも忙しいというならば別に者を例の国に行かせよう。」

ビダーシャルも色々と考えているようだ。

では、ここでとどめを刺すか。

()の中は、小声だと思ってくれ。

(ビダーシャル、ビダーシャル。試合開始前の事覚えている？負けたら『薔薇族』の集落に全裸で送り込まれる件だ。もし、私について領地に来てくれるならばそこら辺はうまい具合に回避してあげるから一緒に行こうぜ。)

どうやら、周りの観客が言っていたことを思い出したようだ。

顔が真っ青になり、そして急に明るくなった。

「統領！私は、至急ヴェーグル領に赴き治療と自己の見聞を広めたいと思います。例の件の方は、偏在に任せていきます。ご安心ください。」

変わり身はっや！

というか、いつの間にか私が悪役になってる。
まあ、ビダーシャルがやる気になってくれて何よりだ、早速明日の朝市で実家に帰ろう。

「テュリユーク殿、ビダーシャルも我が領地に着ていただけようなので、明日の朝一で国に帰り取引を認めさせて参ります。」

テュリユークに帰省することを伝えた。
ほら・・勝手に帰ると悪いじゃん。

「そうか、ならば今宵は皆でお前がやっている店で食事でも振る舞ってもらおうか。」

言ってくれるじゃないかテュリユーク。

我が領地の特産品の味をくと味わうがよい！

そして、もっと仲良くなるうぜエルフ諸君（主に女性限定で）。

「分かりました。我が領地の特産品の味を忘れられない様にしてみましょう。楽しみにしててくださいテュリユーク殿」

そして、その夜は私のお店でどんちゃん騒ぎになった。

みんなで歌ったり、私がアニソンを披露したりで盛り上がりましたよ。

それいしてもエルフの女性は美声だったぜ。

何を歌わしても素晴らしいのなんのって・・そのままアイドルデビュー出来ちゃうくらいだったよ。

そんなことをしてるうちにあっという間に朝が明てしまった。

こうして、『ネフテス』での短い滞在期間は終了です。

主人公は、二つ名をいただいた。(後書き)

今回は、ビダーシャルをつれて実家に帰ります。

今後よろしくお願いいたします。

主人公は、実家に到着する。（前書き）

ご愛読ありがとうございます。

まだ、小説一巻目にも届いておりませんが未長くよろしく願います。

今後もよろしく願います。

主人公は、実家に到着する。

いつもお世話になっているレイアです。

本日は、いつもより非常に眠いです。

「なあビダーシャル、出立する日なのに寝不足で死にそうなのは私だけか？」

徹夜で料理して歌って大忙しだった。

周りのものも同じようなやつは多いが、どうせ俺らを見送ったら寝るんだからいいよな。

「いや、お前だけじゃない。お前に付き合わされた私も寝不足だ。」

お互い眼の下にクマが出来ている。

明日の朝一で出立するといった手前、もはや予定変更は不可能だ。すでに、見送りの人も来ており既にチエックメイト状態だ。

「とありず、ゼルエルを全力で飛ばせば2、3時間位で休憩できる場所に心当たりがある。それまでの我慢だ。さすがに、今この場で出発を延ばすの出来ないだろう。」

ビダーシャルに同意を求めた。

「そうだな。では、統領達に挨拶次第すぐに出発しよう。」

お互いに現状を認識し合い、早々にお店の前に皆を集めて出立のあいさつをした。

「皆さん、色々ありました本当にありがとうございます。こんな子供の話を聞いてくれた上にしっかりとした対応をしていただき本当に感謝しております。私は、これから領地に帰り自国にエルフとの貿易を認めさせる為に色々根回しをしてきます。その為、本日をもって喫茶店ヴェーグル二号店は一時閉店いたします。それでは、行ってきます。また、遊びに来ますのでその時にはお店に来てくださいね。」

感謝の気持ちを込めてしっかりと相手に伝えた。
もちろん、営業スマイル付きだ。

「統領、そろそろ我々は行ってまいります。定期的に手紙を出して現状報告を致しますのでよろしくお願いします。」

ビダーシャルは、統領と何やらお仕事のお話らしい。
まあうちにくるのも仕事か。

「レイアよ、蛮族の事は嫌いだがお前の事はそうでもなかったぞ。万が一、領地を失ったらここに来るといい決して悪いようにはしない。」

テュリユークさんよ、うちの領地を勝手に潰さないでくれよ。
いや・・・まてよ・・・これってうちに来たらエルフの嫁さんをくれるということか!?

「その時は、お願いします。もつとも、まだまだ潰す気はありませんよ。後、私の嫁の件是非お願いしますよ。はっはははは。」

テュリユークも周りのエルフも陽気に笑ってくれた。

おっと、そろそろ出ない行けないね。

「そろそろ、出発しようと思います。ゼルエル！ビダーシャル、乗り心地は悪いだろうけどゼルエルの上に乗っかってくれない？飛龍とかいればそれでもいいんだけど、居ないよね？一応、座りやすいように調節はするから。」

そういう伝えるとビダーシャルがゼルエルの右肩に乗ってきた。当然、私は左肩に乗っている。

「あまり乗る気はしないが、この際仕方がない。」

ビダーシャルが文句を言いつつ乗ってきた。

こちらは乗りやすい様に肩を椅子のように触手をで変形しているというのに酷いぜ。

「あきらめ肝心さ。乗り物を用意していないビダーシャルが悪いんだからさ。では、改めて……皆様いつてきますー！」

皆にお別れのあいさつを言った。

「いつてらしゃい。」

「達者でな。」

「また来いよ変態。」

「またねーレイア君。」

エルフの人たちからもお別れのあいさつをもらい気持ちよく出発し

た。
双方のあいさつを終えてから初っ端から全力で領地を目指して飛びだした。

そして、『ネフテス』が見えなくなったあたりで方向転換をして『薔薇族』の集落に目的地を変更した。

もちろん、寝る為である・・・もはや眠気は限界に近いぜ。

それに、帰りに『薔薇族』の集落に寄ると男の約束もしたからね。幸いビダーシャルは、すでにお休み中だ。

ゼルエルで体をしっかりと固定してA・T・フィールドで風を遮断しているおかげで眠りやすいようだ。

それにしても・・・私が眠れないのをいい事に一人眠るとはいい度胸だ。

覚えてやがれ！次にお前が目覚めれば『薔薇族』の集落のと真ん中だ。

「ふふふふふふ」

思わず笑いだいそうになるが我慢我慢。

2時間後。

全力で移動したおかげで『薔薇族』の集落に到着し、我が喫茶店ヴェーグルの前に降り立った。

先ず第一声はこれしかない。

「『薔薇族』よ！私は帰ってきた。」

・・・

誰もいないから反応がない・・・悲しい。

さてさて、ばかやってないでアーベに挨拶に行かないとね。

離れて数日だったけど元気でやってるかな？

思いにふけているうちにアーベの家の到着した。

コンコン

「アーベいますかー？かわいいかわいいレイアが戻ってきたよー！

」

ドアをノックしながら中にいるであろうアーベに話しかけた。

間もなくして扉が開く作業着を着たアーベが中から出てきた。

相変わらずの格好ですな。

「自画自賛するのもいいが、そういうことを言っていると本気で喰
つちまうぜ。後、お前さんのゴーレムの肩に乗っかっている者は俺
へのお土産か？」

お土産って・・・あなたの知り合いのビダーシャルじゃないかよ。

後、その期待に満ちた目で私を見ないでくれ。

ビダーシャルを渡した日には流石に絶交されかねないから出来ない
よ。

「いやいやいや、お土産ってアーベと同じエルフじゃないかよ！そ
れにビダーシャルは、現在うちの領地のお客様だから手出しはさせ
ないからね。後、ただいまー！」

「・・・はははは、冗談に決まっているだろう。客人の客人に手

を出すほど落ちぶれていないさ。お前さんがここにいてるってことは、『ネフテス』での取引が無事に終わってことか？後、おかえり。」

絶対に冗談じゃなかったな。

「もちろんだとも！これで胸をはって実家に帰れるよ。今日は、出発時の約束を守りに来たんだ。それと昨晚『ネフテス』で一晩中飲み食いして眠いから一休みしようかと思ってね。」

「そういうことなら、うちと使うといい。なんせ無駄に広い家だからな部屋など余っているさ。」

アーベの眼が獲物を狙う目になっている。

そんな猛獣のいる巢で誰が安心して寝れるか！

「いやいや、アーベさんよ。そんな獲物を狙うような眼でこっちを見んでくれ。流石にビダーシャルもいるから喫茶店で一休みするよ。休んでいるときにまで尻を気にするのは疲れるしね。また、夜にでもうちに来てくれ。その時に『ネフテス』での話でもするよ。」

「そうか、わかった。その時には、皆も連れて行くさ。」

はああああ、眠い・・・。

アーベに別れを告げて早々に喫茶店の寝室に駆け込み、ベッドに倒れこんだ。

もちろんこの部屋にはベッドが2個あり、片方のベッドにビダーシャルを寝かせた。

酔い潰れたものを止めるために一応複数用意しているのだ。

さらば、私の意識・最後に部屋全体にA・T・フィールドの結果を展開して寝る。

Z Z Z Z Z Z

・
・
・
・
・

「起きろ。いつまで寝ているこのタコが！おきぬならばこの火石をお前の口の中に入れて爆発させるぞ」

ルア！

カーーツツ！

全力で起き上がりましたよ。

さすがに腹の中からあの爆発をくらっては胃もたれしそうだ。

「何をそんなに怒っているんだ。人が折角ベットまで運んであげたというのに何が不満だというのだ！！」

おっとビダーシャルの顔の血管が切れそうだ。

ちょっと誤解を解かないといけない・まあ誤解もくそもないがね。

「もちつけ、ビダーシャル。何をそんなに怒っているかわからんが、せつかくの美形の顔が台無しだぞ。」

ピクピク

ビダーシャルの血管が動いている。

ああ・・・こりやダメだな。

「ほほう、本当に何故私が怒っているか分からぬか・・・そうかそうか、ならば身をもって知るがよい。」

ここにきて先日の決闘の再戦ですか!?

いやー、お店が壊れるからやめてくれ。

「あの世で後悔しろ！粉砕!!」

キヤーーー。

ビダーシャルが叫ぶと部屋中に突風が吹き荒れた。

とっさの事であった為、一瞬気が緩み部屋を覆っていたA・T・フ
イルドの結界を解いてしまった。

ドバーーーーン。

喫茶店の二階が崩壊してしまったorz

その時を聞きつけて集落の人たちがやってきた。

その中にアーベが居るのを見つけた。

うほw頼もしい助っ人だ。

「アーベ、ビダーシャルが興奮して暴れているんだ。取り押さえて
くれ。このままでは、私のお店が全壊してしまうー!。」

見物人の人たちに助けを求めた。

「取り押さえる?別に、アレを喰ってしまったっても構わんのだろ。」

いやいやいやいや、喰っちゃだめだろう。

しかも、どこの英雄のセリフですか。

「一応、うちのお客様だからさ、喰わないであげて・・・今は。」

そうアーベに伝えた。

アーベはしぶしぶと了解し、早々に服を脱ぎ始めた。

そして、瞬く間にビダーシャルに襲いかかった。

すさまじい戦いだ。

爆発が起こったり、周りの木々が襲いかかってきたり環境破壊もいところだ。

それにしてもビダーシャルって結構近接戦も強いな。

徒手空拳もどきを使ってアーベをけん制してるよ。

戦い始めて5分が経過した辺りでビダーシャルがアーベに捕獲された。

統領相手に良く戦った方じゃない？

アーベが、捕獲したビダーシャルをつれて私の前にやってきた。

「ふうー。いい運動になったぜ。とりあえず、逃げ出さない様に縛り上げておいたぜ。」

ドサ。

ビダーシャルが地面に捨てられた。

良く目を凝らしてみると拘束しているのが私が貰ったマントと同じものだ・・・。

やっぱり、エルフ捕獲用マントだったんですね。

「いやー、ありがとう。ビダーシャルがいきなり暴れだすからどうしたものかと思ったよ。動いて腹もへったでしょ。久しぶりに料理をするから中に入ってよ。私は、ビダーシャルを説得してから行くからさ。」

「わかった。では、皆もなかに入って待つとしよう。後、手の空いたものに店でも修理させておく。」

毎度ながら見事な手際です。

さてさて、こちらも説得しないとイケないな。

「とりあえず、黙って連れてきて悪かった。まあ、少しばかり話を聞いて欲しいな・・・ほら、謝るからさ。」

それから、集落を出る際にアーベと約束した事や眠気が限界だったのでベットがある一番近い場所がここしかなかったとかビダーシャルがうちの客人だから手を出さない様にアーベをお願いしたことなどを丁寧に話した。

いやー、疲れた疲れた10分以上話してようやくビダーシャルが口をきいてくれたよ。

「釈然としないが納得はした。次は、同じことをやるようならばエルフの尊厳にかけてお前をアーベの生贄にしてやるからな。」

うほwすさまじく立腹だぜ。

「わかった。だから、今回の事は水に流そう。今日は、我慢してここに泊って明日領地に向けて旅立とう。『薔薇族』の人たちも飲み食いしてれば大人しいし意外といい人達だからさ、ビダーシャルもこの機会に誤解と解いてみたらいいかもよ。」

おっし、そろそろお店の中で勝手に腹をすかせた変態どもが暴れ始めることだから飯をつくらねば。

「さあさあ、ビダーシャルも中に入るよ。人生あきらめが肝心だぞ。」

「ビダーシャルを引きずりながら店内に突入だ。」

「さてさて、中に入る前に先ずはこの拘束具をほどけ！」

ちっ、気づいていたか。

このまま中に連れて行った方が面白そうだったが、仕方ない解いてあげるか。

ビダーシャルを解放してお店の中に入ってみれば、すでに店内のお酒を飲みつつ歌い始めていた。

「アツー！Boy蜜がアツー！Ohアツー！濃い蜜！美味え！閉ざされたアツー！（未開発）の 門が開いてグウーーーーッ！」

また、とてつもなく濃い歌を歌ってるな。

それにしても・・・この曲を普通歌うか・・・。

何やら聞いてほしそうなので質問してあげようかな。

「アーベ、これってもしかしなくても新曲？」

「ああそつだ。お前さんは、色々と歌えたからな・・・それで我々『薔薇族』も対抗してバリエーションを増やそうを思ってたな。今、皆で練習中だ。いい歌だろ。」

ビダーシャルが両手で耳を塞いでいる。
まあ気持ちわ分かるがね。

「まるで『薔薇族』の思いを綴ったような歌でいいんじゃない？」
当たり前障りのないほめ言葉を言っておく。

その後も明け方までアーベ達は歌い続け、私は料理をし続け、ビダーシャルは『薔薇族』の皆さまの接待？を受け続けた。

そして、『薔薇族』の皆さまを解散させたら早朝になってしまった。
あつれー！？確か私達ってここに休憩に来たはずなんだがなんと朝まで働いているんだらう。

「なあビダーシャル・・・何で私達ってここでまた徹夜してるんだらう？」

「まいどまいど、お前のせいだらうが！今回は、今すぐに出発はしないぞ！寝なおしてから昼に出発するからな。」

了解ですとも、私も眠いので寝るぜ。

さてさて、修理された二階につきベットになだれ込んだ。

「おやすみー」。 「」

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z。

5時間後。

「良く寝たぜ。」 「」

気分爽快だ。

やはり睡眠は人間にとって大事だと再認識した。
横を見てみるとあら？ビダーシャルがいない。

クンクン

何やら一階からイイにおいがするぜ。

まさか、ビダーシャルがここまで気の利いた事をできる男だとは思
ってなかったぜ。

早速、召し上がりに行かないとね。

「おはようービダーシャル。いやー、悪いね自分の分の食事まで作
ってもらっちゃって。」

ビダーシャルが優雅に食事をとっていた。

あれ？視力が低下したのかな・・・どう見ても一人分の食事しかない。

「何を言っている。そんなの無いにきまっているだろう。私は客人
だぞ。」

へ・・・今なんておっしゃいました？

いつも飯を作らされている私にたまには飯を作ってあげようという
心はないのか！？

鬼め！

「くっそ！アーベにビダーシャルが裸でアーベの事を待っているっ
て伝えてきてやる！食べ物の恨みは怖いんだぞ」

アーベ宅を目指して全速力だ。

食べ物の恨みは怖いんだぜ。

「だあああああ！怖いにもほどがあるわ！まてまて、ほらこれをやるからそれで我慢しろ」

ビダーシャルがこっちにパンを投げってきた。

まあ、これで今回は許してあげるとしよう。

まったくツンデレにも困ったものだぜ。

モシャモシャ

あっという間にパンを食べ終えた。

「さて、そろそろ『薔薇族』の皆に挨拶して再出発しよう。」

「ああそうだな。」

30分後。

アーベに出立のあいさつをしに行き、その足でそのまま集落の皆に挨拶してきた。

熱い抱擁を受けたり、唇を奪われそうになったり激しい攻防があったのはいうまでもない。

はあはあはあ。

「エルフの挨拶って過激だな。正直、挨拶周りがここまで疲れるものだとは思ってもみなかったぜ。前回は皆に集まってもらったから楽だった。」

ぜえぜえぜえ。

ビダーシャルも息を切らしながら答えてきた。

「エルフの挨拶が過激なのではない。『薔薇族』の挨拶が過激なのだ。間違ってもそこるところ誤解をするな。もはや『薔薇族』とエルフは別種族と思え。」

荷物の中から水筒をだし水分補給を行いつつ、今後も領地までのスケジュールを道筋をビダーシャルに説明した。

「まあ、5日もあれば領地につくから気長に旅をしていきましょう。ゼルエル！」

ゴーレムを出して肩に乗った。

「そうだな。私は野宿は嫌いだから夜は町の宿に泊まるぞ。」

ビダーシャルもゴーレムの肩に乗った。

はいはい注文が多い人ですね。

「了解。じゃあ、さっくと領地までぶっ飛ばすぜ。ゼルエル発進しますー。」

空高く飛びあがり領地目指して移動を開始した。

三日後の日暮れごろ。

やっと、領地に入りましたよ。

毎度毎度言っけどここまで長かった。

なんといつてもビターシャルが宿に泊まるたびに

「飯がまずい！女将を呼べ。」

といつて暴れるんだぜ。そのたびに私が料理を作って食べさせていたんだよ。

「レイアよ、今私になにやら良からぬ気配を感じたのだが何か言いたいことでもあるのか？」

鋭いな……。

「いや、何も無いよ。それより、今丁度領地に入ったから後1時間もすれば屋敷に着くから今日はおいしい晩飯が食べれると思つよ。」

久しぶりの家庭での食事だ。

短かったけど密度は、ひどく濃かった。

毎日毎日問題が起きては対応をしての繰り返しだった。

「期待している。宿の飯は、味付けが濃すぎてダメだ。」

ですよね。

まったく、成人病で早死にしちゃうよ。

おっと、そんなことを話していると遠くに懐かしの我が家が見えてきた。

「あれが、私の屋敷だよ。どう？小さいけどまあまあ風情があるでしょ。」

夕陽の丘にそびえ立つ質素な屋敷がみえた。

「あれがそうか・・・思ってたより小さいな。まあド派手な屋敷よりはましだな。」

はっははははは、最下位貴族の屋敷なんてみんなあんなものですよ。これでも、私と父上が増改築して大きくしたんですよ。後、うちは税金で儲けた分を公共事業で結構使っているから家に入るお金なんてスズメの涙程度なんですよ。

「とりあえずほめ言葉として受け取っておくよ。これからエルフと取引でガンガン稼いで家も領地も大きくしてみせるよ。」

「そうか、まあ頑張れ。」

酷いな・・・もっと応援してくれてもいいじゃないか。ビダーシャルの性格から考えてこんなものかな。

そして、屋敷の上空に到着し、そのままゆっくりと庭に着地した。

「ふふふふふ、帰ってきた！帰ってきたぞ！」

私が一人で馬鹿をやっていると家から両親と執事とメイド一同が出てきて私達を出迎えてくれた。

私は早速ゼルエルから下りて母上とメイドの熱い抱擁を受けるべく駆けだした。

かわいい貴方達の息子が帰ってきましたよー！。

「ただい「エア・ハンマー！」ぐふう。」

ミシミシ

体が地面にめり込んだ。

ケホケホ、埃っぽいよ。

「痛いではありませんか母上。いつから母上は、かわいい息子の挨拶に対して魔法で返事をするような人になったのですか？」

めり込んだ地面から這い出しながら母上に言った。

しかし・・・A・T・フィールドあるのになしてダメージをくらうんだ。

「あらレイアちゃん、そんな事ないわ。私は、一か月以上も音沙汰がなかったかわいい息子に対して少しお仕置きをしただけよ。」

「レイアよ、こればかりはお前が悪い。私達がどれだけ心配したと思う。母の愛だと思って素直にお仕置きされておきなさい。」

母の愛ってA・T・フィールドを貫通するほど凄いな・・・、流石私を生んだだけの事はあるな。

しかし、心配掛けたのはさすがに悪かったと思う。

何分、濃い日々だったせいで実家の事なんて殆ど記憶の奥底にいつちやってたからね。

「一か月以上も音沙汰なくてごめんなさい。不肖レイア、無事に交渉を終えて戻りました。ただいま」

「おかえり」

お帰りの一言で涙が出そうになった。

やつは、ただいまを言える人って大事だよな。
周りにいてメイド達もハンカチで目元を覆っている。
そんなに感動してくれると私も頑張ったかいがあったよ。

チヨンチヨン

私の肩を突いてくるビダーシャルがいた。
この感動的なシーン中、空気を読まないとは・・・KYエルフか。
もう少し待っていなさいって、後でちゃんと紹介するから。

「いい加減、私を紹介してくれないか？流石に、扱いが空気みたいで困るのだが・・・」

ビダーシャルが痺れを切らして催促をしてきたのでこちらへんで皆に紹介してあげるかな。

まあ紹介するといっても、両親含めて10人程度しかいないよね。

「ゴホン・・・皆さん注目！皆も気付いていると思いますが、公爵家の次女を治療すべくエルフの方にお越しいただきました。なお、ヴェーグル家の客人としてお迎えするのでメイドの皆さま失礼のないようにお願いします。貴方がたもプロとして、エルフということは忘れ、一人の客人としてお世話をするよう心がけてください。」

ざわざわ・・・

（ビダーシャルビダーシャル、ほらお前さんから自己紹介でもしてくれ。）

「『ネフテス』で「老評議会」の議員をやっているビダーシャルだ。よろしく頼む。」

堅いぜ堅すぎるぜ。

「相変わらず固いねビダーシャル。まあ、それは置いておいてビダーシャルは、食事にはうるさいから腕を振るった料理を用意してね。道中の宿で飯がまずいと女将を呼べとか叫びだす位だからね。久しぶりのメイドの皆の料理を期待してるよ。」

「「「わかりました。「「「

メイド一同が声を合わせて答えてくれた。

早々に屋敷に戻っていき、晩飯の準備に取り掛かるようだ。

「ビダーシャル殿、ようこそヴェーグル家へ。何も無い辺境ですが歓迎しますぞ。まあ、色々と聞きたいこともありますが、食事でもしながら話し合しましょう。」

父上がビダーシャルを客人として迎えてくれた。

ほっとしたぜ。

さてさて母上の方はどうか？

うーん、なにやらビダーシャルに熱い視線を送っている・・・まさか！いくら美形だからと言って駄目だよ母上。

「文献の載っていたエルフと大分違うのね。もっと、がっちりとした体格かと思っただわ。それはそうと、うちの息子がご迷惑をお掛けしました。」

おいおい、文献に載ってたエルフって・・・

ビダーシャルの方を見たら、すかさず目をそらしてきた。

「はははは、所詮は文献です。気になさるほどの事でもありませんよ。短い間ですが、お世話になります。」

その夜は、屋敷の人皆で楽しく晩餐会が行われた。

その際には、もちろん私の旅の話して道中でも苦労話やエルフの集落での生活の事を話し楽しい食事の時間を終えた。

こうして、レイアの帰省一日目は終了です。

主人公は、実家に到着する。(後書き)

次回は、次女を治療しようと思います。

短い夏休みが終わり、明日からまたリアルが忙しくなるため更新が遅くなるかも知れません。

主人公は、治療を完遂した。（前書き）

ご愛読ありがとうございます。

今回の話は、ちょっと黒い部分が多く出ている為原作の雰囲気が好きの方はごめんなさい。

主人公は、治療を完遂した。

こんにちはレイアです。

今私は非常に悩んでおります。

父上と母上が公爵とかわした約束を加えて今後どのように行動すべきか検討中です。

ちなみに、公爵家との約束事は以下の三つだ。

- 一つ、カトレアの治療を行う際は、公爵家の管理下で行う。
- 二つ、カトレアが完治しない限りエルフとの貿易には協力しない。
- 三つ、期間は本日より二年間とする。

一つ目は、医者がエルフだからということで安全の為、警備万全の自宅で治療をしるということだろう。

二つ目が問題だな。

三つ目は、現時点で余裕でクリアしているので問題はない。

二つ目が問題なのは、カトレア嬢の治療を行い公爵が貿易に協力したとしても国が認めない可能性がある。

そうなった際は、骨折り損のくたびれ儲けだ。

やはり、一時的に完治させて公爵には、今後病気を再発させない為の魔法薬をエルフがもっている事にして貿易が開始されない限り渡せないと言われたと嘘の情報を流そうかな。そして、貿易の正式な許可が降りた際には、ビダーシャルが持ってきた特製の魔法薬で治してあげよう。

それまでは、ビダーシャルにお願いして一時的に健康体を取り戻す魔法薬を作ってもらい提供し続けよう。

万が一、国が認めない場合は、カトリア嬢には悪いがそのまま病気のままで居てもらおうとしよう。

今後、体調が急変でもしたら公爵が力づくで貿易を認めさせるはずだ。

だって公爵も親だもんね子供が危篤になればどんな手も使ってくれるはずだ。

ニヤニヤ

早速、皆を集めて会議だ。

20分後。

「第二回ヴェーグル家家族会議を開催します。」

現在食堂には、父上、母上、私、ビダーシャルが居ます。

今回は、メイドさん達も居たけど今回の話の内容は少々汚いので遠慮していただいた。

「私は、家族ではないのだが・・・」

ビダーシャルが何かいってるけど聞こえないー。

「レイアよ。また、碌でもない事を考えているようだな。」

流石私の父上、よくわかっていらっしやる。

「碌でもない事とは、酷いです。私は常に我が家の繁栄と領民の為に思っただけの行動をしているのです。その為に多少の見知らぬ大貴族に

「迷惑がかかろうが些細な問題です。」

まあ、ぶっちゃけ公爵家だけだね。

「それで、レイアちゃん。今度はどんなこと考えたのかしら？」

よくぞ聞いて切れました母上。

これで話が進みますよ。

ここで先程私が考えた次女の治療の一件について話した。

私が皆に丁寧に説明をして言った。

10分後。

あら？

皆さんの反応が悪いな。

もしかして、この案に穴があった？

こういうときは皆の力でその穴を埋めるべく解決策を出すんですよ。

ほらほら、しっかりと発言してくれよー。

皆さんの目がまるで汚い豚を見るような眼になっている。

視線が刺さるほど痛い。

「一体、今までどういう教育を受けてきたんだ。人として恥ずかしくないのか？」

「レイアよ・・・流石のわしもフォローしきれんぞ。」

「ごめんねレイアちゃん。私達の教育が悪いせいでそんなゆがんだ

性格になっちゃったのね。ママは悲しいわ。」

なんてこった！これじゃあまるで私が悪役みたいじゃないか。無い知恵を絞ってこれ以上ない作戦を考えたというのにorz 私の味方は誰もいなかったのね。

ああ、この場にロートちゃんがいてくれればと激しく後悔した。

ビダーシャルに視線を合わせて、助けを求めた。

こういうとき友達なら助けてくれるよね^^

目は口ほどに物を言うらしい、ビダーシャルがやれやれといった様子私の助けに入った。

「まあ、レイアの案も別に悪いというわけではない。ただ、そんな汚い手を使わずとも公爵が約束を守り、国に貿易を認めさせるか確かめるすべはある。」

おおー、流石ビダーシャル様だ。

貴方に後光がさしているのがみえる。

「流石ビダーシャルだ。だてに議員をやっているわけじゃないね。それでどんな方法なの？」

とりあえず、ここは褒めて？おこつ。

「まったく現金なやつだ。エルフには、相手の嘘を見抜く魔法がある。それを使い公爵に病気が完治した際は命に代えても国に貿易に認めさせるか？と問えばいいのだ。どうやら、その顔を見る限り忘れていたようだな。」

ははははは・・・忘れてた。
そういえば、エルフの人たちに何度も使われてたよ。

「はっはは、過ぎたことは気にしたら駄目さ。ってことで、今出たビダーシャルの案を採用し、治療前に公爵に確認取る方向で行こうと思います。後、万が一国が認めない場合は、うちが取引を行うのではなく公爵家が表立って勝手に取引をしてもらうことを約束してもらおう。もちろん裏からは、全部うちが仕切ってさ。流石に公爵家なら国もあまり文句はいえまい。」

こんなところで問題は全部解決かな？

「レイアちゃん、もし公爵が約束を守らない気だったらどうするの？」

正直、プライドの高そうな公爵が約束を反故にするとは思えないけど・・・そうなった際にはどうしようかな。

「うーん、正直あんまり考えてないんだ。公爵ってプライドとか高そうだから約束とか反故にしそうにないしね。万が一、守らない気だったら公爵家と戦争か・・・あるいはカトレア嬢の病状を悪化させて強引に取引に持ち込むとか・・・色々手は考えいるよ。」

父上も母上も呆れてご様子だ。

「レイアよ。せめて常識をわきまえた行動をとるように、後はお前の好きにきなさい。」

「ありがとうございます父上。では、早速ですが公爵家に治療を行う旨の手紙を出しては頂けませんか？」

凄く嫌そうな顔をしていらっしやる。

「だめよレイアちゃん。お父さんは、文才がないのよ。この間の手紙だって酷かったのよ。」

一体何を書いているんですか父上。

おっしココは息子が一肌脱ぎますよ。

「分かりました父上母上。今回は、この件の責任者である私が公爵家に手紙を書きたいと思います。」ご安心ください。」

それでも文才はあると思っっている方だ。

1週間後。

庭でビダーシャルと魔法の訓練をしていると父の執事が近付いてきた。

「レイア様、ラ・ヴァリエール公爵よりお返事がまいりました。後、門のところ馬車がきております。いかがいたしましたでしょうか？」

お、やっと来ましたか。

「ありがとうございます。とりあえず馬車は敷地に入れていいよ。後、従者の方にも家で休んで貰って。」

私がお礼を言うと執事は、早々に戻って言った。さてさて、お手紙にはなんて書いてあるのかなー。

なになに・・・ふむふむ・・・ほむほむ。

「何を一人で馬鹿なことをやっている。で、なんて書いてあるんだ？要点をつまんで言え。」

そんなに知りたかい？

あせらずとも普通に教えてあげるさ。

「まあ、そんなに慌てないでよ。まずは父上と母上も一緒に説明したいからさ。」

そうビダーシャルに説明すると納得したようだ。

あ、門のところから馬車が入ってきた。

随分と豪華だな・・・あれだけでうちの年収分くらいあるんじゃない？ってくらいだ。

まっとう、金はあるところにはあるんだよな・・・。

一緒に入ってきた従者の人はどんな子かなー。

公爵家まで四日程度掛るんだし、かわいい子がいいな。

どれどれ・・・。。。。。

なんだ、胸がないピンク色のブロンドの髪をした性格がきつそうなオバさんかよ・・・。

・・・
・・・
・・・

はあ、そういうことですか。

「レイアよ。気づいたか？」

言われずとも気付きましたよビダーシャル。
もつとも、魔法的要因では無くてあれの見た目でね。

「もちろんだとも、まさか公爵家がこんな手を使ってくるなんてね。
早いところ皆を集めて会議を開始だ。」

30分後。

父上、母上、ビダーシャル、私が食堂にそろったところで食堂全体
にA・T・フィールドの結界を張った。

「さてさて、ここからの話はほかに聞かれてはまずいので外に声や
音が漏れない様に私の力で結界を張らせていただきました。」

まあ、父上も母上も私の力に気づいているようだし隠す必要はない
よね。

「一体どういうことだ？別にアリアがサイレントをするか。ビダー
シャル殿に魔法を使ってもらって外部に漏れないようにすればよか
ったのではないか？」

それもありだけど、相手はトリステインの風のスクウェアとして名
高い『烈風』の二つ名を持つ人だからね。
念には念を入れての対策だ。

「実はですね、我が領地に『烈風』の二つ名をもつ者が忍び込んでおります。その為、念には念をいれて私が外に音が漏れない様にさせていただきました。私が持つ異能の力はすでにご存じだと思います、そのことについては説明を割愛しますね。」

父上母上が共にうなずいた。

何も言わなくても分かってくれるそんな両親が私は大好きだよ。

「では、本題に入ります。まあ、長い話は面倒なので簡潔に言っと従者に化けている者が『烈風』のカリンことラ・ヴァリエール公爵夫人です。」

ビダーシャルは、無反応だが両親ともに驚いているようだ。

そんなに、親の世代では恐怖の代名詞になっているのだろうか？

「なんと！ただ者ではないと思っていたが、公爵夫人はそんな化け物だったのか……。しかし、そうなる目的は一つだな。どうするつもりだ。」

まあ、十中八九魔法薬だろうね。

でも、簡単には渡さんぞ。

「さすがに、この屋敷で事を起こすつもりは無いでしょう。なんせこの屋敷には、トライアングルが二名、ラインが一名、エルフが一名もいるんです。それに、あの従者は偏在です。本体は、別の場所で待機しているでしょうね。公爵家への道中で我々を亡き者にして魔法薬だけ奪う気でしょうね。所詮下級貴族が何人減ろうが公爵には関係ないって事のようだしね。」

まあ、父上と母上が協力すれば偏在程度ならば退けられるだろう。もつとも、本人が来た場合はさすがに無理だろうね。手足の一本は奪い取るだろうがそれまでだろう。

「なるほどね。でも、レイアちゃん、公爵夫人はどうしてこんな行動に出たの？このまま、私達との約束を守れば無事にカトレア嬢を治療出来るのに。」

「予想でしかないんだけど……。やっぱり、エルフに治療されたとなれば色々と噂も立つだろうし、それに加えてエルフの治療を受けた娘を嫁に貰ってくれる人がいなくなるからじゃない？まあ、こればかりはどんな思惑があるかは当人たちに聞いてみたいと分からないな。」

まあ、私の予想はこんなものだ。

しかし、ここまで真っ向から裏切られたんじゃ、こちらもそれ相応の対応をしないとね。どうしてくれようかなー！。

ニタニタ。

「相変わらず悪だくみをしているな。まあ、お前の事だ既に考えは纏まっているのだろう。売られた喧嘩を買わぬヤツでもないだろう？」

当然だ！ビダーシャル。

何倍にもして返してやるわ。

「当然だビダーシャル。私の尊厳にかけて公爵家のやつらを尻の毛まで抜いて鼻血もでない様にしてくれるわ。すぐに出発するぞ！！」

ビダーシャル、大急ぎで用意して欲しい物があるんだけど。」

「あまり乗る気はないが、今回ばかりは私も素直に協力してやろう。」

ビダーシャルも長いこと一緒にいたおかげで私の気持ち分かるようだ。

よい友をもった。

ふ、公爵め・・・今に見ている！

「父上母上、大変申し訳りませんが。公爵からの手紙では、私とエルフの二人で来いと書かれており残念ではありますが領地の守備の方お願いします。」

父上母上が席から立ち上がった。

「なにをいうかレイアよ。そのまま行けば確実に公爵家の手の者により襲撃を受けるぞ！」

「そうよレイアちゃん。私達と一緒にの方が幾分かましになるわ。これでもママ達強いだよ。」

心配してくれてありがとう。

でも、父上母上がいっても逆に戦いにくくなりそうだからごめんね。後、一応屋敷のメイド達が狙われない様に守ってほしいからね。

「ごめんなさい父上母上。正直に申し上げるとビダーシャル並の実力がないと公爵夫妻相手には足手まといです。それに、万が一屋敷を襲われた際にメイジがいなければ対応できません。ですから、領地の方をお願いします。」

父上も母上も納得はいかないが理解はしているようだ。

「分かったわ、ママはレイアちゃんを信じます。だから、必ず無事に帰ってらっしゃい。」

最初の折れたのは母上だった。

「はぁー、分かった。こここの事は任せて行って来い。そして我が家の意地を見せてやれ！」

続いて父上も諦めたようだ。

おうよ、我が家の意地をみせてくるぞ！
見てがやれ公爵！

「いい両親だな。大事にしるよレイア」

ビダーシャルが気恥しそうにいった。

「あぁ、自慢の両親さ。」

こうして、公爵家への鬱憤を晴らすべく、私とビダーシャルは領地を旅立った。

三日後。

何事もなく公爵領にはいった。

ここまでは、基本大きな町で寝泊りをして移動をしてきた。

従者をしている公爵夫人はとくだんあやしい行動を起こさなかった。まあ、カトレア嬢を治療できるのかとか魔法薬は持ってきたのかとかは聞かれたので素直に答えてあげたさ。おまけに魔法薬の瓶を見せてあげてビダーシャルが懐にしまうところまで見せてあげましたよ。

これで餌まきは終了だ。

さあ、きやがれ！

「それにしても公爵領って広いですよ。領地に入って半日もかかるなんてうちじゃ考えられませんよ。」

従者に話しかけた。

「いえいえ、そんなことはございませんよ。公爵領ともなればこのくらい当たり前です。」

当たり障りのない会話を行った。

トストス

その瞬間弓矢が飛んできて馬の脳天を射抜いた。馬が倒れたせいで馬車全体のバランスが崩れて横転してしまった。私とビダーシャルはすかさず外に飛び出した。

「盗賊です。」

従者が叫んだ。

ふ、何が盗賊だお前ら実家の私兵だろう。
それにしても多いな・・50人はいるぞ。
非常に統率が取れた動きをしている。

足を止めてを遠距離から弓でけん制し背後には魔法使いが控えている。

剣を携えた者たちが10人ほど近付いてきた。

「ビダーシャル。ここは、お前さんの出番じゃないかい？」

そうそう、当初の作戦通りをお願いしますよ。

きっと体制が不利になれば私を人質に使うはずだ。

「ふ、言われるまでもない。エルフが蛮族の恐怖の対象になっている由縁を教えてやろう。」

かっこいいぜビダーシャル！

早々に駆けだしていき、ゴーレムと偏在を出しながら公爵家の私兵達を駆逐していった。

ドドドドーン。

カーンカーン。

うはー、3分程度でさっきまでいた人数の7割戦闘不能してるよ。
まさにエルフ無双だ。

しかも半分は何もしないでカウンターで跳ね返すだけで相手が自滅してる。

そして残りはほぼ、魔法使いだけになった。

多少残っていた私兵も相手がエルフと気付くや否や脱兎のごとく逃

げ出した。

まあ、そんなものだろうよ。

「圧倒的ですね。あのエルフの方は、一体何者ですか？」

従者が私に聞いてきた。

「何者といわれてもエルフですよ。ただ、実力はエルフの中でも上位に位置する人物です。納得していただけましたか？後・・・お仲間さんがそろそろ全滅しそうです。手伝わなくていいのですか？」

まっすぐに従者の眼を見る。

・
・
・

「気づいていながらノコノコ来るなんて、頭悪いんじゃない？」

その言葉そっ 繰り返すぜ。

「貴方ほどではありませんよ。」

従者が懐に手を伸ばした。

早い！くさつても歴戦の猛者が、杖をもった瞬間から詠唱を始めている。

私に振り向けた瞬間に魔法を放つ気のような。

だが・甘い！

パッチン！

その瞬間、従者を火ダルマにした。

幾ら詠唱や予備動作が早かろうとこちらは詠唱など不要のマジックアイテムを持っているのさ、速さの勝負なの鼻からお前に勝ち目はないのさ。

「私のフレイム・ピラーの味はいかがですか。盗賊さん」

消えていった偏在に対して言葉をかけた。

「ええ、なかなかだわ。まさか、私の偏在を倒すなんて少々侮っていたわ。だけど、これでチェックメイト」

背後から気配を消して近づいてきた盗賊が杖を私の首筋に当ててきた。

どうやらブレイドをかけているようだ。

首に杖を当てられたまま、ビダーシャルが戦っている付近まで連れ出された。

「そこまでよ。この子を無事に返してほしかったら、その懐の物を渡しなさい」

ビダーシャルが戦闘をやめてこちらを見てきた。

「人質を取るなど蛮族らしい行動だ。お前たち、私達が公爵家の客

人であることを知っての行いか？」

いいぞビダーシャル、その調子だ。

「それがどうしました。」

ビダーシャルが右首をかいた。

なるほど、知っていてい襲ってきたか。まあ公爵夫人だし当たり前だけだね。

これは、嘘発見魔法で言葉を確かめる際に使おうと決めた合図だ。ちなみに右首をかいた「真実、左首をかいた」嘘という簡単な合図にしている。

「いや、なんでもないさ。それで、お前は私の懐の物を渡せば無事に私達を見逃すということかな？」

「もちろんだ。無用な殺しはやりません。」

ビダーシャルが左首をかいた。

えげつね・・・物を奪った瞬間に殺す気ですか。

「しかし、風のスクエアがなぜ盗賊をしている、それほどの腕があればどこでも雇い先はあるだろう？」

「あまり時間稼ぎは関心しませんね。早いところ懐の物を渡すかこの子を殺されるか選びなさい。」

せっかちな人だな。

「まあ、そう早まるな。これで最後の質問だ。お前は本物か？」

「そうだ。それがどうした？」

ビダーシャルが右首をかいた。

よくやった！

「そうか、じゃあ受け取れ。」

ホイ

ビダーシャルが空高くに魔法薬が入った瓶を投げた。

実は中身は、無色無臭の劇薬に入れ替えているけどね。

どんな薬かといえばタバサの母親に使われたものと同じの物さ。

これはビダーシャルが一晩で用意してくれました。

まったくジヨバンニも真つ青だぜ。

「どこに投げてんのよ。」

公爵夫人が私を蹴飛ばし、瓶をキャッチすべくフライで空に舞い上がった。

馬鹿め！

「ゼルエル！」

私は、すかさずゴーレムを出した。

一瞬、公爵夫人がこちらを見たがゴーレムのサイズや私のメイジとしての能力から自分の敵にはならないと判断し魔法薬の方を優先した。

そして、公爵夫人が瓶を右手を大きく伸ばしキャッチした。
ナイスキャッチ公爵夫人。

触手を鋭く構え更に鋭くすべくA・T・フィールドを纏わせた。
私は、優しいから殺しはしないよ。
ただどね、片腕もらつてくよ。

「魔法薬は、くれてやる、だが片腕はもらつていくぞ！この盗賊め」
ゼルエルの鋭利な触手が公爵の左腕目がけて空を駆けてた。

スパ・ボトリ。

そしてしばらくして公爵夫人の左腕が地面に落ちた。
切れ味がいいところなるのか。

「ギャーーーーー」

女性とは思えないほどの悲鳴が聞こえた。

ああ・・気分が悪い。

悲鳴を上げながらも右手の魔法薬をしつかりと握っていた。

すぐさま、残っていたメイジが駆け付けてきた。

おっと、公爵夫人の左腕は確保させないぞ！

ゼルエルの触手を伸ばし、すぐさま確保した。

「早く治療をしなければまずい。お前たち命に代えてもこの場を抑える。私は、こ・・アジトに戻り治療をする。」

そういうと盗賊メイジは、グリフォンに乗り公爵夫人をつれて大急ぎで公爵家の方に駆けて行った。

おいおい、お前ら正体を隠す気ないのか・・・。

そして、他の奴らには命に代えても私達を殺せと・・・まあ殺されてあげないけどね。

「ねー、ビダーシャル。どっちが多く倒せるか勝負しない？負けた方が明日の朝食当番だ。」

「いいだろう、だが私は先程倒した奴らもカウントさせてもらうぞ！それではスタートだ。」

え！

ちよっと、さっき倒した奴らって既に30人以上倒してるでしょ。

残りの人数全部倒しても私の負けじゃないか。

「きたないぞー！！」

「勝負とは非情なものだ。」

くっそ！この理不尽な恨みを盗賊もとい公爵の私兵にぶつけてやるぜ。

「殖装！この『纏鎧』てんがいのレイアがこれよりお前たちを断罪する！」

バコバコバキバキ

ゴギゴキ。

ああ人間の骨が折れる音って嫌な音だ。

3分後。

カッププラーメンができる時間で残っていたメイジ達を一掃しました。もちろん誰も殺してないぜ。

ただ、全治三カ月程度の怪我は負ってもらってるけどね。

「とりあえず片づいたね。これからどうしようか？」

ビダーシャルに質問してみる。

「そうだな、目的地の公爵家に向かうのもいいが馬がないと遠いかな。まずは、ひとつ前の街に戻って一晩休んでから馬を手配し移動するとしてよう」

「そうだね。後、この腕を新鮮な状態を保っていられるような魔法をお願い。」

そういつとビダーシャルが魔法をかけてくれた。

半分冗談で言ったんだが、そんな魔法あるんだ・・・流石エルフ。

「じゃあ、移動するからいつも通り肩に乗って。」

そういうとビダーシャルも慣れた様子で乗ってきた。

では、さっそく街に移動しますよ。

20分後。

前の街に到着し、宿に入った。

「レイアよ。それにあの腕は何に使うのだ？」

ビダーシャルが疑問を私に投げかけた。

「よい質問です。ゴホン・・・公爵家で最近たまたま腕を失っている夫人がいて、同じく私達を最近たまたま襲った盗賊から奪い取った腕をつけてあげようと持ちかけて多額な治療費を奪い取る！まあ、それが無理なら普通に取引材料に使うことにするよ。」

「相変わらずえげつない・・・。お前がエルフの味方で本当によかったと常々思うぞ。」

ははははは、褒め言葉として受け取っておこう。
なんせ、先に裏切ったのはあっちだ。

世の中には目には目を歯には歯をって言葉があるのさ。
それを体現したままでだ。

「褒め言葉だと思って受け取っておくよ。後、そろそろ晩飯だけどさ・・・今日は女将をよべ！とか言わんでくれよ。いつもいつも恥ずかしいんだからさ。」

まったく、いい大人なんだから多少の味くらい我慢してほしいところだ。

「善処しよう。」

そのまま、腹いっぱい飯を食べその日はそのまま熟睡した。

翌日の早朝。

コンコン。

「失礼します。レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル殿とビダーシャル殿とお見受けいたします。私は、公爵家に使える執事に者です。朝早くから大変申し訳ありませんが、公爵様がお呼びの為、至急お屋敷まで来ていただきたいと思います。」

朝っぱらからドアの外でうるさいな・・・。
まだ眠いぞ。

「はいはい、着替えてからしばらくそこで待っていてくれ。」

そついいビダーシャルを起こしてお互いに着替える。
着替え終わりドアをあけて執事を迎え入れた。

「そんなに慌てずとも今日の夕方にはそつちに向かう予定だったんだけどさ。」

執事に私達の予定を伝えた。

「大変申し訳ありません。しかし、今すぐに来てほしいとの公爵様 たつてのご希望でしてなにとぞご理解ください。」

しつこいな・・・、まだ朝食も食べてないんだぞ！

「まあ、それなら仕方ないな。ところでさ公爵家から迎えに来てもらった馬車なんだけど従者と一緒に盗賊にやられちゃってさこの先に捨ててきたんだけど問題ないよね？」

「こちらで確認して、すでに回収すべく人材を派遣済みです。盗賊の件は誠に申し訳ありません。ここは、比較的治安はよいほうで盗賊などはここ数年出たことがなかったのですが・・・一体どこの流れ者でしょうね。」

公爵家のおひざ元だけあつて治安は良いと・・・。

だったら、あれは何だったんだろうね。

ビダーシャルを見ると、左首をかいた。

やっぱり、そうか・・・執事なのだから知っていて当然か。

「で、今回は護衛とか付けてくれるのかな？また襲撃とか受けるのは嫌だからね。」

「もちろんでございます。公爵家に仕える選りすぐりを連れてまいりました。道中は彼らが守ってくれます。」

選りすぐり・・・昨日フルボッコにした彼らじゃないよね？

ビダーシャルを見ると、右首をかいた。

「そうかならば仕方ない。ただし、朝食を食べないとビダーシャルの機嫌が悪くなるからその位は我慢してくれよ。こっちそれなりの都合というものがるのだから」

執事は、しばらく考えしつぶと了承した。

さて、ビダーシャルの朝飯でも作ってあげるかな。

こんなこともあるつかと領地から醤油と味噌だけは持参してきたのだ。

飯をゆっくり食べながら今後の対策で練るとしよう。

ビダーシャルと朝食を食べつつ今後の方針を話してから、公爵家に向かう馬車へと乗った。
相手がどう出るか楽しみだ。

3時間後。

馬鹿でけー！。

何から何までスケールが違うな。
流石は大貴族様様ですな。

おっと開門された。

中に入ってみると、泉がある・・・家に中に泉とかどんだけだよ。
後、何あの豪邸・・・もはや笑うしかできねー。
あれと比べるとうちって犬小屋みたいなLvだな。

おっとあほなことを考えているうちに家の門の前まで到着した。
吉と出るか凶と出るか楽しみだ。

お出迎えにイケメソ執事が来た。

「ようこそ公爵家へ、早速ですが旦那様がお呼びです。どうぞこちらへ。」

はいはい、どこまでも付いていきますよ。

「ありがとうございます。」

執事についていくこと数分・・・公爵がいるであろう部屋に前に来た。

コンコン

「旦那様、レイア様とビダーシャル様をお連れいたしました。」

「入れ。」

執事の丁寧な対応に対して中から威厳たつぷりの声が聞こえた。

さてさてご対面だ。

執事がドアを開けてくれたのでそのまま中に入った。

人間挨拶が大事だね。

「お初にお目にかかります。レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルと申します。以後お見知り置きを」

「ビダーシャルだ」

お互い挨拶を終えて公爵の反応を待った。

「よく来られた。私が公爵だ。早速だが、カトレアの治療をしてもらおう。」

着て早々、こちらに命令ですか。

「もちろんです。しかし、その前に何点か確認したいことがあるのですがよろしいですか？」

公爵がイライラしている様子だ。

どうやら、あの魔法薬を使ったかな？

「時間が惜しいが、言ってみる？」

「ありがとうございます。では、本題からカトレア様が完治した際には国にエルフとの貿易を認めさせつゝ為に尽力していただけるといふのは本当ですか？後、言いにくいのですが、万が一公爵の力不足で国がエルフとの貿易を認めなかった場合は、私達は治療に対する対価はどの様にお考えでしょうか？」

いきなり本題を聞くことにするかな。

さて、お前さんの本音を聞かせてもらつぞ。

「カトレアの完治した際には、当然約束通り国に貿易を認めさせるように働きかけるつもりだ。ただ、お前が心配しているように万が一の場合もある。その際は、それ相応の報酬を用意してやるつもりだ。」

ほほう・・・。

ビダーシャルが前半の話の際には左首をかき、後半の話には右首をかいた。

要するに最初からお金で解決する気だったということか。

やってくれるねこの腐れ外道が！

「なるほど、そこまで考えていたのだとは私もうれしい限りです。それとは別件ですが、公爵夫人はどちらに？折角の機会ですし、お会いしたかったです・・・。」

ピクピク

公爵の眉間動いている。

ふっ、そりゃそうだろうね。

何と言つても妻の腕を切断した張本人が目の前にいるのだ。

「お前が気にすることではない。今、妻は体調がすぐれない為休んでいるのだ。カトレアの治療が完了したら会うこともあるだろう。」

そうかいそうかい。

そりゃ、片腕じゃ体調の優れないよね。

「そうですね、それは残念ですね。それはそうと先日ここに来る途中に凄腕に盗賊に襲われましてな・・・ビダーシャルと共に命からがら撃退したのですよ。」

ニヤニヤ。

上から物を言うのって楽しいな！。

公爵の顔と目つきが悪くなった。

「だからどうした？そんなことは、今は関係ない話だ。さつさとカトレアに治療にはいれ。」

口調が更に命令調になってきた。

「まあ、落ち着いてください公爵様。意外と大事な話かもしれませんよ。まあ、話を続けますと・・・盗賊の親玉は、どこで手に入れた情報かは分かりませんが、我々が公爵次女を治療するための魔法薬を持っている事を知っておりそれを狙っていた模様ですね。まあ、奪い取って売りさばけば一財産になりそうな品ですからねある意味狙われて当然でした。しかし、そういった時の為に偽物を用意していたんですよ。ちなみに、偽物は人の精神を破壊する程劇薬を

ね。はっはははは。」「

流石の公爵も切れそうだぜ。

握りこぶしから血が滲んできてるのが見ていて分かるぞ。

「それだけか？」

殺気を含んだ声で私に言ってきた。

「いえいえ、もちろん続きがあります。それで、盗賊に襲われたいに私が人質に取られましてね。その際にビダーシャルが機転を利かせて偽物の薬と私を交換したんですよ。盗賊は、魔法薬が偽物とも知らず大事に奪っていきましたよ。もちろん、魔法薬の代金として盗賊の片腕をもらいましたけどね。あの盗賊も可哀そうですね、折角奪った薬は偽物で更に片腕まで失うんですから。おまけに盗んだ魔法薬を誰かに使った日には眼もらてられませんか。そう思いませんか？こ・う・しゃ・く・さ・ま。」

バツ！

私が言葉を言い終えた瞬間に公爵が懐の杖を取り出し私に向けた。行動が早いな、しかし想定済みだぜ。

公爵の行動と同時に私は足元にあった要していあった荷物を公爵の前にだして魔法の盾よけにした。

私が盾よけにしたものをみて公爵の詠唱がとまり更に今まで以上怒りのパラメーターが上がったようだ。

「き、きさまー！ー！」

ふふふふふ、はっはははははははは！

「魔法の途中なのでしょう？遠慮なくどうぞ。下級貴族である私は公爵様が放つ魔法を避けるなんて無粋なことは出来ませんからね。」

最も出来ればの話だがね。

そう、私は公爵夫人の左腕を盾にしているのだ。

「どうしました公爵？この腕が気になって魔法が撃てませんか？そりゃそうですね。なんせてこの腕は、トリステインを代表する風のスクウェアとして名高い『烈風』のカリンの片腕ですからね。おっと、今は確か公爵夫人ですたっけ？ちなみに、折角腐らない様な魔法をかけて治療がしやすいようにしてあげています。万が一ここが戦場になった際には、この腕がどうなっても知りませんよ。」

さてさて公爵様のお顔はどんなかな？

うほwこええええ、目の前に鬼がいるよ。

つい五分前まで美丈夫だったのに今じゃ人殺しの目になっているよ。

「何が目的だ？」

公爵が口を開いた。

「私の目的はただ一つ。エルフとの貿易を国に認めさせることだ。それ以上でもそれ以下でもない。」

まあ、後はエルフの嫁も目的にあるけどこれは個人的な目的だしね。

「……それなら最初に尽力すると約束したはずだ。」

まだどうか・・・、そろそろ種を明かしてあげるとしようかな。

「公爵様、嘘はいけませんよ。公爵様は、最初からエルフとの貿易などに協力したふりをして、後から私達に頑張ったが無理だった。だから、この金をやるから諦めると言うつもりだったんでしょ。なぜ!?という顔をおりますね。ここらへんで種を明かしましょう。簡潔に言うそうですね、エルフの先住魔法の中に相手の嘘を見抜くものがありますね。失礼ながら、試させていただきました。後、公爵夫人を呼んでください。あの人からも真偽を確認せねばならぬ事もあるでしょうからね。」

公爵が、一呼吸ほど思考を廻らせた後に私に憎しみをこめた言葉を言ってきた。

「わかった。しばらく待て。」

公爵が執事呼び、公爵夫人を連れてくるように伝えた。私達は公爵夫人が来るまでお互い無言で過ごした。

待つこと数分後。

片腕の痛い姿の公爵夫人が現れた。

「お久しぶりです。公爵夫人。」

まずはご対面のご挨拶をした。

「初対面のはずですが?」

あらそうでしたっけ？つい先日まで四日ほど一緒にいたじゃありませんか。

まあ、偏在ではあったけどね。

私は公爵に目を合わせ、説明は任せたと意思を伝えた。

公爵が夫人に話をするときみるみるうちに鬼が一人増えた。

うほw怖いぜ。

「で、お話は纏まりましたか？公爵夫妻。面倒なので我々と大人しく取引をするか、このまま引き下がるがどちらかにしてください。

後、我々が治すのは、当初の約束通りカトレア様の御身体の病気だけですからね。何処かの誰かさんが我々から強奪した魔法薬を勝手に使って、勝手に病んだ分については取引条件では無いのであしからず。まあ、その腕程度なら無償でお返ししてあげますよ。一応、鮮度を保つ魔法を掛けて貰ってますので運がよければ、人間の魔法使いでも治せるでしょうね。」

先に口を開いたのは公爵の方だった。

・
・
・

「分かった。今度こそ約束を果たし必ずや国に取引を認めさせよう。だから、カトレアの体と精神を治療してほしい。」

公爵の言葉に対してビダーシャルが真偽のほどを伝えてきた。

「嘘は言っていない。」

どうやら折れたようだな。

さて、反撃開始だぜ、これからずっと俺のターン。
尻の毛までむしり取ってやるよ！

「いい心がけです。最初からそういう態度で望んで欲しいものですね。しかし、我々を亡きものにしようとしたあげく、守る気の約束を交わした対価は、しっかりと払ってもらいますよ。これから私が出す問いには必ずこたえること。沈黙は否定とみなします。」

「一つ目、ヴェーグル家とエルフおよび領民に対して敵対行動を禁ずる。もちろん、他の誰かに依頼とかも当然なしだ。」

「二つ目、貿易を国が認めない際は、公爵家が独断でエルフとの貿易を始めること、もちろん裏ではヴェーグル家がすべてを仕切ります。」

「三つ目、貴方達が勝手に使った魔法薬の薬代として10万エキユを支払うこと。」

「四つ目、貿易の際に必要な船が無い為、無償で保有する最新の船を提供すること。もし、持っていないければ新造して譲渡すること。」

「五つ目、この約束事を身内を含めたあらゆる人物に話すことを禁ずる。もちろん、王家が問おうとも話すことはダメだ。」

「以上の五つを守ってくれるのならば、当初予定していたカトレアの体は直してやろう。ただし、精神の方は公爵夫妻にいつまでも約束を守ってもらう意味をこめて症状を3カ月鎮静化するものを5万エキユで定期的に提供しよう。なに、公爵の財産からすればスズメの涙だろう？なお、全て現金による一括支払いが大前提だ。で

は、ご回答を聞かせてもらおうか？」

これでけお金を奪って、約束を守らせれば十分だろう。
さてさて、反応はどうか？

公爵が机を思いつきり叩き、私を威嚇しながら言ってきた。

「ふざけおって、一つ目以外どれもこれもが出鱈目だ。貿易を認め
なかったら我々の隠れ蓑になって反感をかえだど！それに、無償で
船を奪い取りなお且つあのような劇薬に10万エキュもの大金を
払えというのか！それに鎮静薬だけで年間20万エキュ出せとい
うのか！こちらが下手に出ていれば付け上がりおって、ふざけるな
」

私に言わせれば、貴様らの事情など知ったことか！

「だからどうした？私は、いつでもまじめですよ公爵様。それに、
もとはと言えば貴方達のせいでしょう？自分の尻くらい自分で拭く位
のプライドは持っていてほしいものですね。後、お金が無いといの
ならば借りれば。それでも足りなければ、領民から搾り取ればいい。
それでも足りぬ場合は、娘を他のお金持ちの貴族に嫁に出してそい
つに面倒を見て貰えばよいだろう？何を迷う必要があるのだ、今こ
の時も貴方がたの可愛い娘は精神を侵され病に苦しんでいるのでは
ないか？」

続いて口を開いたのは公爵夫人だ。

公爵が杖を構えて殺気を込めて私に言ってきた。

「私達で貴方をこの場で殺して薬を奪いことも出来るのですよ。」

おぉー怖い怖い。

しかし、まだ力の差がわからないとはね、年は取りたくないね。

「ビダーシャルよ、公爵夫人はこうおっしゃっているがどう思う？」

ビダーシャルが公爵夫妻を見た後に私をみて笑みをこぼした。

「冗談は、その根の腐った心だけにしてほしいものだな。お前らが二人掛りでレイアを襲ったとしてもかすり傷一つ付けられまい。ましてや殺す事など天変地異が起きようとも不可能だ。」

ありがとうよビダーシャル。

「まあそういうことだ。試してもみてもいいけど、その場合はどちらかに死ぬ事になるよ。」

私に出来る限り冷酷に言った。

・
・
・

あら、無反応・・・おいおい頑張って脅したんだから反応してくださいよ。

独りよがりみたいで恥ずかしいじゃないですか。

ならば、こっちから話を進めようとするか。

「どうやら、交渉決裂ということですか・・・非常に残念ですが仕方ありません。では、我々はその腕ともに領地に帰らせていただきますかと思えます。もう、お会いすることも無いともいますが、カトレア嬢の回復を祈っております。」

そう公爵夫妻に告げてビダーシャルと共に立ち去ろうとした。

「さて！……お前たちの条件を……飲む。」

公爵がやっと重い腰を上げてくれたようだ。

凄く悔しそうな怒っているような顔をしている。

「さすが、トリスティーンの聡明な公爵様だ。それで……公爵夫人はいかに？」

「くっ……私は……夫に従います。」

これに懲りて裏で策謀などは辞めてほしいものだ。
それで真偽のほどはいかに……

「ビダーシャル、どう？」

「大丈夫だ、本心から約束を守るようだ。」

では、こちらにも誠意（笑）ある対応をしないとね。

「分かりました。では、早々に治療に入ります。我々が治療している間にお金の用意をお願いします。治療が終わり次第ここから立ち去るのでよろしくお願いします。何分ここは居心地が悪いものでね。」

公爵夫妻に用件を伝えた。

不快に思っている者同士が同じ場所に居ること自体ストレスが溜まるのだ。

早々に治療して実家に帰るべし。

公爵が執事を呼びだし、用件を伝えている。

「カトレアの治療が終わったら早々に立ち去りなさい。貴方達が居るだけで不愉快です。」

それはお互い様ですよ公爵夫人。

「分かっていますよ。後先程言いそびれたのですが、万が一その左腕が繋がらなかつたら我々が10万エキューで治してあげますよ。はっははははは、ほらほら貴方も急がないと折角の腕が台無しですよ。」

そう公爵夫人に言ってから、私達は手招きしている執事について部屋を出た。

ふうー、やっとあの雰囲気から逃げ出したぜ、つかれたー。

大きく深呼吸してストレッチをしつつ移動しているとあつという間に目的地に到着した。

「ここがカトレア様のお部屋です。私の役目はここまでです。後はよろしく願います。」

はいはい、分かりましたよ。。

これから会う人物は、原作でも上位に入る美人キャラで人当たりもいい人物だが・・私にとってはそんなの関係ないぜ。

私を惑わすことが出来るのはエルフだけだ。
いざ、尋常に勝負だ。

バン。

ドアを開けた。

あらあら・・・部屋が真っ暗なうえに部屋のあちこちが破壊されている。

ベットは壊れ、シーツは破られ、カーテンは燃やされ・・・酷いな。後、確か動物好きはずだったが・・・動物の影も形もない。

ふむふむ、あの温厚な人物をここまで変えるほどの劇薬なのか・・・えぐい薬作ってくれるじゃん。

それで・・・あの部屋の片隅で壁に向かって話かけている人がカトレアかな？

正直、ホラー映画に出てくるお化けみたいで怖かった・・・。

「ああ・・・ビダーシャルさんよ。とりあえず、鎮静薬を飲ませてから治療しよう。あのままじゃ正直怖すぎるぜ。」

そうそうに、カトレアを拘束して鎮静薬を無理やり飲ませた。

その後、カトレアが目を覚ましてからに「私は、公爵様に雇われた者で貴方を治療すべくエルフ医者をつれてきた」と多少嘘を混ぜて色々吹き込んで治療をした。

どうせ公爵は、私達との約束で事情を説明できないだろうし騙しい放題だ。

流石に、感謝の言葉をもたらした時は少し心が痛んだがそんなの些細なことだ。

2時間後。

「今、メイジから報告を受けた。カトレアの体にあつた病床が全て無くなっていたそうだ。貴様には感謝の言葉は言わん。これが約束の金だ。」

公爵は、私達の前にお金の入った大袋を差し出した。うほw、これが全部金貨だって！信じられないぜ。

「別に構わないさ。お金とこっちの都合でやったことだからね。後・これ25万エキューあるってことは・ビダーシャル、疲れているところ悪いんだけどあの人の腕も繋げてあげて。」

さつきからビダーシャルばかりに働かせてしまい本当に悪いと思っている。

「人使いが荒いやつだな。今後1カ月お前が飯当番だ。それで手を打とう。」

そのくらい任せろ！1カ月飯当番くらい10万エキューの為なら安い物さ。

「腕によりをかけて作ってやるぜ。」

その言葉を聞くとビダーシャルは、そうそうに公爵夫人の腕をつなげるべく魔法を使った。

外を見てみると・・・馬車がないし、馬もない。

この重たい金貨を手で持って帰れというつもりのようにだ。嫌がらせかな？

「ゼルエル！」

私がゴーレムを出した瞬間、公爵が反応し杖を構えたが、こちらに敵意が無いのを見ると杖をしまった。

触手を使い金貨の入った袋を持ち上げて、私が右肩に乗った。

「ビダーシャル、そろそろ帰るよ。」

「公爵夫人よ。腕はつなげた1週間は安静にしていれば、普段通り使えるようになる。」

ビダーシャルが公爵夫人の治療を終えてゼルエルゼルエルの左肩に乗った。

それではいつも通り帰りますか。

「では、公爵夫妻。例の件、お忘れなくよろしくお願いしますね。」

そう言い残し、屋敷の外にでてゼルエルゼルエルを空に飛び上がり、領地めがけて一直線で帰宅路線についた。

これにて、カトレア治療編は終了です。

主人公は、治療を完遂した。（後書き）

次回は・・・考えてません。

週末に向けて執筆します。

今後ともよろしく願います。

主人公は、領地と共にパワーアップする。(前書き)

いつもご愛読ありがとうございます。

前話で、皆さまから色々のご感想をいただき作者としてもうれしい限りです。

今後も頑張っていきますのでどうかよろしくお願いします。

主人公は、領地と共にパワーアップする。

最近、急に大金持ちの仲間入りになったレイアです。

公爵家から金貨を大量に持ち帰った次の日に夢の中で神のお告げ（感想）を聞きました。

これぞ神のお導きというやつだと思いきや、早々にお告げを元に行動開始だ。

お告げの内容を簡単に纏めると以下の四つだ。

? 技や魔法のバリエーションがすくなくない。

? 醤油と味噌の使い方やその他のおいしい調味料はあるぞ。

? 公爵からの逆襲に備えたほうがいいんじゃない？

? 外道。

なんか4番目が大変なことになってるが気にしないぞ！

決して外道ではない・・・と思っている。

もともと対等な立場で取引を持ちかけていたのに最初に裏切ったのは公爵の方なんですよ。

というわけで、家族みんなで今後どうするか話し合わねばならない。

「第三回ヴェーグル家家族会議を開催します。」

セオリーにごとく、会議は食堂で開催だ。

今回のメンツは、父上、母上、私、ビダーシャル、執事とメイド一同の我が家で働いている全員だ。

「レイアよ。いつもの様に碌でもない事を考えたのだろう。今回は一体何の会議だ。」

「よくぞ聞いてくれました父上。実は、昨晚の夜に夢の中で神のお告げを聞きそれについて皆で話し合いたいと思います。」

ざわざわ

あれ？皆の反応が悪いな……。

キョロキョロ

父上に母上それにビダーシャルも私を可哀そうな子みたいな目で見ている。

まさか、痛い子とも思われちゃったのですか！？

「レイアちゃん、前々から少し普通の子とは違うと思っていたけど……もう手遅れなんて……ママは悲しいわ。」

「大丈夫だ。お前は元から変なやつだからその程度の事では、私は動じないぞ。」

ちよ、ちよつと待ってくれ。

ビダーシャルの発言は置いておいて、母上よ！手遅れて何がどう手遅れなのですか？

そのニュアンス的に現在進行形で私が手遅れの線路に乗って発進しているという事ではありませんか！？

「皆ひどい……もう私のライフは0よ！っとギャグはおいておいて本題にはりますよ。ゴホン、では本日の議題は大きく分けて二つで

す。一つ目の懸案は、に先日公爵家から治療のお礼？に頂いた大金の使い道です。これについては、前々より考えていた教育機関、公共施設の建造、治安の強化、特産品の増産と新商品研究を行いたいと思います。特に教育機関には、全ての領民に義務付けようと考えている為その件について意見をもらいたくメイドの皆さんにも集まってもらいました。二つ目の懸案は、公爵家への対応をどうするかです。今現在は、公爵家次女のカトレア嬢の為に煮え湯を飲んでいますが、今後いつそれが爆発してこちらとの約束を反故にして領地を攻めてくるか分かりません。正直、公爵家が数に物を言わせて全方位から攻めてきた場合には、防衛が間に合わず領民に多大な被害が出てしまうことでしょう。」

ようやく皆が顔を上下に振ってナルホドと言う動作を取っている。私だってちゃんと考えているんですよ。

「一つ目の懸案は、お金の使い道としては妥当だろう。お前が稼いだあぶく銭だから、領民の為になるように好きに使いなさい。」

ありがとう父上。

本当に物わがりのいい父上だ。

もしかして、私と思考が似ていて普通に生活できるだけのお金があればいいやって感じなのかな？

「で、もう一つの懸案の公爵家への対応はどうするつもりだ？私が『ネフテス』に掛け合って人を寄こして貰う事も出来るぞ。」

いきなりビダーシャルがとんでもない発言をしてくれた。

むちゃくちゃ職権乱用じゃないか！？

「マジですか！？確かに各村にエルフが一名でも居れば防衛には過

剩戦力になりそうだ。うーん、でも今回の事は我々人間の間での問題だから、可能な限りこっちで解決してみるよ。最悪どうしようもない時は、お願いねビダーシャル。」

「それでレイアちゃんは どうするつもりなの？折角ビダーシャルさんが、人を派遣してくてくれる気でいたのに・・・。」

「ご安心ください母上。」

「もちろん無策では、ありませんよ。」

「ただ、成功するかは分かりませんがね。」

「一応策は、考えております。公爵家と同等の力を持ち且つ公爵家の宿敵であるツェルプストー家にご助力を願おうと考えております。流石に国内には、下級貴族の為に公爵家と事を構えようと思えば居ないでしょうからね。」

「ここまでは、皆さまOKですか？」

「周りをみると皆が色々と考えてくれているみたいだ。」

「なるほど、他国の貴族はいい着眼点だ。だが、どうやってツェルプストー家に助力をもらう気だ？それに、国内の大貴族でアレだ。他国の貴族を信用できるのか？」

「ご安心ください父上。そのこともしつかりと考えております。まず、助力をもらう際にエルフとの貿易品を見せ、それを度優先的に提供する代わりに我が家の後ろ盾になってもらうという契約を結ぼうと思っております。ツェルプストー家には、腐る程お金があるはずなので金品で釣るなどナンセンスです。だが、人は強欲です。だからそこに漬け込むのです！そういう人がお金だけで満足するはずがありません。そこで、我が家がエルフとの貿易品や東方の珍しい

品を提供することでツェルプストー家にとって有益な存在だと相手に認識させるのです。」

なんせ、エロ本を家宝にしているうちだ。
珍しい物は大好きだろう。

「ママは、なかなかいい案だと思うわ。エルフとの貿易品って何なのかしら？レイアちゃんに全て一任していたからまだ聞いてなかったわ。」

あら？報告してなかったけ……。

まあ、この際細かいことはおいておいて、ここは実物を見せたほうがいいよね。

「では、ここに実物がありますのでそれを皆様にお見せしましょう。これが貿易予定の品のマジックアイテム名付けてクーラーです。」

私は懐から、マジックアイテムを皆に見せた。
その瞬間。

スパーーーーン。

「痛いじゃないかビダーシャル。人を頭をスリッパで殴るとは何事だ！」

ビダーシャルの眉間がびくびくしている。

そんなに怒ると皺が戻らなくなるぞ。
美形なんだから顔を大事にきなさいよ。

「この際命名などどうでもいい！一体、そのマジックアイテムを何

処で手に入れた！？私の気のせいではなければ『ネフテス』の家にあつた物と瓜二つのようだが・・・答えてもらおうか。」

ビダーシャルが食堂の机に乗り出して話してきた。

ばれたか・・・いや、むしろばれないほうがおかしいよね（汗）。

「ビダーシャル、世の中にはこのような言葉がある【お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの】というものだ。後、これは・・・だなその・・・ビダーシャルの家に落ちてたので拾っておいた。テへ」

ビダーシャルが静かに私の背後まで移動してきた。

そして、私の肩に手を置いてやさしげに声を掛けてきた。

「そうかそうか、それは手間をかけたな。ところで、レイアよ。実はな、最近私も神のお告げを聞いてある技を思いついたのだ。そこでだお前を荣誉ある実験体にしてくれるわ！」

まづいぞ！

ここは素直に謝らなければ。

ビダーシャルががっちり背後からホールドしている。

「ビダーシ「ファイナル」ぐへ。」

そのまま脳天からブリッチの要領で叩きつけられた。それも二度も叩きつけられた。

ぐお・・・目が回る。

「私かわ「アトミック」ぶへ。」

更にホールド状態で回転をしながら舞い上がり頭から私を床にた叩きつけた。

ぐおおお・・A・T・フィールドで物理的ダメージはないが、まじ、気持ち悪い。

まさか、このような技で私にダメージを与えてこようとは恐ろしい子だ。

「いやーーーーー」「バスターーーーーー!!」「ゲホ。」

更に大きく舞い上がり回転しながら私を床に頭から叩きつけた。

頭が床に突き刺さりリアル犬神家をやってしまった。

そして盛大に吐いた。

・
・
・

辺りが静まり返ったが、メイド達は私の物が片付けるべく早々に行動を開始した。

「ビダーシャル。あの技には突っ込みどころ満載だが、ここはあえて我慢しよう。えっと・・悪かった。」

誠意をこめて謝りましたよ。

悪気は、無かったんですよ、ただ実家に帰ると熱いじゃん・・クーラーの環境に慣れてしまったらもう戻れませんよ。

「分かればよろしい。これに懲りて同じ過ちを繰り返すなよ。次は更に回すぞ。」

ビダーシャルにも謝ったところで、みんなにマジックアイテムの実演をした。

流石に反響は大きかったよ。

そりゃそうでしょ、21世紀では一家に一台ある大ヒット商品だもんね。

「レイアちゃん、これいいわね。季節に関わらずいつでも快適な環境を提供するなんて・・ママに買ってね。で、貴方はどう思う？」

はっははは、言われずとも差し上げますよ。

後、気になるのは父上に反応だな。

「素晴らしいの一言だな。特に夏場などに避暑地に涼みに行く貴族などが多いがこれを使えばどこにも出かけずに常に家で快適な環境で暮らせるということではないか。これは、貴族どもに売れるだろう。」

おお、分かっているらしいや。ではありませんか父上。

貴族のような二トの連中には大ヒット間違いなしですよ。

「やはり、そう思いますか！？価値の分かる人なら必ずそう言うてくれると思ってました。では、これをツエルプストー家に見せて優先的に販売する代わりにうちを後ろ盾になって欲しいというのはいけるでしょうか？」

「お前がやってみるだけの価値があると思うのならばやってみなさい。もし失敗したならばその尻ぬぐいは私達親の仕事だ。」

父上ー！！

私は、ちよつと感動したよ。

「ありがとうございます。全力を持ってツエルプストー家を味方につけてみせます。」

その後も会議は続き、色々なことを検討しました。

教育を義務にする代わりに税率を下げるようにした。

この時代の収入の6〜7割が税金が普通と聞いた瞬間耳を疑ったよ。流石にこれでは、教育を受けさせる余裕がないと思えば税率を5割にまで下げてもらう事にした。

現状、公爵家から臨時収入もあるし下げても問題はないからね。

ゆくゆくは、エルフとの貿易で儲ければ税率は4割までは下げたいと思っている。

後、新商品は【豆板醤】【ラー油】【マヨネーズ】の三つを開発することにした。

幸い前世の知識があるおかげで何とかかなりそうだ。

後は、それを使った料理本も作成しないとね。

調味料だけあっても料理方法が悪いと宝の持ち腐れだもん。

さてさて、これからも忙しくなるぞ。

そんなこんなで長かった家族会議は幕を閉じた。

四日後。

ツエルプストー家に手紙を送ってもう四日がたった。

公爵家と同様に場所が場所だけに返事が来るとすればもう少し掛かるだろう。

もっとも、返事をくれるかすら不安はあるがここは信じて待つとす

るか。

そうだそうだ、聞いてくださいよ。

実は、つい先日とうとうトライアングルになったのですよ。

何が気かつけたかというと・ビダーシャルファイナルアトミックバスターのFABだと思う。

なんせくらった翌日からトライアングルになった為、それ以外に考えられないぜ。

しかし、トライアングルになっても相変わらず土しか足せないのは、私の仕様です（涙）。

くっそ、風や火と違い攻撃力に欠けるな・・だが、特化型だと思えば悪くもない！

むしろ器用貧乏より一点に特化したタイプの方が好まれる場合が多いはずだ。

「それで、いつまでも思いにふけているつもりだ。いくら相手がただの山賊だからといって油断をするのはどうかと思うぞ。」

ははは、そうでした。

今、私は領地の平和を守る為、ビダーシャルと共に山賊退治にきております。

過剰戦力すぎて相手が可哀そうだぜ。

「ごめんごめん。不埒な輩をどう料理してくれようかと思っ
ていてね。」

「相変わらずの性格だな。まあ、嫌いじゃないがな。それで私はどうしたらいい？ハッキリ言ってお前一人で相手に出来ない者など存在しないだろう。」

随分と高く評価してくれてるな。
うれしい限りだ。

まあ、今回ついてきてもらったのは訳があるんですよ。

「嬉しい事言ってくれるじゃん。実は、今回連れてきたのは新しく考えた魔法を見て欲しいと思ってね。私としては、よくできた魔法だと思ってるんだけど魔法の大先輩でもあるビダーシャルに欠点や改善点などがあれば教えてほしいと思ってさ。」

ビダーシャルが納得したかのように首を縦に振った。

「なるほどな。それでどんなえげつない技だ？」

えげつないって・・・もはや確定事項ですか！

「はっはははは、それは見てのお楽しみだ。だから、今回はこっそり見守っておいてよ。」

そうビダーシャルにいうと背景に溶け込むかのように消えていった。相変わらずの光学迷彩だな。

さてさて、山賊さんよ楽しいお時間だぜ。

山賊のたまり場に向かって歩くこと5分。
お昼時らしく、汚らしい恰好をした不潔の男どもが飯を食べている。

「こんにちは！」

山賊全員がこつちを見てきた。

皆食事を地面に置き、剣を抜刀した。

あら？聞こえなかったのかな？

「こんにちは」きこえてる！」「」

何だ聞こえてるんじゃないか。

返事をしないなんて教育がなってないな。

「こんなところまで何の御用ですが貴族様よ。」

山賊の頭らしき人物が私に向かって言ってきた。

「いえ、この近くに住んでいる山賊を討伐してほしいと近所の村から依頼がありましてね。その山賊を今探しているのですよ。心当たりありませんか？」

話しかけながら盗賊の方へ一歩づつ近づいていた。

「いい度胸だな坊主。この距離だとお前さんが魔法を使う前に殺すか気絶させてる事だつて出来るんだぜ。」

いえいえ、近づいたのはわざとですよ。

だって、もう勝負ついているからね。

「どうやってやるんですか？その足で？」

私がそういつと盗賊達が一斉に自分の足をみた。

「なんだこれは！？」

「どっなってやがる。」

「俺の脚が！！！！」

「うごかねー。」

大成功だ。

みろ！徐々に足から石化している。

山賊の頭がニヤニヤ笑っている私をみて言った。

「一体何をしゃがった！こんな魔法聞いたことないぞ。」

山賊の頭も焦っているようだ。

そりゃそうだよ、いきなり足が石になってるだからさ。

「そりゃそうだよ。私が考えた魔法だもん。そして君らは、その実験台だよ。いやー、人間で成功するか微妙だったけどどうやら成功だね。本当君たちが居てくれて良かったよ。流石に罪もない人間で実験は出来ないからね。」

山賊達も怒りのボルテージがMAXになったようだ。

「ふ、ふざけるな！貴様らは、平民を何だと思っやがる！？」

何言ってるんだこいつ。。。

「平民だろうと貴族だろうと犯罪者には容赦はしない。それは俺のポリシーだ。後、お前たちにいい事を教えてやろう。その魔法は、後1分後にはお前たちを完全に石化させる。最後にお前たちの遺言位は、聞いてやるぞ。」

そういうと、一斉に山賊達が各々叫んだ。

「くたばれ、貴族。」

「お願いだ助けてくれ。」

「来世で殺してやるからな。」

「もう悪さはしないからだから見逃してくれ。」

その他色々言われたが覚えてない。

石化までの様子を観察してみるとどうやら個人によって差があるようだ。

石化した者の顔は、ほぼ全員が恐怖で顔が引きつっている様子だ。

「ねえ、ビダーシャル。これ彫刻として売り出せないかな？もしかしたらマニアに高くれる！？」

スパーーーン。

今度はスリッパではなくてハリセンで頭を叩かれた。

だんだんLvが上がったな。

「そんな彫刻を欲しがるマニアなどこの世に存在せんわ！？それになんだあのえげつない魔法は、人間をそのまま石化させるのなど初めてみたぞ。一体、どんな仕組みだ。」

ふっふふ、そんなに知りたいかい？

ならば教えてあげましょう。

「ビダーシャルは、こんな話を知っているかい？目隠しをして手足を拘束して、腕に傷をつけてそこに人肌くらいのお湯を垂らすと、自分の腕から大量出血していると勘違いしてストレスで死ぬ。」

ビダーシャルが首をかしげながら言ってきた。

「知らないが、それがあの魔法とどう関係があるのだ？」

ふむ、前世では意外と知られているお話だったがこっちはそんなことはないのか。

「実は、あの魔法って人間自体を石化させているわけじゃないんだよ。人間の皮膚を錬金で石に変えてそれを固定化を使い皮膚から固め離れない様にする。後はその範囲を徐々に広めていき全身覆うだけ。そうして全身覆えば、生きた石像の出来上がりです。その後は窒息死またはショック死を待つだけ。種が分かれば簡単でしょ。これを解くには、私以上の土のメイジが固定化を解除しないと解けないという魔法さ。まあ、土系統に特化したメイジがかけた固定化だから早々解ける人はいないとも思うけどね。ちなみにこの魔法を【メデューサ】と名付けてみました。いいセンスでしょ。」

スパークスパーン。

二度も叩くなんてひどい……

「何がいいセンスでしょだ！えげつないの一言しか感想がない。だが、最初の約束通り色々指摘はしてやるぞ。その魔法は初見で見破るのも難しいし、解除に至ってはお前と同様に土に特化したトライアングルもしくはスクエアか我々エルフのような者しか解除できな

いではない事については合格だ。だが、問題はその効果範囲の狭さだ。平民相手ならば十分実戦で使えるであろう。あの者たちは魔法が使えない分、近接戦闘を行ってくる為、その際にかければ十分効果はある。しかし、魔法使いは別だ。魔法使いは後方に控えるのが基本で前に出てこない。仮に近づいたとしても相手が後方に下がり相手との距離を縮めることは困難であろう。」

フムフム。

なるほど、流石大先輩だ。

「なるほど、それで私は魔法を改良すれば後方に控えている魔法使いまで効果範囲を伸ばせるのでしょうか？」

「主だつて方法は二つ。一つは、魔法の改良ではないのだが・・・お前がスクエアになるという単純なものだ。そうすれば扱える精神力や魔法の威力を高めまり効果範囲も広がる。もっともこれは、ついこの間トライアングルになったお前には流石に無理であろう。ここでもう一つの方法は、皮膚以外の触媒を使い相手を石化するのだ。例えば、雨の日ならば水を伝って相手の皮膚を遠距離から錬金し石に変える！これは難しいだろうが決して不可能な話ではない。後はお前の努力次第だ。」

おお！そのような手が有ると思つてもみなかったぞ。

水でも出来るということは他にも触媒を考えればきつといけるはずだ。

「素晴らしい！流石は、ビダーシャル大先生だ。さつそく家に帰つて遠距離錬金の練習をするぞー！」

「まあ、頑張れ。」

この後、早々に家に帰りひたすら錬金に励むレイアであった。

これにて、領地とレイアのパワーアップ編は終了です。

主人公は、領地と共にパワーアップする。(後書き)

今回は、ツエルプストー家におじゃましようかなと思っております。

来週の週末目指して執筆します。

よろしくお願いいたします。

主人公は、防衛力を手に入れた。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は、ツエルプストー家にお邪魔したいと思います。

短い話になってしまい申し訳ありません。

別件ですが、今まで投降した全話に対して誤字脱字を見直しました。見直してみると沢山あり、かなり修正をしたのですが取りこぼしがあるかもしれません。その際は再度修正をかけていきたいと思いません。

主人公は、防衛力を手に入れた。

いつもお世話になっておりますレイアです。

実は、私のマブダチのビダーシャルが本日いないんですよ。なんだか、偏在が心配だから一度様子を見てきて現状を把握してくると言っただけでしばらく家を留守にしているんですよ。

何処に行くかは教えてくれなかったけど、十中八九ジョセフ王の処だろうな。

しかし、タイミングが悪い時にツエルプストー家からの返事が来たもんだ。

ビダーシャルが居ないおかげで相手の真偽がさっぱりなんですよ（涙）。

本当に今までビダーシャルに頼り過ぎていたと実感しました。居なくなって初めて気づくもんなんだな……。

そんな事を考えていると目的地のに着いた。

「すごく、大きいです。」

何がってツエルプストー家の門がですよ。

流石は公爵家と張りあう事はあるな。

大きな門が開き中へと招待された。

庭を見てみるとよく手入れがされているのが分かる。ふむふむ、なかなかいいセンスしてるじゃないか。

おっと馬車が止まった。

老執事がドアを開けてくれた。

「ようこそ、ツエルプストー家へ。旦那様がお待ちですので私の付いて来てください。」

家の中に入ると煌びやから装飾があちらこちらにされている。どれもこれもお値段を聞くのが怖い位だ。

それにしても、奇抜なデザインな品物が多いな。

私なら絶対にアレは飾らないぞ！って言いたい品も多々ある。

キョロキョロ

「珍しいですか？旦那様は、こういった珍しい物がお好きでしてね。各地で見つけた珍しい品をお集めになるのがご趣味でして……。」

執事が辺りを見回す私をおかしく思ったのが優しく声を掛けてきてくれた。

いい人だ。

「はい。今までに見たことないような品々が沢山あるんですね。辺境伯は、独特な価値観をお持ちのお方の様ですね。」

褒める言葉が見当たらなかった為、微妙なニュアンスで逃れよう……。

「はははは、無理をなさらなくても大丈夫ですよ。旦那様も自覚してなさいますのでその位では、怒ったりいたしませんよ。」

あらそうなの……、なんか公爵と違って実はいい人？なのかな。

だが、油断はしないぞ。
相手は大貴族だ。

悪の巣窟である貴族社会を生き抜いてきた精鋭だ。

執事が部屋の前で止まった。

「旦那様、レイア様をお連れいたしました。」

「開いておる。はいつてこい。」

中からの回答を聞き執事がドアを丁寧に開けた。

ソファーに座っている赤髪のダンディーな人が辺境伯だろう。

「ようこそ、ヴァリエール怨敵。」

辺境伯が笑みを溢しながら私に言った。

情報は漏れるものだが、こつも早いとはね。

「初めまして、ツエルプストー辺境伯。私は、レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルと申します以後お見知り置きを。それにしても情報が早いですね。公爵家にスパイでも潜り込ませているのでしょうか？」

「宿敵の動向を把握するのは当然だ。なんせ、領地はすぐ真横だからな。情報の伝達も早いぞ。」

ですよ。

ライバルの動向は常に把握するのは当然……って事は……
ツエルプストーの動向もヴァリエールにばれている！

「早速、私がここに来たのもばれちゃいますね。ちょっと考えが足りませんでした。ですが・・まあこれも悪くはないでしょう。我が家の後ろ盾にツェルプストー辺境伯が付くとなれば、おいそれとあちらも手出しはしてこないでしょうしね。」

私が当然のように、後ろ盾になってくれるような発言をすと直ぐに辺境伯から

「ほほう、私はお前の家の後ろ盾になるとは一言も言っていないぞ。何を根拠にそう思う？」

なにやら試されているみたいだ。

「私と面会をしたという事実が何より一番大事なのです。例えばです、ヴァリエール家が暗殺者との接触があったという報告が来たとしましょう。そうした際に辺境伯はどのような対応をとりますか？」

辺境伯は面白いおもちゃでも見つけたかのように私を見てきている。

「なるほどな。依頼があったかの真偽にかかわらず警戒をするな。要するに、お前は私と接触したことで我がツェルプストーと手を組んだと思わせるだけで既に目的は達成されたわけか。例え真実がどうであるかと構わぬという事が」

そういうことです。

私とこの場で面会をしているだけでももう十分なのですよ。

なんせ、公爵家ではイロイロやってきたので種さえ撒けば後は勝手に水と肥料をあげてドンドン私の思い通りの方向に育ててくれるだろう。

「そういうことです。いかがでしょうか？」

辺境伯が笑った。

「はははは、面白い。及第点をくれてやろう。正直、ヴァリエール
怨敵を見るだけ見て追いつもりだったのだが気が変わった。報
告にあった通り相当な変人だ。どうだ、我が家の傘下の娘でも嫁に
取らぬか？」

ちよつと！その報告書かいたスパイを呼べ。

誰が変人だ、本当の変人がどんな奴らか教えてやるぞ。
具体的に『薔薇族』に一週間程度放り込んでやりたい。

「ありがとうございます。しかし、自分の嫁は自力で探します。そ
れが私のプライドです。」

だって・・・人間に興味ないし。

「そうかそうか、ならば仕方がない。で、話を戻すぞ。結論から言
うとだ。ヴェーグル家の後ろ盾になってやろう。但し、貿易が始ま
った際には一番に我が家に品物を持ってくるようにしろ。いい値段
で買ってやる。」

キタ (。(。(。(。(。(。(。(。
(。(。(。(。(。(。(。(。(。(。
キタ (。(。(。(。(。(。(。(。(。(。(。
!!!

「ありがとうございます。これで我が家も安心して寝ることができ
ます。」

やっほい。

毎度ありー。

「では、辺境伯の気が変わらぬうちに具体的なお話に移らせていただきたいと思います。」

その後は、クーラーのサンプルをみて今後の販路や値段を決めたり、ヴァリエール家への対応をどうするか検討したりと数時間に渡りお話をしてきました。

いやー、長年睨みあっているだけの事はあると思ってしまったよ。嫌がらせの方法が半端ないぞ。

夕食までご馳走になってしまった。料理は、どれもこれもお値段を聞くのが怖い位だったよ。

とりあえずウマイ！その一言だ。今度来る時があればうちの特産品を是非持ってきてそれで料理をしてもらいたいな。

さてさて、日も暮れそうだしそろそろ実家に帰ろうかな。

「本日は、ありがとうございました。これで我が家も枕を高くして寝ることができます。」

「私の趣味の為にやっている事だ。それに、ヴァリエール家の敵が増えるということは我が家の警備の負担が減りるなどのいい事づくめだ。お前が気にする程の事ではない。」

敵の敵は味方という考えかな。

まあ、うちの対してヴァリエール家が人やお金をさくほどツェルプストー家の負担は減るだろうしな。

「では、次に来る際にはお約束の品を持って参ります。それまで短い間ですがお元気で辺境伯。」

「ああ、お前がそれまで生きていれば会えるあろう。せいぜいヴァリエールに寝首をかかれぬ様にしておけ。」

こえええ。

冗談に聞こえないのが本当に怖い。

だが、まだ私も死ねないぜ。

可愛いエルフとにやんにやんするまでは、例え相手が神だろうと生き残って見せる！

そして私はゼルエルを呼び出し、定位置に辺境伯に再度挨拶を行ってから領地目指して帰路についた。

二日後。

まだ、ビダーシャルが返ってこない為、遊び相手が居なくてツマラナイです。

「どうしたレイア。魔法の訓練中によそ見をするとは感心せぬぞ。

どうせ、ツッコミ役のビダーシャル殿がないから退屈しておるの
だろう。」

ギク。

確かに突っ込み役が居ないのは寂しいけどさ……。

「いえ、そのような事は……あるかもしれませんが。居なくなつて初めてビダーシャルには、色々世話になつていゝなと実感しております。」

父上が笑っている。

そして、どこからともなく母上とメイドがおやつをもってやってきた。

「レイアちゃんとビダーシャルさんは本当に仲がいいものね。でも、ビダーシャルさんもうちに來ているのは一時的の事なんだし。いつかは別れる事になるのだから今のうちに慣れておきなさい。それに、貿易の話が纏まればビダーシャルさんも本業？の方に戻られるみたいですね。」

確かに母上の仰る通りだ。

うちのの仕事が終わればビダーシャルがガリアに戻ってしまう。短い様で長い間実に楽しい日々だった。

別れは悲しいけど、どうせ原作開始したら会えるしね。

「レイアよ。別れの際にビダーシャル殿に贈り物でも上げてみてはどうだ？今まで世話になってきたのだ。」

う・・・。

確かにそうだよな。今まで色々もらえばなしだ。

しかし、何をあげようかな。当然、金品などの現物を送るほど無粋ではないが、実に迷うな。

幸い土のメイジである為、この様なモノ作りは大得意だ。後は、何を送るかイメージを固めて作り上げるのみ。

後、贈るならビダーシャルの戦力アップになるものもいいよね。今後、虚無と戦う事になるんだしその時に役に立つものもいいよね。

ふと、頭の中に浮かんだ案をいくつか並べてみる。

案1：ローゼンメイデ

案2：超電磁

案3：サイゴガ

案4：蛇腹

無難なこの4案かな。

どれもこれも難しいがすべて可能の範囲の贈り物だ！

おっし、やる気がでてきたぞ。

名付けて『ビダーシャル強化計画』だ。

そのまんまだけどね。

待っててくれよマブダチ。

私が、面白可笑しく強化してあげるぞ。

「ふっふふふ、そうですね。やっぱり感謝の気持ちを込めた贈り物がいいですね。お任せください父上母上。不肖レイアが我が家を代表してビダーシャルが泣いて喜ぶような贈り物を作成したいと思います。」

そうときまれば急がねばならない。

ビダーシャルが帰ってきては途中で制作中止になりかねない。

そんなこんなでツエルプストー家編は終了です。

主人公は、防衛力を手に入れた。(後書き)

ビダーシャルに贈り物をしたと思っております。

よろしければ、贈り物に関してアンケートのご協力お願い致します。
以下の4案から選んでいただけると幸いです。

案1：ローゼンメイデ (希望が無ければ銀様でいこうかなと)

案2：超電磁

案3：サイゴガ

案4：蛇腹

締切は、9/2(木)の24:00までとさせていただきます。

注意事項

アンケートの集計結果、複数の案が1位だった場合は作者の方でサイコロを振って決めさせていただきます。

また、案1が1位で且つ多数のドールが同順位だった場合も作者の方でサイコロを振って決めさせていただきます。

主人公は、下準備を完了させた。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。
今回更新が遅くなつてしまい申し訳ありません。

下記に前話で取らせ頂いたアンケートの集計結果をご報告します。

案1：4票（水銀燈：1、翠星石：1、真紅：1、蒼星石：1）

案2：0票

案3：1票

案4：0票

集計結果から案1のローゼンメイデンでプレゼントを作成したいと思います。
思います。また、各ドールの投票が同順位であった為作者の方でサイコロを振らせていただき【真紅】をビダーシャルに贈らせていただきます。

主人公は、下準備を完了させた。

いつもお世話になっているレイアです。

先日、ビダーシャルへの贈り物を考えながら寝たところ再び神の声（感想）を聞くことが出来ました。

なんでも、ローゼンビダーシャルが見たいと希望され私もノリノリで作っちゃつもりです。

さて、作ると言ったのはいいがこれが結構難しいのである。なぜなら、意識を持つ自動人形の作成など正直私の手に余る品である。

だが、諦めたらそこで試合は終了である。私としても人形と一緒に戦うビダーシャルを是非見てみたい。腕に人形を携えたエルフなんてこの世の中探してもきつと居ないぞ。

ビダーシャルが帰ってくるまでの短い期間が勝負だ。作っている物がばれたら即時粛清されかねない。そうと決まれば行動あるのみだ。

20分後。

ムシャムシャ。

家族みんなで朝食を食べながら、今後の計画を考えつつ報告を行った。

「父上母上。私は、ちょっと旅に出てきます。恐らく、二週間程度で戻ると思いますのでビダーシャルが先に帰ってきたら適当に誤魔化しておいてください。」

父上がため息をついている。

「一体何をするつもりだ。毎度毎度の事だが……せめて理由を言
つてから話を進めなさい。」

そんなに疲れた様に言わないで……今回はいつもと違って凄くまじ
めな理由なんですよ。

いや、マジで。

「ご安心ください。今回はやはり凄くマトモな理由です。先日、ビ
ダーシャルに贈り物をしようという話があったではありませんか。
そこで、（邪な）気持ちの込めた手作り逸品をプレゼントしたいと
考えました。」

どうだ凄くマトモでしょ。

なんせ今回の理由は、マブダチとの別れの際に送るプレゼントを作
る事だ。

「それは素晴らしいレイアちゃん。いつものように突拍子もない
事を言うと思つてハラハラしていたわ。」

母上が感動のあまりに目元にハンカチを当てている。

ちよつと……一体息子をどんな目で見ていたんですか。

「早まるなアリアよ。今までのレイアの行動から判断して何か隠し
ているはずだ。」

ギク（汗）。

鋭い……流石は十数年私の父親をやっているだけの事はある。

既に行動パターンが読まれつつある。

「ソナナコト ナイヨ。トモダチ ニ プレゼント ヲ オクル
ダケダヨ。」

母上も気付いた様だ。

「レイアちゃん。それで……一体何を作るつもりだったのかな？
ママとっても興味深いわ。」

何とか場を濁さなければ……人形を作ってビダーシャルにプレゼント
します！なんて馬鹿正直に誰が言えるか。仮にも成人エルフに
送るような品ではないしね。

あくまで私がビダーシャルを弄る為に送るのだ。
後、戦力強化という名目もちゃんとあるぞ。

「じ、実は、マジックアイテムを作ってプレゼントをしようと考え
ております。今までエルフの人達から様々な物を頂きてきました。
実際、そのマジックアイテムのお陰で火風水の三系統の魔法が使える
様になり私の魔法使いとしての実力も大幅に上がっております。
そこで、私もビダーシャルに万が一の場合に備えて役に立つ物を送
りたいと思います。遠くにいる友達がいつも無事で居られるように
と思いを込めた品を……。ちなみに、何を作るかは、いくら父上
母上でも内緒です。プレゼント当日にお披露目です。」

ふ……どうだ口八丁で乗り切れるか……。

友達を心配して役に立つプレゼントを贈る……これならば文句のつ
けようがあるまい。

「うーん、まあよいでしょう。友達に贈るプレゼントにまで私
達両親があれこれ言う必要もないでしょう。但し、あまりビダーシ

「ヤルさんで遊ばない様にしなさい。」

「はははは、分かっていますよ母上。」

「あまり遊ばない様にするね。そう、あまりね。」

「レイアよ。プレゼントを作るのに二週間も家を留守にするのは何故だ？別に家で作ればいいだろう。」

「なんせ、作るのは至高の人形だ。私だけの力で完成させるのは厳しい為、アドバイザーの下で開発を行いたいと思っています。そう、マジックアイテム作成のスペシャリストに……。」

「もちろん、そうしたいのは山々なのですが。私が考えているマジックアイテムに使う材料がないのです。後、それを作る際にどうしても私の知識だけで完成させるのは難しい為、アドバイザーの下で開発を行いたいと思っております。」

「どこで何を作ってくるかは分からないが、どうせ止めても聞かないのだろう。常識をわきまえて行動しなさい。」

「諦められたぜ……もう完璧に。」

「だってだって、ビダーシャルで遊ぶのって面白いんだもん。」

「分かりました父上母上。なるべく、コッソリとばれない様に色々やってきます。」

「そう言い残し、食堂をでて早速旅支度を行った。」

「やはり、ローゼンメイデン開発でキーになるのは【ローザミステイカ】の一点だろう。だが、これについては既に目星をつけているの」

ですよ。まずは、それを踏まえてアドバイザーの元にいき入念に相談をしなければならぬ。

「メイドの皆さん、大至急ここに書いてあるものを用意してください。」

私は一枚の紙をメイドに渡した。

書かれた内容を確認してメイド達は足早に準備に取り掛かった。

1時間後。

門の前に大量の荷物が揃った。

今回の荷物は以前にエルフの村に交渉に行った時の比べて倍増している。なぜなら、うちの新商品（試作品）である【豆板醤】【ラー油】【マヨネーズ】を加え更に直筆の料理本もつけている為だ。やっぱり、お願いごとするには何か手土産がないとね。

「相変わらずの大荷物だなレイアよ。うすうす気づいてはいたがアドバイザーとはエルフの事か？」

「ばれて当然か・・・マジックアイテムなんて早々作れるもんでもないしね。」

「仰る通りです。なんせ私が身につけているマントや指輪は彼等が作ったものですし、彼ら以上のアドバイザーは居ないかと思いません。それに気のいい人達でこういう楽しい事には全力でノッて来てくれる程にね。」

「レイアちゃんがそういうならいい人達なんでしょうね。あまりこ

迷惑を掛けるんじゃないやありませんよ。」

はい。分かってますよ。

「勿論ですとも。では、本日中に目的地に着きたい為、そろそろ出発します。見送りありがとうねー！。次会う時は、ビダーシャルの面白い顔が見れる事を期待しておいてね。殖装！」

ゴーレムを身に纏い出発だ。

何か久しぶりにゴーレムを身にまとった気がする・・・。

そうして、猛スピードで『薔薇族』の集落目指して進んでいった。トライアングルになったせいかわゼルエルの移動速度が上がったぜ。この調子なら日没には着けそうだ。

ははははは、待ってるよビダーシャル。

今から楽しみだぜ。

キュイイイイーーン。

私の心に震えてか更にゼルエルが加速した。

早い早いぞ！

ドコーーン。

突如凄い音がした。

・
・
・
・
・
・

あれ？もしかして、今のって音速の壁！？
ちよつと早すぎるよゼルエル。

馬鹿な思いが音の壁を突破してしまったorz

なんで今このタイミングでそんな壁突破するんだよ。

普通ヒロインのピンチとかだろ！（まあ、今はないけどさ）

くっそ、おいしいシーンをまた一つ潰してしまった。

これは、ビダーシャルに責任を取ってもらわねば。

5時間後。

ふうー、ゼルエルが進化？したおかげで『薔薇族』の集落に到着したよ。

「みなさん、お久しぶりですo(*? ?)ノ””フリフリ」

ちょうど近くにいた顔に覚えのあるエルフに声を掛けていった。

相手のエルフも挨拶をしてくれたので持ってきた新商品を提供していった。

さすがに料理本は数に限りがあるのでお店に置いておくので自由に見てねと言っておいた。

さてさて、最初にして最後の関門のアーベの自宅に到着した。

大丈夫だ・・・まだ夕方だ・・・大丈夫だ。きつと奴らだって晩飯の準備中だきつと。

そう思いながらドアを叩こうとした瞬間中から・・・聞きたくない男

の音が聞こえてきた。

「ああー」。

・
・
・
・
・

さて、一時間ほど皆にあいさつ回りをしてきてから最後にここに来よう。うん！それがいい。

1時間後。

ふう・・危うく拉致されるところだった。アーベ以外にもツワモノが多いぜ。
そろそろ色々な意味でオワッタかな。

ドキドキ。

神よ！私をお守りください主に視覚的意味で。

コンコン。

「誰だい。こんな時間に」

ギイイイイ。

ドアがゆっくり開いてゆく。

そして・・・約束を破らない格好でアーベが現れた。
その後ろには、ミチシタが裸エプロンでスタンばっていた・・・。

目がー！目がー！

「だあああああ！そんな恰好で人を出迎えないでくれ。まあ、先
ずは服を着てくれ。そしてお久しぶりです。」

久しぶりに会ったにも関わらず、相変わらずの二人を見て少しホツ
とした。

視覚的に見たくないものを見てしまったのは許し難いが、こっちは
お願いする立場だ我慢我慢。

「なんだレイアじゃないか。とうとう実家がつぶれて『薔薇族』の
一員になりに来たか。よし任せておけ。お前のポジションは、俺の
寝室と決まっている。後、久しぶりだな。」

何そのポジション聞いたことないよ！普通ディフェンスかオフエン
スじゃないの！？

私が知らない間にそんなポジションが出来たとか・・・。

「まあ、ちょっと立ち話も何だから中に入れて欲しい。うちの新商
品を使って気合いを入れて晩飯を作りますよ。」

私がそう伝えるとアーベがミチシタに目でものを言った。

どうやら、一緒に（性の）トレーニング中だったらしく非常に残念
そうな顔をしている。

いや・・・私は悪くないからね！しっかり、気を使って一時間後に来
たんだよ。

「そうだな。取りあえず飯でも食べながら話を聞こうじゃないか。」
30分後。

食卓を囲みアーベとミチシタにここまで来た経由を話した。

「なるほどな。ビダーシャルに贈り物か・・・面白そうだな。そしてそれを使うビダーシャルか・・・プツ。いや、失礼あまりにも緊張感が掛ける場面が浮かんでしまつてね。」

分かってくれるかアーベよ。是非その姿を見てみたいよね。

「でもアーベ、流石のビダーシャルもそこまでやったら怒るんじゃない？もちろん、アーベがやるなら僕も手伝うよ。」

おっし、また一人強力な助っ人を手に入れた。

「ミチシタよ。漢には例え相手が怒る事が分かっていてもやらねばならない事があるのさ。」

流石アーベだ話分かる。

思わずジャイアンのセリフを使ってしまった。

「おお、分かってくれるか心の友よー！。」

アーベもノリノリだ。

顔をみるとニヤニヤしている。

「友として当然だ。で、一体どんな人形を作る気なのだ？まさかと

思うがスキルニルのようなつまらない物を作る気でもあるまい。」

「いやいやいや、あれはあれで素晴らしい物じゃないか。
なんせ、アレに美少女の血を垂らせば・・・ゴホゴホ。」

おっと、馬鹿をやつてないで私が考えている人形のデザインから服装、そして標準武装についてまで色々と話合った。先ず、服装については私が貰ったマントと同じ素材で作ってほしい事や人形のメイン素材にはゼルエルの体を使い作成するな事などを伝えた。

「なるほどな。確かにレイアー人じゃこれは作ることは難しいな。
まずは、人形にどのようにして心を持たせるかだ。その次は、半永久稼働が可能な程の魔力を秘めた動力の問題だ。その他の問題は、何とでもなる。」

問題ないさアーベ。

このレイアーに抜かりはない！

「安心してくれ。その両方の問題について既に解決策を考えてきている。まず、一つ目の問題であった心については、ラグドリアン湖にいる水の精霊に力を貸してもらおうと思っっている。なんせ相手は古代から居る存在だ心を宿すマジックアイテムの一つや二つ位持っているはずだ。」

長年生きている精霊の財宝がアンドバリの指輪一つのはずがない・・・と思う。

私がそう伝えるとアーベが何やら考え込んでいる。

あれ・・・もしかして精霊の財宝ってそんなに少ないの!?

「簡単にいうが相手は精霊だぞ。我々エルフでもおいそれと近づかない存在なのだが……。まあ、レイアが大丈夫と言うならば大丈夫なのだろう。それで、動力の方はどうするつもりだ？まさか、火の精霊にでも頼むつもりか？」

ここにきて初耳の単語が！

確かに原作では出てこなかったが……。まさか本当に居たとは。普通に考えれば、水がいるなら火と土と風もいるってことか！これは夢が広がるぜ。

「え、火の精霊っているの！？まあ、それは置いておいて。実は動力にはS2機関という特殊な物を使ってみようと思っている。詳細な内容はちよつと言えないけど、人形位なら半永久的に稼働できるとおもつ。」

まだ、作ってはいないが私の血液をA・T・フィールドを用いて濃縮すれば恐らくS2機関もどきが出来ると踏んでいる。なんせ、私の心臓には使徒のコアが着いているのだ。すなわち、私は生きた使徒そのものといっても過言ではない。

「ほほう、そいつはすごいな。作る際にはぜひ解析させてくれ。」

幾らでも分析させてあげるよ。

どうせ、見た目はただの血液だ。人間でない事はばれないよね……。？

「ははははは、好きにしていよ。でも、下手に弄らないでよ。一歩間違えるとここら辺一体が更地になっちゃうよ。後、人形作りの際にプロフェッショナルを一人お願い出来ない？ほら、私は人形作り初めてだからさ材料が揃った際に色々と指導を受けて作りたいん

ですよ。」

顔の広いアーベの事だ、人形師の一人や二人心当たりがいるよね？

・

・

・

・

あれ・・アーベの反応が悪い。

まさか！エルフの中には人形マニアとかいないの！？

そう思っているとアーベが苦い顔をして口を開いた。

「わかった。何人が心当たりが居るからそいつらを当たってみよう。ただし、どいつもこいつも変わり者だから思わぬ出費が伴うかも知れんぞ。」

一体誰を紹介するなんだ！アーベが口ごもるほどの人物って一体どれなんですか！？

しかも対価が怖いぞ。

だが、ここで引くわけにもいかないぞ。私も男だ。体以外の対価なら払ってやるぞ！

「その位お安い御用だ。ただし、俺の体はやらんぞ！」

こうして、事前準備は整った。

後は、どれだけ早く水の精霊から物を貰ってくるかだ。今は、一分一秒が惜しいが、急いで事は仕損じるといふ諺もある位だしな。今日くらいは、ゆっくりして明日からがんばるぞ！

「さて、話もまとまったところで晩飯でも作りましょう。うちの新商品の味をたっぷり味わってもらいますよ。」

翌日。

「では、アーベ本当に申し訳ないけど。アドバイザーの手配をお願いね。」

そうアーベに伝えて作成予定の人形的设计書を渡した。

いやー、一晩で概要を書いたから色々と穴はあるだろうが後はアドバイザーと相談して作っていく。

「任せておけ。レイアもなるべく早く帰ってこいよ。なんせ期間が短いのだ。」

分かってますよも、ここからは時間との勝負だ。

「行ってくる。殖装！」

空に舞い上がり、ラグドリアン湖に向けて出発した。

待ってるよ精霊！

4時間後。

やっと着いたぜ。

今更だが・・・『薔薇族』の集落に行く前にここに寄ればよかった。なんせ実家の近くまで戻ってきちゃったよorz

これも全部ビダーシャルのせいだ……

さて・・・湖の前に着いた。

確か精霊を呼び出すには契約者の血だっけ？

今回はそんな上等な物は無い為、秘密兵器の出番だな。

何を隠そう秘密兵器とは、道中の村で買い漁った野菜やワインや肉、そして実家から持ってきたお米、醤油、マヨネーズ、豆板醤 e t c の事である。やはり、精霊様にお供え物って大事だよな。

こそござ。

では、さっそく湖の中央に行って、一つつ投げ込むぜ！

「まずは、オーソドックスに野菜から攻めてみよう。ほい」

ぽちゃん。

・
・
・

「きゅうりは、反応なしと・・・ばつばつ。続いて人参・・・」

投げ入れることに反応がないと紙に×印をつけていった。

今後、呼び出す際の目安にできるかなと思いつたのである。

1時間後。

はあはあ、いい加減投げ入れるのも疲れてきたぞ。

一体、どれだけの物を投げ込んだと思ってる！

食べ物を粗末にしたらいけないって習ってないのか！？

もっとも投げ入れているのは私だけだね。

くっそー、私は諦めないぞ。
次だ次！

次は、うちの特産品の醤油だ。同じ液体ならば醤油は好物？である
う。

きつと、現れるはずだ。もう、ちまちま投げ込まないぞ！
男らしく樽ごと一気にいくぜ。

「おりゃー！ー！ー！」

ドッポーン。

ふうー、流石大樽だけあって水しぶきが凄いぜ。
さてさて、反応はどうかな……。

・
・
・

反応がないorzうちの特産品が……。
こうなったら、湖を全部味噌汁に変えてやる。

「お前が出てこないならこの湖で味噌汁を作ってやる！我が家の特
産品その二をくらえ！！おりゃー！」

ゼルエルを纏った私によるナイス投擲が行われた。さらば、味噌よ。
お前の犠牲は無駄にしないぞ。見事な放物線を描いて湖に着水……
・しなかつた。

湖から手が伸びてきて味噌が入った大樽をキャッチしている。

キターーーーーー!!!

・
・
・

しかし何か違うぞ。

「単なるものよ。我が住まう湖に物を捨てるとはその命「ちょっと
まった!!!」……。」

ほら・・あれだ・・見た目がクレイモアに出てくる西のリフルの
ようだ。

そして……

「なんでお前さんの色が黒いだよ！水の精霊だよね？後、醤油臭い
んだけど……。もしかして、今まで投げ込んだ物全部タダ食いつ
ていらっしゃいませんか？」

こいつ絶対醤油飲んだよ。それも大量に……。
だが・・黒い水の精霊が可愛いから許す！

「……単なるものよ。それはお前の気のせいだ。我に一体何の用
だ？」

さっきまで命をとか言いそうだった精霊の言い分が痛いところ疲れ
て態度が180度変わったぜ。

まったく、アーベといい精霊といい意味の分からない存在が多すぎ
だぜ。

「逃げましたね精霊様。まあ、今は貴方の美しさに免じてその事は

水に流しましょう。本題からいうと・・・人形に魂を宿らせるマジックアイテムを無期限で貸してください！」

私は、そう伝えて湖の上にジャンピング土下座をした。

日本人最強技の一つだ。これならば精霊も折れてくれると信じたい。

「なぜ、我が単なる物の願いを叶えねばならない。それに私は、そのような事に構っている暇はない。」

ちよつと！先程、「何の用だ？」って言ってたじゃないか。もしかして、本当に聞いただけなのか。

期待して土下座までした私ってorz

こうなら、実力行使・・・をしたいが、こちらにはまだ引き出しがある！

そう、アンドバリの指輪の情報だ。

「水の精霊よ。貴方がお探しのアンドバリの指輪の情報と引き換えに私の願いを叶えるというのはどうでしょうか？」

精霊が私を見つめてきた。

ようやく美少年（笑）の魅力に気づいてくれたか。

「単なるものよ。その言葉に偽りはないか？」

原作通りならば問題なく、あいつらに盗まれたはずだ。

歴史が変わっていないか不安要素はあるが、現時点で介入したのはカトレアの一件のみのはずだしな・・・。

「もちろんです。取引に嘘をつくほど落ちぶれてはおりません。証拠として私の頭の中を覗いていただいても構いません。」

とは、大見え切って言ったものの本当に覗いてこないよね？
私の恥ずかしい過去や前世でのあれこれを見られるのは、ちょっと問題・・・いやかなりマズイ。
多分、ご都合主義のA・T・フィールドが守ってくれるとは思うが怖いな。

「単なるものよ。その言葉が真実であるならば我が秘宝を授けよう。」

「いやー、やっぱり頭の中覗いてくるのね。覗かせないとマジックアイテムが貰えない・・・マジックアイテムがないとローゼンメイデンが作れない・・・ローゼンメイデンが作れないとビダーシヤルで遊べない。」

心の中で「ゼロの使い魔」の情報以外の事にはA・T・フィールドが働いてくれるように強く念じた。ご都合主義の心の壁よ私を守ってくれ！

「さあ、何処からでも覗いてくれ。」

内心はドキドキである。下手すりゃ廃人とかよくSSで見たからな私がそう伝えると醤油の精霊（笑）が私と目を合わせてきた。

醤油くさー！

そんなくだらないことを考えていると激しい頭痛に見舞われた。なんていうか・・・二日酔いの悪化版みたいな感じだ。

やめてやめて！頭が痛いつて精霊さんよ！もう少し丁寧にヒトの頭

の中覗いてくれよ。

「ちよつと、精霊様。もう少し優しくお願いしたいのだが……。」

・

・

・

無視ですか。

3分後。

ようやく、苦しみから解放された。カップラーメンを作る時間がこれほど長いと思ったことはなかったよ。一体どこまで覗いていたのか不安だな。

「精霊様。信じていただけましたか？」

さすがにあれだけ長い時間頭の中を覗いていたんだ。「ゼロの使い魔」の知識をたっぷりと見れたはず。これが今後どのように影響するかは私の知ったことではないがね。

「単なるものよ。確かにお前の言っていたことは真実であった。だが、何故これから起こることまで知っておる。」

なんでもかんでも人から教えて貰えるとおもうなよ。こっちはまだ頭が痛くて気分が悪いんだ。

それに早くしないとビダーシャルが帰ってきちゃうじゃないか！！

「それは、秘密です精霊様。当初のお約束通り真実であったのなら

ばお約束の品物を頂けませんか？後、単なるものという名称で私を呼ばないでいただきたい。私には親から頂いたレイアという名前があります。」

精霊が黙り込んでしまった・・・。

もしかして偉そうに発言しすぎましたか！

いやー、まさか・長年生きた精霊が人間子供相手に向きにならないよね。

「まあよい。これがお前が欲していた物だ。また来るがよいレイアよ。その時には、醤油を持ってまいれ。」

はははははは、私より醤油が欲しいのね。

くっそ、私の魅力が醤油に劣ると言うのかorz

見てろよ精霊。今度もってくる醤油には、この美少年（笑）のだし汁も追加してやるからな。

落ち込んでいる私に精霊がビー玉のような物を投げた。ディテクトマジック を掛けてみるとどうやらマジックアイテムらしい。やったぜ！これでローゼンメイデン完成に一步近づいた。

「ありがとうございます。醬・水の精霊様。次会いに来る時は、また醤油（美少年（笑）のだし汁入り）を持ってまいります。後、このマジックアイテムの使い方について教えてもらえませんか？」

「醤油、一樽。」

・
・
・

うっそ！まじで言ってるの!？

「いえ・・・あの・・・普通、品物と説明はセットかと思うのですが・・・。」

物には、説明書と言うのが必須ですよね。
常識的に考えて。

「醤油、二樽。」

まてまてまて！

なんで要求する品増やしているんだ、この馬鹿精霊が！
まさか、このまま私が口答えするたびに1樽づつ増やしていく気かよ。

そんなことありませんよね精霊様・・・。

精霊を見つめてみると・・・どうやらマジの雰囲気だ。
やべー、実はDQNなのか。

「えええええい！分かった。今は、無理だが次来る時には醤油二樽持ってくる。」

くっそ、醤油だってタダじゃないんだぞ！

まったく、酷い精霊に目を付けられてしまった。

「レイアよ。最初からそう言っておればよいのだ。そのマジックアイテムを手にとってお前が持つ理想像の性格を念じればよい。そうすれば、後はマジックアイテムが全てやってくれる。」

まさに、簡単お手軽。こんなに簡単ならわざわざ聞かなくてもよかつた気がするぜ。

「くっそ、覚えてやがれ醤油の精霊め！」

そう負け犬のセリフを残して、全力で『薔薇族』の集落に向かった。

4時間後。

やっと、『薔薇族』の集落に着いたよ。

流石に往復八時間は疲れたよ。

だが・・これでコアの素材は、ほぼ揃った。後は、人形作成中に私の血液を少しづつ集めて圧縮していくだけだ。後は、アーベに報告を行って早々にアドバイザーの方に挨拶しに行かねばならないぜ。

アーベ宅に移動し、早々に報告を行った。

「なるほど、目的に物を手に入れたか。こつちも色々と苦労したぞ、なんせお前さんの要望に応えられる程の物を作る人物など片手で数えられる位しか居ない。おまけにどいつもこいつも連絡が着きにくい奴等だな。」

いつもいつも、迷惑掛けてごめんなさい。

本当にアーベには感謝感謝だよ。私の体はあげないが、そのほかの願いなら何だって叶えてあげちゃってもいい位だ。

「いつもいつも感謝してます。それで、私に人形作りを教えてください。人物とは一体どんな人？」

どんな人が手取り足取り教えてくれるか楽しみだ。出来れば女性がいいな・・・。

密室で二人つきりで人形作成か・・・いいねー実にイイ。

「焦るな。今日の夜にお前の店に来てくれることになっている。だから、お前は普段通り店をやっつけていればよい。」

そういうことですか、ならば本日はいつにもまして気合いを入れて料理をするぞ！そうと分かれば油を売っている暇なないぜ。

「ありがとうアーベ。じゃあ早速お店に帰って開店の準備をしてくるよ。後でアーベもお店に食事にも来てくれ。」

そうアーベに言い残り早々と開店の準備に取り掛かった。

そういえば、その人の容姿について聞いてなかったけど・・・まあいいか。

2時間後。

久しぶりに私が料理を作る為か『薔薇族』の常連さんが沢山来てくれた。

新商品を試食してみて貰ったところどうやら【マヨネーズ】が好況だ。個人的には、【豆板醤】を使った激辛料理がお勧めなのだが・・・辛すぎだよつだ。

やはり、味覚は上品のようつだ。

「久しぶりの『薔薇族』の集落はどうだ？皆お前の料理を楽しみにしていたんだ。」

いいこと言ってくれるじゃんアーベ。

もう、ここが私の心の家だよ。

「いい処だな。ここにいると心が洗われるよ。将来的にここに住んでもいいんじゃないかって思う位にさ。」

もちろん、嫁さんを貰った後でね！

「ははははは、レイアならいつでも歓迎さ。おっと、そろそろお前さんが歌う番だぞ。」

歌う番って・・・私この店のマスターなんだけど・・・。
後、私が居なくなったら誰が料理を作るんですか？
そう思っているとミチシタが厨房に入り私の料理を引き継いでくれた。

さようですか（涙）；；私が居なくてもミチシタが居れば問題ないのね。

こうなりや、歌でも歌って憂さ晴らした。

「うおお！期待にこたえてレイア歌いますー！」

さあ、気を取り直していきますー！。

「君と出会

叶わぬ夢を見

それはたった一秒で越える永

I'm calling 君

守ってあげたく

伸ばした指も震えてるそのま 抱きしめ」

4分後。

気持ちよく「sprinter」を歌う終えました。
やはり、Kalafinaの歌はイイ。

さてさて、そろそろミチシタの手伝いに行かねばな。

カラーーン。

おっと、お客さんだ。

「いらっしゃ……い……ま……せ」

アーベさんよ、貴方の人間関係を本気で知り合いたいと思うよ。
一体この人と何処でどうやって知り合ったんだよ！。
というか……アーベに引き続き何でこの人がここに。

「ほう、一目で気がつくか。初めましてと言っておこう、私が人形師だ。」

これにてレイアの下準備は完了です。

主人公は、下準備を完了させた。（後書き）

今回は、人形師の処で【真紅】を完成させたいと思います。

今週は、忙しくて毎週やると言っていや誤字脱字を見なす時間がありませんでした。その為、来週纏めてやりたいと思います。

申し訳ありません。

追伸：

人形師が誰なのかは、レイアが歌った曲から想像してね。多分ばれちゃうと思うけど。

主人公は、プレゼントを完成させた。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

申し訳ありません。

いい訳ですが・・・毎週週末に行うと言っていた誤字脱字チェックができておりません；；仕事が忙しくてorz

そんな訳で時間をみて少し筒頑張るので長い目で見てください。

主人公は、プレゼントを完成させた。

人形師に出会ってから早1週間。

今日も元気に人形作りに励んでいるレイアです。

日に日に人形の出来が上達していると我ながら思う。

おっと、本日最高の出来の人形を見て貰わねば……。

「球体関節の作りが甘い、外骨格の厚みが部位によって違う、作り直し。」

私の会心の出来が駄目だしをくらった。

一目見ただけでそこまで分かるんですか！流石は最高位の人形師だ。どれどれ、外骨格の厚みを調べてみるかな。

・
・
・
・
・

0.5mm程の違いがあった。

凄すぎるぜ、こんなわずかな違いも一目で分かるんですか。

「トウコさん、少し厳し過ぎじゃありませんか？」

いいこと言っぞコクトウ。お前だけが味方だ。

「何を言っコクトウ。私に指導される以上、この位求められて当然だ。」

分かっていることをさも当然のように言われるとちょっとムカつてくるぞ！

だがだが、ここも我慢だ。そろそろ、我慢のしすぎで毛根が心配になってきたよ。

頑張れレイア！

ここを乗り切れば次は人形の中身の作成だ。将来的には、自力でロゼンメイデン開発も夢じゃない！ここは大人しく素直になるんだ。

「ありがとうコクトウ。また、頑張つて作るよ。トウコさん、また晩飯前にもつてくるからね！」

私はそう言い残し、用意された工房に籠つた。

さてさて、本日貰った指摘を改善して作成に励みますか。早くしないと間に合わないよ（涙）。

人形が完成していないのに既にアーベにお願いしていた服が届いた。

着せる人形も居ないのに服だけ出来あがってしまったorz

最悪、この服をビダーシャルに贈ろうかな・・・私のマントと同じ素材で出来ているから相当な逸品なのは事実だしね。

ゴスロリビダーシャルか・・・実にキモイ！

まあ、最終案にしておこう。

「さて、気合いを取り直して作るぞ！」

4時間後。

ふう、出来たぞ。素材が素材だけに加工するだけで実に大変だ。

毎回毎回、ゼルエルを呼び出しては触手を人型に変形させてもぎ取る。基本はこれの繰り返しである。
なんか、ゼルエルが不憫に思えてきたよ。

さて、トウコさんに報告すべくお部屋にお邪魔してみると・・・。

「レイア、悪いが金貸してくれ。」

・
・
・

聞き間違えかな？

そう思い、耳を指でほじってみた。

ホジホジ

「ごめんなさい、耳が遠くなったみたいでもう一度お願いします。」

そうだよね・・・前もって授業料とか言って私から1万エキューも取っていったのに何処の口がお金がないとかいうんですか！1万エキューあればポロイ城が買える値段だぞ。

「だから、金を有り金全部おいていけ。」

貸してくれから寄せせにグレードアップしてますよ先生；；

そりゃ、この人にとっては借りるも貰うも同意義だから変わりはないだろう。

しかし、私にとっては死活問題ですよ。

「一体。この間、私から授業料という名目で撒きあげたお金はどうしたんですか！まだ、1週間ですよ。どれだけ使い込めば1万エキユーも無くなるんですか！？」

トウコさんが、煙草をふかしながら答えてきた。

「今までのツケを回収しに来たやつらに全部持って行かれた。」

「どんだけ、ツケで物買っているのですか！しかも、相手もツケで物を売るなよorz」

「自業自得じゃないか……。それで、一体トウコさんは何でお金があるんですか？後、言っておきますが私の無一文ですよ。」

トウコさんに指導を受けるべく工房に移動した直後、「ちょっとジャンプしてみる」といわれて素直にジャンプしたのが運の尽きだった。後は、何を言いたいか分かるよね……。

「チツ、仕方ない。コクトウ、ちょっとユニコーンを一匹捕まえてこい。」

今、舌打ちしたよね？1万エキユーもツケをしている方が悪いと思うのですが……。
後、さりげなくユニコーンを捕獲してこいとか凄いこと言ってるな。
・一体何に使うんだ？

「あー、トウコさん話が見えないのですが、ユニコーンを一体何に使うんですか？まさか、晩飯には馬刺しをご所望！？」

そうでないと思いたい……。だけど、ユニコーンの馬刺しはちょっ

と食べてみたい。どんな味なんだろう・・・醤油をかけたら旨いだろうな。

ジュルリ。

おっと、いけないいけない。危うく、うちの特産品が増えるところだったぜ。

「なにつて、人形が持つ杖に決まっているだろう。ユニコーンの角は魔法を使う触媒としては最高の逸品だ。まさか、自分が書いた設計書を忘れたわけであるまいな。」

そうでしたそうでした。

【真紅】が持つ杖の事を忘れていた。

その杖の材料にユニコーンの角を使うということですか。永遠の乙女に使われるのだユニコーンも文句は言わないだろう。

「もちろんですとも！あ、トウコさん。ユニコーンなだけで角取ったら食べてもいいよね？」

シーーン。

トウコさんとコクトウの目が冷たい；；

何言っただんたこいつ？みたいな目だよorz最近その目で見られる事が多いから大分耐性が着いたけどさ。

「角を取った時点で死んでしまうから好きにしる。ただし、私は食べないぞ。コクトウ、私の分も食べておけ。」

「そんなー、トウコさん。」

きつと、同じ馬だし腹は壊さないだろう。むしろ、神聖な生き物みたいだから普通の馬よりおいしい可能性の方が高いって！

「安心しろコクトウ。絶対に美味い……と思う。」

ははははは、今からコクトウがユニコーンを捕まえてくるのが楽しみだぜ。

さて、美味しい食事のお話は終えて早速本日二作品目の人形を見て貰わねばいけない。

「トウコさん。これが本日の最高傑作だー！ー！」

とって人形の見せた。細心の注意を払って作った人形だ。今度はミリ単位で正確な均一な厚みだぞ。

「ふむ……、まあ一週間という期間にしてみればよく出来た方が本来ならば、あと数年はこの作業を繰り返させるのだがな。あいにくお前には時間がない、それに今の私は借金がなくなって機嫌がいい。だから、この人形で及第点をやろう。」

優しいトウコさんには、裏がありそうで怖いが取りあえずひと段落したぞー！！

「ありがとー！トウコさん。これでは人形の中身とマジックアイテムを使って心を持たせれば完成だ！うっしやー、待ってるよビダーシャル。」

ドコン。

急に足元の床がきえてそのまま地中深くに墜落した。

イテテテテ。

一体何が起こったんだ。

穴の底から上を見上げてみるとトウコさんが一言私に言ってきた。

「うるさい。」

さーせん。

嬉し過ぎて周りが見えなくなっていましたよ。

よじよじ。

穴からはいずりだして服に着いた埃を払った。

さて、骨格部分の合格も出たところでそろそろ晩飯を作らないとね。今日は私のご馳走を作っちゃうぞ！

「今日も頑張って飯を作るぞ！！」

更に三日後。

いつみてもグロイ。

何がグロイかって？そりゃ、人形の中身に決まっているじゃないか！漫画のローゼンメイデンと違って人形の中身って空洞じゃないんだぜ。ほら・・映画のシーンで式の腕を治療していた処あったじゃん。今まさに筋肉を付けたり内臓を付けたり色々しております。

人形作りを甘く見ていたぜ・・・今思ったんだがこれって人形作りじゃなくて人造人間作りの間違いじゃね？

もしかして師事仰ぐ人を謝った予感が激しくする。

「どうしたレイア。手が止まっているぞ。早くそことその筋肉をつなげる。後、内臓がはみ出ているぞしっかり押し込め。」

そんないつぺんに言わないでくれ。前世で医者をやっていたわけでもないのだからさ。

「わかりました（涙）」

わたしは泣く泣く指示に従い、人形の中身を作っていた。

今日の晩御飯は、肉やめよう・とくにホルモンとかはOUTだ。

更に二日後。

時間の流れが速いのはご都合主義です。

本日コクトウがユニコーンを一頭捕まえて帰還してきました。さすがエルフだ。しかも探索にかけてはエルフでも随一の能力だとか・・。

「さあ・・・待ちに待ったユニコーンの馬刺しです!!そしてこれがこの日の為に作っておいたダシ醤油です。・・・ちょっと、トウコさん逃げないで!後、コクトウもさり気なく先住魔法で消えようとしな。」

まったく・・食べ物粗末にはいけないと習わなかったのですか!?

しかも、本日のメニューは一般家庭ではお目にかかれな程の至高の料理ですよ。主に素材がだけどね。

「コクトウ……食べ。」

トウコさんの命令がコクトウに下った。コクトウが何やら絶望に打ちのめされた顔をしている。

大丈夫だコクトウ。私もまだ味（毒）見はしていないが多分旨いはず……だから安心して味（毒）見してくれ。

エルフなら胃袋も丈夫だろう。

「大丈夫だコクトウ。私もまだ味（毒）見はしていないが、以前（前世）に食べた馬刺しはともうまかった。だから安心して味（毒）見をしてくれ。……ゼルエル。」

私はゼルエルをだしコクトウの四肢を拘束した。さあ、これ以後は口に放り込むだけだ。

トウコさんに目で合図を送った。

どうやら、自分で食べるのは嫌みただが人に食べさせるのはいいみたいだ。

実にいい顔をしている。

「コクトウ、今日特別に私が食べさせてやろう。感謝しろ、人生で初めてだぞ人に食べさせてやるのは。お前が記念すべき第一号だ。」

さらばコクトウ。

お主の偉い犠牲は無駄にはしないで。

さてさて、コクトウの感想はいかに……場合によっては『薔薇族』のお店で期間限定メニューで出してあげよう。

「おいしい。」

おおー！うまいか。

では、私も一口食べてみようかな。

モグモグ。

「う、うまい！トウコさん、これ本当においしいよ。騙されたと思
って食べてみてよ。」

料理番組みたいに細かい感想は言えないがとにかく美味しい！

神聖な生き物ってこんなにも美味しいものか・・・そういえば、
タバザの使い魔って韻龍だったよな。

どんな味がするんだろう。

じゅるり。

私が妄想に浸っているうちに気づけば、ユニコーンの馬刺しが食卓
からほぼ無くなっていった。

ちよっと、私まだ全然食べてないんですが。

それにトウコさん態度が180°変わってパクパクと食べている。

「レイア、もう一皿追加だ。」

まだ、一口しか食べてないうちに肉がなくなり絶望している私に向
かって酷い仕打ちだ……

だけど、私がトウコさんの命令に逆らえるはずも無いので追加分の
馬刺しを用意すべく台所に向かった。

まあ、新メニューが出来ただけでも良しとしよう。

結局、捕まえたユニコーンの肉の1/5がその日のうちに消費され

た。
一体、エルフの胃袋のどこにそんなに収まるんですかと激しく思っ
た。

トウコさんの処に来てちょうど二週間後。

「ふふふふ、ついに出来たぞ！！」

とうとう、【真紅】を完成させましたよ。

長い道のりだったぜ。だが、その成果は十二分にあった。

しかし、我ながら とんでもないものを作った気がする。

人形の骨格には、ゼルエルを使った。もう、像に踏まれても大丈夫
というとかそんな強度ではない。

次に洋服だが、これは私のマントと同じ素材で作られている為、エ
ルフといえども傷を付けれるものは殆どいないだろう。後、動力に
は私の血液を凝縮させたS2機関もどきを付けている。

武器には、ユニコーンの角をステッキの形に加工した物を用意した。
最後に、ローゼンメイデンを入れるケースだがこれはトウコさんに
作ってもらいました。

なんか、改めてみると人形一体で一つの都市が落とせる程のものだ
な。

まあ、細かいことは気にしては駄目だな。

「ほう、完成したか。」

お、トウコさんが私の奇声に釣られて来てくれた。

そうなんですよ！完成したんですよ。

見て見てくれ、そしてもっと褒めてくれ。

「そうなんですよトウコさん。もっと見て見て、そして褒めて欲しい。レイアは褒められて伸びる子です。」

そんなどうでもいいことを言いつつ、トウコさんに完成した【真紅】を見せた。

「おめでとうレイア。これでお前も立派な変態だ。」

・
・
・

あれ？今、変態とか言わなかった！？

そこは褒めるところですよトウコさん。

「いくらなんでも酷いですよトウコさんorz。弟子が人生初の人形を完成させた時の掛けた第一声に変態とは、さすがのレイアも凹んじゃいます。」

うなだれている私にトウコさんが追撃を掛けてきた。

「今の状況を見たら誰だって同じ回答になると思うぞ。幼女にしか見えない人形に向かって奇声を上げる人物を変態と言わずして何と言う。」

グハア！

レイアの心に100のダメージ。

まあ、言われてみればそうか・・当初の予定と少々変わって人形というより、もはや人造人間に近い存在になってしまったもんな。だが、細かいことは気にしないぞ！どうせ、受け取るのはビダーシヤルだ。

「いいさいいさ、男は皆変態だ！」

今更、変態の称号が増えた位じゃ気にしないぜ。

この際、開き直る事にする。

「会話してる処悪いんだけど、アーベから伝言で『ビダーシヤルがヴェーグル家に間もなく到着する』だってさ。」

なんだってコクトウ！そりゃ大変じゃないか。

早々に家に帰らねばならないぞ。

「大体、レイアの読み通りの時間だったな。人形も完成したことだし、さっさと家に帰りな。」

もうちょっと別れを惜しんでくれてもいいんじゃないか；；

「トウコさん、もう少し優しく言ってあげないと。それじゃ、急なお別れだけどまた遊びにおいで。」

コクトウはいい奴だ。

うんうん、やっぱり別れはこつじゃないとね。

「トウコさん、コクトウ。短い間だったけどお世話になりました。」

色々言いたいこともあるけれど、それは次に来た時にでも言うことにするよ。」

簡単に別れの挨拶を済ませて、早々に帰りの支度をした。

まあ、支度といっても『薔薇族』のお店から持ってきた少量の調味料や人形の失敗作などはトウゴさんがおいていけと強く希望したのでそのままにしておくことにした。

まさかと思うが、私の人形の失敗作で何か使ったりはしないよね・・・いや、あの人の事だきつと作るだろう。

そんな訳で私の荷物は、人形が入ったトランク一つとユニコーンを材料に作った私の新兵器とユニコーンの生肉だけになった。新兵器の詳細は、ヒミツです。

「おっし、準備完了だ。それじゃ、また遊びに来るねー！。殖装」

ゴーレムを身に纏い、実家目指して全速力で移動した。

4時間後。

空を飛び続けるのもつらいぜ。

将来的には、寝ている間に目的に着くように自動運転の練習でもしようかな。

お！

遠くに見覚えのある小さな屋敷が見えてきた。

毎度毎度、長旅だったよ。

そう思っている間に実家の上空に到着した。やはり、音を超える速度で移動すると早いな。

ストン。

静かに庭に着地した。

「ヴェーグル家へ、私は「長い旅だったようだなレイア」……。」

私のセリフを遮ったのは、聞き覚えのある声だった。先を越されたか……。しかし、まだバレてないはず。ここは、いつものように何食わぬ顔で乗り切るんだ。

「ただいま。いやー、長旅は疲れたよ。ビダーシャルの方こそ仕事大変だったね。あ、そうだそうだ。今日はさ、皆にご馳走があるんですよ。旅先で美味しいお肉を見つけてね。これが激うまなんですよ。」

話の話題を旅から食事に変えなければ……。

「そうか、それは楽しみだな。レイアも長旅疲れたであろう。実家の為とは言え、あまり働き詰めるなよ。」

ははははは、確かに働き過ぎかな。

それにしても今日のビダーシャルは優しいな。

「いやー、ありがとう。程ほどに休んでいるから気にしないでいいよ。ビダーシャルこそ体には気を付けなよ。」

こうしてその場を乗り切……。れなかった。

「レイアよ。一つ気になっているのだが、お前が持っているトラン

クは何だ？ 凄い魔力を感じるのだが。」

ビダーシャルがトランクの存在に気づいてしまった。

「中身は内緒だ。 晩御飯の後に皆に見せてあげるからそれまで我慢してくれ。」

ビダーシャルも納得してそれ以後はトランクの中身には触れてこなかった。

皆がいる場でプレゼントをしてその時のビダーシャルの慌てふためく顔が早く見たい。

そして、待ちに待った晩飯後。

待ちわびたぞこの時を！

食堂に我が家の全員を集めたよー！。

まあ全員と言っても20人程度だけだね。

「皆さま、お待たせしました。私、レイアが日ごろのお世話になっているビダーシャルに感謝を込めてオールハンドメイドのプレゼントを贈呈したいと思います。拍手拍手。」

パチパチパチ。

家臣の人たちが拍手をしてくれた。

一方、父上は頭を抱えて悩んでいる。 対照的に母上は、家臣たちと一緒に拍手をしてくれた。
なにやら楽しげな様子だ。

「ビダーシャルも主賓なんだからそんな隅にいないでこっちに来てよ。プレゼントが渡せないじゃないか。」

ビダーシャルが悩ましい顔でこちらに来た。

恐らく、私の性格から考えてマトモでないプレゼントであることは想定済みなのだろう。

まあ、その通りマトモなプレゼントじゃないけどね。

「レイアよ。私は、貰う立場だからあまり言いたくは無いのだが・・・期待はしていいのだな？」

期待？

当然じゃないか。今まで私がビダーシャルの期待を裏切ったことがあつたかい！？

「当然だ。今回のプレゼントのコンセプトは、ビダーシャルに身の安全を第一に考えて抜いて作ったマジックアイテムだ。」

嘘は言っていない嘘は・・・。

「そうか、疑って悪かった。だが、私は中身を見るまでは安心しないぞ。お前の事だどうせ私の予想の斜め上をいつているのだろう。」

はははは、ばてれら・・・。

そうとも！ビダーシャルの予想の遙か上空を通過してるぞ。

あまり、根掘り葉掘り聞かれると話が進まなくなりそうなのでここらへんでプレゼントの登場としましょうか。

ガタン。

プレゼントを食卓の上に乗せた。

「私、レイアの人生初のマジックアイテムのご登場です。拍手拍手。」

パチパチパチ。

ありがとうノリのいい家臣達。

「さあさあ、ビダーシャル。今この場で開けてみてくれ。そして是非感想を聞かせてほしい！後、これがマジックアイテムの起動キーね。」

そう言っつてビダーシャルにゼンマイを渡した。

ちゃんと背中に穴をあけて回るところを作ったんですよ。

いやー、この為だけにえらく苦労したよ。

「そうか、ありがたく受け取ろう。わが身を案じてくれるレイアに感謝を」

ビダーシャルがトランクの前に立ち、トランクをゆっくりと開いた。
・・・と思っつたら途中まで開いて手が止まった。

そして、そのままゆっくりと閉じた。

こうして、レイアのプレゼントはビダーシャルに渡された。

主人公は、プレゼントを完成させた。(後書き)

次話にもこの内容は少々続く予定です。

今後もよろしくお願いいたします。

主人公は、精霊にブチ切れる。(前書き)

いつもいつも私が書いた駄作を読んでいただき誠にありがとうございます。

そして、感想を書いてくれた皆様に深く感謝しております。

感想を見るたびに私のモチベーションが激し、執筆にも力が入ります。

今回は、前回の続きの内容になっております。

主人公は、精霊にブチ切れる。

パタン。

トランクが閉じられる音がした。

ちよつと、ビダーシャルさんよ。そんな途中まで開いた段階で閉じたら皆にお披露目が出来ないじゃないか。

チラチラ。

ビダーシャルが何を思ったのか私の顔とトランクを交互に見ている。一体何がしたいんだ。

「レイアよ。どうも私は働き過ぎの様だ。トランクの中にあり得ないものが見えた。」

なんだって！幻覚が見えるほど働きづめだったとは知らなかった。これは早々に、真紅にビダーシャルの看病をさせねばならないな。まさか、プレゼントして早々に役に立つ機会がくるとは贈った本人としては嬉しい限りだ。

「安心してくれビダーシャル。私はこんなこともあるのかと思つてビダーシャルにマジックアイテムをプレゼントしたのだ。そのマジックアイテムを使えば、ビダーシャルの疲れもすぐによくなる。」

なんですかその目は！

疲れが原因がまるで全て私にあるかのように見るのは止めて欲しいものだ。

「おお、凄いではないかレイア。ビダーシャル殿に万が一の事が無いように作った物が早速役に立つとは流石だ。」

もつと褒めてくれ父上。

さあさあ、ビダーシャルよ。早々に箱を開けるのだ。

「我が友よ感謝する。」

ビダーシャルが感謝を述べてトランクに手を掛けた。

そして、我が人生最初のマジックアイテム、ローゼンメイデン第5ドール真紅が皆にお披露目された。

トランクの中に横たわる金髪の少女を見て周りが騒がしくなった。

ざわざわ。

どうやら私のマジックアイテムの出来栄えに驚いているようだ。ビダーシャルを含めた皆のあいた口がふさがらない様だ。

ふふふ、そうだよ。なんせ服を着せてしまえば本物の少女と寸分の違いも無い位に精巧な人形だしね。

「レイアちゃん。それは一体何の冗談かしら？」

母上が何やら意味不明なことを仰っている。

冗談って……一体何のことですか？

「母上、私は最初から最後まで大真面目ですよ。それよりも母上。」

私のマジックアイテムは凄いでしよう！作るのに苦労したんですよ。息子の初仕事なんだからもっと褒めて褒めて。」

あれ？母上が何だか御怒りのご様子だ。

「何がムスコの初仕事ですが。一体何処の馬の骨との子ですか！？父の二つ名を継ぐつもりですか？その根性を叩き直してあげるわ。」

母上が一瞬で私に『腕挫十字固』を掛けてきた。

メキメキ。

腕が折れる！！冗談なしに痛い痛い。

バンバン。

床を激しく叩きギブアップを母上に知らせるが関節技を解いてくれない。

頼みの綱であったA・T・フィールドは母の愛の前では無力であった。

というか、母上！！貴方は激しく誤解してるよ。

「母上誤解で「聞く耳持ちません。」」

だめだ・・・このままじゃ母上に亡き者にされてしまう。今も私の関節が悲鳴を上げている。

こつこつ時こそ父上の出番だ。

助けてパパーン。

「父上。母上を止めてください。母上は誤解しています。このままでは私の腕が……」

「レイアよ。ムスコの責任は父親の責任だ。諦める。」

・
・
・

あんたもか！何ということだ。

くっそ！誰かいないのかこの状況を看破出来る存在は。

いた！いるじゃないか。我がマブダチのビダーシャル君が！

チラチラ。（我死地にあり、救援求む）

とりあえず目で助けを求めてみた。

「子供の命を弄ぶとは何たる外道。アリア殿、みっちりとしごいてやってください。……トウコさんによるしく（ボン）」

・
・
・
・

貴様！！裏切ったな。すべてお見通しでこの状況に作ったのか！？

ミシミシ。

Noooo、私の腕が更に悲鳴を上げている。
もはや、白状して母上に許しをこおう。

「(母上、あれは人間に見えますが人形です！私がビダーシャルで遊ぶ為と身を案じて作ったマジックアイテムです。)」

あれ？

なんか声が届いていない。

は、まさか！

ビダーシャルの顔を見るとニヤニヤしている。

やられた・・・サイレントを顔の周囲にだけ張るといふ無駄に精密な魔法を掛けえてやる。

「言い訳は無いようですね。レイアちゃん、ママが貴方の根性を矯正してあげるわ。覚悟してなさい・・・『プリンセス 蠍固め』
「！！」

まってくれ！！言い訳ができないんじゃないだよ。

ビダーシャルにサイレント掛けられているんだよ・・・と言っても通じないよねorz

後、母上！！その技一体どこで覚えたんですか！ついでに母上はプリンセスじゃないでしょが。

ギャー！！。

10分後。

満身創痍のレイアです……
母上に王者の技を掛けられて既に私のHPは0です。

本来なら後一時間は折檻を受けるところだったのだがビダーシャルが私の様子を見かねて助けてくれました。

助けるならやられる前から助けてほしいものだ。

「レイアちゃん、そうならそうとちゃんと言わないとだめよ。ママは、誤解しちゃったじゃない。」

聞く耳持たなかつたくせにorz

「この際だから贈り物が何故人形なのかは置いておこう。それで、このマジックアイテムの使い方はどうするのだ？」

おお！興味を持ってくれましたかビダーシャルよ。
それでは説明してあげましょう。

ゴホン。

「よくぞ聞いてくれました。それでは、説明しましょう！まず、先程からこのマジックアイテムの名前ですが、ローゼンメイデン第5ドールの真紅と言います。主に契約者を守るマジックアイテムです。そして気になる性能ですが、自立制御を可能とし、無限に近い動力を待ち半永久稼働が可能です。そして魔法まで使う事ができる究極の人形です。また、服には私のマントと同じエルフでも切断することが困難な素材となっており、人形の骨格にはゼルエルの体を用いて作りしました。そして、人形が持っている杖にはユニコーンの角か

ら加工した逸品です。」

どうだ参ったか！御値段が付けられない位の逸品ですよ。

ドコン。

「ぶへ」

ビダーシャルが背後に回り込み私をハンマーで殴ってきた。

ちよっと、ハリセンからグレードアップしてますよ。

人をハンマーで殴っちゃダメだって親から習わなかったの！？（私も習ってないけど）

「貴様、そんな化け物みたいな性能のマジックアイテムを何体も作るんじゃない！万が一それがエルフを敵対する者の手に渡ったらどうするつもりだ。」

何体も・・・ああ・・・そういうことね。

大丈夫だ、このレイアに抜かりは無い！

「大丈夫だビダーシャル。最初にも言ったが真紅が我が人生初のマジックアイテムだ。その・・・第5ドールとは言っているがまだ他のドールは作っていない。最終的には7体になるまで作る予定だ。ちなみに、その子たちは全てエルフと敵対出来ない様に刷り込みを行う予定だから問題ない。」

ドコン。

更に一撃殴られました。

「一体目なら素直に第1ドールにしておけ、紛らわしいわ！」

ははは・・・私もそう思う。
でも、真紅が第5ドールなのは譲れないぜ。

「まあ、説明するより実物を見たほうが早いからさっき上げたゼンマイを背中にある穴に差し込んで回してみてくれ。」

私がそういつとビダーシャルがトランクから人形を取り出し背中の穴にゼンマイを差し込んだ。
そしてゼンマイを回し始めた。

キリキリ。

凄くドキドキする。製作者として起動テストとかしてから渡したかったんだがビダーシャルの帰りが早かったせいで試すことができなかった。まあいい訳だけどね。

頼む動いてくれよ・・・。

・
・
・

「レイアよ・・・動かないぞ。」

そ、そんなはずはない・・・と思う。

ほらあれだ・・・PCと同じで電源ボタン押下から起動まで時間が掛るように人形だって動くまで時間が掛るんですよ・・・多分。

パチ。

おお！！目が開いた。

やったぞ、ついに起動した。

私がそう思っていると真紅が自慢の髪をビダーシャルの顔面に叩きつけた。

パチン。

「目が、目があ！」

どうやら目に髪の毛が入った模様だ。アレ痛いよね。ビダーシャルが床をのた打ち回っている。

「まったく、レディに対してその持ち方は失礼だわ。」

おお！これこそ真紅。

我が思いを込めて作っただけの事はあるな・・・一応性格まで再現出ているようだ。

流石、精霊様のマジックアイテムだ。

真紅が床に降りた。

そして、ステッキを使い自分のサイズに合うコーヒークップを錬金した。

素晴らしい！想定通り魔法まで扱える。

どうだビダーシャル！この人形の素晴らしさが分かるかい！？

ははははは、私を褒め称えてくれ。

本来ならば私がやる事ではないのだが紅茶を紅茶を注文してあげるかな。

「ロートちゃん、悪いけど紅「醤油が飲みたいわ。早く持ってきなさい。」……はっ。」

・
・
・
・
・

開いた口が塞がらなかった。

醤油の精霊め！最後の最後でトラップを仕掛けてくるとはなんて奴だ。

「精霊の馬鹿やろ……！」

これにて、真紅の目覚めは終了です。

主人公は、精霊にフチ切れる。(後書き)

次話の内容は、まだ考えておりません。
今後も頑張りますのでよろしくお願いいたします。

主人公は、これが言いたかった。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして、感想や評価をくれた方々に深く感謝しております。

今回は、公爵家に遊びに行くお話です。

主人公は、これが言いたかった。

こんにちは、いつもお世話になっておりますレイアです。

突然ですが、公爵家から御呼び出しがかかったよ。

「瞬間何故だ!？」と思ったけど、そろそろ公爵家を訪れてから三カ月経つので例の薬を持ってこいと的事だ。後、カトレアの快気祝パーティーがあるからそれにも出席しろと書かれている。

正直、お前らが取りに来いよ!と激しく怒鳴りたいが、5万エキユーの為に仕方ないから行つてあげるよ。自分で言うのも何なのだが、公爵もよくパーティーなんてするお金あるな。これでも相当搾り取っているはずなのだが。

「陰謀の匂いがプンプンするな。どう思う?ビダーシャル。」

「どう思つても何も完全に真つ黒だろう。」

「ですよー!」。

「一応、我が家とは敵対出来ない様に契約を交えたはずだから直接的には来ないだろうな。どんな搦め手でくるか興味深いな。」

「だよな。薬だけ持ってこいなら分かるけどさ、その後にあるパーティーが特に臭いね。うちのような下級貴族が行くような場でもないし、おまけに公爵が私達をパーティーになんて呼ぶこと自体あやし過ぎる。」

私に恥をかかせて笑い者にする気が・・・それとも、周りがみんなグ

ルで始末する気かな。どちらにせよ碌でもない事は確かだ。

まずは、家族会議でも行っかな。

20分後。

毎度おなじみに食堂です。

今回は、父上と母上、 ビダーシャルと真紅、私の計5名？が集まっております。

もはや、ビダーシャルが真紅を腕に抱える姿を誰も疑問に思わなくなっている。慣れてって怖いもんだ。

「第四回ヴェーグル家家族会議を開催します。」

パチパチパチ。

誰も拍手をくれないから自分でするもんね。

「早速ですが本日の議題は、今朝早く届いた公爵家からの招待状です。父上と母上には、まだ内容をお伝えしていなかったので内容を掻い摘んで説明します。『そろそろ3カ月経つから鎮静薬を持って来い。後、カトレアの快気祝いパーティーをやるからヴェーグル家も出してやるから感謝しろ。』だそうです。」

まあ、大分はしよったが手紙の内容はこんな感じだ。

「キナ臭いな。」

ええ、そうですね父上。

「別にいいじゃない貴方。美味しい食事が食べれてレイアちゃんも社交界にデビューできるいい機会じゃない。」

母上、世の中タダより高い物はないのですよ。

それに、社交界とか興味ナツシングです。あんな、貴族の陰謀がどよめく場所なんて行きたくもない。

「母上、とりあえず社交界については置いておいて、問題は公爵がなぜ一家全員を招待したかです。薬が欲しいだけなら私を呼び付ける又は使いの者に家まで寄こすなど方法は有るはずです。それに公爵家のような大貴族のパーティーに下級貴族を呼ぶようなことはしないはずです。」

しかも、今回のパーティーには王族関係者がくる可能性もある。だから、相手も目立った行動はできないだろうが此方も下手に行動が出来ないくなる可能性もある。

「いざとなれば私とビダーシャルがお父様を守るわ。」

私が悩んでいると真紅が話に入ってきた。

ちなみにお父様というのは私の事ね！

まさか、この年でお父様と呼ばれるようになるとは思わなかったよ。

「ははは、ありがとう真紅。」

まあ、悩んでも仕方ないか。どうせ、薬を売りつけに行くんだ。そのついでにただ飯が食える位の気持ちでいけばいいか。私とビダーシャルと真紅が居れば、どのような状況でも打破できるだろう。

「じゃあ、今回は臨機応変に対応ということで行きましょうか。後、ビダーシャルには流石に変装してもらおうよ。パーティーに堂々とエルフが参加してたとなったら無駄に大騒ぎになるからね。」

「わかった。」

しづしぶと了承してくれた。

仕方ないじゃん……

さて、後は念の為に少しでも情報収集をしておこうかな。

1週間後。

パーティー当日になりました。

そして我が一家は現在、公爵家の門の前で中に入るのを順番待ちしております。いやー、今回は一家全員で行くことになったので馬車でここまで来たのだが……実に遅い。果てしなく遅い。

最近、ゼルエルの速度に慣れた為、馬車の速度に絶望した。幸い、クーラーのお陰で快適な馬車ライフであった。馬車の中では母上と真紅が遊んでおり楽しそうだ。父上も先程から真紅とコミュニケーションを取りたいようだが母上が譲ってくれない為凹んでいる。まったく、息子より孫娘の方が可愛いのね（涙）。

「それにしても、一体いつになったらこの列は進むんだ。」

執事に変装しているビダーシャルが愚痴っている。

その容姿は、ウォルター にしてもらった。老執事はやはり雰囲気が出ていいね。

「まあ、仕方ないさ。無駄に大規模なパーティーらしいからねか。国のお偉いさんまで来ているとの噂だよ。なんでも、重大発表もあると子耳に挟んだからね。」

一体何を発表する気なのか気がかりだ。

更に待つこと30分後。

ようやく門をくぐって中に入ったよ。馬車で渋滞とか産まれて初の経験だ。

馬車から下りると見覚えのある執事がこちらにやってきた。確か・カトレアの部屋に案内してくれた執事かな。

「お待ちしておりましたヴェーグル家の皆さま。早速で申し訳ありませんが、旦那様と奥様がお呼びですのでこちらにどうぞ。」

一息つく暇もくれないのね。

はいはい、何処までも付いていきますとも。

そのまま、執事について行き屋敷の中まで入っていった。中に入ると相変わらず煌びやかであった。だけど、廊下に並んでいたはずの壺や絵画が心なしか減っていた気がする。

やはり、資産は確実に減っているようだな。

後で時間があつたらメイド達にでも色々聞いてみるかな。使用人の方が色々と裏事情に詳しいこともあるしね。

コンコン。

「旦那様、奥様。ヴェーグル家の皆さまを御連れいたしました。」

「入れ。」

相変わらず偉そうな声が中から聞こえた。

「お久しぶりです。ラ・ヴァリエール公爵、公爵夫人。本日はお招きいただき誠にありがとうございます。後、先日は息子が御世話になりました。」

一家を代表して父上が挨拶をしてくれた。流石、大黒柱頼りになる。

「ああ、本当に色々世話になった。お陰で色々苦勞を強いられているよ。分かっていると思うがお前たちを呼んだのは、例の薬を受け取る為だ。後、今日は幸いにもカトレアの快気祝いをやるから参加していくといい。」

自業自得なのにまるで私のせいみたいにしてやがる。マジでムカつくぞ。

後、何が幸いにも快気祝いをやるだ。明らかに狙った様に私達を呼び付けたくせに何言ってやがる。

さて、愚痴っても仕方ないので契約の進捗の確認と薬と取引を早々に終わらせておくかな。

「横から失礼します。公爵様にお時間を取らせるのも申し訳ありませんので手短にお聞きします。御約束であった貿易の件と船の件、進捗はどのようによ？」

私にとってカトレア嬢の存在などどうでもいい。

確かに美人だとは思いますが、平民の中にも同じLvの女性は確実に存在する。その女性達との違いは、大貴族であるかないか程度の事だ。まあ、エルフの集落まで行けばカトレア嬢並の美人など沢山いたけどね。

「チツ、滞りなく進めておる。周辺の貴族や臣下の家などの取り込みは既に終えておる。2・3か月もすれば侯爵家や伯爵家の取り込みも順次完了する。船の方だが、ラ・ロシエールで現在鋭意建造中で完成は3ヶ月後だ。薬代の方は、帰りで良かろう。」

ふむ、ちゃんと約束を守ってくれているようだ偉い偉い。

ついでに、薬代は荷物になるから気を利かせてくれたって事のかな。それで真偽のほどは、どうでしたビダーシャル。

「問題ない。」

さようですか、ありがとうございます。

「約束を守っていただきありがとうございます。それでは、次回の薬の受け渡しの際には全て完了する見込みですな。ふふふ、楽しみにしています。」

「早く出て行きなさい。」

うお、怖い怖い公爵夫人が怒っている。

早々に退散しましょう。皆に目で合図を送った。

そして、ドアから出ようとした時に公爵が私に質問してきた。

「そういえばツェルプストーは、元気になっていたか？」

ははははは、そりゃばれてるよね。

「ええ、お元気でしたよ。ヴァリエール公爵によろしくと言っておりました。」

そして、そのまま部屋を後にした。

はあー、疲れた。なんで偉い人と話すつてこつても疲れるんだらう。だが、収穫はあつたけどね。後3カ月すれば貿易が開始されるといふことだ。

アーベヤテュリユークに何かお礼をせねばならないな。

ニヤニヤ。

やっぱり、ビダーシャルと御揃いがいいよね。待っていてくれエルフの統領達。

1時間後。

現在、身なりを整えてパーティーに参加しております。

ただ飯ウマー！いやー、食費が浮くつていいね。多少、大味だけどタダから許す。

ムシャムシャ。

執事の格好をしているビダーシャルは、流石にこの場で食事を出来ない為、私が食事を大皿に乗せてテラスに移動した。

「本当に何事もなく終わると思つ？」

ムシャムシャ。

私から皿を奪い取りビダーシャルが猛烈な勢いで食べている。そんなに急がなくてもまた取ってくるよ。

「それは、無いだろうな。なんせ本日の主賓がまだ登場していないんだ。何かあるとすればそのタイミングだろう。後、少し気になったことなのだがここに参加している貴族の殆どが嫡男を連れてきているな。」

なるほど、流石我らが頭脳ビダーシャルだ。

言われてみれば確かに、私を含めた子供を多く見かけるな。

子供と言えは・・・あれ？真紅がいない。

父上と母上の元に居るかと思っただけど、どこぞの貴族と談話している。

「ビダーシャル、真紅はどこに？」

そんな、頭に？が浮かんでいるような顔で見ないでくれよ。

「レイアと一緒にではないのか？」

・
・
・

「やっぱりさ、契約者がしっかりと面倒を見ておくものだと思うのだけど・・・。」

「いやいや、こういう時こそ父親の役目ではないか。」

お互い責任のなすりつけ合いをしている。

この際、責任の所存などどっちでもいい！早く、真紅を探さないと何をしでかすか不安で仕方ない。

頼むから暴れないでくれよ。

「ビダーシャル、私はアッチを探す。だから、むこうは任せた。」

「承知した。」

二手に分かれて探し始めた。だけど、真紅を探すのは一苦労だ。なんせテーブルより身長が低い為、常に足元に気を配りながら探さないといけない。

探すこと5分後。

くっそ！何処に行ったんだ。

ちよいと頭を冷やしにテラスから庭に移動した。

頭を冷やしていると何処からか真紅の声が聞こえてきた。

「そう、貴方は魔法が使えないのね。」

「あ、あんなんかに何が分かるっていうのよ。」

「口のきき方もなっていないのね。レディーとしてはした無いわ。」

「ひるちこひるちこひるちこ。」

この声は・・・くぎゅ　の人じゃないか。
まさか、こんなところでエンカウトすることになるうとは、思わ
なかったぞ。

下手に真紅と仲良くなつては今後の展開次第で困ることになりそう
なので止めに入りますか。

わざと音を立てて近づいた。

「真紅、こんな処に居たのか探したぞ。中に戻るう。」

私が話しかけると真紅が意図を読み取ってくれたのか素直にいうこ
とを聞いてくれた。

「はい、お父様」

やはり、お父様と呼ばれるのは恥ずかしいが嬉しいぜ。

「お、おおおおお父様!？」

何やらルイズ嬢が壊れたステレオみたいになっている。

初めて聞いたら誰だつてそうなるよね。だから、もう気にしないぜ。
そのまま、ルイズ嬢を放置して中に戻つた。

ふう、危なかった。あのまま下手に関係を持つてしまえば後々困る
しね。

「真紅よ。さっきの子とは、あまり親しくしない方がいいぞ。その
うち敵対することになるからね。」

私が言った意味を理解したのか真紅が静かに答えた。

「分かりましたわお父様。」

その後、 ビダーシャルと父上母上と合流出来た。ふう、今度はどこかに行かない様に ビダーシャルにしつかりと面倒を見て貰わないとね。

「皆様、お待たせいたしました。」

お、どうやら本日のメインイベントが開催されるようだ。

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ様の入場です。皆様、盛大な拍手でお迎えください。」

周りの演奏と共に貴族たちが一斉に拍手し始めた。KYと言われたくない為、私達も皆で拍手した。なんかノリが結婚式みたいだな。

後、家名が違うという事は流れは原作通りかな？

そう思っているとあつという間に回りの貴族たちに囲まれた。まるで、甘いものに群がるアリの様だ。

さてさて、私はまだ食べていないスープやサラダあたりを食べよかな。後、さりげなくメイド達に領地の状況などを聞き込みでもしておこう。特に税などどうなったかが気になるね。

20分後。

ムシャムシャ。

もうお腹一杯のレイアです。全種類性はしたかったが流石に無理だった。種類と量が多すぎる！

「しつこい味だったけど、たまにはいいよね。」

「そうだな。」

「ええ、なかなかだったわ。でも醤油がないのは頂けないわね。」

ビダーシャルも満足してくれたようだ。そして、真紅さんよ・・・塩分の取り過ぎは体に悪いぞ。今度、醤油の精霊にあったら矯正してもらおう。

カトレア嬢が有力貴族たちへの挨拶を終えようやく公爵が前に出てきた。

私達に挨拶しには来ないだろうけど、来たら来たで厄介なので常に死角に移動しつつ食事を楽しんでいた。

「本日は、我が娘カトレアの為に集まっただき感謝いたします。そして皆様にこの場でカトレアの婚約者を決めさせていただきたいと思えます。」

ざわざわ。

周りがどよめいている。

そりゃ、反応するよね天下の公爵家次女の婚約発表だもんね。

それに、カトレアは家名こそ違っても公爵家の血縁で、公爵家に子供が出来なければ自分が公爵になれるチャンスでもある。

さて、我が家の金の卵を産む鶏になる家はどこかな？出来るだけ金

持ちの家と結婚してくればそれでいい。

「なるほどね、それで家族揃ってパーティーに参加するようになって事だったのね。」

母上が何やら気付いた様子だ。

「どういうことですか母上？」

「簡単なことよ。5万エキュールなんて大金を年間何度も払える大貴族なんて殆ど居ないわ。ようするにこれは出来レースよ。そして、勝者の候補にはレイア、貴方も含まれているはずよ。」

いやいやいや、いくらなんでもそんな事は無いでしょう。

確かに政略結婚とか多い時代だろうけど、うちのような下級貴族に公爵家の娘を嫁がせるなんて逆玉は周りの貴族が許さないでしょう。

「なるほどな。確かにあり得る話だ。」

父上までそう思うということはマジなんですか！？

「父上母上、私としてはその案は無理があると思います。周りの貴族が黙ってはいないでしょうし。それに、私は全然カトレア嬢に興味ありませんよ。」

我が嫁は、既にエルフツ嬢と予約が入っているのだからね。

「公爵もそのことは重々承知しているはずだ。だけど、先程公爵は婚約者の発表ではなくこれから決めると言っている。恐らくこの場にいる全員に同等のチャンスと与え最終的に候補者の誰かに優勝を

押し付ける可能性がある。もちろん、周りからの反論も出るだろうがこの場にいる全員が証人でもあり、挑戦者だ。貴族の誇りとやらが邪魔して文句も言えぬ状況を作る気だろう。」

くっそ！だから薬代は帰りでいいだろうと言ったのか。

こんな茶番に付き合ってられんぞ。

「決めた。今から皆で領地に帰ろう。ゼルエルを飛ばせば数時間で着くからさ。」

皆に意思を伝えて早々に行動に移る。

こういう時は、逃げるに限る。皆が自分の子供に頑張れとか声をかけて盛り上がっている間にこの場を去るのだ。

早々に会場の入り口に移動した。

私が自由を勝ち取る為に外に出ようとした瞬間、メイドに声を掛けられた。

ち、うるさいのが来た。

「ヴェーグル様、どちらに行かれますか？旦那様のご企画には、必ず全貴族の方にご参加して頂くようにと仰せつかっております。不躰で申し訳ありませんが、私達を助けるとどうがご参加お願いできませんか？」

どうやら、私達が参加しなかった場合にはメイド達数名の首が掛っているようだ。それが物理的かは分からんが・・・全くもって酷いことをする。きつと、首になったら再就職は難しいだろうね。なんせ時代が時代だからね。

「なるほど、私達が帰った場合には君達数名の首が飛ぶというわけか。まあ、公爵様の企画に乗るのも吝かではない。なんせカトレア嬢は、容姿器量人格血統のどれをとっても素晴らしい女性だ。旦那になる人が羨ましい限りだ。」

これは正直な感想だ。もつとも、あの両親がいなければ更に素晴らしい。

私の偏見かもしれないがカトレア嬢は恐らくヤンデレであろうな。

私が一人頷いているのを見て何を勘違いしたのかメイドが活き活きをした顔で私に言ってきた。

「そうですカトレア嬢は私達メイドにもお優しい素晴らしい方です。では、早速旦那様にご参加の旨を伝えてまいりますね。」

これで首にならずに済んだと心から喜んでいるのであろう。だが、世の中そんなに甘くは無いのですよ。

「だが、断る。」

期待させておいて裏切るのは忍びないが一度このセリフ言ってみたかったのよね。

それに、自分の嫁はエルフツ娘と既に予約が入っている。

「鬼だな。」

「悪魔ね。」

「外道だな。」

「どんな性格でもお父様には変わりはないわ。」

上から父上、母上、ビダーシャル、真紅である。
相変わらずの酷評にレイアも泣きそうです；；

そして、メイドが泣き崩れている横を華麗にスルーして外に出た。

ふうー、外は涼しいな。さて、今日は馬車ごと飛ぶのか・・・奇怪
だな。

さて、我が家の馬車はどれかな・・・どいつもこいつの似たような
馬車だから困る。一応家紋が入っているから何とかわかるが見た目
が同じようなのが多すぎるぜ。

お！あつたあつた。

その時、馬車の後ろから公爵夫人が現れた。行動パターンが読まれ
たのか・・・それとも監視されていたのか先回りをされてしまった。

最後の最後に面倒な人物にあっちゃったな。

「もう、帰るのですか？折角、貴方の為に用意した企画なのに残念
です。」

相変わらず敵しい顔をした公爵夫人がそこにいた。それに、全然残
念そうな顔してないしね。

「いえいえ、お気になさらずに。それにしても随分と手の込んだ嫌
がらせをしてくれますね。相手の気持ちをまるで無視したやり口は
嫌いですよ。」

そもそも、婚約とか結婚とかは双方の合意が会って初めて成り立つ

ものだと思っっている。古い考えだと笑われようが、それが私のジャスティス。

「嫌がらせ？何を言っているの？私達が、公爵家の一員になれるチャンスを上げようと言うのよ。感謝されど嫌味を言われる覚えはないわ。それに、カトレアを嫁にあげるのよ。あの子は、例え貴方のような下級貴族でも結婚すれば旦那に尽くすタイプよ。何が不満なの？」

相変わらずの上から目線で正直嫌気がさす。

「この際だからハッキリと言ってやろう。あんたの様な上から目線の人と家族になるなんてまっぴらごめんだ。それに、私はカトレア嬢の事を何と思っていない。これが一番の理由だ。それじゃあ、私達家族は先を急ぐのでこれにて失礼させていただきます。薬の方は後日使者を寄こして下さい。もちろん、お金をお忘れなく。」

公爵夫人に不満をぶつけてから私達は馬車で実家目指して帰宅した。道中、ビダーシャルに公爵夫人のセリフが何処まで本気だったか聞いてみた。

「全部本気で言っていたぞ。」

そうですか。やはりあの人は永遠にそりが合わなそうだ。

「私もそろそろ眠いから寝る。後は任せたぞ。」

ちょっと、ビダーシャルさん。お願いだから起きてくれ！私だけゼルエルを纏って空を飛ぶのって寂しいのよ。

父上と母上、 ビターシャルと真紅が馬車の中で寝ていた。
かくいう馬車の馬もゼルエルを纏った私に抱えられている為、 寛い
で寝ている。

「不幸だー！ー！」

なぜ、私だけが寝ずに働かないといけないなんてorz

主人公は、これが言いたかった。（後書き）

JOOJO読み直していて、どうしてもそのセリフが使いたかったです。

次話は、もうちょっとまじめに書くので許してください。

次話の内容は、自領土廻りを行おうかなと思っております。

いつも私が書いた駄策を呼んでいただき誠にありがとうございます。
今後もがんばりますのでどうかよろしくお願いいたします。

主人公は、人を雇う（前書き）

更新が滞り申し訳ありません。

決して、更新を忘れていたわけじゃないんです。ただリアルが少々忙しくて……

主人公は、人を雇う

いつもお世話になっているレイアです。

先日、公爵家から使いの者がお金を持って私の元に薬を取りに来ました。これで、また財産が大幅にUPしたよ。まあ、増えたお金も領地改造で殆ど消えちゃうけどね。お金なんて墓場まで持って行けないから生きるのに必要な程度あれば十分さ。

ちなみにカトレア嬢の婚約者は、侯爵の中でも随一のお金持ちといわれる家の嫡男みたいです。嫡男はイケメンで火のトライアングルで商売の才能もあり、王都やガリアにも お店を構えているそうだね。世の中にはこういう何でも出来る変態さんが居るから困るよね。

まあ、私がそいつに会うことも無いだろうからどうでもいいけどさ。

サラサラサラ。

そして、今現在そのお金を領地の為に使うべくある物を作っております。

「何を書いているのだ？」

私の行動に不審感を募らせたのか ビダーシャルが質問してきた。

「何って、人材募集の張り紙だよ。流石に『薔薇族』と『ネフテス』にある私の店を放置し過ぎだと思ってね。だから、いつでも開店しておく為に料理が得意な人を雇おうかなと考えたんだ。」

もちろん雇うからには高待遇で迎える予定だ。なんせ、働く場所が場所だからね。

「そうだな。私もお前の店には専属の料理人が欲しいところだとは思っていた。」

そうですよね。今までは、エルフの人が善意で当番を組んでくれて料理を作ってくれていたが流石に申し訳ない。

貿易開始と共に新装開店をしたいから今のうちから色々と教育を行わないと間に合わないぜ。料理の面はもちろん、エルフに対する恐怖心をぬぐっても割らねばならないから大変だ。最悪、家のメイドを何名は派遣しようかなとも考えている。あの子達ならビダーシャルになれているおかげで変な先入観はないしね。

「えー、なにに『料理の得意な人募集中！最低年収500エキユーを御約束します。勤務地が遠い為、領地から引越せる方に限ります。もし、ご家族一緒に引越しをご希望される方は、応相談致します。なお募集人数に限りがある為、定員を満了した時点で募集を終了とさせていただきます。美男美女のお客に囲まれた最高の職場です。ご希望の方は、の月の週の曜日にヴェーグル家で行われる選考会にご参加ください。』ごく普通の求人募集ね。」

ビダーシャルの腕に抱かれた真紅が私の書いた記事呼んだ。

「レイアよ。あそこで働く人物を募集するなら、この記事だと駄目だ。私が手本を見せてやろう。」

パチン。

ビダーシャルが指を鳴らした途端、私が書いた記事が書き変わった。

ちょっと！なんてことしてくれるんだ。精魂込めて書いたのだぞ。

「えー、どれどれ『男色で料理の得意な人大募集！好きな料理が出来て、同じ趣味のイイ男に囲まれた最高の環境です。更に、最低年収500エキューを御約束します。また、戦争になっても100%身の安全を保障します。また、お子様がいらつしやる方はトラウマになりかねない為、採用できない場合があります。ご希望の方は、月の週の週の曜日にヴェーグル家で行われる選考会にご参加ください。』……いやいやいや、流石にこれは無いんじゃない？明らかに募集対象が料理人からホモになつてるじゃん。」

まあ、ホモじゃないとやっていけないような職場でもあるけど、少しはオブラートに包もうよ。しかも、身の安全を保障とかいてあるのが気になる……心まで保証しろよ。

「あら、いいんじゃないかしらお父様。お父様の記事とビダーシャルの記事を双方使って募集すればいいんじゃないかしら？お父様の記事を『ネフテス』用の募集にして、ビダーシャルの記事を『薔薇族』用にすればいいんじゃないかしら？」

それもそうだね。どうせ二店舗分の人数募集だしね。そうと決まれば、求人広告を増産するぞ！

「ビダーシャル、さっきの魔法で広告を量産してくれ。」

やれやれといった様子でビダーシャルが広告を量産してくれた。あつという間に用意した100枚も広告が完成した。恐らく錬金を使った魔法だと思っし後で教えて貰おう。

「では、ビダーシャルと真紅よ。これから領地内の村を廻って広告

を貼りに行くぞ！ただ飯が食べられるかもしれない旅行だと思えば大したことないさ。」

何でおれも！？って当たり前じゃないか。

料理人の審査は、当然料理を作ってもらいそれを食べて判定するんだから私だけがOK出して駄目に決まってるじゃないか。というのは建前で、本音を言うとホモの料理人が作った料理を食べるが私だけというのは納得がいかないので道連れだ。

「実においしい旅行だわ。」

早速、父上母上の了解を得るために部屋を飛び出て行った。

数日後。

旅支度を終えて、早速出発です。

「それにしても今回の旅行はいつになく準備に時間が掛ったな。お前にしては珍しく馬車で旅するとは思わなかったぞ。」

そう、今回の旅は色々とした準備もあり出発に数日を要してしまっただのだ。何の準備かって？そりゃ、いつものように悪だくみに決まってるじゃないか。

「馬の旅もたまには風情が会っていいかなって思ってね。後、今回は領地内の正確な地図を描くのも目的だからあえて馬にしたんだ。」

まあ、新の目的は別に有るけどね。それは、まだ内緒さ。

「では、早速出発だ。ゼルエル。」

ゼルエルを呼び出し馬から馬車の荷台を奪い取り装着させた。平たく言くと人力車の様なものだ。

「……何がやりたいんだ？」

止めて止めてそんな冷たい目で見ないだ……

「ビダーシャルがお父様の頭を殴り過ぎるから、ただでさえ変な頭が更に可笑しくなっちゃったじゃない。どうしてくれるの!？」

真紅さんよ、それではフォローになってませんよ。それに、お父様とか呼びつつそんな失礼な事を考えていたんですか!？」

くっそ! 覚えているよ。領地を回りきった際には、目に物見せてくれるわ。

「落ち着け! ゼルエルに荷台を引かせるのも訳があるんだから、とりあえず出発するから乗って乗って。」

こうして、ビダーシャルと真紅を乗せて出発した。

30分後。

それでは目的について説明しましょう。

「料理人の募集や地図作りも当然目的だけど、今回はそれとは別に領地の主だった場所にゼルエルの体の一部を地中に埋め込もうと思っ
つてね。」

「地中に？そんな事して何になるんだ？」

ビダーシャルがもつともな疑問を私に質問してきた。
ありがとう。その質問を待っていた。

「話せば長くなるんだけど、時間もあるしーから話すね。というか是非聞いてくれ！私の壮大な計画を！！」

「ゴホン。まず、事の発端は以前にビダーシャルと一緒に山賊の討伐を行った時から考えていたんだ。あの時に見せた魔法×デューサの事で色々とおアドバイスを元に私なりにその効果範囲を伸ばす研究を切磋琢磨に行っていたのさ。色々努力した結果、私には水などを触媒にした遠距離錬金が実力的に不可能であった。そこで私は、別の方向から錬金の距離を伸ばさず相手を石化させる方法を考えたのだ。そして、たどり着いた答えが魔法の距離が伸びないのならば魔法を使用する触媒伸ばせばいい事に気がついたのだ。」

ビダーシャルが「それは無理だろう」と言わんばかりの顔をしている。

「お前の言っていることも分かるが、一般的に杖が長くなるほど魔法の発動は遅くなりその威力も下がるぞ。まあ、ユニコーンの角の程の触媒ならば話は別だろうが、そのような貴重品が簡単に手に入るはずもない。おまけに、下手に長い触媒など相手に壊してくださいと言わっているようなものだ。」

流石にお金持ちになったけど、領地全域にユニコーンの角並の魔法触媒を埋め込むのは不可能ですよ。仮に出来たとしても、盗まれるのが目に見える。

「なるほど、そういうことね。相変わらずお父様の考えは、人の予想の斜め上をいつているわ。要するにお父様は、ゼルエルの体を魔法の触媒として地中に埋める事で魔法の飛距離を伸ばそうという魂胆なのね。」

流石我が娘。私が答えるまでもなく正解に辿り着いてしまった。

「Exactly(その通りでございます)。ゼルエルは、私の半身といっても過言ではない存在。しかも、その体は何処までも伸縮自在！そして、魔法の発動も一瞬だ。」

まあ、これは実験して分かったのだけどね。どんなに伸ばそうともタイムラグなしで魔法の発動が確認できた。当然、伸ばしたどの部位に対しても任意で発動も出来た。相変わらずのチート性能のゼルエルだ。

「領地全部を網羅する魔法触媒にする気なのか！？相変わらず、馬鹿げているとしか言いようがないな。」

ははは、そんなに褒めないでくれよ。一応、これでも領民の為を思っただけだぞ。防衛にも使えるし、畑の土を肥料たっぷりの上に錬金する事だって可能なんだぞ。

流石に規模が大きいから今回の旅だけでは片づかないだろうけど学院に入学するまでまだまだ一年以上あるから地道にやっついていこう。

「ちなみに今までゼルエルで通った道には既に埋め込みが完了している。試しに今から街道の地面を石畳に変えて見せるから見せていってね。錬金！」

気合いを入れて錬金を行って見せた。

私が魔法を行使すると今まで通ってきた道100m位が全て石畳に変わった。

本来ならばもつと遠くまで錬金することも出来たのだが、ここで精神力を使い果たしても仕方ないので程ほどにしておいた。

うーん、これを『ゼルエルネットワーク』とでも名付けるか。まさに次世代のネットワーク(笑)

「ほう、相変わらず見事な錬金だ。では、将来的には『ネフテス』にも同じことをやってもらおうか。我々エルフもいつ蛮族から攻撃を受けるか分からぬからな、万が一に備えなければならぬ。うんうん、『ネフテス』に帰った際には統領に進言しておこう。」

え！？エルフの集落でも同じ作業を行えと仰るのですか！？

どんだけサハラが広いと思ってるんだよ。うちの何倍とかそんなしゝじゃないぞ。

「それは流石に……。」

「大丈夫だ。お前が死ぬまでにやればいい。なーに、ほんの数十年砂漠を歩く回ればいいだけのことだ。簡単だろう？」

お、鬼だ。一体私に何の恨みがあるっていうんだ！？

そんなやり取りをいている家の最初の村に着いた。

早速、村長に会い村に掲示板を用意して貼り紙をした。最初は、村人が居なくなるので渋るかとおもったがむしろ快く受け入れてくれた。これも税率を下げたり、公共事業に力を入れたおかげで領民の生活水準が向上した事が要因だなと思った。さて、次の村に行く前に領民の反応を見てから行こう。

なになに

「500エキューだつて!?信じられない」とか「早速、準備しなきゃ」とか「ホモの料理人を募集!?’とか「レイア様が男の愛人を募集とは・・・」とか色々な意見が聞けた。

こいつらに一言だけ言いに行こうと思った矢先にビダーシャルと真紅に拘束された。

「何をする!この私がヴェーグル家嫡男レイアと知つての狼藉か! ?頭が高い!控えおろう。」

ドカン。

ゲシゲシ。

そう言った瞬間、ビダーシャルにハンマーで殴られた。そして、真紅に蹴られた(涙) ; ; ;
お父様になんて事をするんだ。

「さあ、行くぞ。あのまま誤解が広がったほうが楽しいからな。」

「ええ、お父様。先は長いので早く次の村に行きましょう。」

こういう時だけ素晴らしいコンビネーション。せめて誤解を解かせてくれ〜〜ホモの噂が広がったら嫁が逃げちゃうじゃないか! ?
(まだ、いないけどさ)

両脇をがっちりとホールドされて、馬車に連行された。

「H A ・ N A ・ S E !」

私の抵抗も悲しく次の村に出発させられた。

そして、ご都合主義により選考会当日。

ヴェーグル家は、地獄絵と化していた。

やべー、募集しておいて今更ながら逃げ出したい。

私がそう思っているとビダーシャルと真紅が旅支度をして逃げ出そうとしていた。

「待てや！ゴ

(# 。 。)

ルア！」

何逃げようとしてるんだ。半分は、ビダーシャル書いた記事が原因だろう。

私は逃がさない様にゼルエルを使い二人を拘束した。勿論、手足を椅子に縛り付け身動き一つ取れないようにした。

「H A ・ N A ・ S E ! 私は、本業の方で忙しいんだ。たった今、偏在 から連絡があつて至急ガリアまで来て欲しいと・・・いや、まじまじ大マジ。」

仕事先がガリアとかばらしちゃっていいのかよ！後、言葉遣いがすごく現代風になっている。

「嘘だな。」

「嘘ね。」

さて、現実から背けるのを止めて集まった人を見るかな。

信じられない事に会場には、100名以上もいるんだぜ。まさか、ここまで効果があるとは思ってなかった。年収500エキユーは伊達じゃないって事なのか・・・と言いたいのだがどうやら会場の様子を見る限り金銭目的では無いような人物が盛りだくさんだ。なんせ、集まった8割がホモくさい漢達なのだから・・・きも。

一歩間違えばここがハッテン場になりかねないから怖い。

しかし、集まった人たちを無碍にも出来ないのもまた事実で有る為、寛大な心で受け入れようと思う。もう、料理さえ美味ければそれでいい・・・後は、アーベ達に任せよう。

「レイア様、そろそろ試食会が始まるので御席についてください。」

流石には、執事だ。何事にも動じない心構え恐れ入った。

さて、後は神様にせめてマトモな料理が出てくることを祈るばかりだ。

「では、第一品目・・・。」

こうして、集まった人たちの一番得意とする料理を食べ続けていった。正直、殆どの人が一般家庭程度の味でしかなかった。これなら家のメイドの方が腕は立ちそうだな・・・。しかし、そんな中にとんでもなく腕の立つ人物が二名もいた。

一人は、モルトーという男の料理人だ。話を聞けば魔法学院で働くマルトーの従弟だそうだ。料理の授業を兼ねて旅をしていたところ

立ち寄った村で張り紙をみて応募してきたそうだ。そしてもう一人は、ユウザンという男の料理人だ。どこの美食倶部の人ですか！？と激しく思ったのは内緒だ。我が領地の特産品が気に言つた為引つ越して来たらしい。後、嫁さんが妊娠しておりもうすぐ子供が生まれる為、お金が入用だとかで今回の募集に応募したと。ちなみに、めちやくちゃ和食が美味かったです。

「第105品目、男体盛り。」

・

・

・

はあ！？

私が唾然としているとテーブルにひと際大きな蓋がかぶせられた料理が置かれた。

メイドの一人が何食わぬ顔で蓋に手を掛けた。

「待て！？それを開けるな。いいか、そのままゆっくりと手を離せ。そうだ、ゆっくりとテーブルから離れるんだ。」

何考えているんだこのアホメイドは！！

テーブルに着席している我々を視覚的に亡き者にする気か？だが、責任者として食べぬわけにもいかぬ。

勇気を振り絞れレイア！もしかしたら、普通の料理かもしれないじゃないか。名前と料理の内容が一致しない事なんて日常茶飯事だ。

とりあえず、母上とメイド達一同には下がってもらおう。目に毒だからね。

そして、私レイアが勇気を持って蓋を開けた。皿の上には・・・白豚が乗っていた。

「なに、このメタポの白豚？」

明らかに人類じゃない存在がいた。見た目は白いオークで顔はおにぎりみたいな形をしてやがる。

まあ、人間に限った募集とは書いてなかったが亜人が来るとは想定外だぞ。

しかし・・・どこかで見たことある・・・しかも前世でよく見た気がする。

「失礼な！やる夫は、メタポではなくてぽっちやり系だお。」

やる夫が文句をしてきたが、想定外の出来事に啞然として反応が出なかった。

思いだした！！

やる夫って・・・chからの参戦か！？

「お父様に失礼な発言は許さないわよ。この豚。」

真紅がやる夫の言葉に反応し、対応をした。

「こんな幼女にお父様と言われるなんて羨ましいぞロリコンが！）
申し訳ありません貴族様。やる夫はいやしい豚です。何なりとお申し付けください。」

考えている事と言っている事が逆だ！と激しく突っ込みてゝ。むし

る、突っ込み待ちしてるよね？いや、異世界に来て色々ビックリする事が多かったけど、ここ最近ではこれが一番驚いた。やっぱり世界は広いな。

ハラハラ。

私が感傷に浸っていると、いつのまにか薔薇の花びらが散っている。まずいぞ！これは真紅の幻覚魔法だ。これが生身に触れたら薔薇族一同に掘られ続けるという悪夢を見せられるという精神崩壊汚染系のえげつない魔法だ。

「待て真紅！」

私が止めるのも一歩遅く、花びらがやる夫に触れてしまった。

「ギャーーーーー……。……。……。とんでもない夢を見てしまった。あれ、なんでやる夫はこんな処に？確か、やらない夫と一緒に応募してじゃんけんに負けて料理に盛られたはずだよ……。」

死んだと思ったら即時蘇生しやがった。ギャグキャラ属性か！？料理の良し悪しは別にして是非とも『薔薇族』要員として採用したい。いや、採用するぞ！

「やる夫、と言ったかね？今から10分間で新しく料理を作って持ってきてくれ。さすがに男の体で生温かくなった料理は食べたくないからね。」

私がそう告げるとやる夫がすぐに戻っていった。これでマトモな料理が食べられるかな？

「一体どういっつもりだレイア。まさか、あの者たちを採用する気か？」

ビダーシャルが心底疑問な顔をしている。

「ああ、次に持ってくる料理に関わらず採用する予定だ。もちろん『薔薇族』要員としてね。私の感が正しければあの者達位しかあそこでは、働けないだろう。実際、真紅の魔法をまともに食らってほんの数秒で持ち直すほどの人材だ。これ程の者は早々いないと思うぞ。」

ビダーシャルも一度あの魔法を喰らった事があるから、先程の人物がある意味逸材である事は分かっているのである。

「確かにあそこで働くには料理よりアッチの方面に優れた人材の方がいいだろう。納得した。後の判断は任せる。」

ありがとうビダーシャル。

こうして、「ネフテス」要員としてモルトー、ユウザンを採用し、『薔薇族』要員としてやる夫、やらない夫を採用した。うむ・・何気いい人材が集まった気がする。

主人公は、人を雇う（後書き）

次話の予定は・・・未定です；；

今後も生温かい目でもよろしくお願い致します。

主人公は、二人目を授かった。（前書き）

いつも私が書いた駄作を読んでもいただきありがとうございます。

また、感想や評価をくれた読者の方々ありがとうございます。

本話は、いつもより短いお話になってしまいました。そして、とうとうレイアにもドールを持たせようと思います。

主人公は、二人目を授かった。

今日も元気いっぱいレイアです。

本日は、醤油の精霊（笑）に会いにラグドリアン湖 までやってきました。

正直、来たくは無かったのだけどローゼンメイデンに使うマジックアイテムを貰う為に再びやってきた。後、前回約束した醤油を持ってきた。勿論、これからもらう予定のマジックアイテムの分の手をつけてきている。

「お父様、早くお母様に会いに行きましょう。」

そう、真紅がノリノリだったりする。それにあの精霊をお母様と言うのは止めて欲しい。あらぬ誤解が広がりそうで怖い。

悩んでいても仕方ないのでゼルエルに乗っかり湖の中央までやってきた。

今回は、ビダーシャル もいるからA・T・フィールド で足場を作ったあげた。

「それでどうやって呼び出すんだ？」

愚問ですよビダーシャル。私がゼルエルが背負っている醤油の樽を湖に投げ込んだ。

ドボーン。

「任務完了。」

私の精霊の呼び出し方を見てビダーシャルが頭を悩ましている。これでは勝手に精霊が会いに来るはず。

横を見てみると真紅がそわそわしているのが分かる・・・我が娘ながら実に可愛い。

今度、ビダーシャルに「娘が欲しいならば私を倒していけ」とか言ってみようかな・・・いや止めておこう本気で倒される予感がする。

ザッバーーン。

激しい水しぶきと共に醤油の精霊（笑）が登場した。

「WRYYYYYYYYYYYYYYY！！！！」

・
・
・
・
・

駄目だこいつ 早くなんとかしないと……。

もう帰りたくなってたよorz

だが！帰る前にこのアホ精霊に細工され真紅を醤油マニアにされた恨み今こそ果させて貰うぞ！

「殖装！我が娘に細工をしてくれた恨みだ。消し飛べ、このアホ精「お母様！」霊がー！ー！。」

キュピーーーーン！

あ……真紅がお母様と言いながら精霊と私との射線軸に入ってしまった。

まずい！このままでは、真紅に直撃してしまう。

ドコン。

ナイスタイミングでビダーシャルがハンマーで私の顔を殴りつけ、無理やりビームの射線を反らした。

GJビダーシャル！生まれて初めてハンマーで殴られて良かったと思っただぞ。

ドゴゴオオオオーン。

真紅に直撃は避けたものの、湖の横にあった山がきれいに無くなってしまった……。どうしよう。しかも山火事になっちゃった。

「……あ……」

山が無くなって綺麗に向こうが見えるようになったぜ。

ど、どうしよう？これってかなりマズイよね！？

人の領地に勝手に侵入し、水の精霊と勝手に交渉し、あるうことが領地の山を消滅させたとなったら非常にまずい……。

「……エルフの力で何とかならないビダーシャル？」

「レイアがエルフをどう思ってるか知らないが……。流石に無理だろう。」

頼みの綱のチートエルフでも無理かorz

おし！精霊がご乱心した事にしよう。うん、それがいい。精霊なら山一つ吹き飛ばす事が造作も無いだろうしね……。出来るよね？

「後の事は、醤油の精霊様に任せて……。逃げていいですか？」

「ほほう、お主が壊した山について我に責任をなすりつけるつもりか？もし、我が単なる者にお主の名前を告げればどうなるかのー？」

う……。例え私が無罪を主張しても男爵家の嫡男の言葉と水の精霊の言葉では重みは比べるまでもない。

真紅の方に対してアイコンタクトをした。

（お父様ピンチです……。後で醤油を飲ませてあげるから援護射撃よろしく。）

「お母様。あまりお父様を虐めないでください。私が急に飛び出したのが行けなかったのです。ごめんなさい、お母様」

いいぞ真紅もつと押せ押せ！！

「う……。だが、我にも立場が……。」

「お父様を虐めるお母様なんて嫌いだわ。」

ポタポタ。

勝った！醤油の精霊が醤油？の涙を流しているぞ。

真紅のお母様攻撃つえええええ。

「真紅、我が悪かった。だからお母様を嫌いにならないでおくれ。」

親子の愛って素晴らしいな……
思わず私も涙が出ちゃうぜ……笑いをこらえて。

「あれでいいのかレイア……正直、あんなのが水の精霊をやっている事に不安を覚えたぞ。」

いいんですよアレで。

真紅を抱きしめながら私の方を向いた。

「今回は、真紅の為にあの山の一件引き受けてやろう。ただし、こちらからも二つ条件をだす。」

二つもか……まあ山の一件を引き受けてくれるならば致し方ない。

「任せてくれ。私にできる範囲の事なら何でも兼ねて見せましょう。
お・か・あ・様（笑）」

「レイアよ、いい度胸だ。一つ目は、お主たちが持ってきた物を全て我の為に置いていけ。単なる者達が今回の件で色々と聞いてくるだろうから、その対応に対する手間賃だ。」

至極当然だな。

「わかった。当然の報酬だ。」

「二つ目は、我にも真紅と同じ体を用意しろ。我も長年この湖にいたが、暇でな。それに、夫婦はいつも一緒にいたほうが何かと良からう。それに加えて、レイアについていけば美味しい食事もありつけて、アンドバリの指輪も自力で取り返す機会もある。まさに一石

三鳥だ。」

この精霊、美味しい飯を食べに外に出たいだけじゃねーかよ！
それに私に付いてくるって・・あれ・・別によくな？むしろ居て
くれた方が何かとありがたい気がしてきたぞ。

「なるほど、真紅と同じ体を用意するのは構わないのだが・・精
霊が持ち場離れていいの？」

「愚問だな。我は、こうみえても水の精霊だぞ。この湖には分身を
残していけば問題ない。」

本体が憑いてくるのかい！なんか、前にビダーシャルがとった方法
と同じ気がするな。

しかし、最近は分身に仕事をさせる手法が流行りなのか・・羨ま
しい。

「おし、すぐにと言いたいのだが・・・全力で作ったとして
も一週間は掛る。後、基本は真紅同様にマジックアイテムに込めた
人形の性格をしてもらうぞ。有事の際には素に戻ってもかまわんか
らさ。」

流石に見た目がローゼンメイデンで口調が醤油の精霊だと話になら
ない。

「構わぬ。」

話は纏まった。

では、人が来ないうちにさくっと戻りますか。

「では、一週間後にまた参ります。」

持ってきた荷物を湖に投げ込み、真紅とビダーシャルを乗せて全力で領地に戻った。

それにしても、精霊が私の味方に付いてくれるとは嬉しい誤算だな。

HAHAHA、待っているよ私のバラ色の人生！

一週間後。

トウコさんの指導無しで作るのは、正直骨を折った；；自分の間違
いって自分じゃ発見しづらくて出来あがった骨格のチェックに本当
に苦労した。

後、不思議な事にトウコさんから人形の中身に使う筋肉とか臓器一
式が届いた事には正直驚いた。そして、同時期に『薔薇族』から各
ローゼンメイデンの服装一式が届いたのもビックリだ……。あい
つらなんでローゼンメイデンの服装の知識あるんだよ！と激しく問
い詰めたい。

その事をビダーシャルに相談していたら『エルフだからこの位当然
だ』と言われてしまった。まあ、それで納得した自分もある意味洗
脳されてきたなと思うてしまう。

悔れんなエルフ……。

「と、言うエピソードが有ったのだがどう思う水銀燈？」

優雅にテーブルで我が家の新製品ヨーグルトを飲みつつ水銀燈が
答えた。

やっぱり、水銀燈といえば乳酸菌だよな。

「エルフだから仕方ないわ。お父様。」

主人公は、二人目を授かった。（後書き）

次話は、貿易開始前後のお話にしようと思います。

今後もがんばりますのでよろしくお願いいたします。

主人公は、司祭を味方につけた。(前書き)

更新が遅くなってしまう申し訳ありません。

そして、いつも読んでいただき誠にありがとうございます。

最後によろしければ、主人公の使い魔についてアンケートを実施したいと思います。よろしければご協力の程よろしくお願い致します。

主人公は、司祭を味方につけた。

どうもいつもお世話になっておりますレイアです。

ついに先日、国から正式にエルフとの取引許可が下りましたよ。公爵家と交渉を初めて六カ月・・・思ったよりも早く取引開始が出来て何よりだ。国との交渉に当たり色々なもめ事を一手に引き受けて解決してくれた公爵の手腕には敵ながらあっぱれである。

「長い道のりだった・・・思い起こせばいつも・・・」

あれ・・・ ビダーシャルと一緒に遊んでいた思い出しかない；；いやいや、そんなハズは無い！

公爵家を脅したり、ローゼンメイデンを作ったり、領地改良したり、魔法訓練したり・・・うん！実にまじめな日々を送っていた。

「明らかに最初の『公爵を脅したり』がおかしいだろう。」

そんなに褒めないでくれ ビダーシャル。

「まあ・・・私の働きがあつて無事に貿易開始にこぎ着けたのは間違いない！という事にして本日の本題に入りたいと思います！では、改めて第四回ヴェーグル家家族会議を開催しますー。」

パチパチ。

父上と母上、ビダーシャルにローゼンメイデン達からやる気のない拍手が贈られた。

もっと盛大に拍手してくれよ；；；（涙）

「本日の議題は、貿易の開始準備について各自の作業分担を説明します。先ず、父上と母上には貿易品の準備をお願い致します。数と種類が多いので間違わないようにしてくださいね。続いてビダーシヤルと真紅には、公爵から頂いた船の改造をお願いします。先ずは、貿易品の中には腐りやすい品も有る為、例のクーラーを用いて保存室を作つて欲しい。後、可能ならば船の性能を上げるために好き勝手に改造して欲しい。そして、私と水銀燈は『ネフテス』と『薔薇族』の統領への贈り物を作ります。以上、何か質問はありますか？」

キヨロキヨロ

質問がないという事は、全員作業について理解したということかな？と思つてみると、マブダチのビダーシヤルが質問をしてきた。

「レイアよ。船の改造は任せて貰つてもよいが、一体どのくらいの期間でやればよいのだ？かなりの規模の改造になるだろうから最低でも10日は必要だぞ。」

ビダーシヤルから指摘を受け、私がすっかり伝え漏れていたことを思い出した。

「失礼。期間だけど二週間でお願ひね。もちろん、父上と母上も同じ期間だからお互い早く終わった方がもう一方の作業を手伝つてね。他に質問がないかな？」

キヨロキヨロ

どうやら、他にはないようだ。なんか、家族会議なのに活発に意見がでないのは少々寂しいが・・・まあ仕方ない。

「では、各自「旦那様、奥様大変です。ロマリアの司祭が我が領地に視察に参りました。」……はあ？」

会議中にいきなり、執事が部屋に入って用件を伝えた。

「「なんだと（なんですって）！」」

父上と母上が声を揃えて喋った。

このタイミングで来るという事は、確実にエルフとの貿易の件だろうな……ああヤダヤダ。どうせ、プリミル教に反する異端者とか言ってくるに決まっている。そして、教会に寄付すれば眼をつぶるとか言うのだろうな。

「ねえ水銀燈、アンドバリの指輪以外に死んだ人間を自由に操るマジックアイテムって無いかな？」

私の横でヤクルトもどきを大ジョッキで飲んでいる水銀燈に質問をした。

「残念だけど無いわ。お父様。」

そうか……、司祭を殺してから操って都合のいいように報告させようと思ったのだがその手も駄目になってしまった。

あら……周りの視線が私に集まっている。

Why?

「レイアちゃん、人の命を粗末にしてはいけません。例え相手がいけすかない金の亡者でも安易に殺しては駄目ですよ。」

分かりました母上。軽い気持ちでなく本気の気持ちなら良いのですね！領地の為に私はこの手を真っ赤に染めましょう。

「母上、分かりました。」

母上と父上が私の素直な態度に痛く感動したようだ。目元に涙が見えるよ。

なんだか無性に罪悪感を感じる。

「旦那様、奥様。そろそろ司祭が痺れを切らす頃です。お早めに応接間にお越しください。」

空気の読める執事が話の切れ目を狙って父上を母上に話しかけた。

「父上母上。可能な限り相手の要望に応えてあげてください。その後の事は、私達が引き継ぎます。」

私がそう伝えたと父上と母上が部屋から退出した。

「さて、ビダーシャルに我が娘達。当然、分かっているよね？」

ビダーシャルがため息をつきながら私に言ってきた。

「ああ、分かっている。ここにきて貿易が破綻してはエルフ側としても色々と困るのでな。それに一個人としてもこの仕事は最後までやり遂げたいと思っている。先程の会話からして生きて司祭を返す気は無いのだろうか？」

ははは、何を仰います！母上との約束もある故に殺しはしないぞ・
・そう殺しはね。

「相変わらず外道ですねお父様。だけど、そんなお父様がとても素敵だわ。」

ビダーシャルの横でティーカップで醤油を飲んでいる真紅に褒められた。しかし、娘にまで外道と言われるのは、お父様はシヨックですよ。後、あんまり醤油を飲みすぎると糖尿病になっちゃうぞ・・・人形だからなるか疑問だがさ。

「アンドバリの指輪があれば楽に解決出来たのだが、無い物ねだりしても意味がない。だが、我に策あり！その策とは・・・」

三時間後。

「きつと、あいつらは我が領地から奪った金や今後手に入るであろうマジックアイテムの分け前などを話しているに違いない。」

上空から街道を走る馬車めがけてばやいた。

「あんなのが司祭なんて世の末ね。見るのも不愉快だわ。」

ははは、我が娘ながらいい性格だ。後、水銀燈・・・翼を使って飛ぶのはいいけどその羽根・・・凄く醤油臭いのは気のせいだよね！

「レイアよ。そろそろ領地の境目だ。人気もしくないし今がチャンスだろ。」

おっと、もうそんな処まで来ていたか。

「では、当初の予定通り司祭とメイジは生け捕りで行くよ。平民の従者は殺す方向でよろしくね。」

相手は、司祭1、メイジ2、平民1のたった四人の構成だ。それに比べて我々は、私とビダーシャルにローゼンメイデン2体だ。もはや、争いにもならない過剰戦力である。

トン。

馬車の前に私達が降り立った。

「貴様達、この馬車にはサンガリア司祭が乗られているのだぞ。道を「ジャンクにしてあげるわ。」・・・。」

パキン。

へえー、そういう名前の司祭だったんだ。まあ、覚える気は無いけどね。

従者が言葉を言い終えるより早く、水銀燈の手に全身を氷漬けされ葬られた。

この間、お酒に酔って元素周期表の一部を教えたのがまずかった。水銀燈が使ったのは、人体の水分を全て液体窒素に変換するという外道技である。全く、誰に似たんだか・・・。

しかし、リアルでエターナ・フォー・ブリザーをやってくれるとは、流石私の娘だ。

私がそんな事を考えていると馬車の中からメイジが慌てて出てきた。

どうやら私達と交戦するらしい・・・実力の差が分からぬとは可哀
そうだ。ビダーシャルのお手前を拝見するとしようかな。私の前に
ビダーシャルが立ちふさがった。

「ここは余が引き受けよう。」

・
・
・
・
・

あれ~~~~？なんか、ビダーシャルの顔がしわくちやのお爺さんみ
たいになっている。そして、物凄いプレッシャーを感じる風貌にな
っていた。

う~~~~ん、この顔の人どこかで見たことあるぞ・・・現世じゃく
て前世で見たような気が・・・。

私が思い出そうと必死に考えていると相手の男メイジが先手をうつ
てきた。

「フレイム・ボール！」

ほう、私から見てもなかなかの火力に見える。恐らく、相手はトラ
イアングルクラスだろう。さすがには司祭の護衛といったところだ
な。いい人材揃えているな。

ビダーシャルも相手に対抗してか同じ火系統の魔法を使った。それ
にしても小さい炎だな。相手の炎をは1mを越すサイズなのにビダ
ーシャルのはわずか1cm程のサイズだ。しかし、その炎同士がぶ

つかった瞬間……

パーン！

相手のメイジの炎が消し飛んだ。ビダーシャルの魔法は、そのまま相手に向かって進んでいった。しかし、敵も馬鹿ではないらしく、魔法が当たる直前で回避した。

なるほど……そういう魔法の使い方か。ドットクラスの魔法にスクウェアクラスで使う精神力を込めて使っているのか。

「なんて威力のフレイム・ボールを使いやがる。見た目に騙されて死ぬところだったぞ。だが、同じ手は通じんぞ。」

「今のは、フレイム・ボールでは無い……。メラだ。」

メ、メラ！？メラってあのドラクエに出てくる魔法じゃないかよ！敵は敵でビックリしているようだが、私は別の意味でビックリだよ。

お……思い出した。そうだよ！ビダーシャルの見た目は、まさに大魔王バーン様じゃないか。そしてこの展開は……

「これが…余のメラゾーマだ。」

キターーー（……）ーーー！！

ビダーシャルの手の炎が不死鳥を模っている。めちやくちやカツコイイ！もしかして、エルフの火系統の魔法では常識だったりするの……か！？それとも先住魔法？

ああ、相手の顔が真っ青だよ。

「カイザーフェニックス！」

ビダーシャルの魔法が圧倒的な熱量を持って相手のメイジを葬り去った。灰すら残らぬとは、恐ろしい威力だ。

・・・って、殺しちゃダメじゃんか！私の実験材料が・・・。

r z

まあ、バーン様に免じてここは許そう。もう一人のメイジを捕まえればいいしね。

さてさて、もう一人のメイジはどうなったかな？お願いだから殺さないでね真紅。

真紅の方を見てみると、口から白い泡を吹いている女メイジが居た。ああ・・・どうやら生きてはいるようだが、精神の方は逝っちゃっているなこりゃ。

「お父様、作戦通り生け捕りに致しましたわ。」

真紅が私の目を真っ直ぐに見て言った。

「よくやった真紅。」

そっさい、頭を撫でてあげた。

ナデナデ。

「お父様、恥ずかしいわ。」

頭を撫でる私を見ながら恥ずかしげに言ってきた。H A H A H A、可愛い娘じゃないか。

ゾクリ。

ハ！後ろから殺気を感じて振り向いてみると水銀燈が鬼のような形相をしている。

こえええええー！。

「お父様！私だって人間の一人や二人生け捕りに出来ます。今すぐに、馬車の中に隠れている人間を……」水銀燈も良くやってくれた。「」

司祭を殺しかねない勢いだったのですぐに水銀燈を褒めて頭を撫でてあげた。

ナデナデ。

「お、お父様の為ですもの、この位当然だわ。」

真紅もそうだが、デレている水銀燈も可愛いな。こんな可愛い娘が居るなんて幸せだ。

私達が和んでいる隙に私達の死角から逃げ出そうとしている司祭が居た。

甘いよ司祭様よ。領地の地面の上にいる限りお前が何処に逃げようとも私には手に取るように分かる！

なぜなら、我が領地の地中にはゼルエルネットワークが敷かれており、逃げ切ることは不可能だよ。

「どちらに行かれますか、サンガリア司祭。素直に出てこない場合は、手足の一本や二本頂く事になりますよ。素直に出てくる場合は、五体満足でいられる保証をしましょう。」

わざと大きな声で司祭を呼びかけると、すぐさま中肉中背の司祭が現れた。

「この異教徒どもめ、こんな事をしてタダで済むと思うなよ。お前たちの事を報告し、すぐに異教徒裁判にかけてやる。」

アホな司祭だ。普通、無事に帰れたらお前たちを裁判にかけて殺してやると言っている人物を生きて帰すとも思っているのか。

「ご自由にどうぞ。まあ、報告時に貴方という人格がまだ存在すればですがね。」

私が一歩づつ司祭に近づいて行った。思ったより、司祭の身長が高いな・・・これだとアレが上手に付けられないな。

「異教徒の身で神聖なわが身に近づく」「ひれ伏せ。」

ドサ。

私が司祭に対して命令すると司祭が自ら地面にひれ伏した。

「な・・・何をした！」

司祭が焦った顔をして私を見て言ってきた。誰が赤の他人に手の内を明かすかよ。

私は、司祭の言葉を見無視してポケットからトウゴさんのところで作

った秘密兵器のマジックアイテムを取りだした。

「サンガリア司祭、貴方は運がいい。私と敵対して生きている人物なんて今までにエルフと極一部の大貴族だけだ。更に私のマジックアイテム『肉の芽』の 実験材料になれるとは光栄だとは思わないか？今まで人の役に立たなかったであろうお前が初めて人の役に立つのだからな。」

怒り狂うかと思ったが、自分の体が石化している事に気がつき自分の置かれている状況を理解したようだ。

「た、助けてくれ。お前達から奪ったものは返すだから・・・」

司祭の言葉を無視して、『肉の芽』を司祭の額に植えつけた。

「ギ、ギャアアアアアー！！」

悲鳴がこだました。額から脳まで伸びるよう根を伸ばし対象者を操るマジックアイテムだから植えつけられた人物の苦痛は想像を絶するだろうな。

カクン。

急に司祭がさげなばくなった。あれ・・死んじやった！？いや、息もしているし心音もある。恐らく、再起動中？みたいなものだろうしばらく待つかな。

「それで、先程司祭がレイアの命令通りひれ伏したのは何故だ？」

相変わらず人の背後とを取るのがうまいビダーシャルが私に質問し

てきた。聞いてきてくれるのは嬉しいのだけど・・・その・・・バーン様の格好で質問してくるのは止めてほしいぞ！

「勿論、教えるよ・・・でも、その格好やめてくれない？なんか、対面しているだけで無条件降伏したくなるんだよ。」

「余としてもこの格好は気にいつているのだが、まあ仕方ない。」
ビダーシャルが残念そうにいつつ、変装を解いてくれた。
今度、バーン様ネタを何処で仕入れたか聞いてみよう。

「ゴホン。では、先程の魔法について説明しましょう。人間の行動は、全て脳が出す微弱な電気信号で成り立っています。では、その電気信号を何らかの方法操ったり、発生させることが出来れば他人を思い通りに動かす事も可能になるのです！そして、私はそこに目を付けた。私は錬金を用いて、人体の中に電気信号を作り出す事に成功したのだ。ちなみにこの魔法を【ブレイン】と名付けてみました。素晴らしい魔法でしょうビダーシャル大先生！」

しかも、領地においては地中のゼルエルネットワークのお陰で何処にいようと誰にでも命令が出来る。実に素晴らしい魔法だ。

「相変わらず外道な魔法だ。しかし、自分の特性をよく理解し応用した実践的な魔法だな。私から見てもよく出来た魔法だと思う。前回の【メデューサ】といいお前の魔法は、不可視という点に置いてが実に良く出来ている。これで人道的な魔法なら更に素晴らしいのだがな。後は、その魔法を使ってどこまで人間を操ることが可能かを見極めることだな。どうせ、簡単な命令しかできないのであろう？」

H A H A H A、ばれたか。命令をする際は、ひれ伏すイメージをしながら錬金をする事で感情面以外の行動については大体操作できる。感情面とは、この人を好きになれとかそんな感じの命令だ。

「ご明察。流石は、ビダーシャル大先生！よく理解していらっしやる。」

いつもの事ながらエルフの理解力には脱帽するな。まあ、これでエルフ全体が強くなるならそれでもいいか。

「それでレイアよ。もう一人の人間はどうするつもりだ？当初の作戦では、司祭を確保し『肉の芽』を用いて操り何事も無かった事にする作戦だったはずだが？あのメイジに『肉の芽』を植えつけなければ、生かしている意味がないのではないか？」

ビダーシャルが先程から放置している真紅達を見て思い出したかのように聞いてきた。

確かに、司祭を操り人形にするまでは説明したけど、メイジの処遇については説明していなかったな。

「それを説明するには、私の工房に来てもらった方が早いかな。まあ、今簡単に説明すると平民でも魔法が使えるようになる為の人柱になって貰うんだよ。」

私が今までの常識を覆すような事を言っても反応が悪い……ほらもつと褒めようよ！

「素晴らしい考えだわお父様。」

「今までの常識を覆えそうなんて流石お父様。」

真紅に水銀燈、あんまり褒めても何も出ないぞ。

ナデナデ。

娘たちは、ご満悦の様だ。

「ふむ、私としても気になるから後でレイアの工房に行かせてもらうとする。」

「是非来てくれ！今まで娘達以外誰も来てくれなくて寂しかったんだよ。」

そう・・私の工房は、ローゼンメイデンを作っている場所でもあり、人体模型や臓器などが沢山置かれておりメイドを含めて誰も近寄らないのだ。更に、屋敷の地下に有ることもあり、人氣が全くない。まあ、逆の立場なら私も絶対にそんな場所には行かないだろうけどね。

「レイア様！おはようございました。」

突然大声で呼ばれて振り向いてみれば先程の司祭が顔をこちらに向けて挨拶してきた。

全く、びっくりさせるなよ。・・あれ？今、『おはようございました』とかおかしい言葉使わなかった！？

「レイア様！おはようございました。」

再度、挨拶を律義にしてくる。

・
・

どこのオレンジ様だよ!!」

その後は、神父に家の領地はブリミル教の教えを守り健全な領地運営を行っている事を伝えるようにと念を押してロマリアへ帰還させた。

1時間後。

「ようこそレイアのアトリエへ。」

ビダーシャルを工房にご招待した。

「思ったより小綺麗な場所だな。それに空調もしっかりしている。」
当然じゃないか。なんといってもビダーシャルの家で拾ったクーラーをここで使ってるんだからさ!言ったらビダーシャルに殴られそうだから黙っておこう。

「まあ、そんなことは置いておいて本題に入るよ。当然、ビダーシャルも知っているかもしれないけど平民は魔法が使えない。だが、貴族との間に出来た子ならば魔法を使う事が出来る。要するに魔法を使う上で一番重要なのは血統である!」

ビダーシャルがウンウンと頷いている。

「至極当然だな。そうになると、先程のメイジの血液を第三者に輸血する事で疑似的に平民に魔法を使わせようという考えか?」

いいところを突きますね。流石は、知識豊富なエルフだ。

「その案も当然考えたけれど、問題があつて廃案にしたんだ。先ず、血液交換を行つておもしろい効果は時間と共に薄れてしまふ。なんせ、人間自体が血液を作つてしまふからね。更に、血液型が合わぬ人間同士の血液交換は危ないからね。」

「血液型？よく分からないが血液に関する何かであろう。それで、お前が一番重要と言つていた物が使えないとなれば一体どうするつもりだ？」

よくぞ聞いてくれた！

「それでは実際にお見せしましょう。水銀燈、真紅。」

私が二人に声をかけると先程捕獲したメイジを壁に設置された椅子へと運んだ。そして、暴れない様に全身にゼルエルを使った拘束具と目隠しを付けた。そして最後に細い針を脊髄に差し込んだ。

プス。

準備が完了したところで、私が何時もつけているマジックアイテムの指輪と腕輪を外した。

「ゴホン。ビダーシャルも知つての通り、私は土系統以外の魔法を使うことが出来ない。だが、あのメイジをゼルエルネットワークの末端と物理的に接続する事でこのような事が出来る！ウォーター・シールド。」

私が水系統の魔法を唱えると、全身を覆うように水の薄い膜が出来た。

「ふふふ、凄いでしよう。更にこの凄いところは、私自身の精神力を消費しない事にもあるんですよ。なぜなら！」「アレの精神力を無理やり消費させているのであろう？」「……………」

さ、先に言われた！人の説明を途中で区切るは良くないと思います！

「なるほど、そこまで見せて貰えば後は言わずとも分かる。その人間を精神力のタンクとして使いゼルエルという触媒を通じて魔法自体を他者へ譲渡させるといふことか。恐らく、ゼルエルを素材とした指輪か杖の様なものを平民に与えて、魔法を行使すると何らかに電気信号が走りメイジが魔法を発動させるという仕組みなのだろう。」

「Exactly（その通りでございます）」

いや〜、流石は一を聞いて十を知るビダーシャルだ。説明がいらないから助かるわ。

「友として忠告しておく。あまり目立った事をするとな身を滅ぼすぞ。」

心配してくれるか……ありがとうビダーシャル。

「忠告ありがとう気を付けるよ…………さて、そろそろ上に戻って晩飯でも食べようか。今日は、久しぶりに私が料理を作るからさ。」

「ああ、楽しみにしているぞ。」

主人公は、司祭を味方につけた。（後書き）

本話を最後まで読んでいただきありがとうございます。

よろしければ主人公の使い魔についてアンケートのご協力をお願い致します。

注意1）お一人様、一回までのご投票でお願い致します。

注意2）アンケートの締め切りは、締め切りを11月中旬に予定しております。締め切り日の詳細につきましては、別話で報告させていただきます。

注意3）使い魔は、全てエヴァの使徒になっております。

候補1：【レリエル】

候補2：【アラエル】

候補3：【アルミサエル】

候補4：その他使徒（ご希望の使徒をご記入ください。）

今後もよろしくお願い致します。

主人公は、拳法を学ぶ。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

前話で行ったアンケートの中間報告を致します。

ご回答いただいた方々に深く感謝感謝です。

使徒名 投票数

第一使徒アダム	1
第二使徒リリス	0
第三使徒サキエル	1
第四使徒シャムシエル	3
第五使徒ラミエル	7
第六使徒ガギエル	1
第七使徒イスラフェル	1
第八使徒サングルフォン	0
第九使徒マトリエル	0
第十使徒サハクイエル	0
第十一使徒イロウル	2
第十二使徒レリエル	5
第十三使徒バルディエル	1
第十四使徒ゼルエル	0
第十五使徒アラエル	8
第十六使徒アルミサエル	1
第十七使徒タブリス	5

現在、アラエルを筆頭にラミエル、ダブリス続いております！この

ままぶつちぎるか楽しみです。

また、あとがきの方で注意が気を追加致しましたのでよろしければ
見てください。

締切日などを追加致しました。

主人公は、拳法を学ぶ。

現在、『ネフテス』の謁見の間にいるレイアです。

今、私の目の前にはダンディーなエルフのテュリユークが座っております。

「お久しぶりです。この度は、我が領地との貿易の件が纏まりましたのでご報告に参りました。後、個人的な贈り物として私が作成したマジックアイテムと私が考えた魔法について纏めた本をご用意いたしました。」

まあ、常套句としてはこんなものでいいかな？

しかし、やっぱりこういう場合は苦手だ。やはり、ビダーシャルにお願いすべきだったとちよつと後悔した。

「そのような口調で話さずともよい。どうせ、常套句だから言っておいた方が形になるかな？とか思っているのである。まあ、そんな事はどうでもよい。この度は、御苦労であった。レイアの働きもおかげで今後エルフ全体の食事の質が向上するであろう。それと、お主の横に置かれていた物がビダーシャルから報告があったローゼンメイデンといった自動人形らしいな。」

こいつら、実は人の心の中読めるんじゃない？と思ってしまう位、私の心境を的確に捉える辺りが相変わらず凄い。もはや、エルフだから仕方がない・・・としか言えない。

「よくぞ聞いてくれました。この度、テュリユーク殿にはローゼンメイデン第二ドール金糸雀をご用意いたしました。詳しい説明は、

是非本人から聞いていただけると幸いです。ローゼンメイデン達は、全員が個性を持っている為、きつとテュリユーク殿を退屈させないでしょう。」

金糸雀は、音楽が出来る子だからきつと『ネフテス』の支店でも頑張ってくれるだろう。しかし、ここに来る道中で『薔薇族』に置いてきた双子の事がちよつと心配だ・・・。

まあ、アーベやミチシタと仲良くやってくれたらいいな。基本、あの変態達もいい人だから大丈夫だよな？

「それは楽しみだ。我としてもここまで色々貰って何も返さないとっては、統領で無くても一人人としても問題だと思つてな、お主にささやかながら贈り物がある。」

おつしゃー！またもやエルフ謹製の装備をGETだぜ。

一体、どんな物が貰えるか楽しみだ。今現在、火と風と水の魔法を扱えるマジックアイテムを貰っているから、恐らく土系統の何かかな？

は！もしかしたら、以前に頼んでいた嫁の件かもしれんぞ。いや！そうに決まっている。

「テュリユーク殿も人が悪いですな。そういう事ならもつと早く言つてくださいよ。第一印象で全てが決まると言つても過言でないのに、いきなり未来の嫁と対面とは思つてもみませんでした。」

シーン。

あれ？違つたの？

おかしいな、私の読みは外れる事はあまり無いはずだが・・・。後、テュリユークや護衛の人達からの視線が痛い；；；

「……生憎とレイアが期待するような物ではない。だが、レイアは我々エルフが使う相手の嘘を見抜く魔法を欲していたであろう？」

と言うことはだ。実は、例の魔法は先住魔法で無くて系統魔法であったのか！しかし、それならば何故ビダーシャルが私にその事を教えなかったか疑問だ。

「確かに、是が非でもその魔法について習得をしたいと思っております。やはり、交渉事などの際に何かと便利という点に尽きます。なんせ、人間社会は真黒ですから……。しかし、その魔法は私の推測ですと先住魔法に属するものだと思うのですが私でも使うことが出来るのですか？」

もつともな疑問をテュリユークに聞いてみた。

「お主の予想通り、件の魔法は先住魔法である為、お主では使う事は出来ないであろう。しかし、それと近い技能を習得する事は可能である。その為にその技能を持つ特別顧問に来ていただいている。非常に気難しい方なので色々気を付けるように……。後、頑張って生き残れ。」

最後に何やら凄い事言わなかった！それに、何故か敬語を使っている事も非常に気になる。

ゾクリ

私の本能がレッドアラームを鳴らしているぞ。

おっし、貿易の件の報告も終えてローゼンメイデンもプレゼントしたし逃げよう！

後の事は、全てビダーシャルがやってくれるだろう。そうと決めれば回れ右だ。

大急ぎで入ってきた扉に向かって反転した。

ドーン。

その時、前方にある壁？に衝突し、尻もちをついた。

あれ〜〜？こんなところに壁なんて会ったけな。ぶつかった壁？を下の方から見上げてみた。

まずは、巨大な靴がある・・・一体何cmの靴だよ。そして、引き締まった足・・・鋼鉄のような筋肉と六つに割れた腹筋・・・そして、三つの角を付けた漆黒の兜を付けた鋭い視線を持つ男がそこに立っていた。

こ、このお方は！

「アツ・・・・・・・・（パクパク）！」

名前を呼ぼうとしたが、動揺してしまい喋れなかった。

「遠いところから申し訳ない、ラオウ殿」

一体、エルフはどうなってやがる！一騎当千とかLvじゃないぞ。ラオウなら一人で国が落とせるぞ。

「うぬが、テュリユークの話にあった小僧か。今回の事で、ユリア

の件の貸しは返したぞ。」

「はは、幅広い友好関係があるのですね。もはや、私は貴方に何も突っ込まないぞ。」

「お主の防御力があれば、恐らく死なないであろう。ラオウ殿のところでしたっけ。そうすれば、例え魔法が使え無くなるうともあらゆる局面で生き残る事が出来るだろう。それと、ビダーシャルから伝言だ。『貿易の件は、全て私と真紅、水銀燈に任せておけ。学院入学まで生きていたらまた会おう。追伸、今回の件、レイアの両親には既に了承済みだから安心して一年半修行に励め。後、工房の方は水銀燈が面倒を見ると言っていた。』」

「なんだと！そんなの聞いてないぞ！まだまだ、領地を改造しようと思っていたのに、ここに来てまさかの展開だよ。それに、北斗神拳ってそんな一年半で学べるもんでもないだろうorz」

ガシ

ラオウの巨大な手が私の首を掴んだ。

「行くぞ。」

ズルズル。

引きづられて行く私・・・ああ、世の中って無常だな。とりあえず、挨拶くらいはした方がいいよね。

「よ、よろしくお願いします。」

生きて帰れるかな……。最近、魔法学院に入学できるか本当に不安になつてきたぞ。

数日後。

ラオウに連れてこられ、今現在『拳王軍』の集落にいます。色々と世紀末の人達や理解不能な拳法を使う人達が沢山います。

「おおおお、北斗剛掌波（ほくとごうしょうは）！！」

ゴオオオオオオ！

ギャー、マジで死ぬ死ぬ！もはや、訓練になっていない。

一撃もらえばボン！と死んでしまう。頼みの綱のA・T・フィールドがあるからギリギリ生きてはいるが技の衝撃までは殺しきれず死にそうです。

パリーーン。

パリーーン。

パリーーン。

それに、必殺技の中には普通にA・T・フィールドを突破してくることがあるのが本当に怖い。もしも、全部のA・T・フィールドが一撃で消えた事を想像すると身の毛もよだつ。

「助けてくださいトキ殿。このままでは、技を盗む前に死ぬ死ぬ。」

訓練を眺めているトキに助けを求めた。貴方の兄なのだから止めてくれ。

「H A H A H A、兄さんがあんなにも機嫌がイイのは珍しい。レイアが幾ら技を撃つても死なないから色々試しているんだろうね。最近は、戦争もなくて物足りなさそうだったからね君が来てくれて本当によかったよ。」

あれで機嫌がいいのかよ！それに私を使って技の練習をするなど言いたいが・・・怖くてそんなこと言えないです。

こうなれば、こう一人の兄弟のケンシロウをお願いするしかない。

「ケンシロウ殿、死ぬ前に助けてください；；」

私が心を込めてお願いをするとケンシロウが近づいてきてくれた。おお、貴方こそ神だ。

「人を蘇生させる秘孔もある安心しろ。」

・

・

・

・

N O O O O O O O O O O O ! !

もはや、誰も頼りにならないこの現状orz

「そろそろ止めを刺してやろう。はああああああ　！」

止めてっなんだよ！ヤバイぞ！拳法など素人の私が見ても鬨気らしきものを感じる。

守りに徹するんだ！ゼルエルの絶対防御を信じるんだ。

「殖装　！死んでたまるかー！ー。」

ゼルエルを着込み少しで防御力を上げて、A・T・フィールドを展開した。以前にアーベと戦った時は10枚が限界であったが今はトライアングルになったおかげが15枚張れる。1ランク上がると5枚増える事が分かったぞ！って今はそんな時じゃねー。

「天将奔烈　（てんしょうほんれつ）！！」

ラオウが両手に込めた猛烈な闘気が私に向かって飛んできた。

パリン、パリン、パリン、パリン……。

一瞬にして全てのA・T・フィールドを貫通した。

ドドドーン。

ラオウが放った闘気の衝撃が、ゼルエルを着込んだ私を打ち抜いた。

「グハ！ゴゴゴッポ。」

内臓にひどいダメージを負ったのが分かる。喋ろうと思っても吐血してしまう。ダメージを喰らう前から、腕輪のマジックアイテムを使いヒーリングを行っていたがダメージが未だにダメージが癒えない。

「兄さん、やり過ぎです。幾ら死なないからって、秘奥義まで使わなくても……。それより、早く手当てをしないと死んでしまう。」

慌てて駆け寄ってきてくれるトキに涙した。貴方は、いい人だ。

「何故死なぬ？正確に秘孔を貫いたはずだ。」

私が感傷に浸っているとラオウがとんでもなんて事を言いやがった！人様の秘孔を正確に突いちゃダメだと習わなかったのか！

死なない理由は・・・考えられるのは私が使徒の能力を持っているからかな？それ以外に思いつかないが、とりあえず神様ありがとう；

「ありがとうトキ。」

とりあえず、トキにお礼を言っておいた。

無事に解啞門天聴かいあもんでんちやうを盗んで生きて帰ることが出来るか凄く不安に思うレイアであった。

北斗の技の解説：

天将奔烈（てんしょうほんれつ）

掌から凄まじい闘気を放つ必殺の拳。 北斗剛掌波のパワーアッ

プ版みたいなものです。

平たく言うと、ファイナルフィラッシュです。もしくは、両手撃

ちのかめは 波です。

北斗剛掌波

掌から凄まじい闘気を放つ必殺の拳。

平たく言うと、片手撃ちのかめは 波です。

解啞門天聴

意志と関係なく口を割る。抵抗すると激痛の上、血を噴出す。

平たく言うと、自白剤？みたいなものです。

主人公は、拳法を学ぶ。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

前話でとったアンケートで注意書きに漏れがあった為、この場を用いて追加します。

注意1) お一人様、一回までのご投票でお願い致します。

注意2) アンケートの締め切りは、締め切りを11月中旬に予定しております。締め切り日の詳細につきましては、別話で報告させていただきますと思います。

注意3) 使い魔は、全てエヴァの使徒になっております。

追加分

注意4) 順位が同列のものがあつた場合には作者の方でサイコロを振らせていただきます。

注意5) 劇場版とアニメ版でご希望がある方は、その旨の記載もお願い致します。特に無い場合は、劇場版を優先して採用をしたいと思ひます。

注意6) アンケートの締め切りは11/12(金)の24時をもって終了とさせていただきます。

以上、3点を追加致します。

主人公は、そらへ旅立つ。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。
アンケートの中間結果を報告します。

- 第一使徒アダム 1
- 第二使徒リリス 0
- 第三使徒サキエル 1
- 第四使徒シャムシエル 3
- 第五使徒ラミエル 10
- 第六使徒ガギエル 1
- 第七使徒イスラフェル 1
- 第八使徒サンダルフォン 0
- 第九使徒マトリエル 0
- 第十使徒サハクイエル 0
- 第十一使徒イロウル 2
- 第十二使徒レリエル 5
- 第十三使徒バルディエル 1
- 第十四使徒ゼルエル 1
- 第十五使徒アラエル 8
- 第十六使徒アルミサエル 1
- 第十七使徒タブリス 7
- 第十八使徒リリン 1

現在TOPが入れ替わりラミエル、アラエル、ダブリスの順に続い

ております。

まさかの大逆転があるか非常に楽しみです。

このまま逃げ切ることができかなラミエル^^

主人公は、そらへ旅立つ。

ラオウに拉致されて、早一年が経過してしまった……。時の流れとは、早いものだと思っただけです。

「まったく、聞いてるのですか？ 大体、何も考えずにあんな変態を私達の契約者にする事自体が問題なのです。あいつらの変態っぷりには、もう嫌気がさします。蒼星石もこの機会にたっぷりと文句を言っただけです。」

聞いてますとも……。変態という面では、全くもって同意しますよ。蒼星石。しかし……。せめて、訪ねて来るなら早朝は、止めてくれ。

お父様は、とても眠いです。

「翠星石、あんまりお父様を責めるのは悪いよ。僕だって、身の危険を感じた事は一度や二度じゃないけど、きつと考えあつての事だと思っよ。」

・
・
・

「も、もちろんその通りだよ。二人が離れ離れになると可哀そうだからと思って同じ集落の人達に契約者になって貰ったんだよ。二人だつて一緒の方がよかつたでしょ？ それにさ、アーベやミチシタも趣味はアレだけど、その他については、凄くいい男だと思うよ。」

容姿、魔法、力、地位、性格どれもとっても最高峰だ……。ただし、

ホモだけど。

「まあ、そこだけは認めてやるです。・・・ホモだけど。」

「確かに異常なまでに強いよね。前に一度、アーベが僕の事を本当に女の子が確かめようとした事があつてさ。その時に僕と翠星石の二人がかりで戦った事あるけど・・・。結果は、惨敗だったよ。庭師の如雨露じゅうるや僕の庭師の鋏はさみも全く効果がなくてさ。もちろん、何もされなかったよ。なんか、卑猥な形状の槍を出した瞬間に『ああ・・・女か』と言って、そのまま勝負はお流れになっただけだね。」

きつと、槍が反応しなかったのだろう。

それにしても水銀燈と一緒に開発した王水を作り出す如雨露や高周波の刃を持つ鋏が効果が無いとは・・・相変わらず意味不明だな。

「エルフだから仕方ない。」

そう、エルフだから仕方がない。最近、この一言で全部片づくようになってきた気がする。

「それで、お父様は修行の方はどんな感じなのですか？そろそろ、修行を初めて一年になるので水銀燈を始め真紅や領地のご両親が心配されてましたよ。」

ここで、当然全て覚えてたさ！みたいに言えたらただけ良い事だろう。

ぶつちやけ、何も覚えてませんorz

あれから、変わった事といえば筋肉が付いてきて細マッチョになってきた事くらいだ。

一応、午前にラオウの実技講座というなのリンチを受けて、午後にはトキから座学を学んでるんだけどさ、ウンともスンとも反応がないんだよ。

「正直・・・まだ何も覚えてない。毎日、筋トレとラオウのサンドバックになる日々です。もうすぐ、学院に入学する時期になるし、それまでには最低限の技が無理でも・・・秘孔位は覚えて帰れるように努力する。後、領地にはなるべく手紙を書くようにするから届けてくれない？」

翠星石と蒼星石が、やっぱりなと顔をしている。

「どうせ、そんな事だろうと思ってイイ物を持ってきてやったです。」

翠星石がカバンの中から一冊の手帳？らしきものを取り出した。

えー、なになに『アミバ天才手帳20XX』！！

アミバってあの人だよな？一体、何が書いてるかちよっとワクワクする。手帳のタイトルに天才と書いてある辺りがいい味だしてるな。さて、中身の方は何が書いてあるのかな？

ペラ、ペラ・・・。

・・・

す、すげー！。人体の秘孔の位置や突く際のコツや効果などが

詳しく纏められている。また、失敗談や失敗から得た情報をもとに成功へのアプローチの取り方など書いてあった。そして、最後にアミバ流北斗神拳についても書かれている。

「ちょ、ちよつと、二人とも！この手帳を一体何処で手に入れたの！？」

翠星石と蒼星石に聞いてみた。

「ここに来る途中に、トキさんにそっくりな人から条件付きで貰ったんだ。本当ならお父様と相談すべきなのだけど、ごめんなさい。」

「感謝するですう。」

条件付き？という事は、交換条件と言うことか。

まあ、問題無い。この手帳の価値は、計り知れないから、私にできる範囲の事ならば叶える。

「取引の場に私がいなかったのは残念だが、よくぞこの手帳を貰ってきてくれた。偉いぞ！翠星石、蒼星石。それでどんな条件を言われた？」

ナデナデ。

「なんでも、お父様の工房で色々実験がしたいと言っていたです。最近では、戦争が無いから献体が無くなったとか……。」

な、なんで私の工房の事知っているんだよ！

それに、貴重なメイジを使って実験だって……あれ？いいんじゃないね！

アミバなら、魔法力を高める秘孔や延命の秘孔などを使って色々パワーアップさせてくれるに違いない。

「ふふふふ、本当によくやってくれた。早速、領地宛に手紙を書くから届けてくれ。それと、この手帳をくれた人に会ったら、よろしく言っておいてくれ。きつと、帰り道あたりで会うだろうから渡してくれればいいよ。」

早く、領地にかえってアミバに会いたいぞ！

その為には、一刻も早くこの手帳を読み解きラオウから技を盗み帰る！

「それじゃ、そろそろ私達は『薔薇族』に戻るね。来月には、水銀燈に会いに行くからその時に手紙を渡すよ。」

よろしく頼むよ蒼星石。

「帰るです。お父様も体には気を付けやがれです。」

二人は、トランクに乗るとそのまま飛び去って行った。

朝から騒がしい日だった。しかし、収穫は大きい！

さて、手帳を読む前に皆の朝ごはんを作るかな。

何処に行っても料理を作らされるレイアです……

数週間後の午前。

ゼルエルを身に纏い朝の実技講座という名のランチを受けております。もちろん、対戦相手は恐怖の代名詞ラオウです。

「ブレット！」

地面の石を効果させてラオウに向けて高速で飛ばした。

「ははははは、そんなヤワな魔法で、この身体に傷一つつけることはできぬ。」

なんて出鱈目な人だ。カウンターで反射もせずに、己の筋肉の身で防いでいる。おまけに、こちらの攻撃を無視して、レイアの頭一つ分くらいある拳がマシンガンごとく飛ばしてくる。

ドドドドドドドドドドドドドドドド。

防ぐたびにA・T・フィールドがミシミシと悲鳴を上げている。最近、ラオウの拳を正面から受けるのを止めてA・T・フィールドを斜めに張る事で威力を受け流す努力をしていが長くはもつまい。

だが、今日の私は一味違うぞ。

「錬金！ ウインド！」

地面のアルミニウムの粉末に錬金してウインドで撒き上げ疑似的な砂嵐を作った。

「このラオウ相手に小細工など笑止。」

もちろん、こんなことでラオウの目を騙せるはずが無いのじゃ重々承知の上だ。だが、通じないと分かってもマトモに戦う方が勝率が低いのだから仕方ないでしょ！

「はあああああああ、北斗剛掌波ほくとつしゅみは」

「エクスプロージョン！」

パリンパリンパリン。

当然、私の魔法が撃ち負けてラオウの技が私のA・T・フィールドを貫通した。しかし、予想通りだ！

爆風が収まらない中、ゼルエルを脱ぎして匣に使い、フライで空からラオウに攻撃を仕掛けてやる。

ゴオオオオ。

爆風が収まらないうちに何とかラオウの真上までこれた。ふふふ、一年ほどサンドバックにされた恨み果たさせて貰うぞ。アミバの天才手帳より学習した秘孔を突かせて貰うぞ！

そして、上空からラオウの首筋に向かって落下した。

「貰った！ゼルエル！」

ガシガシ。

ゼルエルの触手を使い、ラオウを拘束する。ラオウ相手に何秒持つか分からないが私がラオウに触れるまで持てばいい！そして、腕をラオウの首筋へと伸ばした。拳法を学び？一年目でラオウを体に触れる事が出来る！喜びでいっぱいであった。・もちろん、性的な意味じゃなくてね。

「無想陰殺むそういんころ」

ゴオオーーーーン。

いきなり目の前が真っ暗になったと思ったら、ラオウの後ろ蹴りが飛んできた。回避しようにもラオウの攻撃から逃げられるはずもなく。

「ヒデブー！。」

ズシャー！

ラオウのけりを受けて100m程飛ばされてしまった。

ほんの一瞬でもラオウの裏をかいたと思った私が馬鹿でした。それにしても、ゼルエルの拘束を一瞬で引きちぎりやがった。なんというチート！

「ほう、一瞬でも兄さんの背後を取るとはね……。それに、突こうとしていた秘孔はまだ教えてないはず。一度、じっくりと話し合った方がいいかもしれない。」

ニコニコ

し、しまった！まだ教えて貰ってない秘孔と手帳に書いてあった秘孔がごっちゃになっていて、間違っただけで教えて貰ってない秘孔の方を使ってしまった。

「ほう、トキが教えてない秘孔を知っているとはな。」

ボキボキ。

トキの笑顔が怖い……。ラオウの指を鳴らす音が怖い……。

「へ、ヘルプミー！！」

5分後。

もう、洗いざらい暴露しました。なんだって？そりゃさ、ラオウとトキがコンビを組んで攻めてくるんだもん速攻で口を割りましたよ。私だってまだ死にたくない。

「あのアミバがレイアと接触ね・・・まあ、似た者同士惹かれあうということか。どうしようか兄さん。」

「いやいや、全然似てないから！」

あんな外道と一緒にして欲しくは無いぞ。私は少なくとも無実の人には、まだ何もしてない・・・よね？

「今まで通りにすればよい。結果的に、小僧が成長したのは事実だ。」

「兄さんがそれでいいならいつか。」

と、とりあえず命は助かった。毎度のことながら神様ありがとう。

「勝手な事をしてすみませんでした。今後もよろしくお願いします。」

土下座をしている私の前にラオウが立ちふさがった。

嫌な予感がする。

「だが、この拳王の師事以外で成長する事を許した覚えはない。その償いはして貰うぞ。」

成長するのに許しがいるとか、無茶苦茶な論理だ！

だが、死にたくないのでも従いますよ！靴の裏を舐めろというなら・・・舐めるかもしれない；；

「以前にゼルエルを着込めばいかなる環境でも生きられると言っていたな。」

『拳王軍』に來た当初に言った事をよく覚えてるな・・・さすが統領。

「は、はい。深海だろうと火山の中だろうと何処でも生きられる自信はあります。」

しかし、そんな事を聞いてどうする。このチート集団なら火山だろうが深海だろうが余裕で生きられると思うのだが・・・。

「この拳王の装備は、全て月の石で出来ている。」

驚愕の新事実だな。それにしても隕石を加工して作った装備をしているのか・・・流石、ラオウだ。

・
・
・

え、でも何でそんな事を今言っの！？

ま、まさか！

「まさかとは思いますが、あの月まで行って石を取って来い！なーんて事はありませんよね？H A H A H A H A H A。」

「その通りだ。」

幾らなんでも無理でしょ！オウ！確かに、宇宙でも生き残れると思
うよでもさ・・・宇宙からきた使徒もいるだろうし。

「でも一体どうやっていくのですか!？」

あえて飛んで行けそんな事を黙っておこう・・・そうすれば、きつ
と考え直してくれるはずだ。

「あの月の凸凹ってどうやってできたか知っているかい？」

凸凹ってクレーター的事だよな？

そんなの言われなくても知ってますよトキ。隕石が衝突で出来たん
でしょ。

「あれは「兄さんの闘気が当たって出来た跡なんだ」……………
え。」

なにその驚愕の新事実!？

「分かったのなら行くぞ。時間の無駄だ。」

ガシ。

ズルズル。

「え、ちょっとまって「ケンシロウ、一週間分の食料を。」」

お願いだから、私の話を聞いてくれラオウ様——。それに、一週間は少ないって！それ片道分しかないでしょ。私に餓死しろといたいのか。

10分後。

『拳王軍』で一番高い建物の上にあります。

はあああああああ！

ラオウが今まで以上に闘気を貯めております。

逃げたい・・・すぐさま逃げたい。家に帰って可愛い嫁いないけでとメイド達に囲まれ余生を過ごしたいです。

「ト、トキ。凄く聞きたくないんだけどさ・・・まさか、ラオウの闘気に乗ってあそこまで行けとか言わないよね？」

トキが何言ってるんだコイツ？みたいな顔をしている。

「大丈夫だよ。レイアのA・T・フィールドだっけ？あれを破るような闘気じゃないから安心していいよ。」

いやいや、心配しているところはそこじゃないから！

「そろそろだ。諦めて荷物を持って兄さんの直上へ行くといい。無事に帰ってこれたら、いくつか南斗の技を教えてやるぞ。」

無事に帰れたらとか言わないでくれよケンシロウ！だが、南斗の技を教えてくれるのは楽しみだ。絶対に無事に帰ってきてやるぞ。

食料よし！着替えよし！

おっし、完璧だ。

「ゼルエル！では、行ってくる。必ず帰ってくるから戻ったら今の約束わすれないでよケンシロウ。」

ふらふらー。

ラオウの直上に到着した。

「ごっごおおおおー！ー！ー！。

下では、ラオウの闘気が渦巻いている。本当にA・T・フィールドを突き破らないよね！？もし、突き破ったら、確実に塵も残さず死ぬ……。

「フィールド全開！」

私がA・T・フィールドを張るのと同時にラオウが動いた。全ての闘気を拳に集中させて月を目がけて殴り上げた。

「わが人生に一片の悔いなし！」

ドゴーーーーー。

ちょっと、それ今言うセリフじゃないでしょ！！

ラオウ相手に突っ込みたかっただけど、闘気に乗ってあっという間に大気圏を突破した。

「うほw早い早い。行きは一瞬だよこれ……………あれ、これどどちやって止まるの!?!」

いやー、誰か止めて止めて!このままじゃ月のクレータになっちゃうー!!

ああ、もうすぐ月だ。

ドドドゴオオーーーーーン。

「ラ、ラオウ……………月の近くで止めるようにして欲しかった……………」

ラオウに聞こえるはずもない文句を言いつつ空?を見た。

「やっぱり、ハルケギニアは青かった」

ガク。

北斗の技の解説:

天将奔烈 (てんしょうほんれつ)

掌から凄まじい闘気を放つ必殺の拳。 北斗剛掌波のパワーアッ

プ版みたいなものです。

平たく言つと、ファイナルフィラッシュです。もしくは、両手撃

ちのかめは 波です。

北斗剛掌波

掌から凄まじい闘気を放つ必殺の拳。

平たく言つと、片手撃ちのかめは 波です。

解啞門天聴

意志と関係なく口を割る。抵抗すると激痛の上、血を噴出す。

平たく言つと、自白剤？みたいなものです。

むそういんさつ
無想陰殺

気配を読んで殺気との間合いを見切り、無意識に蹴りや突きなどを繰り出す必殺の拳。

平たく言つと、オートカウンターです。

主人公は、そらへ旅立つ。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次話は、まだ考えてませんがそろそろ入学させようかなと思います。

主人公は、意気投合する。(前書き)

いつも読んでいただき誠にありがとうございます。
皆様のご協力のお陰でレイアの使い魔が決定しましたー！。
アンケートのご協力本当にありがとうございます。

アンケートの集計結果をお知らせいたします。

#	使徒名	投票数
1	第一使徒アダム	1
2	第二使徒リリス	0
3	第三使徒サキエル	1
4	第四使徒シャムシエル	3
5	第五使徒ラミエル	1 2
6	第六使徒ガギエル	1
7	第七使徒イスラフェル	1
8	第八使徒サندانフォン	0
9	第九使徒マトリエル	0
10	第十使徒サハクィエル	0
11	第十一使徒イロウル	3
12	第十二使徒レリエル	5
13	第十三使徒バルディエル	2
14	第十四使徒ゼルエル	1
15	第十五使徒アラエル	8
16	第十六使徒アルミサエル	1
17	第十七使徒タブリス	7
18	第十八使徒リリン	1

- | | | |
|-----|-----------|-----|
| 1位： | 第五使徒ラミエル | 12票 |
| 2位： | 第十五使徒アラエル | 8票 |
| 3位： | 第十七使徒タブリス | 7票 |

いやー、当初はアラエルが有利でしたが最後になってラミエルが巻き返し逆転です。

というわけで、使い魔召喚の話では【ラミエル】を召喚したいと思います。

いつも感想を書いていただいている方々や投票をしてくれた方々に深く感謝いたします。

ありがとうございました。

主人公は、意気投合する。

雄々しく聳え立つ山々と素晴らしい夜景の元、採掘作業に勤しんでいるレイアです。

現在、月に来て三日目です。

最初に二日間は、到着の衝撃により気絶しておりました。

ドドドドドドドドドド。

ガリガリガリガリガリ。

ゼルエルの触手をドリルにして地中深くまで潜っております。地面が豆腐のようにサクサクと碎けていくよ。流石、A・T・フィールドを使った触手ドリルの性能は伊達じゃないぜ。

地中深くに到達し、良質の石を見つけた事が出来た。

こういう細かい鑑定が出来る土のメイジで本当に良かったと思う。

下手な石を持って帰ると再度送り込まれそうだからね。

約1t程の石を地中から切り取り地表へと帰還した。

「さて、目的の物も手に入れたし早々に帰ろうかな。」

しかし、このまま帰るのも何か寂しいな・折角月まで来たのだし何か記念になる事をしたいな。

・
・
・

別荘を作ろう！

はるか未来にこの別荘を見る事になるだろう。エルフ又は人間の顔が楽しみだ。

そして、外観は某ネズミの国のお城をイメージしよう。

ふふふふふふふふ。

「あたたたたたあああああ！ほわたあー！ー！」

スパパパパパパ。

ダンダンダンダン。

1日後。

「はあはあ。」

ゼルエルをフル活用して、山を切り崩し何とか外形だけは整ったぞ！この短い期間で且つ一人でやる作業では絶対に無いと思う。しかし、やってしまった以上は最後までやるぞ！

次は、中身をくり抜いて内装作りだ。

「あたたたたたたたたたた！」

ドドドドドドドドドド。

更に4日後。

「もう、疲れたよパトラッシュ。」

内装は想像以上に辛かった。最後の方になるにつれて、内装の細工が相当甘くなっているのがよくわかる。

し、仕方ないよね！一人で作ったんだもん。

早速、作ったお城に入り寝ようかな。

「おやすみ、ハルケギニア。」

空に浮かぶ、ハルケギニアに挨拶をして眠る事にした。
ベットが石造りでとても堅いです；；

翌日。

「今日も元気に固定化！固定化！」

せっかく作ったお城が壊れたら、泣いちゃうもんね。だから、後世に残すために丁寧に固定化を掛けていく。

今までなら、歩きながら固定化を掛けるだけで疲れていたのだけど全く疲労を感じなくなった。これも『拳王軍』で鍛えた一年が無駄では無かったなとしみじみ思った。

今の私ならジヨジヨ立ちだって出来そうだ。

ちょっと、やってみようかな。

「やれやれだぜ！」

ドーーーーン。

出来た出来た！素晴らしいぞ私の腹筋。

ぐううーーーー。

ポーズを決めていると、腹の虫がなり始めた。おっと、そろそろお昼の時間か。

ここだと時間の感覚が無くなるから体内時計だけが頼りだよ。

さーーーーて、今日のご飯は何だろうな………あれ？

何か重要な事を忘れているような気がする。

ムシヤムシヤ。

ケンシロウが持たせてくれた保存食を食べつつ考える。

・
・
・

や、やばい。そうだよ、ここ宇宙なんだよ！食料が無いんだよ。なんで、もっと早く気づかないんだよorz
恐る恐る、残りの食料を確認してみた。

「神は、私を見捨てた（´；；；）ウツ……」

一日分しか残っていなかった。なんてこった。

諦めるなレイア！残りは一日分だが細々と食べれば三日は持つはずだ！

今やるべき事は、早急に母星（笑）に帰る事だけを考えるんだ。

ラオウに頼まれた物を触手で抱え込み、出発の準備をした。

最後に、地上から見えるか分からないけど『レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル参上』と大きく書き記した。

月日は流れ……領地に帰った数日後のレイアの工房にて。

「いやー、あの時は本当に死んだかと思ったよ。帰り際に食料が尽きてさ、丸一日飲まず食わずで食事の大切さが身にしてみたよ。」

「あら、いい体験だったのではないかしらお父様。それに、その話何回目？帰ってきてから散々聞かされたわ。」

何度だって話したい事だってありますよー。

お父様の一年半に及ぶ苦労話を聞いてくれよ。

ズブ。

「ラオウと関わるからそうなるのだ。ん！？間違ったかな……」

よそ見しながら、秘孔を突くからですよアミバ。

「あああつあーぎゃー！ー！」

ほら、変なところ突くから相手が死んじゃいそうじゃないか。

「よそ見しているからですよアミバ。ここは私にやらせてもらえな

いか？以前に頂いた手帳からすっかり勉強した成果をお見せしたいなど・・・。」

「ほう、あの手帳の価値を理解するとは若いながらなかなかの逸材だな。しかし、私には及ばないがな。」

HAHAHA、私もその点については十分承知してますよ。

ズブリ。

「あああああああああ・・・。」

ブシャーーーーーー。

血が噴水のように噴出し、両腕が破裂した。

「フム…この秘孔ではないらしい。」

寝台に拘束された男が糸が切れた人形のように何も言わなくなった。

バコーーーン。

「なーにが『フム…この秘孔ではないらしい』だ！『拳王軍』に行つて少しは更生してくるだろうと思っていたが、更に性格が歪んでどうする！？お前の両親に悪いとは思わないのか？」

全く、幾ら私が丈夫でもハンマーで殴らないでくれよ。頭が悪くなつたらどうするんだよー。

「いやー、確かに悪いなと思ってるけど・・・まあ一応両親と領

民の為にやっている事だし、問題ないかなと思っっている。それに、こいつらが領地にちよっかい出してきたのが原因だからさ手加減する必要もないかなと……。それにさ、多分両親も気づいているよ。なんせ私の親だからね。」

親に隠し事をしてもかなりの確率ではれるのが世の常さ・特に工口本の隠し場所とかね。

「折角、私が捕まえてきた木人形デラが駄目になってしまった。まあ良い、どうせすぐに補給できる。」

すぐにとはいかないけど、週一位では補給出来るだろうね。

帰ってきてから聞かされた事だが、貿易でかなり潤っている我が領地を狙い四方から盗賊や悪代官が沢山来たそうさ。まあ、我が家にはトライアングルの両親とビダーシャルとローゼンメイデンも居て更に例の平民でも魔法が使える様になるマジックアイテムを装備した執事達があり、むろん全力で迎撃したようだ。

更に、半年前にアミバ来てからは無償で領民を秘孔や新魔法で治したお陰で平民からは奇跡の領地と呼ばれている。逆に盗賊や貴族からは悪魔の領地と呼ばれている。

そんな事もあったお陰で今や私の領地の精神力タンクは20を超えた。こいつらは、今まで散々いろんな事してきた連中だろうし、当然同情などしない。我が領地の守りの要となって細く長く生きて貰わないとね。

ふふふふはっははははははは。

「敵対する者なら幾らでも捕まえて何をしたらいいよ。もちろん、

どうしても献体が足りなかつたら相談してくれいくつか心当たりがあるからね。」

まあ、心当たりとはぶつちやけ将来的に起こるアルピオン戦争だけどね。それに紛れ込んでトライアングルやスクエアメイジを大量に確保したい。

「それは耳寄りな情報だな。それはそうとレイアよ、本当に私をここに置いていいのか？レイアが学院にいる間に裏切るかも知れんぞ。」

天才アミバが裏切る？何の為に？

そんな利益の無い事などする筈が無いし、エルフに裏切られる事など想像も出来ん。

「好きにして構わない。裏切られれば、私は所詮そこまでの人間だった言う事だ。私はそれでもエルフに生涯忠誠を誓った身なのでエルフであるアミバに裏切られるのならばある意味本望だ。」

・
・
・

「ふ、冗談だ。お前に手を出せば確実に俺が死ぬからな。幾ら天才でも『薔薇族』『拳王軍』『ネフテス』を同時に相手は出来ん。」

私の為にそこまでの人たちが動いてくれるのかと思い、ちよつと感動した。

私の人徳も捨てたもんじゃないな・・・主にエルフ中心に。

おっと、アミバと話しているとどうも時間が経つのを忘れてしまう。

「明日から私は水銀燈を連れて学院に入学し、ビダーシャルは真紅を連れて本業のガリアの仕事に戻る事になるのだが、領地に群がる蠅の処理一人にまかせつきりで大丈夫？一応、ローゼンメイデンの雛尊を両親に託していくから何かあればあの子に屋敷の守りは任せて問題ないから。」

実際、アミバー人居ればお釣りが来るだろうけど一人で守りきれる人数に限界があるのも事実の為、両親には最低限の保険を掛けた。雛尊がいれば、屋敷の皆を工房に逃がす位の時間稼ぎは出来るだろう。

「ああ、この天才に任せておけ。ふふふふ、それにしてもここは良い処だな。好きなだけ研究や実験もやりたい放題。なにより、あのラオウ達がない！さて次はどの秘孔を試すかな。ふふふふふふ」

「そう言われると嬉しいねー。おまけにこの工房の良さが分かる人に巡り合えるとは私も感無量だよ。明日から学院生活か・喧嘩を売ってくる奴らをどう料理してくれよう。ふふふふふ」

「ははははは！！！！わははははー！！」

アミバと私が二人揃って大声で笑った。

「似た者同士息が合うのね。」

「外道が二人もいると私まで染まってしまいそうだ。」

「あら、お父様は外道だけど良い外道よ。」

真紅、ビダーシャル、水銀燈が順に大笑いしている私達をみてボヤ

いた。

主人公は、意気投合する。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次回は学院に入学させようと思います。

さて・・・原作では1年目の様子について描写がすくないからどうして
ようか今から迷ってたり……

これからもよろしくお願い致します。

主人公は、イジメにあう。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして感想を書いてくれた方々、いつもありがとうございます。

主人公は、イジメにあう。

家の門の前で皆にお別れの挨拶をしているレイアです。

「レイアにとって最早学院で学ぶ事など何もないかもしれないが、一応貴族として学院だけは出ていた方が今後何かと役に立つ事もあるだろうから大人しくしてるんだぞ。」

一応じゃなくても、私貴族なんですけど……

それに学んでこいじゃなくて大人しくしているってまるで私が学院で暴れるみたいじゃないか。

「分かっております父上。もちろん、私からは手を出しません……そう私からはね。ふふふふふ」

学院での勉強など正直どうでもいいのだ。私にとって学院生活は、休暇と研究の為に行くようなものだしね。後、ちよいと欲しい物もあるしね。

「レイアちゃん、学院の女の子には気を付けるのよ。今までならいざ知らず、ここ最近でうちの領地は他と比べてかなり潤っているからお金に目が眩んだ女性がきつとちよつかいを出してくると思うけど誘いには決して乗っては駄目よ。」

確かに、学院は家を継げない男女が沢山いるだろうから、下手に肉体関係を持つと後々面倒だ。特に女性の場合は、「貴方の子よ！」って必殺技があるからな……マジ怖い。

でも、金銭目的で近づいてきた女性が居ればいたで面白い事が出来そう。是非、試してみたい秘孔とオークの生態について研究がし

たい。主に何故オークには女がないのかという議題についてだ。

ふふふふふ。

「問題ありません母上。金銭目的で近づいてくる女性などに私が振り向くとハズがありません。私は、エルフ以外とは結婚する気もありませんしね。」

おっと、話をしているうちに大分時間が経ってしまった。
そろそろ、出ないと流石にまずいかな。

「それに、私の事をそんなに心配しないで大丈夫ですよ。ちゃんと長期休暇には帰ってきますから。」

「いや、レイアの心配ではなくて相手の心配をしているのでは……」

ビダーシャルのさりげない一言でその場が凍った。

シーン。

あれ？今までの会話は、実の息子より他人の子供の心配だったと申すのか！

みんな酷い……

泣いちゃうぞーグレちゃいぞー！

「お父様、気を付けて行ってくるの。おうちの事は、全部ヒナに任せて一杯勉強してくるの。」

おお！

こんなお父様でも慰めてくれるのか雛苺よ。
お礼になでなでしてあげよう。

ナデナデ。

「馬鹿やっついてないでさっさくと行くわよお父様。」

了解ですよ水銀燈。

「では、そろそろ時間なので行ってきます。お父様、お母様も色々とお気を付けてくださいね。後、執事とメイド方々言うのが遅くなっただけど、いつも私達を陰から支えてくれて本当にありがとう。これからもよろしく。」

さて、学園までゼルエルで行けば凡そ1時間位かな。これなら自宅通勤も出来た気がするな・・・全寮制とかまじでだるいぞ。

「ゼルエル！途中でまで乗っていくでしょビダーシャル？それともガリアまで送ろうか？」

「いや、途中の町までで構わない。町で火龍をレンタルする。」

おっし、では行きますか。

「レイリー殿、アリア殿、長い間色々世話になりました。近くに来た際には、また寄らせて頂きたい。」

ビダーシャルが家の両親に挨拶をしている。

「いつもで来てくれて構わない。ビダーシャル殿も既にうちの家族同様ではないか。」

「うちの息子が色々と迷惑かけてばかりで本当にすみませんでした。何も無いところですが、いつでも歓迎いたします。」

しかし・・・私がいつも迷惑をかけてばかりと言っ点が気になるぞ！

迷惑ばかりじゃないぞ。ちゃんと、ビダーシャルの事を考えてローゼンメイデンとかプレゼントしたじゃん。

挨拶が終わりビダーシャルがゼルエルに乗った。さて、今度こそ出発するかな。

「それでは、次の長期休暇に帰ってきますねー！。それまで元気でね。」

両親と家の人達に挨拶をして、学院目指して飛び立った。

同日、ビダーシャルと別れて学院付近にて。

「ふう、流石にゼルエルの乗ったまま学院に行くのは不味いからね。なるべく目立たず、行動するのが一番さ。」

学院で一番油断が出来ないのがオールド・オスマンだな。万が一、生徒を亡き・・・粛清している最中に遠見の鏡で一部始終を覗かれては目も当てられないぞ。

対策は、特に思いつかないが。まあ大丈夫かな？いつも生徒の事を鏡を使って監視しているわけでもないだろうしね。

「ふーん、私にはどうでもいいけどね。それでお父様、私は一体どすればいいのかしら？生徒として入学？それとも娘？」

いやー、幾らなんでも娘はヤバイでしょ。主に年齢的に考えてさ。そうだな・・・兄妹というもの変だし・・・恋人？嫁？愛人？どれもぱつとしない。

「普通にマジックアイテムでいいんじゃない？どうせ水銀燈の正体まで分かる人なんていないだろうしね。とりあえず、トランクに入つて昼寝でもして貰っていいかな？」

私がそう伝えると水銀燈は、素直にトランクに入ってくれた。

トランクを持ち、実家から持ってきた僅かな荷物と共に学院目指して歩き出した。

それにしても昨晚の雨のせいか舗装されてない道って歩きづらいな。我が領地みたいに街道全てを石畳みにする位やって欲しいものだ。この学院には無駄にメイジがいるのだから労働力有り余っているだろうに勿体ない。

テクテクテク。

5分ほど歩くと学院の門のところまで到着した。

門について先ず思ったことは、無駄の一言に尽きる。公爵家といいどうして門ばかり大きくしたがるんだ。もっと充実させるべきところがあると思うのだが・・・。

さて、ここを潜れば私も晴れて学院の生徒か・・・この世界に産まれてここに来るまで本当に長かった。

では、記念すべき第一歩を・・・

バシャンパシャン。

私が記念すべき一步を踏み出そうとした瞬間、背後から馬車が私の横の水溜りを横切り泥水が盛大に跳ねた。当然、そのはねた泥は私めがけて飛んできた。

ピチピチ。

防御に定評のあるA・T・フィールドのお陰で泥まみれにならずに済んだが、もしA・T・フィールドが無かった時は入学当日に泥まみれで参加する事だろう。

これには、聖人君子の私でもトサカに来ちゃうぞ。

私の横を通り過ぎて行った馬車が少し先で止まった。

一体、どんなヤツが乗っているか楽しみだ。素直に謝れば入学当日でもある事だし命だけは助けてあげようかな・・・。

私が調理方法を考えつつ、馬車の方へ向って云った。そして、中からデブな貴族が下りてきた。そして、私には目もくれずに学院の方へと歩いて行った。

ブチ。

「そのの貴族！ちよつと待て。」

私が話しかけるとデブ貴族がこちらを見てきた。

「なんだいその口調は？俺は、伯爵家のものだぞ。事と次第によつてはお父様に報告するぞ。」

速攻で伯爵家である事を前面に押し出してきやがった。

何でも親に頼るなデブ。だからお前はデブなのだ。

「これは失礼。私は男爵のものです。お互い時間がないので手短に言いますと・・・先程、貴方の馬車が私の横を通り過ぎる際に泥が跳ねましてね。私が魔法を使わなかったら今ごろ泥まみれになっていたんですよ。その事に対して貴方はどうお考えで？」

さて、どんな答えをくれるかデブ。

「要するに謝れといたいのかな？そもそも、お前がそんな処に立っていたのが悪いに決まっているだろう。むしろ、私の進路を妨害した事に対して詫びてほしい位だ。それに恨むなら、馬車すら用意できない下級貴族に産まれた事を後悔するといい。はははははっは」

笑い声をあげながら学院内に入って行った。

・
・
・

何様だこいつ！今、こいつは私の殺害リストの上位に食い込んだぞ。ちなみに一位は公爵夫人だ。この場で即刻肉塊にしてやりたいが流石に人目が多すぎる。

「貴族様。」

私が殺害計画を立てていると学院のメイドが私に声を掛けてきた。

「ちっ、なんだ？」

私とした事が不機嫌のあまりに舌打ちをしてしまった。
いけないいけない。

「お手の荷物は私達がお部屋までお運びいたします。失礼ですが、お名前の方を教えてくださいませんか？」

ああ、そういえば荷物運びのサービスがあっただけな。しかし、わざわざ運んでもらおう程の荷物でもないで自分で運ぼう。万が一、メイドが水銀燈の入ったトランクを落とした事考えると恐ろしい事になるからね。

「荷物は私が運ぶから構わない。だから君は部屋まで案内してくれ。私の名前はレイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルという。」

私が名前を告げるとメイドが驚いたような眼で私を見てきた。

「も、もしかして奇跡の領地の!？」

ああ、そういうことね。

「領民の中には、確かにそう呼ぶ人もいるね。・・・ところで、そろそろ部屋に案内をしてくれないか？」

メイドが慌てて、歩き出し私を部屋まで案内してくれた。
部屋に着いてからは、荷物を置いてから入学式の会場へと移動した。

20分後。

「ようこそ、若き才能あふれる貴族の諸君、入学おめでとう。これから学院で様々なことを学び立派な貴族になれる様に努力をするように……」

壇上上がりオスマンが入学の挨拶を開始した。

更に20分後。

オスマンの話なげーー。

どうやら、話が長いと思っっているのは私だけでは無いようで周りの人間もイライラしているのが分かる。

きよるきよる。

やはり、いるか……。ここからでは、後姿しか確認できないが。あのピンク色の髪をした女が恐らくルイズだろう。そして、ルイズの近くにいた蒼髪の小柄な女がタバサかな？そして、あの赤髪的人物がキュルケか。相変わらず人類としてあり得ない色をした髪だな。。。

同じクラスにならない事を願う。あいつらに関わると碌な事が無いのは目に見えてるしね。

「以上、オールドオスマンからの挨拶でした。それでは、これから自由行動です。まだ、慣れない学院でしょうからこの機会に色々と見て回ってください。」

ロングビルが新入生全員にそう伝えると各自各々行動を開始した。

さて、私はどうしようかな・・・まずはコック長のマルトーに会って明日からの食事について話さないとな。マルトーの腕が悪いというわけでは決まてないが・・・原作にあるような料理を朝から食べるなどあり得ない。それに水銀燈は、美食家だからあんな味付けの濃い料理ばかり食べさせたら怒ってしまう。そうと決まれば近くにいるメイドに案内を頼むかな。

お！ちょうど、いいところにメイド発見！

話しかけようと思った瞬間にそのメイドの髪の色が黒い事に気がついた。

「その・・・」

へー、シエスタ以外にも黒髪っていたんだ・・・いるはずないよな。

ここで関わるのも面倒だな。かといって他のメイド達も忙しそうだし諦めるか。

「その黒髪のメイド、悪いがコック長のマルトーの処まで案内してくれないか？」

「え？マルトーさんのところですか？・・・分かりました。こちらへどうぞ。」

貴族が平民を訪ねるのが珍しいのか、先程からシエスタの挙動不審が手に取るように分かる。まあ、どんな用事かをこのシエスタに告げても同じことをマルトーにも伝えないと行けないから二度手間はごめんだ。

2分ほど歩くと厨房に到着した。

どうやら、夜の入学祝いの準備をしているらしく厨房の皆が忙しく働いている。まさに、戦場だな。うーん、悪い時間に来ちゃったな。

シエスタがマルトーを連れてこちらにやってきた。

「お呼びでしょうか貴族様。何か料理にご注文がおりでしょうか？それとも料理に何か問題がありましたでしょうか？」

やっぱり、従弟だとあまり似ていないか。

「そんなに畏まらなくてもいいよ。私は、本日入学したレイア・ドラシエール・フォン・ヴェーゲルという者だ。2つ程お願いあるのだが単刀直入に言うと、一つ目は私の分の食事は朝昼晩共に用意しなくていい。二つ目は皆の食事の時間が終わってから少し厨房を貸してほしいんだ。当然、借りた厨房の片付けから全て私一人でやるから気にする必要はない。勿論、マルトーの料理がとても美味しいのは知っている。しかし、あの量と味付けはちよつと私にとっては辛いものがあつてね。」

マルトーもシエスタも凄く驚いた顔をしている。まあ、そりゃそうか。自分で料理から片付けまで全部やるから言いという貴族なんて今まで居なかつただろうしね。

「うーん、しかし・・・万が一料理をしていて貴族様が怪我でもされたら・・・それに私達の立場が・・・」

まあ、マルトーの気持ちも分からないでもない。料理人にとって厨房は大事なところだ。それを訳も分からずに無い貴族がいきなり来て

厨房を貸せなどもつてのほかだろう。

どうせ、素直には貸してもらえないと思っていたので、モルトーに書いてもらった手紙でも渡すかな。

ゴソゴソ。

「まずは、君の従弟のモルトーからの手紙でも読んでから返事をくれないか？」

懐に入っていた手紙をモルトーに渡した。

「モ、モルトーだって！？あのやろう、貴族様に手紙の配達を頼むなんて、申し訳ありません。今度会ったときに半殺しにしておきますので、どうかご容赦ください。」

さすがに、半殺しとかしないでいいよ。

そんな事されたら『ネフテス』での料理人が足りなくなっちゃうじやん。

・
・
・

しばらく、モルトーが手紙を読むのに没頭している。

「モルトーのやつは、今も元気でやってましたか？」

職場などについても書いていたのだろう。モルトーが心配そうにしている。

「ああ、何度かお店に食べにいったが楽しそうに料理をしていたよ。もし、会いに行きたいなら私に言ってくれば色々手配しよう。彼には、色々世話になっているからね。」

『ネフテス』の店にマルトーが行ったら、モルトーが驚くだろうな。その時が来るのが楽しみだぜ。

「ありがとうございます。シエスタ、皆にレイア様がきたら厨房をお貸しするようにと……。」

「ありがとう、マルトー。」

さて、明日からは毎日朝昼晩の食事の用意だ。ちょっと大変だが、まあ料理は楽しいからいいかな。

翌日の教室にて。

幸いにも原作キャラが誰もいないクラスになれた。

これで目立たなくて、陰から色々出来るぜヤッホーって思った。

そして何より幸運だったのが、あのデブ貴族と同じクラスに慣れたことだ。そして、今そのデブが自己紹介の真っ最中だ。

「ゴラム・ド・マクセルと言う。火と風のラインメイジで二つ名は『熱風』という。よろしく頼む。」

不覚にも名前だけは無駄にカッコイイと思ってしまった。

だが、君は既に私のリストに入った人物だ。アルビオンとの戦争に乗じて消えて貰おう。

くっくっくっくっくっく。

私が心の中で笑っていると私の自己紹介の番が来たようだ。

自己紹介をする前から皆がどんな反応をするか目に見えているから正直やりたくは無いのだが……。

「レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルだ。よろしくお願
いします。」

面倒なので自己紹介は最小限にとどめた。系統やらトライアングル
やら話したら色々と面倒な事になる気がするしね。

ザワザワ。

「ヴェーグルってあのヴェーグル家だよな？」

「エルフと唯一貿易をしろという悪魔の領地の……」

「メイジの行っではいけない旅行先のダントツTOPに輝いている
あの領地の……」

・
・

こいつ等、色々勝手なことを言いやがって。

うちの領地を全員見たことないだろう！町はきれいで道だって整備
されているんだぞ！？おまけに公共施設にはクーラーまで完備し
いるのだぞ。おまけに、学校のお陰もあって認字率だって凄く高い。

そしてなにより、平民の所得だって他と比べて高いんだぜ。

「皆さんお静かに。彼の家の事はどうでもいいでしょ。それに彼は
土のトライアングルでとても優秀なメイジです。皆さんも分からな

い事などあつたら色々と質問するよつに・・・」

よ、余計な事言いやがって!!

一瞬でもこの教師偉いなと思つたのが間違いだつた。系統だけならまだしもトライアングルという事まで全員にばらしやがって、100%目を付けられるだろう。

ジーーーー。

すでに嫌な視線を感じる。

その視線の方を見てみると例のデブメイジだつた。ラインと言つこととで注目を集めていたのに爵位も低い私がトライアングルで注目を集めるのが気に食わないらしい。

さてさて、私の学院生活はどうなる事やら心配だ。

それから一週間後。

あろうことか、私はイジメにあつております。

入学して一週間でイジメにあつてどんだだけだよ!と激しく言いたい。

当然、イジメはデブメイジを筆頭に5人組で私にちよっかいを出してきております。同じクラスの人達も誰も止めない。まあ、イジメのターゲットが自分にならない為の防衛方法なので特に問題はない。しかも、私はルイズと違って公爵家でも女性でも無い為、物理的な嫌がらせをしてきやがる。

神様、これは試練でしょうか?

私は、今すぐにでもこの者達に天罰を与えたいDEATH。

もう、我慢の限界DEATH。

「おい、聞いているのか？いい加減、お前の部屋にあるマジックアイテムを俺達に献上する気になったか？そうすれば、マクセル様はお前の事を仲間に入れてやると言っているんだぞ。」

取り巻きAが偉そうに私に言ってきた。

こいつ等のお目当ては、私が実家から持ってきたクーラーだ。どこで耳にしたかは知らないが、渡すはずもないだろう。それに、クーラー一個幾らすると思ってるんだ。子供のお小遣いで買える品物ではないぞ。

「何度も言うように、一つ3000エキューだと言っているだろう。あまり、しつこいと貴族としての品位が疑われるぞ。」

「貴族としての品位？お前には言われたくないね、食事代を収められないからって厨房で借りて料理をしている貴族にね。」

実に煩い・・・しつこい。

この取り巻きたちもリストに追加するか。

「皆さん、席につてください。授業を開始しますよ。」

教師が入ってきた為、デブ達はしぶしぶと席に戻って行った。

馬鹿は死ななきゃ治らないか・・・はあ、面倒だ。

更に数日後。

とうとう、あいつ等はやってはいけない事をやってしまった。

たまたま水銀燈が領地まで醤油取りに行っており、私が授業に出て

いる合間を狙ってクーラーを強奪しやがった。まだ、あいつ等とは確定していないが今日の講義中ずっとニヤニヤしていたからほぼ間違いないだろうな。

親の権力を盾に逃れられると思うなよ。

「父上、母上。レイアは、早速に約束を破ってしまいます。ごめんなさい。」

さて、我が家から物品を強奪した者がどうなるか教えてあげるとしよう。うちの領内ならば精神力のタンクとして最低限生き残れただろうが、学院では木人形デクを運ぶ手間が掛るからしっかりと処理するぞ。

待っているよデブ貴族。

主人公は、イジメにあう。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとう。

今回は、いじめの当事者をちょっと粛清してきます。

土下座って何処でも(r y

後、数話でラミエルさんの登場です@@@

主人公は、お掃除大好き。（前書き）

いつも読んで頂きありがとうございます。

そして、感想を書いてくれた方々に感謝感謝です。

では、今日はデブ貴族粛清のお話です@@@

主人公は、お掃除大好き。

デブ貴族のせいで怒り心頭のレイアです。

「フフフンー……………（必殺仕事人のテーマソング）」

必殺仕事人のテーマソングを口ずさみながら部屋をでた。

盗んだ犯人は、ほぼ100%の確率であいつ等だろうが念には念をいれて情報を集めるか。

キョロキョロ。

お！情報源発見！。

「ちょっと、そのメイド。君は、この階の掃除を担当しているものかね？」

私は、近くにいたメイドを声を掛けた。

いきなり貴族に呼ばれて質問される事にすごく不安を感じているようだ。

まあ、下手な貴族だと色々ある事無い事言ってくるだろうし仕方ないか……。

「はい、私がこの階の清掃担当ですが何か問題がありましたか？」

最初からいい人材に巡り合った。

「少し聞きたいのだが、学院で講義の時間中にこの階をうるついていた貴族は居なかったかい？」

「私は、いつもこの階にいるわけではありませんが、少なくとも私が居る時間帯では何方もお見かけ致しませんでした。」

ふむふむ、何も知らないか使えないな・・・。

「そうか、もう仕事に戻ってくれ。手間をかけた。」

私がメイドにそう伝えるとメイドは、私に一礼をして仕事に戻ってく。

ズブリ

メイドが後ろを向いた瞬間を狙い、解唾門天聴かいあもんでんちようを突いた。本来なら無暗に武力を行使するのは好きじゃないのだが、今の私は不機嫌度がMAXだ。もはや親友や身内以外は信じられん。

「あ、あああがっがああ・・・。」

「苦しいか？うーん？この激痛から解放されたくば、私の問いに素直に答える。嘘をつくと更に激痛が走るぞ。」

私がそう告げるとメイドが涙目をしながら小声で「はい」と返事をした。

よしよし、素直な子は好きだよ。

「先程も質問したが、この階・・・おもに私の部屋の前で不審者はいなかったか？特に、マクセルと言う貴族かその取り巻きの貴族が居たのなら素直に言え。」

メイドが苦しむ姿を見るのは少々心苦しいが、買収されている可能性もあるしね。後、最悪メイドが犯人と言う事もありえる。

「い、いいえ。どなたも……いらっしやいませんでした。」

ふむ・・苦しむ様子もないか。

「チツ。御苦労。だが、この事を他に知られると色々とマズイので悪いが記憶を消させて貰うよ。」

ズブリ

記憶抹消の頭顱すせつを突き今の一瞬の記憶を無くさせた。後、秘孔を突いた傷跡がばれない様にヒーリングで手当てをして、慰謝料と言うわけではないが僅かだがポケットにお金を忍ばせた。

自分で言う事でも無いのだが、アフターケアまで完璧にこなす私って聖徳太子も真つ青な位な聖人だよな。

きつと、歴史の教科書に載ってもおかしく無いはず。

さて、どんどん情報を集めるぞー！。

1時間後。

「はあはあ……誰も何も知らないとは一体どういう事だ。」

あれから何人ものメイドに対して、尋・・質問をして回答を得たが私が欲しい情報は誰も提供してくれなかった。

は！まさか、秘孔を突き間違えたか！？

た、確かに幾ら天才レイアでも間違っ事位はあるしな。

しかし、そうなるとまずいな・かいあもんでんちよう解啞門天聴を間違ったとなると頭ず顛も突き間違えていた可能性もある。

うーうーん、どうやって確かめよう。

「待っててくれ、僕のモンモランシー。」

お！いいところに獲物が来たぞ。

しかし、どこかで聞いた事があるような名前だがこの際どうでもいい。

ズブリ

気配を消して背後から秘孔を突き、人気の少ない処に連れ込んだ。あまりの痛みに半分白目になっているが気にしない。レイアの工房では、よくある事です。

「死にたくなければ騒ぐなよ。お前はこれから言うことに『はい』とだけ答える。わかったか？」

「は、はい。」

おっし、偉いぞ。素直に答えれば殺さないであげよう。

「お前の女か？」

「ぼ、僕は、男だ。」

こいつが自分の意思で男と言っているのか、秘孔のお陰で口を割っ

ているのか区別がつかないな……。
おっし、もうちょっと脅すか。

「錬金」

私は、ナイフを錬金して男の喉元に突きつけた。
そっすだ、いい顔だぞ……その怯える姿が酷く滑稽だ。

ふふふふふ

「もう一度だけ同じ質問をする。お前は『はい』と答える。そうしなければ二度と人前に出れない顔にする。では、聞くぞお前は女で間違いないな？」

ジヨバー……。

男は、恐怖のあまりにシヨンベンを漏らし始めた。

「き、きたね……。」

くっそ！なんで、私がアンモニア臭を嗅ぎながら男と二人っきりにならなと行けないんだよ。

そんな役目は、アーベ専用だろ。

「は、はっははっ……」

ブシュー

あ……全身の血管から血が噴き出した。それと同時に男が意識を失った。

「おいおい、こんなところで気絶しないでくれよ。・・・もう聞こえてないか。」

だが、おかげで秘孔は、正しく突けている事が確認できた。ふう、安心したぜー。

不安な時は、人体実験に限るな。

男の方は、ヒーリングを掛けつつ質問していたから生きてはいるだろう。やらている方は、回復されながら激痛という天国と地獄を体験した事だろう。人生何事も経験と言っし、きっとこれの事が後々活きる機会もある？と思う。

人に見つかる厄介だから記憶の抹消と傷の手当てと血痕の掃除位はしておくか後、貴族に慰謝料は不要だろう。

「はあー。ここまで情報がないともはやどうしようもないな」

いくら天才でも無い情報を作る事は無理だから、やはり直接OHA N A S Iに行くかな。

だが、水銀燈が帰ってきてからにしよう。

こういう時は、よくよく相談してから行動しないとね。

ふふふふふふ。

二日後。

あれから、二日たって例の男がギーシュ・ド・グラモンである事を知った。なんで、知ったかと言うとシヨンベンを漏らして倒しているところを他の貴族が見つけたらしく色々と噂になっていたかだ。

悪かったギーシュ・・・何かあった時は一度だけ手伝ってあげよう。
私の小さな良心が少し痛んだ処に、学院で一番ウザイデブ貴族がや
ってきた。

「よお、ヴェーグル。相変わらず澄ました顔しているな。そんなお
前にイイものを見せてやろう。」

デブがそう言うのと懐から美しい装飾が施された一本の杖がでてきた。

「ほほう、なかなかの逸品だな。杖本体はユニコーンの角を材料に
したのかな？よく、そんなものが手に入ったものだ。」

「貧乏人の割には見る目があるじゃないか。実はな、この間いいも
のが手に入ってたな。それを売って杖を買ったのさ。おっと、言いそ
びれる処だった・・・ありがとよ・ヴェーグル。」

あれ？まさか！？

「まさか！貴様。アレを売り・・・いや、何でもない。」

講義前と言う事もあり、下手に周りの注目を集めてしまった。

くっそ、完全にやられた。自己満足の為に手元に残しておくと思っ
ていたが、既にお金に変えて別の品物にしているとは予想外だ。デ
ブの癖に無駄に機敏に行動しやがって絶対にコロす。

「どつしたんだい？そんなにこの杖が羨ましいか。」

何様のつもりだあいつ。やっている事が泥棒とかわりねーじゃない
かよ。罪の意識ねーのか。

ガラガラ

「それでは、本日の講義は……」

私が煮えたぎる怒りを堪えている処に、教師が入った。

その日の夜。

実家で醤油を浴びるように飲んできたのか全身から醤油臭がする水銀燈が帰ってきた。

一応貿易品だし、あまり飲まないでくれよ。

そして、ここ数日の現状を話をした。

「まさか、お父様相手にそんな事をする人間がいるなんてね……命知らずもいいところね。」

ああ、私も命知らずだと思うよ。

あいつ等は、うちの領地の事を何も聞いてなかったのかと言いたい位だ。

あるいは聞いてはいたが、領地自体が危険で領主の息子は危険じゃないとも思ったのかね。

「馬鹿に付ける薬は無いという事さ。それじゃ、そろそろ行きますか。」

あれからも任意？の情報収集をつづけてあいつ等の動向を探っていたのだ。それで掴んだ情報だけど、あいつ等は私からクローラーを盗ん

だ日から毎晩外に飲みに行っているそうだ。人様のお金で飲む酒はさぞかし美味いだろう。

だが、それがお前たちの命取りになるのだけどね。今日もあいつらが飲みに行くだろうと思えば屋上から学院の門を張った。そして、いい具合に一台の馬車が出ていったのだ。

学院の近くでは、人目につく可能性があるからなるべく学院と町との中間地点で襲撃する予定だ。

ふふふ・・・待っているよ。

ゼルエルを着込み町との中間地点に先回りをして、待っていると前方から馬車が走ってきた。

楽には死なせんよ。

「ブレット」

先ずは足止めは定石だよな。

「エア・ストーム」

え!?

私が足止めの為に放ったブレットをエア・ストームで粉碎された。おかしいぞ!あいつ等の中にはトライアングルクラスはいなかったはず。

それにトライアングルの私が放ったブレットをいとも簡単に粉碎される事なんてどうなっている。

「ははははは！まんまと掛ったなヴェーグル。お前の陰険な性格の事だから俺らが毎晩飲みに出かけている事が分かれれば必ず襲撃してくると踏んでいたぞ。なんとも単純なやつだな。だが、そのおかげでこちらに対策が立てやすかったぞ。」

「『『『さすがマクセル様。』』』」

甲高い笑い声と共にデブ貴族と取り巻きが馬車から出てきた。

まさか、嵌めるつもりが嵌められたと・・・orz

そして、取り巻きもうぜ。。

「あら、お父様の性格をよく分かっているわね。で、どうするお父様？」

どうするって、当初の予定通り武力行使に決まってるじゃないか水銀燈よ。

「それでデブマクセルよ。私があると分かっている、お前は どうするつもりだ？」

ラインとトライアングルでは、地力が違うからまともに闘う気はないだろうが一体どういう対策を練っているか楽しみだ。

「そんなのは簡単さ。お前が私に服従しなければギアスを掛けて洗脳するまでだ。お前は金づるだからな殺さない事を感謝して欲しいぞ。後、お前の横にいる子はなかなか可愛いじゃないか。お前が洗脳した後は私が面倒を見てやるぞ。はははははははは」

・
・
・

性根が腐ってやがる。

「同族嫌悪って言うのだったかしら？こっこの。」

「失礼な！水銀燈よ。私をあんな外道と一緒にしないで欲しい。」

娘にそう言われるとお父様でもちよつとショックですよ。

「おいおい、私を無視するのもいい加減にしてほしいものだ。後、お前も薄々気づいているだろうが、大人しく降参した方がいいぞ。この日の為にわざわざ腕利きの風のスクエアと水のスクエアを雇ったのだから。」

私と娘の会話に割り込むとは空気の読めないデブめ。

それにメイジを雇ったお金って恐らくクーラーを売った資金を使いやがったな。

本当にどうしてくれよう。

「ああ・・もう分かった分かった。要するにお前ら全員亡き者にすれば問題ないって事でファイナルアンサーだ。水銀燈、風のメイジは殺してもいいが水のメイジは生かしておいてくれ。領地の治療要員として使える。」

「人形使いが荒いわね。要するに心臓が動いていればいいんでしょ。」

「

ああ、その通りだ。
ゼルエルに頼らず何処まで戦えるか楽しみだ！。

「先手必勝！伝衝裂波でんしょうれつぱ」

真空波をスクエアメイジに目がけて放った。

ザザザザ

ザシユ

「ぎゃあああああ」

肉が切れるいい音がした。スクエアメイジは回避したがその後ろにいた取り巻きに命中した。
ふむ、やはりこの技使えるな。ありがとうケンシロウ。

「ユビキタス」

ちっ、偏在を出されたか。だから、風のメイジは嫌いなんだ。

5分後。

さすがに、魔法闘で勝てなくなり水銀燈と組んで一気に戦闘終了させた。

途中、スクエアメイジが不利に気づいて逃げ出そうとしたお陰で戦闘が長引いちやったぜ。

水銀燈の活躍のおかげで、マクセル含む馬鹿5人組（うち一人死亡）とスクエアメイジ2名を無事に確保した。

全員から杖を取り上げて逃げられない様にしている。戦闘の中に死亡した人数は私の最初の一撃を食った一人だけと思いのほか少なかった。スクエアメイジは、水銀燈の攻撃によって全身凍傷にかかっており二人ともかなりの重体だ。

「我々は、こいつに雇われただけなんだ。はやく、治療しないと死んでしまう。今回の事は本当にすまなかった、私達だってこんな仕事は受けたくは無かったのだが、どうしてもお金が必要だったんだ。この通りだ許してくれ。」

風のスクエアメイジは、拘束されつつも器用に頭を深く下げ土下座した。

何言ってるんだこいつ、人様を洗脳しようとした癖に助けてくれたと！

なんて甘い思考だ。

しかし・・・若干、こいつらに雇われて不憫に思える事もあるしな・・・

おっし！一度だけチャンスをやろう。

「そうだな。そこまで言うのならお前にチャンスをやろう。お前が心からの誠意と謝罪があれば例え焼けた鉄板の上でも土下座が出来るはずだ。そうだろうか？」

ニヤニヤ

思わず笑みがこぼれてしまう。

「そ・・・それは・・・。」

あれ？どういう事だ。

折角許すチャンスを与えたと言うのに何故ここで言葉を詰まらず！？

「ちなみに、先程から黙って他人事だと思っっているお前達にも言える事だからよく聞いておけ。後、私を殺す事なんて出来ないだろうなどと甘い考え捨てたほうがいいぞ。そうしないと、お前の横で倒しれている取り巻きAみたいになるぞ。」

「ヒッ」「

再度、風のスクエアメイジを見てみるとまだ決心がつかないのか俯いている。

うむ、どうやら少し背中を押す必要があるか。

テクテク。

私は、取り巻きBの背後に回り込んだ。

「な、何をする！？」

ズブリ

「全員よく見ている。今死ぬか、土下座して許してもらえるチャンスを手に入れるかのどちらかしか道はないのだ。沈黙を守ってもこいつの様な末路になるだけだ。」

取り巻きB全身の血管がみると膨れ上がってきた。

「はあはあはあはあ・・・た、助けてくれ。頼む土下座でも何でもす

るからお願いだ。し、死にたくない。」

ブシャー……。ブシャー……。

流石は、アミバが見つつけ出した激振孔だ。げきしんこう 威力も効果も抜群じゃないか。

「それで、君たちはどうする？」

聞くまでもないが一応聞いてあげよう。私って優しいな。

「お、俺は土下座も何でもするぞ！あんな死にかたなんて御免だ。」

「俺もだ」

「俺も」

次々と土下座志願者が……。やっと私の誠意が伝わったか。感激感激。

じゃあ、早速準備に取り掛かるぞ。

「お父様、準備は既に終わっているわよ。」

おお！流石は水銀燈良くわかってるじゃないか。

でも……。なんで焼き土下座なんて知ってるんだこの子。

まあ、細かい事はきにしない。

後、イイ子は頭を撫でて上げましょう。

ナデナデ

「偉いぞ水銀燈。じゃあ、大人の威厳を見せて貰うと言う事で一番

は、風のスクエアメイジからいつてみよう。土下座時間は10sだからね。10sより短かった場合は何度でもやり直して貰うからそのつもりで。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオ

うむ、良い火加減だ。焼肉にはもってこいだな。

「俺は出来る。俺は出来る。俺は出来る。」

メイジがなにやらブツブツ言っているが、さっさといけ。そして、一步目を鉄板の上に乗つけた。

ジユウウー————

靴の底が焼ける音がする。メイジが凄い形相で私の顔を見てきた。

「何か言いたい事でも？お前が鉄板に額を付けてから時間を計る。死にたくなければ早くやれ。」

メイジは何を言わずにそのまま正座をした。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ。」

ジユジユジユジユウウウウ。

鉄板に手を置いて、額を思いっきり鉄板に叩きつけた。

ガッソ。

漢気あるね。それじゃあ、数えるか。

1 S

2 S

3 S

4 S

5 S

「ぐおおおおおおお。」

6 S

そろそろかな・・・

「起き上がれ(ボソ)」

私は、周りに聞こえない様に小声でブレインを使った。

ガッ！

「駄目じゃないか。まだ、6秒だよ。じゃあ、もう一度行ってみよう。」

「ち、違う体が勝手に！ぎゃー！ー！。」

「土下座しろ(ボソ)」

問答無用でブレインを使い土下座させた。

1分後。

何度も同じことを繰り返させているうちに男は、はかない命を落としてしまった。

ああ、世の中って無情だね。

「さて、今の人は残念だったね。最初から気合をいれて土下座していれば助かったのに。皆は一度で終わるように頑張ってたね。」

デブは、どんな風になくか楽しみだ。

「じゃあ、次はマクセル君でいこう。君だって男だもんこの位余裕だよな？」

真っ青な顔をしているマクセルに声を掛けた。

「ふ、ふざけるな！あんな事出来るわけないだろう！？それに僕が死んでみる！お父様が黙っていないぞ。」

「別に構わないよ。君の大好きなお父様に言いつけてもさ。だけど、後の事を考えるより今の事を考えれば？どうしても、出来ないのだったら無理やりさせるまでだ。取り巻きC、D、マクセルをあの手で土下座させたらお前らは土下座なしで見逃してやろう。」

私がそういうと目の色が変わった。実にいい目だ。拘束を解くとすぐにマクセルを抑え込み土下座台へと連れて行かれた。

「これもすべてお前のせいだ。悪く思わないでくれ。だれだってあの台で土下座なんて御免だ。」

「き、貴様等！今まで目にかけてやったのに離せー！。ギ、ギヤアアアアアアア！」

ジュジュジュー。

肉の焦げる酷いにおいがする。やっぱりデブって匂うんだ。

「いいぞ、そのまま10s抑えている。」

1s

2s

・・・

10s

私が10s数える間に悲鳴は続いた。

「おつし、お前らもう離していいぞ。後、マクセルには手を貸すなよ自分から起き上がって貰わないとね。」

私は取り巻きC、Dの肩に手を置き、マクセルから引き剥がした。

ズブリ。

ニヤニヤ。

二人が押さえつける手を離してもなおもマクセルは土下座をしている。

まあ、ブレインで「土下座しろ」と命令をしている以上起き上がれないけどね。

HAHAHAHAHA

「どうしたんだいマクセル。もう10s経ったぞ。起き上がらないのかい？まさか、今までの罪に気づき自主的に土下座しているのか！？なんて偉い、このレイアは感動したぞ。好きなだけ土下座してくれ。」

「ち、ちがう！……あああ、体が動かないんだ。」

ジュジュューー。

30s後。

デブは静かになった。

「ふう、すつきりした。ああ、取り巻きCDはもう帰っていいよ。ばいばい。」

私がそういうと一目散に学院目指して走って行った。

ブシャー……。

ブシャー……。

遠くから何やら弾けるような音が聞こえた。さて、これにて学院のゴミ掃除は完了だ。

証拠を隠滅するために馬車を含めてすべて地中深くに埋葬した。

さて、残った水のメイジを領地に運ぶか。

「悪魔め……。」

酷い事を言うなメイジさんよ。

私が悪魔ならその悪魔を洗脳しようとしたお前は何になるんだよ。

「悪魔で……いいよ……悪魔らしいやり方で、OHANASSIを聞いてもらうから!!」

数日後に、デブ貴族達が行方不明になった事が発表された。

当然、私がやったと疑う者もいたが面と向かっていつてくる人は誰もいなかったぜ。

ああ……話し相手が水銀燈やマルトーしかいないって暇だな……

北斗の技の解説：

頭顱ずせつ

今の一瞬の記憶を消す秘孔です。

南斗の技の解説：

伝衝裂波

高速の手刀から斬撃で生じる衝撃波が地面や水面を伝わって行き、離れた敵までを切り裂く力があります。

主人公は、お掃除大好き。（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

次話は、キュルケとタバサが仲良くなったフリッグの舞踏会だっけ？のお話か、一気に飛んで使い魔召喚辺りに行こうかと思えます。

今後もよろしくお願いします。

主人公は、使い魔を手に入れる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして、感想をくださった方々、ありがとうございます。

後・・・更新が遅くなってしまい申し訳ありません。

年末で仕事が色々と忙しく……

来週は、予定通り更新できるように頑張ります。

主人公は、使い魔を手に入れる。

学院生活を初めて約一年、やっと『使い魔』の召喚の儀式の日が来ました。

いやー、例のデブ貴族の一件から本当に長かったぜ。公式には、行方不明と片づいたのだが、教師含めて周りからは疑われた事など今となってはいい思い出だ。当然騒ぎが大きくならない様に、貴族の実家にアミバとOHANASIに行つて、時間と共に息子が居た事実を記憶から消す方法を取つた。いきなり、記憶を消すと周りと話が合わなくなつて困るからね。周りには、子供が居なくなつた辛い記憶を忘れるようにしたと思わせるやり方だ。

「朝食を作ってくるからそれまで、待っていてくれ水銀燈」

「ええ、分かつたわ。こんなにゆっくりしていいの？今日は、進級試験の日じゃなかったかしらお父様」

いいんだよ水銀燈。

確かに、朝食後すぐに試験は開始されるが私の番は最後の方だから時間があるのさ。

「進級試験より、娘の朝食が大事さ」

今日の朝食は、何にしようかな……。ご飯もいいがたまには、パンも悪くない。本日のメニューを考えながら食堂に向かった。

うーん

毎度のことながら朝食のメニューって迷うよな。下手な料理は娘に食べさせたくないし、かといって前日と同じメニューでも味気ないしな。

クイクイ

「だれだ？」

私がメニューを考えながら歩いていると急に後ろからマントが引張られた。しかし、振り向いてみると誰も……いや、下か。少し下を見てみると蒼髪のメガネを掛けた少女が居た。

「話がある。付いてきて」

いきなり愛の告白か！？

なーんて、思うはずもなく人様のマントを後ろから引張ったあげくに話がるから付いてこいだと！？

「君が私に何の用事があるかは知らないが、見ず知らずの女性について来いと言われてホイホイ付いて気ほど私はノン……ゴホゴホ。私はお人よしじゃない。どうしても来てほしいと言うなら最低限名前と用件と何処に行くか位言っしてほしいものだな」

私がそう伝えると少し考えている様子だ。

「タバサ。用件は、ここでは言えない。教室で話すから付いてきて」

ああータバサって、原作キャラのタバサか。思った以上に身長が小さいな……

「教室だと人が多いんじゃないか？」

「召喚の儀式の為、全員広場にいる」

左様ですか。

今まで原作キャラとはなるべく接触をしない様にしてきたんだがな。はあー、関わりたくない。

「あまり気分がのらないが、話だけなら聞いてやる。だが、今後は人に物を頼む時は態度を改めた方がいい」

教室にて。

教室に入って、タバサが魔法を使って監視されていないか確認している。

ふむ、手際がいいな。

「貴方の領地では、エルフと貿易をしていると聞いた。だから、単刀直入に聞きたい。心を病んだ人を治す薬に心当たりがあれば教えてほしい」

いきなり本題か、まあその方が話が早くていいけどね。

「確かにエルフと貿易をしているが、貿易品全てを記憶しているわけじゃないからね。仮に私が知っていても君に教える義理もない。なぜ、人の都合も考えずに呼び出した人物のお願い事を素直に聞かないといけない？私と君は、お互い聞かれた事に素直に答え合うほど親密な中でも無いだろう？なんせ、つい数分前に初めて会話した

仲だしな」

「・・・・・・・・」

だんまりか。無条件で人がなんでも言う事を聞いてくれるとも思っているのかな？

まあ、どうでもいいか。

「約束通り話は聞いた。失礼する」

私は、身をひるがえし教室を立ち去ろうとした。

「・・・・・・・・待つて。どうしても、薬が必要。心当たりがあったら教えてほしい。もし、薬が手に入るのなら何でもする」

やはり藁にもすがる思いか・・・・・・・・。こういう手合いは、厄介なんだよな。次々と厄を呼びこむタイプだからさ。本来なら見捨てるのだが、ここまで真剣に頼まれたのを無碍にするのは心優しい私にとつては、ちよっぴり心が痛む。

「何でもするか・・・・・・・・。同じ学院生徒のよしみで少しだけ教えてあげよう。君が言っていた心を病む病と言うのがどんな症状かは知らないが、1・2年位前にトリステインの女性が心を病んだと聞いた。だが、その女性は鎮静剤を飲むことで日常生活を送ってるそうだ」

嘘は、言ってないよ。ところどころ情報をぼやかしているだけ。

私の言葉を聞いたタバサは、目を見開いた。鬼気迫るような雰囲気私に更に質問してきた。

「それだけじゃ、分からない。どこの誰が病気になったのかと鎮静剤について教えてほしい」

これ以上情報を教えろと言うのか。さすが王族だ。

だが、全部教える程、心やさしい人間じゃないんだよね。

「残念だが、無料で話せるのはここまでだ。世の中どんな情報でも金になるでね。どうしても知りたければ、それ相応の物を貰わないとね」

「いくらなら、その情報を買う？」

「そうだな・・・病に掛った女性の詳細なら3万エキュー。鎮静剤の出どころなら10万エキュー。当然、一括払いでびた一文まない。どんな事でもするとさっき言っていたしね。お金が無いのならば、領地や商品でも襲ってお金を作ってくればいい」

素直に諦めてほしいものだ。あまり情報を渡すとビダーシャルの仕事にも影響しそうだからね。もちろん、10万エキューもらっても私が販売している事を教えるだけで商品は売らないけどね。

「そんな大金ないし、そんな事できない・・・だから、実力行使」

え！？なにそれ・・・

いきなり、実力行使とか訳わからねー。

もしかして、最初からお金払う気なくて力づくで聞き出す気だったのかよ。

まさに、外道！

「ほほう、おもしろい。やってみる」

魔法を詠唱したら、一瞬で丸焦げにしてくれる。

・
・
・

お互い睨みあつたまま時間が過ぎて行つた。

ガラガラガラ

そんな雰囲気の中、急に教室の扉が開いた。

「こんな処に居た。はやく、広場に行かないと貴方の順番よ……
・・あら？ お邪魔だったかしら？」

やっぱり、厄を呼ぶ女だorz今度は、キュルケかよ。

「いいや、ちょうど話が終わった。それでは、失礼するよ……ミ
ス・シャルロット（ボソ）」

タバサにだけ聞こえる位の小さい声で名前を呼んだ。

はははははは！驚いた顔が滑稽だぜ。

二人を後にして教室から退室した。

「さて……もう朝食準備する時間ないよな。仕方ないから
賄いでも貰うかな」

広場にて。

朝食の件、水銀燈にこつてり絞られました。

娘に怒られる父親つて・・・情けね。これもすべて、奴らのせいだ。

「ミスタ・ヴェーグル。あなたの番ですよ」

「あ、はい」

はげ具合に定評の有るコルベールに呼ばれた。たまに疑問に思うのだが・・・この進級試験つて意味あるかが激しく疑問だ。使い魔が大事なのは分かるが、大人の魔法使いで使い魔を持つてる人つて何気少ない気がする。

では、気を取りなおして尋常に勝負だ！贅沢言わないから、バグベアーとかカエルとかキモイのは止めてくれよ。後、虫系も御免こうむる。可能ならば人型・・・それが無理なら竜系で頼みますよ神様。

「我が名はレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル。五つの力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ

」

私が召喚の呪文を唱えると正面に鏡が現れた。せ、成功だ！

何が来るかなワクワク。

「・・・・・・・・」

・
・
・

あれ？何も来な・・・いや違う！鏡の方から声が聞こえてくるぞ。まさか、人型を召喚しちゃうのか！？待てよ・・・人型と言う事は、性別が女性なら永遠の伴侶じゃねーか。

「ユラリユラリ揺れている オートコ心 ピーンチ ……
うほwこんな処にいい鏡。まさか俺を呼ぼうなんていい男がいるなんてな。ホイホイいっちゃうぜ」

・
・
・

確か、召喚魔法ってメイジの系統を象徴するような動物、幻獣が選ばれるはずじゃなかったのか！まさか、私がノンケだとも言うのか！？神に文句を・・・じゃなかった、今はそんな事より鏡を破壊しないと大変な事になってしまう。主に、性的な意味で。

召喚魔法を使っている時に魔法を使いたくは無かったが、今は緊急事態だ。

パチン。

指輪に魔力を込めてフレイム・ピラーを発動させた。鏡を炎を包んだ。

ゴオオオオオオー！

「チッ、この程度では壊せないか」

ザワザワ。

私の奇行に周りが騒ぎだした。煩い！静まれ！今、お前たちに構っている暇は無いんだ。それに、ヤツがきたらお前たちだって危ないんだぞ。

「ミスタ・ヴェーグル。何をしているのですか！？」

だから、今は構っている暇はないと空気読め！

この魔法で駄目なら、恐らくエクスプロージョン（爆発）でも破壊出来ぬだろう。

ならば、取る手は一つだけだ。

「フィールド全開！」

鏡に向かい上下から押しつぶすような形でA・T・フィールドを展開した。

パリーーン。

おっし、鏡は無事に壊れたぞ。ふう、一時はどうなる事かと思っただぜ。

「一体何をやっているのです。折角、使い魔がこちらに来る途中だったのですよ。それなのに鏡を壊すとはどういう事です」

いや、着てもらったら駄目だろう。万が一、ヤツがこっちに来た時に誰が契約すると思ってるんだ。私の純潔が奪われてもいいと申すのか!?

激しく文句を言いたいが、事情を知らない教師に当たるほど私はクズではない。ここは、穩便に済まそう。

「すみません。何故か悪寒がしたものでつい……。では、改めまして。我が名はレイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグル。五つの力を司るペンタゴン。私の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ」

ブオーーン。

先程と同じく鏡が現れた。しかし、同じ使い魔って事は無いよね？でも、原作ではルイズは常にサイトを召喚してたしな。そうだったら嫌だな。

「天破活殺てんはかつさつ！」

ドドドドドドドド。

パリーーン。

「グハア！ゴボホグハググ」

鏡から聞き覚えのある声がしたと思ったら、一瞬にして鬨気が私の体を貫いた。あまりに突然の出来事であった為、防御が間に合わなかった。あいつ等の攻撃は、全力でA・T・フィールド使っても防

ぎきれないのに、まして自動防御のA・T・フィールドなど紙裂くかのように貫いてきた。

数分後。

全力でヒーリングをかけるも、まだ全身に激痛が走る。くっそ、なんで私がこんな目に合わないといけないんだ。

「ミ、ミスタ・ヴェーグル。先程のは……いえ、とりあえず治療を受けてきなさい。召喚はそれからでいいです」

「いえ、大丈夫です。まだ後続の人がいるので早めに終わらせちゃいます。ご心配お掛けしました」

私も意地があるんですよ。流石に、二度も失敗するとは思ってもみなかった。だが、次こそはいける！そう……あれは気分が乗らなかったのが悪かったんだ。

そうだ、私はやれば出来る子なんだ。いけるいけるぞ！

「ふーいーい。我が名はレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル。五つの力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ！ーい」

ブオーーいん。

目の前に2m位の鏡が出現した。

次こそは、マトモな召喚獣をお願いしますよ。もう、人型とか贅沢言わない。爬虫類と虫じゃ無ければ何でもいい。

神様頼む！！！！

目を閉じて、前世でお世話になった神様にお願いをしてみた。

ざわざわ。

「は、初めて見る使い魔ですね。まるで宝石のようです」

はて？宝石のような使い魔。これは、もしかして大当たりな予感！

ガバ！

目を開き呼び出した使い魔をみた。

大きさは、縦2m横に2m程。形は正八面体。そして、青く透き通った肌？整った形状。

ギョングюн

あ・・・変形した。そして、むき出しになったコア・・・。

。(；) 又オオ！？

「ラ、ラミエルうううううう！！！！」

まずい！既に発射態勢じゃないか。そうだ、逃げ・・・無理だ。こいつの精密射撃から逃げるのは不可能。闘うしかないのか・・・いや！使い魔として召喚したんだそれならば、あの呪文で抑えつければ恐らく・・・。

キュピーーン。

え！早い！！

「フィールド全開！」

パリーーンパリーーン。

ドドドドドド。

荷電粒子砲をA・T・フィールドを斜めにはり上空へ反らした。

「な、なんだいまの！？」

「空に穴があいたわ……」

「に、逃げる……」

ざわざわ。

ああ……煩い煩い煩い！

やっぱ、既に第二射を撃つために変形している！しかも、形状は山を吹き飛ばした時の形だぜ。こりやまずい。

さらば、私のファーストキス……

「我が名はレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

「\$#&# + ^ # T # - @ - ^」 ^ @ . i ! ! !」

ラミエルが悲鳴？の様なものを上げて地面に落下した。

いやー、それにしてもまさか同族？が出てくるとは予想外だったぜ。本当にこの世界ってどうなっているのか疑問がわいたよ。

ラミエルが落下したのを見て周りも落ち着いたようだ。

「どうやら無事に契約は完了したようだね。では、ルーンを確認させて貰うよ。えーと、これは共感のルーンはだね」

そういえば、ルーンについての勉強ってサツパリしてなかったな。

「共感のルーンとは、どんな効果でしょうか？コルベール先生」

「代表的なルーンの一つで使い魔と意思疎通が可能になる。試しに、心で会話を試みているといい」

へー、もっとレアなルーンかと思ったが、予想に反して凄く普通のルーンだ。でも、共感って便利だと思った。あれこれとラミエルに命令出来るのは最高だ！

おっし！今度、サハラにいったら砂漠で「なぎ払えごっこ」をしよう。

ふふふふふ、楽しみだ。

「あんだ、邪魔よ。さっさと、そのデカ物と一緒にどきなさい」

声ができる方を振り向いてみると、ピンク色の神の美少女が私を親の仇を見るような目で睨んでいた。

おいおい、俺がお前に何したって言うんだよ公爵の三女様よ。

「おっと、これは失礼しました。『ゼロ』のルイズさん。」

主人公は、使い魔を手に入れる。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

さて、次回は名物シーンと名高いギューシユとサイト辺りのお話でもやろつかないと思っております。

今後もよろしくお願い致します。

主人公は、まきこまれる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして、感想ありがとうございます。

いつも皆さまのおかげで頑張る事が出来ております。

今後もしよろしくお願い致します。

>> <<で囲まれた文章は、レイアのオリジナル魔法>>ブレイン
<で命令した内容だと思ってください。

主人公は、まきこまれる。

大変機嫌がいいレイアです。

なぜなら、ラミエルが使い魔になったからです！

気分はいいのだが、懸念が一つだけあるのだ。それは、原作キャラ達を同じクラスになっちまったぜ。一体どうしてくれよ。あれからタバサからの接触はないのだが時々視線を感じるからまたウザイ。早くストレス発散に「薙ぎ払え！」をやりたいんだけど、生憎とサハラまで行く時間がないぜ。この際、虚無の休日にもアーベの処まで遊びに行こうかな。

そんな事を考えながら、手乗りサイズに変形したラミエルを布で磨いている。

キュキュ

流石、物理法則を無視した使徒だ。サイズまで変幻自在だとは恐れ入ったぜ。だが、そのおかげで持ち運びにも簡単・・・後、かわいい。ルーンのおかげが磨き上げるとラミエルが喜んでる気がする。

ガラガラ

私がラミエルを磨いていると、教室に教師が入ってきた。中年女性で恰幅ある優しそうな人だ。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

ふむ、どうやら本当に良い先生のような。貴族の糞餓鬼と違って実に人間が出来ている人だ。

「おや、変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール。そして、ミスタ・ヴェーグル」

私のラミエルが珍しいだつて？そりゃ、そうでしょ。先生は本当にいい目をしているな。今度、我が領地の醤油in水の秘薬を進呈しよう。

その後、原作通りマリコンヌのルイズへの中傷が始まった。

数分後。

錬金の講義になった。それにしても、入学するまで錬金が出来ない奴が居るとかLv低すぎだろう！そりゃ、私みたいに一系統以外の才能が0の奴がいるならば話は別だがさ。

「では、『錬金』のお手本を私と同じトライアングルであるミスタ・ヴェーグルにやって貰いましょう。皆さんも、良く見ておくように」

あー、やっぱりそうなるんですね。薄々当てられそうな気はしていたんだがさ、そこは私の期待を裏切ってくれよ。

私は、しぶしぶと壇上へと向かった。そして、机の上に置かれている親指ほどの小石に向かって錬金を行った。

「錬金！」

私は、小石を鉄に変化させた。正直、宝石などにも出来ない事はないだろうが目立つのは嫌いだ。だから、ラインでも錬金可能な鉄を選んだ。当然、不純物はラインと比べて少ないだろう。

「よくできました。流石は、若くしてトライアングルというだけではありません。鉄に全くと言っていいほど不純物が含まれておりませんでは、席に戻って結構です」

私は一礼をして席へと戻った。しかし、本来ならば私でなくルイズがやるはずだったのだが歴史がそれ始めたか。

「ミス・ヴァリエール！」

「授業中の私語を慎みなさい」

どうやら、サイトにメイジのクラスについて説明していたみたいだな。一応原作通りになったか。

「すみません……」

「おしゃべりする暇があるのなら、貴方にやってもらいましょう」

ミス・シュヴルーズがルイズを指名すると辺りがざわめきだした。

ざわざわ

辺りからは、「危険です」「止めた方がいいと思います」「ルイズ、やめて」など悲観的な叫びが聞こえる。だが、辺りからの声に反発するかのようには、ルイズが前にでた。

「やります」

壇上につくと、ミス・シュヴルーズのアドバイザーを聞き杖を小石に向けて……いや、杖先が向いている方向は明らかに私であった。

「フィールド展開^{ボン}」

「錬金」

ド、ドーン

私の席を中心に爆発と卓上の小石が爆発した。虚無の魔法相手にA・Tフィールドがどこまで通じるか不明な点もあったがこれでハツキリとした。A・Tフィールドの壁を超える事はできないと。

「ちっ、ちよつと失敗みたいね」

ざわざわ

なにがちよつと失敗みたいねだ！明らかに、一撃目を私めがけて撃ちやった。しかも、それを隠すように手前の小石も錬金で爆発させた。勘のいい奴は、爆発が二度あったことに気付いただろうが、この教室の大半の奴は気づいていない。

講義にまぎれた私を亡き者にする気だったのかな、このアマは！

「爆発させるなら事前に言ってほしいものだね。公爵家の穀潰し。あやうく、服に埃が付く処だったじゃないか」

さて、言う事もいったし教室から出るかな。流石に、この教室ですぐには講義が再開されることは無いだろうしね。

「う、穀潰し！あんた私を誰だと思っているの？」

ああ、知っているとも。公爵家の跡取りにもなれない唯の貴族だろ。

翌日。

「水銀燈。『ネフテス』からの手紙は、もってきたかい？」

ラミエルに椅子にして座っている水銀燈に聞いてみた。しかし、ラミエルを椅子の代わりにするとはね。流石、私の娘だ。後・・・ラミエルも律義に椅子に変形しないでもいいよ。

私は、以前に貿易を行う際にした約束を果たすべく、ルイズの外見・性格・家柄・虚無の魔法・使い魔の容姿・使い魔のルーネ t c などについて纏めたものを『ネフテス』に贈ったのだ。これで、エルフの脅威は大分減っただろう。そして、ルイズへの対応についてどうすべきか聞いている処だ。

「まだ来てないわ。昨日の今日で返事が来るとは思えないけど。まあ、いいわ」

でも、相手はエルフだからあり得るかなと思った。

「ならばいい。後、前々から頼んでいた水の秘薬の件だけどそっちはどうなった？」

「言われた通り、ここ最近湖にいる私の分身にも秘薬を渡さない様に指示しているわ。でも、これが一体何の役に立つの？」

なーに、簡単さ。水の秘薬が出回らなければ必然的に値段は上がる。そして、怪我をしてもお金が無いものは治療も出来ない！

「もうすぐわかるさ。少しばかり欲しいものがあってね。それを手に入れる為の事前準備さ。後、念の為学院にある水の秘薬も全て使えなくしておいて貰えるかな」

「人形遣いが荒いわねお父様」

ははは、ごめんよ水銀燈。今度、美味しい？醤油味のヨーグルトを作ってあげるからさ。

食堂にて。

今日は、珍しく食堂で食事を食べることにした。なぜかって？そりゃ、今日が某イベントの日だからですよ。一体、どんな文句で話が進むのが楽しみだ。それにしても、朝から七面鳥の丸焼きって・・・ありえないだろ。どこの、クリスマスだよ。

「ミスタ・ヴェーグルもそう思わないかい？」

幸か不幸か私の横に座っているギーシュが話しかけてきた。どうやら、土系統が最高だとか僕のワルキューレが凄いとかなんな話をしていた気がする・・・ぶつちゃけ、聞いてなかった。

「ああ、そうだな。ミスタ・グラモン。それについては全面的に同意する」

「おお！やはり、君もそう思うか。流石、僕と同じ土のメイジだ」
そして数分後。

私が食事後の紅茶を飲んでいると横でギーシュの恋話が始まった。
きたか。

なにになに・・・「誰と付き合っている？」「二股かけているお前が悪い」など会話が飛び交っている。それにしても、何故ギーシュがモテるのに私がモテないのだ！？容姿の面では互角以上だと思っているぞ。それに、メイジとしての能力だってトライアングルだぞ！くっそ、これだから無条件でモテる原作キャラは嫌いだ。

私がふつつつと不満を心の中で呟いていると

「よかるう。君に礼儀をおしえてやるう。ちょいどいい腹ごしらえだ」

「おもしろえ」

「二つでやんのか？にげるのか？」

「ふざけるな。貴族の食卓を平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終わったら、来たまえ」

私の横でちやくちやくと原作が進んでいた。まあ、機転を利かせて香水の件を誤魔化せというのも難しい注文だが、サイトも「郷に入

れば郷に従え」という言葉を知らんのかね。このままの性格でいくと、冗談なしで長生きは出来ないだろうね。

さて、私もケーキを食べ終えたら公開処刑を見に行くかな。

「給仕、私にもケーキを」

「ほらよ」

サイトが乱暴にケーキを私の前に置いた。勢い余ってか、皿の上のケーキだけが見事に倒して落ちた。そして、私の膝の上にケーキが落ちた。

「あ……」

ポトン

・
・
・

辺りが静かになった。そして、サイトの横にいたシエスタが顔面蒼白になった。現状を正しく把握しているようだ。いくら、毎朝厨房で顔を合わせようと私は貴族だ。その私に対してサイトが行った不敬を考えるとおのずと結果がたなのであろう。

「あ、わりい。今、拭くものを持ってくる……これでいいか」

サイトは、脇に落ちていた雑巾を広い簡単に水を絞り私の膝の上を拭いた。流石に、私もこの行動に頭が付いていかず思考が停止して

いた。

「ルイズの使い魔のサイトと聞いたかね？君は・・・誰の指示でケーキを配っていたのかい？」

出来た人間である私は、ここで怒らずぐつと我慢した。こういう場合は、指示をだした上司が悪いのだ。ろくに礼儀作法が出来ていないサイトに配らせて問題が無いと考える奴が悪い。

「別に誰の指示というわけじゃない。ただ、シエスタを手伝ってるだけだ。一人じゃ大変そうだったからさ」

ふむ、その心がけだけは褒めよう。だが、それは横にいるシエスタの顔を見てから言った方がいいよ。

「わかった。君はあまり現状を理解していないようだから、横にいるメイドと君のご主人様によりく聞いてみるといいよ。それではヴェストリの広場で待っているよ。シエスタ・・・分かっていると思うが逃げるなよ」

「ヒィ、わ、わかりました」

この世の最後の日の様な顔をしたメイドと能天気なサイトをおいて私はヴェストリの広場へと向かった。

ヴェストリの広場にて。

一度、部屋に戻り水銀燈特製のヨーグルト味の水の秘薬をもってヴ

エストリの広場へと向かった。貴族とは暇人が多いのだろう、結構な数の観客が集まっている。

「ギーシュ。半殺しまでにしておけ」

「なぜだい？君はあの平民の肩をもつのかい？」

そっか、ギーシュはあの場には居なかったのか。

「そんな事はないさ。ただ、あの平民は私の服にケーキを落とし、あるうことかケーキの汚れを床を拭く雑巾で綺麗に拭きとってくれたのさ。お陰で私の服は床の埃まみれさ。だから、残り半分は私が引き受ける」

「世の中、命を粗末にする奴もいるんだな。わかった。君の分も残すと約束しよう」

満面の笑みをギーシュが返してくれた。さて、どうなる事やら。

「話は終わったかキザ野郎とゲス野郎」

・・・はて？

聞き間違いかな。キザ野郎はギーシュとして・・・ゲス野郎だと！
！いい度胸だサイト。

お前の挑戦を受けてやるぞ。一体どういう経由で私がゲス野郎になったのかは知らんが、どうせルイズ辺りが色々吹き込んだのだろう。

「僕はメイジだ。だから魔法で闘う。よもや文句はあるまい」

「て、てめえー」

貴族が魔法を使って戦う事に不満一杯のようだ。だが、それが貴族と平民の絶対的な差でもあるのだ。こ

こうして、サイトとギーシュの闘いが始まった。

数分後。

一方的であったギーシュがサイトに剣を渡した辺りから展開が一変した。

「ほう、早いな」

ルーンの力を得たサイトの行動に思わず感心した。腕前だけで見れば達人クラスだろうが、それを扱うサイト本人の身体能力が追いついていない為、脅威ではないな。

「ま、参った」

私が關心しているとギーシュが降参した。本来なら負ける試合で無かったはずだが油断したなギーシュ。それでは、そろそろ選手交代と行こうじゃないか。

「ギーシュ。後は、私に任せて休んでいる」

ギーシュに手を貸し、広場の端へと移動させた。外傷は無いからヒールリングは不要だろう。さて、どう料理してくれようか。流石に、殺しはしないがそれ相応の怪我を負ってもらおうかな。そうしなければ、取引に持ち込めないからね。

「ちょ、ちょっとあんた！サイトは今さつき鬪ったばかりで怪我もしているのよ。この状態で鬪いを持ちかけるなんて貴族として恥ずかしくないの!？」

私がサイトの料理方法を考えていると、後ろから罵声が飛んできた。

「だったら、君が治療したらどうだい？公爵家の三女なんだし、使い魔の治療など朝飯前だろ？」

「……………で、出来ないわよ。それに、水の秘薬なんて高価な物を買えるはずないじゃない！」

だろうね。この日の為に水の秘薬の値段が上がる為の工作を幾重にも行ってきた。そして、今の秘薬の値段は、一年前の三倍にまで跳ね上がっているのだ。

「秘薬すら買えないとはね。公爵家も落ちぶれたものだね。それとも、出来の悪い三女が見捨てられたかな？くっくくくっくっはっはっはっはっはっはっは！」

あの公爵夫妻だ。既に跡取りの心配が不要になった事とカトレアの治療費の件もありルイズに掛る経費を削減したのだろう。もっとも、純粹にお金が不足してきたとも考えられるが、真実などどうでもいいけどね。

「いい加減に口を閉じやがれゲス野郎が！勝負するなら早くしゃがれ。こっちは、もうあまり体力が残っていないんだからな」

ゲスゲスうるせー。こいつの中では、ルイズの話が全て真実となっているようだ。どうせ、私が何を言っても信じることはない

だろうな。これもルーンによる洗脳の力か？

「サ、サイト！そんな体で何が出来ると言うのに。こいつは、さっきのギーシュと違ってトライアングルなのよ。さっさと、謝りなさい。こいつの服の件は何とか弁償するから」

「心配してくれてありがとうよルイズ。でも、さっきも言ったが下げたくない頭は、下げられねえ」

ふむ、その男気だけは勝つてやろう。

「だそうだルイズ・・・では、勝負を始めようか。条件は、先程と同じでどちらかが『参った』と言うまでだ。当然、私はメイジだから魔法を使う。なんせ、お前は剣を持っているからな。文句はあるまい？」

「上等！」

開始の合図を待たずにサイトが飛び込んできた。

き、きたねえ！

確かに、私が魔法を使う前に倒すという考えは良いだ。だがね・・・私は、これでも『拳王軍』で暮らした事がある身なのだ。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

サイトの攻撃を全て紙一重で回避した。それにしても・・・先程から行われている攻撃全てが明らかに寸止めをする気が見受けられない。これには、幾ら当たっても死ぬことは無い私でもトサカに来る

んだけどね。

「はあはあはあ！」

サイトが剣を下し、呼吸を整えている。

「満足したか？今ならお前とルイズが土下座するのならば許してやらん事もないぞ」

もちろん、サイトには焼き土下座だ！私を殺す気で攻撃していたのが実にいただけないぜ。

「はあはあ……だ、誰がするかよ」

残念だよ。

「では、『纏鎧』のレイアが実力を持って君に礼儀を教えてあげよう。……>>膝を突いて中腰になれ<<」

私がブレインを使い、サイトに命令をする。サイトは、自分に何が起こったか分からないように混乱している。実に、殴りやすい位置だ。まずは、喋れない様にする為に口をふさぐ！

ガッン！！ベコン！！ボキ！！

顔と腹とわき腹に対して、各一発ずつ計3発蹴りを入れた。私の蹴りは一撃一撃が悶絶する威力なのだが、今回はそれに加わり靴を鉄に錬金して威力を増加させるというおまけを付けた。

「ぐっはあああっぐぐああ」

サイトが悶絶しながら、腹の中のものをぶちまけた。

歯もおられて碌に喋れないようだ。ふむ、少し強くけり過ぎたかな。『拳王軍』で無駄に鍛えたからね。

「先程までの威勢は、どうした？降参するなら、早めに参ったと言った方がいいぞ…もっともその口でしゃべればだがな」

ニヤニヤ

「あ、あんた最初からそれが目的でサイトの顔を蹴ったのね」

ざわざわ

ルイズは、私の意図に気づいたようだ。まあ、ここまで言えば気づくのが普通だけどね。辺りにいた観客も流石に引き気味になってきた。

「だからどうした？まだ、殺していないだけ感謝してほしいものだ。なんせ、こいつは私を殺す気で攻撃してきたのだがな。それとも君が頭を床に付けて私に土下座するのなら許してあげなくもないがね・・・錬金！」

ヒュン

パーン

私がルイズに話しかけている隙を狙い背後からサイトが首を狙って攻撃してきた。思わず錬金を使ってサイトの剣を分解してしまった。全く、油断も出来ないぜ。

「甘いよ。土のメイジは、土の上にいる人間の位置などを把握することに優れているんだ。君が地面に立っている限りきみの行動は手に取るように分かる」

私が話しているのに対してサイトは既にルーンの力を失った反動で激痛に悶えている。おいおい、人が丁寧に説明しているのだから話は聞こうぜ。

「うーん。これじゃあ、サイトが喋れない以上死ぬまで勝負がつかない事になるからルール変更をしよう。そうだな・・・ルイズ、君が土下座して謝るのが先か、サイトが絶命するのが先かしよう。ルイズが謝れば私の勝ちでサイトが絶命したなら君の勝ちだ」

「だ、だれがそんな事するもんですか！そんなルール認められるわけ「じゃあ開始！」」

ルイズの話を聞かずに私は勝負を再開した。

まずは、マウントポジションを取り、サイトに対してヒーリングを行いながらボコる！たまに、サイトの意識を覚醒させてルイズに助けを求めさせよう。

「ル、ルイ・・・」

「サ、サイト」

ボコ！ボコ！バキ！バキ！ボコ！ベコ

5分後。

「ルイズも冷たいな。使い魔が助けを求めているのに立っているだけかい？」

「たっ、助けてぐ……」

「も、もう止めて！」

ボコ！ボコ！

10分後。

流石に、腕が疲れてきたレイアです。おまけに返り血で服が赤くなっちゃったぜ。こりゃ、洗濯してもおちないな。

「ヒューヒュー、ル……た、ずげて」

サイトの叫びを聞いてルイズがサイトの横に来た。おいおい、そんな泣き顔で睨まないでくれよ。まるで、私が悪者みたいじゃないか！

「……わ、私が悪かったわ。だから、それ以上サイトを殴らないで」

サイトの願いがやっと通じたようだ。ルイズが私に土下座した。

気分いい！！

じゃなかった……。

「おっし、約束通りサイトは解放しよう。いやー、危うくこのまま殺してしまうところだったよ。サイトも使い魔思いの主に感謝する

といい・・・あ、例のメイドの件だけど別にどうするつもりもないから安心しな。元々、そんなに怒っちゃいけないからさ」

勝負も終わり私は立ち去ろうとした。帰り道にギーシュがいた。

「流石にやりすぎじゃないか？僕も人の事は言えないが・・・ルイズに土下座させたのは流石にまずいと思うのだが・・・」

「問題ないさ。それに、こう見えても公爵夫妻とはそれなりに面識の有る身でね。あちらから文句を言ってくる事は無いさ」

相手が私を毛嫌いしてるからね。下手にちよっかいを出してくる事はないだろう、なんせ、ルイズはただの三女なのだからね。それから、少しして教師達が駆け付けた。すぐさま、サイトが保健室へと運ばれた。さて、私も目的を果たすかな。

保健室にて。

「ち、治療が出来ないってどういう事!？」

ルイズの甲高い声が聞こえた。

「学院にあった秘薬が腐って使えなくなっちゃったのよ。だから、新しい秘薬を買わないとどうしようもないの」

学院の水のメイジかな？ルイズを諭すように説明している。

「新しい秘薬を買うにも・・・私お金ないわ。それに、今すぐ治療

しないとサイトがもたないじゃない」

「私のせいでサイトさんが・・・」

あら？シエスタも一緒にしるのか。まあ、いいか。ここらへんで救世主の出番といきましょう。

ガラガラ

シーーン

私が部屋に入ると一気に部屋の温度が下がった。Why!?

「ああ…私の事は気にしないで続けてくれ。先生、実は先程拳を痛めて皮が少し剥けてしまつてね。悪いけど、治療をお願いしたい」

私がそう伝えると教員が私の方に来た。

「どれどれ・・・全然大した事ないわね。それに、拳を痛めたつて…あの子をあそこまで殴つたのなら当然だわ」

既に保険医にまで情報が回っているのか。

「ははははは、男同士拳で語り合うのが古今東西の喧嘩のやり方さ。それじゃあ、この秘薬でさくつとよろしく」

私は懐から高純度の水の秘薬を取り出した。

「ちよ、ちよつとあんた！その水の秘薬こつちに寄こしなさい！」

ルイズが私が持っている秘薬を奪おうと手を伸ばしてきた。

パチン

当然、渡すはずもなくその手を跳ねのけた。

「おいおい、人の持ち物を勝手に奪うのは泥棒だぞ。公爵家の三女様は、人のものを勝手に奪ってしまうほど偉いのかな？」

「あ、あんた何様のつもりよ！私は、公爵家の者なのよ。あんたなんて下級貴族じゃない！いいから、黙ってそれを渡しなさい。そうすれば、今の事はお父様に報告しないであげるわ」

お父様に報告か…それは面白いそうだ。

「面白い。好きに報告すると言い。それに、そいつはルイズの使い魔だろ？なぜ、私の秘薬で治療をしてやらねばならないんだ？君は、秘薬がどれだけ高価か知っているのか？ハッキリ言つて、赤の他人をタダで治療してやるほどの酔狂な人間などそうおらんよ」

ルイズが俯いている。これだけ正論を言えば言い返せるはずが無い。

「・・・わ、わかつてるわよ。でも、このままだと死んじゃうじゃない。お金なら後で払うから、いいからそれを渡しなさい」

強奪が無理ならば交渉できたか。だが、お金など私には不要だ！

「だが、断る！なぜなら、私がルイズの言う事が信じられないから

だ。なんせ、昨日の錬金の講義の際に意図的に私に対して魔法を使用したな。そんな奴の言葉を鵜呑みにするほど私は、出来た人間じゃない。仮に、この場で口約束をしても反故にする可能性があるからね」

こんな性格の女を信用するなどアホ以外ありえん。

「・・・ちっ」

だんまりですか。流石に自業自得だといいたいが、こいつの事だ意味不明な理由で私を悪役にするに決まっている。

「だが、私とて悪魔じゃない。流石に目の前で人の命が尽きるの心が痛む。だから、取引をしようじゃないか？もちろん、君が超が着くほど貧乏なのは知っている。だから、その使い魔が召喚された時に持っていた『場違いの工芸品』と交換しようじゃないか」

ルイズは、色々考えている。私が何故、サイトが持ってきたノートPCに興味があるのかをね。でも、そんな事は今はどうでもいいはず。このままサイトが死ねばノートPCなど使い方の分からない唯のゴミでしかないのだから。

「・・・わかったわ。あいつが持っていた物すべて渡せばいいのね」

「その通りだ。では、取引成立だ。これは、ルイズにあげよう。だが、約束を破った時は、言うまでもないな」

私はルイズに秘薬を渡し、保健室を出た。

その日の夜。

ルイズがサイトが持っていた物一式を私に渡してきた。荷物の中には携帯電話も含まれており、まさに気分は有頂天だ。

手に入れた！ついに、手に入れたぞ！これがあれば、今よりはるかに良い生活が送れるはずだ。まずは、PCの量産をすべく『ネフテス』に技術面で色々頼みこもう。待っているよ、俺のバラ色の世界。まずは、ゼルエルネットワークと連携して某巨大掲示板などを作るぞ。情報は、鮮度が命だ。

「ああ、楽しみだ」

主人公は、まきこまれる。(後書き)

最近、年末という事もあり来週以降もしかしたらリアルの都合で更新が滞るかもしれませんのご容赦ください。

次回は、やはりフーケあたりかな？

主人公は、いつも嫌われる。(前書き)

更新が遅くなってしまい申し訳ありません。
リアルが年末年始で忙しかったんです；；

感想を書いてくれた方々に感謝感謝です。

これからも、頑張りますのでよろしくお願い致します。

主人公は、いつも嫌われる。

お久しぶりですレイアです。

サイトとの決闘が無事？に終わり、虚無の休日を利用して私は実家に戻っております。

「いけそうかいアミバ？」

カタカタカタ

今、水の秘薬の対価として受け取ったノートPCと携帯電話をアミバに見て貰っている。狙いは、ノートPCと携帯電話の技術を模倣し、エルフの技術革新を行う事だ。もし、これが可能になれば遠距離間での通信が可能になり色々と便利な世の中になるだろう。

「ふっ、天才に不可能はない！……と言いたいが残念ながらこれに関しては専門外だ。さすがの私も『場違いな工芸品』に関しては触れる機会が少なかったからな」

カタカタカタ

うーん、アミバなら大丈夫かと思っただが、残念だ。でも……一つだけ言わせてくれ。

「アミバ……エルフが不思議な種族なのは今まで会った人から十分に分理解できる。それでも、どうしても言いたい事があるんだよ……僅か60分程度の説明で『場違いな工芸品』の使い方をなんでマスターしてるんだよ！」

そう、アミバに渡す際にPCの本当に簡単な概要とその使い方などを教えてあげたのだ。当然、書かれている言語が異なる為、苦勞するかと思いきやリードランゲージというコモンスペルを使う事で一瞬でその高いハードルを飛び越えた。

それに加えて、ブラインドタッチを平然と行っているからまた驚きだ。私より早い！というかキーを打つ指が見えないです。

「この位、エルフとして当然だ。今更驚く事でもないだろう？それにしても、これは本当に便利だな」

もはや、言い返す言葉もないぜ。

だが、先程の会話からするに諦めるのはまだ早いぜ。

「まあ『場違いな工芸品』の機能については置いておいて・・・アミバにとって専門外という事はこういう事を専門に扱っているエルフもいるって考えて問題ないって事かな？」

「当然だ。こういう『場違いな工芸品』を収集しその技術を解析してマジックアイテムに応用している輩もいる。ちなみに貿易品として扱っているクーラと蛍光灯もそいつらが開発したものだ」

絶対にマッドサイエンス的なエルフ集団に決まっている。

しかし、技術体系が違う物を解析し、技術を模倣するなんてアミバとは別方面での天才だよな。

「是非！紹介してくれ。もし紹介が無理ならば、この『場違いな工芸品』をその集落のエルフに献上するから技術を模倣して欲しい。そして、エルフ全土にその技術を普及させて欲しいんだよ」

もし、可能になればエルフ全体のあらゆる面での技術が向上するだろう。なんせ、頭脳もチート級の連中だ。すぐに、現代アメリカ並に技術力を身に付けてくれるだろう。

「まあ、構わん。最近では、木人形デク弄りも飽きてきたところだ。私が直に交渉に行つてやろう。それに、レイアが何やら面白そうな事を企んでそう顔をしているしな」

ははははは！ばれてたか。

「よくぞ聞いてくれた！実は…」

・・・

1時間後。

「成程、レイアがやりたい事はよくわかった。後は、まかせておけ」

この後、ゼルエルネットワークを使った通信網の話や領地の魔力タスクの管理システムなどについて話をした。最初は、何の事だが分からなかったようだが理解力が半端ないアミバにとつて問題にすらならなかった。私の言った事を理解してくれた。やはり、エルフは優秀すぎる人種だな。それでこそ世界を支配して貰うにふさわしい存在だ。

「流石、我が友だ。それで聞きそびれたいたのだけどなんて集落にお願いするの？」

一体、どんな集落なのか見当もつかないぜ。どうかマトモな集落で
ありますように。

もう『薔薇族』『拳王軍』とかこりこりだぜ。

私がそう伝えるとアミバがニヤリと笑った。

「『^{チーム}仲間』。そう呼ばれている集落だ。私が言うのも何だがあそ
この連中も変人が多いぞ」

・・・

あー、思い違いだといいんだけど…

「もしかしてさ、その集落に【玖渚機関】【匂宮雑技団】【十三階
段】とか変人集団とかいたりする？」

私がそう聞くとアミバが笑みをこぼした。

「知りたいか？」

「いえ、なんでもありません。はい」

オワタorz

『拳王軍』と戦力的に比べれば幾分かマトモだろうが、変人具合な
ら上回っているんじゃないか！人間は、どうやって前の戦争生き残
ったんだよ！既に秒殺の次元じゃないかよ。

もう考えうのを止めて、温泉にでも浸かって休みたいよ。

「お父様、現実逃避は駄目よ。それに、折角実家に帰ったのだから雛苺の相手でもしてあげたら？」

姉妹の事を気に掛けるなんて、なんて偉い子なんだ。爪の垢でも煎じてルイズに飲ませてやりたい位だ。

「え、偉い！流石、水銀燈だ。妹たちを気に掛けるなんて。感動した」

イイ子にはご褒美をあげないといけないね。

ナデナデ

「べ、別に妹達がいつもお父様に遊んでもらえないから今日くらいは変わってあげようなんて思ったわけじゃないんだからね」

そうですかそうですか

にやにや

ああ、やっぱり皆いい子だ。この子たちが幸せに暮らせる世の中にする為にお父様頑張るよ。

「ふふふ、相変わらずローゼンメイデン達には甘いのだな。『場違いな工芸品』の現物は、預かっておくぞ。代わりにこれを持っていけ」

アミバがノートPCと携帯を持ったまま偏在を出した。

そうすると、あら不思議・・・PCと携帯が増産されたぜ。この魔法チートすぎる！本人の持ち物まで完全コピーかよ。しかも、当人

が消えてもコピー品が残っているぞ！エルフだから仕方ない。

まあ、気にしても仕方ないのでPCと携帯は持って帰ろう。事務作業などに何気役に立つしね。

さて！雛尊を遊んであげるかな。そして、夜には戻らないとね。なんせ今日は、例のイベントの日でもあるからね。ああ・・・早く手に入れたいなロケットランチャー！

「では、後の事は全てまかせる。代わりという訳でもないが耳寄りの情報を一つ。既に知っているかもしれないが、虚無の使い手が見つかつた。そして、『ネフテス』から監視をしろと言われている」

アミバの顔が悪人づらにどんどん変わっていく。ほれぼれする位、いい顔だ。

「当然、知っている。それで、一体どんな悪たくみだ？」

酷い！もしかしたら、すごくいい事を言うかもしれないのに完全に悪たくみに限定された話になっている。まあ、間違つてはいないから文句は言えない。

「出来るかは分からないが・・・偏在つてさ、死んだ人間もコピーできるかい？」

・・・

「くっくくくくく、それは試した事がないな！。だが、面白い」

流石、我が友だ。今の一言で全てを理解してくれた。

ぶっちゃけ計画はこうだ。ルイズを殺害し、偏在で死体をコピーする。物なら何でもコピーできるから死体なら物と置き換えられなくもないし問題ないだろうと思う。そして本体の方を北斗神拳で蘇生する！これで、『ネフテス』の指示通り監視が続けられる。そして、死体の方も同じく北斗神拳を使い蘇生する。コピーの方が蘇生できない場合は、某ハーフェルフの指輪もしくはアンドバリの指輪奪い蘇生を試みる予定さ！色々と穴のある計画だろうが、こちらには天才もいるし問題なからう。

「ふふふふふ、どうだい？ 実に面白そうたる！？ この計画がうまくいけば虚無の使い手の増産が可能になるかもしれない！では、次に会う時に更に詳細を詰めようじゃないか。私は、雛苺の相手をしてくるよ」

どうせ犠牲になるのはルイズだ。何ら問題もなからう。

「ああ、有意義な会話ができた。では、次会う機会を楽しみにしておくぞ。こちらもそれまでに『場違いな工芸品』の一件を片付けておいてやる」

頼もしい限りですアミバ様！

フーケ襲来の翌日。

なにやら慌ただしい朝です。

原作通り、昨晚にはフーケが泥棒に入ったそうで学院側は不祥事を

隠そうとてんでこ舞いです。

「水銀燈、そろそろ出かけるから準備しておいてくれ・・・といっても既に準備はできているみたいだね」

フーケが盗んだ品を何処に隠したかまでは、生憎と覚えていない。だから、サイト達に向かった方角に先回りをして現物を奪う予定だ。ロケットランチャーは男のロマン武器だ。是が非でも撃つてみたい！ただそれだけの為に手に入れるのさ。ついでに、エルフに差し出して量産でもして貰おう。エルフにはカウスターがあるから通じないかもしれないが人間相手には十二分に使える兵器だからね。

「当然だわ。でも行先が分からないのにどうやって先回りをするつもり？」

「その事については、ラミエルが居れば問題ないさ」

ラミエルの射程から考えるとその視力？の良さは人間の非ではないさ。小屋の一つや二つ直ぐに見つけてくれると信じている。

「大丈夫だよな？ラミエル」

「・・・」

何となく、いけそうな気がすると返事を貰った気がする。流石は、私の使い魔だ。

ラミエルを褒めていると窓から馬車が門をくぐるのが見えた。どうやら出発したようだな。

頑張って道案内してくれよ。

3時間後。

「これがロケットランチャーか・・・この重さが実にいい感じた。前世では触れる機会すらなかったからな。早速試し撃ち・・・」

危うく、森に向けてぶっ放すところだったぜ。やはりこういう品を持つと撃ちたくなるのは駄目だね。

「お父様、早くしないとお客さんが来ちゃうわよ。それとも私がジャンクにしてあげる？」

いやいや、流石にジャンクされても・・・あれ？困らなくね。

罪は全部フーケに擦り付けられるし、虚無は手に入る。そして、薬の事をしつこく嗅ぎまわってきそうなタバサも処分できる。キュルケだけは、証人になって貰う為に記憶操作して生かしておけば問題ない気がするぞ。一応、辺境伯に恩があるキュルケを殺すのは少々問題だな。

「お父様、どうせくだらない事考えているんでしょ。もしかして、『ネフテス』から言われた事忘れたの？・・・本当に、お馬鹿さんなんだから」

・・・

わ、忘れてた訳じゃないんだからね。ちょっと、記憶の底に埋まっていただけだからね。

後、お父様に向かつてお馬鹿さんは酷いんじゃないやありませんか？流石のお父様も涙目ですよ。

「と、取りあえずさっさとレプリカ置いて撤退しよう。錬金！」

ロケランのレプリカと交換し、その場から山を一つ離れた位置まで移動した。

さすがに、現時点でこの世界の主人公が居なくなってもらうと私が知っている原作知識が使い物にならなくなる可能性がある為、虚無を手に入れる日までは生きていて貰おう。

1時間後、約10km離れた山の頂上にて。

「ラミエル」

ギュルンギュルン

ラミエルの形状が変化し、狙撃体制に入った。

サイトがロケットランチャーを撃つタイミングに合わせて砲撃を行う。幸い、ルーンの力のおかげでラミエルが視えている物は私にも見える。

おお、なかなか奮戦していますね。

トライアングルが二人もいるだけの事はあるな。だけど、相手は父上も褒めた位の土のメイジだ。

サイト達がやられるのも時間の問題だろう。

「なかなか奮戦しているじゃない。でも、あのままじゃもって数分ね」

え！あの距離視える！？

水の精霊は伊達じゃないってことか。

「何かしらお父様？よそ見していると、あの子たち死んじゃうわよ。」

え！

すぐにラミエルの視覚と接続し、現状を確認した。サイトがロケラ
ンを受け取り、構えていた。

ま、まずい！

そんなに死に急がないでくれよ。陰から守るこちらの事も考えろっ
てんだよ。

「ラミエル！薙ぎ払え！！！！」

キュピーーン

サイトがロケットランチャーの引き金を引いたと同時にラミエルの
荷電粒子方を発射させた。まさにレーザー兵器だ。ビームがフーケ
のゴーレムに当たった瞬間、瞬く間に融解した。まあ、当然の帰結
か。映画でも鉄筋のビルを紙きれのごとく貫通する程の威力だしね。
射線軸にあった森が消滅したのがよくわかる。

「相変わらず規格外の威力ね。で、あのゴーレムを操っていたメイ
ジは捕えないでいいの？」

フーケとの接触か。それも有りだろうが、正直扱いに困りそうだからやめておこう。腐った貴族しか狙わない盗賊らしいが、所詮は泥棒だ。抱え込むには厄介事が多すぎるし、殺しても原作と乖離が起こってしまふ。だから、ここはサイト達に任せよう。

「いや、後はあいつらに任せよう」

これ以上の乖離されるとこちらも困るからね。

「そう、でもあの山火事で死ななければいいけどね」

・・・

ちよこつと、威力高すぎたかな。

まあ、こういう時は主人公補正という謎の現象が働くだろうし問題なかるう。

「なーに、死んだらそれはそれで打つ手はあるさ」

その夜、フリッグの舞踏会 にて。

もぐもぐ

今日の主賓達が全員参加をしている処を見る限り、あの山火事でも無事だったみたいだ。普通なら死んでもおかしくないのだが、タバサの使い魔を使って生き残ったらしい。

それにしても、無駄に量が多い料理だ。パーティーで貧相なのはよくないが、学生たちのパーティーでこれはやり過ぎだと正直思う。後で、水銀燈の分も持って行ってやらねばな。

味濃い！

「この間の件で、話がある。ヴェストリの広場で待っている」

私が、料理を食べているとタバサがそう言い残し去っていった。あのー、前回より少し改善されたけどさ。返事を聞かずに行っちゃうのはどうかと思う。まあ、舞踏会で一人寂しく壁際で料理を食べているもの味気ないので行ってあげよう。

ヴェストリの広場にて。

「本来ならば、もっと早くご挨拶をするべきであったのだが申し訳ない。私は、レイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグル。以後お見知りおきを」

「あら、ご丁寧にも。私はこの子の親友のキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ」

タバサには、挨拶をする必要ないだろう。

それにしてもキュルケまでこの場にいるとは予想外もいい処だ。タバサが連れてきたのか、それともキュルケが自主的に付いてきたのかは定かではないが面倒なのに変わりは無い。

後、一言だけ言わせて貰おう・・・キュルケの名前長過ぎ！覚えられねーよ。

「それで、どういったどういった要件だ？手短にお願い願おう」

私は早く戻って水銀燈に晩御飯を持っていかないと行けないのだ。こんなくだらない用事に長い時間など掛けられん。

「鎮静剤を売ってほしい」

なるほどなるほど、売ってほしいと来るか。という事は、カトレア嬢が薬を服用している事や私が鎮静剤を売っている事がばれていると言う事か。タバサ一人でこの事を調べきつたとは到底思えない。となれば答えは明白だ。キュルケを使って、情報を手に入れたとみて間違いないだろう。

チツ、儲けそこなった。

「この短い期間でよく薬の出どころまで調べたものだ。まあ、殆どはキュルケ嬢の力を使って調べたのだろうが一応褒めておこう。売る売らないは後にして、薬の事を調べたのならば知っていると思うが・・・金の用意はできているんだろうな？」

タバサが本来の地位に居るとすれば払える額であろうが、今の立場的に考えてどうやっても払えるはずがない。あの額を一括で払える奴なんてハルケギニアでもそう多くはいないだろう。

「お金なんて後からでもいいじゃない。ヴァリエール家から相当搾り取っているとお父様から聞いたわよ」

な、なんでヴァリエール家から搾り取っているからタバサからお金を取るのは後回しでもいいという結論にいたるんだよ！一体どうい

う思考回路しているんだよ。

「話にならん。私から力づくで情報を聞き出そうとした輩を信じて先に薬を渡せと言うのかい？それと一つだけ言っておこう。お金の有る無しに関わらず例の薬をヴァリエール家以外に売ることは出来ん！」

タバサとキュルケの顔がみるみる曇っていく。
どうするつもりだ。力づくで来るか？

そう思うと既にタバサは戦闘態勢に入っていた。おいおい、相変わらず母親の事が絡むと短気だな。

「まあ、落ち着け。お前達に売ることには出来ん。だけど、お前達がヴァリエール家から勝手に薬を強奪する分には私は何の関与もしない」

ヴァリエール家に売った後ならば好きにしてくれて構わないさ。後の事は私の知ることではないからね。

「そんな事出来るわけないわ！？仮にも相手は公爵家よ」

キュルケ嬢が叫んだ。

「なら、諦めれば？」

私がさも当然の如く言った言葉にお二人が切れたようだ。駄目だね最近の若者は沸点が低すぎる。

「私達も貴方と同じトライアングルなのよ。四の五の言わず薬を渡さないで怪我するだけじゃすまないわよ」

おー、怖い怖い。

この世界の女は本当に血の気の多い連中ばかりだな。

「君の父上とは同盟関係にあるのだがな。まあ、君には怪我を負わさないであげるよ」

流星に、あの辺境伯でも娘に対して物理的に暴行を加えたら怒るだろうから無傷で倒すか。ああ、面倒だぜ。

「フレイム・ボール」

「ジャベリン」

二人同時に攻めてきやがった。まったく、良く出来たコンビだ。魔法など避けなくても問題は無いのだが、無傷でいる理由を説明させられるのはごめんだから死なない程度に反撃するかな。

パチン

「錬金！」

フレイム・ピラーを使いジャベリンを蒸発させ、錬金でフレイム・ボールの周辺の酸素を全て二酸化炭素に変化させ炎を焼失させた。

「思った入りやるわね。それに、貴方は土のメイジじゃなかったかしら？」

その通りですよキュルケ嬢。私は、貴方達とは違い特化型の土のメイジですよ。

後、さり気なく後方でトライアングルスペルを詠唱しているタバサ

がウザイ。

「ウィンディ・アイシクル」

チツ

前方より多数の氷の矢が飛来してくる。全く、メイジの魔法は相変わらず殺傷性が高い物が多い。私なら死なないと思って、この程度の攻撃でも死なないと思っっているのか？いや、きっと殺した後に領地から薬を奪う気でのるだろう。

私はマントを手に取り、飛来してくる氷の矢をマントで薙ぎ払った。

カーン

飛来して氷の矢がタバサ向かって跳ね返った。そう、このマントはただ丈夫なマントじゃないぜ。なんせエルフ産のマントだ。反射の魔法が付加されているのは、むしろ当然。

タバサは、自分の呪文が跳ね返ってくるなど想定外だったようだ。一瞬焦った様子もあったが、すぐに持ち直し回避行動に入ったが、戦場一瞬の遅れが死を招く。流石に即死コースじゃないが重傷は避けられないだろう。

残り一人。

「ファイヤー・ウォール」

タバサに直撃する寸前で炎の壁がそれを遮った。やはり、連携されると倒せるものも倒せなくなるか。

「長年コンビを組んでいたような闘い方、流石です。キュルケ嬢、貴方には先に退場をして貰います」

貴方には、タバサとのOHANASHIが終わるまで石になって貰います。

「簡単に言ってくれるわね。私をあまり・・・なにこれ？一体、な・・・」しばらく、大人しくしてくれ。後で治してやる」覚えてなさい」

パキパキ

キュルケの体を表面を石に変えた。なに、盗賊達に掛けている【メデューサ】と違いちゃんと鼻から息をする位は出来るようにしてある。窒息死することはないだろう。

「それで、まだやる気かい？タバサ嬢。こちらとしてはいい加減にして欲しいのだが」

「貴方が薬を渡せば、もう関わらない」

いやさ・・・だから、ヴァリエール家から強奪しろって何度も言っているだろう！まさか、ヴァリエール家を相手にして戦争は出来なくても、我が領地とは戦争しても構わないということなのか！？幾ら温厚な私でもそろそろ怒るぞ。

「あまり、しつこいとお前の使い魔の事をアカデミーにはらすぞ。あそこの連中は、研究の為なら人の命などゴミ同然に考える奴らだ。そんな連中が、君の使い魔がどんな存在か知ったらどうなるだろう

ね？」

・・・

「っ、シルフィード は関係ない」

あるって！むしろ、タバサの使い魔って時点で関係大ありだから。
今更、何言ってるんだよ。

「関係あるね。世の中、自分の都合だけですべてがまかり通るなんて思うなよ。こっちは、さっきからお前に対して問題の解決案を出してやっているのに、無視して薬を寄こせの一点張りだ。少しは、こちらの都合も考えてほしいものだ。貴様は、自分の母親さえ治ればそれでいいかもしれないが、そのせいで我が領地は多大な被害を被るかも知れんのだぞ。その責任を貴様は取れるの言うのか？」

仮にも相手は大国ガリアだ。

こちらが下手な行動を取って飛び火するのはごめんだ。

「なんで、貴方が私の母の事を知っている？」

・・・

タバサの雰囲気がいっそう険しくなった。

あ・・・やっちゃったぜ。ついつい、口が滑ってしまった。だが、この程度の事乗り切ることなど造作もないわ。

「本気で言っているのか？お前の素性を調べれば答えにたどりつくのは造作もない。分からないようだから教えてやる。一つ、偽名を使って入学が許される立場である。二つ、その髪の色。三つ。お前の年齢と性別。これらの要素を君合わせれば答えは絞られてくるものさ」

ここまで伝えてあげれば十分だろう。では、最後の締めにはいるかな。

「話がそれってしまったが、そちらがこれ以上私に関与してくるならば、お前の使い魔の事をアカデミーにばらす。これは、脅しではない。最終通告だ。答えと聞かせて貰おうかリトル・レディ？」

ふふふ、悔しいか？それは、己の力不足を恨むがいい。私が、親切にもタバサの母親を助ける手立てを何度も教えてあげているのを無視した報いを受ける！

「わ、わかった。貴方にはもう関わらない」

どうも胡散臭い。こういう輩の言う事を信じると後でしっぺ返しがかかってくる。競争だから、保険を掛けておこう。本来なら北斗神拳を使って相手の思いを確認する処だが、この場で使うのは目立ちすぎる。

ならば、ここで新作のマジックアイテムの出番だ！

やっと、使いどころが出来たよ。北斗神拳を学んで以来もう使う機会が無いと思っていたが備えあれば憂いなしってまさにこの事だぜ。

「私は、お前の使い魔の事を黙っておく。そして、お前は私に関わらない。これが契約内容だ。その事に異論が無ければ人差し指を前に出せ」

そうそう、大人の言う事には素直に従うのがイイ子の基本ですよ。私は懐から不気味なアメーバー状の物体を取りだした。そして、それをタバサの人差し指に付けた。

「大人しくしている。お前が暴れたら使い魔とキュルケがどうなっても知らんぞ。ちなみに、魔法使おうなんて思うなよ。私は確実にお前より早く魔法が打てる」

「ぐっ、痛い」

アメーバー状の物体は、解けるようにタバサの指と同化していった。そして、完全に同化が完了した。

「よし、これにて契約完了だ。契約が終わった処でお前にはこのマジックアイテム【アキューズド】の効果を教えておく。これは、お前が先程の契約を破った際にお前自身を永遠に醜いヒキガエルへ変貌させるものだ」

目を見開いてこちらを見てくる。そんな顔をしてもう遅いぞ。

「なーに、お前が裏切らない限りこのマジックアイテムは無害だ。もし、嘘だと思うなら試しに私に対して魔法を撃ってみるがいい。その時がお前の人生最後の瞬間になるだろうがな。くくくくく」

「外道」

ピク

だ、だれが外道だ！そもそも、お前から無理やり呼び出して薬を寄

こせと脅迫してきたんだろうが！どっちが外道だよ。まあ、良い。これ以上タバサからの干渉は無いだろう。なんせ、今の一言で指から血を流しているのが見える。どうやら、マジックアイテムは正常に動作しているようだ。

「おっと、キュルケ嬢を治さないかね。辺境伯に怒られてしまうな
パリンパリン。」

キュルケの表面の固定化を解いた。

「話は、ある程度聞こえていたわ。お父様が貴方には近づくなと言っていた意味がやっと分かったわ。貴方って本当に最低のゲスね」

治してあげたにそりゃないんじゃない？

それに辺境伯の言葉を無視して近づいてきたのは貴方でしょ！

「知っているか？こつこつこの世間では、身から出た錆というのだよ」

そう言い残し私は部屋に戻った。

主人公は、いつも嫌われる。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

マジックアイテム紹介

名前：【アキュースド】

効果：裏切るとカエルになっちゃいます

元ネタ：バスタード

集落の紹介

集落名：『仲間^{チーム}』

元ネタ：戯言シリーズ(西尾 維新)

この集落にいる変態集団の紹介。

一言で表すのが難しいので本当に簡単に一言で片付けます。詳しく知りたい方はwikiで調べてね^^

【玖渚機関】：電子工学系のプロフェッショナル集団

【匂宮雑技団】：殺し屋集団

【十三階段】：各種技能に特化した13人の集まり

次回は・・・考え中です。

主人公は、舞台裏で頑張る。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして、感想を書いてくれた方々に深く感謝しております。

今回は、アルビオンに着くまでのお話です。

よく、考えるとまだ小説の二巻目すら終わってないんですよ(汗)

主人公は、舞台裏で頑張る。

舞踏会の日から、実に平和の日々を過ごしているレイアです。

全く平和は素晴らしい！お陰で講義にも身が入るといふものだ。そして本日の講義は、風最強を謳うギトー先生の講義である。講義の内容が偏っている事から、生徒の人気は今一つであるが私はこの講義が大好きだ。自分の系統に自信を持っていた人の話は、実に為になる。そして、何より聞いていて楽しい。

ガラガラ

「ギトー先生……」

だが、そんな楽しい日々も終わりを迎えるのは早かった。どうやら、この国の無能の代名詞でもある王女が来るのだ。

正直に言おう……絶対に会いたくないでござる！

もしもだ、万が一にも気にいられるような展開になれば将来真つ暗だ。そうは言っても一目も見ないで無能王女と決めつけるのも流石に悪い。だから、人ごみに紛れて一目だけ王女を見てから、学院に休みの届けを出して実家に帰省する。本来なら品評会で見たんだけど……さぼっちゃったからね！

王女を一目見たら、早速戦争の準備だ。なんせ、近年まれにみるタクの稼ぎ時だからね。この日の為に、大金を使って偽装船まで用意したのだ。狩って狩って狩りまくるぞ！！

ぐふふふふふ

正門前にて。

学院の生徒が並ばされている。そこに並ぶ連中は、全員王女に媚を売ろうと必死である。まあ、家を継げない貴族も多いからこういうアピールの場は貴重なんだろう。精々、私の壁程度にはなってくれよ。

そして、皆さまの待ちに待った王女様の到来だ。門から煌びやかな装飾がなされた馬車が入ってきた。ほほう、ユニコーンか・・・あれ、美味いんだよな。

じゅるり

「ヒ、ヒコーン」

ガタガタ

急に王女を乗せたユニコーン全てが暴れ出した。護衛の者も急に慌ただしく動き始めた。どうしたんだろう？原作にはなかったけど、まさかの敵襲か！？

あ・・・ユニコーンと目が合った。

ユニコーンは、怯えた目でこちらの方を見ている。一体どうしたんだ？私の後ろに何かいるのかな？

くるり

後ろを見てみるが誰もいない。おいおい、勘弁してくれよ。私は、幽霊とかそつち系はあまり好きじゃないんだからさ。

なーんてね。

というか、この状況は激しくやばい！やはり、一目見るなんて甘い考えを捨てて実家に帰るべきだったorz

明らかに馬どもは、私を見て怯えているぞ！くっそ、私がお前らに何をしたって言うんだ。確かに、この間帰省した時に馬刺し^{ユニコーン}を食べたけどさ。まさか、同胞の死の匂いでも染みついていたのか？今は、そんな事を考えている暇なんてない。人ごみの中を移動して自室まで逃げ帰るぞ。魔法衛士隊に見つからない事を切に願う。

スルスルスル

人ごみの中を流れるように抜けて塔の中までたどり着いた。ふう、緊張したぜ。

獣の嗅覚は、伊達じゃないな。だけど、ここまでくればもう安全。さて、出かける準備でもしようかな。

「待て！その者、少しばかり聞きたい事がある。こちらに来てもらおう」

私の背後から一人の男が声を掛けてきた。

世の中、そんなに甘くは無いが。腐っていても魔法使いのエリート。中には優秀な奴もいるんだな。

「なんででしょうか？」

「私は、アンリエッタ姫の護衛の魔法衛士隊の者だ。先程、ユニコーンが暴れた一件について聞きたい事がある。悪いが同行願おう」人を犯人だと決めつけるな！・・・と本来なら言いたいがやっぱり私が原因だよ。くっそ！世の中は理不尽だ。何とか言い逃れ出来ないものかな

「あー、申し訳ないのですが人違いではありませんか？ これから実家に帰省する予定ですのでご遠慮させていただきたい」

私がそう言うと魔法衛士隊の人の後ろから一匹の犬が現れた。

「この期に及んでも言い訳をするか？ ユニコーンは、お前から漂う血の匂いに怯えたんだ」

「残念だったね。この子の嗅覚からは逃げられないよ」

・・・

うそ！犬が喋ったぞ！

なにそれ、猫がルーンの効果で喋れるようになるとは聞いた事があるけど犬は初めてだ。年甲斐もなく興奮しちゃったぜ。いやー、魔法って不思議だ。

ふう

きつと、このまま連れていかれたら何もしてないのに重罪を背負わ

されるんだろうな。ああ……気が重いが仕方ない。

「そういう事ですか……悪いね。>>動くな<<」

「なっ」

ザシュザシュ

ドサ

相手の動きを止めてから、地面からゼルエルの触手で使い魔と魔法衛士隊の人を突き刺した。悪いね、土のメイジなら地中のゼルエルに気づけたかも知れなかったけどね。それにしても、魔法衛士隊とは存外もろいな。我が友ならこの程度、食事をしながらでも避けるのだが……まあ、比べる対象が違いすぎるか。

「錬金」

流石に、死体や血痕をこのままに出来ないので、錬金で綺麗に掃除した。それにしても、魔法があれば完全犯罪し放題だな。某名探偵でも推理不能だぜ。

しかし、これで今すぐに休学届を出しにくくなったな。このタイミングでは流石にあやし過ぎる。捕まるよりマシだったが選択を誤った気がするな。

「どっすっかな……」

その夜の部屋の前の廊下にて。

やはり、魔法衛士隊の一人が行方不明になった事から色々と問題が生じてしまった。某国のスパイに殺されたとか学院の使い魔に食われたとか様々な話が飛び交った。とりあえずは、学院側からこの件に関して、知っている事があれば言いだすようにという形で決着がついた。幸い、私に関係する話は出て無いようなので一安心だ。

「それにしても、アンリエッタ王女は美しかったと思わないかい？
ミスタ・ヴェーグル」

そして今、私は廊下でギーシュと話し込んでいた。というか！お前は、サイト達の処に早くいけよ。お前が居ないとあいつ等死ぬだろ。この間の決闘以来なぜか仲間意識を持たれているレイアです。どうかして、引き剥がせないだろうか。

「恋人がいるのに、そんな事言っていていいのかい？折角、仲直り出来たんだろう。他の女を褒めていると恋人に怒られるぞ」

「はははは、手厳しいな。でも、モンモランシーもアンリエッタ王女を綺麗と褒めて怒りはしないさ」

そういうものなのか？ハッキリ言って、彼女いない歴〃年齢の私にはそこら辺は分からないのだが・・・何となく怒られる気がするぞ。そんな事はどうでもいいんだよ！お前が行かないと物語が進まないから、少々強引ではあるが許してくれよ。

「あ、窓の外でアンリエッタ王女が全裸で筋トレしているぞ！」

「ほ、本当かい！どこだ！一体どこにいるんだ。ミスタ・ヴェーグル」

・・・

いやさ・・・自分で言うのも可笑しいのだが、全裸で筋トレとか誰が聞いても嘘だと分かるだろう。そんな、血眼になって捜すなよ。

ずぶり

「あがつ」

「今からサイト達のいる塔にフードを被ったアンリエッタ王女が入ったら、その後について行け。そして、扉の外で聞き耳をたてている」

私が秘孔を突き、そう命令するとギーシュはすぐさまその場から立ち去った。

なんとか、原作通りになったな。なんで、私がここまでフォローしてやらないと駄目なんだろう。

「頑張つてこいギーシュ。もしも、死んだら同じ土のメイジのよしみで蘇生位してあげるよ」

あいつ等は、明日には出かける事になるだろう。私も準備を進めておこつ。

翌日（サイト達が出発した日）、実家にて。

学院に実家の事業の為という名目でしばらく休む旨を伝えてきた。

「一体、学院を休んでまで戦場に行くとはどういう事だレイア？」
現在、猛烈に両親から説教を受けております。そりゃ、怒るよね親だもん。子供が勝手に危ない処に行くなんてしつたらそりゃ止めるわ。

「そつよレイアちゃん。理由も説明しないで勝手に行動するなんて流石にママも怒るわよ」

ミシミシ

怒るの何も現在進行形で私アンクルホールドに関節技を掛けているじゃありませんか母上！

ちよっと、マジで痛い痛い。

「痛いでしょレイアちゃん。でも、ママの心はもつと痛いのよ。私達に内緒で色々と頑張り過ぎなのよ。もう少し私達を頼って欲しいわ」

声をする方を見てみると・・・母上が増えた！？私の説教の為に偏在まで使うなんて、なんて魔法の無駄遣い！流石は、トライアングルの母上だ。私が上げた魔法の指輪を使いスクエアスペルを使うとは恐るべし。しかも、領地内限定とはいえその実力はメイジの中でもトップクラスであろう。なんせ、精神力の消費が無いからね。

メキメキ

「父上、ヘルプミー」

「諦めなさいレイア。一人息子を心配する親の身にもなってみる」
そう言われると、ぐうの音もでない。

うおー！、痛いぞ！いや、本当にそろそろ不味いつて！ヒーリングを掛け続けて無ければ既に骨が折れてるよ。

あまり、両親に心配を掛けたくないから少しだけ真実を混ぜて教えるか

「わ、分かりました。理由を話すのでその技はずしてくれませんか母上。そろそろ、貴方の可愛い息子の関節が曲がってはいけない方向に曲がってしまいます」

すると、母上の偏在が消えてようやく解放された。

「実はですね。以前にエルフとの貿易した際の約束事を守る為なんです。今回、『ネフテス』からの要請で虚無の使い手を陰から監視しろと任を貰いました。言うまでも無く、その使い手は、信じられない事にこの時期にアルビオンに行く事になったです。戦争で死なれると面倒なので、私もアルビオンに向かい陰から守ろうかと思えます」

あら、両親の驚いている模様だ。もしかして、私の慈善行動にいたく感動したのかな？

「虚無の使い手だと!?!」

「レイアちゃんはその相手を知っていると言う事は、学院の生徒の

誰かという事かしら？」

エルフは、すでに全員知っているしバラしても問題ないか。どうせ、しばらくすれば人間側にも知れ渡る情報だからね。

「ええ、父上と母上もよくご存じのヴァリエール家の三女……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。彼女が今代の虚無の使い手の一人です」

「あまり、聞きたくない家名であつたのだがな。それにしても、嫌な役回りだな。あの一家の者を守らねばならんとは……」

おお！流石、私の両親だ。私も気持ちをよく理解してくれている。

「でも、レイアちゃんだけじゃ心配だわ」

まずい。母上と父上と一緒に来ちまったらメイジ狩りがバレてしまう。いや……既にバレているかもしれないが、堂々と出来なくなる。

「大丈夫です父上母上！今回は、アミバも一緒にアルピオンに行つてくれる事になってるので何も問題ありません。ですから、安心して息子の帰りを待っていてください。ほら、昔から可愛い子には旅をさせると言っじゃありませんか？」

「まあ、良いレイア。いつもの事だ……私達が止めても行くのだろっ」

そんな心をえぐるような事を言わないで！ほら、エルフとの約束を守る為でもあるんですよ一応。

「そうね・・・なんせ、私達に内緒で船まで新造している位ですからね」

はははは！なんてこった（汗）

「すみません。無事に帰ってくるんでそれ以上は許してください……」

「やっぱ、両親には勝てないな。」

更に翌日（サイトとワールドが決闘を行った日）。

「まずは、ラ・ロシエールで偽装船を受け取り、そのままアルビオンに乗り込もう」

「随分とゆっくりした旅だな。まあ、それもたまには良い。船の中でじっくりと今後の作戦を聞こうじゃないか。この間の『場違いな工芸品』についても色々と話したい事もあるしな」

もう進展があったのか、そりゃ楽しみだぜ。

まったく、これから戦争に行こうとしているのにお互い随分とマイペースだね。それにしても、そんな活き活きとした顔をするなんて、お主も悪じやのー！。

「似た者同士、馬鹿やってないで行くわよ。それと、お父様……当然、私の指輪の一件も覚えているわよね？」

……

・・・

ごめん、水銀燈。いやさ、忘れてたわけじゃないんだって。ただ、記憶の底に眠っていたただけであって・・・。。。。本当にすみません。

「も、勿論」

「嘘ね」

「嘘だな」

誰も私のフォローをしてくれない；；とつか、ここは水銀燈はまだしもアミバが私の味方につくべきでしょ！

常識的に考えて。

「あーあー、きこえなーい。さあさあ、ゼルエルに乗って出発するよ」

ラ・ロシエールにて。

「ふむ、良い船だ」

見た目はただの商用の船であるが、中身は鉄製の新造船だ。しかも、積載量は人間を100人位収容できる物である。うむ、ちゃんと注文通りに出来ているな。早速、船の船長に会いに行くかな。

「お待ちしておりますりましたレイア様、アミバ様」

船を見上げていると中からガチムチの強面のオッサンが出てきた。ちなみに、うちの領民である。赤の他人を雇って情報が漏れるのを防ぐ為に人選もしっかり行った。

「その様子だと怪我はもう大丈夫のようだね。こうして、君の元気な姿が見れて良かったよ」

私が話しかけようとすると、横にいたアミバが先に船長に話しかけていた。

え！誰この人！？

さわやか系イケメン俳優で売りだしても問題ない位な笑顔で船長に言葉を掛けている。一瞬、忘れていたがアミバはこういう奴だった。二重人格では？と疑うほどの豹変ぶりである。流石は、エルフだ。

「準備の方は？」

「はい、風石を積み込み次第出発可能の為、早くて今日の夜になります。ご指示通り、商船に化けられる為の積荷も既に乗せております。何を積み込もうか迷ったのですが、戦場に行かれると言う事でしたので、硫黄を満載しております」

うむ、良く出来た船長だ。適当な積荷ではなく、戦場で飛ぶように売れるであろう硫黄と積むとは流石だ。後で、全員ボーナス確定だな。

それにしても硫黄ね・・・いや、まさかね。

「良くやってくれた。君のおかげで領地が更に住みやすくなるだろ

う。命がけの仕事になるかもしれないが、よろしく頼む」

私が頭を下げると船長が泣き崩れた。ちょ、ちょっと男泣きですか！？

なに！？そんなに感動しないでもいいじゃない。

「あ、ありがとうございます。必ず、必ずレイア様達をアルビオンまでお届けいたします」

「ああ・・・一つ聞きたいのだが、この港で他に硫黄を積載した船はあるかい？」

やはり、気になる事は事前に確認しておかねばならない。

「いないはずですよ。最近流れてくる硫黄は全て、我々が買い占めておりますので」

＼（＾o＾）／？オワタ？・・・

な、なんてこった。まさか、この船に乗せる事になるのか！？
乗せたくない・・・だけど、乗せないと話が進まないorz

その日の夜にて。

「例の『場違いな工芸品』の解析は8割ほど既に終了し、早ければ次の虚無の休日には量産体制に入れるだろう。相手側も大層喜んでたぞ」

は、早すぎるだろう。

数カ月は掛ると思っていたがこんなに早く実現できるとは恐るべし。

「そうか、それは良かった。私が口に出す事でもないが、後は全てエルフの好きにしてくれ。あれを使えば更にエルフの生活は良いものになるだろうからね。後、量産が出来るようになったら我が領地に数台回してくれるようにお願いして欲しい」

「伝えておこう。後、『仲間』^{チーム}からの伝言だ。小さいほうの『場違いな工芸品』を使う為にある物を空まで運んで欲しいそうだ」

いつから私は運び屋に転職したのだろうか・・・

まあ、深く考えたら負けかな；；

「分かった。今回の一件が終わり次第、集落に向かわせて貰う」

コンコン

「失礼します。先程、レイア様が仰っていた貴族達がやってきた為您指示通りに致しました。それと、リーダーと思われる貴族から代金としてこれを頂きました」

ドサ

ふむ、なかなかいい額だ。まあ、サイト達を襲う傭兵を雇う位だけの程度持っていて当たり前か。

「この金は、乗組員全員で分けてくれ。危険手当だと思ってくれればよい」

私がそういう伝えると深くお辞儀をして船長が出ていった。何もこ

んな子供に頭下げなくてもいいのにな。

「では、これからアルビオンでの計画について説明しよう。領地繁栄の安全と繁栄の為に頑張らしましょう。まず最初に……」

サイトの捨て身の特攻に合わせて、メイジ狩りの実行計画について話した。自分から餌になってくれるなんて嬉しい限りだ。

10分後。

「なるほどな、計画は分かった。しかし、この地にもエルフ……いや、ハーフェルフが居たとはな」

ああ、そうですよアミバ。貴方のお仲間でもいいのかな？いや、なんか既に別種族な気もしなくわないが一応耳が尖っているからエルフでいいよね？

「当然、そのハーフェルフには何もする気は無いよ……指輪さえもらえば。今回、ハーフェルフが持つ指輪は、メイジ狩りのおまけみたいなものだからね。予定に変更は無いよ」

「では、狩りの時間までお互い食事でもして英気を養うとしよう」
そうですなアミバ。

王家からは金品を搾り取り、レコン・キスタからはメイジを限界まで奪ってやるぞ。

くっくくくく、楽しみだ。

主人公は、舞台裏で頑張る。（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

そろそろ、ラミエルにご活躍願おうと思います。

さてさて、ティファニアの扱いどうしようかな・・・書きながら考えますが、多分ルイズ達に比べて幾分かマシにはなると思います。

主人公は、エロフにあう。(前書き)

リアルが忙しくて全然執筆出来ない。

申し訳ありません

。

内容の見直しは、明日以降に掛けたいと思います。
誤字見直し後タイトルの暫定を外します。

内容の見直しが終わっていない様に上げるな等の声があるかもしれませんが・・・作者としては、先ずは更新を優先したいと思います。

主人公は、エロフにあう。

空賊に襲われて、王族派の本拠地に来ているレイアです。

いやー、それにしてもまさかこのような場で王族と対面するとは予想外だったよ。

本拠地について直ぐに交渉の為、皇太子が船にある私の部屋までやってきた。本当なら船長にこういう事はやって欲しかったのだが、王族相手に交渉事など出来ませんと言われてしまった。まあ、仕方ないので私が交渉をする事になったぜ。

「単刀直入に言おう。この船を積み荷ごとを売って貰いたい」

テーブルをはさんで反対側に座りこんでいる皇太子が口を開いた。そして、その椅子の後ろに二人の護衛メイジが立っている。

「単刀直入な話は嫌いじゃない。だけど、せめて自己紹介位してほしいですな。皇太子様」

さて、どんな反応を見せるかな？王族の威厳とやらを見せていただきましょう皇太子様。

「おっと、失礼した。アルビオン王国皇太子ウエールズ・テューダーだ」

特に気を悪くした様子もなく普通に挨拶をしてくれた。ふむ、存外出来た人間なのかな？ここ最近、真っ黒な貴族しか見ていなかったから凄く新鮮に思える。

「初めましてウェールズ皇太子。トリステイン 王国所属ヴェーグル男爵家嫡男レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルです。以後お見知り置きを」

お互い形式的な挨拶を交わして交渉に入った。

「・・・ヴェーグル？もしや、トリステイン王国で唯一エルフと貿易を行っているという領地の事か？」

おや、ご存知でしたか。こんな離れた空島の王族にまで話が出るとは、我が家も有名になったもんだ。もちろん・・・悪い意味で有名なんだろっかな！

「恐らくご想像の通りです。何か問題でもありますか？」

一瞬、うちの家名を聞いた瞬間反応があったのが気になる。領地に密偵でも送ったのかな？もしそうならば、今ごろは私の地下室でタンクになっているだろう。あるいは、従弟に当たるティファニアの事でも考えたのかな？一応、我が領地はエルフが暮らせる数少ない人間の領地だからね。

「いいや、何でもない。改めてお願いしよう。この船と積み荷を我がアルビオン王家に売ってほしい。もちろん、お金は言い値で払おう」

英断だな。貴族派にやられて財産を好きに使われるより、硫黄に変えて華々しく散る事を選ぶとはね。まあ、売ってあげてもいいかな・・・硫黄だけはね。船は、別の目的があるし、却下だ！

「前置き話で行きましょう。硫黄に関しては、王家の方々に売りましょう。だけど、いくら王家の頼みとあっても船を売る件については了承できません。理由は、貴方がたに船を売ってしまった場合に私達は、この大陸から帰る手段が失いかねません。それに、船を売った大金を持ったままこの戦地を乗組員全員を連れて移動するなど自殺行為もいい処です」

もっともらしい言い訳は、こんなものであろう。それに、この船は大事なタンクを積んで帰るんだから王家になど売る事はできん！

「安心してほしい。我々は、船が欲しいと言ったが別に君等に船を降りると言っているわけではない。ただ、ここにいる非戦闘員を乗せて、トリステイン王国まで送り届けてほしいのだ。だから、その運賃だと思ってくればいい」

ああ・・・確か原作でもそんな感じだったけ？それにしても、断りづらい雰囲気だな。この船に非戦闘員を乗せると言う事は、明日までここにいないといけないと言う事だ。

冗談じゃない！！

私は、ここでやる事が沢山あるんだ。その為には船は必須なんだよ！メイジを狩って連れて帰るにも船はある。それに、ティファニアと接触してエルフの集落への移住をしないか話さんといけん。その際に、性格的に考えれば村人全員移住させないと納得しないだろう。非人道的で申し訳ないが・・・断らせて貰うぜ。

「申し訳ありませんが、船の一件に關してはお応えできません。なぜなら、こここの避難民を連れて帰ると言う事はトリステイン

王国に戦火を広げる可能性があるからです。もしも、その避難民の中に王家の者が混じっていたらレコン・キスタは、確実にトリストイン王国まで戦火を伸ばしてくるでしょう。もちろん、私は王族の方が紛れ込むなど思っておりませんが、相手側は違うでしょうな・
」

まあ、避難民が居ようないなかるうが伸びる事は確実なだけどねでも、私が言った事も可能性の一つではあるはずだ。この避難民を連れて帰る事でそれ以上の人々が危険にさらされる可能性もあるのだからね。

「アルビオン王家の関わった者は、非戦闘員も含めてここで皆死ぬと・・・そう言いたいのか？ミスタ・ヴェーグル」

おー怖い怖い。そんな顔で私を見るなよ！正論？を言ったまででらう。

「言いたくはありませんが、実際その通りです。だから、硫黄はお売り致しますので、華々しく散ってください・・・それと、横の護衛の方に懐の杖から手を離すように言って下さい。詠唱を始めた瞬間に王族派を敵と認識します」

ある意味、王族に忠誠を誓った良い護衛達だな。ウエールズ皇太子の口が厳しくなったあたりからいつでも攻撃が出来るように杖に手をかけるとはね。

「他国の男爵家の分際で意気がるなよ。王家に者の頼みを断るなど言語道断！レコン・キスタの前に貴様に礼儀を教えてやる」

この状況で他国とか関係ないだろう！私は、商人としてこの場にい

るんだぞ。あまり、文句を言うと貴族側に硫黄を売り込みに行くぞ。

そう思っているうちに、護衛の一人が詠唱を始めた。

・・・おい、その皇太子！お前の部下だろう！！

「エア・ニードル」

私が皇太子に対して眼でアピールをするが皇太子は無視し続け、私に魔法が当たるのを見届けた。止める気は無いと言う事ですか・・・はい、そういう事ですな。

カーン

まあ、避けるまでも無く私のA・T・フィールに当たり魔法は霧散した。それにしても、どこの貴族も本当に人の命を軽く見ているやつが多い。明らかに人一人を簡単に殺傷出来る威力で魔法を撃ってくるしね。

まあ、私が言っても説得力のかけらもないか

「なっ」

「ウェールズ皇太子、これは彼一人の暴走でしょうか？それとも貴方の指示で？」

流石は、王族。この程度の事では動揺しないか。

護衛の方は、自信を持ってはなつた魔法がただの学生に防がれた事に驚いているようだ。

「今回の避難民には、彼の家族もいてね。それを思つての行動だったんだ、許してやってほしい」

「いやいやいや、人様の命を取る気でなにを許せと！許せるはずねーだろう。」

「何をどう取れば許せるかさっぱり理解できませんな。仮にも他国の貴族を殺そうとしたんですよ。あまり、ふざけた事を仰つていと貴族派に硫黄を売りに行きますよ」

・
・
・

「そんな事を我々がさせるとでも思っているのかい？この場には、私を含めてメイジが三人もいるんだぞ」

「たかが三人じゃ戦力不足もいい処だ。」

「ふっ、やはり貴方も貴族には変わりなかったか・・・少しは期待していたんですが残念です。アミバもそう思わないかい？」

「蛮族になど期待する方が愚かなのだ」

私が名前を呼ぶを部屋のドアの処にいきなりアミバが現れた。本当に凄い先住魔法だな。完全に気配がなかったよ。

「え、エルフだと」

「なぜここに」

「……………（ガクガクガク）」

「まあ、結果的にその通りなので何も言えないね……それで、ウエルズ皇太子。先程、メイジが三人いると何かあるように聞こえたのですが？」

エルフは、存在するだけで絶大な効果があるな。相手も怯える顔が実に面白い。

くつくつくつく

もっと怯えてくれよ。私を脅そうとした罰だ。

「つく……何でもない。彼の処分だが好きにして構わん」

「え！ウエルズ様」

そうかそうか、これで1タンクだな。まったく、最初から素直に硫酸だけで我慢していれば良かったのにね。これだから強欲な人は困るね。

「安心しろ、生命の安全は保証しよう。決して、死ぬことは無いさ……そう、だから安心していいぞ」

パキパキ

早速、【メデューサ】で石に変える。暴れられると厄介だしね。こういうのは迅速に行動するのが一番だ。

「た、たすけ……」

そんな驚いた顔でこつちを見ないでくれよ皇太子様よ。

「い、一体何を！まさか、これがエルフの先住魔法！？」

何を言っているんだ。エルフの先住魔法がこんなちんけな魔法のはず無いじゃないか。見たことない魔法を全て先住魔法で片付けるのは良くないぜ。何ごともしっかり考えようぜ。だから、何千年たつても中世ヨーロッパみたいな時代なんだよ。

「ああ、お気になさらずに私の魔法です。大丈夫、生きてますよ。それでは、話が戻しまして硫黄の値段ですが・・・言い値でよろしかったんですよね？」

さっさと売買を終えて出ていかないと、またルイズ達が無理やり乗り込んでくる可能性があるからな。それに、ここにいると私達はいいが乗組員に危険が及ぶ可能性がある。

「ちつ、どの道お前から言い値で買うしか我らには道は無い」

道が無い以前に既に貴方の道は既に途切れていますよ。

「話の分かる方は好きですよ。では、王族派の残りの全財産を頂くとしましょう。どうせ、あと数日で死ぬ身の方には使い道は無いでしょうからね」

翌日、サウスゴータ地方のウエストウッド村付近にて。

王家の残った全財産を貰ってウハウハなレイアです。

いやー、腐っても王家は凄いな。タンク用に用意した格納庫の一つが埋まってしまったよ。

これでかなりの期間無職でも暮らせるぞ。

そして、今私は人づてに聞いたウエストウッド村に向かって水銀燈とアミバの三人で進行中です。

「非戦闘員まで見捨てるなんて、相変わらずの外道ね」

そういわんでくれよ。私だって苦渋の選択だったんですよ水銀燈。

「赤の他人を守る為に領地を危険にさらす事なんて出来ないよ。まあ、助けても良かったけど生憎と今回は間が悪かったんだよ。なんせ、メイジ狩りを目的だからね。部外者に見られるのは不味い」

それに、一応レコン・キスタも人間だし。うまくいけば非戦闘員位は見逃してくれるだろう。

「希望的観測ね。過去にも何度か戦争を見た事があるが、敗戦した側の非戦闘員の末路なんていつも同じだ」

「それは、訂正して貰おう。我々は、戦いに勝っても略奪などは行っていない」

ある意味、命より大事な純尻を奪い連中が居るのをわすれてませんか？

「嘘をついたらダメだよアミバ。『薔薇族』の連中が戦争のたびに口で言えない事を相手にしている事知っているんだからね」

・
・
・

「いや・・・あれも略奪？にはいるのか。まあ、そうとらえればそれも言えなくはないが…何故か釈然としない」

おっし！天才から一本とったぞ。

「それで、いつになつたら着くのかしら？」

そろそろのはずなのだが・・・歩いている地面に意識を集中し人が歩いた跡や周囲の人の気配を探った。

まだ、人の気配は無いな。だが、足跡は見つけた。

「周辺に人の気配はないから、もう少し先のはず。なーに、足跡を見つけたから後はそれに沿って歩けばいいだけだからすぐさ」

10分後。

ようやく、村が見えるところまでこれた。本当に随分と森の中にあるんだが。まさにRPGで登場する初期村だ。

「人間、第一印象が大事だと思うのだが、私に足りないものってなにかな？」

「「道徳心」」

・
・
・

・
・

「まあ、おちつけ。私に道徳心が足りないと言うのか！？ありまくりでしょ？自分で言うのも何だけど、あまりに寛大な心を持っているせいかたまに自分の事をブッタの生まれ変わりだと思っただよ」

これだけ領民に尽くし、常に相手と平和的な対話を求め、殺されそうになってもその相手を許し（タンク的な意味で）生かしておいてあげる心！

このどれをとっても死後は天国と決まっっていると思うんだけど。

「お父様、元からおかしかった頭が更に・・・安心して、この秘薬を飲めばきつと良くなるわ」

水銀燈が懐から黒い秘薬を取り出した。

それ、明らかに醤油だね！？それに、元からおかしかったって！お父様にそれは無いんじゃない；；

「ははははは、レイアがブッタの生まれ変わりとな。もしそうならば、シャカは何の生まれ変わりになるんだろっな」

・
・
・

あれ？今、おかしい人物名が聞こえたような気がしたのだが・・・まさかね。

「おっし、アミバ。そこまで言うなら今度領地に帰ったら、領民全員にアンケートで私とアミバと水銀燈で誰が一番人気があるか勝負だ！」

きつと、領民なら私の心を分かってくれるはずだ。

「ほほう、負けが決まっている勝負を申し込んでくるとはいい度胸だ。受けて立とう。もしも、私が勝ったら・・・そうだな・・・ラオウの額に『肉』と書いてきて貰おう」

・
・
・

俺にリアルで死ねと申すか！？

「あら、面白い。だったら私が勝ったら領地の湖を醤油で一杯にして貰おうかしら」

一体、どんだけ醤油作れば足りるんだよ！せめて25mのプール位で勘弁してくれ。

「全員無茶苦茶な要求しやがって！ならば、私がかつたらエルフの集落の女の子の美少女を紹介してもらおう」

ハッキリ言って・・・アミバにだけは負けられんぞ！

負ける＝死

いかなる手段を使って勝ってやるぞ。

そんな馬鹿な会話をしていると村の入り口まで着いてしまった。早速、村人を捕まえてティファニアに挨拶に行こう。

何処かに村人は・・・と思ったら、あそこに金髪のやたらナイスバディの女性がいた。恐らく、間違いないだろう。そして、こちらの視線にも気づいたようだ。

「どういったご用件で？貴方達が欲しがるような物はありませんよ」

・
・
・

どうやら、山賊の類と勘違いされたようだ。

「アミバ・・・人相が悪いみたいだよ」

「いや、レイアの溢れんばかりの負のオーラを感じたのであろう」

お互い一歩も譲らない。

「二人とも馬鹿やってないで、さっさと用事をすましちやいなさい
分かりましたよ水銀燈。」

「あのー、私を無視して話を勧めないでください」

「初めまして、私はレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルと申します」

ティファニアが私が自己紹介した事に慌てているようだ。

「わ、私はティファニアといいます」

改めてみると、半端ねー美少女だな。まさに、エロフとっていい種族だろう。

普通ならドキドキする筈なんだが・・・何故か胸の高鳴りを感じない。も、もしか『薔薇族』の集落に居すぎたせいで私の精神に異常が!?

うおおおー

頭を抱えて苦悩していると

「だ、大丈夫ですか。頭が悪いのですか？」

「誰が、頭が悪いだ! こう見えても天才と自負しているわ」

はあはあ、実に疲れる相手だ。

「す、すみません」

誤るなら最初から言葉に気を付ける!

あー、それにして折角シリアスな雰囲気で行こうと思ったんだが台無しだ。

「失礼しました。私は、貴方に用事があってきたのですよ。モード大公とエルフのシャジャールとの間に生まれた貴方にね」

・
・
・

長い沈黙があった。そりゃ、いきなり来た身元不詳の人物が自分が秘密にしている出生を知っていたら驚くし、悩むよね。

「何処でその事を!？」

「長い話になるのですが、座って話したいのですが・・・」

私が奥にある家の方を見る。

「そ、そうですね。立ち話もなんですので家の中へどうぞ」

さて、第一段階はうまくいったな。後は、上手に話を誘導して・・・
エルフの集落に住むように進めないとな。
さて…何処の集落がいいかな。

主人公は、エロフにあう。(後書き)

人物名：シヤカ

原作：聖闘士星矢

詳細：黄金聖闘士で「最も神に近い男」と呼ばれるほどの実力者である。また、時空を行き来する、神仏と対話するなど通常概念を超越した能力の持ち主でもある。

所属集落：【聖闘士】 本編では登場させるか不明

備考：レイアより圧倒的に強いです。

1月いっぱい忙しい為、執筆活動を休止させていただきました。思っています。

誠に申し訳ありません。

そして、最後まで読んでいただき誠にありがとうございます。

主人公は、恐怖する。(前書き)

いつも読んでくれてありがとうございます。

まだ前話の見直しが終わってないうちに新話投稿という言葉の暴挙に出た作者です。

今回は、ティファニア嬢の能力のお話です。

主人公は、恐怖する。

ティファニアの家にお邪魔しているレイアです。

ティファニアの警戒心の無さに正直不安が一杯です。

自分で言うのもなんだが、我々つて怪しさ抜群でしょう。一人は、他国の貴族。そして、私をお父様と呼ぶ銀髪ゴスロリの水銀燈。最後に、濃い顔のエルフのアミバである。まさかとは思うが、アミバがエルフと気づいてないんじゃないかなと不安も横切るよ。

「オジサン達は、何処から来たの？」

「テファ姉ちゃんは、渡さないぞ」

「ねね、その羽根美味しそう匂いがするから食べてもいい？」

来客が珍しいらしく、我々の周りには村の子供たちが群がっている。なかなか、可愛い子供達じゃないか。そうそう、子供はこの位無邪気じゃないとね。世間を知らないから、貴族である私にも気兼ねなく話し掛けてくれる。嬉しい事だ。

「いい子達だね。私は、すこしティファニア姉ちゃんとお話があるから水銀燈を連れて外で遊んでおいで。後、少ないけどお菓子をあげよう。皆で分けるんだぞ」

「な！なんで、私がこんな子供の面倒をみなくちゃいけないのよ」

私は、子供たちを手懐ける為に持ってきたお菓子を渡した。
そう、最初はこの位がちょうどよいのだ。

「まあまあ、そう言わずにさ。後で好きな物買ってあげるからさ」

「絶対にいやよ」

うーん、意外と頑固だ。

子供の相手位してくれてると思ったのだがな。やはり、こういう役目は雛苺が一番か。

アミバの方をチラッと見る。

「うーん？私が面倒を見てもいいのかな？（ニヤリ）」

常識的に考えて、おかしい人選ですね。アミバに頼んだら、子供達が魔改造されてしまうな絶対に。

「祖茶ですが・・・ササ、ドゾドゾ（*、・）旦」

食卓の椅子に座っている我々にティファニアがお茶を出してきてくれた。気が効くじゃないか。こういう時は、お茶でも飲んで・・・

ポコポコポコプチャー

・
・
・

食卓に並べられた、お茶からあり得ない音が聞こえた。まさかね・・・

・流石にそんな古典的な展開ないよね！？そう信じているぞ神様。
恐る恐る、食卓に置かれたお茶を見てみた。

(; 。) (。 。 ;) (; つ) (ゴシゴシ) (。 。)
え？

む、紫です・・・決して東方的意味でなく、色彩的に紫です。

何処からどう見ても、お茶の色をしていない。おまけに、マグマの
ように何かが噴き出している・・・これは、まずいだろう！色々
な意味的にまずいって・・・。こんなの飲んだら軽く死ねるよ。

こういう時は、誰かに毒味を！

「アミバ・・・」

つい先ほどまで座っていたはずの椅子には、誰も居なかった。まるで
最初から誰も座っていなかったかのように気配が無くなっていた。
なんて、能力の無駄遣いだ！

水銀燈には、悪いけど。水の精霊でもあるし多分この程度の毒茶飲
んでも死なないよね？

「す「さあ、みんな外に行くわよ。お姉ちゃんが、外の事とか色々
お話してあげるわ」・・・」

「わーい、早く行こうお姉ちゃん」

ゾロゾロゾロ

子供達を引き連れて、水銀燈が外に出て行った。ぜ、全員逃げやがった！

「どうしたんですか？レイアさん。お顔が青いですよ」

悪意がないからなおさらタチが悪い。これを飲まなければ完全に私が悪者になりかねないし、ティファニアを連れて帰る為にもここで悪い印象を与えるわけにもいかない。

詰んだな俺。

「いいや、問題ないさティファニア嬢」

ジーーーー

・・・

・・・

・

「そんなに、見つめられても困るんですが・・・」

「ち、違います。ただ、今日のお茶は自信作なので感想なんて聞けたらいいなと・・・テへ」

か、可愛すぎる・・・

だが！いくら可愛くとも、このお茶を見れば千年の恋も冷めるぞ。それに、お茶で自信作ってなんだよ。普通に御湯入れるだけにしておけって！料理が下手なやつがチャレンジ精神を出して色々混ぜる

のは絶対に死亡フラグだ。

「の、飲まないとダメですか？ティファニア嬢」

「はい、ダメです」

ボコボコ

・
・
・

先立つ不孝をお許しください父上母上。

そして、私を置いて逃げたアミバと水銀燈！毎夜毎夜、化けて出てやるからな！

長いようで短い人生だった。

3 . 2 . 1 . 0 で飲もう。

3 . . .

2 . . .

1 . . .

「きゃー！ー！ー！ー！」

私^がまさに毒茶を飲もうとした瞬間に外から少女の悲鳴が聞こえた！

これぞ天の助け！今、救世主レイアがすぐに参上するぞ。すぐに立

ち上がり、さり気なくお茶を床にこぼした……。

パリン

「すまない。叫び声が聞こえたせいでうつかり手が滑ってしまった
(棒読み)」

ジュワーーーーー

「いえいえ、お気になさらずに。まだまだ、沢山ありますので。それよりも、早く子供達の処へ行きましょう。きっと何かあったんだわ」

ま、まだ沢山あるのか……。

子供の命も大事だけど、私の命の方が大事だから今のうちにお茶を全部床に溢しておこうかな。

ティファニアが先に出て行ったのを見てから、ティファニアが用意したお茶を全て外に捨てた。

ファイアー(。。。(つゝ、。||))

本当に申し訳無いと思ったけど、死にたくないから仕方ない。

だってさ……あのお茶こぼした後を見たら床が溶けてなくなっていたんだぞ！だから、決して私は悪くないぞ。

村の入り口にて。

現地に着してみると、貴族っぽい奴と柄の悪いゴロツキみたいな連中が子供を人質にして、ティファニアと話していた。

「こんな辺鄙な村にお前の様な娘が居るとはな。どうだ、私の愛人にならぬか？そうすれば今よりずっといい生活をさせてやるぞ」

「旦那、もちろん私達にも味見をさせていただけのんでしょうね？
へへへ」

まさに教科書に乗せたい位模範的なゲスな連中だな。子供を人質にしておいて何が愛人か……。主に体が目当てなだけだろう。

「全く、子供は眼を離すと直ぐに厄介事に巻き込まれるんだから・
」

水銀燈が私の横でボヤいた。

「まあ、仕方ないさ。体は一つなんだし、守れる範囲にも限界はあるさ。だが、心配はいらない。なんせ、我々が来るまでの間は彼女一人でこの村を守っていたんだろう。だから、この位のアクシデン
トなど日常茶飯事のはず」

「そうか、ならば私が手を貸すまでもないか……。後、無事で何よ
りだ(ニヤ)」

アミバが私の背後からいきなり現れた。相変わらず便利な先住魔法ですな。俗に言う完全ステルスというやつだな。土のメイジである私でも感知不能だ。

そして……。私を置いて逃げたくせに何が無事で何よりだ！覚えて

いろよ。

私達が傍観しているとゴロツキがこちらを見てきた。

「ここにも女がいるじゃねーか。少々、幼いが将来が期待できそうな容姿だから高く売れるだろう。それに、幼い方が高く買ってくれる貴族様もいるから貰っていくとしよう」

どうやら、水銀燈に狙いを定めたようだ。全く、この手のゲスには嫌気がさすぜ。人様の娘を商品扱いしやがってぶち殺すぞ。

イライラ

「本当にゲスな連中ね。私に触れようとしたらジャンクにしてあげるわ。いいわよね？お父様」

当然だ！そんなゲスに触れられるような事があれば身が腐る。

「当然だ。思う存「だめです」・・・」

水銀燈に許可を出そうとしたら、ティファニアからストップの音が掛った。おいおい、いくらエルフからのストップ要請でも水銀燈に害が及ぶのであれば流石の私も怒っちゃうぞ。

「貴方達は、お客様ですから。ここは私に任せてください。いつもの事なので大丈夫です」

どうやら、虚無の魔法を使った記憶操作でもする気かな。どれどれ、お手前を拝見させていただこうとしよう。

「アミバ、これから面白いものが見れるぞ」

「ほほう、それは期待できるな・・・くっくっく」

ゾクリ！

すさまじい悪寒がした。まるで、ゴキブリを裸足で踏んだかの様な絶望感を感じた。

「ふね・・・？」

「あれ？俺たち、何をしてたんだ？」

「ここどこ？なんでこんなところにいるんだ」

男たちが呆けるように空を眺めていた。

あつれー！ー！？確か、虚無つて長い詠唱があつたよね？まさか、聞き洩らした！？それとも高速詠唱とかそんな類のものか？

「詠唱が聞こえなかったんだけど、アミバは聞こえた？」

アミバが不思議そうな顔をしてこっちをみてきた。

「していないに決まっているだろう？それにしても・・・実に面白い」

アミバにも聞こえてないとすると、どうやら詠唱無しで虚無の魔法を唱えたと言つのか・・・まさにチート。いや、エルフだから仕方ないと言つべきか。

ティファニアが貴族と取り巻きたちにもと来た場所に戻るように伝えると、貴族たちは素直に帰って行った。

「こわかったよテファ姉ちゃん」

「お姉ちゃん」

「うわーっ」

子供達がティファニアに泣きついていった。本当に良く出来た子だな。容姿・性格・家柄・種族どれをとっても完璧に近い。ただ・・・あの料理さえなければ、今すぐにも結婚を前提にお付き合いを申し込みたい位だ。だが正直、あの料理を食べながら残りの人生を生きて過ごせる気がしない……

今後、ティファニアへの感情がどういう風になるからは分からないが、先ずは連れて行こう。ここに居れば、サイトの手に堕ちて不幸になる可能性があるからね。それに料理なんて私が作ればいいだけだしね。

うんうんそれがいい！

「ティファ姉ちゃん、足怪我しちゃったから治して」

お！今度は指輪の出番か。よくぞ怪我をしてくれた少年！

「あら、大変。服まで破けちゃって、痛かったよね。良く我慢したね偉い偉い。痛い痛いのとんでいけーっ」

ゾクリ！

ティファニアの掛け声を変えた瞬間、少年の傷が無くなり服が元

通りになっていた。

・
・
・

な、何だ今の！？指輪の効果か！

いや…それならば服まで治るのはおかしい。では、一体どうやったそれに、また悪寒が走った。アミバに目で分かるか聞いてみたが首を横に振られた。同じく、水銀燈も首を横に振った。

「ティ、ティファニア嬢……一体、今何をしたんだい？」

この悪寒の原因を探るべく、ティファニアに聞いてみた。

「何をつて……ただ、怪我した事を『無かった事』にしただけですよ」

まぶしいばかりの笑顔でティファニア嬢が当然のごとく言い放った。『無かった事』にしただと……なんだそのチート！怪我を治すのではなく、その現象そのものを消し去ったと言うのか。

「まさか、先程の貴族達が帰って行ったのは、ティファニア嬢が記憶からここに来た理由と目的を『無かった事』にしたのかい？」

「はい（ニコリ）。よくわかりましたね。本当にレイアさんは凄い、お母様以外で今のが分かった方はレイアさんが初めてです」

ははははは（汗）

笑顔でさらりと怖い事をいつている。ティファニアがもし私の使徒

の力を無かった事にしたら私はただの貴族になってしまふ訳か・・・だから、ティファニアが能力を使うたびに悪寒が走ったのか。

「お母様は、その力を何と呼んでいたんですか？ティファニア嬢」

「『大嘘憑き（オールフィクション）』と呼んでいました」

これを聞いた瞬間に、レイアはこれからどうやってティファニア嬢と付き合っていくのが苦悩したのであった。

主人公は、恐怖する。(後書き)

ティファニアの能力解説：

能力名：【大嘘憑き（オールフィクション）】

元ネタ：めだかボックス

元ネタ能力者名： 球磨川 楔

能力詳細：

現実のあらゆる事象を「なかったこと」にできる能力。外傷や損壊の復元のみならず、身体能力を失わせたり、死亡そのものさえも「大嘘憑き」を自動発動させることで「なかったこと」に出来る。ただし、自分が「なかったこと」にした事柄を更に「なかったこと」にはできない。

今回は、ビダーシャルの隠された能力を紹介しようと思います。ちなみに、ビダーシャルがその能力を使えばレイアとも互角以上に闘えそうな能力にする予定です。能力の元ネタは、 美 です。

主人公は、海老（ティファニア）で鯛（メイジ）を釣る。（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。

そして、感想をくれた皆様に本当に感謝です。

今回は、初めてビダーシャルサイドの小ネタを入れました。

今後は、少しずつ各ミーディアムの小ネタを入れていこうかなと思います。

主人公は、海老（ティファニア）で鯛（メイジ）を釣る。

先日襲ってきた貴族達の後をつけて、サウスゴータにある酒場にアミバと一緒に来ているレイアです。

水銀燈とラミエルは万が一に備えて村に残してきた。もっとも、あのティファニアをどうにか出来るとは到底思えないけどね。

後、ティファニアと子供達に美味しい飯を食べさせた後に来ましたよ。だってさ・・・ティファニアが張り切って私達を歓迎する為に手作りの料理を作ろうとするんだぜ。もう、恐ろしくて見てられなくてさ。だから、私が村の子供達に料理をふるまってあげたんだよ。

子供達が涙を流しながら美味しいと食べてくれたのには、今までどんな不憫な思いをしてきたのだろうと心の底から同情した。ティファニアの料理が人知を超えた不味さなのは予想が良かったが・・・子供達を餌付け出来たのは計画通りだ！本来ならお菓子などで釣ろうと思ったのだが、予想以上の成果を上げてくれた。

そして、ティファニアには母親の情報を私が知る限りの事を教えてあげた。もっとも、エルフである事以外に何にも知らないがそれでも嬉しそう聞いてくれた。まあ、話の大半がエルフの集落について話してあげた。もちろん、『薔薇族』とか『拳王軍』とか濃い処ではなくて、一般エルフ代表とも言える『ネフテス』の話題を話してあげましたよ。

これで、残った問題は某盗賊メイジのマチルダ唯一人だ。後は、直接接触してエルフの集落への移住する事をティファニアへ勧めさせるだけだ。

「それで、肝心なメイジをどうやって見つけ出す気だ？」

流石にレコン・キスタの幹部に近い人物であるマチルダにこちらから接触するのは何かと面倒だから、向こうからこっちに来てもらう予定さ。

「まずは、この酒場でメイジを雇ってティファニアを攫うように指示をする。そして金に釣られてきたメイジどもを私達が狩る！後は、ティファニアマチルダ餌に魚が掛るのを優雅に待つだけさ。幸い、王族派から頂いたお金 がたんまりあるおかげで人を雇うには困らないさ」

まあ、どうせ払っても後で回収するけどさ。

「海老で鯛を釣るか・・・相変わらず良い性格だな。だが、合理的な方法で実に好ましい」

さすがアミバだ。話が分かっていらっしやるね。こちらには幸い極上の餌という名の美少女がいるからね。後は、それにたかる蠅を私達が狩るだけだ。

私は早速に柄の悪そうな連中が集まっているテーブルへを移動した。

「君達を雇いたい」

一瞬こちらを見たが・・・すぐさま、飲み食いを始めた。

「はあ？ここは貴族のお子様が来るような処じゃないぜ。さっさと帰りな」

まあ、一般的にはそう見えるか。こういう連中は金だ黙らせるに限る。

ドサ

「もう一度言う。君達を雇いたい」

大量にエキュー金貨を詰めた袋をテーブルの上に乗せた。さすがのゴロツキも金を見た瞬間に雰囲気が一変した。

「すげー、金だな」

「おい、一体幾らあるんだこれ」

どうだい、すげー金貨だろう。そこらの貴族でも早々お目にかかれない大金だぞ。

「軽く二千枚はある。どうだ、話を聞く気になったかい？話を聞くんらばあんた等の代表と話がしたい。その方が早く済みそうだからな」

ゴロツキどもは、お互いに目で会話をしている。どうせ、私を殺して奪ってしまうとかそんなくだらない考えをしているのだろうか。

私がそう思っているとテーブルの奥に座っている。人物が立ちあがり私の下にやってきた。

「話を聞こうじゃねーか。貴族相手の礼儀作法なんてしらねーから、この口調でいかせてもらうぜ」

ふむ、いかにも小悪党という感じのメイジが出てきた。どこぞの貴族の家督を継げなかつた者だろうか。まあ、そんな事は私の気にする事でもないか。

「構わないさ」

「はははは、それはありがてー。それで、一体俺らを雇って何をするってんだ？貴族のおぼっちゃまよ」

大金を目の前にして凄くご機嫌のようだ。これが人生最後になるかもしれないのに可哀そうな人達だ。

「なーに、簡単な仕事さ。一人の女性を攫ってくる。ただそれだけの仕事さ」

・
・
・

「本当にそれだけの仕事か？これだけの大金を払って人一人を攫う？」

あまりに簡単な仕事に要らぬ警戒心を与えてしまったか。だが、問題ない。

「ああ、そうだ。もちろん、お前らを雇うのにはそれなりの訳がある。その村の周辺には亜人が多く生息しており、私一人では行く事も困難だ。だから、お前らを雇い入れるのだ」

幸い、アルビオンは亜人が多くて有名でもある。だからこそその使え

るいい訳だ。

「それで、俺等にその女を連れてこさせよう事か・・・まあ、色々腑に落ちねーがいいだろう。だが、報酬はこれじゃ少ねーな。こっちは大所帯なんだけ。もう少し色を利かせてもらわねーとな」

ほほう、値上げ交渉か。いいだろう、最後位いい夢を見させてあげるぞ。

「いいだろう。先程の金は前金として貰ってゆけ。成功報酬として更に5千エキュール用意しよう」

「おいおい、随分と気前がいいな。何か裏があるんじゃないだろうな？もし依頼内容に嘘があったらその時は依頼主だろうと命はねーぞ」

私は嘘は言わないさ。そう、成功する事ができたらね。

「勿論だ。後、こちらからも条件をいくつか追加させて貰おう。一つ、対象の人物には怪我一つおわせるな。もちろん、暴行などした場合は即座に報酬は払わんからな。二つ、1週間以内に連れてこい。三つ、万が一にも失敗は許されないから可能な限りメイジの仲間を集めていけ」

「どんな条件かと思いきや、そんなものか。いいだろう」

「では、これがその娘が居る村と似顔絵だ」

私はそういい、地図とティファニアの似顔絵を渡した。私には絵心が無かった為、アミバに描いて貰った。

アミバは、私が書いた絵を見て『エルフの二歳児でもこれより美味しい絵を描くぞ』と言って瞬く間にティファニアの似顔絵を描きあげた。その絵は、正直ウマ過ぎて何も言えなかった。

「こりゃ、すんげー美少女だな」

「だからこそ、数千エキューの価値があるんだ。くれぐれも手を出すなよ」

「へいへい、分かってますよ」

後は、村でこいつらが来るのを待つだけか。そして、この方法でマチルダが掛るのを待つばかり。早く、餌に食いついてくれよ。

「野郎ども！今すぐ仲間を集める。それと近隣の村にいる傭兵達に声を掛けてこい」

「おう！」

「おらおら、さっさとつこけ」

急に慌ただしく行動を開始した。

さあーで、こっちも頑張つて稼ぎますか。（タンク的な意味で）

「さーで、一仕事終えたし。折角だから久しぶりに歌って帰ろうかな」

酒場のマスターにここで歌を披露してもいいか聞いてみた。そしてら、お好きにどうぞと言われた。何か冷たい反応にちょっと悲しい気持ちになったorz

「アミバも一緒どうだい？私の歌は、『薔薇族』ではそれなりの好評で自信もあるぞ」

「いや、止めておこう」

アミバは、そういうと席に戻り高そうなお酒を飲み始めた。まったく、優雅にお酒を飲んでいると本当に絵になりそうな人物だぜ。これで性格がまともならばかなりモテモテだろうに。

酒場にある舞台へ上がった。

酒場に居る何人かはこちらを見て、啞然としている。

「おいおい、貴族が歌うみたいだぞ」

「け、男の歌なんて聞いたかねーよ」

ぐ……言い返したいけど、私もそう思っているから言い返す言葉もない。やはり、こういう役目は女性に限るのだが、生憎と本日は水銀燈はお留守番なんだよ。

だが、その程度の罵声などこのレイアには効かぬ！

これから死にゆく傭兵達の為に処刑ソングを歌ってあげよう。

安らかに死んでくれ。主に私の領地の為に。

「舞う雪は星の欠　天体に手をのばし
行きかう願い感じている　全ては今モノクロームの

そっと零れた白い息　伝えたかった言葉のカタチ
きつと温もりの分だけ　空はほんのり明るくなつた」

澄んだ声？が酒場の中に響いた。

Side　ビダーシャル

ガリアに来たのはいいが、未だに王との面会が出来ずただ王都で時間を潰すだけの日々になっている。だから私は、最近王都で流行りのカフェにきている。何でも東方の珍しい飲み物を出すお店らしく非常に人気らしい。

レイアと一緒に居た頃は、毎日様々な場所へと行った事が懐かしくも思える。一日たりとも休んだ日は無かったな……。思い立ったが吉日といって、サハラの遺跡に行ったり、食材を探すといって深海や火竜山に行ったり本当に色々あったな。

ふふふ

だが、暇なお陰で数少ない趣味である読書をする時間が取れるのは非常に嬉しい。

「店員よ。コーヒーを」

「は、はい。ただいま」

顔を赤らめて慌てて奥へと走って行った。

全く、風邪気味ならば客に気を遣って休むべきだろう。私に蛮族の病気が移ったらどうするつもりだ。

「全く、耳を隠してまで来るなんて本当にコーヒーが好きなのね」

「そういう真紅も紅茶ばかり飲んでいるではないか」

相変わらずレイアから託された自動人形には舌を巻く。幾ら水の精霊とトウコ殿の協力があったからと言って、ここまでの人格を人形に持たすとは正直褒めてもいい位だ。

「私はいいのよ。人形だし」

いやいや、むしろ人形だから飲んでるのがおかしい。普通の人形は、飲み食いしないからさ。

思わずツツコミそうになってしまった。

「そうそう、ビダーシャルに聞いたかった事があつたんだわ」

「珍しいな、一体何が知りたいんだ真紅」

「以前にお父様と決闘して負けたと聞いたんだけどあれって本当かしら？」

随分と懐かしいな・・・あの頃は、まだレイアとであった当初の事

か。あの頃は、まだレイアは・・・いや、むしろあの頃から変人だったな。

「ああ、そうだ」

・
・
・

「貴方、本当に全力で戦ったのかしら？これは私の推測だけど・・・エルフ最大の集落でもある『ネフテス』の老評議会の一員でもある貴方が人外の力を持っているお父様を相手にしたとしてもそうやすやす負けるとも思えないわ」

む・・・鋭いな。

「そう思う根拠は？」

「最初にも言ったけど、推測よ。なんせ、『薔薇族』のアーベヤ『拳王軍』のラオウ、トキ、ケンシロウなどの人物は、お父様が持っている人外の力をねじり伏せる事が可能な程の力を持っているわ。だから、貴方が何の力を持っていないなんてこと自体がおかしいと思っただのよ」

なるほどね。

よい線から推測してくるな。

「結論から言うと真紅の推測通りだ。いずれは教えようとは思っていた・・・だが、あまり人前で使いたくない能力なのだよ」

そう、年齢的意味であまり使いたくないのだよ。私の能力はね。

「是非、見てみたいわ」

「だから、あまり人前で「叫ぶわよ」・・・え？」

今、なんと!?

「私が、貴方に買われたと大声で叫んだらどうなるかしら?きつと、貴方には不名誉なロリコ の称号を得ることになるでしょうね」

いやいや、そんな事はないはずだ。常識的に考えれば良くて兄妹が仲良く、カフェでお茶を飲んでいる図になるはず!

きよろきよろ

「人は・・・無情よビダーシャル。いくら、貴方が取り繕っても私のたった一言で皆の心は一変するのよ」

は、嵌められた。

このカフェに来た時点で勝負は決まっていたとでもいうのか!?

「いいじゃないミーディアム なんだし。隠し事は良くないわ。それに、万が一の時に貴方の能力を知らないと対応が出来ないかもしれないじゃない」

「くっ、分かった。ただし、人目につかない場所だ」

後日、人気のない裏山で。

「早く見せて頂戴。紅茶が冷めるわ」

やはり、見せないとダメか……。

もはやどうにでもなれ！

「真紅……一言だけ言っておこう。飲んでいる紅茶が命取りになるだろう」

「何のことかしら？早くして頂戴」

警告はしたからな真紅。

「見せてやろう！本物のシルシの力を！スタードライバーの力を！アプリボワゼ……！」

空間が割れ、私のサイバディ【レシユバル】が現れた。

そう、これこそが私の能力。レイアのゼルエルにも拮抗する程の力を持った私の力だ。

そして【レシユバル】に搭乗した。

「颯爽登場！」

ばびー！ばびー！

「銀河美少年！レシユバル」

さて……真紅は無事かな。

「ゲホゲホ！フフフ・・・こ、紅茶が・・・ゲホ・・・気管に入ったわ。そ、それにしても、その年で美少年って・・・ゴホゴホ」

「だから、やりたくなかったんだーーーー！！！」

主人公は、海老（ティファニア）で鯛（メイジ）を釣る。（後書き）

ビダーシャルの能力解説：

能力名：「スタードライバー：サイバディ「レシユバル」」

元ネタ：STAR DRIVER 輝きのタクト

元ネタ能力者名：ミヤビ・レイジ 通称：ヘッド

能力詳細：

古代銀河文明が残した工学有機結晶体のオリハルコンで構成された謎の人型ロボット を呼び出す事が出来る。

備考：

？第5フェーズ です。

？ゼルエルとガチで勝負出来るほどの強さです@@@

最後まで読んでくれてありがとうございます。

皆が読んでくれるから頑張れる作者がいる。

本当にありがとう。

今回は、どうしようか考え中@@@

主人公は、買い物をする。(前書き)

先週更新できなくても申し訳ありません。

いつも感想を書いていただき誠にありがとうございます。

こんなダメな作者ですが、皆さまの御声を頂きこれからも頑張っていきます。

主人公は、買い物をする。

今日も元気に村の子供の食事を作っている真つ最中のレイアです。

全く、貴族の嫡男に料理をさせるなど常識はずれもいい処だぜ。だが、料理するのは嫌いじゃないから別にいいけどね。

「おかわり」

「私も」

食卓に座る子供からお代りの注文だ。良く食べて、しっかりと成長しなさい子供達よ。

ふふふふ

この調子ならば、後はマチルダからの一声があれば移住の件は大丈夫そうだな。さあ、子供達よ。もっと、私の料理の虜になるんだ。

「あ、あのレイアさん・・・」

私が忙しく子供達の食事をよそっているときティファニアが声を掛けてきた。もしかして、手伝ってくれるのかな？まあ、料理をよそう程度の作業だしこの程度なら出来るか・・・

「ありがとう。て「私もお代りを」・・・」

・・・

・・・

・・・

な、何涼しげにお代りと言っているのですか！？いつから、私はお前らの母親的ポジションになったんだよ。てか、先日まであなたの作業だっただろ！普通、この場合は手伝いしましょうか？とか声を掛けるのが当然じゃないか！？

「お父様、私もお代り」

「レイア、私もだ」

ティファニアに続いて、水銀燈とアミバまで私に皿を出してきた・
・
o r z

「お前らの血は何色だ！！」

その日の朝食後。

朝っぱらから疲れたけど、これからお出かけのレイアです。先日、傭兵を雇った際に面白い話を聞く事が出来た。なんでも、シティオブサウスゴータのある場所で捕えられた王族派の貴族や使用人がオークションに出されると聞いた。

全く、人間が人間を売り買いするなど外道もいい処だ。だからこそ！このレイアが王族派から貰ったお金で救出してあげようと言う慈善事業さ。

「綺麗事に聞こえはするが、やっている事は人買いと何も変わらんな」

え！そんな事は・・・（汗）

「な、なんて事を言うんだアミバ！下手な好色家の貴族に買われるより、この私に買われた方が何倍も良いに決まっているじゃないか！私は、一切手は出さないし、生命の保障もする！おまけに、食事にも困らなければ職にも困らせないぞ」

そう、生涯タンクになって貰うのだからね。

「まあ、私が木人形の心配をする事でもないからどうでもいいがな」
「それじゃあ、どっちが一緒に来る？一応、ラミエルだけは残していくけど。この間、雇った傭兵がこのタイミングで来たら色々面倒だし、出来れば一人は残ってほしいな」

本来ならばラミエルだけで十分なのだが、なんせラミエルの攻撃は荷電粒子砲だ。最低出力でも人間を軽く蒸発させる程の威力がある。折角の撒いた餌に掛った魚をみすみす消滅させるのは勿体ない。

「なら、私が残るわお父様。今日は子供達に外の話をしてあげる約束があるから。言っておくけど、子供達がどうしてもって言うから仕方なくだからね・・・ちょっと、聞いているの？」

にやにや

「勿論だとも」

水銀燈は、子供好きだったのか。

「という事で、またよろしくねアミバ。なーに、何体か検体として

使っていていいからさ。一緒に行こう」

「そついう事なら仕方ない」

重い腰をあげてアミバが着いてきてくれることになった。

さて、今すぐ助け？に行くぞ。

とあるオークション会場にて。

辺り一面、全員仮面を付けた貴族だらけだ。最も我々もその一人だけどね。今回は仮面と言う事で私は当然ゼルエルの仮面を被った。そして、アミバはどこから取り出したのか石仮面を被っている。なんでも、知り合いのエルフの家の壁に飾ってあった仮面らしい・・・ハッキリって、とても誰の家に飾ってあったかなんて聞きたくないぜ。

「520」

「540」

私が思いにふけっている最中、会場は思いのほか盛り上がっていた。まあ、魔法が使えて文字の読み書きなどもできる便利な奴隷が手に入るとなれば当然といえば当然か。

「それでは、540エキューで落札です。おめでとうございます」

何処かの貴族がオークションに掛けられていた女性メイジを手に入れた。本当に人間って強欲だよね。

「続きましては、男性メイジで年齢は30歳火ラインメイジです。では、最低金額600エキューからです」

オークシヨンの進行役が商品を読み上げた。

ちなみに、男性の場合はドットが300でラインが600とランクが上がるごとに300づつ最低金額が上がるらしい。女性の場合はドットが500でラインが1000と男性と比べてかなり値段が高い。

まあ、使い道の面を考えればそういう結果になるか。

私にとっては、メイジの性別など関係ない！だから、男性ばかり買
い集めているさ！

言っておくが趣味じゃないぞ！

「600」

・
・
・

本当に男を買う人が全然いないぜ。たまにイケメソが出てきた時は、
貴婦人達がこぞって競り合うがフツメン以下の場合、私以外入札
がないという現実・・・

そのおかげで、周りの人からの視線が無駄に痛い（涙）

「600エキューで落札です。おめでとうございます」

これで15人目だぜ。お金にはまだまだ余裕はあるからいいが、少

々使いすぎた感があるな。

はぁ・・・お金って集めるのは難しいけど使うのって一瞬だな。

「た、頼む！話を聞いてくれ」

なんだなんだ！？

「静かにしやがれ！すみませんね旦那。今黙らせますんで勘弁してくださいなせ」

先程買ったメイジが急に私に駆け寄ってきた。すぐさま近くに居た警備の人に抑えつけられた。うむ！迅速に取り押さえて貰ってありがとう。

「お願いだ。私ならどうなってもいいから、どうか話を聞いてくれ！！」

本来なら、聞く耳を持たないのだが・・・男の鬼気迫る顔を見て気が変わった。

「離していいよ。私は、こいつの話を聞くからもう下がってくれ」

「まあ、旦那がいうなら」

私がそう伝えると警備の者が戻っていった。

「それで、何の用だい？先に言っておくが、あんたは私に買われたのだからその辺りを気をつけて喋ってくれよ」

万が一、上から目線で喋った日には即刻豚のえさにしてくれる。

「ありがとう。実は「用件だけ簡潔に言ってくれ」……。この次とその次にオークションに出されるのは私の娘と妻なのだ。どうか私と一緒に買っては貰えないか」

男は、涙を流しながら頭を床に擦りつけた……。俗に言う土下座だ。なぜだろうか……。『だが断る！』と無性に言いたいのは私だけなのだろうか。

「お前は、私に何が返せる？私に買われた身であるから、働いて返すなど陳腐な答えを出すんじゃないぞ。もし、お前が私の納得のいく答えを返すのならばその願い聞きいてやる」

・
・
・

男は必至で考えているようだ。もし、本当に答えられたならばこの男を褒めてやりたい。私には、回答を見つける事はできなかった。

「出来ないか……。まあ、仕方ない。その二人を買うのに掛った金を二か月以内にお前一人で稼いで私に返すと約束するのならば、お前の願いを聞いてやろう」

「約束する！必ず返します」

ふむ、急に元気になったなこの男は……。まあ、いつか。それにしてもいい事をする気分がいいな。全く。

話が終わると男は、警備に連れ添われて奴隷の控室へと連れて行かれた。

「レイア、いい事を教えてやろうか？」

アミバがニヤニヤした良い笑顔でこっちを見てくる。
実にキモイです。

「それでは次は・・・」

おっと、早速奴の娘のオークションが始まったか。

「すまない、後にしてくれ」

この時、アミバの話聞いていれば良かったと後悔した。

オークション終了後。

あ後の順調にオークションが進み、計30名のメイジが確保できた。その内、男が28名とまさに逆ハーレムみたいな状態だぜ。

ああ・・・ムサイ。

後は、こいつ等を近くに隠している船に連れて行って拘束しておくだけだ。

「アミバ、さっき言いかけてた事だけど何なの？」

「ふむ、実はな・・・あの男が言っていた事は真つ赤な嘘だ」

・
・
・

ほじほじ

どうやら、耳カスが詰まっているようだ。

「もう一回プリーズ」

「ふむ、実はな・・・あの男が言っていた事は真つ赤な嘘だ」

は！

「おい！ついさっきまでここに居た女二人組は何処に行った!？」

私は近くに居たメイジに詰め寄った。

「アンバー一家？そ、そいつらあっちへ逃げて行った」

ブツン

よくも、よくも裏切りやがったな！

「アミバ・・・こいつ等を連れて船に行っていてくれ。後は、先に村へ戻ってくれ」

「くっくっく、分かった。レイアはどうする？」

「少々野暮用を片付けてから村に戻る。そうそう、お前等に忠告だ。万が一、逃げようならば地の果てまで追いかけるからな」

ここまでコケにされたのは、いつ以来だろうか・・・

待つて居やがれ糞野郎ども、正義の鉄槌を下してやる。

「殖装」

すーはーはーはー

「レイア、ここから北東に3キロ弱だ」

「ありがとうアミバ」

ゼルエルを身に纏い、上空から一気に加速した。

ドーン

シティオブサウスゴータから離れた街道にて。

馬車を使って猛スピードで逃走中に荷台の上に居るレイアです。

「はははは、まんまと俺の嘘に掛りやがったぜ。やっぱ、所詮は貴族のお坊ちゃんだな」

「全く、あんたが王族派に着いてたんまり報奨金もうらうとするからこんな事になったんじゃない。だから、私は最初から貴族派に着

くべきだつていったのに」

「ちげーねえな。だが、今からでも遅くねーから、貴族派に混ぜてたんまり稼がせてもらおうや」

「折角、ウェールズ皇太子に嫁いで玉の輿になるとおもつたのに・
」

「私の娘ながらしつかりしている事で・・・もし、実現していたら私達つて今ごろ王族になつてたりして」

「まあ、そういうなつて・・・貴族派の良い処に垂らしこめばいいだけじゃねーか」

「そうよ。貴方なら大丈夫よ。私達の娘なんだから」

どうやら、本当に家族であつたようだな。

ココだけ聞くと良い家族に思えるだろうが・・・こいつ等は、事もあろつに私の好意を裏切るといふ暴挙に出たのだ。まさに万死に値する。

ついでに、話の内容を聞くに・・・どうも、かなりの小悪党のようだな。

「ところがどっこい。生憎とお前達の行先は私が決める事になつて
いるんだよね」

ザシュ

ゼルエルの触手を使って、馬の首をはねた。

ガラガラガラガラドーン

馬車が横転した。

横転した馬車の前でゲス野郎どもが這い出てきた。

あちこちに傷はある物のどうやら、無事のようにだな。伊達に犯罪を繰り返していたわけでもないか。

「誰だてめー。タダじゃすまさねーぞ」

「女の肌をキズ着けるなんて、生きては返さないよ」

「私の顔に傷がー。ー。ー」

全く煩い、一家だ。

「飼い犬に手を噛まれるのってこういう感じなのだろうね。人が折角、善意で助けてあげたと言つのにまさかの展開だよ」

私の発言から推測してか、ゼルエルを纏っている私が誰なのかが分かったようだ。

「へへへ、なーんださっきの貴族のお坊ちゃんじゃないか。改めて礼を言うぜ。あんたのおかげで変な連中を買われずに済んだ上手錠まで外しておいてくれたからな。お陰ですげー逃げやすかつたぜ」

「それで、一体どうやってこの短時間で逃げる事ができたのか是非

教えて貰いたいね」

杖もなしによくぞ馬車を強奪してここまで逃げ切れたものだな。

「なーに、簡単さ。夫婦はな・・・杖を腕に埋め込んでいるんだよ」

「ちょっと、あんた！何勝手にそんな大事な事教えてんのさ」

そついう事か・・・今度からは捕まえたメイジには身体チェックも
しっかりとする事にしよう。

「顔の傷の恨みよ！さつさと死になさい。ファイ」>>喋るなくく
・・・」

奴らの娘がいきなり魔法をぶちかましてきた。

ぶつちやけさ・・・魔法を撃つ前にセリフなんて言ったら不意打ち
の意味なくないかな。

「うーうーうー（ファイアー・ボール）」

まだ喋ろうとするか・・・無駄な処で根性があるのね。

「>>動くなくく。さて、君達は運がいい！たった今、私が考案し
た魔法の実験材料になれるのだから」

君に決めた！

「君は、良い父親なのかもしれない。だが、そんな事は私には関係
ない」

「うーうー（動けねーぞ、どうなってやがる）」

うむ、思った通り良い体をしているな。もちろん、肉体的な意味でだぞー！決してアーベ的な意味じゃないからそこら辺を間違わないでね。

「私に言わせれば人間はちょっと造り替えるだけでただの爆弾になる。人間なんてそんな大したものじゃない・・・君ならいい花火になりそうだ・・・【リトル・クラッカー】」

大好きな錬金を使って、人間を爆弾へと変える魔法だ。

「安心しろ！私は優しいから、遺恨を残さないようにキッチリ一緒に送ってやる」

「うーうーうー（あつあああああ）」

「うーうー（何が花火だ。何も起こってないじゃない）」

「うううー（さつさと、この魔法ときなさい！）」

何か言っているようだか、唸られているだけではサツパリだぜ。

そろそろか・・・

「あの世で人の優しさを裏切るとどうなるか後悔しろ」

ドガーーン

思ったより美しくない・・・某忍者の様に、爆発は芸術だと言える位に精進せねばならんな。

「きたねえ花火だ」

「うー（あんたー）」

「ううう（きゃー）」

泣け叫べ！そして、私の良心を無駄にした事を後悔しろ！

「先ずは一人・・・次は、どちらにしようか。ここはやはり、年功序列を言う事をふまえてお前だ【リトル・クラッカー】」

遺言くらい聞いてあげようかな。

>>動くな<<という命令を残して魔法を解いていあげた。

「きゃー、お願いだから私だけは助けて、なんなら私の娘を上げてもいいわだ・・・あああつあああ.....」

バーーーーン

女の肉片が辺りに飛び散った。

ぴちやぴちや

「ああー、服が汚れてしまった。君は服を汚さないでくれよ」

これは洗っても取れないか・・・後で錬金で汚れの部分だけ落とそう。

「お、お願いだ助けて・・・私達が悪かった。何でも結う事を聞くから。私の体を好きに使ってもいいから、自分で言うのも何だがこれでも結構自信があるんだ」

ちよろちよろ

そんなシヨンベン垂れの体なんぞいらんわ！

「それは、実にいい案だ」

「本当！？なら、「だが断る！」」

嬉しそうな顔から一気に絶望した顔になった。人間って面白いな。

「理由は簡単・・・てめーは俺を怒らせた【リトル・クラッカー】」

「死にたくない死にたくない、お願いします。なんでもしますああ
つあああつああああああ」

ドガーーーーーン

何でいつも、こうなるんだろうな。人の為になる事をするといつも
こうだ。いい加減、このままだと私の真っ直ぐな性格が歪んじゃう
よ……

ウエストウッド村にて。

あー、精神的に疲れた。

「ウエストウッド村よ！私は帰ってきた」

「おかえりなさいお父様」

ただいま水銀燈。

「なんだ、処分したのか」

あれ？もしかして、検体として欲しかった・・・仕方ないな。
今度捕まえた中から好きなのをあげるかな。

「おかえりなさいレイアさん。あの・・・お腹空きました」

・
・
・

作ればいいんでしょ！作れば！！

Side ルイズ

無事に帰れたのはいいけど、なんでアイツまでアルビオンに居るのよ！

イライラ

「どうしたのルイズ？私は貴方が無事に帰ってきてくれただけで本当に嬉しいわ」

「姫様にそう言っていただけだと私も嬉しいです」

姫様にまで心配を掛けてしまうなんて、これもすべてアイツのせいだ。数年前から家にちいねえさまの病気の鎮静薬を高額で売りつけてきていると姉さまから聞いた。そのせいで、私は公爵家でありながらいつもお金に不自由している。

それに加え、今回は王家に高額な代金で硫黄を売りさばき・・・あまつさえ、皇太子様の願いを断った上に民間人を見殺しにまでして貴族の風上にも置けないわ。

「どうしたのルイズ？そんな怖い顔をして」

そ、そうだ！いい事を思いついちゃった。私って天才だわ。

「何でもありません姫様。実は姫様にお伝えしたい事がありまして」

「何かしらルイズ？」

「実は、私達以外にもあの場に居たものがおりました。しかも、その者はウェールズ皇太子の頼みを断り、王族派の人間を見殺しにした上に王家から金品を巻き上げておりました。本来ならば、多くの人たちを助ける事が出来たのにも関わらず本当に残念です」

私は、掻い摘んで事情を説明した。

「・・・その話本当ですか？もし本当ならば直接事情を聴かねばなりませんね。その者の名前は？」

流石は、姫様だ。御話が分かっているらしい。

「レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル。この国で唯一エルフと貿易を行っている領地の嫡男です」

私はね・・・やられた恨みは100倍にして返す主義なのよ！

Side 金糸雀

ネフテスにあるヴェーグル家直営店にて。

今日も契約者テュリユークの親戚であるみっちゃんと一緒に遊んでいる。

「ローゼンメイデナーの頭脳派金糸雀に掛ればこの位楽勝だわ」

ばれないように厨房に侵入し見事に焼きたての卵焼きを手に入れる事が出来たかしら。

「さすが、私のカナだわ」

さっそく、みっちゃんと一緒に食べようかしら。

「とつても美味かしらー」

「美味しい」

本当になんておいしいのかしら。流石はお父様が選んだ料理人だわ。

「それにしても、なんでいつも私が来るタイミングで出来たての卵焼きがあるのかしら？」

「え!？」

・
・
・

なぜだろう? みっちゃんが顔から急に汗が流れてきたかしら

「そ、それはあれよ! 金糸雀の作戦が完璧だからに決まってるじゃない。卵焼きが出来る時間まで見計らうなんて流石は私のカナだわ」
そつに違いないかしら

「もっと褒めてほしいかしら」

後日 (side みっちゃん)。

「いつもすみません。これが今月分です」

「いえいえ、この程度お安いご用です。貴方がたの様な味の分かる人達に食べてただけて光栄です」

ユウザンさんにカナリアの卵焼きの代金を収めた。本当は、お金など要らないと言われているのだけど、これは私なりのけじめだ。

「また、来る時は事前にお知らせしますのでその時は、よろしくお願ひします」

「わかりました」

主人公は、買い物をする。(後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

今後も頑張りますのでよろしくお願い致します。

今回は、傭兵襲撃かマチルダとの会合のどちらかでいこうと思います

今回登場した魔法と新キャラの紹介を下記に記載しました。

新魔法

技名：【リトル・クラッカー】 技名は作者の趣味で名付けました。

元ネタ：鋼の錬金術師

元ネタの使い手：紅蓮の錬金術師（ゾルフ・J・キンブリー）

詳細：人間の体なんて6割が水分。その水分を水素と酸素に分解し、ちよつと火種を与えればあら不思議。或いは人間の鉄分を火薬へを変化させて火種を与えれば即席爆弾の出来上がり。

646

新キャラ紹介

名前：みっちゃん（愛称）

原作：ローゼンメイデンの金糸雀の契約者

陣営：『ネフテス』所属のエルフ

備考：テュリユークの親戚であり、金糸雀の事が大好きな変わり者。

主人公は、エロフ包囲網を完成させた。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いていただいた皆様に本当に感謝感謝です。

今回は、マチルダsideのお話を追加しました。
何故か長くなってしまった；；

真紅sideは、完全に統領の能力ネタです。詳細は内緒ですが知
っている方は分かるかな？程度の情報です。

チートすぎてすみません。

主人公は、エロフ包囲網を完成させた。

傭兵を雇って四日目、到着予定の傭兵団を向かい入れる為にお出迎えに行くレイアです。

「ふんふんー」

一体何人のメイジが来てくれるかな？最低でも5人は欲しいな。もし、今回全員確保できれば捕えた木人形は約30体・・・目標の100体までは大分遠いがアルビオンに来てからの日数から考えれば上出来だ。

「あら、ずいぶんとご機嫌ねお父様」

「分かるかい水銀燈。実はね、つい先ほどラミエルから村に向かう団体様の報告があつてね。今、その人達を迎える為にラミエルと出かけるところさ」

ようやく、ラミエルの出番だぜ。

「あら、ラミエルが行くんじゃ。私は行かないわ。あの子の攻撃って何かと埃が立つから服が汚れちゃうわ」

確かに・・・でも、その言い方はちょっとラミエルが可哀そうだと思うぞ。好きで埃を舞い上げているわけでもないんだがな。

女には、あの埃にまみれた爆風の素晴らしさが分からないのか・・・

「少々派手になるかもしれないから、村の皆を外に出さないように

頼む。アミバにも後で伝えておいてくれ」

水銀燈がやれやれと言ったご様子だ。

「いいわ引き受けてあげる。お父様、言っても無駄かもしれないけどあまり派手にやり過ぎないでね」

「・・・善処する」

善処はしよう・・・だけど、無理だろうな。まあ、大陸が落ちない程度ならいいよね？

「ラミエル、いくよ」

上空で待機させていたラミエルを私の手元に戻した。

うむー！いつ見ても手乗りラミエルは可愛いな。

しゅりしゅり

ウエストウッド村への街道にて。

おうおう、正面からぞろぞろと人相の悪い連中が来るわ来るわ。

「ずいぶん遅いご到着で、もっと早く来るかと思ってましたよ」

何食わぬ顔をして以前にお金を払ったリーダーのメイジが近づいた。

「なんだ、雇い主か脅かすんじゃないよ。仕方ねーだろ、おめーが

亜人が出るとかいうからこっちは、メイジやら傭兵とか集めてきたんじゃないか。それで、一体どこに亜人がいるんだ？」

そ、そういえば雇う時にそんな事も言った気がする・・・やばい完全に忘れていた。でも、一応亜人という名のエルフであるアミバとハーフエルフのティファニアがいるから嘘でもないよね？

「大丈夫大丈夫、この先にしっかりいるから安心して。この目で確認してきた処だよ」

うむ、嘘は言っていないぞ。

「そうかい、じゃあ・・・ここでお別れだな」

リーダーメイジのその声と同時に背後から私めがけて斧が振りおろされた。

よっと

ドーン

やはり、そう来たか。正直、この程度の斬撃など『拳王軍』で一年間鍛えた私にとっては避けることなど朝飯前もいい処だ。

私は、すかさず相手から距離を取った。

「一体、どついう事ですか？まさか、契約を破り雇い主を殺す程に最近の傭兵というのは、落ちぶれたものなのですかね？」

「ケツ！良く言いやがる。どうも最初から話がウマ過ぎると思って

いたんだ。娘一人に攫うのにあり得ないほど高額な金額を提示する。亜人は出てこないし、おまけに亜人が出るから一人では行けないと
いつていたここに堂々と居やがる」

うむ、全くその通りだ。思ったより頭のいいリーダーらしいな。まあ、そうでなければ傭兵団のリーダーなど務まらんか。

「君達は、頭の中まで筋肉で出来ていると思っていたが違ったようだね。素直に謝ろう」

軽く相手のメイジに頭を下げた。

「一体、おめーがどんな考えをしているかは知らないがこの人数相手に一人で勝てるとは思っちゃいねーよな？こつちには、メイジが5人もいるんだぜ。仮にお前さんが高位なメイジであつても勝てる望みは無いぜ」

そうだろうね。普通のメイジならスクエアクラスでもない限りは、この人数相手には生き残れまい。なんせ、弓など遠距離武器を持つたものが多数いるしね。メイジとの闘い方を良く心得ているな。

「命をかける。或いはこの身に届くかもしれん」

一度言ってみたかったぜ。名台詞をありがとうマーボー神父

傭兵達も私を囲むように展開し、背後に控えている連中が弓を構えている。

「けっ！この状況でも強気とは、よほど魔法に自信があるようだな。おめーの様な胡散臭い奴は、殺すに限る。これは、今まで傭兵とし

て培った勘だ・・・あばよ」

リーダーメイジの一言で背後から無数の矢とメイジ達の魔法が私目にかけて飛んできた。

それにしても、胡散臭いとは失礼だな。ちゃんと前金も払ったと言うのにこいつらときたら・・・

ヒュンヒュンヒュン

「ラミエル」

私の懐からラミエルを取り出した。ラミエルは、一瞬で2 m位に大きくなり、全方位へ攻撃すべく時計の羅針盤の様な形状になった。

ヒューーーン

極太のビームが上空から迫る矢と魔法を一瞬にして消滅させた。

「いつみても素晴らしい威力と正確さだ。さすが、私のラミエルだ」
私がラミエルと大絶賛するとラミエルが形状をころころ変えた。どうやら、喜んでいる気持ちが伝わってくる。

傭兵団は何が起こったのか分からず口を開けたまま啞然としている。まあそうだろう、自分たちの攻撃が何か分からないものに一瞬にして消滅させられてしまったのだからね。

「ラミエルは、出力を限界まで下げて後方にいる弓兵を・・・私は、タンクを押さえる」

ラミエルに指示を出すと、ラミエルは更に形状を変化させた。劇場版でリフトオフしてきた初号機をビルごと打ち抜いたものだ。

キューーーーーン

え！確か、出力下げてくださいましたはずなんですが、激しくエネルギーを充電している気がするんですが・・・大丈夫ですよ？

バチバチ

「て、てめー！？一体、今の何だ！それに、おめーの目の前に居やがる変なのはなんだってんだよ」

「何だ今のは？」

「光が俺らの攻撃を！？」

「まさか・・・先住魔法か」

へ、変なのとは失礼な！お前らにはラミエルの形状美がわからないのか！？

よろしい！後でみっちりラミエルの可愛らしさと美しさについて語ろうじゃないか。

バチバチ

「・・・あの、ラミエルさん。貴方のご主人様は、最低出力でお願いしたのですが、随分と溜めが長くないですか？・・・え！？もう止められないから攻撃指示をくれだって！？」

ちよとちよつと、ラミエルの全力攻撃なんてここで撃つたら辺り一面消し飛んじやうぜ。折角、釣れた魚をミスミス逃がすのもアレだからラミエルには悪いけど、上空にでも空撃ちしてもらおうかな。

私が、その考えをしている最中にリーダーの後ろから今までに見た事がないメイジが出てきた。

「さっきの変な光には、驚いたが所詮めくらましかぜ。この人数相手に勝てるはずもないし、さつさと殺して女を捕まえに行こうぜ。この先に、例の女が居るにせよ居ないにせよ村がある事は事実だ。当然、村娘位はいるだろうよ。いい娘がいたらこのマコト男爵が貰ってやるから安心して死んでくれゲへへへ」

・
・
・

な！なんだって！？マコト男爵！？てか、マコトってNice boy
oatなエンディングを迎えた奴じゃねーか。何でここに居るんだよ。

エルフの事以外で驚いたのは久しぶりだぜ。それにしても・・・何故だろう見ているだけで奴を殺したくなる。

「そこのお前？もし、お前に姉妹とかいたらこのマコト男爵が貰ってやってもいいぜ。なんせ、戦争後には侯爵の地位が約束されているからな。もし、姉妹もいないならお前の母親でもいいぜ。女みてーな面をしたお前を産むような売女ならさぞかし美人だろうなケケケケ」

「マコト、その位にしておけ。何にせよ、全てこいつを始末してからだ。俺らを騙そうとしたらどうなるか身をもって後悔させるぞ」

・
・
・

こいつら今なんて言った・・・母上の事を　女だと・・・母上の事も知らずに・・・

ブチブチ

私の事を幾ら酷く言おうと構わない。私はそれだけの事をしてきたと認識している。だが、私の両親を悪く言うのは許せない！例え、世間一般的にマザコ　と言われようと私は母上の事が大好きである。もちろん、父上の事も娘達の事も全員大好きである。

だから、私の大好きな人達に対して暴言を吐く奴は、誰一人許さん！
すーすーはあー

655

「メイジだけでも殺さずに捕えてやろうと思ったが、気が変わった・・・皆殺しだ」

「ははははは！やれるもんならやってみやがれ！全員、相手の精神力が尽きるまで距離を保って闘え」

リーダーメイジの一声で傭兵達が私を包囲するような陣形を取った。ただのメイジ相手ならばそれで十二分だっただろうな。

「ラミエル・・・薙ぎ払え！！」

リーダーとの会話中に密かに私の背後に回り込もうとしていた連中目

がけてラミエルの荷電粒子砲を発射した。

ドドドドドドoooooooooooo

荷電粒子砲の直撃地点から大きな火柱と爆風が生じた。

ゴオオオoooooooooooo

「心地よい熱風だと思わないかい？」

爆風を自前のゴーレムを風よけに使って凌いだリーダーメイジに言った。

「おいおい、何の冗談だ！こんな人間が使う魔法じゃねーぞ・
・全員、近接して闘え！さっきの攻撃を連発されたんじゃ生き残れ
ねーぞ」

良い判断だ。遠距離に逃げればラミエルの的になるだけと判断したか。
リーダーの命令で生き残った傭兵達が一斉に襲ってきた。

「し、死ねoooooooooo化け物が」

「このやるoooooooooo」

「しにさらせ」

くっくっくっくはっはっははははははは

何だその必死そつなツラは？まさか、私を笑い殺そつという気が。
こりゃ、参ったぜ。

「>>>自害しろ<<<」

ザシュザシュザシュ

私の魔法で近づいてきた傭兵達が自分の持っている武器で己の急所を突いて絶命した。さて、雑魚を倒したところでそろそろメインデイツシュのメイジと行こうじゃないか。

「ば、化け物め！人の命を弄びやがって、何様のつもりだ」

人の事を棚に上げていいたい事を言ってくるな。

「おいおい、言いがかりはよしてくれ。君達だって、金次第で人の命を狩る傭兵なんだろう？そんな質問はナンセンスじゃないか。人の命を食い物にする奴らが化け物なら君達だって十分化け物じゃないか。ちなみに僕にとって、知り合い以外の人の命は道端に落ちている石ころ程度の価値しかないよ」

私の言い分になにやら腹を立てているのかリーダーメイジが小刻みに震えている。

「一緒にするんじゃないー」

左手に杖をもって右手に剣を持って、私に襲いかかってきた。

「ラミエル」

パーーン

ラミエルの荷電粒子砲をくらいリーダーメイジの体が消し飛んだ。やはり、出力を押さえても人間相手には使えんか。

「さて・・・先程からそのこの木の後ろに隠れているマコト男爵。まさか、このまま逃げ切れるとでも思っているのかな？」

既に、村の周辺と街道にはゼルエルネットワークを敷かれており何処に隠れようが無駄なのだよ。

「す、すまなかった。さっきの事は謝るだから許してくれ。俺だつて好きでこんな処来たわけじゃないんだ。傭兵仲間がどうしてもと言うから仕方なく来たんだ。分かるだろう？貴族だつて暮らすのにはお金が居るんだ。もう、こんな人の命を弄ぶような事はしないでから見逃してくれ・・・勿論タダでは言わない。この間、オークションでかったイイ女がいるんだ、そいつをお前さんにやるだから頼む」

木の陰から出てきて私の目の前で土下座をしながら訴えてきた。

ふむ、やはり人間の屑だ。秘孔を使って真実を確かめるまでも無く、嘘だと分かる。なぜこつも嘘がべらべらと出てくるのかある意味凄い。

「実に美味しい提案だ。ちようど、女が欲しかったところだ。お前だけは見逃してやつてもいいぞ」

私がそう言った瞬間、マコトの青ざめた顔に色が戻った。

「ほ、本当か！さっすが話の分かるお人だ。このマコト産まれて今まで嘘など言った事がございません。どうかご安心ください。今すぐ連れてまいります」

マコトが猛スピードで逃げ去ろうとした。

「>>待て<<。まあそう慌てるな。女の事もいいが、お前にはまだ用事があるんだよ。確か、私の母上の事を何と言ったかな・・・まさか忘れとは言えないな」

マコトの顔から大量の汗が流れている。

「き、記憶にございません」

何処の政治家だよ！

「そうかそうか・・・記憶にないか。大丈夫だよ、私はしっかり覚えていいるから安心して。君には、それ相応の死を用意してあげるからさ」

「た、頼む。今回の事は悪かっただから・・・」

誰が許すものか。世の中、自分から狙っておいていざ負けそうになった際に相手に許しを請うなどありえないでしょ。

「これから、独り言を言おう。アルビオンでは、他の生物を苗床にして成長すると言う世にも奇妙な昆虫が存在するのを君は知っているかい？まあ、基本的に人間を苗床にする事はないから知らなくても無理は無い。だが、何年かに一度生まれる女王蜂的な存在がいてね、それっだけは別格で人間を苗床にして成長しあまつさえ知識を付けると言われる存在だ」

たまに使い魔としてこの女王蜂的な物が召喚された事例があるそうだが、見た目がキモイあまりすぐさま教師陣によって討伐されるそ

うだ。強さ的には、ドットメイジ並らしい。

「そそそそ、それが今の状況と何の関係が？」

くくくくく、そんな真つ青な顔をして本当に分かってないのかい？あれだな、この時に限って自分の予想が大きく裏切る事を神様に祈っているのかな？

「この間、お前達を雇いにサウスゴータに行った際に立ち寄った魔法屋でたまたま件の昆虫が売っているのを見つけてね。思わず買ってしまったのだよ。寄生虫とは、基本的に無害だ。羽化するまでの間は生かして置いてやる感謝しろ」

「ふ、ふざけゴバア」

少々うるさかったので顔面に右ストレートを喰らわせた。

「他の連中より少ない時間だが長く生きながらえるのだから、感謝されど恨まれる筋合いはないよ」

顔面への一撃が効いたらしく、そのまま気絶させてしまったようだ。さて、こいつだけは船に積み込んで実家にある工房の隔離部屋でじっくりと成長する様を見させていただこうじゃないか。

おっと、話が長引いたせいで他の生き残りどもが四方へと逃げ散っている。ふむ、固まらず四方に逃げるとはなかなかだ。だが、人間の足でこの短時間の間にラミエルの射程から逃げる事は叶わないぞ。

「ラミエル、ゴミの掃討は任せた。一人残らず撃ち殺せ」

ラミエルが上空に上がり四方へ荷電粒子砲を乱射した。

ドーンドーン

ドガーーン

なんか、環境破壊している気もするが・・・まあいいか、どうせ他人の土地だ。問題があればティファニアに頼んで無かった事にしてもらおう。

Side マチルダ（レイアが傭兵を討伐した翌日）

ここ数日、サウスゴータ周辺の傭兵達の動きがおかしいと報告が入った。そのせいで、何故か私が調査に行くように抜擢されてしまった。一応これでも幹部対応のはずなのだが、雑務を良く押し付けられて困る。

しかし、今回に限っては嬉しい事であった。この機に乗じて久しぶりにテファ達の様子を見に行けるし、レコン・キスタ で稼いだお金を届ける事もできて、一石二鳥だ。

「それにしても、サウスゴータも私が知っているときに比べて随分と治安が悪化したな。人身売買までやっているとは驚きだ」

私の父が健在であったならば、このような商売などあり得なかったで

あろう。これもすべてアルビオン王家のせいである。

まあ、とりあえずは酒場にでもいって傭兵達の動向でも調査するでしょう。その後でテファ達へお土産でも買って村に行けばいいか。後、忘れては行けないのが水の秘薬から作った胃薬だ。

ああ・・・少しは料理が上達している事を切に願う。

夕方の酒場にて。

「遠く煌め　　星に幾度もあたしは願
彷徨える鼓　　g r a v i t a t i o　　惹かれあう s t o r

始まりはいつから　終わりは何人知らず
まやかしても幻でもなく　逆らえぬ流れ」

酒場に入ると、今までに聞いたことない不思議な歌が聞こえている。しかも、歌っているのがテファと同年代位の少年であった。おまけに、服装からして恐らく何処かの貴族だろう・・・何故こんな酒場で歌を歌っているのだろうか？世の中には、色々な変人が居るから特に気にする必要もないか・・・でも、何処かで見た事があるような気がするのだが、別にいいか。

それにしても通常ならば、昼間であろうと柄の悪い連中が酒を飲んでいるはずなのだが今日は珍しくそういった類の客がいない。

一体どういう事だ？

「すまないマスター。いつも酒場を溜まり場に行っている傭兵達はど

「ここに？儲け話があると聞いてきたんだが」

私が質問すると酒場のマスターが答えてくれた。

「ああ、あんたもあの話を受けにきたのかい？でも、一足遅くて正解だよ。俺も噂で聞いた程度だが、その話に乗って出発した傭兵達が誰ひとりも帰ってきてないのさ。お陰でお店は閑古鳥が鳴いてい
るよ」

誰も帰ってきていない？それは、場所が遠いせいでまだ誰も帰ってきていないだけなのか？それとも、本当に全員帰らぬ人になったと言ふ事なのか？

「その儲け話について、もう少し詳しく教えてもらえないかしら？当然、タダとは言わないわ」

懐からエキユー金貨を数枚出してマスターに渡した。

「へへへ、話の分かる貴族様は好きだぜ。確か、ウエストウッド村にいる女を攫うとか何とか言ってたぜ。それも大層な美女らしく報酬は確か・・・前金込みで七千エキユーだとか言ってたぜ」

ウエストウッド村だって！？ふざけるんじゃないわよ。それって、聞くからにはほぼ100%の確率でテファの事じゃない。一体、何処でテファの情報が漏れたっていうんだ。

くっそ！分からない事だらけだ。

「一体、どこの誰だい？そんな依頼をした奴は？話を聞く限り、前の傭兵達が依頼に失敗したって事は私にもまだチャンスはあるんだ

るう？」

傭兵達には悪いが、あんた等が死んでくれてホツとしたよ。早いとこ、依頼主をやらを見つけてどこでテファの情報を知ったのかと聞き出してから、あの世に送ってやるよ。

「確かにそうだな。さっきの話の依頼主だが、今まさにその舞台で歌を歌っている貴族様だよ。正直俺にも良くわからん奴でな。毎夜毎夜、あそこで歌っているんだよ。あれが女なら様になるんだがな……」

まあ、確かにな……

私は、マスターにお礼をいって舞台へを近づいた。さて、少年には悪いが少々痛い目に会って貰うよ。主にあんたの背後関係とかを特に詳しく聞かせて貰おうじゃないか？

「歌っている処悪いね。ちよいと、儲け話の件を聞いてきたんだが話を聞かせてもらえるかい？自分で言うのもなんだが、結構な腕前だと自負している。雇ってもらえれば損はさせないよ」

少年は私を見て呟いた。

「ああ、知っている。待っていたよ『土くれ』のフーケ……いや、トリステイン魔法学院の学院長オスマンの秘書ロングビルかな？それとも、マチルダ・オブ・サウスゴータとお呼びした方がいいでしょうか？こっちは、あんたと闘う気は無い。まずは、話し合おうじゃないか」

一体、このガキは何者だ？なぜ、こつも私の正体が漏れている。そ

れに加えて、依頼内容から察するにテファの正体まで知っている可能性もある。人目に付くがこの場で殺してしまった方が安全か？

「この私の事を知っていて待っていたって？一体、何の用事だい？生憎、私はあんたの様な糞ガキとは初対面のはずだがね」

懐の杖を手に掛けて相手が下手な行動をした際には、すぐに対応できるようにしておいた。

「確かに、面と向かって会うのは初めてですかね。申し遅れました私は、レイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグル。これでも、トリスティン魔法学院の生徒ですよ」

魔法学院の生徒！？という事は、あのルイズとかいう糞ガキの仲間じゃねーか。私を一時とはいえ牢屋に送ったあの恨み忘れないぞ。

「このフーケ相手に随分と余裕じゃねーか。その度胸に免じて話だけは聞いてやる」

「話を聞いてくれてありがとう。私は、貴方をお願いがあつて待っていたんです」

ほほう、私にお願いと来たか。面白い切り出し方だな。

「お願いと言う事は、別に断ってもいいってことだよな？聞いてやるから話してみな」

「ティファニアをこのアルビオンから連れ出したい。だから、その為に貴方からティファニアへ一言、外の世界に出るようにと口添えをして欲しい」

何言ってるんだこのガキは!?

「テ、テファをここから連れ出すだって!? 馬鹿言うんじゃないよ。今だって何とか隠れながら生活するのがやっとだと云うのに一体どこに連れ出すっていうんだよ」

私が今までどれだけ苦労して今の生活を確立させたと思って居やがる。それをこんなガキに何が出来るっていうんだよ。

「ハッキリ言おう。君のやり方では、いずれティファニアを守りきれなくなる。現に君の出生について、既にレコン・キスタ内部でバレバレじゃないか。そうなれば、ティファニアの存在がばれるのも時間の問題だ」

なんだこのガキ!? なぜ、レコン・キスタ内部の情報まで知ってる。おまけに、まだ組織にもバレていないティファの情報まで持っているとなればますます生かしておけないね。

「なら、あなたのやり方ならテファを守りきれるとでも言うのかい? あなたの様なガキに何が出来るっていうんだよ。どうせテファの容姿に惚れた口だろうが、ガキの浅知恵でテファを危険にさらすのはまっぴらごめんだ」

こんなガキに付いて行かせるくらいなら、私が村に永住した方が遙かに安全だ。男なんて信用できるか。

「出来れば、私のファミリーネームを聞いて理解して欲しかったんだけど・・・やっぱり、それほど有名でもなかったか」

ファミリーネーム？それがどうした。これでも、盗賊をやっていた居たんだ。一般的な貴族より各国の家には詳しいつもりだが、ヴェーグル家なんて大貴族なんて聞いた事ない。

・
・
・

いや、待てよ。確か、数年前から下級貴族ながら異常に金回りいい領地の名前が確かヴェーグル領だった気がする。以前に読んだ本（メイジの行つてはいけない旅行先）では、ダントツTOPに輝いていたのを見て記憶の奥底にしまっていた。

確か、理由は・・・エルフと唯一貿易を行っている悪魔の領地。噂で聞いたが、あの領地に盗みや犯罪に入った連中は軒並み生きて帰つてこなかったとか。

「あんたが、黒い噂の絶えないヴェーグル家の嫡男かい？」

私がそういうと苦笑いしながら答えてきた。

「黒い噂とは酷い。まるで私が悪人みたいに聞こえるじゃないか。これでも貿易の許可も貰っているし、税だつて十二分に収めている。犯罪の取り締まりもしっかりと行うし、領民にも十二分の給与を与えている。これが黒いと言うならば一体白いとは何の事を示すのか是非ご教授願いたいね」

まあ、言われてみればそうだな。こいつが言っている事が本当ならば貴族にしてはかなり真つ当な領地運営を行っているんだろう。

「悪い、話が逸れたね。それで、あんたが身元は分かった。だがそれを証明する物もないし、あんた自身がテファを守りきれるという保証は無いと思うが」

「疑り深いね。まあ、娘のように可愛がっているテファを預けるかもしれない相手だ。その位、疑って貰えた方がこちらとしても嬉しい。では、一体どうしたら貴方の信用が得られるのかい？」

思った以上にマトモな貴族だったから少し気が緩んだが、まだこのガキを信用したわけじゃない。

「テファを何処に連れて行く気かい？後、村にはテファの他にも孤児の子供達いる。その子達は どうする？後、もしテファが行かないといたら強引に連れ出すのかい？」

この間からあんたの目的を全部聞いてやるよ。

「私は、ティファニアをヴェーグル領に連れて行こうと思っている。我が領地では、エルフが無償で領民を治癒している事もありエルフへの差別などは皆無だと思って貰ってよい。むしろ、領主の息子であるこの私よりエルフの方が人気だったりするorz」

なんか、最後の辺りで急に力が無くなったな。

「後、村に居る子供達も当然領地に連れて行こう。うちの領地では義務教育を設けており、領民全員に対して教育を受ける義務を設けている。子供達には、そこに通って貰う。読み書きが出来ないと人生色々と不便だろう？当然、教育費用は無料ではないので領地の方で一時立て替えておく。将来、金銭を稼げるようになってから返してくれればいい」

領民全員に教育の義務って一体、どんな頭をしているんだ。領民が賢くなったら、気づかなくていい事まで気づくようになって色々と領地運営がやりにくくなるんじゃないか？

「最後に、ティファニアが行きたくないと言った場合は無理強いはしない。一応、エルフと同盟を結んでいる我が領地としては、ここにエルフが居る事は既に報告はさせて貰っている。もし、私に付いてこなければエルフ側が何らかの対応を取るだろう。その際にどうなるかは私の知る由では無い」

テファの事を考えればこいつに付いていかせた方が幸せなのか？だが、こいつは一体テファの事をどう思っている。

「言いたい事は、分かった。確かに、あんたに連れて行ってもらった方が将来的な事も考えれば良いのだろう・・・だから、これだけは聞いておきたい。あんたはテファの事をどう思っている？」

私の質問に対して苦悩しているようだ・・・何を苦悩しているのか理解に悩む。正直、テファは女の私でも羨むほどの美貌と女神の様な温厚な性格である。多少、ボケた処もあるがそれはそれで愛嬌があつてむしろポイントが加算されるところであろう。

「た、多分・・・友達といったところかな。女性としては素晴らしいと思うよ。でも、知り会って僅か数日の相手を好きといえる程、私は女性慣れしてなくてね」

・・・知り会って僅か数日？いや、待てよそういえばこいつ今まで何処で暮らしていたんだ。テファについても随分と容姿や性格について理解しているようだし・・・あぁー、もう訳が分からない

い。

「とりあえず、あんたを信じてやるよ。テファには私から口添えしてやる。テファに何かあったらあんたを殺しに行くからね」

「ありがとう、妹思いの姉って素晴らしいね。では、早速ウエストウッド村に行くでしょう」

「おいおい、今からかい？こんな時間に戻ったら、テファの晩飯と称したアレが出てくるじゃないか。」

「それじゃ、アミバもいこうか。悪いね、折角待機して貰っていたのに出番が無くてさ。帰り際にこの町で一番高いお酒でも買って帰ろう」

「ああ、そうだな。レイアのせいで私の出番が減ってしまったではないか。この責任は、この間捕まえた木人形^{デラ}2体で払ってもらおう」

ドーーーーーン

アミバ？誰だそいつと言おうとした瞬間に私の横に急に人の気配が現れた。あり得ない・・・土のメイジの私にも気取られないように横に現れるなど信じられない。

そう思い、アミバと呼ばれる男を見てみると・・・テファと同じエルフだった。なぜ、今まで隠れていたのだ・・・もし、私が断ればどうなっていたんだ。そう思うと今更ながら不安を隠せない。本当にこれで良かったのか。

「うっ。足元をみるなー！。一体にまかりませんか？この間、5体

程捕まえるはずだったんだけどちょっと頭に来ちゃってさ4体ほど消しちゃったんだよ」

それにこいつら何の会話をしているんだ。まるで友達同士みたいに笑いながら話してはいるが、どうも話の内容が胡散臭い気がする。

ウエストウッド村にて。

なんか分からないうちに、変な連中と一緒に村まで来ちゃったよ。テファとは二人とも面識があるようだから大丈夫だろうけど、本当に大丈夫か？

村について早々、今までに見たことないようなゴスロリ衣装を着た人形みたいな女の子が居た。いつの間にか孤児が増えたのだろうか。・・それにしても上等な服を着ているな。

「あら、お帰りなさいお父様。随分と早かったわね。そちらが以前に言っていた方かしら？初めまして、私は水銀燈。お父様がお世話になったわ」

お、お父様だつて！？このアミバとかいうエルフ結婚してたんか！？まあ、エルフも結婚するだろうけどこの娘はどう見ても人間に見える。もしかして、テファと同じハーフェルフで耳の処は人間寄りという奴なのか？

「ああ・・・こちらこそ。私はマチルダ。よろしく」

本当に人形みたいな子だな。

「おかえりなさい。マチルダ姉さん」

「ただいま、テファ」

元気そうで何よりだよ。久しぶりに帰ってきたけどやっぱりこの村だけは変わらないね。

「おかえりなさい、レイアさん。今日の晩御飯はなんですか？」

・
・
・

「今日はね、サウスゴータでいいワインとお肉が手に入ったから皆でステーキにしよう。もちろん、マチルダさんのお帰り記念も兼ねよう」

おい！ちょっと待った。

何、平然と私とこいつらが一緒に帰ってきた事に疑問を持たないまま話を進めてるんだいテファ！幾ら天然が入っているからって流石に気づこうよ。後、おめーがなんで主夫みたいな事してるんだよ。ここにきて数日って言ってなかったか！？

「わーい、レイアお兄ちゃんが帰ってきた」

「今日はご馳走だぞー」

「いい子たちだ。早速、この荷物を台所まで運んでね。後、マチルダ姉さんにもちゃんと挨拶するんだぞ」

なぜだろう・・・全てこいつの計算通りに事が進んだって事なのか。釈然としない。もとより外堀が埋まった状態で私に交渉に来たと言うのか。

「いい事を教えてやろう。台所を制するものは、その家を制す」

私にだけ聞こえるように小声で言ってきた。あんまり、いい気になるんじゃないよ。私だって女だ。男が作る料理なんか目じゃないってことを教えてやろう。

食卓にて。

「レイアお兄ちゃん」

「私もお代り」

負けたよ。完敗だよ。同じ食材を使っているにもかかわらず差をつけられるとは思いつかなかった。なんだい、男のくせに料理までウマイとは言っちゃなんだが既にキモイよ。

しかし、食事の時間に子供達がこんなに明るいななんて嬉しいね。今までは、お通夜見たいな感じな食事だったからね。これに関しては、気にいらないがこいつに感謝しなきゃね。

「お父様、私もお代り」

「はいはい」

・
・
・

あれ？うーん、今この子お父様とか言っであいつにお代りしな
かった？

ジロジロ

あいつと水銀燈と名乗る子を見比べてみた・・・どうみても兄妹が
限界だよ。あれで親子とか言ったら一体あいつどんだけ若い時か
らやんちゃしてるんだよ。だけど、念の為確認しておくか。

「なあ、テファ。あの水銀燈って子の父親ってあそこに居るアミバ
って奴の事だよな？」

私の質問にテファが何言っただコイツみたいな顔をしている。

「違いますよ。水銀燈ちゃんは、レイアさんのお子さんですよ。水
銀燈ちゃん含めて六人の娘がいるみたいですよ」

一人でも驚きなのに六人って・・・あいつの年齢で居る子供の数じ
やねーぞ。って事は、こいつは一体幾つの頃から女の敵をやった
んだ。テファを預けて大丈夫なのか！？

次会った時にはマティルダ叔母さんとか呼ばれる事になるなんてま
つぴら御免だぞ。

side 真紅

「ねえ、ビダーシャル。老評議員であれ程の実力って事は・・・ネ

フテスの統領って一体どのくらい強いのか？」

この間見せて貰ったビダーシャルの力ですら一国を簡単に滅ぼせるほどの力だ。それらを纏めあげるだけの人物の能力などハッキリ言っただけの想像の範疇を超えている。

「うむ・・・実を言うと私も統領の実力は知らないのだ。私は今まで統領が全力で戦っているのを見た事が無い。だけど、私の祖父から噂程度なら聞いた事がある・・・なんでも統領は英雄の力だとか何とか言っていたような気がする」

「AUね・・・それならdoccomもあるのかしらね」

主人公は、エロフ包囲網を完成させた。(後書き)

歌の詳細

原作アニメ：ヒロイック・エイジ

曲名：gravitation

上記の曲が、テュリユークの能力に関わるものです@@

最後まで読んでくれてありがとうございます。

今後もよろしくお願い致します。

今回は、王家からの呼び出し対応でもしよつかと思います。

主人公は、遂に嫁・・・？を手に入れた（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いたくださった皆様に深く感謝しております。

ありがとうございます。

誤字が多いのは作者の仕様なのですが・・・そろそろ、wordを購入しスペルチェックを行い改善を図ろうかなと思います。

主人公は、遂に嫁・・・？を手に入れた

朝食後に、ティファニアに大事な話があると村の広場に呼び出したレイアです。

そして、何故か村中の子供とアミバと水銀燈も来ていた。何故だろう？ティファニアを移住させる為の説得なのだからマチルダだけ居れば十分なのに少々おおげさじゃないか？

まあ、時間も勿体ないしこの際どうでもいいか。万が一のことを考えて、私を支援してくれる人が多い方が何かと便利だろう。

そう思い私は、ティファニアと向き合った。

「ティファニア、私は君（の持っている能力）が欲しい。だから、（その能力が他の誰かの利用されないか監視する為に）一緒に暮らそう」

私の一言を聞いて、ティファニアが真っ赤になりつつ答えてくれた。

「で、でも私なんて料理下手だし・・・それに鈍くさいし・・・レイアさんと違って何一つ取り得なんてないんです。それに、ここに居る子供達を置いてなんていけません」

ふ、何かを思えばそんな事か。

というか・・・料理が下手って認識してたんかい。

「料理ができない？そんなの、私が君の（作った料理を食べたくな

いし、生命の安全の）為に毎日味噌汁を作ろう。勿論、移住の際には子供達も一緒に連れて行こう。安心してほしい、我が領地では、子供達が集まって学問を学ぶ施設を用意している。だから、新しい友達も増えて子供達の為になるだろう。それに君は、自分の事を過小評価し過ぎている。私は、君ほど素晴らしい（能力を持った）女性を見た事が無い」

私のオブラートに包んだ言葉を聞いて、ティファニアが更にゆでダコのような顔になってアワアワしている。

「もし、外の世界が不安でも大丈夫だ。君の盾となり守ろう。だから、ティファニアは私を（全面的にそのチート能力を使い私の盾と剣となつて）支えて欲しい」

私は君の盾にしかねないけど、君は私の剣と盾にもなれるよね？主に能力的に考えて。

「でもでも、私なんて可愛くもないし。レイアさんみたいなカッコイイ人とは不釣り合いですよ」

何を言うかと思えば・・・君の容姿が素晴らし過ぎるから、世界でも確実に上位食い込むだろう。

問題があるとすれば、料理とその鈍くさいというか・・・食事への執念位だ。

というか、マチルダ！打ち合わせ通り、早く私を支援しろ。

はやくしろー！！！？間に合わなくなつても知らんぞー！！

何そこで呆けているんだ。ここで畳み掛けないでどうする！？そこ

まで空気の読めない人物でもないだろう。

「ティファニア・・・そなたは美しい。だから、もう一度だけ言うぞ。私は君（の持っている能力）が欲しい。だから、（その能力が他の誰かの利用されないか監視する為に）一緒に暮らそう」

シーーン。

くっそ、まだか！まだ支援砲撃はこないのか！？

「どんな苦難が（私に降りそそいで）こようと二人（も要らないかもしれないけど君の能力）なら乗り切る事が出来る。お互い未熟な部分もあるだろうが、そんな問題ない。二人合わせて一人前でいいじゃないか」

くっ駄目だったか。おい！そこの外野の連中（マチルダ、アミバ、水銀燈、村の子供達）、今なら間に合う早く私の援護を！！

「はい！不束者ですが、よろしく願います。これからは、レイアさんの負担を減らすように毎日料理のお勉強とお手伝いをしますね」

ティファニアの瞳に涙がこぼれた。

「それと、これを受け取ってほしい。君の為に用意した」

パカ

私は、懐からこの日の為に用意した指輪を取り出した。この指輪の素材は、リングの部分をラミエルのクリスタルで作り、宝石の代わ

りに私の血液を凝固させた疑似S2機関付けた逸品だ、見た目は、ただの美しい指輪である。

そこ！血なまぐさいとか胡散臭い逸品とか言わない。

その実態は、私が領地の執事達に付けさせている指輪の発展型である。この指輪を付けた者の魔法と精神力を我が物に出来るマジックアイテムだ。対象をタンク代わりに出来る効果範囲は、約300mとまだまだ狭いがゼルエルネットワークを介さず無線でこの機能を実現のだ。自分で言うのもなんだが、素晴らしいと言ってもいいだろう。

当然、ティファニアに付けて貰うと言う事で、エルフであるアミバには許可を取った。人体実験済みという事もあり話はスムーズに進んだよ。当然、正式に『ネフテス』にこの一件について報告する予定だ。

ほうれんそう（報告・連絡・相談）は、大事だよね。

ティファニアの『虚無』と精神力を手に入れる事で、私は更なる一歩を踏み出す事が出来るだろう。

「あ、ありがとうございます・・・ぐずん。一生大事にします。私からは何も・・・そうだ！これは、母の形見なのですが受け取っては貰えませんか？」

ティファニアは、私から指輪を受け取ると既に手に付けていた指輪を私に差し出してきた。

キタコレ！まさに、タナボタじゃねーか。

「ありがとう。これを君だと思って一生大事にするよ」

ふふふふ

死者蘇生すら可能の指輪をGETだぜ！忘れていたけど、この指輪欲しかったんだよ。ほら、私って一応不死とかじゃないから死ぬ事だってあり得るじゃん。だから、保険としてこいつが欲しかった。

たしか、既に魔力が枯渇気味で使用できる回数に制限があつた気がするが、その程度なんともなる。

パチパチパチパチ
パチパチパチパチ

「ティファ姉ちゃん、おめでとう」

「おめでとう」

「ティファ姉ちゃんを不幸したら許さないから」

私が一人、腹黒い考えをしていると周りから盛大な拍手が送られてきた。

・
・
・

あれ？なんか違くない？でも、今更誤解を解く事は叶わなそうだから
rz

なんか、ここで下手うつたら『大嘘憑き（オールフィクション）』で恐ろしい目にあいそうでは仕方ない。

それにしても、別に料理の勉強とか手伝いとかいいからさ。本当にピンチの時の為には私の後ろで控えていてよ。

その日の午後。

船で待機させていた船長から一通の手紙が私に下に届けられた。

宛名を確認すると、父上からであった。

「……………このタイミングでの王家から私への出頭要請か……………くさいな」

一体、なんで私を指名してくるんだ。もしかして、色々とばれたか……………？

うーん、心当たりがあり過ぎて分からんぞ。というか、どれもこれも私は全然悪くないし、最悪の場合は誰かを身代わりに立てて逃れよう。

「どうしたんですか？レイアさん。そんな難しいお顔をして」

私がイラ立っているのを感じたのか不安げに訊ねてきた。

「なーに、ちょっと両親から手紙が来てね。至急領地に戻ってこいとお達しだったよ。だから、この機会に皆でうちの領地に移住しよう。今後の事もあるしさ」

「そんな、今後も事なんて。ご両親に紹介だなんて・・・イヤン、分かりました直ぐに出発の準備をしますね」

アホな子だな・・・色々大丈夫か？

そういつて、すぐさま子供達を集めて荷造りを始め出した。さて、こっちも準備を開始しましょうか。

「水銀燈、アミバ。悪いけど一仕事して貰おうかもしれない。推測だが、ヴァリエールの三女が我々の事をトリステイン王家に報告したと思う。それも大分脚色されての報告みたいで、王家側は事実確認の為に私個人への出頭要請が来ているそうだ」

私の報告にアミバも水銀燈も呆れているようだ。いや、分かるよ。私だって呆れてものも言えないよ。

「ああー、あの一家か。以前にビダーシャルと会った際に話を少し聞いた事があるが、また絡んでくるとはアホなのか・・・」

本当に、私もそう思うよアミバ。まさかとは思うが、あの三女はヴエーグル家と関わるなどは言われないのか。もしそうだとするならば、今度じっくり公爵と話しに行かねばならぬ。

「お父様に喧嘩を売ろうなんて本当にお馬鹿さんな子ね。こっちは、お父様だけでなくエルフもいるのに一体どんな勝算があって、喧嘩を売ってくるのかしらね。おまけに、水の精霊でもあるこの私を敵に回そうなどトリステインも落ちぶれたものね」

水の精霊・・・誰それ？ラグドリアン湖に住んでいたのは醤油の精霊だし・・・そんな精霊居たかな？

・
・
・

はっ！

「・・・そ、そうだね。トリステイン王家も腐ったものだね。自分の国の象徴でもある精霊にまで手を出そうなんて本当に困った連中だよ。全く、けしからん」

やべー、今の今まで水銀燈の中に精霊が居るなんて事忘れていたよ。ごめん、醤油の精霊様（笑）

「なんか、今不快な感情を感じただけとお父様。まさかと思いましたが、娘の事をお忘れで？」

「H A H A H A、滅相ありません。忘れてなんておりませんよ。醤油・・・水の精霊様」

シーーン。

「いや、ほら...ごめんなさい。そんな豚を見るような眼で見ないで、お父様のライフポイントはもう0よ」

ヴェーグル家所有の船にて。

マチルダと別れを告げて、出航した。別れ際にマチルダには、フー

ケという立場もあるので可能な限り領地に近づくな！もし、来る場合は誰にも見つからない様に細心の注意を払えと言っておいた。

「それでレイアよ。先に領地に帰るのか？それとも、直接王都へ向かうのか？」

「うーん、どうしようかアミバ。たしかに、この位置なら直接王都に行く方が早いだろう。しかし、ティファニアはともかく、村の子供達を連れて行く事が不安だな。万が一の事があればティファニアが暴走しそうだし・・・そうなれば、正直私の手に余るぞ。」

やはり、こういう場合は安全を考えて一度領地へと戻るべきだろう。

「じゃあ、安全面も考慮して領「お、王都に行ってみたいです」・・・へ？」

「いやいや、危ないでしょ。小さい子供もいるんだしさ。それに自分がエルフだって事忘れてりませんか？そんな姿で町を下すりゃ討伐隊が来ますよ。そうしたら、討伐隊の命が危ないじゃないか。」

まあ、人間なんて何人死のうが構わないが、目立つ処でやられると隠蔽しきれない。

「あ、あの私・・・レイアさんと一緒に王都で一緒にご飯とか食べたいなとか」

「ただご飯が好きやねん！(。(ゴルア！！」

まず、食事の事よりも子供を心配しよう。王都って綺麗なイメージがあるだろうけど、実際は、裏道にヘドロやゲロ・・・下手したら

死体がある程の汚い町なんだぞ。そんな町にこんな世界を知らない子供を連れて行ったら三分も生きられんぞ。

「でも……ほら！子供達だって早く領地に行きたいと思っているだろっし……今回は」「僕達の事なら全然気にしないで！船の中で大人しくしておくから」「……」

少年達よ……君等を守る為に言っているのにそれが理解できぬのか！？

こんな時だけ無駄に団結しないでいいから、大人しく領地に行こうぜ。

「そうですレイア様。こんな可愛いお嬢さんのお誘いを断る必要なんてないです。我々がレイア様に代わり子供達を命に代えてもお守り致します。だから、ご安心ください」

私達の様子を見に来た船長がいきなりな子守りを引き受けると名乗りを上げた。ちよつとちよつと、船長……！

「レイア様、子供達の事は我々にお任せください」

「貴族たるもの女性の誘いを断るべからずといつも大旦那様が仰っておりますよ」

大旦那様……父上の事か！というか、領地の皆にどんな指導しているんだよ。

駄目だ、この船には誰も私の味方がいない。

ぶつちやけ、ティファニアと食事することなど正直、どうでもいいんだ。私はただ、アホリエッタに会いたく無いだけなんだよ！元日本人として、嫌な事は先送りしたいというこの心が分からないのか。

「だ、駄目でしょうかレイアさん。ふ、二人でお食事を・・・」

そんな捨てられた子犬のような目で見ないでくれティファニア、まるで私が虐めているみたいじゃないか。

「分かった。王都に着いたら一番高い料理屋に行こう・・・二人つきりで」

私が食事に行くのを了承すると急に笑顔になった。

「二人つきり・・・はい！楽しみにしてます」

王都に着く間に数日、レイアはティファニアの世話に掛りつきりであつた。

手のかかる大人って面倒だぜ。

side 雛苺

「いつも、うにゅーをありがとうなの。ルート大好きなの」

雛は、今日も良い子に皆の面倒をみるの！。雛が一番年長さんだから、がんばるの。だから、このうにゅーは、ご褒美なの。

「じゃあ、雛ちゃん。今日もノルンの面倒お願いね」

「わかつたなの」

雛の領地でのお仕事は、託児所で皆の面倒を見る事なの。難しい事

は、分からないから領地のお仕事は出来ないけど、みんなとお絵かきとかお散歩とかをするの事はできるの。

「それにしても、レイア様は・・・本当に結婚する気あるのかしらね。結婚もしていないのに既にお子さんが何人も居るとは。早く、良い人が見つかるといいわね雛ちゃん」

「お父様は、ちょっと変わっているかもしれないけど。いつつも皆の為を思って行動しているの。だから、そういう事言わないでほしいの」

「そうだったわね雛ちゃん。ごめんなさい。良い子はナデナデしてあげましょう」

「雛は、子供じゃないもん」

雛を子供扱いするロートは嫌い。それでもここでは一番年長さんなんだから。

雛の頭をなでるとロートは仕事へ戻っていった。

「雛がすっかり面倒みて子供じゃないって見せつけるの」

side レイリー（主人公の父上）

お昼時がきて、ちょうど腹が減ってきた。

まったく、レイアのおかげで領地が豊かになったのはいいが、そのおかげで事務仕事が増えた。お陰で、嬉しい事に仕事に追われる毎日だ。以前にレイアが言っていたパソコンという『場違いな工芸品』の使い方を覚えれば、仕事が何倍にも早くなると言っていたが・・・正直理解出来る代物ではなかった。一体、レイアの奴はどこで使い方を知ったのやら。

「おじい様、そろそろご飯なの。食堂に集合なの」

ガーン

雛苺の思わぬ一言で思わず机に頭をぶつけてしまった。

地味に痛い；；

お、おじい様って・・・レイアの娘？だから、ある意味おじい様で正しいと思うが、何故か釈然としない。それに、私はまだおじい様と呼ばれる年ではないぞ！まだまだ、現役でいける。昨晩だってアリアと・・・ゲフンゲフン。

「雛よ。おじい様では無くてせめてお父様と呼んでくれんか」

「いやなの。雛のお父様は、お父様だけなの」

アリアは、お姉様と呼ばれているのになんて家庭内格差だ。確かにアリアに　様なんて呼んだ日には地獄を見るだろう。私は、すくなくとも言う勇氣など無い！

まあ、おじい様でも悪くもないか・・・

「ああ、すぐに行くよ。先に行つててくれ雛」

元気良い返事をして走り去つていった。本当に良い子だ。孫娘達がいつまでも無邪気に暮らせる様、もう少し頑張るかな。

「レイアよ・・・お前もいい歳なのだから、恋人位見つけてこい。そして、早く孫の顔を見せてくれ」

最も、レイアの奇行についていける逸材が世の中にどれ程いるか・・・
・あの子の父としてそれだけが不安だ。

主人公は、遂に嫁・・・？を手に入れた（後書き）

新キャラ：ノルン（人間）

備考：主人公の専属メイドであったロートの長女

次回は、アホリエッタとの面会かビシャエモン（笑）に会いに行こうと思います。

主人公は、正義の味方？（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いていただいた方々に深く感謝を申しあげます。
いつも、ありがとうございます！！

今回は・・・かなり平和のお話です。

アホリエッタ編は次回位に先送りにしました。

別件ですが、読者の方々も地震に気をつけてください。

主人公は、正義の味方？

トリスティンの王都にティファニアとやってきたレイアです。

流石にティファニアをあの状態（耳が尖った）で連れ出すのは気が引けた為、私が魔法屋までフェイス・チェンジの掛ったマジックアイテムを全力で買いに行った。スクウェアアスペルを封じたマジックアイテムだけあって、とても高価であった。

後、女物の服も当然買いましたよ。あんな露出度の高い服で町中を歩けるわけ無いもんね。ちなみに、服については全部店員にお任せした。流石、貴族御用達の洋服屋だけあってべらぼうに高かった。この服一着で平民の年収位あったわ。

お金って貯めるのは大変だけど、使うのって早いよね。

そして、手を繋いでティファニアと町中を歩いているレイアです。

・
・
・

いや・・・ほら。はぐれると大変じゃん。攫われでも・・・いや、ちがつか。拾い食いとかしたら大変じゃん。食欲だけは、人一倍の強い子だしさ。だから、俺は母親的ポジションで仕方なく腕を組んでいるんですよ。

今更ながら・・・飯マズを除けば、容姿、性格、能力どれをとっても完璧だよな。

・・・あれ？もしかして、これって全然OKなんじゃないか？というか優良物件過ぎじゃないか！？

だが、落ち着けレイア。こういう時こそ慎重になれ、油断は禁物だ。一時の気の迷いに流されると大体良い結果にはならない。

「レイアさん、レイアさん。あれは、なんですか？」

そんなにグイグイと引つ張らないで。

「あれはね、カフェといって軽食を提供してくれるお店だよ。確か、クックベリーパイという食べ物がある有名なお店だよ。食べてみるかい？」

「うー、食べたいけど止めておきます。今食べちゃうと、お昼御飯が食べれませんから」

左様ですか。

では、ティファニアの食欲を満たす為にさっさとお店に行こうじゃないか。貴族御用達のお店にね。

「じゃあ、行こうかティファニア」

「はい！」

ティファニアが元気よく返事をして、再び私の腕をホールドしてきた。これでは、まるで恋人同士がデートしているようではないか。

・・・

あれ？これって、もしかしないでも世間一般的ではデートと言うやつか！？ちよつとちよつと、前世込みで女性とデートなどした事が無い私に早くも試練到来だ。とういか、デートって何をするんだ？
こういう時こそ、アミバ・・・今まで付き合っていて女性の話題すら聞いた事がないので却下だ！というか、あの性格についていける女性って存在するのか？いや、私も人の事をどうこう言える立場でもないんだがさ。

困った時のビシャエモン・・・何故、居てほしい時にいないんだ！ガリアから瞬間移動で帰ってきてくれ。ビシャエモンの容姿から考えるに、女性との付き合いの一つや二つあるよね？でも、現時点で無い物ねだりは無意味だ。くっそー、覚えていろよビシャエモン。

次だ次！こういう時こそ、身近にいる唯一の女性？である水銀燈に意見を・・・娘に『デートって何をするの？』とか聞けるはずねーじゃなかよorz
どんだけ、頼りねー父親だよ。

船に居る船員・・・いやいや、これもまずいでしょ。答えてくれるかもしれないが、生涯笑い話にされそうなのでこれも駄目だ。

駄目だ。今いる身近で頼れる人材がいねー！。どんだけ、友達少ないんだよ俺。

とりあえずは、いつも通りでいつか。

ガヤガヤ

私が一人でどうでもいい事を悩んでいると、辺りが騒がしくなった。何が起こったか分からないが、こういう場合は関わらないに限る！

「さあ、いこ………ティファニアがいねー！！」

さっきまで、私と腕を組んでいたティファニアが煙の如く消えていた。おいおい、こんな人が多い処で迷子とか勘弁してください。ただでさえ目立つ容姿なんだから下手なのに目を付けられたら面倒事になってしまふ。

どうやって探す！？考えるんだレイア。

案1

とりあえず、周りに人間を一人残らず殺して最後まで生き残ったのがティファニアでFA

ファイナルアンサー

案2

大声でティファニアと叫びつつ羞恥プレイに励む

案3

船に戻り、船員たちを使って人海戦術

悩むまでも無く、断然案1だろ！案2とか恥ずかしいから却下だ。

案3も戻るのが面倒だから却下だ。まだ遠くには行っていないだろうから、やるなら今がチャンスだ。

「見てみるよ。すげー美人が貴族から平民の子供を庇っているぞ」

「本当だ。本にでてくる妖精みたい」

「本当にお馬鹿さんね」

「可哀そうに貴族相手にあんな別嬪が出て行ったら、鴨が葱を背負っているようなもんだよ」

なにやら、日本の諺らしきものと聞き覚えのある声があったが・・・
つて！今の話は、どう聞いてもティファニアじゃないかよ。お願い
だから王都で揉め事を起こさないでー（涙）

私は、大急ぎで人ごみをかき分けて騒ぎの中心へをやってきた。そ
こには、この世界では良くありそうな光景が広がっていた。

豪華な馬車と馬車の目の前で足を怪我している黒髪の女の子がいた。
ほほう、珍しい髪の色をしているな。恐らく、買い物をした後なの
だろう。辺りには、食材が散らばっていた。更に、女の子の前に立
ちはだかり、馬車から下りてきたであろうゲスな貴族に意見をして
いるティファニアが居た。どれだけ、男前なんですかティファニア。
まさにテンプレ通りの構成図だった。

「私がヴァリエール公爵家傘下の伯爵だと知っての事かな？本来な
ら、貴族として私の馬車の前に飛び出てきたお前には相応の罰を与
えるべきなのだが・・・」

貴族が黒髪の女の子から視線を外し、いやらしい視線でティファニ
アの体を舐める様に見える。

不快だ・・・実に不快だ。

なぜか分からないが不快だ。

おまけに、公爵家傘下のアホか・・・

ボキボキ

「どうか、お許しください貴族様。こちらの方は関係ありません。罰するなら私だけにしてくださいお願いします」

女の子は、ただただ頭を低くして貴族に謝っている。そして、ティファニアが関係ないから見逃してくれと・・・なかなか良い心がけじゃないか。もし、ティファニアを生贄にして自分だけ逃げようならオークの餌にするとこらだったよ。

「その勇敢なお嬢さん。君が私の物になるならば、その女が働いた無礼を見逃そうじゃないか。そして、君には生涯楽な暮らしをさせてあげよう。どうだい？悪い取引ではあるまい」

ブチブチ

人が黙って外野で聞いていれば好き放題言ってくれやがる。ティファニアを勝手に自分の物扱いするのは止めてもらおう。

アレは、私のモノだ！

「お断りします！私は既に、生涯愛すと心に決めた殿方がいます。貴方の様に権力を振りかざし、抵抗できない女性に仕打ちをするような人は、こちらから願い下げです」

ティファニアの言葉に辺りの取り巻きどもが騒ぎだした。

「早く逃げな」

「そうだもつと言ってやれ！」

「お嬢さん、早く逃げな殺されるぞ」

「こんな処で貴族に逆らわないでくれ、巻き添えは御免だ」

「お嬢さん一人にこんな役目をさせて、男の方は何処に隠れてやが

る」

無駄にカツコイイじゃないか・・・後さ、そんな事言われたら私が非常に出て行きにくいんだけどさ。私という存在のハードルを持ち上げないでくれ。

「平民からこんな暴言を言われたのは初めてだ。折角、生涯楽に暮らすチャンスを棒に振るとは平民とは本当に馬鹿で困る。君には、貴族への礼儀を言うものを教えてあげよう」

貴族が杖を取りだそうと懐に手を掛けた。

「貴方は、関係ないんだから早く逃げて。私の事なんていいから早く！」

状況を理解したのだろう。貴族が使う魔法は、平民にとって脅威！自分を助けるために出てきてくれたティファニアだけでも逃がそうという心がけ、称賛に値する。

「私の事は、気にしないでください。貴方こそ、安全な処に下がっててください。私は、大丈夫ですから」

ティファニアが女の子に声を掛けた後に、私に視線を送った。気づいていたか・・・いや、むしろエルフであるティファニアが気づかない方がおかしいか。

せめて、首を突っ込む前に一声かけて欲しかったよ。一体、ティファニアの中で私がどういった人物像になっているか激しく疑問だ。私は、無償で人を助ける正義の味方では無いのだよティファニア。

はあー、一体どうやって收拾つけようかな。

「>>眼をつぶれ<<」

周囲に居る全員に対して、魔法で命令した。流石に辺りに居た人数が多すぎた為、私一人ではカバーしきれぬ自信が無い。だから、ティファニアの精神力を少々拝借した。一言いおう・・・エルフは精神力も半端ないです。私の精神力が池だとすればティファニアはダム・・・いや、湖と言っても過言ではないだろう。この底知れぬ精神力は、エルフだからなのか？それとも、虚無の使い手だからか？

「急に居なくなったら心配するじゃないか。後始末に困るから、今後は首を突っ込む際は一声かけてくれよ」

「す、すみませんレ「ストップ！」」

こんな大勢いると事で実名を呼ばないでくれティファニア。自立たぬように全員の目を塞いだのが無駄になってしまっじゃないか。

当然かもしれないが、ティファニアには私の魔法が通じないようだ。無意識にレジストしているのか？それとも、『大嘘憑き（オールフイクシヨン）』かな？どちらにせよ、チートですね。

私は、人差し指を口に当ててティファニアに喋らないでとジェスチャーした。

「一体どうなっている！？貴族が仲間にしたのか。卑怯だぞ！正々堂々と勝負しろ」

いやいや、権力を振りかざしておいて正々堂々とか頭可笑いんじ

やね！？というか、先程平民に対して魔法を使おうとしてた奴が使
つていいセリフじゃないね。

ザワザワ

辺りの人間も眼が開けない事で騒ぎだした。

さっさと、片付けよう。だが、その前にティファニアを見捨てなかつた少女の手当てしてやるか。

「そこの娘・・・よく彼女を見捨てなかったね。だから、この場は私が引き受けよう。今度からは、馬鹿の貴族の前に飛び出るなよ」

私は、少女の怪我をヒーリングで治療した。これで、残りはゴミ処理だけか。

「何をしたか分からんが、眼が見えなくてもお前の声がする方に避けられない魔法を撃てばいいだけだ。この私を舐めた事を後悔させてやる」

そういう手段で来ますか・・・全くゲスな貴族が！おまけに、私のモノを奪おうとするその腐った根性。私の機嫌を損ねた罪は、無様な死を持って償って貰うぞ。貴様の汚い姿を民衆の前で曝け出せ。

ズブリ

「お前の余命は、一分・・・今までやってきた事を後悔して死ね」

「ぐあああああ」

貴族の”秘孔”めいもん命門を突いた。貴様は、ちょうど一分後に上半身と下半身が真っ二つにお別れだ。地獄で今までの罪を悔い改めよ。秘孔を突かれた貴族は、悶え苦しんでいる。

「待たせたね。ゴミ掃除は終わったよ」

私は、後ろで待機していたティファニアに声を掛けた。

もうお昼時を回ってしまいそうだ。早く、ウマイ飯でも食べに行こうじゃないか。

「はい。それはそうと・・・あの人は何をしていますか？」

何をしているって・・・ティファニアが貴族の相手を私に任せただでしょ！？というか、ついさっき私が秘孔を突く処を見たでしょう。まさか、私が平和的解決をするでも思っていたのか？勿論、私だって平和的に解決するようにいつも頑張っているんだけど、相手側がね。

しかしティファニアの言動から考えて、私が平和的に解決したと思いきこんでいる節がある。ならば、これからの惨劇を見せるわけにはいかな。

「あれはね、イナバウワーというスポーツの技だよ。急にスポーツに目覚めたらしいね。まあ、気にする程の事じゃないさ。いくよ、ほら」

「そうなんですか、変わった方ですね」

アホな子で助かった。いや・・・純粹なだけか。

「お、お名前を聞かせてもらえませんか？私は、ジェシカ。魅惑の妖精で働いています」

さっさと逃げようとした時、助けた女の子が声を掛けてきた。確か、シエスタの親戚だったけな？無駄な処で原作キャラとエンカウントしてしまったorz

いや、待てよ……この状況は使えるな。

「私……俺の名は、サイト！ヒラガ・サイトよろしくな。いこうルイズ！」

多少……いや強引ではあるが、ティファニアの手を引き早々にこの場を去った。

貴族御用達の高級料理店にて。

「美味しいですレイアさん」

「ああ、美味しいね」

喜んでもらえて何よりだよティファニア。後、お願いだから食事を食べ終わったら船に戻りましょうね。このまま、アホリエッタとの面談まで付いてくるとか言いだしたら、私も困るよ。

「聞きました？なんでも、大通りで殺人事件があったそうよ。それも、被害者は伯爵の方だったみたい。昼間の大通りにも関わらず犯人の目撃者は、誰もいない上に、死体は上下に真っ二つだったとか」

「怖いわね」

貴婦人は、噂が大好きなのね。もう、先程の一件についての情報が
出回っているとは、ビックリする程の情報網だよ。

「王都って物騒なんですねレイアさん」

・
・
・

「ああ、そうだよ！犯人が近くに居るかもしれないから、安全の為
に船に戻るう。君に何かあったら私は生きていけないよ。私は、仕
事を終えてから直ぐ戻る。だから、君は子供達の事に戻ってくれ。
絶対に、外出してくれ」

後ろのおばちゃん達GJだけ。これで、ティファニアを船に返す事
ができる。いやー、王都が物騒で助かったわ。

「すこし残念ですが・・・分かりました。お仕事頑張ってきてくだ
さいねレイアさん」

偉い子だ。ちゃんと、お土産を買って戻るからね。

お父様とティファニアが船を出た少し後

「尾行するわよアミバ」

「なぜだ？」

何を言うかと思えば、決まってるじゃない。

「面白そうだからに決まってるじゃない。お父様が生まれて初めてデートするのよ！娘である私がこんなビックイイベントを見逃してどうするの！？それとも、アミバは来ないの？」

「愚問だな・・・当然、行くに決まっている。ふふふふ」

流石、話が分かるじゃない。でも、その笑い方は気味が悪いわよ。船の守りは、アミバの偏在にでも任せればいいわ。

「レイアは、あれでもなかなか鋭い。感づかれるなよ」

何を言うかと思えばそんな事。この私を誰だと思っているの。

「あら？そのセリフそっくりお返しするわ」

喫茶店前にて。

「ヘタレだな」

普段ならお父様の悪口は許しがたいけれど・・・あれは、娘の私が

見てもヘタレだわ。お子様のデートじゃないんだから、もつと強引に行きなさい！

「ええ、そうね。見ていてもどかしいわ。自分から腕を組みに行く位の甲斐性を見せなさい」

お父様がここまで女性のリード出来ないとは予想外だったわ。今度、姉妹で相談してお父様とティファニアの人生設計を立ててあげようかしら。

「女性をリード出来るようになる秘孔とかないかしらね」

「そんな都合のいい秘孔などあるわけもない」

チツ！

肝心なところで役に立たないわね。

「北斗神拳に不可能は無いんじゃないか？それでも、天才？無いなら探しなさいよ」

「……」

アミバが無言になってしまった。

そんなに無理難題だったかしら？まあ、今はどうでもいいわ。

「……ティファニアがいねー！！」

お父様の叫び声が聞こえた。

デート中に女性を見失うなんて……本当に大丈夫かしら。

ザワザワ

「本当にお馬鹿さんね」

主人公は、正義の味方？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

アホリエッタ編を書こうと思ったのですが、
珍しく平和的な話を書いてしまいました。

たまにはいいかな？

次回こそ、アホリエッタ登場！？と行きたいと思います。

主人公は、アリエッタが大嫌い・・・というか ね！（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想をくれた方々に感謝感謝です。

本話は、アホリエッタ襲来

小話でティファニアの使い魔の小ネタを実施します。

使い魔ネタは、作者が書きたかっただけなので原作と全く関係ありません。

主人公は、アリエッタが大嫌い・・・というかね！

ティファニアを船まで送り届けて、アホリエッタとの面会待ちをさせられているレイアです。

人様を呼び出しておいて、待たせるとはどういう事だ！確かに、事前に予約とかはしていなかったよ。会いたくもない人に会う為に、わざわざ遠くから来てやったのに腹が立つよね。

おまけに、一人で応接間らしき別室で待機させられているから暇で仕方が無い。既に30分以上待たされているのにも関わらず、お茶の一つも出てこない。もう、アホリエッタの代理人でもいいからさっさと来て話を済ませてくれ。いや・・・むしろ、代理人を激しく希望する。

・
・
・

更に10分後。

呼び出しには、応じたからもう帰っても大丈夫かな？きつと、大丈夫だよ。最低限の義務は、果たしたし誰も文句は言わない。

ボタン

「お待たせして申し訳ありません」

「お待たせしましたミスター・ヴェーグル」

ソロソロ

チツ

今まさに帰ろうとした瞬間に来やがった。それにしても・・・アホに続きマザリーニ枢機卿まで来やがった。おまけに、マスクットを持った護衛らしき人物が3人・・・後、扉の向こうに隠れてはいるメイジが2人、天井裏に1人いる。

「いえいえ、私もつい先ほど来たばかりです。自己紹介が遅れました、ヴェーグル家嫡男レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルです。お目にかかれて光栄ですア　リエッタ王女殿下」

軽く会釈をした。本来なら、こんな不当な呼び出しをした人物に頭を下げるなど言語道断！だけど、事を荒立てると領地に迷惑が掛るから、我慢する。

「こちらこそ、ミスター・ヴェーグル。お忙しい処お呼び立てしたのは、他でもありません。貴方が、アルビオン王家に対して不敬を働いたという情報を耳にしました。その真偽を確かめる為に、本日お呼び立て致しました」

不敬ね・・・私は、知らない間に不敬という単語の意味が変わったのかな？それに、亡きアルビオン王家の話など無意味にも程がある・・・本当に、困った人だな。それに、先程から頭を抱えているマザリーニ枢機卿の姿にまるで気づいていない。

「大変申し訳ありませんが、私は貴方の仰っている意味が分かりかねます。私がアルビオン王家に不敬を働いたなど、完全に偽情報です。私からすれば、その情報の出処に悪意を感じます。一体何処で

その情報をお聞きになったのでしょうか？」

「それはお話しできません。では、話を変えましょう。貴方は、ここ数日の間 何処で何をしておりましたか？」

刑事ドラマじゃあるまいし、なぜそんな事を教えなければいけない。それに、頭っから私を疑っているその根性が更に気に食わん。

ミシミシ

椅子の取っ手を掴んでいた手に力が入った。

「仰られている意味が理解できません」

「貴様！王女殿下に対してなんて態度だ！？」

護衛で付いてきていた一人が腰に掛けたサーベルに手を掛けて、大声叫んだ。

「下がりなさいアニエス・・・私の部下が失礼しました」

飼い主があれならそれに仕える犬も所詮あの程度か。

はあー、さっさと船で実家に帰って戦争の準備がしたいな。次こそは、船一杯にタンクを積んで帰りたいです。

「話を戻します。意味が分かりませんでしたか・・・ならば、簡単に申し上げます。私は、貴方がアルビオン王家に対しての金品の強奪と非戦闘員を見殺しにした罪で疑っております。ですから、貴方がその時に何処で何をしていたかを答えていただきますよ」

・
・
・

いやいやいやいや、別に意味が分からないってそういう意味じゃないよ！というか、そっちの意味で普通とるか！？

というか、それだと私が馬鹿見たいだろう！？ふざけるなよアホリエッタ。

「全く身に覚えがございません」

正規な取引で手に入れたお金を強奪とか言われたら、世の中の商売が成り立たないよね。それに非戦闘員を見殺したとか言わないでもらおう。

最初から助ける気など無かったただだよ。

「本当ですか？私は、とある筋から貴方がアルビオンに居た事とアルビオン王家と取引した事を聞いております。せめてもの慈悲です、今なら発言の撤回は許可します」

は、発言の撤回を許可しますだ！？

このクソアマ！！

「何度聞かれようとも、お答えは同じです。身に覚えはございません！むしろ、私はアリエッタ王女殿下が仰っておられるある筋の情報という方が怪しいと思います」

「そのような事はありません。その情報は、私が信頼している者が

らの情報です」

貴方が信じているとか関係ないからさ！なにその信頼！真実みたいな構成図。

おい、さつきから横で疲れた顔をしているマザリーニ枢機卿！この、アホを止める！

ジー

偶然か、私の視線に気づいてマザリーニ枢機卿が重い腰をあげてくれた。

「まあまあ、アンリエッタ王女殿下も落ち着きなさい。このまま、話しても進展はないでしょう。ですから、ここはお互いに一ずつ質問に答えていこうではありませんか」

うーん、あまり答えたくない事もあるんだが。まあこの際仕方ない。どんな思惑があるか分からんが乗ってやりますよ。

「ごほん、では私からお答えしましょう。その情報を持ってきてくれたのは、貴方と同じ魔法学院の生徒であるルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

予想はしていたが・・・やはりそうか。これは、公爵と一度じっくりと話さないといけないな。カトレアの鎮静剤の件も含めてじっくりとね。

「ええ、確かに同級生でそんな女性がおりましたね。しかし、大事なのは彼女が魔法学院の生徒という情報や公爵家の者といった情報ではありません。彼女の情報がどこまで信憑性があるかで

す。一体、彼女は、どうやってこんな時期のアルビオンの・・・しかも、王家に関する情報を手に入れたのでしょうか？もし、王女殿下がその事情を知り得ないのならば、彼女からもたらされた情報は嘘である可能性もあるのでは？」

皇太子に送ったラブレターの件を暴露するか？どう切り出してくる、アホリエッタ。

「そのような事、貴方のような身分の者が知るべき事ではありません。次は、私の質問に答えなさい」

え！？今ので私の質問に答えた気でのいるの？

それに、知るべき事ではありませんだ！いや、明らかに知るべき事でしょう。やべーよ、話にすらならないよこれ。

もう、手っ取り早くやっちゃおうかな・・・いい加減にしないと、ストレスで胃に穴があくよ。もう、相手にしたくない！

「我が領地は貿易で成り立っている為、色々と王家の情報なども入ってきておりました。ですので、私自ら王家へ火の秘薬の材料になる硫黄を売りに行っておりました」

「やはり、彼女からの情報は正しかったのですね。先程、発言を撤回していればいいものを・・・ウェールズ皇太子を見捨てた罪、許しません」

え！？

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「王家に火の秘薬を売りに行つたと言つたら
いつの間にか皇太子を見殺しにした罪までかぶせられた」

な… 何を言っているのか わからねーと思うが

おれも 何をされたのか わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

「お、お待ちくださいアンリエッタ王女殿下。ミスター・ヴェーグ
ルは、何も嘘をおしやっております。彼は、この戦火の中 王家
の為に秘薬を持っていったのです。むしろ、貴族派に売りに行かな
かっただけでも賞賛されるべき事なのですぞ」

マザリーニ枢機卿が割り込まなかったら不味かった、危うく殺しか
けたよ。この国、マザリーニ枢機卿が居なかったらもっと早くに滅
びているよね。後、マザリーニ枢機卿も私の側に付くならもっと早
くしろ！

「…分かりました。マザリーニ枢機卿に免じて金品の強奪の罪
は無かったものとしてます。マザリーニ枢機卿に感謝しなさい」

ぶちぶち

無かったものだ…元からねーだろ！そんな罪。適当な事を言っ
ているんじゃないよ。それに、何処の世の中に戦火の中、無償で高

価な触媒を提供する変態がいるんだよ。居たらせひ紹介してほしいね。

「あ、ありがとうございます」

あっ、やばい血管が切れる。もうだめだ、忍耐袋が切れる前に退場するぞ！

「では、誤解も解けたようなのでこれにて失礼させていただきます」

「お待ちなさい。まだ、非戦闘員を見殺しにした件について弁解を窺ってませんか？」

いや、弁解も何も完全に無罪だろ。

「それこそ、仰っている意味が分かりません。確かに私は、ウェー
ルズ皇太子と直接面会をしました。其処に非戦闘員が居た事を聞
いておりません。これは、推測ですが・・・王女殿下の密命により
ルイズ嬢が、アルビオンに居たとします。そして、ウェールズ皇太
子から直接 私との取引の話を聞いたとしましょう。そうすると、
彼女は私が立ち去った後までその場に残っていた事になります。こ
れが、どういう意味か分かりますか？」

「いいえ。難しい話は、嫌いです」

即答な馬鹿！少しは考えろ。

護衛の方は、頭が追いついてないようだが マザリーニ枢機卿は、
理解出来たようだ。

「私が仮に非戦闘員を見捨てたと言うなら彼女も同じように非戦闘

員を見捨てたのですよ。だから、彼女自身が非戦闘員を見捨てた事を報告してないのならば、元よりその場には非戦闘員なんて存在しなかったのですよ」

もし、私を罰するならばルイズにも同等の罪を背負って貰おうじゃないか。万が一、そうなった場合には公爵家にも色々とお礼をしないとね。

「ルイズにまで罪を被せようなんて、それでも貴族ですか。自分の罪を認めず、恥ずかしくはないのですか？ ウェールズ皇太子は、このような者に翻弄されてしまったのね」

バッキバキ

力を込め過ぎて椅子の取っ手を握りつぶしてしまった。

「王女殿下！ここは、私が取りまとめますのでどうか下がってください。もうすぐ、次の面会の時間ですぞ」

この、絶妙なタイミングで割り込んでくるマザリーニ枢機卿が邪魔で仕方ない。どれだけ、空気を読むのに長けているんだ。

「わかりました。後の事は、一任致します。く・れ・ぐ・れ・も今回の様な事が無いように対応をお願いしますね」

ゾロゾロ

バタン

アホリエッタは、護衛を引き連れて部屋を出て行った。

部屋に残されたのは、私とマザリーニ枢機卿の二人だけ。何が悲しくて、男と二人つきり狭い空間に居なきゃあかんのだ。

シーン

「何か希望する物はあるかね？私に出来る範囲で用意しよう」

第一声がそれですか。

「子供に言うセリフではありませんねマザリーニ枢機卿。それに、その言葉から察するに大方の事情は把握していたのでしよう。なぜ、黙っていたのですか？」

伊達に国を陰から仕切っているわけではあるまい。私より数段切れる人物だろう。本当に惜しい人材だな。

「王女殿下が成長したかを確かめたかったのだよ。だが・・・結果はご覧の通りだ」

あのお守りをするなど考えただけでゾツとする。どうりで老けるのが早いはずだ。精神的苦痛は、想像を絶するな。

「まあ、苦勞すると分かっているこの国に残ったのでしょうか。だから、同情はしませんよ。私は、無罪放免と考えた上で欲しい物を言ってもいいですか？」

仮に無罪にならぬならば、欲しい物を無罪としてやるだけだな。

「当然だ。君が有罪ならこの国の商人全てを捕まえなきゃならんよ。

それで、何が希望かな？」

なかなか、話が分かるじゃないか。
ならば、欲しい物は一つだよ。

「ならば、遠慮なしに言わせてもらおう『風のルビー』を頂きたい。
当然、あれがアルビオン王家の秘宝だと知って言っている」

私の言葉に流石のマザリー二枢機卿も驚いているようだ。

あの宝石が手に入れが、ティファニアに更なる力を与えられる。幸
い、『始祖のオルゴール』については、アルビオン王家から頂いた
財宝に紛れていた。

「な！あれは・・・あれだけは・・・他の物なら、何とか用意しよ
う」

さっき、言っただ事と違うじゃないか。

だが、少しだけ譲歩してあげよう。

「ならば、『水のルビー』でも構わない」

「・・・それこそ無理だ」

これも駄目だと言うのか！？

おいおい、あまりふざけた事を言うんじゃないぞ！大人なんだから
自分の言っただ事には、責任を取りましょう。

「マザリー二枢機卿！諦めが悪いです。貴方は、ヴェーグル領の賢
易先の人達・・・エルフ達を恐れているからこそ、今まさに、私の
ご機嫌を取ろうとしているのではないのですか？その相手を怒らす

ような対応をしてどうするのです？それに、自分の発言には責任を持つてください」

苦い顔をしている。

そうだ、エルフの恐怖を思い出すんだ。彼等は、マジで脅威だぞ。

『薔薇族』なんてきたら、尻の穴が引き締まる程の脅威を感じるぞ

！もう、マジで！！

「ぐう……『水のルビー』は、無理だ。『風のルビー』を渡そう」

ストレスは溜まったけど『風のルビー』をゲットだぜ。

「ありがとうございます。この件については、私の胸の中に留めておきます。ですが……偽物のルビーなんて渡されてしまったら、どうなるかな保障し兼ねません」

さーて、すっきりしたし『風のルビー』を頂いて帰るかな。

だが、その前に……

「言い忘れましたが……私を亡き者にしようなんて考えない方がいいですよ。町に停泊している領地所有の船には、エルフの方が乗っていらっしやいます。なーに、私が定刻通り帰れば何も起きませんよ」

「分かっておる」

本当に苦勞の絶えない人だね。

でも、貴方が居なかつたらきつと王宮が半壊していたよ。

しばらくして。

「確かに『風のルビー』頂戴いたしました。それでは、お暇させていただきます」

「ああ、もう来ないでくれよ」

それは貴方がた王家の方々次第ですよ。

それはそうと・・・王宮の方には、かなーりお世話になったからお礼をしていかないとね。どうやってお礼をしてくれよう。

「出口まで案内します。付いてきてください」

先程、アホリエッタと一緒に外に出たと思われる護衛の一人が待っていた。

「ああ、御苦労。案内頼むよ」

数分後。

予想通りの展開で泣けてくるぜ。またもや人気のない場所に連れてこられたよ。

くっそ！今回の黒幕は誰だ・・・

「魔法を使わずとも、君の腕程度では私にかすり傷すら負わせられんよ」

「・・・最初からばればれだったか。大人しく王女殿下の『風のルビー』を返してもらおう」

「いやいや、これはアホの物じゃないだろう。元々アルビオン王家の物・・・そして、その血縁であるティファニアの物でもあるんだけどな。」

「一つ聞いてもいいかい？君の年収は幾らかい？」

「私を買収する気が・・・残念ながら、幾ら積まれようが鞍替えする気は無い」

別にそんな気は無いんだけどな。ただ、君の生産性を知りたかっただけなのだが・・・言わないのなら無理やり聞き出すまでだ！

ヒュン

女が腰に下げていたサーベルを抜刀して斬りかかってきた。

パシ！

「な！受け止めただと！」

甘い甘すぎる！この程度の剣速など普通すぎる。北斗神拳は秒間に千とか万とか繰り出してくるんだぞ。そんな攻撃をしてくる連中と一年も付きあって生きてきた私を舐めないでもらおう。我ながら、良く生きてたな・・・

ズブリ

相手が驚いている間に”秘孔”かいあもんでんちよう解啞門天聴を突いた。 さあ答えて貰おう。

「あああああ」

「誰に命令されたんだ？」

「わ、私の独断です」

・
・
・

つ、つまんねー！。そこは、空気を呼んで マザリーニ枢機卿と
か言ってくれよ。更に追加要求できたのに。

「うち！じゃあ、お前の年収は？」

「年収は350エキユーです」

うむ、ちょうど良い年収だ。そうなるか・・・こいつの残りの人生
が多く見積もって40年だとして・・・うむ！今後年収が上昇する
事を鑑みても十分だ。

「喜べ、君はこれからエントロピーを凌駕する存在になるのだ」

「い、一体なにを」

安心しろ、痛みなど与えず殺してあげるよ

「ここに、ある植物の種がある。これは、成長すれば花一つで1000エキュ어도する魔法の触媒となる物だ。しかも、数年間摘むことができる。だが、この植物はとある生物しか苗床にしない事から非常に扱いに困る品でな。どうだい？いいよ本音を言って」

ガクガクガク

おおー、いい具合に青ざめている。

「ど、どうすれば助けていただけますか？」

うむ！

「聞いただけに決まっているじゃないか。せめてもの慈悲だ、王宮の花壇にでも埋めてあげるよ」

「やめてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ズブ

ヴェーグル家所有の船にて。

「ただいま、皆いい子にしてたかな？はい、これお土産」

町で買ってきたクックベリーパイを子供達にあげた。

「おいしそー」

「ありがとうレイア兄ちゃん」

「ありがとうございます」

ジーン

視線を感じる・・・いや、ティファニアにもお土産あるよ。食べ物じゃないけどね。

「ティファニアには、これを。君に似合うと思ってね」

マザリーニ枢機卿がしぶしぶと私に渡してくれた指輪をティファニアにプレゼントした。

「綺麗・・・ありがとうございます」

いえいえ、これからも俺の為に頑張ってくれよ。さて、今日から私も『虚無』の呪文を覚える練習をしようじゃないか。しかし・・・あの糞長い詠唱どうにかならんのかなorz

おっと！忘れるところだった。

side ティファニア

ヴェーグル領の平野にて。

レイアさんと出会ってから毎日が、とても幸せです。この間もとてもきれいなルビーの指輪を貰いました。ハーフェルフである私に優しく接してくれるレイアさんには、一生頭が上がりません。ですから、一生かけて恩を返そうと思います。

そして今日は、少しでもレイアさんの助けになろうと思い、使い魔を召喚してみようと思います。なせだか、レイアさんが非常に嫌がってました。ですが、めげずにお願ひした処・・・レイアさん立ち会いならばという事になりました。

「いつでも始めてくれ」

レイアさんは、ゼルエルといったかしら？ゴーレムを身に纏い、まるで戦争にでも行くかのような雰囲気漂っている。素のままのレイアさんの方がカッコイイのに・・・

「はい、見てくださいねレイアさん」

すーーはーー

見ていてくださいレイアさん。

貴方の為に、がんばって凄い使い魔を召喚して見せます。

「この宇宙の何処かに居る私の使い魔よ。我が名は『ティファニア・ド・ヴェーグル』。五つの力を司るペンタゴン。私の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ」

少し早いかもしれませんが、私もヴェーグルって名乗ってもいいですよ？レイアさん。

ゴツホゴホゴホ

あら？レイアさんが、何故か咳き込んでいる。大丈夫かしら？後で、私特製の飲み物でも持って行ってあげよう。

私がレイアさんの心配をしていると、目の前に青い鏡から小さな動物の人形みたいなものが出てきた。

「かわいいー」

兎のようにも見えるけど・・・少し違うかしら？

真っ白な毛、可愛い目、そして特徴的なのが耳から垂れさがっている手の様な長毛・・・それに付いている金のリング。

「君かい？僕を呼んだのは？」

しゃ、しゃべった！？これがレイアさんから話に聞いた韻龍というものなのかしら？それとも、最近の使い魔は喋るのが普通なのかしら？

「は、はい」

なんだろう・・・見た目は可愛いのに、とっても嫌な感じがする。

「なんでも願いを一つだけ叶えてあげる。だから、僕と契約して魔法ほわたあ！あゝたたたたたた、ほわたあ！！」・・・

ええ！？ええええええええええ！！！！

「この世から消えてなくなれ！ラミエル」

キュイイイイーーーーン

ドゴーーーーー！ゴオオオオーーーーン

「きゃ」

私の使い魔？らしきものが喋っている途中で急にレイアさんが割り込んできた。原型が無くなるほど全力で殴られた後に、レイアさんとラミエルから光る矢の様なものが飛び出て、辺りの景色と一緒に消えてなくなってしまった。

「あ、あのレイアさん・・・どうしたんですか？急に」

いつも冷静なレイアさんが焦っているのが良く分かる。私一体何かいけない事しちゃったのかしら？

「ティファニアには、使い魔はまだ早い！大丈夫、私が使い魔の分まで守ろう」

レイアさん

でも、さっきのは何だったのだろう？

何でも願いを叶えてくれるって・・・でも、今の私はレイアさんと一緒に居られるからそれだけで十分願いは叶っています。だけど、本当に叶えたい願いがある時は、お願いしちゃうかも。

主人公は、アリエッタが大嫌い・・・というか ね！（後書き）

ティファニアの使い魔紹介

名前：？？？

原作：魔法少女まどか マギカ

備考：どんな願いも叶える事が可能なチート存在。

ただし、その代償は・・・

主人公は、死地へ赴く。（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。

感想を励みにいつも頑張っております。

近年まれにみ緊急事態でもあり、

読者の方々が無事であることを願います。

今回は、ティファニアを迎えに行く際に行ったアミバとの掛けのお話です。

主人公は、死地へ赴く。

ティファニアを実家に連れ帰り、のんびりしているレイアです。

「うまいなー」

実家で飲むお茶は、格別だ！ここ最近、主にティファニアを連れて帰ってきてから死ぬ程忙しかったよ。

今回の成果であるタンク達をばれない様に工房まで連れて行き、ゼルエルネットワークと接続した。いつもと違って数が多いので大変だったよ。しかも、工房のタンク専用の部屋を見た瞬間に、逃亡を図ろうとする奴もいるし困ったものだ。おまけに、マコト男爵に寄生させた虫が急に孵化しそうになったので処分する事にもなつてさ。てんでこ舞いだったよ。

後は、村から連れてきた子供達をどうするかも困ったよ。なんせ、年端もいかない子供達だからね。やはり、子供には親という存在が必要不可欠であろうと思ひ、領地で子供を引き取ってくれる家を探してみましたよ。だけど、成果は芳しくなかった。

幾ら領地が豊かになったからといって、どの家庭も他人の子供を養うほどの余裕がないようであった。その為、孤児院を新設して子供達が自立するまで面倒を見る事にした。それに伴いティファニアを院長にしようかと思つただけで、何故か子供達と本人から反発を受けた。だから、領地から人材を募集しましたよ。そのかいもあって、人当たりの良さそうな老夫婦が面倒を見てくれる事になった。

採用にあたり、北斗神拳を使って裏を取ったのは内緒です。いやー、

北斗神拳って便利だわ。

そして、何より一番大変だったのが両親への対応だった。何もそこまで驚かなくてよかったじゃん。

――回想――

家の付近にある建設されている船着き場に、今回アルビオンにいった船員を集めた。

「船員は、これで全員かな？」

「全員ですレイア様」

うむ、良い返事だ船長。

「今回は、良く働いてくれた。汚れ仕事にも関わらず、嫌な顔一つしないで引き受けた君達にささやかなボーナスをあげよう。家族の為に使うなり、自由に使ってくれ」

タンクの世話から物資補給まで様々な事で私を助けてくれた。本当に、感謝してもしきれないよ。私は、船員全員に一人辺り500エキューのボーナスをあげた。

では、機密保持の為に君達の記憶を消させて貰おうか。

「全員、受け取ったな。ナウシド・イサ・エイワーズ……ハガラズ・ユル・ベオク……」

私が『忘却』の呪文を完成させ、アルビオンでの一件について全てを忘れさせた。領民で実証するのは忍びないが・・・まあ、死ぬような呪文でもないし別に構わないだろう。

「あれ？俺らは、何をしていたんだ」

「えーと、レイア様に呼び出されたまでは覚えているんだが」

「ラ・ロシエールに居た辺りまでは覚えているんだが、その先が思い出せない」

ふふふふふ、効果はまあまあのような。なぜか、個体差が生じている・・・疑似的な虚無では、これが限界という事か？まだまだ、研究が必要だな。しかし、この程度の効果なら『大？吐き』や北斗神拳で記憶を消した方が早いし効果的なんじゃないかな？いや、実際そうだろうな。もしかして、始祖はエルフが持っている技能を劣化コピーして『虚無』とか呼んでたんじゃね？

「静かに！記憶がどうか、細かい事はいいんだよ。君達は、私と一緒に仕事をして大金を手に入れた。その事実だけあれば十分じゃないか」

私がそう告げると、あまり納得がいない様子だったが。各自が懐に張っている金貨を見て、静かに納得してくれた。うむ、それでいいのだ。

「それじゃあ、各自解散してくれ。本当に御苦労であった」

さて、後はティファニアと子供を連れて実家に帰るとするか。

実家の手前にて。

「あれが、レイアさんのご実家ですか？」

「そうだよ、お城みたいな家を想像したかい？」

あれでも、父上と一緒に増改築して頑張って大きくしたんだがね。それにしても、懐かしの我が家だ！父上と母上、雛尊・・・それに、メイドや執事の皆は元気にしているかな？

「そんな事ないです。これから、ご両親にご挨拶をしようと思つと緊張して・・・でも、頑張ります」

ガシ

ティファニアは、何を頑張ると言うのだ。というか、そんなにがつつりと腕をホールドしないでくれ。

後、挨拶は普通でいいからね！決して、誤解を招くような挨拶をしないでよ。両親によつて物理的に私の命が脅かされるからさ。

「ごっはん、ごっはん」

「今日も美味しいご飯ー」

「今日のご飯は、なんだろうなー？」

子供達が無邪気に飯飯と言いながら歩いている。おい！その子供達、お前等も変な事を言うんじゃないぞ。私の敵になったら、お前等の飯は当分ティファニアに作つて貰う事になるぞ。

「ほらほら、キリキリ歩きなさいお父様」

キリキリ歩きなさいって・・・まるで犯罪者みたいじゃありませんか娘よ！

あら？玄関前に立っているのは、両親と家の使用人達ではありませんか！？お出迎えまでしてくれるなんて、嬉しいですよ。皆の為に、レイアは頑張ってきましたよ。

「父上、母上、雛苺、皆ーただいまーグ（´・`・（ノ）」

玄関前にいる皆に手を振りながら挨拶をした。

そうだ、私は帰ってきたのだ・・・まあ、今回は短い旅行だったな。あんな糞みたいな呼び出しが無ければもう少しタンクを確保できたんだがね。なーに、次の狩り場はもう決まっている。その時には、ティファニアから貰った形見の指輪を存分に使わせて貰おうじゃないか。

・
・
・

あれ？だれも、返事をしてくれない。新手のイジメか！？戦地から無事に帰還してきた息子に対してなんて仕打ち（涙）レイアのガラスの心は、そんな対応されたらバラバラになってしまう。

「みなさん、どうしたのでしょうか？口を半開きにして固まっていますね」

うーん、確かにティファニアの言うとおりだ。何か、シヨッキングな出来事でもあったのかな？

はっ！

きよろきよろ

辺りを見まわしてみた。うーん、誰もいない。てっきり、全裸のアーベがゲイボルグを大事な処に刺しながら後ろに居るかと思っただじゃないか。それなら、空いた口が塞がらないも分かるのだがね。

ふりふり

「・・・・・・・・」

父上と母上の目の前で手を振ったけど・・・反応が無い。まるで、しかば・・・じゃなかった。脈拍が正常だから問題あるまい。こういうのは時間が解決してくれるのを待つのが一番！

「何かシヨッキングな事があったみたいだけど、そのうち治ると思うよ。まあ、気にせず中へどうぞティファニア」

「お、お邪魔します」

どこの公爵家みたいに広くは無いけど、この程度の人数ならギリギリ許容範囲だ。というか・・・そこで固まっているメイド達、早く仕事をしろ！！

「お邪魔しますじゃないよ・・・『ただいま』だよ」

我が領地では、皆家族同然なのだ。だから、そんな余所余所しい挨拶なんていらんよ。

「ただいま」

「おかえり」

何やら不愉快な視線を感じる。

視線の方を見てみると、アミバを筆頭に水銀燈と村の子供達が『みたらんねーよ！他でやれよ』と眼で言っている。一体、どこでそんな無駄スキルを身につけてきたんだよこのガキども！！

「おかえりじゃありません！！一体全体、これはどういう事ですか？」

あ、母上復活。

お元気でしたか？貴方の可愛い息子のお帰りですよ。 。
後、これはって・・・聞くまでも無くティファニアと村の子供達だよね。

「そつだぞレイア！戦場に行ったかと思えば、いきなり王家から出頭命令は下るし。一体、私達がどれだけ心配したと思っている。おまけに、何処で捕まえたのか、こんな美少女を連れて帰ってくるし、羨ましいぞこのやろっ！」

前半部分は凄く感動したが、後半の言葉のせいで台無しですよ父上。

おろおろ

ティファニアがおろおろとしている。お主も取りあえず落ち付け！

「これには、色々と事情が・・・とりあえず、中でお話しましょう。子供達も入りづらいでしょうし」

「わかった。後で食堂まで来るように」

子供達をメイド達に預けたら直ぐに向かいますよ。色々と話さないといけない事も多いしね。

食堂にて。

カクカクシカジカ

私は、アルビオン王家へ硫黄を売った事、そしてハーフエルフとその村の子供達を保護した事、王都での出来事を真実8割で残りの2割をオブラートに包んで報告した。なーに、嘘はつかんよ。

「それにしてもティファニア嬢は、モード大公とエルフのハーフ。更に、『虚無』の使い手でもあるのか・・・出生やその力が世の中に知れ渡ったら確実に狙われるだろう。いつまでも、家に隠れているとよい」

話がわかるね父上。

「そうですね。家の領地は、幸いエルフの方が住んでいようと誰も差別もしませんし、おまけにここを訪れるような奇特な貴族も殆どいないから安心して暮らせるでしょう。生活費などは気にしないで

良いですよ。全て、レイアの貯蓄から使いますので安心なさい」

え！長年溜めこんだ私の貯金を使うだって！？あんまりではりませんか母上ー！。私が血を流す努力をして貯めこんだ財産が@@

「ありがとうございます。お義母様、お義父様」

ありがとうございますって。それ私の貯金だよ　ー！！

「お義母様・・・いいわね。私、実は娘も欲しかったのよ。本当、レイアちゃん良くやったわ。お母様感激」

「うむ！完全に同意する。君の様な子なら何人でも歓迎しよう。レイアは、あのような性格だが、どうか・・・どうか見捨てないで欲しい。君だけが最後の希望なんだ。あれでも元々は、気立てのよい可愛い子であったんだ」

ちょ！ちょっと待てー！。なぜに過去形！？それじゃ、今はまるで可愛くない子みたいじゃないですか。なんて酷い。今までも十二分にいい子でしょう！？少なくとも街を歩けば10人中8人位は、振り向く容姿ですよ！

くっそ、成長した男の扱いなんて所詮そんなものなのねorz
世の中の無常を知ったよ。

「はい！むしろ、私が見捨てられない様にレイアさんの為に頑張ります」

「「「ありがとう」」」

両親が深々とティファニアに頭を上げた。

・・・完全に私を無視して話が進んでいる。

／（＾０＾）＼ナンテコツタイ。

- - 回想終了 - -

私が女性を家に連れてきた位で、狂喜乱舞して喜ばんでもよかろうにね。おまけに、メイドや執事達まで総動員して大歓迎会が開かれたのは、私もビックリだったよ。

「レイアよ。ウェストウッド村での賭けの勝敗を決しようじゃないか」

人のティータイムを邪魔にしにアミバがやってきた。それにしても、なんて勝負を思い出すんだ！！アミバめー、私に死ねと申すのか。だが、私も漢だ！一度、やると言った勝負から逃れるなど出来るはずもない。やるからには、どんな手段を使おうとも勝って見せる。

「ふふふ、わざわざ負ける勝負を挑んでくるとはな。受けて立とう！」

真つ当に勝負すれば惨敗する事は必須！ならば、やる事はイカサマ・・・これしかない。

「ああ、そうそう。水銀燈も参加するのだが、問題なからう？」

娘が一人加わるうが問題ない。

「当然だとも。こちらも一つ確認しておく、別に不正をしても構わんのだろう？」

どうせ、エルフのアミバがいる以上、嘘についても意味が無い。ならば、最初から不正をする宣言をして許可さえ取ればいいんだよ。

「堂々と不正宣言とは、恥ずかしくないの？お父様」

人間命が掛っていれば、多少の恥など気にせんのだよ。

「ははははは、面白い。勿論だとも、ばれなければ不正でも何でもない」

必ず生き残って見せるぞ！

数日後の投票会場にて。

この日の為に、領地に仮設の投票会場を複数用意した。全領民に対して可能な限り投票するようにと要請した事もあり、予想以上に人が集まってきた。

さあ！お前達よ。投票用紙に私の名前を書くのだ。

「はいはい、お父様。先ずは、身に付けたマジックアイテムすべて没収ね。どうせ、碌な事考えてないんでしょう？」

「ひ、酷い。そんなに、お父様が信じられないんですか!？」

娘にここまで疑われるとは心外な。お父様は、もう泣きそうです。

「信じられれば、苦勞はいらないわ。どうせ、【ブレイン】とか使
つて無理やり投票用紙に自分の名前を書かそうとかするんでしょう
?」

「さあ、後幾つ不正が残っているのかな? くっくっく」

不正その1が実行前に潰されてしまったよorz
くっ、当然のごとくばれていたか。だが、この程度 序の口よ。

投票開始してから数時間後。

別地区での投票が終わったらしく、その結果報告がこちらに回って
きた。

「おかしいわね」

ふ、何もおかしい事などありませんよ。当然の結果じゃ、ありませ
んか水銀燈。一般庶民は、私の事を高く評価してくれているのです
よ。

「どうした水銀燈?」

「いい処に来たわアミバ。実は、貴方が前に治療して回った地区の
投票結果だけど・・・お父様に投票された数がアミバを上回ってい
るのよ」

いやいや、私の人徳がなせるわざですよ。決して不正じゃないぜ。というか、どうして私が必ず負ける設定なんですか！？ちよつと、酷くない水銀燈。

「レイアの監視は？」

「無論、完璧だわ。マジックアイテムも全て取り上げたし、魔法を使った痕跡も無いわ」

ふふふふふ、アリバイは完璧なのだよ。

「ならば、答えは簡単だ。秘密は、投票用紙だ」

な、なぜだー！ー！！？？

数分後。

「なるほどね。こういう仕組みだったのね。えげつない事するわね」

ふ、不正その2がばれてしまった。

運次第では、ばれないかと思ったが、世の中はそんなに甘くは無かった。天才の名は伊達じゃ無かったよ。

「ああ、書かれた文字が時間が経過すると自動的に変わるようになっていた特殊な用紙だ。しかも、ばれない様に10枚中3枚が特殊用紙になっている」

ニヤニヤ

アミバよ・・・そんな楽しそうな目で私を見るんじゃない！きつとお前の頭の中ではラオウにフルボッコにされている私が映っているのであろう。

「勝てばいいのだ勝てば！勝負に綺麗事など無いのだよ」

「開き直ったわねお父様」

そつだとも！勝てば官軍なのだよ。

「開き直ったのはいいが、残念ながらあの地区のレイア票は、無効だ」

くっ、だがまだ最後の仕掛けが残っている！
まだ、諦めんぞ。

投票時間終了後。

現在票を開封中です。

ふふふ、最後までばれなかったぞ。一番人口が多いこの地区では、投票用紙だけではなく、投票箱にも細工をしているのだよ明智君。

二重底にしており、一般の人がなんて書こうが決して開封される事は無いのだよ。この日の為に私は、何日も徹夜して投票用紙に自分の名前を書いたのだよ（涙）

「ふふふ、結果はどうだったかい？アミバ、水銀燈？」

当然、私の勝利だろうが結果くらいは聞いてあげよう。

「おめでとうお父様。ラオウによろしくね」

「くっくっく、安心しろ。骨位は捨てやる」

・
・
・

Why!?

私の最後の砦がなぜ？まさか、ばれたのか？

いいや、そんなはずは無い。ばれたのならアミバが生き活きた顔で私をからかいに来るはずだ。

「あのレイアさん」

ティファニアが声を掛けてきた・・・だが、今はそんな状況ではないのだよ。

「すまないティファニア、今ちよっと・・・」

あれ？ティファニアが、何故か投票箱にピッタリとハマりそうな見覚えのある板を持っている。

・
・
・

「ティファニア、少し聞きたいのだけど・・・そのお茶の様な物体を乗せている板は、何処にあったのかな？」

「これですか？これは、あそこにある箱の底に敷いてあった物です。レイアさんのお手伝いがしたくて・・・先日、不良品が無いか頑張つてチェックしました。そうしたら、何個か底が二重になっている物があったので外しておきました。偉いですか？」

くっ、そんないい事したから褒めて褒めてとオーラを出さんでくれ！君の善意で私は、もう涙が一杯だよ。

「よくぞ、そこまで調べてくれた。レイアは、感謝のあまり涙があふれてくるよ」

「てへへ、そんなお役に立てて嬉しいです」

ちなみに、一位はアミバ。二位は水銀燈、三位は私であった。投票数を見たけれど、下手に不正をしなければアミバと拮抗する投票数であった。まさに、骨折り損の何とやらである。

こうして、私の『拳王軍』行きが決まってしまったorz

二位であった水銀燈には、醤油の湖は無理なので醤油風呂で我慢して貰いました。

後日、こっそりと水銀燈が浸かった醤油をエルフ向け商品で売ろうと思ったが、計画倒れしてしまった。実行に移す際に見つかって酷い目にあつたからね。醤油の精霊は、強かった。

だって、水の精霊のエキスが入った醤油ですぞ！食べて健康を保てる素晴らしい調味料じゃないか。

翌日。

再び、実家の人総出で送迎をして貰っているレイアです。

賭けに負けた私は、魔王・・・じゃなかったラオウの居城へ死に行くこととなった。実家に帰ってきて、またこれかよ！なぜか、産まれてから実家に居る時間より色んな処を飛び回っている時間の方が多いんじゃない？って気がしてきたぞ。

もう、子供がやる仕事量じゃないってこれ。

「ばっくれよかな・・・」

「駄目よお父様。お父様には、あっちに行ったついでに姉妹達の近状も聞いてきてほしいんだから」

まあ、そうだね。本当なら水銀燈も連れて行きたかったのだが・・・

「熱い処は、嫌いよ」と一言で断られてしまったorz

おろ？

アミバが何やら内緒話がある様で私を呼んでいる。はいはい、直ぐに行きますので待ってください。

「ティファニアの『虚無』について、『ネフテス』のテュリユークに伝えた結果を教えておく。この件に関して、レイアに全てがー任された。但し、生命だけは死守しろとのご達しだ」

また、大胆な決断を・・・エルフ一人を私に預けてくれると申すのか。そこまで、信頼されたのかな私って。おっし！その期待を裏切らんように精いっぱい頑張りましょう。

それに、安心してくれ。並の方法じゃ、殺してもしなないさ。

「了解した。いつも連絡役ばかりさせて悪いね」

「なーに、気にするな。後、忘れずに『仲間』^{チーム}にも寄って行けよ。この間、預けた『場違いな工芸品』の一件がまだ片づいてないからな」

確か、携帯電話の件ですよ。まさかとは、思いたいが・・・衛星でも作ったのかな。ありえないと否定できない辺りがエルフですよ。この短期間で近代地球並に技術力が・・・半端ないです。

「了解した。行きか帰りに寄らせてもらおう」

アミバとの会話を終えたので、両親と家の人達に出発の挨拶をしましょうか。

「父上母上、領地の方お願い致しますね。もうすぐ、アレが来るので決して準備は怠らないでくださいよ」

両親には、近い将来に神聖アルビオンがタルブ村に攻めてくる事を伝えてある。両親は何も聞かずに納得し、受け入れてくれた。万が一、うちにまで火の手が伸びないとも限らないので対策は出来うる限りうつしておくに限る。

その為に、アミバを領地に残しているのだからね。まあ実際は、水銀燈に依頼された新秘孔開発があるから忙しいとの事でもあったけどね。一体、何の秘孔を開発する気だ。

「行ってらっしゃいなのお父様。ヒナもがんばるの」

ああ、領地の防衛しつかりと頼むよ雛苺。

「レイアさん、レイアさん。早く出発しましょう。早く、お母様の故郷が見てみたいです」

私は、とつても見たくないです。だって、命が危険なんだもんorz
だけど、学院を休んで小旅行というのも悪くは無いか。人生短いんだし少しくらい楽しんでもいいよね。

「行こうかティファニア」

主人公は、死地へ赴く。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次回からは、少しエルフ集落を回ってから
ゾンビウェールズを退治したいと思います。

数話後には、ハルケギニアに戻ってきます。

主人公は、無理ゲーに挑む。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いてくれた読者の方々、本当にありがとうございます。
いつも、感想を励みにして頑張っております。

今回は、早速 死亡フラグ満載の『拳王軍』にお邪魔します@@@
小話では、蒼星石のお話を少し載せました。

主人公は、無理ゲーに挑む。

どこの集落からお邪魔しようか迷った末に、いきなり死亡フラグ満載の『拳王軍』にいるレイアです。

ラオウの居城前にて。

ここに来るまでの間に、色々考えました。どうやって、ラオウの額にどのようにして『肉』という文字を書くかをね。

結論から言おう・・・あるわけねーだろー！！

大体、私の頼みの綱であるA・T・フィールドを素手で突き破る程の変態だぞ。奥義に至っては、全力で展開したA・T・フィールドすら楽々と貫通するんだから恐ろし過ぎる。以前だって、何度も死にかけてたよ。というか、事前にテュリユークに貰った水の腕輪が無かったら、ヒーリングが間に合わず死んでいただろうな。

しかし、どれほど実力差があろうとも正々堂々と打ち破り・・・土下座して額に『肉』と書かせてもらおう。だって・・・不意打ちとかして、ラオウの機嫌を損ねたらそれこそマズイからね。最も、不意打ちとかリアルに不可能だろうね。ラオウが、私程度の隠密行動に気づけぬはずもないだろう。

「それにしてもレイアさん。エルフの集落って思ったよりエキゾチックな処なんですね。私の勝手なイメージかも知れませんが、もつと緑があふれていて自然と調和している処を想像していました」

『拳王軍』の集落は、頑強な石作りな街並みと世紀末な髪形をした人達がウヨウヨしているかそう見てるんですよ。でも、あのモヒカ人さん達はいい人だよ。修行という名のイジメをラオウから受けて際に、よく手当てしてもらったからさ。それに、モヒカ人さん達が独自で編み出した火の魔法とか半端なく凄いぜ。

よく、「汚物は消毒だ」とか言つて砂漠の砂を一瞬でガラスに変えてたからね。あれって、一瞬で数千度の熱を出さないと出来ないとか聞いた事あるからね。

「私も昔はそう思っていたよ。でも、現実って厳しいんだよティファニア。まあ、ティファニアが想像しているような集落もちゃんと存在しているから、取りあえず安心してよ」

『薔薇族』や『ネフテス』とかが、ティファニアの思っているエルフの集落のイメージだろうね。まあ、『薔薇族』に関しては 便所と 住んでいる住人が、イメージと一致しない可能性が高いけどね。

とりあえずは、統領であるラオウに挨拶をして一戦 闘ってからティファニアの母親について聞いてみるかな。

どうか、私が無事でありますように。

ラオウの前にて。

なぜか、主役級の方々が何故か勢ぞろいしているぞ。胃に穴があきそうな程のプレッシャーだ。

「えー、お久しぶりです。ご挨拶といくつかお願いがあっ
てきました。あ、これ新商品のサンプルです」

私は、持ってきた新商品のカップ麺醤油味を差し出した。やっぱり、
日持ちする保存食は大事だね。

「は、初めましてティファニア・ド・ヴェーグルです。よろしくお
願いします」

もう、ヴェーグルでいいです；；

どうしよう、だんだんと外堀から埋まってきた気がするぞ。
悪い気は、しないのだが釈然としない。

「そうかそうか、レイアにもいい人が見つかったのか」

「し、信じられん。まさか、北斗神拳を！その腐った根性叩き直し
てくれるわ」

「あら、可愛い子ね」

上からトキ、ケンシロウ、ユリアの声である。

ちよいとケンシロウ！さり気なく酷い事を言わなかった！？貴方の
中で私はどれだけ評価が低いんですか！？

「ふ、件の娘か・・・まあ良い。それで、願いとやらを聞こう」

やはり、ご存知でしたか。まあ、エルフ内部で知れ渡っているなら
ば話が早い。テュリユークさん、いい仕事してます。後は、ラオウ
の機嫌が良いうちに話を進めましょう。

「実は、彼女・・・ティファニアの亡き母であるシヤジャルと言っ方の情報を探しております。後・・・」この拳王の額に『肉』と書きに来たのであろう」・・・え！？（汗）」

・
・
・

まずい！これは、とてもまずいぞ。話す前からばれてるなんて、想定外だぞ。上手に話をして、一撃でもラオウに攻撃が与えられたらお願いと称して額に『肉』と書いたハンコを押させてもらおうと思ったのになんてこった。

絶対にばらしたのアミバだろ！覚えていろよ。

「さあ、ティファニアちゃん。すこし、あっちでお姉さんとお話しましうね」

危機を感じてか、ユリアがティファニアを連れてさっさと退場して行った。待ってくれ！私も連れてってくれ！！

「久しく会わないうちに、この拳王の恐怖を忘れたようだな。相手をしてやるっ」

ガクガクガク

いやだー、実家に帰る。

『拳王軍』郊外にて。

ラオウに無理やり連れられて、郊外まで来たレイアです。早速ですが、死にそうです。

ドドドドドドドド

ラオウが肉眼でとらえきれない程の速度で殴りかかってきている。重い……一撃辺りが重すぎる。A・T・フィールドでダメージを受け流すよう展開しているが圧倒的破壊力の前にどんどん壊されていく……

パリーーンパリーーン

「ははははは、どうした！？その程度か」

その程度かって……ラオウ相手に生き残っている時点で評価して下さいよ。だが、今回は起死回生の秘密兵器があるんですよ。

ラオウでも『拳王軍』のはるか後方から放たれる荷電粒子砲は避けきれまい！しかし、ラオウはチートだ……それでも回避する可能性も十分にある。だから、私が身を呈して囮になろう。

ははは！今日こそ下克上だ！！

「ゼルエルの性能を舐めないでも欲しい！うおおおりゃー」

ドドドドドドドド

「あまいわ」

地中よりラオウを串刺しにするつもりで攻撃した。音速を超える伸縮速度にも関わらず全て回避された。なんてチート・・・死角からの攻撃すら通じないと申すのか。

だが、まだだ！

ギュルンギュルンドローーーン

両腕を円筒状の筒に変形させて回避したラオウに向けて発射した。

「ふん！！」

ガリガリガリガリガリ

ラオウは、避けもせず私の全力の攻撃を両手で受け止めた。流石に威力があったのか、ラオウを後方へ押し出す事ができた。しかし、無傷・・・なんかバグってるんじゃないか。エヴァの映画じゃ二号機を大破させた攻撃だぞ。

「もう、終わりか」

まだだ・・・ラミエルが全力で攻撃を出来るようになるまで私が時間を稼ぐのだ。勝機は、それしかない！

「今のは、結構自信があったのですが。そんな余裕そうにされるとショックです・・・どりゃーーーーー」

キュイーーン

ラオウの頭上に複数枚のA・T・フィールドを展開した。さあ、こ

れも防いでください。その時が勝機！

「ふんーーーー！！」

ドoooooooooooo

ラオウをA・T・フィールドで押し潰そうと攻撃をした。辺り一面が衝撃で吹き飛んだにも関わらず、ラオウの周りだけは何事もなかったようだ。しかも、今の攻撃を左手を天にかざしただけで防ぎきるとは……いつたい、どういつか体してるんだよ。

「ははははは、実に面白い。以前と比べて威力が上がったではないか。どうした？もう終わりか？もっと、この拳王を楽しませてみる」

ヤバイ……ラオウが無茶苦茶楽しそうに笑っている。

こ、こえええええええ

「では、お言葉に甘えて……上に注意してください。恐らく、ラオウでも痛いと思いますよ」

「面白い！」

ラオウが顔を上に向けて私の攻撃に備えた。どこかでも来てみるっていうのか！使い魔とのチームプレイを見せましょう。

「威力を一点に集中する……放て！！」

ラミエルより荷電粒子砲が発射された。

ドーーーーー

その瞬間、ラオウの横にある建物が瞬時に融解し、荷電粒子砲がラオウを襲った。ははは！一点に威力集中したゼルエルの荷電粒子砲だ！なんせ、山を2・3個挟んでも目標を潰せるほどの威力だ。あたれば、痛いじゃすまないぜ。

「この拳王を謀ろうなど笑止！一指真空把にじしんくうは」

ラオウの声を聞いた瞬間、ラオウに直撃したはずの荷電粒子砲の軌道が逸れて私を直撃した。当然、私は回避する暇も無く全身でラムエルの砲撃を受ける事になった。

そんな馬鹿な・・・物理法則すら捻じ曲げると言っのかorz

「ビームまで曲げるなんて・・・そんなの勝ってこないじゃん。グハッ」

ああ・・・やっぱり、失敗したな。今思えば、エルフ相手に嘘ついても意味なかったじゃん。早く、ティファニアの指輪で回復を・・・

そこで意識は途絶えてしまった。

翌日。

気がつけば、ベッドの中であった。

「知らない天井だ」

うむ！このセリフは言わないと駄目だよ。転生オリ主として@
はあ最近、人間ばかり相手にしていたから奢っていた。本当に、すみませんエルフの方々。やっぱり、あんた等チートだわ。

「それにしても、酷い目にあつた」

集落に寄る度こんなフルボッコにされていたら、命が幾らあっても足りんわ！アミバとの約束は、死ぬ気で頑張ったけど無理だったという事で勘弁してもらおう。

さて、体の方も治つた事だしラオウに挨拶をしてから次の集落に行こうかな。

ボタン

ドアを開けてティファニアが入ってきた。

「おはようございますレイアさん。もう、良くなつたんですね」

「ああ、なんとかね。でも、流石に昨日は死ぬかと思つた」

流石のティファニアもから笑っている。まあ、あの戦いを見れば誰でもそう思うだろうね・・・昨日ラオウと戦つたあたりが平野になつちやつたよ。

「それじゃあ、ここでの用事も済ましたし次の集落へいきますか」

「もう、次の場所に行つちやうんですか？折角、私と同じ方々に会えたのに・・・」

いや、ティファニアそれは間違っているよ。私は、決して君と『拳王軍』のエルフを同じと思った事はないよ！だって『拳王軍』のエルフは、見た目的にも性能的にも君とは違う種族な気がしてならないよ。特に男性に限ってはね！

「また、すぐ別のエルフに会えるさ。それに母親の情報を聞くにも色々回った方がいいと思うよ」

母親の情報なんて唯の名目だ！私は、早い処ここを脱出しなければ、またラオウからフルボッコにされかねないのだよ。ようは・・・死にたくないでござる！

「わかりました」

おっし！話は決まった。

再びラオウの前にて。

お世話？になつた皆に挨拶しているレイアです。

「本当に人間離れた回復力だね。あれほど酷い怪我が一夜で治るとはね。今度、僕の人体・・・診察を受けてみないかい？じっくりと」

今、人体とか言っただけで言い換えなかったかトキ。それにしても黒い・・・まるでアミバのようだ。いや、もしかして本当にアミバかもしれないと思ってしまう位だ・・・

「自滅とは下らん。興が覚めたわ」

言い返す言葉もありません。でも、もう少しいたわってください。これでも死ぬ気で頑張ったんですよ。

「大怪我した人に酷い；；まあ、治ったから別にいいけど。でも、もうすこし手加減をして欲しかったです」

「ここも居心地が悪いわけじゃないけど、でも命にかかわるのでそろそろお暇しますかな。」

「ラオウ相手に手加減など、無理な相談だ。諦める レイア」

「ははは、そうですね ケンシロウ。」

「寂しいわね、もう行っちゃうのね。お母さんの情報見つかるといわねティファニアちゃん」

「はい！レイアさんと他の集落を回って、色々聞いてみます。後、ユリアさん・・・色々アドバイスありがとうございます。頑張ります」

女性の会話ですね。男の入り込む余地は無しと。私は、その間のラオウ達に挨拶を済ませておくかな。

「来たばかりなのに本当にすみません。私の命の炎が消える前に、次の集落へ行ってティファニアの母親の情報と私用を片付けたいと思います。また、落ち着いたら遊びに来ますね」

「死にたくなければ、次来る時まで腕を磨いておけ」

死にたくありません！だから、次来る時は スクエアになってからね。今の A・T・フィールドの枚数じゃ勝ち目ないので。

「努力します。それじゃあ、そろそろ出発します」

私は、ティファニアを呼びよせてゼルエルに乗せた。やはり、移動はゼルエルに限る。

「レイアよ。拳王を楽しませた褒美だ受け取れ」

拳王が私に褒美だと！！一体、どういう事だ。天変地異の前触れか、それともハルケギニア最後に日か！？

拳王から手渡された物を見てみると一本のナイフだった。刃渡りが短いから果物ナイフといったところだろうか。それにしても・・・とても禍々しいです。一体どんな効果があるのだろう。

「この間、月の石を持ってきてくれたお礼だよ。相手の魔法を吸収する特性があるから、人間相手には便利な物だよ」

マジですかトキ！？要するにデルフと同じ物だと言う事か。しかもアレと違って、喋らないから武器として完璧じゃないか。おまけに切れ味も良さそうだし料理や色々な物をバラすのにも使えるね。

「大事にするよ、ありがとう。それは、またねー」

「また、遊びに来ますね」

別れの挨拶をして、ティファニアと一緒に次の集落へと移動した。

side 蒼星石

「何度言ったら分かりやるですう！」

ドカドカドカ

また、朝っぱらから翠星石が暴れている。毎日毎日、飽きずによくやるな。

「何度言われようと漢にはやらねばならん時もあるのだよ」

はあ、仕方ない僕がまた入らないと駄目か。

いい加減諦めてよ翠星石。

「何をそんなに怒っているんだい？翠星石」

「蒼星石も言ってるですの！朝っぱらから裸エプロンで料理をしている、この変態達に服を着ると！まったく、視覚的にも生理的にもうんざりですう」

ああ、その事か・・・

「僕は、もう諦めたよ」

過去に何度言っても改善されないから既に諦めた。それに、そんなに裸エプロンが見るのが嫌ならマスター達より早起きして朝ごはんを作ればいいじゃないか。

もつとも、私達の料理の腕は 壊滅的だけどね。

「なに、諦めているんです。この間、やる夫の店で会ったエルフの人が『諦めたら、そこで試合は終了だよ』と言ってたです。」

その人がどんな人かは知らないけど、きっとマスター達を見たら諦めると思うよ。

「君達の分の食事も用意しているのに、酷い言われようだぜ。そんなに責められると、やりたくなっちゃうじゃないか」

相変わらず翠星石で遊んでいるね。まあ、僕に被害が来なければそれでいいや。

「そうそう、言うのを忘れていたが・・・レイアが近々遊びに来るそうだよ」

へえー、お父様がここに来るなんて珍しいね。破天荒な性格だから、無茶してなかったらいいけど。

「なんですと！私達をこの変態に預けた報いをつけさせてやるですの。早速、迎撃の準備に入ります。蒼星石も急ぐです。」

主人公は、無理ゲーに挑む。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

北斗の技紹介

名前：二指真空把

効果：敵から放たれた矢を驚異的な俊敏力と動体視力により二指間で受け止め、放った相手に正確に投げ返すという、カウンター攻撃の如き非常に特殊な技。

今回は、『薔薇族』へお邪魔しようと思います

こんな駄作ですが、最後まで頑張ります。

主人公は、願いを叶えてもらったのか・・・？（前書き）

いつも、読んでいただき本当にありがとうございます。

誤字脱字が多いのか、読んでいただけている事が本当に嬉しいです。作者も治そうと思い、頑張っているのですが成果が芳しくないorz

長い目でみてやってください。

そして、感想ありがとうございます！！

これからも頑張ります。

作者の中で、本当にどうしようか迷った結果・・・やっぱりかと思
われるか思われるかも知れませんが・・・これ以上は、本文の中で
@@@

主人公は、願い事を叶えてもらったのか……？

肉体的な死亡フラグ満載な『拳王軍』を脱したのにも関わらず、精神的な死亡フラグが満載な『薔薇族』へ向かっているレイアです。

くっそ……神の声（感想）でもあったが、『薔薇族』にティファニアの母親の情報とか有るはずもない気がするぞ。だって、『薔薇族』は基本 男しか居ねーぞ。極稀に、他の集落から寄り道する変わり者というか……頭のねじが外れた女性エルフもいるけどさ。何度か喫茶店であつたしね。

まあ、娘達の近状が知りたいからいいけどね。以前会ったきりだけど、元気になっているかな。アーベやミチシタと一緒にだから、気苦労しているだろうな。

「レイアさん。次に行く集落には、確かレイアさんのお子さんが、いらっしやるんですけどつけ？名前は……翠星石ちゃん と 蒼星石ちゃん でしたっけ？」

「その通りだよ。『薔薇族』に居る子は、双子の姉妹だね。一人は、見た目とは裏腹に 人見知りの激しい子で、もう一人は男装の僕ツ子だよ。仲良くしてあげてね」

自分で言っていてなんだが……何気に酷い紹介をした気がするな。間違った事は言っていないが、随分と局所的な特徴のみを言った気がする。

「はい、楽しみです。レイアさんの娘という事は、私にとっても……

「

「娘だよ」

自分で言っていておくさい・・・とつてもくさい。女性との会話テクニクとかないから、今の私にはこれが限界だ。

「お！見えてきた。あそこが目的の『薔薇族』だ。あそこには、魑魅魍魎ホモの類が出るから注意してくれよ。（男性が）一人で歩いていると、身の危険があるから 絶対に私から離れないでくれ」

「はい、レイアさん」

私の身の安全は、君に掛っている！しっかりと守ってくれ。先ずは、アーベに挨拶を・・・と思ったけど先に腹ごしらえと行こうか。

『薔薇族』のヴェーグル家直営店にて。

いやー、本当に懐かしいお店だ。ここで働いていた時は、毎日が楽しくもあつたし 苦痛でもあつたな。さて、うちの従業員はしっかりと仕事をしているかな。

私が一人感傷に浸っていると、ティファニアが一人で先に入ってしまった。貴方の大好きな御飯が優先ですね、分かります。

カラン

「いらっしやいだ・・・お」

お、この声はやる夫か。しっかりと働いているな。

「あの、どうかなさいました？」

「やらない夫！ついに、『薔薇族』にも女神がきたお。金に釣られてこんな、魑魅魍魎ホモの巢に送られたやる夫達が報われる日がきただお」

やる夫の声を聞きつけて、奥からやらない夫が走ってやってきた。

「あ・・・ありがたすぎる。常識的に考えて（涙） ささ、美しいお嬢さん中へどうぞどうぞ」

掛けてやる言葉も無い・・・お前から以外に適正がありそうな人材が居なかったんだよ。給与の中には、（性的な）危険手当も付いているから諦めてくれ・・・それが世の中という物だよ。

というか、お前等・・・完全に私の存在を無視しているだろう。そうだよな、ティファニアの後ろの居るのに気づかないはずだよな。いい度胸じゃねーか。

「君達・・・あえて無視しているのかな？そうだよな・・・ワザとだよね・・・今なら謝れば許してあげるよ」

ボキボキ

「なんだお？お前、誰だお？リア充がなんでこんな居るんだお」

「なんだい？俺等とやろうと言っんかい？俺等は人間だが、ここー

年『薔薇族』で鍛え上げた体は 伊達じゃないだろ 常識的に考えて」

バツ!

やらない夫が、服を脱ぎして筋肉を披露した。

ははは・・・H A H A H A H A H A H A H A H A H A!

それでこそ、やる夫! やらない夫! 気にいったぞ。後、暑苦しくなるから脱ぐな!

つか、こいつら本当に私の事忘れているのか?

「ほう、余の顔を見忘れたか」

・
・
・

なに、この微妙に長い沈黙。

「誰だお。やらない夫、知ってるだお?」

「うーん、何処かで会ったことある気はするんだが・・・男の顔なんて覚えてないだろ 常識的に考えて。そんな事より、お美しいお嬢さん、是非お名前を聞かせてもらえませんか?」

おiiiiiiii! お前等の雇い主で且つ領主の息子だろう。お前等の中で、どれだけ私の存在感薄いんだよ。確かに、ここの連中と比べれば 月とすっぽんだけどさ。ちょっと、あんまりじゃない?

「ティファニア・ド・ヴェーグルです。よろしく申し上げます」

ティファニアが、にこやかに二人に挨拶をした。

「奇遇だお。やる夫達は、そのヴェーグル領から出張でここに来てるんだお……おろ？」

「ファミリネームがヴェーグルとは、凄い偶然ですなあああ……
(汗)」

ほほう、二人とも随分と熱い視線をくれるじゃないか。良かろう、気づいた事に免じて1/4殺して許してあげよう。

「言いたい事は？」

遺言くらい聞いてあげるよ。それとも、お墓に刻む文字をご所望かい？

「リア充死ね（お久しぶりです、レイア様。やる夫は、いつも貴方様をお待ちしております）」

「そうだ、リア……じゃなかった。お久しぶりだろ」

ふふふふ、是非とも『薔薇族』で鍛え上げられた肉体を披露して貰おうじゃないか。

「二人とも久しぶりだね。少し、私とOHANASHIしようか。
ティファニア、先にお店で待っていてくれ」

さあ、たつぷりとお話ししようじゃないか。なーに、領民には寛大だ。ティファニアが店に入っていくのを確認して、二人を店の裏へ案内した。

「ぎゃーーーーーー」

「お、お助けーーーーー」

やる夫達の白饅頭みたいな顔が倍くらいに膨れ上がったのは言うまでもなかった。

数十分後、アーベ宅前にて。

ふう、やる夫達の料理もなかなか美味かった。

「さて、美味しいご飯も食べたし次の集落へ行こうかティファニア」
「何を言っているんですかレイアさん。折角、娘がお世話になっているお家に来たのに挨拶もなしで帰るなんて駄目です」

駄目ですと言われても、私はとつても帰りたいです。女性ティファニアは感じないだろうが、男性である私には、今も尻けつが引き締まる程の恐怖をビンビンに感じております。

はあ・・・、そんな目で見られると断れないじゃないか。

「分かった分かった。とりあえず、危険が無いか先に確認するから少し離れていてね」

なんせ、奴等は年中発情期だ。いつなるとき、ハツテンしているか分からん。あんなものティファニアに見せるわけにはいかんからね。さて・・・地獄への第一歩を踏み出すか。前へ踏み出した途端、足が地面に飲みこまれた。

「あああああべし」

ズドン

イタタタタ

だ、だれだ！こんな統領の家の前に落とし穴なんて掘ったやつは！深さが無駄に5m位あるぞ。

「おほほほほほ、見事に掛りやがったですう。アーベからお父様が来るのを聞いて迎撃用に掘ったんですう」

なかなか、やるではないか娘よ。それにしても、なぜ落ちた先が無駄に広い空間になっている。どんだけ手の込んだ落とし穴なんだよ。

「それで、なんで私を迎撃するんだい？」

心配してきてあげたのに、酷いな。

「翠星石 と 蒼星石のマスターが誰なのかをよく考えてから、心に聞いてみるですう」

そんなの知らないはずがないじゃないか、私が アーベ と ミチシタ にマスターなってもらいようをお願いしたんだ。一体、何が不

満というのだ！ホモである事以外完璧な人材ではないか！だから、娘たちを安心して預けられるんだよ。

「うむ！サツパリわからん」

「むきー！ー！！ 分からないとは、いい度胸ですう。お父様に反省の色が見えない以上、仕方ないですう。本当ならこんな事はしたくないのですが・・・アーベ！ ミチシタ！ ヤっちゃっていいですう」

・
・
・

え！ちょっと待って！今なんて言った。まさかとは思つが、この落とし穴・・・（汗）

「僕は、止めたんだけど・・・ごめんなさいお父様」

落とし穴の入り口から蒼星石が私は、無関係だからと言っている。止めるなら最後まで止めろ！！って、そんな事はどうでもいいから助けてー！ー。

「ユラリユラリ揺れている オートコ心 ピーンチ」

穴から這い上がろうとした瞬間、背後から耳を塞ぎなくなるようなメロディーが聞こえてきた。

「で、でだー！ー！ー！ー！ー」

全裸で【刺し穿つ尻の槍】ゲイ・ホルクを構えながら近づいてくるHE・N・T
A・Iがいた。おまけに、その後ろにはミチシタまでいる。しかも、
ミチシタの手には【刺し穿つ尻の槍】ゲイ・ホルクが何本もある。おい！それ伝
説の武器とちゃうんかい。

く(””0””)くなんてこつた！！

「でたとは、酷いな。出すのは、これからじゃないかレイア　じゅ
るり」

「ごめんねアーベが、どうしてもというから　はあはあ」

だめだ・・・一人じゃやられる！今こそ、ティファニア君の助けが
欲しい！この際、QBと契約してもいいから私を助けてくれ！

「ティファニアHELP　ME！！」

・
・
・

シーン

「大丈夫。痛いのは最初だけだ・・・じゅるり」

「そうだよ、アーベは　その道のプロフェッショナルだから何も問
題ないよ　はあはあ」

問題大ありだろ！なんだよ、その道つてどの道だよ！いやだー、
やっぱりこんな集落寄ったのが間違いだっただ。てか、あの眼は

マジだよ！本気と書いてマジと読む位にマジだ。

「レ、レイアさん」

その時、私の声が届いたのか落とし穴の入り口からティファニアの顔が見えた。おお！今でこそわかる君こそ私の女神だ。さあ、早くここから助け出してくれ。

「なんでも願いを一つだけ叶えてあげる。だから、私とけっ・・・結婚してくれますか？」

それなんて、きゅううううううべええええええええええだあああああ！！

「そろそろ、頂こうじゃないか」

アーベが投擲の構えに入った。もはや、悩む余地などない！しかも、ミチシタまで構え始めた。お前も使えるんかい！

「分かった！結婚しようでも何でもする！だから、助けてー！ー！」

わが身が守れるならば結婚の一つや二つ軽い物だ。

「はい！」

ティファニアが元気よく、そして涙ぐみながら返事をした。何故に涙が・・・

パチパチパチパチ
パチパチパチパチ

ティファニアへ返答するとアーベとミチシタから拍手が送られた。

え！

「おめでとうレイア」

「おめでとう」

「感謝するですう。事前に、おじいとお姉様から連絡が無かったら本気で襲わせていたですう」

「お父様も水くさい。もっと早くに教えてくれても良かったのに」

上からアーベ、ミチシタ、翠星石、蒼星石。

お前ら全員グルだったのか！というか、実家の両親まで一枚絡んでいたとは予想外だ。どおりで、学院を休んで旅行に行く事に難色を示さなかったはずだ。最初から全て計算されていたと言う事か。

お前等覚えているよ！！

ひと段落して、アーベ宅にて。

ティファニアは、娘達に連れられて母親の情報を聞き込み中である。そして私は、アーベに挨拶中だ。

「よかったじゃないか、綺麗な嫁さんが貰えて願ったり叶ったりだろ」

まあ、今となつては否定しないよアーベ。

「とりあえず、感謝すると言っておく。それで・・・実際の処は、『虚無』の使い手であり エルフでもあるティファニア と 人間ながら異質である私を一か所に纏めておこうという作戦かい？」

正直、あんたら相手に反乱とか起こす気にもならんよ。もし、厄介事になりそうな連中を 一か所に纏めるという事なら意味が無いね エルフの実力者なら、私程度が反乱した処で秒で鎮圧さえるからね。

「そんなワケないだろう。確か、レイアの旅の目的って嫁探しだっただろう？ テュリヨーク殿が気を利かせたんだよ」

た、確かにテュリヨークにそんな事をお願いした事もありました。だけど、このタイミングでそれをやるか普通。

「それに、お前が奥手だと聞いてな。翠星石と蒼星石の鬱憤晴らしも込みで芝居をつつたのさ。名付けて、恋のキューピット大作戦だ」

アーベの何処がキューピットなんだよ！ 愛というより変のキューピットだろ。本物の愛のキューピットに謝れ！

「はあ、疑つてすまない・・・ありがとう」

「気にするな。私とレイアとの仲じゃないか・・・話も纏まった処で大宴会と行こうじゃないか。勿論主賓は、君達だ」

はあ...まさか、この年で身を固める事になるとはorz

その日は、『薔薇族』で盛大な宴会が行われた。

翌日。

楽しかった？ 『薔薇族』も今日でお別れです。ああ・・・飲み過ぎで頭痛いです。ヒーリングで治癒しつつ、動いております。まさに、魔力の無駄遣い。

別れる前にアーベに聞いておきたい事があったんだ。

「アーベ・・・少し疑問に思ったんだけどさ。一応人間である私が、エルフを娶るのって普通ならもの凄く反発されると思うんだけど、そこらへんどうなの？」

「ああ、そんな事か。レイアがエルフにとって有益な貿易を行い、『虚無』の監視や『虚無』の情報提供など様々な面で成果を上げたではないか。お前さんは、エルフの中でもそれなりに認められた人物なのだよ」

ま、まじですかアーベ！私って、そんなに高評価頂いていたんですね。ちよっと恥ずかしいぜ。これも、あの時砂漠であんたに出会えたおかげだよ。

「それもあるけど、一番は『薔薇族』の副統領である事だね。そのおかげで、みんな物凄く物わかりが良くなったからね」

・
・
・

ミチシタが何か変な事を言ってた気がする。

ほじほじ

どつやら、耳にゴミが詰まっているようだ。

「あの……いくつか質問があるんですが」

「なんだ言ってみるといいレイア」

アーベが返事をしてくれた。

きつと、私の聞き間違いだね。

「副統領ってなんぞ？」

「よくぞ聞いてくれた。これは、レイアの為に特別に一部のエルフの署名によって実現した唯一の物だ」

へ、へえ……一部のエルフね。しかも、オンリーワンの職ね。

ピクピク

「ほ、ほう……それで、一部のエルフとは誰のことかな？」

「そんなの決まっているだろ。ビダーシャルを筆頭にアーベ、ミチシタ、『薔薇族』一同、ラオウ、トキ、ケンシロウ、ユリア、アミバ、『拳王軍』一同、トウコ、コクトウ、ネフテスの喫茶店常連一同、ローゼンメイデン一同……そして最後にテュリユーク殿下！もちろん、ご両親の許可ももらっているぞ」

す、すげー面子。というか豪華すぎるだろうこれ。って！エルフでもない娘達と両親もいるんかよ。そして、さり気なくアミバまで署名してやがる。

しかも筆頭は、ビダーシャルだと！後で会いに行くから待っているよ（怒、・・・）ムキッ

「ははあ・・・はははH A H A H A H A H A H A H A H A！」

知らぬ間に『薔薇族』の重要なポジションについてしまった。もう笑うしかない。

「何かいい事でもあったんですかレイアさん。とっても楽しそうです」

もう、こんな集落くるもんか（、）　グスン

ご都合主義で『仲間^{チーム}』の荷物を持って宇宙^{そふ}に来たレイアです。

全く、何処の世界に僅か数週間で人工衛星を完成させる種族がいるんだ。まあ、実際居たけどさ。

しかも、衛星軌道上と月の二か所に配置したいらしく、二機も用意してやがった。

「一機目は、配置完了。さて、月へ向かうかな」

プルプルプル

おろ、一機目を配置した途端に『仲間^{チーム}』より渡された携帯電話が鳴った。それにしても、衛星通信対応の携帯電話か……半端ねー！

「はいはい、こちらレイア」

「僕様ちゃんだよ。ちゃんと配置出来たようだね偉い偉い。じゃあ、残りも任せたから」

ブチ

あ・切れた。とてつもなく一方的な電話だ。なんて自己中！まあ、我慢我慢。これで便利な世の中になるんだ我慢我慢。

さて、もう一頑張りするか。

次の設置位置は……懐かしの別荘でいいよね？

月の別荘前にて。

「別荘よ！私は帰ってきた」

シーーン

そうですね。誰も居ませんよね。

ブルブルル

「はい、どちら様？」

「おはようございますレイアさん。今日も朝ごはんが、美味しいです」

そりゃ良かった。でも、朝ごはん美味しいとか言わないでくれ。こっちは、保存食オンリーなんですよ。宇宙って食べ物本当に無いんですよ。だから、食事の自慢とか止めてくれ。

そんなアホな会話としつつ着々と衛星を配置した。いや、月の表面に置くのだから これは、衛星というより・・・あれだ。基地局とでもいうべきか。まあ、どうでもいいか。

さあ、終わった終わった。星に帰還するぞ！そして、ゾンビ狩りの前にビダーシャルへ挨拶に行かねばね。

あれ・・・？

(。。)

(つ) コシコシ

(;。)

(つ) コシコシ

(;。)

いつもの様に働き過ぎで、目が疲れたのかな。別荘の横に日本の出雲大社ような建造物がある。何故ここに！というか誰が建てたん？

回答1

人間

回答2

エルフ

回答3

神

私の中では、3と答えたい。駄目なら1でもいい。だが、2の予感がしてたまらない。それもそうだよな、衛星軌道上や月に基地局を置く時点で、誰かが管理しないとイケない。私に管理するように頼まない以上、誰かがこれを管理すると言う事だ。

エルフって未踏の地とか無いんじゃないかね。もうマジで。

一応、挨拶した方がいいよね。お近づきのしるしにカップ麺でもプレゼントしよう。

社の扉前にて。

さあ、行くぞレイア。例えどんなエルフが出てきても驚くんじゃないぞ。この環境から考えるにフリー 様みたいなエルフが来ても驚かないよ。

ガラガラガラ

「この度、御隣に住まわさせていただいておりますレイア・ド・ラシ

エール・フォン・ヴェーグルです。よろしく願いします。これはお近づきのしるしです」

深く頭を下げた挨拶をした。

おろ．．．人の気配はするけれど、返事が返ってこない。顔をあげてみると、金髪の綺麗な女性が半裸で固まっていた。

眼福だね

「キャーーーーー」

時間差攻撃ですね。分かります。

「どうしたのヒメコ！」

女性の叫び声を聞いて、社の奥から巫女服を着た黒髪の女性が現れた。しかも、手には切れ味のよさそうな日本刀を持っている。

これって、もしかしなくても私痴漢！？というか変質者になっちゃうの？

「み、見られちゃったチカネちゃん以外の人に肌を見られちゃったクズン」

ゴオオオオオオオオ！！

あ．．．不味いなこれ。謝れば許してくれるよね。そうだよ、誠意を込めて土下座すればきつと分かってもらえるよね！

ズサーーーー

「事故です！本当に事故なんです。ただ、隣にいきなり家が出ていたのでご挨拶に伺っただけなのです。覗く気なんてなかったんです。申し訳ありません」

どうだ、この美しい土下座。これぞ、日本人の奥義ジャンピング土下座！

「言いたい事はそれだけ？ヒメコを泣かす人は、誰だろうと許さない！」

あははははは、逃げようかな。

後日、『仲間^{チム}』で彼女達の事を聞いてみると・・・新興集落の『神無月』という女性二人っきりの集落らしい。百合百合ですな分かります。

主人公は、願い事を叶えてもらったのか・・・？（後書き）

新集落の紹介

集落名：『神無月』

原作名：神無月の巫女

備考：作者が百合百合の集落を出したかったから登場させた@@
百合はいいよ。すくなくとも薔薇よりかは

新キャラ

名前：チカネ

所属：『神無月』

備考：？月の巫女であり、宇宙空間でも生活可能。

？日本神話に出てくる神々を召喚、使役することができる。
？ヒメコLove

名前：ヒメコ

所属：『神無月』

備考：？太陽の巫女であり、宇宙空間でも生活可能。

？日本神話に出てくる神々を召喚、使役することができる。
？チカネLove

ティファニアのファンの方本当に申し訳ありません。原作通り行かずに奪っちゃいました。迷った末の結果という事で許してください。

今回は、ビダーシャルにお礼参りに行きます！

主人公は、拳で友情を語る。（前書き）

いつも読んでいただき本当にありがとうございます。

読者の方から頂いた感想を励みにがんばります。

今週は、久しぶりのマブダチの登場です。

主人公は、拳で友情を語る。

エルフの皆様から寛大な歓迎を受けて、溢れんばかりの涙でいっぱいのレイアです。

おまけに『ネフテス』では、私の『薔薇族』副統領の授賞式があった。集まってくれた人からは、「そっちの趣味だったと…若いのに」「見た目通り薔薇だったか」「アーベと同じベッドで寝たことがあるとか」もの凄く、ありがたい言葉を貰ったよ。

これで、私がHE・N・TA・Iと言う事がエルフ中で知れ渡ってしまった。おかげで、今後エルフの可愛い子との出会いは絶望的だ。エルフの中で私を慕ってくれる女性は、ティファニアしか残ってないという状況だ。いや、ここは一人でも捕まえられた事を素直に喜ぶべきなのだろう。

ティファニアの件は、素直に感謝をしよう。だがね…『薔薇族』の一件は、さすがの私も許さんぞ！どうせ、推薦するなら『ネフテス』の老評議員とかにしろよ。今すぐ、お礼参りに行くから待っている
ビダーシャル！！

数日後、ガリアの王都にて。

やっとだ！やっと、この時が来た。エルフの集落を回り、授賞式を終えついにやってきた。ティファニアの母親の情報集めは、テュリユークにお願いした。おそらく、エルフの能力をかんがみて数日中に連絡がくるだろう。

「大きな都市ですねレイアさん。ここにレイアさんのお友達のビダ―シャルさんと真紅ちゃんがいらっしゃるんですけどっけ？」

その通りだよ。友達を魑魅魍魎ホトに売る悪魔のような大親友がいるんですよ。そして、君が会っていない最後の娘がね。

「そうだよ。私は、旧友が見つかり次第、親睦を深めてくるから娘と一緒に安全なところに避難してくれよ。少しばかり、手荒くなりそうだからね。とりあえずは、一緒に街を回ろうか」

私は、ティファニアに手を差し出した。この間のように下手な貴族に絡まれたら厄介だかね。

「はい！」

この町の何処にしようとも必ず見つけ出してやるぞ！

数十分後。

見つかりません…全くもって見つかりません。街中を歩いて、雑貨屋に始まり洋服屋、武器屋といろいろ聞き込みをしたが成果は、ゼロだ。

そして今、魔法屋で聞き込み中だ。

「すまない。この町に金髪で長髪のイケメン男性で常に赤い服を身に着けたゴスロリ幼女を連れまわしている変態が居ると聞いたのだが何か知らないかい？」

二人の容姿から考えるに、人目につかないはずは無いのだが…なぜ
こうも情報が出てこない。

「お前さん、相手に何か恨みでもあるのかい？話を聞く限り、大層
な変態だろうが…生憎と俺は見たことないね」

くっそ…ここもダメか。魔法屋ならビダーシャルが来る事もあると
思ったのだがね。まあ、仕方ない次へ行くか。

「見つかりませんね。とりあえず、お昼にしませんか？お腹が減っ
てはなんとやらというではありませんか」

うむ、確かにもう聞き込みを始めて大分時間がたったね。お腹も減
ったし良い事言いますね。

「何で食べたいかい？ティファニアの好きなものでいいよ」

「本当ですか！ でしたら、先ほど表通りにいい匂いのするお店が
あったので、そこに行きたいです。なんでも、東方のコーヒーとい
う飲み物を出すそうです」

ほほう、コーヒーとは久しぶりだな。それにしても、君はいつの間
にお店で出すメニューまで調査したのだね。

某喫茶店にて。

ふむ、賑わっているね。やはり、東方の飲み物というのは珍しいの
だね。私たちは、タイミングが良かったのか ティファニアと席に

着く事ができた。

さて、何を注文するかな。とりあえず、無難にランチセットかな。ティファニアの方は、様子からしてすでに注文は決まっているようだね。はいはい、今すぐ 店員を呼ぶから待ってくれ。

私が店員を呼ぼうとすると、一人こちらへとやって来た。

「すまないが、ランチセットとコーヒーを」

「私も同じものを」

店員は注文を聞くと、にこやかにお辞儀をして去って行った。なかなか、できた対応じゃないか。

「そういえば、レイアさん。真紅ちゃんってどんな子ですか？」

おろ？まだ、言ってなかったけ？

「そうだね…一言でいえば、金髪ロリ幼女。というのは、半分冗談です。まあ、いつも落ち着いていて読書が大好きなごく普通の子だよ。まあ、いろいろと素直じゃない所もあるけどね」

ビダーシャルと仲良く、やってくれてればいいんだがね。

「うーうー、レイアさんの例えは いつもわかりにくいです。でも、絶対仲良くなります。私の娘ですから」

ははははは、その意気込みでお願いするよ。その後も他愛無い話をしながらティファニアと食事を楽しんだ。

だが、そんな時間も終わりを迎えた。

「ビダーシャル、いつになったら王に会えるのかしら？」

「さあ、相手次第だ」

・

・

・

ふふふふふ

ティファニアには、感謝せねばならんな。君の食い意地が、まさかこんなところで役に立つとは思ってもみなかったよ。

「レイアさん、今 後ろの席から」

「ティファニア…ちょっと、待っていてね。すぐ戻るから」

コツコツコツ

椅子から立ち上がり、後ろのテーブルへとやって来た。ビダーシャルと真紅は、お互いに本を読んでおり私の方を見ようとすらしらない。お前ら何処まで本の虫なんだよ。

ゴホン

「失礼、ご相席してもよろしいでしょうか？」

「自由」

「構わないわ」

二人とも私を見ようとしないぜ。だが、それもこれでおしまいだ。ビダーシャルが絶対に無視できない魔法の言葉を唱えよう。

「綺羅星！」

「綺羅星！！」

私が叫ぶとビダーシャルも阿吽の呼吸で返答してくれた。さすが本家だ。素晴らしいポーズまで決めているよ。

「久しぶりだな。銀河美少年」

ニヤニヤ

「そうだな。『薔薇族』副統領」

グハ

私の心をえぐるような一撃をくれるじゃないか。これがエルフお得意の反射カウンターというやつなのか・・・侮れん。

「あら、お父様。お久しぶり、姉妹達は元気だったかしら？」

ああ、凄く元気だったよ。『薔薇族』や『ネフテス』でもとても歓迎してくれたよ。おかげで、お父様ついに結婚までしちゃったよ。

「元気すぎて困るくらいだったよ。真紅も元気そうで何よりだ」

「それで・・・先ほどから気になっているのだが、あちらのテーブルからこちらをチラチラ見ている女性が件の『虚無』の担い手か？」

ああ、その通りだともビダーシャル。ティファニアをこちらのテーブルへ呼んだ。

「は、初めまして。ティファニア・ド・ヴェーグルです」

相変わらずの自己紹介ですね。まあ、いいけどさ。

「こちらこそ、私は『ネフテス』のビダーシャル。レイアの事で困った時はいつでも相談に乗ろう」

お前は、俺の父親かよ！

「初めまして真紅よ。不甲斐ないお父様だけど、よろしく願いますわ」

不甲斐ないって…これでも精一杯頑張っているんです。

「さてさて、ご挨拶も済んだところで…ビダーシャルに少々聞いたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「言わずともわかると思うが…『薔薇族』の一件で私がビダーシャルに喧嘩を売りに来るとは思わなかったのかい？」

私があの一件のせいでどれだけ枕を濡らした事か。いくら、エルフで前例を見ない栄誉であっても『薔薇族』はありえないだろ。

「ふっ…その事か。あの時は、レイアが苦しむ姿を見る事しか頭になくてそんな些細な事など考えもなかったさ！それに私がどれだけ苦勞して、皆の協力を取り付けたと思う。老評議員の職権まで濫用し、副統領というオンリーワンの職まで作ったのだぞ！一体、何が不満だったのだ」

ぶちぶち

「どこをどう聞いても不満大有りだろう！もしかして、ビダーシヤルは私に恨みでもあるのか！？もしかして、アーベにビダーシヤルの部屋の力ギをあげたのがバレた？それとも、ミチシタにビダーシヤルの洗濯前の下着を売ったのがバレた？それとも…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ビダーシヤルから鬨気みたいなものが漏れている。

「どつやら、一度じっくりと話す必要があるみたいだな レイア（、、）」

「ふふふ、最初からそのつもりだともビダーシヤル。お互い本気で行くつもりじゃないか。前回のようには実力の出し惜しみは無しにしようぜ（#。。。）」

こちらは、最初からそのつもりだぜ ビダーシヤル。ホモのレットルを張られた恨み思い知るがいい。

「はあ、二人ともここじゃ埃がたつから他でやりなさい。私は、テ
イファニアとここで待っているわ」

そうか、ならばしつかりと面倒を見てくれよ 真紅。その子は、す
ぐにトラブルに巻き込まれるからな。

「『老評議員』の実力をあまり見くびらん方がいいぞ レイア」

「見くびったことなど一度もないさ。聞くまでもないが…使い魔も
私の戦力と数えていいのだろうか？」

「無論だ」

ガリア辺境にて。

カンカンカーーン

「どりゃー……！！！」

ゼルエルの触手にA・T・フィールドを纏わせてビダーシャルのレ
シュバルに切りかかる。だが、スターソードで難なく受け止められ
しまった。

「ははは、甘いぞ レイア。ゆけ ファン…じゃなかったパイル！
！」

言い直す必要ねーだろ！それに今、絶対ファンネルって言うつもり
だったよね！？

バルの頭を完全に吹き飛ばし後方にある山に大穴を開けた。

あ…ビダーシャル 生きているかな？きつと、大丈夫だね。吹き飛ばしたの頭だしさ。

「今の攻撃は少し、肝を冷やしたぞ はははははは！」

頭を吹き飛ばしたのに、無駄にテンションが高いぜ ビダーシャル。実は、ビダーシャルもバトルジャンキーか！

「やはり、単機ではゼルエルに力負けをするか…分かっていた事だが」

負け惜しみですかビダーシャル。

「ふふふ 今なら謝れば許してあげるよ ビダーシャル」

「まだ、負けておらんよ。私は、単機では勝てぬと言ったのだ。要するに、複数いれば負けぬと言う事だ！偏在！！」

え…ビダーシャルが10人もいる。いや、まだ倒し切っていない本体を含めれば11か。

「アレフィスト」

「テトリオート」

「ツァディクト」

「ヘーゲント」

「ヨドック」

「カフラット」

「ページェント」

「ラメドス」
「ザイナス」
「ダレトス」

「……………アプリボワゼ　！！」「……………」

全員が一斉に搭乗した。

(；。)

(。；)

(う　)ゴシゴシ

(。　)え？

なんだよ！一体どんだけ　しるし持ってんだよ。ふざけるなあああ
ああああ！！！！

ブツーン

この時、頭の中で何かが切れた気がする。

「フィールド全開！！潰れるーーーー！！」

もはや、私の勝機は　神のみぞ知る！だが、可能な限り抵抗してや
るぞ！ドライバーは、搭乗直後にポーズをとるというイミフな行動
に出るはずだ。ならば、その際に畳み掛ける！

ビダーシャル's を押しつぶすようにA・T・フィールドを展開したその枚数は、今までで最高の20枚であった。

グッシャー――

反応が遅かった2体を押しつぶせたものの残り9体…さて、どうしようかな。

「レイア！ 変身ポーズ中に攻撃しては、駄目だという世界共通ルールを忘れたか！ それに、土壇場でパワーアップとか、お前は主人公か！？」

何を言うかビダーシャルよ。私が主人公だ

「ビダーシャルよ。ルールとは破る為にあるのだよ！それに、土壇場でパワーアップは、主人公の特権だよ」

こうして、ビダーシャルと死闘二回戦目が幕を切った。

数時間後の某喫茶店にて。

「ビダーシャル…いくらなんでも偏在は、卑怯じゃない？あ、店員
コーヒーお代わり」

まだ、全身が痛いのです。やはり、数の暴力は卑怯です。いくら、ス
クエアにパワーアップしたからといって、あの数には勝てなかった。

「何を言うレイア。お前こそ、こちらのポーズ中に攻撃してきただ

ろう。それに戦闘中にメイジのランクが上がるとか、どっちが卑怯だ。あ、店員コーヒーを」

「レイアさん、よわよわですね。でも、そんなレイアさんも私好きです」

「あ、ありがとう」

好意を持たれるのは嬉しいが・・・よわよわ という部分は訂正してほしいな。これでも、頑張ったんだよ。残り4体まで減らしたのだからね。

「おい、聞いたか。火竜山脈付近の山と森が人知れず消滅したそうだぞ。噂じゃ、エルフが攻めてきたとか」

近くの席に座っていた平民が自慢げにあたりには話している。

・
・
・

そうですね、エルフが攻めてきたよね。主に私を。

「コーヒーがうまいな。そう思わないかレイア」

「そうだな。落ち着くな」

こうして、ビダーシャルと親睦を深めて一日を終了させた。

後日。

「何かあったら電話くれよ。使い方は、渡した取説を読んでくれ」

『仲間』^{チーム}より貰った携帯電話をビダーシャルに渡した。これで、いつでも相談できるぜ。実に、ありがたいことだ。

「ああ、分かった。言うまでもないが、レイアも気をつけるよ。最近、この国の動きが怪しいからな」

心配してくれるか大親友。まあ、私を害なす事ができる人物が人類sideにいると思えんがね。

「了解。また会おう大親友。そして、真紅も元気だな」

「ああ、また会おう大親友」

「ええ、またねお父様。ティファニアもお父様をよろしくね」

「はい！また、会いに来ますね」

ビダーシャルと真紅に別れを告げて、ティファニアと一緒にトリスティン目指して出発した。

主人公は、拳で友情を語る。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ビダーシャルの追加情報

ビダーシャルは、すべてのサイバディのしるしを持っています。当然、本来なら一体しか出せませんが…偏在を使うことでその欠点を克服している。

次話以降からは、レイアはスクエアとして話を進めていきます。そろそろ、パワーアップさせてあげないとね。

さて、次こそゾンビハンターになろうかな。

主人公は、ゾンビ退治をする。(前書き)

いつも、読んでいただきありがとうございます。

感想をくれた皆様 ありがとうございます。

今日で連休も最後です。

明日からは、とても忙しくなる予感がしており、恐らく更新ペースが週一に戻る予感がします。

主人公は、ゾンビ退治をする。

ビダーシャルと別れて、ゾンビ退治をする為にトリスティン王都に
来たレイアです。

さて、アホリエッタさんよ。先日は、随分と世話になった。たつぷ
りとお礼をしてあげようじゃないか。

昼間のうちに、ラミエルを使いゾンビウェールズを捕捉している。
まさに、今日が件のイベントの日である。なんて、良いタイミング
だ。

トリスティン王都の高級ホテルにて。

「レイアさんは、まだ寝ないんですか？ 私は、そろそろ眠いので
おやすみなさい」

「ああ、お休みティファニア。私は、これから少し出かけてくるよ。
留守番にはラミエルを置いていくから何かあったら呼んでくれ」

私の声を聞き、ティファニアが寝入った。今日も食べ歩いて疲れた
のだろう。よく寝る子だね。ティファニアがベッドに横になりスヤ
スヤと眠っている。

ひとつ言っておこう、決して手を出してはいないからな。

ざわざわ

王宮の方が何やら騒がしくなった。あちこちに明かりが灯されて、騎士達が慌ただしく動き始めた。

「始まったか：ラミエル。ティファニアを頼んだよ。この部屋に侵入しようとした者は、全て排除して構わん」

ラミエルに護衛を任せた事だし、私は安心してごみ掃除にかかれるよ。

「もう、食べられません レイアさん・・・むにゃむにゃ」

・
・
・

ベタだ。なんてベタな子。

ティファニアの寝言に苦笑しつつ、ホテルを出た。私がホテルと出ると、一台の馬車が近づいてきた。しかも、王宮仕様の豪華な馬車がね。

「はあ…、別れ際に『もう来ないでくれよ』と聞いた覚えがあるのですが？」

「さて、覚えておらんの。とりあえず、乗りなさい。少々、込み入った話がある」

ボケる年齢でないだろう。

とても断りたい。だが、実質この国を支配している人物の命令を無碍にする事は 得策ではないな。

「苦勞していますね マザリーニ枢機卿」

「全くだ」

馬車にて。

私が馬車に乗るとゆつくりと出発した。どうやら、街中をただ巡回しているだけのようだ。

馬車の狭い密室で年寄りと二人つきり…空気が重い。

「一体、何のご用でしょうか？貴方程ではありませんが、私も勉強に忙しいのですが？」

そうそう、最近学院を休みがちで勉強遅れているんですよ。まあ、もう学ぶ事もあまり残ってないけどさ。

「よく、言いおるわ。女とデートして、何が忙しいんだ。勘違いされんように言っておくが、街に出かける用事があつた際に たまたまお主を見かけたただけだ」

もしかして、監視されているのかな？

「始祖に誓えますか？もし、私や身の周りの人達を監視などしたら…怒りますよ」

まあ、始祖など私は信じてないけど。この世界の人間には、この誓いは有効だろう。

「始祖に誓おう」

とりあえず、信じておこう。では、本題に入りましょうか。

「一体、ただの学生にこういったご用件でしょうか？ マザリーニ枢機卿の力をもってすればこの国で解決できない事などあまり無いと思いますが」

「ミスター・ヴェーグルが…ただの学生か。まあ、良い。君は、この騒ぎが既になんなのか予想がついているのではないのかね？」

まあ、原作知識があるから当然あるとも。そうでなくても、普通の人なら予想ぐらいつくでしょう。

「魔法衛士隊が動いている事とマザリーニ枢機卿が今ここに居ることから…王女、もしくは女王陛下のどちらかに何かあったのではないかと思います。妥当な線では、誘拐でしょうね」

「ほほう、まだ魔法衛士隊位しか知らせていないのだがね。それで、私がここに来た目的はなんだと思う？」

そこまで私に言わせたいのですかねこの人は。

「アリエッタを奪還し、可能であれば犯人の捕獲…または、殺害と言ったところでしよう。本来なら、魔法衛士隊がこなす仕事ですが、その犯人が元とはいえ王族ですからね。始祖を崇める貴族に、王族殺しの罪を背負わすのは酷というものです。そこで、この国で

「一番信仰心のない 私に白羽の矢が立ったわけですね」

まあ、元から殺す予定だったしね。それに、このおかげで大義名分も立つというものだ。楽しくなってきた！

「こちらから、特に捕捉することもない。目撃情報から犯人は、死んだはずのウエールズ皇太子であると思われる。ウエールズ皇太子はトライアングルであるが：お主ならばやれるだろう。引き受けてもらえるなら、私から個人的に褒賞は出そう」

個人的に出そう…上限をつけてきたな。さすがに、この間の様な国宝級の物をねだられないように予防線を張って来たか。

「引き受けましょう。褒美は、金品ではなく…マザリー二枢機卿直筆の身分証を二つ発行してほしい。もちろん、ロマリア皇国の枢機卿と トリステイン宰相としての二つの立場での物をね。後、今回の一件での犯人を殺害で発生する罪をすべてあなたの責にする署名をお願いたします」

「何かあれば、私も道連れと言う事かね…よからう。身分証については、事が終わり次第渡そう。署名の方は、今すぐ用意する。受け取り次第、頼んだぞ」

万が一、アホリエッタが私に罪を被せようとしても回避できる。なんせ、この国はマザリー二枢機卿を中心に回っているのだからね。

それにしても、慈善事業で掃除に来たのだが…思わぬ収入だな。ルイズがアホリエッタ直筆の身分証を持っているのに対して、私はマザリー二枢機卿直筆の身分証だ。まさに、表と裏だな。

ラ・ロシエール方面の街道にて。

上空からの眺めは実にいい。眼下では、ルイズ一行とアホリエッタとゾンビウェールズが対峙している。それにしても…怪我人のピポグリフ隊の隊員を放置しているのは、すこし酷すぎる。致命傷を負って苦しんでいるのに、あいつら鬼だな。

トン

私は、地上に降りて隊員へ近づいた。みなさん、忙しいようで私に気付いてない。

「私は、マザリーニ枢機卿の命でここに来た者だ。安心しろ」

「た、助かった」

隊員は、安どの表情をした。だが、傷が深い。私のヒーリングでは、治しきれんな。かといって、残り少ないティファニアの指輪を使うなんてもつたいたない事はできんから、安らかに眠ってもらおう。

「せめて痛みを知らず安らかに死ぬがよい」

ズブリ

私が秘孔突くと隊員は、安らかに息を引き取った。私って優しいな。きっと、死後は天国に行けるに違いない。

「お願いよ、ルイズ。杖をおさめてちょうだい。私たちを行かせて

「ちょうだい」

「姫さま？ 何をおっしゃるの！・・・」

目の前で、アホリエッタとルイズが激しい？言い争いをしていた。相変わらず、この姫さんの言い分の意味が分からない。お飾りの姫なら、大人しくゲルマニアに嫁げよ。

「ごおおおー」

私が呆れて見ていると、二人がヘクサゴン・スペルを唱えたようだ。おお！これが噂の王家専用チートスペルか・・・しょぼいな。ラオウのワンパンよりしょぼい。

迫ってくる竜巻にサイトが止めようと必死に抵抗しているな。その後ろでは、ルイズが呪文を唱えている。相変わらず長い詠唱だ。

本来なら、加勢などしたくはないのだが、心優しいレイアが助けてあげよう。ちょうど、ラオウより貰ったナイフの性能を確かめたいしね。投げナイフは、得意ではないのだがね。

目標は、ウェールズ皇太子の脳天だ！

「加勢してやるっ」

「くくくくえ！」「くくく」

「ヒュン！」

竜巻の向こう側にいるウェールズ皇太子めがけてナイフを投げた。ナイフは、竜巻の影響を無視するかのようにはウェールズ皇太子の頭

へ向かっていった。

トス

ドサッ

ウェールズ皇太子の頭にナイフが刺さり、皇太子が倒れた。その瞬間、先ほどまで猛威を振るっていた竜巻もきれいに消えてしまった。片方が死ねば消えてしまうのか…もろいな。

「危ないところでしたね アリエッタ王女殿下。逆賊に無理やり魔法を行使させられるなんて本当にかわいそうに。あのままでしたら、危うく貴方まで逆賊になるところでしたよ」

もう少し、国のために思って行動してくれ。私の爪の垢でも煎じて飲まそうかな。

「そ、そんなウェールズ様…イヤーーー」

ジロ

ルイズ一行の視線が私に釘付けだ。

「なんだい？ 文句でもあるのかい？ 私が来なかつたら君たちがこの役目を負っていたんだよ。それに、私は王女殿下が 国家反逆罪に張るのを未然に防いだのだ。感謝されど…恨まれる筋合いはないね」

さて、犯人の亡骸をもって帰還するかな。これにて任務完了と。

「な、なんであんたがここに居んのよ！ ふざけるんじゃないわよ」

「てめー、一体何の恨みがあってこんな事を」

「少しばかり、お痛が過ぎるんじゃないかしら？」

「……」

上からルイズ、サイト、キュルケ、タバサ。

なにこれ…まるで私が悪役じゃない！？ 嘘！ まさかの展開なんだけど。

「言いがかりは、やめてもらおうか。さて、王女殿下。王宮へ帰りましょうか。今ならまだ、一時の気の迷いで済みますよ」

私は、大勢の視線の中 ウェールズの頭に刺さったナイフを回収した。それにしても、素晴らしい性能だな。ヘクサゴン・スペルをものともせず、先住魔法で動いていた死体の魔法まで吸収したか。

「サイトー」

「おうよ！」

ルイズの叫びと同時にサイトが私に切りかかってきた。しかも、ガンダールヴの力を全開でだ。

カーン

とっさに、持っていたナイフでサイトの攻撃を払った。

「これは、どういったことかな？」

「どうもこうもねー、てめーには 王女殿下の気持ちが わからねーのか」

・・・無理だ！アホリエッタの気持ちが分かる君らって もしかして天才！？もう、それだけで尊敬できるよ。後、そんなくだらない事で私に切りかかって来たのか？

「君たちの行動は、理解に苦しむ。私の行動のどこに問題があったというのだね。この国を思えばこそその行動だと思いが…それが納得いかないのならば、白黒はつきり着けようじゃないか。前回同様、半殺し程度で許してやる」

「やってやるよ！」

サイトがデルフリンガーを構えて突進してきた。ちょうど良い、スクエアになった魔法の威力…試させてもらおう。

「ブレットー！」

突進してくるサイトめがけて、ブレットを放った。トライアングルのころを比べて消費する精神力が下がっているのが分かる。おまけに、威力と精度は 段違いに上がっている。

カンカンカンカンカン

サイトは、飛来してくる土弾をデルフリンガーで吸収と回避をしつつ逃げまわっている。あまり当てる気もなく 数に物を言わせて近づけさせてないだけだね。

「逃げてばかりでは勝負にならんぞ。この際だ、サイトのご主人様も参戦しても構わんよ」

是非ともそうしてくれ、デイスペルの効果を見ておきたい。おそろく、私のスペルが解除されるだろう。そして、なにより呪文覚えさせてもらおうか！

本来ならば、あの竜巻で使ってもらえば良かったのだが・・・アホエリツタのむかつく顔を見てつい、呪文を確認する前にウェールズを殺してしまった。

「相棒！ここは、デイスペルだ。あの攻撃をいつまでも防げねえ」

デルフリンガーの指示に従いサイトが、ルイズにデイスペルを使うように要求した。普段なら、ルイズの性格的に断りそうだが…妙に連携がいいな。私が敵だからか？

「安心しろ。詠唱中に主人を狙うようなマネはしないよ。ブレット」

ト
ト
ト
ト
ト
ト

サイトは、私のブレットをあちこち傷を負いながら凌ぎきった。よく、詠唱が終わるまで生き残った。感謝するぞ、おかげで呪文を覚えることができた。

「デイスペル・マジック！いまよ、サイト！」

ルイズが呪文を唱えると、サイトへ飛来していたブレットが一齐に土へと戻ってしまった。予想通りだな。ブレットが無くなったのを

見て、サイトが全力で切りかかってきた。

いつも、思うのだが…お前ら明らかに殺す気ですよ。

だけど、デイスペル・マジックで解除できる呪文はその時に発動して魔法だけだろう？ならば、新たに呪文を唱えればいいだけだよ。

「受け取れ…【リトル・クラッカー】（ボソ）」

私は、足元にあったウェールズの死体をサイトに投げた。資源の有効活用って大事だね。サイトが、そのまま真つ二つにするもよし！爆発するのもしよし！どちらになろうとも、サイトの注意をそらすのには十分だ。

ズサーー

「な、なんて事しやがる！」

サイトは、咄嗟に剣を収めて 放り投げられたウェールズを見事にキャッチした。

なーに、死なない程度の威力に調整してある。

ドーーーーーン

びちゃびちゃ

ウェールズの死体がサイトの手の中で爆散した。あたり一面にウェールズに肉片が飛び散った。

「サイトー!?」

「ぐああああああああ」

「いやあああああああ」

サイトの両腕は、黒く焦げて所々炭になっている。アンリエッタは、四散したウェールズをみて泣き崩れてしまった。

「おいおいルイズ。お得意の失敗魔法かい？何て酷い事するんだ。」

「え!? 私じゃないわよ」

何をおっしゃいますか、どう見てもあなたの魔法ですよ。

「何を言っている。こんな雨の中あんな爆発を起こせるやつがルイズ以外にいるはずもないだろう」

「違うわよ!」

ガヤガヤガヤ

ちっ、もっと遊びたかったが後続の応援が来たか。厄介事にならないうちに撤退しよう。

「まあ、どちらでもいいさ。応援も来たところだし、私はこれで失礼するよ。王女殿下が無事であった事を報告しないといけないからね」

私は、そう言い残して ルイズ達が乗ってきた馬にまたがり王都へ

戻った。ほら、ルイズ達が見ている中　空を飛ぶわけにはいかないじゃん。

「いやー、ごみ掃除って気持ちいいな。世の為、人の為に働くって本当に気持ちいい（笑）」

後日。

「これが約束の物だ。それにしても派手にやってくれたな」

「多少の事には目をつぶってください。あのままでは、王女殿下が国家反逆罪になりかねなかったのですから」

マザリーニ枢機卿から約束の身分証を受け取った。当然、一つは私…もう一つは、ティファニアの物だ。あの子を学院に入学させる為には、この手の身分証は役に立つ。

「大分　持ち直したが…あれでは、回復のめどが立たん」

そこまでか…仕方ない。アホリエッタの為に、ここまでする気はなかったのだが、マザリーニ枢機卿が過労死したらこの身分証も役に立たなくなるから少しだけ助けてあげよう。

「はあ、分かりました。では、こちらで何とかしましょう。あなたが過労死したら、これも意味がなくなりますからね」

エルフから貰ったマジックアイテムを使い、あの惨劇を記憶から消す事が可能な事をマザリーニ枢機卿に説明した。もちろん、当初は嫌がったがアホリエッタの現状を鑑みてマザリーニ枢機卿が折れた。

『忘却』を使う際は、人の目がないか細心の注意をして実行した。
消えた記憶がどのように補完されたかは分らんが、原作通りにな
ればいいやと思った。

そういえば、学院にほとんど行ってないのに夏季休暇か…。

主人公は、ゾンビ退治をする。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

来週は、公爵家が妖精亭か日常のどれかをやるつかと思います。

主人公は、ちょっと逝ってくる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想、とっても嬉しかったです。

レイアの味方がこんなにいるとは思ってませんでした
これからも、がんばります！

今回は、日常編です。

『 』内の部分は、PC内での会話だと思ってください。
そして、へたくそでごめんなさい。

ルイズ一行が妖精亭で働いている時期を調整しようかなと思いましたが。

主人公は、ちょっと逝ってくる。

夏季休暇を実家で満喫中のレイアです。

今日に至るまでにエルフ各所への挨拶回りも終えた。そして、国家転覆を企む悪ゾンビも退治した。そして、思わぬ報酬も手に入ったし、最近の良い事 続きだぜ。

「レイアさん、お茶を持ってきました。今日は自信作です ^ ^」

「旦那 毒茶どうぞ」

ポコポコポコ

神よ！ あなたは私に試練をお与えになるのですねorz

「いつも、ありがとう」

それにしても、素晴らしい兵器だね。

私は、そつとノートPCを立ち上げた。こういう困った時こそエルフの叡智を借りる時だ。『仲間^{チーム}』にお願いして作ってもらったエルフ専用巨大掲示板に接続した。

『90 変態という名の紳士 人生相談板

誰か知恵を貸してくれ！今こそ仲間の力が必要なんだ』

『91 世紀末の覇者 人生相談板

どうした？この世紀末の覇者が聞いてやるっ』

『92 男の中のオトコ 人生相談板
うほw、いい男の相談の予感』

『93 銀河美青年 人生相談板
言ってみるがいい』

・
・
・

気のせいだろうか？ハンドルネームがとても見覚えのある人達のような気がする。いや、そんなはずはあるまい。それに、今はそんなことを気にしている暇はない！

ティファニアが、まだ飲まないのかとニコニコと待っているのだよ！

『94 変態という名の紳士 人生相談板
実は…先日結婚したのだが。嫁の料理が、この世の終わりを感ぜさせるほど絶品なんです…負の意味でorz』

『95 男の中のオトコ 人生相談板
既婚者か…今からでも間に合う。結婚しよう。うまい飯食わせてやるぜ…お代は…じゅるり』

『96 銀河美青年 人生相談板
同じような相談を先日、大親友からされました…私か言わせてもらえば…リア充爆発しろ！』

『97 世紀末の覇者 人生相談板

よいか、愛している者が作った料理ならば、どのような物が出てこようとも食べるのが漢というものだ』

前半の二人の意見が全く参考にならない。世紀末の覇者さんの意見がすぐくマトモだ。

「あ、あのレイアさん・・・ウルウル」

や、やめて！その捨てられた子犬のような目で私を見ないで。私のSAN値がガリガリ削られる。とりあえず、解決策が見つかるまで時間を稼ぐのだ！

「ティファニア：愛しているよ」

ナデナデ

「れ、レイアさん。私もです」

おっし！少しだが、時間を稼いだぞ。ティファニアが一人妄想にふけている内に結論を出して見せる！

『98：変態という名の紳士 人生相談板

世紀末の覇者さん、とても参考になりました。ですが、私もまだ死にたくありません。ですから、安価で決めたいと思います。100番お願いします。』

『99：世紀末の覇者 人生相談板
食べる』

『100：AUの男 人生相談板
全力で食す!』

『101：男の中のオトコ 人生相談板
尻^{ケツ}から食べる』

『102：銀河美青年 人生相談板
鼻から食べる!そして、死ね!』

どうやら、この板の住人は私を殺したいようだ。とてつもない悪意を感じる(涙) だが、決まった実施しなければならぬ。例え、この命が尽きることになってもだ。

『103：世紀末の覇者 人生相談板
生きていたなら、また会おう』

『104：AUの男 人生相談板
詳細キボン』

『105：男の中のオトコ 人生相談板
結果は?』

『106：銀河美青年 人生相談板
一人の勇者が旅立った...』

こいつら!絶対に面白がっているだろう!

『107：変態という名の紳士人生相談板
ちよっと、逝つてくる。もし、死んだらエルフの叡智で助けに来てくれ。三途の川の前で待っているから』

任せる！スターウエーの導きがある限り、必ず連れて帰る事を誓おう」

なんだか、とても心強い人だな。これで、もう怖いものがなくなつた。

いざ、ゆかん！

「ティファニア…私は、君と出会ってから毎日がとても楽しかったよ。君と過ごした日々は私にとって宝物だ」

「何を・・・レイアさん、貴方が何を言ってるのか分からないです、レイアさん・・・」

そんな悲しそうな顔をしないでくれ。最後位 笑って送り出してくれ。

「遺言だよ。ありがとう、君に会えて嬉しかったよ」

「レイアさん！！」

もし、来世で君に出会えたら 今度は僕から告白するよ。女の子に結婚してくれと言われるのは ちよっと情けないからね。

「南無さん！！」

ゴクリゴクリ

ぐはぁwこの世のあらゆる毒素が詰まったような味だ。なんてものを作り上げるんだ君は。

やばい…死んだかも。

ドサ

ティファニアの自信作を飲み干し、私は意識を失った。

私は、三途の川でAUに会った…。

S i d e ティファニア

今日は、いつもお世話になっているレイアさんの為にお茶を入れようと思います。マチルダ姉さんは、絶対に料理をするなど強く言われたけど…私だって女の子なんです。だから、レイアさんに愛情たっぷりの美味しいご飯を食べてもらいたい。

フフフフフン〜 フン

お気に入りの歌を歌いながら、お料理開始です。この歌は、大好きだったお母さんが健在だった頃に、オルゴールで聞いて覚えてたんです。

それに、これを歌うと小さな鏡のようなものが現れて、いろんな調味料が手に入るんですよ。

「ごそごそ」

「今日は…何て書いてあるのかしら。でも収穫前のアーモンドみたいな匂いだし大丈夫よね」

その日は、夏季休暇と言う事でメイドと執事は里帰りしており、両親は近くの村の視察に出ていることが幸いした。

「レイアさん、喜んでくれるかな…」

正直、料理の腕は少し自信がないです。だって、レイアさんの料理がとってもおいしいんです。だから、私の料理を食べてくれるか不安でいっぱいです。

ティファニアが立ち去った後の台所には、髑髏マークがついたビンが無数転がっていた。

テラスにて。

レイアさんが気持ちよさそうに、休んでいる。ここで、お茶を持っていけばきつとレイアさんは喜んでくれるはず。

「レイアさん、お茶を持ってきました。今日は自信作です　^　^」
「旦那　毒茶どうぞ　」

「いつも、ありがとう」

そんな、いつもだなんて。レイアさんが飲みたいと言ってくれれば

いつでも入れてきます。私は、貴方の奥さんですから。

私がお茶を持ってくるとレイアさんが、手元に置いてあったノートパソコンという『場違いな工芸品』を広げて何やらボタンを押し始めた。一体、どうしたのかしら？

もしかして、私が淹れたお茶なんて飲む価値なんてないという事ですか。レイアさんの為に、頑張って入れてきたのに・・・クズン（涙）

「あ、あのレイアさん・・・ウルウル」

「ティファニア：愛しているよ」

ナデナデ

え：そんな、いきなり！わ、私も愛しています。

「ね、レイアさん。私もです」

レイアさんっていつも唐突に恥ずかしい事いうんですから。お茶くらいでそんな愛しているなんて・・・もし、晩御飯を作ったら何て言うてくれるんだろう。

・
・
・

そ、そんな、恥ずかしいです。

「ティファニア…私は、君と出会ってから毎日がとても楽しかったよ。君と過ごした日々は私にとって宝物だ」

え！そんな…急にレイアさん、どうしたんですか？そんな、悲しい顔をして お別れみたいな言葉…

「何を…レイアさん、レイアさんが何を言ってるのか分からないです、レイアさん…」

「遺言だよ。ありがとう、君に会えて嬉しかったよ」

遺言…いや、私を置いてかないでレイアさん。一体、何があったのですか。さっきまで普通にしていたじゃないですか。もしかして、ご病気か何かだったのですか！？

「レイアさん！！」

私は思わず、レイアさんの名前を叫んでしまった。私の愛しい人…掛替えのない人の名前を。

「南無さん！！」

レイアさんが掛け声と一緒に私が持ってきたお茶を飲み干し、糸の人形のように倒れてしまった。

ドサ

・・・

す、直ぐに、『無かった事』にして助けます。待っていてください。

ボタン

ボコン

「本当にお馬鹿さんなんだから・・・はあー。後は、こっちで何とかするから ティファニアはお父様の看病をする準備でもしてなさい。決して、料理をしない事！ 分かったわね」

「全く、隠れる手間も考えてほしいものだな」

私がレイアさんを治療しようとする、クローゼットの中から水銀
橙ちゃんが地面の下からアミバさんが出てきた。

そして、レイアさんを引きずって行った。

もう、何が何だかわかりません。でも、これがここでは普通なので
しょうか？

主人公は、ちょっと逝ってくる。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

レイアは、毎日強く生きます。

さて…次回は、行きたくないでござるが公爵家へ行ってきました。

主人公は、公爵家へお礼参りする（前編）

改修後（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

タイトルの通り、本話は一度改修させていただきました。

改修前の話も読んでみたいというお声が感想であった為、改修前に者については活動報告に載せさせていただきたいと思えます。

今回は、公爵家に行くまでのお話です。

無事にあの世から帰ってきたレイアです。

流石にいろいろな意味で不味かったです。三途の川で助けてくれたAU様ありがとうございます。

生死の境から帰ってきたところで、そろそろお楽しみ公爵家へ出かけようと思います。なんせ、三女のおかげで王家の中で我がヴェーグル家の評判がガタ落ちしたのは言うまでもない。元々、うちの評価なんて高く無かったと思うけどね。

まあ、そんな訳で公爵家に私自ら直訴に行くてくるぜ。しかし公爵家相手に、いきなりの訪問は失礼なので、事前に手紙で送った。最も、手紙が公爵家に届くのは、私が到着する半日前だがね。

そして、私は公爵家に向かう為に出発の準備をしている。

「これで完成！」

今回、ティファニアも付いてくる為 道中の腹ごしらえ用にお弁当を作りました。今日も上手に卵焼きが出来たぜ。我ながら なかなかの腕前だぜ。

トテトテ

お弁当の匂いに惹かれてティファニアが台所に現れた。ここは、モンスタボー … いや、サファリボー でもティファニアというモンスターを捕まえる事が出来るだろう。なんせ、飯の前では最弱な子

ですから。

「おいしそうですね…」

チラチラ

手にM.V.箸まで持って、「おいしそうですね」とか上目使いで言われたら断れないよね。というか、ここで断ると どう見ても私が悪役です。

「一切れだけだよ。残りは、後で一緒に食べよう」

「はい。レイアさん大好きです」

ティファニアが、お弁当から会心の出来であった卵焼きを食べた。本当においしそうに食べるね。そんなに喜んでもらえる私もうれしいよ。

ティファニアの幸せそうな顔を見て、私は台所を出て 本日持つていく物を確認しに部屋へ戻った。

この時に、最後までティファニアを見張っていればよかったとティファニアとお弁当を食べる時に後悔するのであった。まさか、お弁当の中身が全品一切れずつ食べられているとは予想外であった。なんせ料理の中には、二切れしか入っていない品もあったのにな。

玄関先にて。

「気をつけて行って来い。相手は何をするか分からんからな」

「そうよ。危なくなったらすぐに帰っていらっしやいレイアちゃん」
ビダーシャルやアミバはいないけど、ティファニアがいるから大丈夫ですよ。何が起ころうともその原因を『無かった事』に出来るチート能力を持つ彼女がね。

「大丈夫ですよ。鎮静剤を持って行って、少し公爵とお話をしてくるだけですよ」

子供が責任をとれない場合は、親が責任を取るのは常識だよ。だから、しっかりと責任を果たしてもらいましょう。

「是非、私も行きたかったのだが…今回はやめておこう。それと、頼まれていた件の調査結果だ…レイアの予想通りだったぞ」

「私も手伝ったのだから感謝して欲しいわ」

ティファニアの方を見てやめておこうと言うアミバ…実は 空気が読める人だったのね。そして、頼んでいた調査がもう終わるとは流石だ。アミバから一枚の紙を受け取り 中身を確認した。

ティファニアの指輪の力を取り戻す方法を調べてもらっていたのさ。なんせ、ここ最近エルフの集落やティファニアの料理で死にかかったから、無意識で指輪の力を使ってしまったようだ。そのおかげで、指輪の宝石が小さくなり おそらく後数回で消えてしまうレベルまで達していた。

だから、身の安全の為に指輪の力を取り戻すのが急務になったのさ。

そしたら、予想通り…指輪の宝石は『賢者の石』や『^{エリクサー}万能薬』や『^{エリクシル}錬金薬液』などと呼ばれる物であった。そうなれば、話は簡単！材料さえあれば、私が錬金で作ってしまえばいいのだよ。

このご時世、町や村が突如として無人になったり、戦場で師団規模の人数が消滅したり、超常現象が起こっても誰も気に留めはしないだろう。

「ありがとうアミバ、水銀橙。指輪が元通りになったら報告するよ」
出発間にいい報告も聞けたし、さっそく出発するとしましようか。

「それじゃあ、一週間程度で戻ってくるよ。それまで、領地の事お願いね」

最近、公爵家と王家の双方の動きに気を付けないといけなくなり、無駄な労力が増えて困るぜ。まあ、領地にはアミバと水銀橙も残していくから万が一にもやられる事は、無いだろうがね。

「ああ、任せておけ。…そうそう、アーベからレイア宛ての贈り物が届いているぞ。『副統領ともあろう人物が薔薇族の武器を持たずしてどうする！』だそうだ。まあ、がんばれ」

・
・
・

ポロポロ

私は、アーベの心遣いに心底感動した。いや、もうマジで目から涙が流れてきた。アーベが持つている槍から考えるにとても人前で使える武器じゃない事は予想がつく。おまけに、絶対にまともな効果の武器じゃないだろ。

とつても、受け取りたくない…だけど、アーベの気持ちを無碍にも出来ない。折角、ラオウから魔法吸収のオプションがついた短剣を頂いて、これで俺も武器持ちオリ主！といい気分だったのにorz

「あ、ありがたく受け取るよ（涙）」

アミバが布に包まれた棒状の物と一通の手紙を私に差し出してきた。物を受け取り、そのまま馬車に乗り込んで、公爵家目指して出発した。

本当なら、この得体のしれない物を実家の私室に置いておきたいのだが…万が一、メイドに部屋を掃除されて見つかったら、あらぬ噂が立つこと間違いない！だから、目の届くところで管理するのが一番だ。

それにしても、御者がゴーレムか…ゼルエルに引かせれば かなりの買わなくてもよかったと思うのは貧乏性なのかね。まあ、両親も使う馬車だし 少しくらい贅沢してもいいよね。ちなみに、馬車での旅行はティファニアたっての希望である。ゼルエルだと早すぎつつまらないそうです。

アーベからの手紙には、知りたくもないミチシタとの愛の日常と娘たちの様子と武器の性能が書いてあった。武器説明書の注意事項の欄に『形状を薔薇族仕様と一般仕様に変可能』と書いてあったの

を見て、アーベの更なる心遣いに感謝した。今なら、アーベに
れ…いや、何が起ころうともそれだけはイヤだなとも思った

公爵領のある街にて。

実家を出て数日…ここまで大変でした。なぜなら、ティファニアが
お腹減ったと何も無い街道で突如として言うから 近くの山に熊狩
りに行ったりしました。まあ、今日は幸い街にある宿に泊まれるの
で、食材探しもしなくていいのでレイアは幸せです。

それにしても、数年前に来た時と比べて街の様子…主に治安が悪化
している気がするな。きつと、公爵家がきつい税をかけているのだ
ろう。全く、酷い事をするな。まあ、私の知った事ではないがね。
どのようなお金であれ、私の手元にキツチり来ればいいのだよ。そ
れが、この街の人の血税だろうがね。

街の宿に馬車をつけた。公爵家に手紙が届くのは明日だから、今日
はここで休もうかね。

「ティファニア、今日はここに泊るよ」

馬車から降りてティファニアと一緒に宿へと入った。街で一番良い
宿というだけあって、内装も綺麗であった。これなら、街の治安が
悪くても問題なさそうだな。それ相応の警備体制はできているだろ
う。

「一番高い部屋を一晚。後、外にある馬車の方も頼む」

最近、少し成金趣味になりつつあるな…ああ、やだやだ。でも、ティファニアがいるのに下手な場所には泊まれないしね。後で、しっかりと領地の経費で落とそう。

「かしこまりました。夜の外出はお気を付けください。最近は、こも物騒になりましたので」

宿の給仕から鍵を受け取りティファニアと一緒に部屋へと向かった。その後は、部屋で食事を取り、ティファニアと雑談をしてからティファニアを寝かしつけた。

スヤスヤ

「はあー、どうして行く先々で喧嘩を売られるんだろう」

寝ているティファニアの横で、自分が置かれている境遇に思わずため息をついてしまった。現在、宿を囲むように農具や包丁を持った平民が集まってきている。何を目的に集まってきているかは分からないが、恐らく私達…いや、私が目的だろうね。

まずは、情報を収集してから、どう行動すべきか考えよう。

部屋全体に固定化を掛けて、ティファニアの安全を確保した。私以上の土のメイジが相手に居ない限りは、この部屋を侵入するのは難しいだろう。さて…まずは、宿にいる給仕からO・HA・NA・SHIしようじゃないか。

私は、部屋を出て給仕が居る場所の真上に移動した。こちらを見て逃げられると厄介なので、階段を使わずショートカットを使って捕まえようと思う。

「錬金」

サラサラサラ

私は、足元の床を砂に錬金した。そして、宿の一階に居る給仕の前へと現れた。

「ごきげんよう」

「どこか…があああつああ」

給仕が慌てている隙について、口を塞いで秘孔 “かいあもんでんちよう解唾門天聴” を突いた。さて、一体どうなっているか洗いざらい吐いてもらいましょうか。

「素直に白状すれば、命だけは助けてやらんでもないぞ」

5分後。

「お願いですから命だけは…」

給仕から洗いざらい話を聞いたが…酷い話だった。結論から言うと私が賞金首になっているのだ。しかも、その額は5万エキューとべらぼうな額だ。当然、誰が懸けたのかもじっくりと聞きましたよ。

なんと、私を賞金首にしたのは、公爵家の長女…エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエ

ールだった。推測でしかないが、長女は私が公爵家へ鎮静剤を高額で売っている事を知り、それをよしと思わなかったのだろう。まあ、三女の姉だしね…三女の腐った部分がさらに腐敗したような性格なのであるう。

しかも、私を捕えた者が住む街の全住人に、今後10年間一切の税はかけないと言う宣言までしているそうだ…出血大サービス過ぎるだろ。相当思い切った事をしてくれたなと感心してしまったよ。だが、これで街全体の動きがおかしいのも納得がいった。

「ああ、命を助けるというアレね…考えたけど、やっぱり駄目だ」

この手の輩は、仮にこの場で助けたとしても後から、再度命を狙ってくるに決まっている。それに、もし私がいつらに捕まったら、私は確実に殺されるだろう。要するに、賞金が懸けられている以上、こっちは命がけなんだよ。だから、狙ってくる方も当然、命を賭けてもらわないと割が合わないと思うんだよね。

「ひいいい、そんな約束が違う」

うるさい奴だな。

さつさと、始末…いや、待てよ。

折角だから、ここは馬車の旅の中で考えたティファニアの指輪の魔力回復の為、贄になってもらおうじゃないか。本来なら平民には、優しくしてあげたいのだけど…私の命を取りに来る輩は別だ。

「昔、偉い人はこう言いました。『撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ！』と…要するにだ。人の命を狙う以上、当然殺さ

れる覚悟もあるよね…錬金!!」

私は、給仕に突き刺した指から、私の持てるすべての技術を使い錬金をした。その瞬間、給仕が消滅し、先ほどまで立っていた所には服しか残っていなかった。

・
・
・

何もない…orz

「失敗か…」

事前にアミバやビシャえもん(笑)に相談すべきだったか。くっそ、貴重な贄を無駄にしたぜ。だが、失敗は成功の母ともいう。この失敗を次に生かせばいいのだ。

だけど…自信があつたのに失敗はやはり凹む。

自分の無能さにorzのポーズで床を見ていると…ビーズ位のサイズの小さな魔力を含んだ石が落ちているのを見つけた。

と、とても小さい…。

私は、その小さい石を拾い上げまさかと思いティファニアの指輪に近づけてみた。すると、石が指輪の宝石に吸い込まれた。

「(。(。キタコレ!!!!!!」

真夜中にも関わらず、思わず叫んでしまった。あまりにも小さい石であった為、魔力が回復したかは測れないが…街一つ分ならば元のサイズ位には戻せそうだ。

この街で何人の命知らずが襲って来るかは知らないが、ある程度は回復できるだろう。後…ここに居ては、相手が襲ってきにくいと思うので、もっと広くて狙われやすい場所へ行つてあげようじゃありませんか。狩人の皆さんのためにね。

夜の街、中心部にて。

街の中央にある、噴水前の椅子に座っているレイアです。

わらわらと人が集まってきております。全く、見ず知らずの貴族相手にお前らは一体何の恨みがあるというんだよ。ざつと、80人程度か。ドットやライン程度ならこの人数で抑えられるだろう。トライアングルになると…術者の能力次第だな。まあ、今回の実験には手頃な人数でありがたい。この程度ならば、一度に錬金できる。

それにしても、金の魔力とは怖いものだな。貴族が使う魔法さえも人数が集まれば大丈夫という思考へシフトさせるのだから。

「一応、忠告しておく。家族や恋人がいる者は、引き返した方がいいぞ。今なら見逃してやる」

まあ、ここにいる連中には無駄な事だろうな。みんなでやればきつと貴族の一人くらい捕まえらえると信じているアホな連中だ。賢い

奴は、誰かが捕まえてくれるのを待つて、その恩恵を受け取るうとする奴らだ。

「いつもいつも、上から目線で腹が立つんだよ！」

「いくら、貴族でもこの人数相手に出来るはずがない。それに、こっちは銃だつてあるんだ」

「あんた達、貴族のせいで苦しむのは いつも私達なんだからいい加減にしてよ」

ほほう、銃まで持ち出してきたか。当然と言えば当然か、貴族の魔法に対抗できるかもしれない唯一の物だからね。後：最後の女性の意見は、私でなく公爵に言えよ。私はこの領主じゃないのだからさ。お門違いだよ。

「言い分は理解できるが…それを私に言われても困るのだよ。まあ、これからいなくなる君たちには、どうでもいい事だがね」

既に、噴水周辺にはゼルエルネットワークを敷き詰めており、いつでも魔法を発動できる準備は完了している。

「動くな！魔法を使おうとすれば、撃つぞ！」

「お前さんの賞金は、生死問わずだからな」

銃を構えている男たちが叫んだ。

こっちが魔法を使うより早く殺せると…。是非ともやってもらおうじゃないか！

「錬金」

「撃て！！」

ババババーーン

バチバチバチバチ

沢山の銃声と共に噴水周辺が青白く発光し、人の気配が消滅した。その代わりに、私の前に魔力を含有したパチンコ玉位の石が床に落ちた。私は、宝石を拾い上げティファニアの指輪に吸収させた。指輪の宝石のサイズがわずかに大きくなった気がするが…元のサイズまでは程遠いな。

まあ、残りは戦場で回復するでしょう。あそこなら気兼ねなくやれるからね。なんせ、あたり一面敵だらけだ。私は、目撃者がいないか注意をしつつ宿へと戻った。

街の宿にて。

私は、噴水から歩いて宿まで戻ってきた。道中、襲ってくる連中が居るかと思ったが予想外に誰も来なかった。あれで全員だったという事なのかな？

まあ、無益な殺生をせずに済んだのだからそれはそれでいいか。

ボタン

「ふう、疲れた」

部屋に入ると、ティファニアが眠そうな目でこちらを見ている。

「ごめんね、起こしてしまったかい。少し、夜風を浴びに外に行つてたんだ」

「そうですか。もう遅いので、レイアさんも早く寝ましょう」

ティファニアは、占領していたベッドの中央から少し横に避けてくれた。

「ありがとう。おやすみティファニア」

「おやすみなさい レイアさん」

本当に何処に行っても、面倒事に巻き込まれてしまう。ティファニアがいてくれて良かったよ。君を見ていると心が和むよ。そんな事を考えつつ、私も眠りについた。

翌日。

「レイアさん…馬車がありませんね」

「うん、何にもないね」

翌日、目が覚めて出発しようと思った矢先にこれだよ。幸い、荷物

は全て馬車から降ろしていたからよかつたもの…まさかの展開だ。昨日のどさくさに紛れて、盗んだ頭のいい奴がいるという事か。実に、殺してやりたい…でも犯人探しに住民一人一人を自白させていくのも現実的じゃないからな。

「とりあえず、街道までいって馬車でも捕まえて乗せてもらおう。もし、見つからなかったらゼルエルでいこう」

「うー、せつかくの馬車の旅行が…レイアさんの旅行が」

ティファニアが唸っているが、無い物ねだりは どうしようもないので手を繋いで街道まで引きずって行った。あの街でも馬車の一つや二つくらい売っているかもしれないが 生憎と持ち合わせが足りない。それに…もし、買いに行った先に自分の馬車があつたら、我慢できる自信がない。いろいろな意味で…。

街道にて。

ティファニアと一緒に公爵家目指して街道を歩いていると後方から二頭立ての立派なブルームスタイルな馬車と前衛的なオープントップな馬車が走ってきた。

「良いところに馬車が来たね。とりあえず、乗せてもらえるか交渉しよう」

「はい。それとご飯も貰えるといいですね」

ははは、確かにお腹も減って来たね。

まあ、『旅は道連れ 世は情け』とも言つし、何とかなるだらう。一応、お金もあるし 運賃を払えば乗せてはくれるだらう。

主人公は、公爵家へお礼参りする（前編）

改修後（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

外道成分を減らして、代わりに優しさを詰めてみました。

今回は、公爵家でご対面です。

薔薇族の武器については、公爵家で使う予定です。ちょうど公爵家には、ぼこりやすい例の使い魔がいるので@@

レイアの武器紹介（薔薇族のね）

名前：必尻の黄薔薇^{ゲイ・ボウ}

原作：Fate

効果：男のシンボルのサイズを減少させる。

備考：軽症で、男のシンボルのサイズが 現在のMAX値から5%減少する。重症で40%。致命傷で70%といった感じで減少する。サイズは限りなく0に近づくが0になることは無い。

減少した男のサイズは、この武器が破壊されない限り戻らない。

主人公は、公爵家へお礼参りする（後編） （前書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありません。

いつも、読んでいただきありがとうございます。

そして、感想をくれた方々に深く御礼申し上げます。

ありがとうございます。

今回は、公爵家編の後篇です。

書いている内に、文字数が作者の過去最高になってしまい。

誤字脱字が非常に心配です。

見直しはしたんですが…誤字脱字が多すぎる作者なのでorz

と言いつつはこの位にして、今回もよろしくお願い致します。

4 / 23 サイトsideを追加

主人公は、公爵家へお礼参りする（後編）

馬車のヒッチハイクに成功し、公爵家まで連れってもらえる事になったレイアです。

しかし、ここで大きな問題があった。

私達を乗せてくれたのが、ルイズ一行の馬車であつたのだ。正直、こんな事なるのであればゼルエルで飛んで行った方が100倍マシだつたと思う。

ああ、今思い出しただけでも腹立たしい。「人様の領地に土足で入るな」とか「馬車も無いなんて何処の貧乏貴族？」とか「情婦をつれて旅行なんていいご身分ね」とか「頭を下げてくださいは？」「とイチイチ癩に障る事を言ってきた。大体、”馬車が無い件”や”公爵領に居る件”は、元を正せば全て三女が原因だろう！と激しく抗議したい。

私が馬車になんて誰が乗るか！と言おうと思つた瞬間にティファニアが頭を下げて「お願いします」なんて言うからこんな事態になつてしまった。まあ、せめてもの救いは乗せてもらった馬車がサイトとシエスタが乗っている方だという位だ。

「……………」
「……………」

私は、サイトの正面に座り ティファニアはシエスタの正面に座る形になっている。お互い、喋る事も無く馬車の中は 重たい空気になっている。シエスタの方は、自分の立場が分かっているようで嫌

な顔一つせず沈黙を保っている。だが、サイトの方は あからさまに私にガンを飛ばしてくる。

以前なら切りかかってきても おかしくなかったのだが、随分と大人しくなったものだ。これが三度目の正直というやつなのだろうか。だが、”目には目を歯に歯を”がもつとうである私は、当然 嫌味の一つ位言ってやりたくなるのですよ。

「はて？以前は 指の本数は確か10本と記憶していたが…一体どうしたんだい？7本なんて中途半端な数にしちゃって。どうせならもう片方も少なくして切り揃えてやろうか？」

サイトの指は、左小指と右中指と右小指が第一関節から綺麗に無くなっているのだ。全く、最近の若者の美的センスには正直ついていけないよ。

「てめえ！誰のせいだと思ってやがる。なんなら てめえの指も俺とお揃いにしてやろうかあ？」

おおー、怖い 怖い。お前とお揃いなんて死んでもごめんだよ。それに、誰のせいかだって？お前のせいに決まっているだろう。

「お願いですから、ミスタ・ヴェーグルもサイトさんを挑発しないでください。こんな狭い馬車の中で暴れたら、従者の方もお怪我をさせていただきますよ」

まあ、ここでサイトが暴れても怪我をするのは君等だけだけだね。それにさ・・・先にガン飛ばしてきたのはそっちの方だよ。最近、シエスタも調子に乗ってないか？まさかとは思うが、サイトの地位向上が自分の地位も高めていると誤解してないか？君は、どうあが

いても平民だよ。

「いやいや、すまないね。どうも、アレの面を見ると心底腹が立ってきてね。ここは、君の顔を立ててお互い様と言う事にしようじゃないか」

「チツ」

サイトの舌打ちに対して危うく手を出してしまうところだった。人が様がせつかく命を助けてやったのに、本当にいい度胸だ。

「あの…レイアさん、こちらの方々はお知り合いでしょうか？それに、従者の方っていましたっけ？」

うむ、今回の旅に従者なんていない。自分で出来る事は自分でやらないと いくらお金があっても足りないからね。なんせ、人経費が一番高いのだからね。

「いや、赤の他人だ。それとシエスタ、初回だから許そう。次、彼女の事を君と同じ従者なんて間違えたら 物理的に胴体と首が別れだ」

マントも着用していないし、悪気があつたわけでないから 間違える事もあるだろう。だから、一度くらいは見逃してあげよう。だが、次にティファニアを君と同じ従者扱いするのならば私の名誉に掛けて君を殺すと誓おう。

「ヒィ」

殺気全開でシエスタを睨んだら、シエスタの顔がみるみる青ざめて

いった。

「初めまして、ティファニア・ド・ヴェーグルです。職業は、お嫁さんです」

ティファニアが空気を読んで？自己紹介をした。最後の職業までは、余計だったかもしれないが：まあ、よいか。それにしても、こんな所で顔合わせをすることになるね。早くても、アルビオン：遅ければティファニアの学院入学時だと思っていた。

ギョロギョロ

サイトがすごい形相で私とティファニアを見比べている。自分で言うのも何だが：美男美女のいいペアだろう。

「けつ、てめえみたいな下種ゲスをこんな純粹そうな子が慕うわけねーじゃん。どうせ、金に物を言わせたんだろ。最低だな」

・
・
・

ポカーン

サイトのありえないほどの暴言に思わず耳を疑ってしまった。まさか、このタイミングでそう来るか：。どうやら二回も私に半殺しにされた記憶がもうないらしいな。それに、お前にそんな事を言われる筋合いは無いと思うぞ 人間！それにしても・・・

「ふふふふふふはっはっはっはっはっは」

どうやら命知らずの馬鹿というのは本当に居るようだ。思わず大笑いしてしまったではないか。

やはり、馬鹿は死ななきゃならないか…

「なに、気持ち悪い笑いしてるんだよ。馬鹿じゃねーか」

「サ、サイトさん！」

シエスタが慌ててサイトの口を塞ごうと手を伸ばしたが、既に遅い。もう、私の中ではサイトを一回殺すと決めてしまったのだからな。いやー、よかったよ。さっきの街で指輪の力を補充したから、人間を一度くらい復活させられるはずだ。

「サイト、<<自…」

ゾクリ

私がサイトに自害を命じようと思った瞬間、全身から冷や汗が流れた程の恐怖を感じた。悪寒がする方…ティファニアを見てみるといつもより一段と綺麗な笑顔をしていた。

これは、まずい…とつても まずい。私の第6感が言っている…このままだと、サイトの存在が消される！そうなってしまえば、流石に指輪の力を使っても蘇生させられない。

「レイアさん。私、この人 嫌いです」

ニッコリ

人畜無害と名高いティファニアに　ここまでハッキリと嫌悪感を示されるとは流石　原作主人公！ある意味伊達じゃない。だが、今回ばかりはその性能が仇となったな。本当に、不本意ながらお前をここで死なすわけにはいかないのだよ。だから、今回だけは助けてやる。

ティファニアの機嫌を直す方法為に、元凶であるサイトにはご退場願おう。なーに、殺しはしないさ。

「感謝しろよ…楽しい空の旅を」

ドーーーーーン

「うわあああああ」

サイトが座っていた席ごと、A・T・フィールドを使い馬車から真上へ吹き飛ばした。なーに、20mの高さだ。ガンダールヴの力があれば最悪死ぬ事はないだろう。

グチャ

馬車の後方でサイトが落下した。なにやら変な音がしたがまあ問題なからう。前の馬車には長女もいるし、多少なりとも治癒の心得はあるはずだ。

「サイトさん！！」

シエスタがすぐさま馬車を止めてサイトの方へ走って行った。同じく、前の馬車からはルイズが飛び出してきた。

「あなた！人の使い魔になんて事をしてくれるのよ。後で、お父様に言いつけてやるんだから覚えてなさい」

すれ違いざまに私に文句を言ってきた。いやー、文句を言いたいの
は私なんだがね。危うく存在まで消されるところを助けてあげたの
だから、むしろ感謝して欲しいものだ。

後は、念の為にティファニアのご機嫌を取っておくかな。

ナデナデ

「大丈夫だよ ティファニア。領地の外なんて、どこもこんな連中ばかりさ。だから、気にしちゃダメだよ」

「納得出来ませんが、レイアさんがそう言うのでしたら分かりました。でも、レイアさんの悪口は聞いていて辛いです。だから、助けが必要なきはいつでも言ってください。私、がんばっちゃいますから」

ありがとう。でも、君が頑張ったら…歩いたところは、草木一本残らないだろうね（汗）

その後、サイトはルイズとシエスタに回収されて 長女のヒーリングで応急処置を受けながら公爵家へと向かった。サイトの怪我は、残念なことに複雑骨折程度で済んだそうだ。

公爵家にて。

到着して早々に、一人の執事に連れられて応接間まで案内されました。本当なら、長女に文句を言ってやりたかったのだが、早々に引き離された。

「それにしても、公爵家では客人にお茶の一つも出さないんですね 執事さん」

部屋のわきに立っている執事に催促してみた。全く、こちらは遠路はるばるお宅の御嬢さんの薬を持ってきてあげたというのにね。

「・・・・・・・・」

こちらに問いかけに反応すらしない。どうやら、相当嫌われているようだね。

「レイアさん、なんだか 皆さん感じ悪いですね」

本当にそうだよな。公爵家とは、思えない位の対応だ。

バン

執事に文句をたらたら言っていると、応接間の扉が開いて公爵と公爵夫人が入ってきた。いやー、数年ぶりなのに見た目が全く変わってないぜ。それと、眉間に皺を寄せていると老けてみえますよ

「お久しぶりです。公爵様、公爵夫人様」

挨拶は大事だよ。例え形式上の付き合いだとしてもね。

「ふん、相変わらず ぶてぶてしい奴だ。それでどういった要件だ？ わざわざ そちらの女性を見せつけに来たのかな？」

そんな事をしに来るはずないでしょう。彼女は、いろいろな意味での保険だよ。お前等がどんな企みをしているか見当がつかないからね。だから、どのような状況でも打破する事ができる人材がいて欲しかったのだよ。

「一応 紹介してさせてもらいましょう。彼女は、ティファニア・ド・ヴェーグル。私の妻だ」

「初めまして、ティファニア・ド・ヴェーグルです (＊、＊、＊) ニコッ」

ティファニアが何やらご機嫌で挨拶している。そんなに、妻と紹介したのがうれしかったのだろうか。

「ご丁寧どうも…それで、私たちにお祝いの言葉でも言って欲しいわけ？」

公爵夫人なんかにお祝いを言われたら、不幸になるわ。

「まさか、天下の公爵夫人にそんな事お願いできませんよ。…と冗談はさておき。言いたいこと分かっていますか？」

「さて？ 何の事かな？ 何か知っているか カリーヌ？」

すつとぼけてきやがった。公爵領で、あんな大がかりな事をやっていて、領主が知らない訳がないだろう。それに賞金額や税の事だつてそうだ。いくら公爵家の長女であったとしてもできる範囲の限度を超えている。

「いいえ、何も。私たちは、約束を守つて身内にすら事情を説明していませんからね。だから、身内の者が我々の事情を勝手に調べてあらぬ誤解が生じていたとしても、それを正すこともできないですからね」

「そうだな。だから、それによつて生じた出来事など我々の責任ではない。もちろん、私とカリー又はあの場で約束した事を守っている。だが、その場にいなかった者については、対象外だ」

なるほど、なるほど。確かにあの約束だと、そういう解釈もできるか。それは、こちらの落ち度であったな。だが、そうなると公爵達は、長女を餌にして、ヴェーグル家を潰すつもりか。だとすれば、長女を殺害すれば、その罪で色々とちよっかいを出してくるな。

しかし、万が一、ヴェーグル家が潰れる事になれば公爵家だつて鎮静剤が手に入らない為、困るはず。その事を分かつた上での対応と言ふ事は、カトレアの病に対して何らかの回復手段が見つかったとみて間違いないかもしれないね。

「相変わらず汚いですね。ですが、それでこそ、国を代表する貴族らしい」

「褒め言葉として受け取っておこう」

しかし、そうなると厄介だな。長女の一件で公爵家を強請って金品を巻き上げようと思ったのだが…元々、切り捨てる駒ならばそれも意味をなさないか。

「あなた方が一言、ヴェーグル家には手出しするなと言ってくれればよかったですが無理そうですね。じゃ、こちらはさっさと薬を渡して帰るとしましょう。長居すると何をされるか分かりませんからね。なんせ賞金首にされるくらいですから」

「こちららも賞金首をここに長いさせる気など無い。だが、金は明日にならないと用意できん。だから、客室を用意させた」

本当に客室なのだろうね。物置とかだったら、勝手に空いている部屋に居座りに行くぞ。

「お気遣いどうも。ついでに、厨房も貸してもらえませんか。なに、出される料理に毒など仕込まれたら困りますからね。後、当然食材もね」

「やっど、ご飯ですか。はやく作りに行きましょう レイアさん」

そんなウキウキしないでくれ。というか、作りに行きましょうって…作るの私なのだ…

「そのくらい構わん。後は、そこにいる執事に案内させる。では、これにて失礼する。そうそう お前が、カトレアを完治させるのであれば、エレオノールとルイズの件は何とかしてやらんでもないが」

完治させるなんて冗談じゃない。完治したらすぐさま、ヴェーグル領に攻め込んでくる気だろう。もっとも、大軍が攻めてこようが返

り討ちに来るだけの準備は 整ってきているがね。

後、ルイズの一件もなんとかすると言う事は…三女の一件も知っていたか。王宮にも公爵家の犬が居るとみて間違いないな。

「ふ、ご冗談を…そうそう、言いそびれましたが。次回から、鎮静剤の代金が倍になりますのでご了承を」

慰謝料としてその位貰わないとね。それと、来月からというのも優しさだよ。いきなり値上げなんて心の優しい私にはできないからね。

「ふ、ふざけるな！そんな金払えるわけがないだろう」

公爵の顔が真っ赤になっている。そんなに、驚くころだろうか？だけど、払う 払わないの問題では無いのだよ。

「ならば、次女を見捨てるんだな。私は、善意で一般市場には決して出回らない薬を提供しているのだ。値段でとやかく言うくらいなら、買わなければいい。それに…長女や三女が私に手を出してきているのに、なぜ私が報復しなかったかお考えになった事がありますか？」

「いいえ、どうせ公爵家の権威に気が付きて 恩でも売ろうと思っただけでしょう」

そ、そりゃ天地がひっくり返ってもあり得ないぜ 公爵夫人。確かに、あんた等の権力と金は偉大かもしれないけどさ。こつちが売ろうとした恩に対してあんた等が何をしたか覚えているのか。

「ははは、公爵夫人は冗談がうまいですな。残念ながら、あんたら

に恩を売ろうなどサラサラ考えてない。金ずるは、生かさず殺さずが一番なのだよ。鎮静剤の値段を上げる口実にする為だよ。最初に合意した額から急に変えるというのは、私としても本意でね。なんせ、こちらが約束を破ったみたいになるからね。まあ、子供の責任は親の責任と思って受け入れてくださいなね」

私が、話し終わると公爵夫人が何やら考えている様子だ。

「……分かりました。次回以降は、2倍の額を用意しましょう」

おお！物わかりがいいですね公爵夫人。

「カーリー又！」

公爵が止めに入るが、公爵夫人の腹は決まっているようだ。やはり、こうも簡単に値上げに応じるとはね…怪しい。

確か 長女は、トリスタニアの王立魔法研究所の研究員だったな。となれば…鎮静剤の研究がされている可能性が高い。エルフのチーターが作った薬が ただの人間に完全解析されとも思えないが…薬の1/10の効果でも発揮するものが開発されれば、金ずるが無くなる可能性があるね。

後で、手を打っておくか。

「いやー、お話が速くて助かります。次回以降は、よろしくお願ひしますよ」

「この守銭奴が」

ボタン

公爵が私に文句を言って、夫人と一緒に退出していった。

二人が退場したのをみて、ビダーシャルにメールを打った。内容は、件の鎮静剤の成分を毎回変えて欲しい。それが無理ならば、”現在の症状を治療”と”新しい病気を植え付ける”その両方を実現する魔法薬を作ってくれとメールで送信した。

これならば、薬の解析はほぼ不可能になるだろう。

まあ、明日にならないと帰れないようだし。とりあえず、部屋に行つて飯でも作りますかな。

「晩御飯は、何が食べたいかい？ティファニア」

「レイアさんが作ったものなら何でも」

何でもか…おつし！公爵家の高級食材を使いまくろう。食材もおいしく頂いてくれる人に食べられた方がうれしいだろうからね。

その後は、執事に部屋と厨房を案内して貰いました。

部屋は、ティファニアと同室でした。別々の部屋にされるかなとも思ったけど、監視の意味を込めて面倒な人物を一か所に纏めたのであろう。まあ、温かいベッドで寝られるなら私はどっちでもいいけどね。

後、安全対策のために部屋の方に何か所か手を入れた。監視用の覗き穴をすべて潰して、壁の間をすべて鉄に錬金しておいた。これで

よほどの使い手以外は、窓かドア以外からは入れないはず。

長女の件や三女の件は、解決するまでには至らなかつたけど…次回以降は、薬代が倍になるからそれで我慢しよう。

翌朝。

さて、公爵からさつさとお金を貰って、撤収するでしょう。タイプアニアを起こしてから、朝食の準備でもするか。

「だんだん 主夫が板について気がする」

本来ならば自堕落な生活を送ろうと思っていたのに、昔の理想図とは大きく外れてしまった。

コンコン

部屋をノックする音が聞こえる。

こんな朝早くから、招かれざる客人の部屋を訪れる珍客など碌な人物であるはずがない。こういう場合は、この手に限る！

「入ってまーす」

おっし、これで完璧。

コンコン

「だから、入ってるって！」

・
・
・

「開けますよ。失礼します」

ガチャリ

人が『入ってます』と返事をしているのに扉を開けるとはどういう事だ。これが公爵家での教育だとも言うのか。もう少し、世間一般的教育とした方がいいと思います常識的に考えて。

扉の先には、案の定 会いたくない人物が…ルイズの欠点を全て取り払い美德で埋め尽くしたかのようなカトレア嬢が立っていた。普通、会いに来るか？

「お邪魔してもよろしいですか？」

「よろしくないですが、どういったご用件で？後、色々と不味いでしょう。人妻がこんな早朝から男性の部屋を訪れるのはね。私も既婚者なもので、どうぞと軽々しく言える立場ではないですよ」

そうですね。本来なら今この場で密会？をしているのだから非常にまずいのですよ。

「私は、婚約はしておりますが、結婚はしておりません。ですから人妻でもありませんので問題ありません」

・
・
・

それそれで問題でしょう。いや、もう公爵家の厄介事は勘弁して欲しいんだよ。どれだけ、私が迷惑していると思っっている。お前さん、エスパー並に鋭いなら今の私の心境を察してくれよ。

「おはようございます レイアさん。お客さんですか？」

良いタイミングでティファニアが起きてくれた。これを機会に追いつ出すぞ。私達は、これから出発の準備がありますので的なる事で逃げ切る！

「悪いけどティファニアさん、おいしいお菓子を持って来たの。お邪魔してもよろしいでしょうか？」・・・(涙)

「お菓子ですか^^はい、いらっしやいです！」

こゝこやつ出来る！私を懐柔するのではなく、落としやすいティファニアを狙って来るとは汚い。

公爵家の客室にて。

ムシャムシャムシャ

横でハムスターみたいにクッキーを食べているティファニアがおります。そして、目の前にはカトレア嬢が座っている。

「初めまして、カトレア嬢。一体、どういったご用事で？」

「お久しぶりです。レイアさん」

空気読めよ。やはり、公爵家の娘とあって食えない性格してるわ。中身は、きつとヘドロのようにどす黒そうだしね。

「今、”腹黒い”とか”どす黒い”とか思いませんでした？」

「その通りですが、何か問題でも？」

カトレア嬢は特に気にしたような感じもなく、穏やかな雰囲気をしている。

「……まずは、私の病の件 ありがとうございます。それと、両親とエレオノールとルイズの件申し訳ありません。私が言っても聞いてもらえなかったので」

「別に病の件も、長女と次女の件もお気にせず。金の為にやったことですから…後、謝られても困りますよ。結果的に止められないのならば 何の意味もない。私からすれば、『私は止めただけど無理でした。だから私は無罪です』としか聞こえませんか」

さあ、さっさと帰りなさい。公爵一家は、何かとも問題を持ってくるから大嫌いなのだよ。当然、カトレア嬢も含めてね。

「決してそういった事では、ありません。私は、ただ貴方にお礼を言いたかっただけです。ありがとうございます…あの時来てくださったエルフの方にもお礼を伝えていただけますか？」

ビダーシャルにね…まあその程度いいか。

ピロピロピロ

『ありがとうさん、はえがかあさん

PS：今度一個シルシ譲ってくれ。シンパシーをキボン』

ビダーシャル宛てにメールを作成し、送信と@@

「たった今、伝えた。用件は 済んだようだし、おかえり願おうか」

これでああなたの願いは叶えましたよ。無条件で叶えてあげるなんて、滅多に無いのだから感謝して欲しい。

「レイアさん、レイアさん…それ食べないんですか？」

じゅるり

・
・
・

折角の、雰囲気台無しだ。私が手を付けていないお菓子が食べた
いと！いいですとも。もう好きなだけ食べてください。

クッキーをティファニアにあげてから、カトレア嬢を部屋の外まで
送って行った。

「可愛いお嫁さんですね」

「ええ、自慢の妻ですからね」

色々な意味で最凶ですからね。

「もう、会う事は無いと思いますが お元気で」

「そうかもしれませんね。ミスタ・ヴェーグルもお元気で」

カトレアと別れてから、部屋でクッキーを貪る食欲魔人の為に朝食を準備した。その後は、執事から薬とお金を交換し、帰ろうかなと思った時に厄介事に巻き込まれた。

公爵家の中庭周辺にて。

私とティファニアが荷物を纏めて、帰ろうと中庭から門へと移動していると、何やら池の方角が騒がしい。なにやら、サイトがルイズをつれて暴れている…。

おいおい、カンダールヴの力を平民相手に使ったら相手が怪我するだろう。というか、何人が怪我をしているぞ。まあ、公爵家の人間な何人 怪我をしようが私達には関係ないけどさ…この時代の平民にとって、怪我って結構キツイにね。なんせ、衛生状況が最悪の一步手前位の世界だ…どのような雑菌が蔓延っているか分からないのだからね。

「ティファニア、今日はお金に余裕もできたし、どこか食べ物がおいしい物があるところに行こうか」

給料日？位は、おいしい物食べてもいいよね。現ナマで、数万エキユーとか財布がほっかほっかだよ。

「はい！でしたら、お魚料理がいいです」

魚か…ならば海の方の村で郷土料理でも食べようかな。もしくは、自ら海に潜って漁でもするかな。

「だったら、刺身にしよう」

「どけーーーーー！！」

私が今日の献立を考えていると、猛スピードで背後からルイズを抱えたサイトが私たちの横を通過していった。だが、ティファニアとのすれ違いざまにルイズとティファニアが持っていた荷物が僅かに接触した。そのせいでバランスを崩して転倒しそうになった。

ガシャーーン

「きゃっ」

私は瞬時にレビテーションを使い、ティファニアの転倒を防いだ。しかし、ティファニアに持ってもらっていた お弁当が辺りに散らばっていた。

「何とか間に合った。ティファニア大丈夫？」

念の為、怪我は無いと思うが、指輪の力を使いティファニアに治癒を掛ける。

「はい、でも持っていた荷物が…」

ティファニアがもったいなさそうに見ている…

っは！

「絶対に拾って食べちゃダメだよ！！また、作ってあげるから」

「え…あ、当たり前じゃないですか。そんな食いしん坊さんじゃないですよ」

いや、貴方今…『え』とか言ったでしょう。後で、ちゃんと作り直してあげるから今は我慢してね。

ボキボキ

さて ティファニアを落ち着かせたところだし…少し、あのアホどもとO・HA・NA・SHIつけてくるからさ。まさか、私でなくティファニアを狙って来るとはね。偶然かもしれないが、さすがに許せないよ。

ガリガリガリガリ

つり橋が上がる速度とサイト達に移動速度から逃げ切れないと判断し、どう料理してくれようか考えていると…つり橋の鎖が変色し始めた。

これは…そうだ！確か、原作じゃカトレア嬢が鍊金で助けるんだっ

た。

だが、土のスクエアの実力を甘く見ないでもらおうか！カトレア嬢の系統は知らんが、遠距離からの錬金など 私の錬金の前には無いに等しい。

「錬金」

私は、鎖を鉄に錬金し直した。念の為、錬金した後に固定化を掛けておいた。カトレア嬢が今も錬金を頑張っているかもしれないが、ご愁傷様である。

サイト達は門の前に追い詰められて、公爵夫妻と使用人達に囲まれていた。

公爵と公爵夫人相手では、サイトでは勝つ事は不可能であろう。魔法も実力ならば、私より上であろう二人だからね。だが、公爵にくれてやる前に私にフルボッコさせてもらおうか

「公爵様、申し訳ありません。彼を再起不能にするのを私に譲ってもらえませんかね」

「駄目だ。あいつはこの儂の手で殺さねば気が済まん」

娘に手を出した不届き者を肅清したいか…分からんでもないけどね。一応、娘が居る身としてはね。

「私も嫁がね、あれのせいで怪我をするところだったんですよ。魔法を使うのが間に合ったから幸い無事でしたけど、代わりに弁当が駄目になってしまっただけ。是非そのお礼をさせてもらいたいですよ。ですから、どうぞでしょう…あれを半殺しにさせてもらえるなら

ば、今回もらった額の半分を置いていきましよう」

公爵にとってすれば、娘に手を出した不届き者を差し出すだけで大金が戻ってくるのだ。出過ぎかもしれないが、それでも構わんさ。ティファニアの指輪と薔薇族の武器の生きた実験台になってもらうのだからね。

「…よからう」

さて、公爵から殺人許可も貰ったので公開処刑と行きましようか。私は、アーベより授かった槍：必尻の黄薔薇^{ゲイ・ボウ}を右手に・・・ラオウから授かった短剣を左手にサイトと向き合った。

「いやー、先ほどは妻が世話になったね。是非、その恩返しをさせてもらおう。もし、私に勝つ事ができれば、ここから逃がしてやつてもいいぞ」

まあ、私が負けることはないだろうし…万が一私が負けたとしても公爵がお前を逃がさないよ。最初から君は詰んでいるのだよ。

「おもしれえ。俺の居た国には、三度目の正直ってのがあってな…三度目には勝てるってことだよ。それに、俺は気付いたんだよ」

なんか意味違うよね。それ。それに、二度あることは三度あるという諺もあるのだよ。

「ほほう、何に気付いたのだ？」

ふむ…私の魔法の秘密にでも気が付いたか。だが、たとえ気づいたとしてもメイジでないサイトにはどうしようもあるまい。

「今までお前と闘う時は、必ず誰かと闘った後で俺が疲弊していたという事だ！だが、今回は違う。俺の全力を見せてやるぜ この卑怯者が！！」

言われてみないと気付かなかったぜ。確かに 一度目は、ギーシユの後にフルボッコにした。二度目は、アホリエッタとウエールズの後にはフルボッコにした。相手から見れば私は卑怯者に見えるという事か。

実に不愉快だ。こっちは、善意でサイトを生存させてやっているというのに何様のつもりだ。それに、今回私が勝ったとしても指のせいにする可能性があるな…。

「ティファニア、ちょっとこっちに来て」

私は後ろで観戦しているティファニアを呼んだ。

「なんででしょうか？レイアさん」

「実はお願いがあるんだ。ごみよごみよごみよ……」

私は、ティファニアにサイトの手の怪我を無かった事にして欲しいとお願いした。当然、ティファニアは嫌がったが…晩御飯にデザートをつけることで手を打ってもらった。

ソクリ！

全身に悪寒が走った。ティファニアが能力を使うと寒気がするぜ。

「敵に塩を送るのは、好きではないのだが…これで全力がだせるだろっ」

「はぁ？何言つてやがる」

サイトは指が完治していることに気付いてないようだ。まあ、いいか。では、公開処刑を始めようか。

「ハンディキャップだ。攻撃魔法は使わないでやろっ」

クイクイ

私は、中指を立ててサイトを挑発した。

「人をなめるなよ！！」

サイトがガンダールヴのルーンを輝かせて突っ込んできた。自分が勝つ事を微塵にも疑ってないようだ。

カンカカカカカン

ガシガシガシ

カーーーン

サイトの猛攻を短剣と槍を駆使して、捌いていく。流石は、ガンダールヴだな。武器の使い方が秀逸だ。まあ、幾ら武器の使い方が優れていても…使い手が人間で且つ身体能力が一般高校生Lvじゃ宝の持ち腐れだ。

「なんで攻撃があたらねーんだよ」

自分の攻撃が当たらないのがそんなに疑問なのだろうか。まさか、サイトは自分の攻撃が当たらないのは“相手が避けるせいだ”とか“防ぐせいだとか”そういつた馬鹿な思考の持ち主なのかな？そんな奴だったら、マジで困るな。

「そりゃ、お前が弱いからに他ならないだろう。それより、もっと頑張れよ。私に勝たなければ君のご主人様は結婚させられてしまうぞ」

サイトには、攻めてきてもらわないとね。サイトの体力がなくなってきたら反撃開始としよう。あいにくと、私の武器の扱う才能は魔法ほど無くてね。流石の私でもガンダールヴの前では技量負けする。だが、使い手が疲労しているならば十二分にやれるはず。なんせ、地力が違うからね。

「お前を倒して、必ずルイズを救い出す！さつさと、くたばれえええええ」

「ふっ」

残念だが、それは不可能だよ。私には、サイトの攻撃が手に取るようにわかる。【ブレイン】の応用で、サイトの電気信号をキャッチして反射的にそれに対なす動きを取っているからね。俗にいう、オートガードと言ったところだ。

ガンガンガン

打ち合うこと、数分後。

カーンカン

「はあはあ」

サイトが息切れを始めた。段々と、剣速も衰えてきた。それにしても、息切れ早いな。日頃、どれだけ特訓してないんだよ。

「そろそろ、遊びは終わりにしようか」

私は、サイトの攻撃を払いのけて一瞬の隙をついて間合いを詰めた。そして、サイトの右足を思いっきり踏みつぶした。当然、靴は鋼鉄仕様だ。

ベキベキベキ

「うああああああああああ」

骨が折れるいい音と共にサイトが悲鳴を奏でた。死なない攻撃にしてあげただけ感謝して欲しいものだ。

ヒューン

ガーン

サイトが足を踏まれながらも、デルフで私を突き刺そうとしてきた。当然、ナイフを使い払いのけた。それにしても、私の殺さずの優しさに対して殺意で応酬か…ひでえーな。

「君は本当に最低だね。私は、君を殺したくないと思っているのに…君は違うようだね」

「があああつああああ！！足をどけるー」

そういえば、まだ踏んでいたか。忘れていたよ。それにしても、人に物を頼むのに命令形か…。全く、教育がなっていない。ここは、今後の為に私がサイトの再教育してやろう。感謝しろよ 三女。

グリグリ

メキメキバキバキ

私は、足に重心を掛けてサイトの足を潰した。流石のサイトの痛いようでも仰向けになってのた打ち回っている。

カーンカンカンカーン

サイトがデルフを振り回して、私を遠ざけようとするが 槍を使い難なく薙ぎ払う。痛みのせいで攻撃が単調過ぎる。

「人に物を頼む時の態度を教えてやろう」

グサ！

私は、必尻の黄薔薇ゲイ・ボウをサイトの右腕に突き刺した。これでサイトは、地面に物理的に釘づけだ。

「ぎゃああああああ」

ブシャー

「サイトーーーー！！！」

サイトの右腕から血が噴き出すように流れ始めた。それを見てルイズが叫んだ。まあ、外野が叫んだところで止めないけどね。

紹介が遅れたが：この槍は、サイトにとって将来的に死活問題になりかねない性能を持っているのだ。最低の男性殺しの武器と言っても過言ではないだろう。この槍でダメージを受けた男性は、男のシンボルのサイズが受けたダメージに比例して減少する最低の兵器だ。女好きの奴にとっては地獄になるだろうね。

（軽症で、男のシンボルのサイズが 現在のMAX値から5%減少する。重症で40%。致命傷で70%といった感じで減少する。サイズは限りなく0に近づくが0になることは無い。

減少した男のサイズは、この武器が破壊されない限り戻らない。）

しかし、このままでは出血多量で死んでしまうな。：そうだ！武器に突かれた状態で指輪の力を使って肉体を再生させたら面白いんじゃない！

キューーーーーーン

「あああああああああ！！ 痛い痛い痛い！！！」

再生された箇所から槍の歯に当たり切断されていく。当然、踏み潰している足の方も治りそうになった途端にさらに踏みつぶして遊んでいる。それにしても、さっきから痛い痛いというさいな。人がせつかく治療してやっているのに少しは黙れと言いたい。

「痛いのは当然だよ…痛くしているのだから。では、改めて人に物を頼む時は 何ていってみよう？」

グリグリ

ザシユザシユ

踏んでいる足と突き刺している槍でサイトをなぶった。

「あ…あじをどげろ。ゲス野郎が…」

・
・
・

ヒヨイ

グザ

「うあああつあああああ」

私は短剣でサイトの左足に突き刺した。当然地面まで貫通させたよ。ついでに外れないようにガツチリ固定させた。

「君が変な事を言うから、思わず左足にナイフを落としちゃったじゃないか…。はあ、仕方ないから君の剣を使わせてもらおうよ」

私はサイトからデルフをもぎ取り、サイトの左手に突き刺した。念の為、デルフに私の正体がばれないように手の周りをA・Tフィールドでコーティングしておいた。

サイトの悲鳴が聞こえるかと思ったが、どうやら痛みあまりに気絶してしまったようだ。ならば痛みで再び目覚ましてやろう！私は指輪の力を全開にしてサイトの傷口を元通りに戻そうとした…当然、突き刺された部分は再生された個所から再び切断されていく。

「ぐっはああああああ」

もう、サイトの顔は鼻水と涙でいっぱいだ。そして…こいつ漏らしてやがる。

「おはようサイト君。戦いの最中に寝るのは良くないと思うよ。…それで、私に何か言う事があるんじゃないのかい？」

グリグリ

「ギイイイ！」「…べん」

ベゴン

私は、顔面に足蹴りを入れた。当然、鼻はおれて歯のアチコチが欠けた。実にイケメソになったじゃないか。これならオークの仲間入りも夢じゃないぞ。

「ぐあああああ」

「駄目だよ。もっと誠意を込めて言ってもらえないとね」

もっとも、サイトが誠意など込めても許す気なんてないけどね。どうせ、その場限りの誠意だ。こいつは、そういう人間だからね。

「もうやめて!!」

サイトを続けて顔を整形してあげおうかと思つたら、ルイズがサイトに抱き着いて止めに入ってきた。…一緒に蹴り飛ばしてもいいんじゃないね?これ!!と思わず考えてしまったよ。

「なぜだね? 私は、公爵からこいつの命を大金で買ったのだよ。まさか、公爵家の三女ともあるうお人が…私が公爵様からかった商品を強奪しようなんてあるうはずがありませんよね? そうですよね? 公爵様公爵夫人様」

私は公爵の方を話を掛けてから、ルイズの方を見た。

「そ、それは…」

困つたら だんまりですか…。これだから、糞餓鬼は嫌いだ。それに、せつかく私がサイトをイケメソにしてあげようと思ひ整形していた所を邪魔されて気分が悪い。だから…

キューーーン

私は、指輪の力を使いサイトの再生能力を更に高めた。サイトの悲鳴をこだまさせた。痛いだろうね…治つた所からまた切断されて、また治される。

「ルイズー! ああああああ」

「お願いだから、もうやめて」

はははは！止めないに決まっているじゃないか。なんせ、そいつはまだ私に誠心誠意を込めて謝ってないじゃないか。

だけど、心優しい私は妥協案を出してあげよう。

「10万エキユー…その額でこいつの命を売ってやるう。君にこの額が払えるかな？」

「払うわよ！だから、これ以上サイトを賣めないで」

…え！ 払うの！？

半分冗談だったのだけど。それに、学院でも金欠気味の三女がそんなにお金持ってたっけ？

「当然、支払いは即金だろうね？」

「い、いつか払うわよ」

確実に踏み倒すね。返済能力なんてなくせに威勢だけはいいのだから困るぜ。もしかしたら、公爵に泣きつく算段かもしれないが、恐らく公爵は払わないだろうな。

「ざん「私が、払います」「…」

カトレア嬢が外野から声をかけてきた。

まさか、ここでカトレア嬢が出張ってくるとは予想外だ。病弱なら部屋で大人しくしておけて。

「失礼ですが、お金はお持ちで？」

「ええ、婚約時の結納金があります。それでお支払しましょう」

チツ

どうやら本当に持ってそうだな。それにしても、無条件で女性を味方につけるその主人公体質：実に気に食わん。

「いかんぞ カトレア！ こんな奴にそんな大金を使うなど許さん」

「考え直しなさい」

お！いいぞ 公爵と公爵夫人。癩だけど、今回だけはお前の味方だ。そうそう、こんな下種に10万エキユー何てマジでもつたない。

「あれは、私のお金です。それを妹の為に使って何がいけないのです」

いい姉を持ったね。妹の為に、ここまでしてくれる姉なんてあまりいないと思うぞ。少々、不完全燃焼だが：お金の為だ 我慢しよう。

「まあ、少し残念ではありますが……。お金が貰えるならば私はそれで構いません」

私は、サイトに掛けていた指輪の力をカットした。当然、今までは過剰なまでの治癒でサイトの状態を保っていたがそれが切れたことよって、サイトは確実に死へと向かっていった。まあ、そんな私の知ったことではないので、サイトに突き刺した槍と短剣を回収した。

槍を抜く際もあえて傷口が広がるように無理やり引き抜いたぜ。これで、サイトのナニはもはや使い物にはならないだろう。

「それでは、お金を受け取りに行きましょう。先導していただけませんか カトレア嬢？」

「わかりました」

カトレアは、家の方へ歩いて行った。

私がティファニアを呼ぼうと外野を見ると、地面に風呂敷を広げてお弁当を食べている子が居た。

・
・
・

確か、お弁当はバラバラになったはず…

「美味しかったかい ティファニア？」

「はい、とってもおいしかったです。特に だし巻き卵なんて最高です」

ふむふむ、それは良かった。頑張って作ったかいがあったよ。

「それはよかった^^。それで…どうして、駄目になったはずのお弁当がここに？」

「勿体なかったので、落ちた事を『無かった事』にしました」

・
・
・

能力の無駄遣い　ここに極まる。

「なるほど　なるほど。それで…私の分はどこ？」

キヨロキヨロ

『無かった事』にしたならば、二人分のお弁当があるはずだ。それなのに、なぜか！ここには　空箱しかない。

「レイアさんが、頑張って戦っていたので　私もお弁当を食べるのを頑張りました　てへ」

てへ！じゃないよ。意味が分からないよ！

でも、かわいいから許すけどさ。

私は、ティファニアを連れてお金を受け取りに公爵の屋敷へと戻った。念の為、去り際にサイトを早く治療しないと死ぬぞと三女を進言しておいた。幸い、ここは天下の公爵家だ。水の秘薬位は貯蔵してあるだろう。

お金を受け取った後は、ゼルエルを使い実家へと帰った。帰り際にティファニアが魚料理を食べたいと言っていたのを思い出し、海岸沿いの町で一泊してから帰ったよ。新鮮な魚はやはりうまかったで

す。

公爵家に行つて、なんやかんやで色々あつたけどサイトもボコボコに出来たし、お金も予想以上に儲かつたし、武器の性能も試せたとし、総合的に見ればよい旅であつた。

次は、戦争だ。準備は欠かさぬようにせねばならないな。

Side サイト

馬車という狭い空間の中で年頃の男女が二人いれば、そりゃ喜びもするさ。俺だつて思春期の男だ。

だが、もしシエスタに手を出せば確実にルイズに殺されるだろう。現に、この馬車の屋根が見事に吹き飛ばされたのだから；；

ズキン

「くっ」

「大丈夫ですか サイトさん」

あのゲス野郎のせいで無くなった指が痛い。

今、思い出しただけでも実に腹立たしい！ 俺たちが王女殿下を救出する直前に現れて手柄を搔つ攫つていったんだ。しかも、幾らゾンビだからと言って王女殿下の思い人を躊躇いも無く殺すなんて信

じられねー。

何のために、救助隊の人たちが犠牲になったかと思っっているんだ。王女殿下を悲しませる結果になったら意味ねーだろう。

「ありがとうシエスタ」

まあ、怪我の功名というわけではないが…ルイズやシエスタがいつも以上に優しく接してくれる。おかげで、手元が狂ったといってシエスタの胸に手を当てても怒られなかったりするんだよな。

ガタン

シエスタと話していると急に馬車が止まった。

不思議に思いルイズ達の馬車を見てみると…信じられないくらい的美少女が前の馬車にのるルイズ達を話しているのが見えた。ここから見てもはつきりとわかる…あの胸のサイズはケシカラン！

足元に荷物があるから、恐らくヒッチハイクと言っやつなのだろう。これは、実に楽しい旅になりそうだ。

揺れる馬車で何かの拍子で手元が狂って胸を掴んでしまう事故が起きても仕方ない。うむ、馬車のせいだから仕方がない。

だが、そんな俺の計画も彼女の後ろに立っている野郎を見た瞬間に消えてなくなつた。

馬車の中にて。

「初めまして、ティファニア・ド・ヴェーグルです。職業は、お嫁さんです」

は！？

信じられるか…今で見たこともないような美少女が現れたと思ったら既婚者だったんだぜ。しかも、その婚約者というのが…ゲス野郎ときたもんだ。まさに、驚愕の事実だ。

だが…俺の目はごまかせないぞ。俺もこの世界に来て少なからずこつちでの常識を学んだ。彼女は、マントもしていないから恐らく俺と同じ平民なのだろう。

と言う事はだ！ 真実は一つ！

「けっ、てめえみたいな下種ゲスをこんな純粹そうな子が慕うわけねーじゃん。どうせ、金に物を言わせたんだろ。最低だな」

どうやら図星のようだな。あいた口がふさがらないとは…。待っていてくれ、今すぐに俺が君を救い出してやる。

「ふふふふふふはっはっはっはっは」

突如としてゲス野郎が笑い出しやがった。相変わらず、胸糞悪い笑い方しやがる。

「なに、気持ち悪い笑いしてるんだよ。馬鹿じゃねーか」

居るんだよね。こういう精神異常者って…本当にこの世界の貴族は腐った連中ばかりだ。こんな美少女を手籠めにするなんて人としてどうかしてるんじゃないかねーか。

「サ、サイトさん！」

止めるなシエスタ！ 今からこの害虫を駆除して一人の少女を救い出すんだ。そして、救い出された彼女は、きっと俺の事を…じゅるいり。

「サイト、<<自…」

ゲス野郎が何かを言いそうになって止めた。一体どうしたんだ。まさか、言語障害なのかこいつ？そりゃ、いい。

「レイアさん。私、この人 嫌いです」

…かわいそうに。きっと、ゲス野郎に無理やり俺の事なんて嫌いと言わせたのだろう。だって、彼女は俺に向かってあんなに笑顔を見せてるじゃないか。待っていてくれ！今すぐ助け出してやるから。

「感謝しろよ…楽しい空の旅を」

ドーーーーーン

「うわあああああ」

何が起こったのか理解できなかった。ゲス野郎が喋ったと同時に馬車から空に打ち上げられた！しかも…高い。

「くっそ！ 考えている暇なんてね！！ デルフ！」

「任せろ相棒」

俺はメイジじゃないから空を飛べない。だから、せめてデルフを使
つて落下時の衝撃を緩めてやる。ものすごい速度で地面が迫って
くる。大丈夫だ、ガンダールヴの力があればこの程度の高さ問題ない！

ズドン

グシヤ

「があああああああああああ」

何とか着地できたのはいいが、あ・・・足が…。

なんで俺がこんな痛い思いをしないとイケない。俺はただ、悪党か
ら女の子を守ろうとしただけなのに、なぜ俺が怪我をしないとイケ
ない！！ ふつう、怪我をするのは悪党のゲス野郎の方だろう。

覚えていやがれ！ この借りは、貴様の命で償ってもらうからな

「サイトさん！」

「サイトー！」

遠くから、二人の声が聞こえてくる。これで助かった。安心したと
たん目の前が真っ暗になった。

翌日、ヴァリエール家の門の前にて。

くっそ！ 間に合わなかった。橋が上がりきる前に出れるはずだったのだが…これも全て、俺らの前を歩いていたゲス野郎のせいだ。あいつさえ居なければ間に合ったかもしれない。

しかも、ゲス野郎が公爵と何か話した後にこちらを向いて歩いてきた。

「いやー、先ほどは妻が世話になったね。是非、その恩返しをさせてもらおう。もし、私に勝つ事ができれば、ここから逃がしてやつてもいいぞ」

何もしてないのに文句をつけてきやがった。やはり、貴族という連中は何処までも腐っているらしいな。妻が世話になっただ！？何言つたんだ、こいつ。

俺がいつ、彼女に何かをしたっていうんだ。被害妄想もいい所だぜ。ここまで来るともう病院でも手がつけられないんじゃないか。

まあ、そんな事はどうでもいい。

「おもしれえ。俺の居た国には、三度目の正直ってのがあってな…三度目には勝てるってことだよ。それに、俺は気付いたんだよ」

「ほほう、何に気付いたのだ？」

そう…俺はゲス野郎の秘密に気付いたんだ。

ガンダールヴであり、ワルドにすら勝った俺がギーシュと同じ学生のメイジに負けることが元々おかしかったんだ。そこで、なぜ負けたかをよーく考えたところ、答えは簡単だった。

「今までお前と闘う時は、必ず誰かと闘った後で俺が疲弊していたという事だ！だが、今回は違う。俺の全力を見せてやるぜ この卑怯者が！！」

いつも、俺が弱った所にやってきてたのだ。恐らく、こいつの実力はギーシュ程度だろう。ならば、俺が負ける通りはねー。魔法の実力はトライアングルらしいが…デルフがあるから、例えスクエアクルスの魔法使いでも怖くは無い。

「敵に塩を送るのは、好きではないのだが…これで全力がだせるだろう」

「はぁ？何言ってやがる」

彼女を呼び寄せたと思えばいきなり変な事を言ってきたやがる。敵に塩だ？意味が分からねー。

俺はな！ お前の事を早くぶちのめしたくてうずうずしてんだ！！

「ハンディキャップだ。攻撃魔法は使わないでやろう」

ブチブチ

あいつは、俺がワルドを倒したという事実を知らないらしいな。か

わいそんな奴だ。もう、泣いても許さねーぞ！

「人をなめるなよ！！」

一瞬でケリをつけてやる！

ゲス野郎目がけて全力で切りかかりにいった。

カンカカカカカン

ガシガシガシ

カーーーン

な、なんでなんだ！ ワルドですら捌ききれなかった俺の攻撃をこいつ全部捌いてきやがる。

「なんで攻撃があたりねーんだよ」

「そりゃ、お前が弱いからに他ならないだろう。それより、もっと頑張れよ。私に勝たなければ君のご主人様は結婚させられてしまうぞ」

くっ！

そうだ、俺が勝たなければルイズは家に幽閉されて結婚させられてしまう。そして何より…俺が公爵に殺されてしまう。そんな事あったまるか！！

「お前を倒して、必ずルイズを救い出す！さっさと、くたばれええ

えええ」

ガンガンガン

打ち合うこと、数分後。

カーンカン

「はあはあ」

一体、どんな手品だ。あれだけの攻撃を汗ひとつ垂らさずに防ぎ切りやがった。早い所けりをつけないと俺の体力がもたない。やはり、彼女を人質にゲス野郎には、早々に退場してもらおう。

もし、ゲス野郎が彼女を見捨てて俺を攻撃してくる可能性もあるが…：そうなれば、彼女を盾にして、一瞬の隙についてゲス野郎にとどめをさしてやる。そのくらいの体力ならまだ残っている。

だが、その為にもゲス野郎を引き離さないといけない。さつさと離れやがれ！！

「そろそろ、遊びは終わりにしようか」

デルフをはじいた瞬間に間合いを詰めれた。

ベキベキベキ

ゲス野郎が間合いを詰めたと思ったら、右足に激痛が走った。

「うああああああああああ」

イタイタイイタイイタイ

俺の足を踏んだまま、ゲス野郎はいつこうに足をどけようとしなくっそ！この際、俺の足はくれてやる。だから、お前はしんどけ！！

ゲス野郎の心臓目がけてデルフを突きだした。

ヒューン

ガーン

「君は本当に最低だね。私は、君を殺したくないと思っているのに…君は違つようだね」

何が殺したくないだ！明らかに殺意を持っているだろう。

殺意が無いと言つなら…

「があああつああああ！！足をどけるー！ー」

メキメキバキバキ

ゲス野郎がさらに体重をかけてきやがった。そのせいで俺の足の骨は既に粉碎され俺は骨の破片が肉を突き破って飛び出している。

なりふり構わずデルフを振り回す！

カーンカンカンカーン

「人に物を頼む時の態度を教えてやるっ」

え！？

さてよ、その手に持っている槍でどうしようって言うんだ。まさか、俺を殺す気か！？俺は、公爵家の三女の使い魔だぞ！俺に何かあったらお前の家なんてすぐに無くなるんだぜ。公爵家に逆らえばお前の嫁だってどうなるかしらねーぞ。

ゲス野郎がにやけた顔をして、手に持った槍を無情にも俺に突き刺した。

グサ！

「ぎゃああああああ」

刺された個所から血が噴水のように飛び散った。

ブシャー

「サイトーーーーー！！」

なんで俺がこんな目に合わなきゃいけない。俺がゲス野郎に何もしてない…いや、怪我ひとつさせてないのになんで俺だけこんな大怪我を負わなきゃいけない。

そう思った瞬間、ゲス野郎に貫かれた右腕と右足にいいようもない激痛が走った。まるで治った所を何度もえぐられるような痛みを…

「ああああああああああ！！ 痛い痛い痛い！！」

なんで俺が…きつと、また何か汚い手を使ったに違いない。本来ならおれがゲス野郎を見下ろしてみじめな姿をさらさせているはずなのに…くそ！！

「痛いのは当然だよ…痛くしているのだから。では、改めて人に物を頼む時は 何て試ってみよう？」

グリグリ

ザシユザシユ

だ、誰がためーの頼むかよ。例え、どれほど痛くてもお前に頭を下げるなんて死んでもごめん。そう…チャンスをつかがうんだ。ゲス野郎が気を抜いた一瞬をついてデルフで脳天をぶち抜いてやる！！

「あ…あじをどげろ。ゲス野郎が…」

・
・
・

ゲス野郎が手に持っていたナイフを俺の左足に突き刺した。

ヒヨイ

グザ

「うあああつあああああ」

「君が変な事を言うから、思わず左足にナイフを落としちゃったじゃないか…。はあ、仕方ないから君の剣を使わせてもらおうよ」

ゲス野郎がどさくさに紛れて俺の手からデルフを取り上げた。そして、俺の左腕に突き刺した。

「ぐっはああああああ」

体中が熱い。デルフを取り上げられた瞬間に、ガンダールヴの力で緩和させていた痛みが一気に襲ってきた。

目の前が真っ暗に…

「おはようサイト君。戦いの最中に寝るのは良くないと思うよ。…それで、私に何か言う事があるんじゃないのかい？」

俺の意識を失わせないように、適度に痛みを与えてきやがる。ぜ、絶対に10倍返してやる！だから、その為にも一先は 誤ったふりをしてこの場を乗り切ろう。

グサ！

「はあ？何言つてやがる」

彼女なら、お前の後ろで風呂敷を広げて今まさに食べようとしているだろう。頭おかしんじゃないか。まあ、そんなことはどうでもいい。彼女の目の前でお前の無様な姿をさらしてやるぜ。

「ギイイイ！」「・・・べん」

謝ったんだから、さっさとどけ！！全身がいてえーんだよ。ゲス野郎に文句を言おうとしたその時…目の前に迫りくる靴があった。

ベコン

「ぐあああああ」

人様がゲス野郎に謝ってやったというのに何様だこいつ。お前の様なゲスがいるからこの世界がよくならねーんじゃねーか。もっと、俺の様な地球代表を見習えよ！

「駄目だよ。もっと誠意を込めて言ってもらえないとね」

誠心誠意だ！ 謝ってやっただろう。

はあはあ、もうだめだ・・・目の前が真っ暗になってきた。横を見るとルイズがいた…助けてくれよルイズ。こいつ頭が逝っちゃってるんだよ。話が通じないんだよ。

また、全身を激痛が走った。今度は両手両足だ。この突然の痛みは…もはや魔法以外勸化られない。このゲス野郎、やっぱり魔法をつかってやがるんじゃねえーか。

痛みを超えて最後の一声で助けを求めよう。

「ルイズー！あああああああ」

主人公は、公爵家へお礼参りする（後編） （後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

サイト達は、あの後カトレアの手引きによって屋敷を抜け出したという事にさせていただきます。これで、指も元通りになり一応原作通り？に話を進める予定です。

今後のレイアの行動は、最終的に戦地に行くのは変わりませんが。その道中をどうしようか考え中です。

案としては

？「空軍ルート：サイト達を同じく空軍に参加します」

？「学院ルート：学院襲撃事件にレイアがお邪魔します」

どちらになるかは、気分しだいという感じです。

次話投降前に、ここで過去分の全話に対して誤字脱字チェックを掛けようと思います。その為次回更新は：4月末がゴールデンウィークあたりになるかと思えます。

主人公は、人命救助をする。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を生きがいに作者頑張っております。

本話は、?の学院襲撃ルートです。

?の方のルートは、番外編として書き終わり次第活動帆船に掲載いたします。

別件のご報告

前話(50話)のサイトside を追加いたしました。よろしければ読んでいただけると幸いです。

そして…過去話を見直すとか言っておいて

見直しに入れない作者がここに居る。

過去を振り返るより

前に進もうかなとかっこよく言ってみる@@

4/24(日)

活動報告に空軍ルート追加しました。

主人公は、人命救助をする。

公爵家から五体満足で帰還したレイアです。

今は、公爵家の一件から月日は流れて…まさにアルビオンとの戦争直前です。今更ながら…冗談無しで学院の出席日数がレッドゾーンに入っております。本来なら、公爵家の一件後に学院に復学しようと思っていました。

だが、当然と言うべきか…ティファニアを実家に野放しにして学院生活を送る事など出来るはずありません。下手をすれば、地球からよくわからない薬物を持ってきて実家がバイオハザードも真つ青な展開になりかねないからね。

そうならない為に、アミバに面倒を見てもらいたかったけど…当然のごとく拒否されました。秘孔の研究とかで『忙しい』と断られましたorz 水銀橙にもお願いしてみたところ…『面倒だから嫌よ』と断られてしまいました。

と…そんな訳でティファニアの面倒を見る為に休学中です。一応、私も何の対策も取らなかつたわけでは無い。ティファニアから目を離せないならば私の傍に居られるようにすればいい！と考えたんですよ。そこで この休みの間に ティファニアを学院に入学させる為の手配をしていたんですよ。

今回の入学の手配に当たり、以前にマザリーニ枢機卿から貰った身分証が大いに役に立ったよ。本来ならば、身分不明で過去の経歴が無いような人物を貴族の子供を預かるような重要機関に入学させる事など不可能に近いだろう。もちろん、タバサのように他国の王族

の様な権力者なら話は別だろうがね。

そういう事で、戦争が終われば私はティファニアと一緒に学院生活が始まるというわけだ。ティファニアの入学時期は、原作より少々早い？がまあ問題なかるう。

前置きはこの位にしておいて、今は父上と母上、アミバと水銀橙、ティファニアを交えて家族会議中です。今回の議題は、諸侯軍として参戦するかしないかである！ちなみに：結論は言うまでもなく決まっている。だが、あんなアホの為に働くかと。

「では、父上母上。うちは、戦争には参加しない方向でいきましよう」

「異存はない。だが、軍役免除税が課せられるな」

ふっ、何を言いますか父上。そんなはした金など幾らでも出せますよ。なんせ、カトレア嬢が大金でサイトの命を買ってくれましたからね。そのあぶく銭を使えば たかが男爵家の免除金など何十回でも払えますとも。

「でも、私のレイアちゃんに難癖つけてくる王家の為に金を払うのも、釈然としないわよね」

そうですね。流石、母上だ。いい事言います。

確かに、いつも難癖をつけてくる王家の為に税金以外でお金を払わねばならないなんて納得がいかない。まあ、逆に考えれば金さえ払えば戦争に参加しないでもよいという事だ。

「まあ、今の我が家の財政を考えれば免除金など はした金ですよ。その程度のお金で父上と母上の安全が買えるのでしたら寧ろ安いものです」

戦場では、領地と違ってタンクが使えない。そうなれば、万が一父上と母上がスクエアクラスのメイジと戦いになった際に命の危険がある。それに、戦争に参加するとなれば王家のアホに無理難題を課せられる可能性もあるしね。

「ママ達の心配をしてくれるのね。ありがとう。……それでレイアちゃんは、戦時中は何処に行く予定なのかしら？」

・
・
・

はははは、やはりこの展開なのね。

流星は、十数年私の母をやっているだけの事はある。行動がバレバレだったか。

「ちっと、花を摘みに…アルビオン辺りまで行こうかなと」

アルビオンまでお手洗い…じゃなかった メイジという花を摘みに行くんだよ。陰でこそそこそ動いているのは本当に申し訳ないと思っ
ているけど。これも家族と領地を守る為なのですよ。

後、趣味の人体実験の素材集め e t c

「そうなの、それは大変ね。だったら、景気づけに美味しいものが食べたいわよね。」

…テファちゃん、レイアちゃんが テファちゃんが淹れた美味しいお茶が飲みたいそうよ」

…え！？

なにその新手的拷問。 自白剤より凶悪なんですが…というか自白を通り越して死ぬわ！

むしろ、すでに何度か死んだぞ。

「えへへ、そうなんですか。 私頑張りますね！ すぐに作ってきますから待っていてください」

ティファニアがスキップをしながら厨房へと消えて行った。

な！なんて事を！母上は、笑顔でいるが大層ご立腹なようだ。いつも、危険地帯を闊歩する息子を心配する気持ちはわかるけど…。むしろ、戦場に行くより今この場に居る方がマジで危険。すでに私の脳内でアラームが鳴っている。

ガシガシ

私が逃げ出そうとした瞬間、父上と母上に両腕をホルドされた。

「レイアよ…私達は、レイアがやるうとしてしている事を止めることもしない。だが…一つだけ言うておく。もう少し、私達を頼りなさい」

「そうよ。これでもママ達 強いんだから。 本当ならレイアちゃんについてアルビオンに行つてあげたいわ。でも…そうすればレイアちゃんがきつと困る。だから、私達はレイアちゃんがいつでも帰っ

てこられるようにここを守っているわ」

グズン

やっぱり、いい両親だ。本当にこんな子に育つてごめんね。心から両親に謝った…そして、この世界で両親が未永く幸せに暮らせるように これからも一層頑張ろうと心に誓った。

…あー、そろそろ両親離してもらえませんか？

「でもね…ママ達に心配をかけるレイアちゃんには、お仕置きが必要だと思うのよね」

「うむ、そうだぞ レイア。私たちの言葉を忘れないように、心に刻みなさい」

いや、心に刻む前に命が刻まれるって！！

は！もしかして、父上母上勘違いをしているか！

私がティファニアの料理を食べて生きているのは、愛の力とか考えているんじゃないか！もしも そうだとすれば大きな間違いだ。冗談無しで、マジで死んでいるからさ。私がいつも蘇えるのは三途の川の手前でAU様が助けてくれるからなんだよ。

確かに、最近の死亡率が7割程度になり毒の耐性がついてきたと思うよ。そのおかげで 段々と人間離れしてきたと思うよ…やっぱり、使途の力の副作用で自己進化でもしているのかな？

そのせいで、最近では普通の調味料じゃ少々物足りないかな？とか

思い始めたりもしたよ。でもさ…死亡率7割って正直かなり高いんですよ。だってさ、スパロボの敵の命中率なら ほぼ外れ無しの確率だよ。

私が両親に誤解を解こうとした瞬間に…

「父上母「お待たせしましたレイアさん」…上」

キヤーーーーー！！

ティファニアがまぶしい笑顔でお茶を持ってきてくれた。

「（ ^ ^ ）ー旦 毒茶どうぞ」

私が啞然として口を開けているとティファニアが何を勘違いしたのか、お茶の様なものを口に流し込んできた。

AU様：今度三途の川で愚痴を聞いてくださいね。今、逝きます！！

後日。

アルビオン戦へ参加準備を終えて、トリステイン魔法学院に来ているレイアです。

ちなみに アミバ、水銀橙、ティファニアを乗せた船は現在アルビオン目指して進行中です。そして、なぜ私だけここに居るかと言うと…ティファニアの入学書類に不備があったんですorz

学院長のオスマン氏のサインを貰い忘れていたのを思い出したので、急遽一人で引き返してきたのです。正直、戦争後でもよいと思ったのですが、神のお声が聞こえた為、学院に来たわけです。

それにしても、夜の学院というのは予想以上に静かだな。それに、なぜか食堂に人がたくさん集まっている。

「はて、今日は何かイベントの日だったかな？　もしかして、私仲間外れ……」

グズン

一応、私も魔法学院の生徒なのだから、イベント事についてはちゃんと知らせて欲しいものだ。学費だって払っているのに流石に酷いんじゃないかな？

「酷いと思わないかい？」

私は、背後から気配を殺して忍び寄ってくる人に話しかけた。

「気づいていたか？　ならば、動かないでもらおう。少しでも妙な動きをすれば、鉛玉が頭を打ち抜く事になるだろう」

気付いて当然だとも！

いつなるとき襲撃を受けるか分からない立場の為、私は常に警戒を怠ったことは無い。それに、私の守備範囲はトライアングル時とは比べ物にならない位広くなった。だから、この学院規模ならどこに誰が居ようとも私の掌の上に居る様なものさ。

「それは、困った 困った。私は、訳あって休学しているがこの学院の生徒だね。今日は、学院長に用事があったて来たんだ」

なぜ、完全武装した女性がここに居るかは分からないが…とりあえず、面倒になりそうなので争い事は避ける方向でいこう。

「お前：レイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルか!？」

おかしいな…私に女性の知り合いなんて皆無のはずだが。そう思い、振り返ってみると…見たこともない女が銃口をこちらに向けていた。

「…だれ? というか、どこの誰だか知らないが 礼儀としてまずは名乗ってほしいものだな」

「人の顔も覚えてないのか。私は、トリステイン銃士隊長アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランダ。以前にアンリエッタ王女殿下と面会時にあつたはずだが」

ああー、思い出した! 最近、イベントが多くてすっかり忘れていたよ。そういえば、原作キャラに居た子だね。でも、なんでここに居るんだ。王女殿下の犬のはず…

「では、お互い自己紹介も終わった所で失礼するよ。こちらは、忙しいものでね」

原作キャラが居る以上、厄介事があるに決まっている。うーっ、アルビオン戦前に何か大きなイベントあつたけな…思い出せん。まあ、思い出せないと言う事は、大した事件ではないだろう。それよりも、早いところ書類にサインを貰って帰らないとドンドン船から離

される。そして、私の貴重な睡眠時間が削られてしまう。

「待て！　今、学院はアルビオンの傭兵メイジによって占拠されている。我々は、幸い難を逃れたが…逃げ遅れた貴族たちが食堂に集められている」

「ふーん」

そういえば、そんなイベントがあったね。確か…メンヌヴェルとかいう凄腕メイジがいるんだっけ？

美味しい人材だな。

「貴様の他にも生徒で二名　無事な者がいた。我々とメイジが三人も居れば何とか制圧も出来るだろう。作戦を説明する　着いて来い」

私にそういうとアニエスは仲間の所へ歩いて行った。

・
・
・

え！？

何言っているの　こいつ。人に物を頼む態度を知らぬようだ…。どのような頼み方をされても付き合う気はないけどね。まあ、オスマン氏も囚われている為　本来なら付き合っただけなのだけども…。態度が気に食わないよね！

だが、私も鬼ではない！だから　オスマン氏のみ救出してあげるよ。

私は、アリエスの後を着いていかずに堂々と食堂の正面入り口に来た。

「馬鹿！ そつちじゃない」

「いいえ、あつてますよ。私には、あなたの命令を聞く義務もない。それに…私に命令できるのは盟友と親しき者だけだ」

後…ぎりぎり マザリーニ枢機卿も入れておいてあげよう。あの人は私に権力と言う名の力をくれるからね。

「錬金！！」

私は、固く閉ざされた食堂の扉を土へと変えた。食堂の中には、学生と教師…そして傭兵メイジがいた。傭兵メイジは、扉が壊されたのを見て、すぐに魔法の杖を私の方へ向けた。すでに詠唱も終えておりいつでも魔法が体制に入っている。

うむ！ 実に行動が速い。

「落ち着いてほしい。私は、オスマン氏に用があつて来たんだ。君たちと敵対する気はない」

とは言ったものの…当然素直に聞いてくれるわけでもないよね。

「おいぼれ。『これで全員』じゃなかったのか」

「休学中の生徒は数に含めておらん」

とオスマン氏が涼しげに言った。

「まあ、どうでもいいや。そろそろ5分経った事だし、まずはお前から死んでもらおう」

メヌヴェルが仲間に指示して、私を殺すように指示してきた。確か、原作だとここでオスマン氏がかっこいい所を見せるはず。

『わたしにしなさい』と！

・
・
・

どうしたオスマン氏！ 今言わずしてお前の出番はないぞ！ …も
しかして、私を見殺しにする気か！？ なんてこった。

「運が悪かったな」

「貴方がね」

相手のメイジは、私の挑発に大層お怒りのようだ。年端もいかない
学生に何もムキにならないでもいいだろうに…。大人げないな。

「エア・カッター！！」

メイジが放った不可視の風の刃が迫ってくる。周りの学生の誰もが
私が真つ二つになる絵が浮かんだのである。叫びながら惨劇を見
ないように目を閉じている学生たちが大勢だ。まあ、そんなご期待
に堪えてあげる気もないけどね！

カーン

私は、マントを使いエア・カッターを相手へ反射した。いやー、さすが薔薇族のマントだ。反射とかえげつないです。薔薇族のマントに薔薇族の武器か…私もだいたい汚されちゃったな…;

ザシユ!

「なんで、俺の魔法が…」

相手のメイジは、自分の魔法が反射されるなど予想外だったようだ。回避行動が遅れてしまい、自分の魔法で軽傷を負った。

「さーて、どうしてでしょうね」

私は、メイジとの間合いを詰めた。魔法が不利だと悟ってか、懐から刃物を取り出して応戦の構えを取った。よい判断だね…。

パフォーマンスの意味も込めて、派手に散ってもらいましょう。

切りかかってくるメイジのナイフを錬金で粉碎し、驚いた隙を突き

私は経絡秘孔” 鬼床” を突いた。

ズブリ

秘孔を突かれたメイジは、何かを悟ってか私から距離と取り近くにいた女生徒を人質に取った!

「はあはあ、貴様 今 何をした!」

「キヤーーー、助けて、お願いです。私は関係ないです」

傭兵として長年生きてきた勘かな？ 自分の体の異変に気付いたよ
うだね。

「どうかしましたか？ それに、今まさに殺そうとしていた相手に
そんな質問をして返答が返ってくるでも思っているのですか？」

「うるへえー！ ほうじきに言わないと こいつがほうなつてもし
らえーぞ！（うるせー！正直にいわねーと こいつがどうなつても
知らねーぞ！）」

北斗神拳の威力は半端ないな… たった、一突きで人間をここまで破
壊出来るとは恐ろしい技だ。

「うああっあああがががああああああつあ
」

メイジの歯が全て抜け落ち、そして…

「あなた目が…キヤーーー」

ドサ

メイジが女生徒の悲鳴と共に倒れた。メイジの顔は、目が飛び出し
て宇宙人の様な顔になっている。いやー、誰も被害を出さずに敵メ
イジを一人倒すなんて何気に私すごくないか！？と自画自賛してみ
る。

「大丈夫かい？」

たまには紳士的ことをしてみようと思い女生徒に優しく声をかけて手を差し伸べた。後で、マザリーニ枢機卿に今回の事を報告して謝礼を貰うためにも、こちら辺で私のいい印象を植え付けておかねばね。ついでに、助けた子の親からお金なんてもらえたらうれしいな。

パチン

「ち、近寄らないで！」

差し伸ばした手を女生徒によって叩かれた。

・
・
・

思考が冷めた。

善意で助けてあげようとしたのに、まさかの出来事だよ。もう、助ける気も失せた。

どうやら、この子は早死にしたいようだね…。全く、最近の子は進んでいると聞くが、まさか死ぬ事まで先取りするとはね…。少々進み過ぎじゃないかね。

私が女生徒からの思わぬ行動に啞然としていると…

「動かないでもらおうか。どうやら、貴様をただの学生だと思っただけがミスだったようだ。貴様が妙な真似をしたら、その瞬間に灰にしてやるっ」

ピコン！（脳内でいいことを思いついた音）

ニターーー

思わず笑みがこぼれてしまった。

妙な真似をしたら、燃やしてくれるんだよね…それも周りを巻き込むくらいの威力でさ！

「ま、まさか、変な事しないわよね…」

変な事？ いいえ、そんなことしないよ。ただ、武器を持って敵と対峙するだけだよ。もし、それで敵の流れ弾等が当たったとしても決して私のせいじゃない！それは、敵が悪い！

ジャキン

私は、学院を不法占拠しようとしている敵国のメイジを打倒する為、武器を構えて退治した。

「動くなと言っただろう！」

ゴオオオオーーー！！

メンヌヴェルお得意の炎が私と女生徒を包み込んだ。

「ぎゃあああああああー！！」

女生徒の悲惨な悲鳴が食堂内に響き渡り、肉の焼ける良いにおいが

充滿した。その匂いに、嘔吐する者が多数いたせいで、肉の焼ける匂いと嘔吐臭で辺り一面がとんでもないにおいになった。

「死んだか」

メヌヌヴェルが炎に包まれている私達に向かって自信ありげに言った。

「ええ、（女生徒が）死んじゃいましたね。無抵抗な女生徒をこんな殺し方をするなんて実に外道ですね」

「なっ！ どうやって…いや、言っても無駄か。それに、貴様に外道呼ばわりされる筋合いはねーぜ。その女を見殺しにしておいてよくそんな事がいえる」

「いやいや、女子供を焼き殺す貴方は十二分に外道ですよ。」

「いえいえ、見殺しなんてとんでもない。彼女は、私が差し伸ばした手を拒んだのですよ。と言う事はだね…自力で何とか出来る算段があったと言う事です。だから、私は彼女の邪魔をしないようにと自分の身を守っただけですよ」

「ふっ、ちげーねーな」

「思いのほか理解がある人だ。きっと、思考が私に近い所があるのだろっね。」

「今からでも遅くは無いと思うけど…どうだい？私と取引をしてオスマン氏を引き渡してもらえないかね？」

「…あの爺を貴様に渡すとして俺らに何の得がある？むしろ、あの爺を人質にして貴様に言う事を聞かせた方が 得がある気がするがな」

なるほど、確かにその方が本来ならばお得だろう。しかし、その人質に価値があればの話だ。

「残念だが、それは不可能だ。用事があるのは、学院長であつて別にオスマン氏である必要はない。だから、オスマン氏が死のうが生きていようが全く関係ない。死ねば死んだで、新しく赴任してくる学院長に用件を済ませればいいだけだからね」

私のその言葉に、周りの人から何故か冷たい視線が送られている気がする。一人勇敢に傭兵メイジと対峙し、一人を撃破し、さらに人質まで救出しようという私に何をそんなに不満があるんだ！全くもつて、理解できない。

「なるほどなるほど、面白いな貴様。いいだろう、取引を受けようじゃなねーか。それで、そっちは何をだすんだ？」

先に謝っておくよコルベール先生。

「コルベール隊長の居場所の現在地でどうかね？」

ざわざわ

当たりの人間もコルベールの名前が出た瞬間にどよめき始めた。そりゃそうだろうね、なぜ学院の教師が傭兵メイジと関係があるのか…。

「ははははは！ 確かに、その情報が本当ならば爺位くれてやるが…それを確かめる事が今はできん」

ほほう、事実確認できればいいのだね。

「確認できればいいのだね…ならば、君から左斜め後ろ10m位のところに懐かしい体温の人がいるんじゃないかね？」

いつ、飛び出そうか伺っていたコルベールの位置を教えてあげた。後は、コルベール先生がなんとかしてくれるだろう。仮にも、実験部隊の隊長だった人材だ。本気を出せばこの程度の人数相手に遅れは取るまい。

・
・
・

「くっくっくはっはっはっは！ 懐かしいぞ その体温！ 隊長殿、二十年ぶりですな」

今まで、教師を頼りにしていた生徒たちが コルベールの周りから急に居なくなつた。そりゃそうだろうね、誰だつてさっきの女学生みたいにはなりたくはないのだろう。

「こちらは、約束を守りましたよ。次はそちらの番です」

「ああ、爺などもうどうでもよいわ」

メヌヴェルが仲間に表示をして、オスマン氏を私に差し出してきた。なぜか、オスマン氏がものすごい形相で私を睨んでいるが…理

解できない。

「そんな怖い顔をしないで下さいよ。まあ、相手のメイジも私だけならばここから退場する事を許していそうですし…さっさと出ましよう」

オスマン氏も今暴れば、生徒に被害がいくのが分かっている模様で素直に私に従って食堂を退場した。

退場際に『お願い私も連れてって！ お礼なら親が…』とか我先に助かるうとする人間の汚さを知った。

食堂の外にて。

私がオスマン氏救出劇を終えて外に出てみると…銃士隊とキュルケ、タバサが待ち構えていた。

ふっ、そんなに私を褒め称えないのかい？ いいぞ！ いくらでも褒めてくれたまえ。

「貴様！ 人質が居るのに勝手な事をするな！」

「子供と我々は戦争のプロだ。大人しく指示に従っていたらこう」

と銃士隊の連中がうるさく小言を言ってきた。お前らがプロなら私はなんだというんだ…言っておくが今まで殺した人数は貴様らの数倍はあるぞ…まあ、100から先は数えてないがね。

「貴方のせいで作戦が台無しだわ。貴方ならその気になれば、あの

数を何とかできたんじゃない？」

「…」

おだてても何もしませんよキュルケさんよ。そして、私と干渉という契約をしているタバサはいつものごとく沈黙だが…目で『外道』と訴えている。

「なぜ、非難されるのかが理解できませんね。オスマン氏をこうして救出してきたではありませんか。オスマン氏ならば、王家とも繋がりがあるから今後の交渉にも役に立つと思ひ 必死の思いで助けだしたというのにな。それに、貴方達は私が中で争っている間に何をしていたんですか？ 敵側に少なからず隙はあったはずです。それを無為にするなど、その方が理解できませんね」

私が銃士隊の下手際を責めていると…

「よさんか！もう終わった事だ。今は、どうやって生徒を救出するかを考えればよい」

まさに、鶴の一声であった。私の行動に不満があった銃士隊の連中もキュルケ達もしぶしぶ納得した。

「話がまとまった所で…、オスマン氏 この書類にサインをお願いします」

私は、ティファニアの入学届の書類を差し出した。

「書類じゃと…まさか、お主その為だけに私を？」

「ええ、そうですが何か？ハンコをお持ちでないと思うので指印で

構いません」

私は、用意していた朱肉を差し出した。

なぜ、そんなに書類を食い入るように見る。おかしいな・・・書類は、何度も確認したので記載不備や誤字脱字は無い筈だ。オスマン氏に書類チェックの負担を掛けぬようにこれでも気を使ったんだが・・・どうして、そんな顔をしているんですか？

「ミスタ・ヴェーグルよ。あまり言いたくはないのだが、もう少し人との付き合い方を学んだ方がいいぞ」

人との付き合い方だ：何それ美味しいの？人間なんて（一部を除いて）糞位だ。

それにしても、よく言うなこの狸爺は：メヌヌヴェルに殺されそう？になった私を助けようともせずに見殺しを決め込んでいた奴が言っているいいセリフじゃないね。

「忠言は耳に痛いですが。今後気を付けます」

とりあえず建前上は大人しく謝っておいた。オスマン氏とやりあっても負ける気はしないが：手の内を見せていない奴に正面から闘う気などさらさらない。だが、貴方がこれ以上私の邪魔をするならば、こちらもそれ相応の対応をさせていただきます。

「持っていきなさい」

オスマン氏がサインをした書類を渡してきた。

さて、早々に撤収しますか。

「ありがとうございます。後の事はプロに任せるのが一番だし、これ以上邪魔するのも悪いので帰らせていただきます」

「まち・・・」

ダーーーーーン

ゼルエルを着込み、全速力でその場から離れた。何やら、遠くで言っていた気がするが…まあ問題なからう

さて…ティファニアの入学に備えて色々と準備してあげないといけないね…；まずは、アーベにマントを依頼して…虚無だとばれない様に系統魔法を使う為の指輪をビシャえもんにお問い合わせいな。後は、洋服だな。

うーん、なんで手のかかる子供を育てる母親的ポジションになったのだろうか。おかしいな…

後日、学院襲撃事件は コルベール先生の手によって主犯格を殺害することで幕を閉じたのを知った。いやー、原作通りになってよかった よかった。まあ、女生徒が一人犠牲になったが…これは仕方がない。むしろ、一人済んだのは僥倖と言ってもいいだろう。

主人公は、人命救助をする。（後書き）

経絡秘孔のご紹介

名前：鬼床きじょう

効果：歯が全部抜け、目玉が飛び出る

当然、その後は絶命です。

最後まで読んでくれてありがとうございます。

今回は、懐かしのアルビオンです。

忘れがちだった、水の精霊のアンドバリの指輪を持った人が…

主人公は、腹を壊しても頑張る。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は、『アンドバリの指輪』を取り戻そうと思います。

主人公は、腹を壊しても頑張る。

アルビオン大陸に着いたレイアです。

そして、活動拠点をウエストウッド村に置くべく 移動中です。既に誰も居なくなり廃村になっている為 人目に付きにくく最適だろう。おまけに、今回のイベント会場も近いし 地理的に完璧だ。

クイクイ

私が今後の計画を練っていると水銀燈がマントを引っ張ってきた。

「何かようかい？水銀燈」

何やら水銀燈が呆れたような顔をしている。酷い…お父様をそんな目で見ないで！

「アレよ アレ！ しっかりと、手綱を握ってなさいよ」

アレと言われてもどねよ！ と言いたいんだけど…やっぱり、アレの事だよ。少し目を離すとこれなんだから…

「ここら、ティファニア。その引きずっている物体は何か？」

「これですか？ そこに落ちていたので拾っちゃいました。晩御飯のおかずになるかな なんて…てへえ」

そんな可愛く舌を出してお茶目してもダメです！

というか、貴方はなんて物を食べる気ですか！！ さすがの私もそんなの食べたくないよ。まあ 捌くのは、よくやるけどさ。

「ええー、駄目ですか？ 丸々太っていて美味しそうなのに」

「やめなさい。そんなものを食べたら 食あたりになります。

言う事を聞いてくれたら、今日はティファニアの好きな物を作ってあげよう」

きつと、これで大人しく言う事を聞いてくれるだろう。いくら、ティファニアに甘い私でもこればかりは見逃せない。人間を食べるの
は不味いでしょう。味的にも…倫理的にもね。

「本当ですか！ じゃあ、以前レイアさんのお話で聞いた満漢全席
がいいです」

・
・
・

ま、満漢全席だと！！

た、確かに好きな物を言ったが こういった場合は普通、パスタが
食べたいとか焼肉が食べたいとかそういった物を言うんじゃないか
！？それに、満漢全席なんて作れないよ。いや、マジで！名前は知
っているけど、中華料理と言う事以外さっぱりです。

「ティファニア、流石に「嘘つくんですか？」…え！？」

ゾクリ

ティ、ティファニアの目が単色になっている。そして、あたりに居た動物や虫たちの気配が消えている。も、もしかしくなくてもこれって大ピンチじゃね!?

キヨロキヨロ

先ほどまで居たアミバと水銀燈がまたまた消えていた。あいつ等、どんだけ危機察知能力高いんだよ。というか、逃げるなら私も連れてってくれよ。

「満漢全席作ってくれますよね」

な、なんてプレッシャーだ。

分かっていたけど、やっぱりこうなるのよね。

「もちろんだとも、愛妻の為にこのレイア全力を尽くそう」

「そんなー、愛妻だなんてえ」

ティファニアは、可愛らしく照れている。しかし、私はとても複雑な気持ちですorz

ちなみに、その日から丸三日間私は寝る事も許されず、ひたすら料理をする事になった。そして、作った料理はティファニアを筆頭にアミバ、水銀燈に美味しく召し上がられたよ。

今度から飯に関しての約束事は、細心の注意を払おうと心に誓った。

後、死に損ないだった豚の死体は、指輪の力と秘孔を突いて蘇生させてあげたよ。更に、近くに居た竜に無理やり乗せて 放り出した。あのまま、放置していたらいつティファニアに捕食されるか分からないからね。

翌日、シティオブサウスゴータの近くにある山脈にて。

もう、中華料理は当分見たくないです。山脈を歩きながら、昨日までの悲劇を思い出しているレイアです。そして、私が何故ここに居るかと言つと、忘れがちだった『アンドバリの指輪』を回収する為です。

私の記憶が確かなら、シティオブサウスゴータがギーシュの手によつて墮ちた後にシェフィールドとマチルダとワルドがこちらへんに来て、指輪を使い街の住人を操るはずだ。時期的に見て、恐らく明日か明後日辺りにご対面する事が出来るであろう。

その為に、私はせつせと山全体にゼルエルネットワークを敷き詰めている最中です。これで、何処に相手が来ても一発で発見できる。

後は、網に獲物がかかるのを待つだけだ。

「今日の飯は、あつさりしたものがいいね。…貴方も一緒にどうですかね？ミス・マチルダ」

私が声をかけると木の後ろからフードをかぶった女性が現れた。

「そうだね、テファの様子も気になる事だし 今晚当たりお邪魔させてもらおうかしら。それにしても、なんであんたがここに居んだ

い？」

「見当はついていないんじゃないか？　こんな人気の居ない場所で私に会う時点でおかしいとね…。ぶっちゃけると、君の雇い主である人物が持っている指輪が欲しくてね」

鉢合わせするならば、シエフィールドと一緒にタイミングだと思っただが、まあ、問題は無いだろう。ティファニアが私の側に居る限り、マチルダがこちらを裏切るような事はしないはず。

「随分と情報通だね。まさか、あんたはアレがなんなのか知ってるのかい？」

「当然。あれは、アンドバリの指輪と呼ばれる先住魔法を凝縮させた物だ。本来ならば、水の精霊が保管しているはずなのだが、ワルドが盗み、シエフィールド経由でクロムウエルに渡ったのさ」

「な、なんで私の知らないこっちの内部情報まで知ってるんだよ！」

原作知識です！

なんて言っても通じないよね。通じてもらっても困るけどさ。

「そりゃ、私がレイア・ド・ラシエル・フォン・ヴェーグルだからですよ」

「けっ、わけわからねーよ。とりあえず！　テファを悲しませるんじゃないよ」

うむ、善処しよう。

では、明日の事もあるしゆっくりと帰り際に話そうじゃないか。貴方には、シエフィールドご一行をここまで連れてきてもらわないといけないのだからね。

ああ、そういえば今日はティファニアが晩御飯作るとか言って張り切っていたな…。アミバや水銀燈は既に逃げているだろうし、一人くらい道連れにしても神様も文句は言うまい。

翌日。

死ななかつた代わりに…ある意味死よりも苦しい地獄を味わっているレイアです。当然、ティファニアの指輪をフル稼働しているが…

ゴロゴロゴロゴロ

「は、腹が…アミバ、秘孔を」

この際、アミバでもいい私の腹の具合を直してくれ！ もうすぐ、奴らが来る時間だというのに正直 今のコンディションでは、サイトにも負けてしまいそうだ。

「是非とも秘孔を突いてやりたいのは山々なのだが…体質的に秘孔が効かぬだろう。諦めろ」

…なんてこつた。た、確かにラオウに突かれても死ななかつたラッキーだと思っただが、ここにきて初めて秘孔が効かない体質に絶望した。

「よく、あんな糞不味い料理が食べられるわね」

全くもって否定できない・・・だけど、そういうな水銀燈。男なら嫁が作った料理は死んでも食わなきゃいかんだよ。例えばそれが毒であろうともね。

ちなみに、マチルダはティファニアの料理を前に敵前逃亡を図ろうとしたので、首から下を石にして逃げられない様にしてあげたら…料理の匂いを嗅いだけで逝ってしまった…。あの場に、私が居なかつたらマチルダは完全にこの世とお別れをしていたよ。

私の体調とは裏腹に、シエフィールド一行が山に到着したのを感じ取った。くっそ！なんて時に連れてきたがるマチルダめ。私に何の恨みがあるというんだ。

「来たようだな」

「ええ、そうね。ようやく、私の指輪が返ってくるのね…お父様」

はいはい、わかっていますよ。

シエフィールドが逃げないように山をA・Tフィールドで四方を囲んだ。これで、敵は完全に袋の鼠とかした。マジックアイテムで逃げられると面倒だからね。

川の上流にて。

ちょうど、シエフィールドが川にアンドバリの指輪を使い秘薬を流

し込だ。これで、敵軍が増産されたな。いやー、手間が省けてありがたい。敵ならば殺しても文句は言われないからね。

ちなみに、まだ激しくお腹が痛いです。脂汗で顔がびしょびしょです。

「ライトニング・クラウド!!」

ワールドが呪文を唱えた瞬間、私が隠れていた木に落雷が落ちた。

うきょー、気配は消しているつもりだったけど、位置がばれちゃったよ。

「ばれちゃいましたか…気配も消していたつもりでしたが、一体どうやって? 『閃光』のワールド殿」

「その年で私に気配を悟らせないと流石と言っておこつ。本来ならば私も気付けなかっただろう。だが…流石に匂いは隠せなかったようだ。しかし、どこかで嗅いだ事があるような匂いだったのだが…」

・
・
・

昨夜食べた、ティファニアの新料理のせいですかorz まあ、一般人なら匂いを嗅いだだけで逝っちゃう位だからね。体に染みついちゃったか。

「…悪いね。どうやら、かなりの高位メイジの様だね。この私がこ

の距離で気付けないなんてね。それにしても、随分と顔色が悪いじゃないか」

マチルダは、脂汗を流している私の顔を見ってくる。昨晚のティファニアの料理を思い出したのだろう。

「どこの誰だかしらないが、見られた以上 生かしておけないよ。二人で片付けなさい」

ふむ、名乗っていないかったかね。

「初めまして、『ミヨズニトニルン』のシェフィールド殿。私は、トリステイン王国所属のレイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグルと言います。以後お見知りおきを」

「ヴェーグルか…よもや、こんな所で会おうとはね。よくない噂が絶えない事で有名なヴェーグル家の嫡男か」

よ、よくない噂って…一体、どれだけ貴族の間で評判悪いんだよ。基本的に何もしないだろう！

「私ほど人畜無害の存在は、少ないと思うのだがね。…と、世間話はその位にして私はシェフィールド殿に用事があるので、悪いがそこを通してもらえないかい？」

「ふむ…思ったより礼儀正しいじゃないか。『ガンダールヴ』とは大違いだな。君の様な少年は嫌いじゃないのだが…私の悲願の為にここで死んでくれ」

やっぱり、そうなるんですよね。

「餓鬼相手に2対1というのも気が引けるんだがね」

昨日の恨みなのか…マチルダが妙にノリノリである。負ける気はないが義弟を笑顔で殺しに来るのはどうかと思いますよ。

「あら、気が引けるの？ だったら、私も参加しようかしら？」

「これで、私が参加したら2対3だな。さあ、少しは私を楽しませてくれよ」

水銀燈が空から舞い降り、アミバが突如として私の横に現れた。

お願いだから、その悪人面でいきなり横に現れないでくれ。まじで心臓に悪いって！

「な、なんでエルフがここに居るのよ！ あんた達、死ぬ気で時間を稼ぎない」

「ふざけるな！」

「まちなさい」

そういつとシエフィールドの姿が消えた。まさか、A・Tフィールドの壁を越えたか！と思ったけど…越えられなかったようだ。

「お父様、私はアレを追うわ…別に、殺しても構わないでしょ？」

「ここから北に200m程言った場所の壁際にいる。死なれると面倒だから、死なない範囲でやってね」

死なれると、新しい使い魔を呼ばれるかもしれない。そうなれば、面倒事が増えるのは目に見えている。ここは、水銀燈に自重してもらおう。

水銀燈は、不満そうな顔をしながらシエフィールドを追って行った。

「あんな子供をあの女に向かわせるなんて、子供が死んでもいいの
かね？」

「娘の事を心配してくれるのかい、ワルド殿…ありがとうと言って
おくよ。だけど、人の娘の心配より、自分達の身を心配してみても
どうかかな？」

このロリコン子爵め…水銀燈を嘗め回すように見やがった。不愉快
極まるぜ。

「ワルド…あなたは、エルフの相手をしな。偏在を使えば多少なり
とも行けるだろう。私は、あの餓鬼を片付けてから加勢する」

偏在を使ってもアミバにはかすり傷ひとつ負わせられないだろうね。
それに、偏在なんて出したらアミバが喜んで秘孔を突いてくるから
寧ろ危険だと思うよ。

「承知した。死ぬなよ　フーケ」

「あんだこそ」

…なんか、ワルドとフーケがいい雰囲気を出している。これでは、
まるで私が悪者じゃないか!?

「ふむ、殺しても構わんのだろう?」

「いえ、殺しちゃダメです。お願いだから、半殺し程度でお願いします。もうすぐ、幾らでもやれる狩場が出来るから、それまでは自重してくれ」

やれやれといった感じでした承しれました。

それでは、計画通り八百長試合を始めましょうか。

Side マチルダ

ははは、冗談じゃないよ。

昨日の件で少しばかりお灸をすえてやろうと思ったんだが…何者だこいつ。

「一体、その年でどうやったらそこまで強くなれるんだい?」

私のゴーレムを一瞬で粉々にしたり、ブレットをマントで跳ね返して来たり、極めつけはあの短剣だ…あれはいったい何だい!? アレに触れた瞬間にすべての魔法が吸収されてしまいやがる。

「色々あったんですよ。強くないと生きていられない環境にいたものでね」

まあ、そうだろうね。あんな、アミバみたいなエルフと一緒に居るくらいだからな。正直。テファをこいつにあずけても大丈夫か不安だったが…無用な心配のようだった。

ワルドの方は…どうやら決着がついたみたいだ。

「死んでないよな？」

「ああ、問題ない。偏在の使い過ぎで精神力が切れたのだろう。アミバ相手に、よく頑張った方だ」

魔法衛士隊の隊長ですら赤子扱いとは、エルフとは本当に化け物みたいな強さだね。まあ、あんたも十分化け物クラスだがね。

「ワルドが気絶したから、これ以上芝居を続ける必要もないか…娘の方に行かないでいいのかい？」

あの、シエフィールドとかいう女…見かけ以上に強い。なんせ、見た事もないマジックアイテムを使いこなすからね。手の内が全く読めない。

「ああ、水銀燈かい？あの子なら問題ないよ。下手したら私以上に強いからね」

アンタよりかい…この戦争が終わったら、あんたの所で雇ってもらおうかな。この世界で、一番安全そうだ。

しほらくしほ。

水銀燈がシェフィールドを引きずって戻ってきた。

「大分時間が掛ったようだね」

「逃げ足だけは早いから、少し本気を出しちゃったわ。でも、ようやく私の手に戻ってきたわ…私の指輪 ふふふ」

可愛い顔してえげつない性格をしているようだな。シェフィールドが生きているのが不思議な位スタボロにされている。

それに…指輪が戻ってきた？

手に入れたではなく…戻って来たとは可笑しい。それでは、元々の持ち主が水銀燈みたいな発言じゃないか…まさか！

「おい！ まさかとは思いますが、水銀燈は…」

「ご明察。マチルダが思っている通り、水銀燈には水の精霊が宿っている…いや、水銀燈の中身が水の精霊と言っべきかな」

…は!?

もう、深く考えるのは止めよう。ようするにだ…こいつには、敵対すべきじゃないという事だけ分かれば十分だ。

「もう、何も言わないよ。とりあえず、テファを任せたよ」

「もちろんだ」

ごめんね、テファ…お姉ちゃんは、もう何がなんだか理解できなく

な
っ
た
よ。

主人公は、腹を壊しても頑張る。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

すこし、ティファニアの食い意地が行き過ぎたかな?とも思いましたが

仕様です!

今回は、ルイズ辺りを確保しようかなと...あるいは、アルビオンでのギーシュあたりに再開させるのもまた一興かなと。

主人公は、ちょっと本気を出す。(前書き)

いつも読んで頂きありがとうございます。

ここにきて、ようやく諸悪の根源に痛い仕打ちをしようと思います。
そして、待ちに待った戦争開始です！

主人公は、ちょっと本気を出す。

夜のシティオブサウスゴータに来ているレイアです。

ここは、まさにお祭り状態だ。降臨祭など正直、馬鹿馬鹿しい。戦時中に何をやっているのだ。だが、そのおかげで非常にスムーズに入り込めたけどね。しかし…人ごみが大嫌いな私にとって正直、一刻も早くここから抜け出したい。

「目標は、見つかったかレイア？」

「いや、まだだ。しかし、居場所の目星はついてる」

今頃は『魅惑の妖精』で飲んでいるころだろう。そして、サイトと口論になり一人になるはずだ。狙いはその時だ。この日の為に、実家の地下でせつせとクローニングの為の実験を積み重ねてきたのだ。その成果が今こそ発揮される！

「くっくっく、それにしてもレイアの発想は実に面白い。

この天才アミバが誉めてやるう」

「はっはっは、もっと褒めてくれ！

私は褒められて伸びるタイプだ」

全く、嬉しい事を言ってくれるね。照れるじゃねーか。

さて、三女さんよ。今までの積年の恨みを一括払いで返済させてもらおうじゃないか。せいぜい最後の晚餐を楽しむのだな。

ルイズの部屋の前にて。

『虚無』という兵器扱いされているだけの事はあるようだね。ここに来るまでに結構な数の監視役と警備兵が居た。だが、どいつも私とアミバの敵じゃないね。全員、秘孔を突いて この一瞬の記憶を無かったものにさせていただいた。

さて、見張りも警備も片付けた事だし…ご挨拶といきますか

「ミス『虚無』、貴方の使い魔の事で少しお話をしたいのですが、よろしいですか？」

本来なら、扉を突き破るのもいいのだが なるべく穏便に済ます為にルイズが引っかかりそうな言葉で呼び出してみた。

「一体、こんな夜更けに何の用？明日にして頂戴」

ふむ、確かにごもつともな意見ではあるが…明日じゃ困るのだよ。

「そうですか…貴方の使い魔がメイドと一緒に宿に入るのを見たのですがね」

「な、なんですって!!」

バタン

叫び声と共に扉をすごい勢いで開けてきた。たまたま、扉から離れ

ていから良かったけど近くに居たら直撃していたね。相変わらず教育が行き届いてないね。ドアの向こうに人が居る可能性を考慮しないとは…。

「おや？ どうしたんだい。まるで親の仇を見るような目じゃないか」

「よく、私の前に顔を出せたものね。あの後、どれだけ私達が苦勞したと思ってるの!？」

そんな私の知った事ではないね。どれもこれも自業自得なのにね。大体、自分の立場を理解しているのか：公爵家の三女に自由恋愛などあるはずないだろう。このご時世の貴族の女性なんて、政治の道具が関の山だろう。せめて、そこ位はカトレア嬢を見習ってほしいものだね。

「はあ…君と話していると本当に疲れるよ。…でも、今だけは我慢するよ。なんせ、私は君に頼みがあつて来たのだからね」

私の言葉を聞くとルイズの態度が高圧的になるのが分かった。

「へえー、あんたが頼みね…。ようやく、この私の偉大さに気が付いたわけ。下々の意見の言葉を聞くのも公爵家の務めだわ。だから、聞くだけ聞いてあげるわ」

それが君の最後の言葉になるのだね。

「君は、魔法使いとしての腕前は三流だが、精神力は目を見張るものがある。…だから、死んでくれ「え!？」…『北斗壊骨拳』!！」

この日の為に才能が無いとまで言われた北斗の技を何とか実践で使えるまでに磨き上げた！ 南斗の技を覚えるのに比べて30倍近くの時間が掛ってしまったよ。

「ゲエ・・・どじおうおういっついふびぎやああああ」

秘孔を突かれたルイズは、体が内側にへこみ、骨が内側に折れ、体の後ろに全身の骨が飛び出した。これで下準備は完成だ。

「やはり、技にキレがないな…。北斗の技はレイアにあっていないのだろう」

そう言わないでくれよ。貴方らエルフみたいに才能の塊みたいな存在じゃないのだからさ。人間でここまで出来るのだから寧ろそこを評価してくれ。

「練習通り、お願いしますよ」

「くっくっく、この私を誰だと思っている」

天才アミバ様ですよね！

これから、作業を簡単に説明しておこう。

？ アミバに骨と肉を偏在でコピーしてもらおう。

？ コピーした方を元通りにする為に皮に肉を詰め込む。

？ ティファニアの指輪の力を使い、人体を修復し秘孔を突いて蘇生させる。

？ 本体の方も？と同様な手順で蘇生をする。

？ 30秒以内に本体を蘇生させないといけない。

どうして、こんな面倒な事をするかと言えば…この手段以外にクローニングが成功しなかったからだ。アミバの中で物と認識できた物質ならばどのような物でも偏在でコピーできる事が分かった。

あくまで推測だが…アミバの中で人型をしていると木人形デクと認識してしまふ為、コピーできない。だから、色々と実験した結果 『肉塊と骨』にする事で初めて物を認識するようだ。

最後になったが？の理由は、使い魔とのリンクが切れるリミット時間だ。主が死ぬと使い魔のルーンが消えてしまう。それを回避する為には 主が死んでいないと認識させなければならない。どういう原理かは分からなかったが…30秒単位でお互いのパスを確認しているようだ。

「流石天才、完璧な仕事だ」

「当然」

アミバと二人でルイズを蘇生させた。コピールイズの方は、目を覚まさないように秘孔を突いて仮死状態にしておいた。そして、オリジナルの方はアミバをお願いをしてここの刻ばかりの記憶を消してもらった。

「では最後に…錬金！」

血で汚れた部屋を綺麗にした。さすがに、血まみれの部屋だとまずいものね。

「一つ聞き忘れた事があったのだが…『ネフテス』に確認はとったのか？」

あ…そういえば、私ってルイズの監視役を引き受けていたんだっけ
orz

や、やべー！

「だ、大丈夫…だと信じた。ちょっと待って！今すぐ確認…
というか事後報告するから」

私は床に倒れているルイズをベッドに投げ捨て、すぐさま携帯電話
で『ネフテス』に連絡を取った。

ちなみに、ものすごく怒られました。今回の一件の罰として、
戦争後に『ネフテス』でちよつとした雑務をする事になってしま
いました。

翌日。

予定通り、『アンドバリの指輪』で惑わされた軍人どもがアルピオ
ンに寝返った。その数は原作通り7万。ラミエルを足場にして上空
から見る大軍はまさに…

「ははは、人がごみの様だ！」

「くつくつく、ゴミか…言い得て妙だな。実にしっくりくる。
確認しておくが、好きなだけ潰しておいのだろっ？」

当然だとも！

幾ら潰しても構わぬが、私の分くらいは残しておいてくれよ。お互い溜まったストレスを解放しようじゃないか。

「あら、楽しそうね。私も混ぜてもらおうかしら」

「あれ？ティファニアと一緒に船で待機してるんじゃないけ？」

私としては、ティファニアの面倒を見てほしかったが…。

「あの子の事なら問題ないわ。既に船でお休み中よ。私もたまには体を動かさないとね。…それに、好きなだけ暴れられるなんて、またと無い機会だわ」

そりゃそうだよ、水の精霊相手に喧嘩を売ってくるような稀有な連中は滅多に居ないからね。暴れる機会なんて過去に数えられる位しか無かったはずだろうね。

「二人とも存分に楽しんでくれ。メイジの確保は私が引き受けるよ。えっと…一人頭2万人ずつ潰そう。余った1万人は、私の指輪と水銀橙の指輪の力を取り戻す為に使いたいから生かしておいてね」

「そういう事なら仕方あるまい」

「これで指輪も元通りになるわね」

この機を逃したらこれほどの人間を一か所に集まる事などまずないからね。しかも、敵兵だからいくら死のうがお咎めなしだ。

さてさて、後は件の自殺志願者を待つばかりだ。

一時間後。

どうやら、今晚のゲストが到着したようだ。何故わかるかって？既に、戦場となる場所の地下にはゼルエルネットワークを敷いているからに決まっている

「待ちわびたぞ サイト！ 今日ほど、お前が来てくれた事を嬉しいと思つたことは無いぞ！」

大軍に向かい一人で向かう勇氣は評価しよう。そして、誰も殺さず百人以上を負傷させたのも評価しよう。だが、人間が数万相手に勝てる通りなど無いのだよ。

降り注ぐ矢を剣で薙ぎ払い、降りかかる魔法をデルフで吸収し、一人：また一人と倒していく。だが、威勢がよかつたのも最初だけだった。相手は軍人だ：初動こそサイトの不意打ちで慌てたけれど、冷静に行動すればたつた一人の人間など脅威にすらならない。

今まさに、倒れたサイトに向かいメイジ達がサイトめがけて魔法を放った。本来ならここで死んだと思うが：原作を知っている私は、ここでデルフがサイトを操り逃げる事を知っている。だが：あの困まれた状態でどうやって逃げ切るんだ。

100%不可能だと断言できる！

はぁー、と言う事は…

「<<動くな>>」

私は、サイトが逃げていく方向の敵をことごとく足止めをしてあげた。なんで、私がこんな事をしないとイケないのだろうね…。

「どうやら、出番の様だな」

「ゾクゾクしちゃうわ」

ふっ、私も年甲斐になくワクワクしてきたよ。喜べサイト！今夜の功績を全て君にあげようじゃないか。7万の軍隊を一夜で滅ぼした英雄という称号をね！

「私も少し本気を出そうじゃないか。ゼルエル！！」

主人公は、ちょっと本気を出す。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は、戦争でひと暴れしようと思います。それが終わったら『ネフテス』辺りにお邪魔する話を書こうと思います。話題は、ビダーシャルの実家に行く…みたいなの。

さてさて、ビダーシャルの母親エルフを誰にしようかな。やっぱり、エルフといえばロド島ですよ。

主人公は、大暴れする。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

全開に引き続き、アルビオン戦です。

祖国の為に頑張るレイアを今日もよろしくお願い致します。

主人公は、大暴れする。

戦火の真つただ中にいるレイアです。

四方から様々な魔法と矢が飛来してくる。一発一発は大した威力ではないのだが、空を埋め尽くす程の量を打たれると流石に私の魔法でも防ぎきれないな。

「ラミエル、撃ち落とせ」

夜空の中を一線の光線が走った。そして、私に飛来してくる物がすべて消失した。

「今のは、先住魔法!？」

「なぜ、こんなところにエルフが!」

「冗談じゃね、勝てるわけないだろ」

ざわざわ

ゼルエルを纏った私をエルフと思ったようだ。実際のエルフに会った事もないような連中が何故そんな事を言える。私がエルフだと……まあ、訳あって副統領なんてものも兼任してはいるが、これでも人間だ。それに、私なんかとエルフと一緒にしたらエルフに失礼だろう。

「くつくつくくはっははははははは！ 私がエルフだと……冗談を言わないでくれたまえ。エルフというのは、ああ存在の事を言うのだよ」

私は、アミバが居る狩場を取り囲んでいる兵士たちに教えてあげた。アミバが居る狩場はまさに地獄：アミバが歩くだけで周囲に居る人間達が苦痛に顔を歪ませて死んでゆくのだ。緑の草地だった所が血の池地獄へと変貌を遂げている。

「喜べ、君達は実に運がいい。なんせ、一番良心的な私に当たったのだから」

私は、アミバの戦場を見え怯んでいる隙をついて近くにいたメイジとの距離を詰めた。そして、秘孔”かいあもんでんちよう解唾門天聴”を突いた。

「一つ質問だ。君の何のメイジかね」

「火のラ、ラインメイジ」

ちっ、ラインメイジか…そのランクなら実家に掃いて捨てる程居る。普段なら確保するのだが、生憎と今日は君以外のメイジもたくさんいるからね…。トライアングルになれなかった自分の才能を呪ってくれ。

「君は、失格だ…【リトル・クラッカー】」

爆弾に変えたメイジを敵陣に投げ込んだ。狙い目は弓兵や亜人兵などが固まっている辺りだ。さあ、アルビオン軍諸君。もっと私達を楽しませておくれ。君達には既に逃げ場なんてないのだから、勇気をもって立ち向かって来ればもしかしたら勝てるかもよ。

この戦域は既に、A・Tフィールドで外界と隔離されている。誰に取り逃がさないさ…いや、噂を流す為に一定数は見逃すけどね。

練れの傭兵である。

「少し煩いよ…【リトル・クラッカー】」

串刺しにされた連中を魔法で爆発させた。きたねー花火だな…こんな夜空の綺麗な星の元には不釣り合いだったかな。硝煙と血の匂いが辺りに立ち込めた。

さて…今の攻撃を避けられた者から取り調べを開始しようじゃないか。

ニヤ

2時間後。

「ふうー、大体片付いた」

タンク候補生は、全身を石化させておいた。流れ弾で死なれてはたまったものじゃないからね。それにしても…スクエア3名、トライアングル30名、ライン15名。予定数の半分も確保できなかった。くっそ！なんでトライアングル以上がこんなにも戦場に居ないんだよ。途中、あまりにも集まりが悪かったので確保Lvをラインまで引き下げたよ。

「そっちは、どうだった？アミバ」

まあ、様子を見る限り聞くまでもないか…あれほどの惨状なものにも関わらず、返り血すらついてないなんてね。流石だね。

「ああ、実に楽しかったぞ。これ程楽しかったのはいつぶりだったかな」

ははは、楽しんでもらえてよかったよ。

「水銀燈もお疲れ様。楽しかったかい？」

「ええ、とつても楽しかったわ お父様」

ええーと、水銀燈の戦場は…こつちも酷いな。ある者は、氷漬けにされ…ある者は、仲間と剣でお互いを突き刺していたり…実に惨い。どうやら、心を操って同士討ちをさせたようだ。

「では、本日のメインディッシュと行きましょう…」

確保したメイジと噂を流す為の人員以外を全て、『賢者の石』に錬金する。規模的に一万人もいる為、前回とは比べ物にならない規模だ。その為、今回はラミエルと協力する。具体的には、足りない精神力をラミエルの電力で補うのだ。ゼルエルの触手をラミエルのコアと直結させる事で実現させた荒業である。

当然、私にも相当の負荷がかかる為、あまり多用出来ない方法だけだね。

「恨むなら戦争を始めた アホリエッタとクロムウエルを恨むのだな。…『れ・ん・き・ん』」

うおおおおおおお

戦場が赤く輝き、残っていた人間達の殆どが消え去った。そして、拳位の赤い宝石のような物が私たちの目の前に現れた。

ふ、どうやら成功の様だ。やはり、二度目だと一度目に比べて勝手がわかつている為やりやすかった。これで当分の間は、力の補充は要らないだろう。

「すまないが…逃がす者の記憶の操作お願いしてもいいかな？流石に、今の錬金で疲れた・・・後、石になっている連中も船に積み込んで…」

後は二人に任せて私は、もう休もう。二人には申し訳ないが、先に船で寝かせてもらおうとするよ。

おやすみ

・
・
・

あ…そういえば、サイトの奴蘇生させるのを忘れていたな。まあ、明日起きてからでいいや。

翌日。

今日の目覚めは素晴らしい！

やはり、祖国を守り切ったという充実感から来るものであろう（笑）

「良い天気だな…船長、準備は出来ているな？」

「もちろんですレイア様。既に、ウエストウッド村には現地で雇い入れたエキストラを配置しております。件のサイトとか言う少年を迎えが来るまで世話をするように指示しております」

原作ならティファニアが面倒をみるのだが、あいにくのあの村は無人…その為サイトを介護する奴が居ないのだ。だから、私はわざわざサイトの為にカトレアから貰ったお金で村人の役目を演じる連中を雇ったのだ。

全く、世話が焼ける。

ウエストウッド村近くのサイト死亡地点にて。

くたばっている死体を見つけた。

すぐさま蘇生してやろうと思ったが…手にデルフを持っている。ここで、私の姿を見られるわけにもいかない。

というか、デルフって目があるのかな？それとも、いつも声をきいて誰だか判断していたのかな？まじで、不思議な存在だな。

まずは、レビテーションでデルフを明後日の方向に放り投げてからサイトに近寄った。

「はあ…君は一体何人の人間に迷惑を掛ければいいのだ」

私は、力を取り戻した指輪を使いサイトを蘇生させた。そして、脇腹を蹴り飛ばした

「がはぁっ」

ふむ、生き返ったようだな。私は、エキストラに指示をだしサイトを回収させた。

「さてさて、実家に帰ってから『ネフテス』に行く準備でもするかな」

Side アミバ

「ん！？ まちがったかな…」

なに、天才といえども間違える事はある。実験材料は、山ほどあるのだ…気にせず、次の秘孔を試そうじゃないか。

「ひい、た助けてくれ」

助けてくれ？…何を言っているのだ。助けてやっているだろう？

身体能力を何倍にもする秘孔 や 記憶力を何倍にも上げる秘孔 などお前等に有益な事をしてやっているのに。もっとも、まだ誰にも成功してないがな。

「助かりたいか？」

「ああ、何でもする！だから、助けてくれ」

なんでもか…

「ならば…動くな」

ズブリ

「あ…あぐぎあああつあああああああ

秘孔を突いた木人形が右腕から裂けて息絶えてしまったか…。やはり、同時に複数の秘孔を突くのは難しいな。

ドドドドドドドーン

レイアの狩場から複数の爆発音が聞こえてきた。串刺しにしてから爆発させるとは実に面白い趣向だな。

「あちらも派手に殺^やっている事だし、こちらも久しぶりに腕を振るうとしよう」

こんなに心躍るのは久しぶりだ。レイアには、感謝せねばな。

主人公は、大暴れする。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

サイトは、自国にもどってから大変ですよ。

味方もとも葬った英雄として、貴族の地位をえるのだから。

後、アホリエッタには見舞金を頑張って捻出して貰いましょう。

予定通り、メイジも確保して指輪も元通りにできたので一度実家にかえろうかな。

水銀燈 side も書くことと想ったのですが…もうすこし、口調等を勉強してから追加します。(たぶん、いつか…)

今回は、『ネフテス』に行くための準備をする話でも書くことと思います。

主人公は、働き者。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

アルビオン編も無事に終わり、作者の中でひと段落した気がします。

今後はまったりと進めていこうと思います。

今回は、祖国トリステインを救う為 レイアが裏で頑張ります（笑）

主人公は、働き者。

アルビオンから無事に帰還したレイアです。

返ってきて早々に両親から熱い抱擁という名の折檻を受けました。アルビオン戦で7万人の兵士が死んだ事が早くもトリスティンで噂になっていたのです。そして、父上母上はその犯人が私達一行であったと確信しているようだった。

まあ、両親の事はさておき…アルビオンから連れ帰ったメイジ達のおかげで我が領地は更なる裕福になるだろう。不足気味であった畑の肥料をメイジの錬金を使ってカバーできるようになったからだ。細かい事は、領地のゼルエルネットワークを仕切っている雛苺に任せている。

それにしても…私っていつになったら学院に復学できるんだよ！戦争が終わったら復学する予定だったが、今回の一件で『ネフテス』で奉仕活動をする事になっちゃったよ。地球の学校なら出席日数不足で完全に留年だよ。

ため息をついていると、私の携帯が鳴った。相手は…真紅からだ。

『はいはい、貴方のお父様ですよ』

『元気そうね お父様。奉仕活動をするそうね』

まだ、数日しかたつてないのに何故、それを！？

『一体、どこでそれを！？』

『私の姉妹達がどこにいるかご存じかしら？…そういう事よ。それはそうと今回は、お父様にとても良い情報を持って来たの 聞きたいかしら？』

『聞きましょう』

・
・
・

数分後。

『実にすばらしい情報じゃないか！？ 流石、私の娘だ。愛してるぞ』

『そ、そんな・・・わた ブチ』

真紅との電話を切った。

まさか、ビダーシャルが実家に帰省するとはね。ここは、いつも娘がお世話になってる父親として当然ご挨拶に行くべきでしょう。いや、挨拶に行かないという選択肢などない！正直に言えば、ビダーシャルの両親を見てみたいという気持ちの方が大きいがね。

言うておくが、決して面白そうだからじゃないぜ（笑）

そうと決まれば、手土産を用意せねばならんな。ビダーシャルの両親がどんな人なのか想像もつかないので、無難な品物に選ばねばならないな。久しぶりにワクワクして来たぞ

「うむ？ ビダーシャルの両親に会いに行くのか？ 奴の両親は、
「ストップ！！」……」

「何も知らずに会いに行く方が面白いじゃん！ だから、絶対にビ
ダーシャルの両親の情報を私に教えないでくれ」

楽しみは後に取っておかないとね。

何を作ろうかな…と考えていると、アルビオン戦で作った『賢者の
石』が目に入った。指輪の力を取り戻しても、まだ結構な量が余っ
ている。なんせ、拳位の大きさの石を作ってしまったのだ。

やっぱり、珍しい物って喜ばれますよね！？

こうして、レイアのマジックアイテムづくりが始まった。

翌日。

手土産作成は、まさに順調です。後数日もあれば完成するだろう。

「レイアちゃん お手紙が来ているわよ」

私が作業をしていると母上から御呼ばれした。

私宛に手紙だと！？ エルフからの連絡ならば基本的に携帯または
PCに届くはずだ。と言う事はだ…この手紙は、人間から来た事にな
るだろう。

絶対に見たくないでござる。

「誰から？」

頼むから、私の予想を外れますように

「えっと…マザリーニ枢機卿からだわ」

・

・

・

オワタorz

流石に、無視するわけにもいかないので手紙を読みました。内容は一言：王都まで至急来いというのだ。戦争後に私を呼ぶという事は…またトラブル発生と言う事か。私は、マザリーニお抱えのトラブル対策係じゃないのだがね。

しかし、長い物には巻かれるというし、従いますよ マザリーニ枢機卿。

トリスティン王都にて。

待合室で待つ事10分。

慌ただしくマザリーニが部屋に入ってきた。顔を見ると目元に熊が

あり、顔色も悪い。一体、どれだけ働いているんだ。この年齢の人に二徹、三徹はつらいと思うよ 常識的に考えて。

「お元気そう…ではありませんね マザリーニ枢機卿。

貴方が倒れたらこの国は終わりなのですから、ご自分をもっと大事にしてください」

「そう出来たらやっているよ。それにしても随分早い到着だな。

予想では、今日の昼前に手紙が届いたはずだが…まあ良い」

そうだった…、私が空を音速で飛べる事をこの人知らないのだった。今度から手紙を貰ってからも一日位時間をおいてから出るようにしよう。

「お手紙には、用件は書かれておりませんでしたか どういったご利用でしょうか？」

それに、私の様な一介の男爵家の嫡男が出来る事など あまりないと思いますが…」

公爵家や大公国ならまだしも、たかが男爵家呼び着けるなど絶対におかしい。戦後処理なんて物は、うちの様な下級貴族では無くてもっと腹の内が腐った上流貴族達が利権を奪い合う為に行う物ははずだしね。

「なに、そんなに畏まらんでも構わぬ。君も知つてのとおり、トリステインは財政難だ。その上、先日の戦争で多くの兵を失う事になり国家の生産性は著しく低下する事になるだろう。おまけに、遺族への見舞金もあり 目も当てられぬ状況なのだよ」

なぜ、私にそんな財政難の報告するのだよ。そんな事、言われなく

てもわかっているよ。この国が傾いている事など誰の目を見ても明らかじゃないか。極めつけは、先日の戦争だ。戦争とは金食い虫なのだよ…それを承知であんた等が行ったんじゃないか。

「財政難なのは、分かりましたが…遺族が居ない方などの場合はその人の財産を国が没収するのでしょうか？それを考慮するとむしる国家としては儲かるのでは？」

貴族だつて蓄えの一つや二つあるでしょう。我が家も当初は貧乏であつたが、それを脱出するべき色々頑張つたからね。そう考えれば、今まで家が残っている貴族にはある程度の蓄えはあるはずだ。

「その考えは甘い。」

確かに、君の家の様な例もあるだろうが…半数以上の貴族は、財政難の為 借金をして生活しているのだよ。だから、今回の戦争でも借金だけ残して死んでいった者ばかりでな。その借金を国が肩代わりする事になつたのだよ…そうでもしなければ、金を貸した方も潰れてしまつからな」

確かに、貸した方からしたら最悪だよな。親族が居ればそいつ等に払わせればいいが…誰も居ない場合はどうしようもない。そのせいで、今後貸し渋り等が起きてしまい更に財政難に追い込まれる事は当然の帰結か。

おまけに、金がある貴族たちは公爵家のように免除金を払って逃れたな…うちも逃れたけどさ。

「一応、聞いておきますが…私を呼んだ理由はなんででしょうか？」

もはや『金』の一言だろうね。

「…ヴェーグル家に対しての借金の申し込みだ。先に言っておくが、既にガリヤとゲルマニア、クルデンホルフ大公国にも申し込みを行い借りられる限界まで借りた。

しかし…まだ足りないのだ…今回の我が軍の死者は2万人を上回る。おまけに、今回失った戦艦の再建や復興費用で更にお金が必要だ」

国家単位で借りてもまだ足りぬというのか…一体どれだけ金を使えば気が済むのだ。

それに、私にまでその話が回ってきたことから…他国の名だたる金持ち貴族には断られたのだろう。トリステインの様ないつ潰れるかもわからないような国に金を貸す馬鹿は少ないだろうしね。

「正直に申し上げまして…今のトリステインにお金を貸すような馬鹿は少ないと思います。なんせ、国のトップがアレでは貸した矢先に潰れるかもしれせん」

いくら我が家が財政的に豊かと言っても国家を支えられるほどの財産じゃないしね。確かに、アルビオン王家から貰った財宝やカトレアの薬代など結構ため込んではいるけどね。

「やはり、君もそう思うか…名だたる商人たちも皆同じことを言っていたよ。

…では、少し話題を変えよう。王宮にある家財などを君ならどういう手で売りさばく？」

•
•
•

「財政難の為に王宮にある unnecessary 家財一式を売り払うという事ですかね。」

「まあ、アイディアがあるとえばありますよ。質に入れるより高く売れる方法がね」

でも、タダじゃ教えないよ。

「ならば、この一件は全て君に一任しよう。」

当然報酬として、そのアイディアに基づいてここに掛れている値段より利益を出せたら、その利益の半分を君にあげよう」

マザリーには、売り出す家財一式の一覧と買取価格表を私に手渡してきた。

・・・え!?

まてまてまて! 誰も引き受けるなんて言っていないって。

「マザリー二枢機卿: 貴方の様な方から信頼を得て仕事を任されるのは非常に嬉しいのですが、生憎と私は多忙な身で「そういえば、ロマリア教皇がトリステインでエルフと貿易を行っている貴族の事を大層気にしていたような気がするな: 今なら私の力で何とかなるのだね」……………このレイア、祖国トリステインの為に全力を尽くしましょう」

くっそ: 悪魔め! 流石に 教皇相手じゃ分が悪い。以前、『肉の芽』で洗脳を施した司祭とはレベルが違う。

「そうかそうか、ロマリアの件は任せておけ」

やはり、人生経験が違うな。

「引き受けるにあたって、お願いがあります。少しでも高額で売る為に、貴方に用意していただきたいものがあります」

「よかるう、なんでも用意しよう」

確かに、その言葉聞きましたよ。

私は 手近にあった紙とペンと取り、必要な物を書き記した。その一覧を見て、マザリーニは私の考えが分かったようだ。しかし、国家の為だと思いしぶしぶと了承してくれた。

某地下オークション会場にて。

本当なら、完成したビダーシャルのお土産を持って『ネフテス』でビダーシャルが来るのを待ち構えて予定だったのにね。だけど、オークションの責任者として最後まで見届ける事になってしまった。

幸い 真紅から聞いたビダーシャルの帰省日は、来週だからまだ時間的余裕はある。

「では、次の商品は『アンリエッタ王女の寝台』だあああああああ！これは、毎夜寝る事でその匂いが染み込んだ逸品だ。さあさあ、紳士の皆さんまずは1000エキューからスタートです」

この為だけに、こういう場を盛り上げるのが得意そつなやつを用意してもらった。

そう、これはアホリエッタの使用済み品を裏オークションで売り払うという盛大な計画だ。あれでも、容姿は優れており国民や貴族の間では大層人気がある。だからこそ、金になるのだがね。

もちろん、商品に信憑性をつける為に全てマザリーニの直筆の証明書付きだ。この位の片棒は担いでもらわないとね。

ちなみに…今の寝台の買い取り価格は、500エキューだった。それを最低価格1000エキューで売っているという事は、最低限私の懐に250エキューの利益が転がり込むのだ。実に美味しい話だ。なんせ元手がタダだからね。

「3000エキュー以上の方はいませんか？ では、3000エキューにて落札！！ 皆さま盛大な拍手を」

パチパチパチ

仮面を着けた貴族達が一斉に拍手した。

「では、そろそろ皆様お待ちかね。アンリエッタ王女殿下の衣服へと商品に移しましょう。ちなみに、商品の説明は王女殿下お付の侍女が致します」

アンリエッタ王女殿下が、いつ来た服など様々な情報を侍女に説明させる事で客の妄想を掻き立てる。当然、商品の中には洋服ダンスもあつた為、中身の商品は一品ずつオークションにかける。一体、

下着には幾らの値段がつくのだろう…男ってみんなアホだな。

後日。

「これが今回のオークションの売上金です。凄いでしょ…元の買い取り価格の三倍ですよ！ 三倍！ これで、なんとかなったじゃありませんかマザリーニ枢機卿」

私の取り分は…笑いが止まりません。わずか数日でこんな大金が手に張るとはね。いっそう、毎月やってくれないかな。私が仕切りますよ。

「喜んでいい事なのか悪い事なのか…しかし、これで金の用意はできた。感謝する」

またもや、国を救ってしまった…。

これで、あのアホエリッタがあの変態共のおかずにされると思うとなぜか気分がいいな。そして、その事を本人は知らず…もっとも報告できるはずもないけどね。

主人公は、働き者。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

この時代でも、きっとこういう商品や売り方もありでしょう？
と思い書いてみました。変態が多い国家ってお金になるわ・・・

今回は、『ネフテス』のあるお方の家にお邪魔したいと思います。

作者は 現在ロド島のアニメを見ているところです。

主人公は、ビターシャルが羨ましい。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

ロド島ファンの方は、読む際に心してください。

作者の中で口調等は改変されていると思いますが
SSだと思って軽く流してください。

主人公は、ビターシャルが羨ましい。

『ネフテス』に遊びに来ているレイアです。

アホリエツタもお蔭で私の財布はホクホクです。役に立たない王族だと思っただが、思わぬところで役になったな。正直、マリアンヌの私物も商品で出すべきだったなと後悔した。世の中、色々なマニアがいるはずだからきつと高く売れただろうに…惜しい事をした。

さてさて、本日はそんな事よりもっと重要な使命が私にはあるのだ。使命と言う名の『美化活動』を行っている。まさか、今夏活動になるとは思ってもみなかった。これなら、ティファニアやアーベや水銀燈も連れてくるべきだった。

具体的には…

「はい、その作業着を着た いい男！ 貴方がそこに居たら誰も怖くて公園のお手洗いに行けないでしょう！？ 大人しく、家に帰りなさい」

親子連れの子供が無邪気に遊ぶ公園の中で、一際目立つ男が居た。いくら近いと言っても、ここまで遠征に来なくてもいいんじゃないか？

「うほw レイアじゃないか。どうだい、これから俺と一緒に休憩でもしないか」

「ご冗談を…というかアーベ。大人しく帰ってくれよ。知っているとと思うけど…ちよいと不手際やらかして、その罰として『美化活

動』をやらされているんだよ」

…そう、对蔷薇族のね!?

本当に、これなんて罰ゲーム!?みたいな感じだよ。こいつら、ここ数日いくら排除しても湧いてくるんだぜ。もう、一匹いたら30匹は居ると思え。みたいな感じだ。しかも、『ネフテス』お抱えの警備隊じゃ対応しきれないからと私にお鉢が回ってきたわけだ。

もうすぐ、ビダーシャルが来るというのに。こいつらを排除するまで『美化活動』をやめることが出来ない;;なんせ、監視の目は数えるのも馬鹿馬鹿しい位ある。『ネフテス』の男の大半が私を見ているのだから(涙)

「まあ…今回はレイアの顔に免じてこの位にしておいてやろう。流石に、涙を流して頼まれたとなっちゃ。手を引くしかないな」

「あ、ありがとうー！ やっぱり、いい男は違っね。これでホモじゃなかったら、モテモテだよ」

とりあえず、アーベを褒め倒して何とか『蔷薇族』へ帰らせる事に成功した。

ふう、真紅からの連絡ではビダーシャルが来るのは明日…今日は、ビダーシャルの家で休み。明日に備えよう。…ちなみに、ビダーシャルの家の鍵は複製済みだ。このレイアに抜かりはない。

さて、今日も晩御飯は何にしようかな…ティファニアも居ない事だし。たまには手を抜いてオムライスでも作ろう。となれば、新鮮な卵が欲しいな。

買い物後。

いやー、エルフの人は親切だね。一杯おまけしてもらいました。な
んでも、昼間に『薔薇族』を追い払った勇気を称してとか…でも、
ここにも若干一名程『薔薇族』が残っていますけどね！ 副統領と
いう職の可愛らしい？『薔薇族』がね。

それにしても、『ネフテス』はいつ来ても心地よい。空気はおいし
いし、みんないい人達だし、人間の世界（主に領地の外）で荒んだ
私の心を癒してくれる。

今日は、何かいい事がありそうな予感。

しばらく歩いていると、前から歩いてくる男と目が合った。なんだ
か、顔色が悪いな。どうしたのだろうか…うーん、指輪の力で治
してあげようかな。

「だいじょーた、助けてくれ。私はこの間結婚したばかりなんだ…
だから、尻だけは 尻だけは！！」…え！？ ちょ ちよつと！！」

男が訳の分からない事を突然言い出した。これって、もしかしない
でも私のせい！？ お願いだから、待ってくれ。とりあえず、誤
解を解かせて…

と思つたら、既に男は遙か彼方に逃げていた。わ、私が一体何をし
たついうんだあああああ！！

酷い…酷過ぎる。これが『薔薇族』という名を背負った者の宿命な

のねorz 私のガラスのように繊細な心は、もう粉々だよ。

私が、地面にorzのポーズで半泣きしていると…

「どうしたの？ 道の真ん中でそんなポーズしていると危ないわよ」
足しか見えないけど、声から察するに女性の様だ。私だって好きで
こんなポーズをしているわけじゃないよ。

「いまちよつと…自分が背負った宿命の重さに潰されている所です」

「ふふ、若いのに大変ね。」

子供のうちから、そんなんじゃないこの先やっていけないわよ」

この先何十年も『薔薇族』として生きていくのか…だんだん自信が
なくなつて来たよ。まあ、エルフの女性に慰められるなんてハッピ
ーな出来事もあったし 今回は 良しとしよう！

「ありがとうございま……」

お礼を言う為に視線を地面から女性に移し替えた。

そこには……私が長年理想としていたエルフ…そう ” デイードリ
ット ” その人が居た。

スレンダーで美しいプロポーションと整った顔立ちに白い肌、黄金
色に輝く髪…服装も完璧だ。ティファニアも十二分に美しいが、こ
の人はベクトルが違う美しさだ。まるで、神話の中から現れた女神
の様な美しさだ。

「美しい…」

「ありがとう。何かあったか知らないけど…頑張れ 少年」

ぐはぁw

……こ、これは不味い。ティファニアの料理とどっちが不味いかと言われれば…同じくらいまずい。私に致命傷を与えているとは…こやつ出来るな。

「元気がでたようね。じゃあ、またね」

またねか…と言う事は、同じ『ネフテス』に住んでいるのだろう。是非、またお会いしたいね。

「すごく元気ができました。ありがとう 綺麗なお姉さん」

私を見て逃げた男が居なければ、今日の様な出会いは無かっただろう。『薔薇族』で本当に良かったわ。これなら一生『薔薇族』を続けてもいいかもしれない。ありがとう 神様！

あ…し、しまった。

連絡先を聞いておくのだった。折角、携帯電話という物をエルフの中で広めたのに こういう時に番号を聞かないでどうする！ 縁があれば また会えるだろう。その時に聞けばいいや。

「せめて、電話番号は無理でも写真位取らせてほしかったな…
(ボソリ)」

翌日。

待ちに待ったビダーシャル到着の日だ。この日の為に、手土産以外にも素晴らしいマジックアイテムをアミバと共同で作った。そう、この日の為に某蛇の傭兵も愛用していた究極の道具：段ボールを用意したのだ。…ちなみに、『愛媛みかん』と書いておいた。

『こちら、スネーク。目標を発見した：これより尾行する』

『了解したわ。ビダーシャルは鋭いから気を着けなさい』

真紅との通信を切った。あまりは長い時間話すとビダーシャルにはれてしまうからね。ちなみに、真紅はビダーシャルが捕まえた人間の面倒を見る為にガリアに残っているらしい。

さあ、段ボールを被って追跡開始だ。

知っているかい？視覚情報は、人間が得られる情報の約8割を占めている事を…。実は、この段ボールには それを利用したちよつとした細工を行っているのだ。段ボールを見れば見る程、相手を催眠状態に陥らせる事ができるマジックアイテムなのだ。

ビダーシャルのように高位なエルフには、私の魔法は通じないから…だから、やり方を変えて 魔法以外の方法で催眠状態に陥ってもらおうと思ったのだ。どのような原理かというと…知っている人が居たら嬉しいのだが、ビル2世に出てくる光を利用した催眠術を知っているだろうか？

知らない人の為に説明すると 段ボールの表面にちりばめたラミネールのクリスタルから規則的に光を発生させる事で対象を催眠状態にするという手法だ。

当然、エルフ相手に催眠術を使うという事で、念の為にテュリユークには使用許可を貰っている。実演したところ、一見しただけで催眠術の対抗手段を講じてくるとは恐れ入った。学習能力が半端ね！。

と、言う事で私は、段ボールを被りビダーシャルを追尾中だ。何度か、こちらを振り返りはするが 気付いてないようだ。認識阻害の催眠術は、ちゃんと機能しているようだ。

後を着けること数分。

ビダーシャルが大きな家の前で止まった。随分と立派な門だな…ビダーシャルって 実はエルフの中でもいい所の跡取りなのかね？

では、ご対面と行きましょう！

原作でも現れなかったビダーシャルの親だ…さぞかしすごい存在なのだろう。しかし、私は驚かない自信がある！ この世界に来て様々なエルフを見た。誰もがぶっ飛んだ存在だったおかげで免疫が付いたのだよ。

ガサガサガサ

ビダーシャルが門を潜るのに合わせて私も移動した。それにしても…広い庭だな。後で庭に温泉でも掘ってやろうかな。主に私の滞在

中の湯あみの為に。

そして、ついに玄関に到着だ。

そして、ドアが開き中から一人の女性が現れた。

・
・
・

ええええええええええ！！ な、なぜ貴方がここに！！？？ ま
さか、昨日であったテラ美少女？…いや、美女か。まさに運命だ。

「おかえりなさい」

おかえりなさいだと（怒）！ まさか まさか ビダーシャルは
私に内緒で実はこんな”デイドリット”にクリソツな いい人が
居たというのか！？

裏切ったな 僕の気持ちを裏切ったな！！

「ただい「リア充 爆発しろおおおおおおおおおおお！！
！！！！！！」…あ」

「きゃ

思わず、段ボールの中を払いのけて大声で心の叫びを言ってしまった。
た。

あ…ビダーシャルと目があった。いやー、そんなに見つめるなよ

照れるじゃないか。いや、違ったな、まずはビダーシャルに言う事があったのだ。

『ビダーシャル、ビダーシャル。あの人ってもしかしてビダーシャルのイイ人だったり？ついでに、彼女の名前を教えてください』

ビダーシャルに小声で話かける。

『突っ込みたいところは多々あるんだが…突然現れて挨拶も無しにとは…まあ、レイアはそんな奴だったな。ちなみに、見当違いもいい所だ。そんな事があってたまるものか。それで、名前だがディードリットと言っ』

なぜか、ビダーシャルの中で私の地位が急降下した気がした。そんな事はどうでもいい！ビダーシャルの恋人でないとすれば…「おかえりなさい」と言葉から推測するに親族で間違いないだろう。

それにしても、予想通りの名前だ。まさか、こんな所で会えるとはね。

だが、今やるべきことは…

「ビダーシャル…今日から私の事をお義兄「王の柱！」「…ぎゃー
ー」

突如天空より極太のレーザー砲らしき攻撃が私を貫いた。

プスプス

ひ、酷い…何もしてない私に突如ビダーシャルが能力を使って攻撃

してきた。ただの人間だったら死んでいたぞ！ いや、人間でなくとも死ぬ威力だった。

ビダーシャルの顔に血管が浮かび上がっている…なんか、とっても怒っている模様だ。…は！？ そうか、そういう事なのか。

デイドリットさんは、年上のように見えるが実はビダーシャルより若いと…と言う事は

「今日からビダーシャルの事をお義兄「王の柱！！王の柱！！王の柱！！」…わたしがああああー！なにをおおおおお！したっけいっうんだあああああ！」

またまた、ビダーシャルによって極太レーザー砲をお見舞いされた。流石に痛いです。

ビダーシャルの容赦ない攻撃のせいで綺麗だった庭が悲惨な事になっていった。きっと後で直させられるんだろうな。

「その位にしておいたら ビダーシャル。折角、貴方のお友達が来た事だし上がってもらいなさい」

「そうですね。デイドリットさんの言つとおりだよ。おじやましますー」

やっぱり、美人の言う事は違うね。

私はビダーシャルの魔の手から逃れてデイドリットさんのお誘いに乗ることにした。美女の誘いを断るなど 人として間違っているしね。

「しかし、母よ」

・
・
・

あれ？今何か幻聴が聞こえたような気がするんだけど…働きすぎたかな？

「ビダーシャル ビダーシャル。今、とってもすごい発言が聞こえたんだけど…ディードリットさんが貴方の母親とかマジ!？」

え!?!なに こいつ何言ってるんだみたいな顔して!!

「本気と書いてマジと読む…」

つまりだ…ビダーシャルは私にこう言いたいわけだ。

「今日から私の事をパ「ザメク!?!…さて、レイアよ。遺言だけは聞いてやるう」…ちよつと、何気本気でしょ!?! それ!?! 半分くらい冗談だって…だから、落ち着こう。折角のイケメソフェイスが台無しだよ」

ビダーシャルの目がマジだよ。それにしてもビダーシャルってザコンだったのだね。だから、容姿はいいけど モテナイのだね。分らないでもないよ…ディードリットさん程の美人は エルフの中でも見た事ないしね。そりゃ、必然的に女性のハードルが上がるよね。

「ちよつと、息子さんと親睦を深めてきますね。後…治療の用意をお願いします。…主に私の為に(涙)」

「ふふふ、いつてらっしゃい」

では、ビダーシャルよ。もしも、私が勝てたのならば明日よりパパと読んでもらおうか。こうして、ビダーシャルと私の戦いは幕を開いた。

数時間後。

無理でした…。どう考えても無理でした。というか、ザメクとかチートもいい所だ。時間を超えて攻撃してくるわ、こちらの攻撃に対して時間を戻したり進めたりして無効化するわ。もう、訳が分からないよ。

私は、ビダーシャルに引きずられてデイドリットさんが待つビダーシャル実家へと連れて行かれた。そして、手当てを受けて今は美味しく晩御飯を頂いております。

「というわけで、ビダーシャルにフルボッコにされてきました。…親友を笑顔でフルボッコにするなんて息子さんの教育 間違っていないませんか？パーンさん」

「ははははは、痛い事を言うな レイア君。確かに、性格もデイドに似て過激だからな…」

黒髪の良い体をした男性エルフが笑いながら答えてくれた。

そう、この人パーンさんがビダーシャルの父親にしてデイドリット

トさんの夫であるのだ。パーンって人間じゃないのかよ！と突っ込みを入れたかったが…耐えた。

「そうなんですか…ディードリットさんは、見た目以上に過激な性格と メモメモ」

「こらこら、過激な性格ってどういう事よ パーン」

まったく、私の前だというのにラブラブなお二人ですね。ビダーシヤルは、この雰囲気についていけずに家を出たのだね。分かるよその気持ち。

「そういえば、レイア。これは、どう使うんだ？」

ビダーシヤルが私の持って来たお土産を開けてくれたようだ。

「それは、チェスと言ってね。俗にいうボードゲームだよ。遊び方は、手書きの説明書を付けておいたから 後で少しやってみよう」
きつと こういう知的なゲームは好きだろうと思って持ってきました。
た。

「ほほう、それは楽しみだ。…で、もう一つのこれは何だ？」

流石、ビダーシヤルだ。お目が高いですね。それは、『賢者の石』を使って 私が一から作り上げたマジックアイテムですよ。しかも、持ち運べるように直径10cm程度の球状の物である。

「よくぞ聞いてくれました。それは、私の自信作で『黒のコア』と言ってね。マジックアイテムに内包された魔力を利用し、原子崩壊

を起こさせる事で大爆発させる代物だよ。ちなみに、そのサイズだと…半径2km位は何も残らないはずだ。ちなみに、核として利用している『賢者の石』が無くなるまで何度でも使える」

作る過程で、もう少し小さい物で実験したところ我が領地の森に大穴を開けてしまった。

「なぜ、このような物を？」

愚問だね ビダーシャル。それは、来るべき…ヨルムンガント開発の為に動力源として用意しただよ。…って事は言えないので

「内緒だよ。もうすぐ分かるからさ」

食事後。

楽しい食事が終わった所でラミエルのドリルで掘ってもらった温泉にみんなでつかる事になりました。

温泉と言えばやる事は一つだよ…この仕切りをまたいだ先には…とか考えた時期もありました。ビダーシャルとパーンを出し抜いてなど不可能だ。おまけに、デイドリットのペットも一緒に風呂にはっているのだから…ちなみに、ペットの名前は”シューティングスター”というんだよ。

寝る前にビダーシャルとチェスをやった所…わずか三回目でもう勝てなくなりました(涙)

主人公は、ビターシャルが羨ましい。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ディードリットかピロテースか迷った結果
作者の好みでディードリットにしました。

やはり、ロド島は偉大だなと思います。

耳長エルフの起源と言われているだけの事はある。

次回は、ネタ回です

主人公は、野球をする。(前書き)

お気に入りユーザ100を記念して
作者が突如思いついたネタ回です。

通常の時間軸とは関係ないお話です。

作者は野球のルールを本当に知りません!!
野球ファンの方ごめんなさい。

主人公は、野球をする。

アーベから急な呼び出しに応じてみれば…いつの間にかこんな場所に立つはめになった。今、私が何処に立っているかというところ…サハラ真つ只中に建設された　場である。

なぜ、私がこんな所に居るかと言うところ…かれこれ三日前の事だ。

三日前。

アーベから突如電話があり、『薔薇族』の名誉に関わる事だから大至急『薔薇族』まで来て欲しいと言われた。正直、そんな名誉なんて要らないので辞退します…と言おうと思ったら、「断るならば、今後　夜道を歩く時は、尻に気を付けるのだな」と言ってきた為仕方なく『薔薇族』まで来ましたよ。だって…逃げたら怖いんだもん。

「それで、一体何の用？アーベ」

「よく来てくれた。」

レイアは、実は三日後に我らエルフ最大のイベントがあるのだ」

ほほう、それは知らなかった。というか、エルフがイベントね…嫌な予感がヒシヒシする。

「一応聞いておこう…どんなイベント？」

「タマ遊びだ」

・
・
・

へー、エルフ最大のイベントがタマ遊びとは驚きだ。誰がどう聞いても『薔薇族』最低のイベントにしか聞こえないのだけだね。

「帰らせていただきます」

ガシガシ

私が返ろうとするとアーベとミチシタにガツチリとホールドされた。

「人の話は最後まで聞くもんだぜ。

大人しくしてないと俺のビツクマグナムが火を噴く事になるぜ」

「H A ・ N A ・ S E ! ! !」

私は、そんな変態的なイベントに出席する程 暇じゃないのだよ！
実家に帰っても仕事は掃いて捨てる程あるのだ。

当然、アーベ単体から逃げるだけでも至難なのに ミチシタまで加わってしまったら絶望的であった。その後は、みっちりタマ遊びが何なのかを説明され、練習させられよ（涙）

クズン

汚されちゃったよ

.....回想終了.....

と、半分冗談の回想はこの位にして…

でも、まさかエルフが野球なんて健全的なスポーツを嗜んでいたとは思ってもみなかったよ。おまけに、集落対抗戦と規模がとんでもない物だ。ちなみに『薔薇族』は毎年ベスト10入りする程の強豪らしい。

野球なんてルールも知らないが、アーベ達の指導により「投げる」「打つ」「取る」の三つの動作だけ覚えただぞ。ちなみに…ルールの方は 時間がないから諦めた。

スポーツマンシップにのっとり全身全霊で正々堂々と勝負するのも全くもって異存はない。だけどさ…これは流石に私に死ねと言っていると思えないんだけど。

相手の投手のプレッシャーが半端ないです。こんな人の球を打てる訳ねーだろ！

「お前が、噂の『薔薇族』副統領か…人間の割には、強いな」

「あ、ありがとうございます」

黄金聖衣を身にまとった戦士から褒め言葉を頂いた。本来なら泣いて喜ぶシーンなのだが…別の意味で泣きたい。なんで、こんなチートエルフ達が野球に出ているんだよ！

「俺の名は山羊座カプリコーンのシユラ！

受けてみるがいい 我が投球を！！ おおおおおお」

シユラの周りに宇宙が見える…これやばくね！？ 明らかに小宇宙^{コスモ}を燃やしているよ。逃げ出そうにも…この野球場には見渡す限りエルフだらけだ。万が一、ここで逃たり 無様な姿を晒せば 後で各方面より折檻を受けるのは目に見えている。

前門の虎 肛門の狼ってか…本当に笑えません。

こうなったら、私だってやけくそだ。

「ゼルエル！！」

ゼルエルを身に纏い少しでも自分自身を強化する。そして、持っているバットを錬金でダイヤモンドに変えて、ゼルエルの触手でコーディングを行った。ついでに、A・Tフィールドを可能な限りバットに保護した。

さあーこいー！

「^{エクスカリバー}聖剣抜刀！！」

シユラが放ったボールがキャッチャー目がけて猛スピードで飛んできた。黄金聖衣の攻撃速度は光の速さだと思っていたが違うようだ

…なんせ、私の目でも見えているからね。

「この勝負 貰ったああああああ!!」

私は、飛んでくる球に対して完璧なタイミングでバットを振った。

スパン…ボトン

…え!?

「ストライク!」

審判の無情な声が響いた。

ちよ、ちよつと待ってくれ! ストライクだって! ボールに当たったはずの私のバットが綺麗に切断されている。素晴らしい切れ味だ…じゃない!

「バットに当たっても打てない球ってどんなだよ! ふざけるなあ
ああああああ」

あまりの理不尽さに思わず持っていたバットを投げ捨てそうになっ
てしまった。

一言だけ言おう…前世でも野球についてさっぱり知らないが これ
は野球でない事だけは理解できる。

数試合後。

もう、こんな野球やだー。

『聖闘士』との戦いは、アーベやミチシタの健闘のおかげでギリギリ勝利を収める事に成功した。どうやって…チート軍勢と闘って勝ったかって？

そりゃ…

「斬り決る戦神の剣」
フラガ ラック

「ストライク！」

アーベが因果をコントロールして半数のバッターを三振させているからだよ。おまけに、「破戒すべき全ての符」ルルブレイカーを使って聖衣との契約を無効化したりとね。だが、相手もチートである以上 手ごわかった…こちらが打った球をベースの上にレポートさせてアウトにする奴とか…こちらが打つ瞬間に五感を剥奪してきたり…etc

もう、酷いの なんのって…チート全開だよ こいつ等。

少しは自重しろ。

さらに試合が進み準々決勝。

はあはあ…満身創痍です。指輪の魔力を使い肉体は回復しているものの、精神が疲れ切っております。一打一打が命懸けすぎる。

そして、今回の対戦相手が無敗の王者である『ネフテス』である。

「宿命の対決という感じだね…ビダーシャル」

「我が魔球の餌食になるがいい レイア」

ビダーシャルの魔球など 今までの試合で放たれた球に比べれば怖くもないわ！ それに、サイバデイに乗っていないビダーシャルなどゼルエルを身に纏った私の敵ではない。

「くたばれ レイアあああああ！！」

ビダーシャルが叫び声と共に投球してきた。

なんだよ！その叫び声。どんだけ 私に恨みがあるんだよ。この間、ビダーシャルが寝ている間に額に「肉」を書いた事をまだ怒っているのか。確かに、そのまま老評議会に出席して笑いにされたのは悪かったよ。それとも、デイドリットさんと二人で買い物に出かけた事をまだ根に持っているとか？

だが、今はそんな事などどうでもいい！

「その程度の球を打てぬ私では無いわ！ 貰ったあああああ」

ポトン

私は、すかさずバントをした。ボールが転がっている隙に私は一塁へ移動する！

ははは！悪く思つなよ ビダーシャル。バントでも当たれば勝つのだ！ なんせ、A・Tフィールドで一塁まで進路を全て囲っている為 変態クラスのエルフでない限りは突破不可能だ。これぞ、我が

必勝法。

「レイア！ 避けねば死ぬぞ」

ビダーシャルが拾ったボールを私 目がけて投げつけてきた。

甘い甘い！ この20枚のA・Tフィールドをただの投球で貫くだと。ビダーシャルのこのA・Tフィールドの性能を知らぬわけもあるまいに…

「たかが、ボールで…え!?!」

ビダーシャルが投げたボールが私のA・Tフィールドに触れた瞬間、槍に変わった。その槍は、とつても身に覚えのある槍だ…そう、確かロンギヌスの槍!?!??

その瞬間、全てのA・Tフィールドが貫かれた。

「やばああああ」

私は槍を回避すべく、瞬時にA・Tフィールドで自分自身を押しつぶした。そして、槍は私の上を通過していった。

「タッチアウトだ。レイア」

…納得いかねええええええええええええ!!

その後も、我ら『薔薇族』は粘ったけれど…勝てませんでした。

テュリユークが過去に遡り勝てる未来を掴んでくる為 どうあがいても無理です。それに、魔球ブラックホールクラスターとか言ってる信じられないような物をボールと一緒に投げつけてくるしさ…これで、死者が0って信じられる？

優勝：『ネフテス』

2位：『拳王軍』

・

・

・

8位：『薔薇族』

結果から見れば上々だろう。それにしても『拳王軍』は二位か…半端ねーな。

ちなみに、どうでもいい話なのだが…サハラが砂漠になったのはエルフが始めた野球のせいらしい。昔は、試合の余波で破壊された森を元通りにしていたのだが…毎年、緑化活動を行うのが大変になり手を抜いてしまって気が付いた時には砂漠になっていたようだ。

それに、砂漠なら余波で壊れる物もないし心置きなく遊べるからという理由で今の緑化活動はやっていないようだ。

自然を愛するエルフは何処に行った！？と思うレイアであった。

主人公は、野球をする。（後書き）

ネタ回なので、内容には深く突っ込まないで頂けると嬉しい。

もし、ご要望があれば今後もネタ回を書こうと思います。

今回は、ビダーシャルのお仕事についていくお話です。

主人公は、仕官する。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想をかいて頂けて作者もうれしい限りです。

皆様の感想を励みに頑張ります。

本SSも原作の10巻相当までやっと進みました。

書いたのはいいけど…これからの展開どうしようかと悩む作者がここに居る。タバサ救出とか既にムリゲーになっている…

主人公は、仕官する。

何故か ガリアに居るレイアです。

『ネフテス』での仕事が終わったら、学校に復学するんだ…なんて、死亡フラグみたい物を立てたのが駄目だったのであろう。実家に帰ろうとした矢先に、ビダーシャルに「仕事を手伝え」と拉致されたよ。

ビダーシャルには、色々世話にもなっている事だし当然手伝う事にしたよ。最も、エルフからの要請に対しての拒否権は 持ってないけどね。但し、『薔薇族』のスキンシップは対象外だけどね。

おまけに、先日 トリステインのある人からもガリアに行ってくれとお願いされた事もあるし、ある意味 一石二鳥だよ。

- - 回想 - -

ガリアに来る少し前 父上から電話がありました。

なんでもマザリー二枢機卿が私に電話をする為に実家までやって来たようだ。最初は、手紙で私を呼び出したのだが 私が（エルフの）仕事の関係で当面戻らないので何か用事があれば実家にあるマジックアイテムで連絡が取れると父上が手紙を返したようだ。

『先日ぶりだな。』

ミスタ・ヴェーグル：いや、お父上也居る事だしミスタ・レイアと

「言わせていただくこと」

「先日ぶりですマザリー二枢機卿。

わざわざ、我が領地にまで足をお運びになるとはいつたいどういうご用件でしょうか？」

時期的に絶対に聞きたくないでござる。だけど、社交辞令的に聞いてしまった。元日本人としての習性か。

「まあ、既に察しているとは思いますが…問題が起こってしまっただけ。君に頼みたい事があるのだよ」

いい加減、男爵家の嫡男に無理難題を頼むのは止めようぜ。それに、どうせ問題って主人公一行絡みだろう？まじ、いい加減にしるよ。

「一体、どれだけ問題を抱えているのですか…正直、もう限界超えている気がしますよ。それに、私に頼まずとも貴方程の人ならば、有能な味方の一人や二人居るでしょう？」

「…使える人材は、この間の戦争で皆死んでしまったよ…。おまけに、王女殿下は周りの反対を押し切って平民を貴族にするわ。2万人もトリステインの兵士を殺して何が英雄だ。各方面からの苦情を処理するこちらの身にもなっただけほしい物だ。更に財政難だということに学生ばかり集めた騎士隊なんて物をお作りになるわ」

「ごめんなさい。貴方の味方を殺したのは、たぶん私達だわ…；；
というか、よくサイトを貴族にできたな。どれだけごり押ししたんだよ。」

「難儀ですな。ここら辺でトリステインを見限ってヴェーグル家で

働きませんか？

貴方なら優遇いたしますよ。今より確実に良い待遇になる事はお約束いたしますよ』

『職を追われるような事になれば考えよう』

この人に死なれてはせつかくの身分証もただの紙切れになってしま
うし…何より、不憫すぎるから引き受けてあげるか。どうせ、引き
受けるまで引く気はなさそうだしね。

『ハア・・・仕方ありません。話を聞きましょう。但し、報酬はし
っかりといただきますよ』

『感謝する』

話を聞いてみると、ルイズ一行が無断で国境を越えてガリアに潜入
したようだ。おまけに、ガリアのシュヴァリエである一人の女性を
誘拐するつもりらしい。しかも、誘拐対象はガリア王家 所縁ゆかりの者
でもあり…成功しても未遂に終わっても冗談ではすまない。

そりゃそうだろう…他国の王族を誘拐なんてシャレになってない。
戦争になっても文句は言えないし…大義名分が相手国にあるのは明
白。そんな事になれば、財政難でもあり人材不足でもあるトリス
ティンが負ける事など火を見るより明らかだ。ガリア相手に何やって
るんだよ。

そんな訳で、私はトリスティンの大使としてガリアへ行く事になっ
た。以前に貰ったマザリーニ発行の身分証がある為、資格として十
分らしい。とりあえず、戦争にならぬようにあらゆる手を尽くして

くれと言われた。如何なる犠牲も問わないらしい。

くっそ・・・なんでまた、私がルイズ一行の尻拭いをしないといけないのだよ。どうして、自分の行動が周りにどういう影響を与えるかを考えない！ 学力だつて学院TOPクラスの奴が何人も居るのにどういふ事だよ。まあ、お陰様で「生涯 トリスティンへの納税義務抹消」と「メイジ死刑囚と既に死亡したメイジ死刑囚の死体譲渡」の報酬が約束されたけどね。

一個目の納税の義務なんて、交渉した時にはマザリー二の苦渋の声が聞こえたよ。我が領地が治めている税金は男爵家ながら侯爵家並だからね。なんせ、エルフの貿易品を高額で売っているせいで馬鹿みたいに儲かっている。おまけに、カトレアの鎮静剤もちゃんと収入として計算している。

二個目については、最初は”治外法権”を要求したのだが 各国の承認を貰わないと実現不可能の為 諦めました。だから、メイジの死体を貰う事にしたよ。何に使うかなんて今更言うまでないよね！ 使えそうな人材は、強制的に我が領地で職についてもらう。使えない人材は、当然タンク行きだ。うまくいけば、この間死んだメンヌヴィルの死体もこちらに流れてくるはずだ。

- - 回想終了？

と言う事があり、今私はビダーシャルと一緒にガリア王…ジヨゼフとご対面中だ。ちなみに、今の私の立場はトリステインのレイアでは無く、『薔薇族』副統領のレイアとしてこの場に居る。だって…ビダーシャルがそう紹介するんだもん。

ちなみに、原作とは少し異なり エルフからガリアへ報酬は ” 向こう50年のサハラでの風石採掘権 ” のみになった。まあ、そうなるように私がビダーシャルに進言しておいたのだけだね。どうせ、この後 ビダーシャルが支える事になるんだ。正直、それだけでも十分すぎる。

「よかるう。あと もう一つだ」

「なんだ？」

「エルフの部下が欲しい」

そら、来た。

さっさと、仕官してください。そして、私の要件をジョゼフに話させてくれ。

「わかった。レイアを仕官させよう」

・
・
・

「え!？」

ちよ、ちよっと！ なにそんな重要な事を勝手に決めているの!？
私が仕官だつて？話の流れ的にビダーシャルが仕官すべきでしょう常識的に考えて。まさかとは思つが…最初から私を生贄にする気だったのか!？

後、私はエルフじゃなくて人間だよ！…種族的には。

「見たところ…人間に見えるが、お前もエルフなのか？」

「いえ、私は『薔薇族』というエルフの集落で副統領という肩書はありますが…これでもトリステイン王国のヴェーグル男爵家嫡男です」

そうそう、私は人間なんですよ。

「ガリアの王よ。安心するがよい、こやつは並のエルフが数十人束になっても勝てぬ程の猛者だ。かくいう私もレイアには敗北している。それに、レイアはエルフの中でも唯一の副統領という地位に居るくらいの人物だ。これがどういう意味か分からね王ではあるまい」

ちよつと！なんて事を言うの！？？どうして、私を持ち上げてないでいい時に持ち上げる！！　デイドリットさんが居る時は、何もほめなかつたくせに；；　この　ザコンめ！

「あの「なるほど、お前がトリステインの変態と名高いヴェーグル家の跡取りか。よかるう、お前が仕えよ。エルフの盟友であり、エルフにも勝る程の力があるならちよつど良い。トリステインの方には我から言っておこう」…」

あのー、私の意志はいずこに；；　というか、勝手に他国の貴族を雇用していいのかよ！いくら王でも問題でしょう？

私は、すぐさまザリーニに電話を掛けた。連絡用にと実家にある予備を一台渡しておいたのだ。

数分後。

「ジョゼフ王、今しがたマザリーニ枢機卿と連絡を取ったところ『是非、仕官させてやってくれ』とのことでした。ただ、『トリステインのヴァリエール公爵家三女一行がガリアに不法侵入し、あまつさえタバサと少女を誘拐しようとする企んでいる』との事です。これに対してトリステイン国は一切関与していない事をご承知いただきましたとの事でした」

マザリーにもジョゼフが私の仕官を望んでいる事を機にルイズ一行の件を無かった事にするつもりのようなようだ。

「ふふふふはははははは、どうやらお前一人を差し出してせいっら一行の件を無かった事にするつもりらしいな。そうだな…まだ我はお前の力を見ていない。もし、その実力が本当にエルフに匹敵するならば、ヴァリエール一行の件は不問としてやろう」

まったく、酷いですよね。マザリーニもそうだが…ビダーシャルまで私を生贄にするとはね。まあ、ビダーシャルが老評議員で無くなれば無職!!。もし、そうなればビダーシャルは実家に帰る事になるだろう。そうなれば、デイドリットの庇護のもとで暮らすと言う事だ!。それでは、断じて許さん!!

「わかりました。何を持って力を証明すれば?」

「そうだな…囚人を100人程 同時に相手をしてもらおうか。当然、全員メイジだ。生死は問わん、1分以内にカタをつける」

メイジの囚人が100人か…さすが大国ガリアだ。囚人といえども

人材は豊富だな。ちなみに、ジョゼフさんよ…ビダーシャルクラスのエルフをメイジ100人換算は桁が大分足りてないですよ。

「1分か…長いな レイア」

「楽勝だね」

ガリア訓練場にて。

私は、囚人達が集められた広い訓練場に連れてこられた。どうやら、囚人達は私を殺す事が出来れば釈放された上に、貴族の地位と莫大な金が貰える事になっているみたいでやる気満々だ。

「では、エルフに匹敵するお前の力 見せてもらおうか。この砂時計が落ち切る前にカタをつける。できなければ、ビダーシャル卿に仕官してもらおう」

100対1…本来なら無謀だろう。だが、ジョゼフのありがたいお話の間に訓練場の地下には既にゼルエルネットワークを張り終えた。開始と同時にさようならだ。

ジョゼフが砂時計を裏返し、開始の合図をした。

その瞬間、相手の死刑囚共が詠唱を開始し始めた。中には凄腕の者もいただろう…しかし、無詠唱で唱えられる魔法に勝る者は無いのだよ

「<<自害しろ>>」

その場にいた全員が唱えていた呪文を私では無く、自らの急所に放った。当然、一世一代のチャンスを勝ち取る為に 囚人達は魔法にもかなり気合を入れていたのだろう。しかし、それが仇となり、自らの全力の魔法をその身に浴びる事になったのだ。

開始わずか10秒足らずで全てのメイジが死に絶えた。訓練場には、血と人間が焼ける匂いが充満していった。

「す、素晴らしい！ よかろう、ヴァリエール一行の件 不問としよう」

「ありがとうございます。ジョゼフ王」

これで、一件落着だ。

「早速だが、ヴェーグル卿とビダーシャル卿にはとある親子を連れてアーハンブラ城に行ってもらおう」

私も卿付けか…どうやら、エルフと同格として扱われているようだな。

「わかりました」

それにしても、もう次の仕事が…

しかも、アーハンブラ城ってルイズ一行が来る場所じゃねーかよ！もしかして、ビダーシャルじゃなくて私がサイトと闘うのか！？正直、アレと闘うのはもう飽きたのだけだ。

「頑張れ…そのうち いい事もあるさ レイア」

何 他人事みたいに言っているの！？ビダーシャルも働くんですよ。
今度、実家に来たらティファニアの特性料理を食わせてやるからな；
；

Side サイト

タバサの実家を訪れてみたのは良かったが、生憎と一足遅かった。

それにしても、なぜエルフをルイズ達が恐れるのか、俺には理解できない。過去に戦争で大敗したからと言って、ここまで怯えるほどうかしていると思う。

ギーシュがいうのは7千対500？と言ってはいるが…俺は、アルピオンで7万対1だったんだぜ。…もつとも、100から先は覚えてないけどさ。

「エルフか…こんな事ならミスタ・ヴェーグルに協力を要請すべきだったよ」

ギーシュが突然、耳障りな名前を口にした。

「ケツ、あんなゲス野郎が居なくなつて 俺が全部かたづけしてやるよ！」

確かに、ゲス野郎がエルフと仲がいいという噂は平民……いや、俺を含めた貴族の中でも有名だ。だから、ギーシュはゲス野郎が味方に付けばエルフと闘わずに済むと思っっているのだろう。

俺に言わせれば、あんな理不尽なまでに暴力を振るうゲス野郎に頭を下げるのは死んでもごめん。むしろ、会った瞬間にリターンマッチをしてやりたい位だ。アルビオンでの厳しい訓練の成果を見せてやる。

「君は、随分とミスタ・ヴェーグルを嫌っているね。僕に言わせれば、彼にあれ程 喧嘩を売って生きている君の方が不思議だよ」

「ゲス野郎がヘタレなだけなんじゃね？ 確か、あいつって男爵家だろ？ 公爵家の使い魔を殺すほどの度胸なんて実は無いんだよ。それに、今となっては男爵家の跡取りより、貴族になった俺の方が地位的には上のはずだ。これからは、ゲス野郎に偉い態度はさせないぜ」

あのゲス野郎は、親が男爵なだけである。ゲス野郎自身は、ただの跡取りであって爵位も何にもない！ だから、今は俺の方が偉いんだ。

もし、ゲス野郎が学院に戻ってきたら、水精霊騎士隊の下っ端として使ってやってもいいな。トイレ掃除とかお似合いだぜ。

後、ゲス野郎の嫁は、貴族になった俺がしっかりと面倒をみてやる。

主人公は、仕官する。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

そういえば、学院ではスレイプニルの舞踏会とかあったんですよ。

レイアなら一体誰になったんだろう…。

『ビダーシャル』『ラオウ』『アミバ』『アーベ』『デイドリツ

ト』辺りかな？ 作者的には『アーベ』辺りが濃厚な線だと思うのだけど、皆さまは何になると思います？

今回は、タバサを救出してもらおうかなと…

主人公は、再会する。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様からの感想を頂けて
作者はとても感激です。

これからも頑張ります。

主人公は、再会する。

数日前より アーハンブラ城に來ているレイアです。

流石は、エルフが作ったと言われる城だ。城の隅々にまで強固な固定化が掛けられている上に城壁や内装には独特な情緒あふれる模様が描かれている。おまけに、夜になれば月明かりに照らされた城壁の模様が白く光るのだ。これが地球なら確実に世界遺産になっただろう。

「うーん、あまり良い食材がないな」

本日も晩御飯を作る為に街へ真紅と出かけている最中である。どれもこれも鮮度が悪い。

「そうね。でも、ある物で我慢するしかないわ。それに、私はこれさえあれば問題ないもの」

真紅は、何処からか…我が領地の特産品の醤油の瓶を取り出した。というか、今初めて聞いたよ！　なんで、もっと早く出してくれなかったの。醤油があればもっと料理の幅が広がったというのに。

それに、一体どこの不思議空間に隠していたんだよ。どうみても手ぶらだろう！　隠す空間なんて何処にもないでしょう。

「まあ、突っ込むのは止めておこう。…塩分の取りすぎはどうかとお父様は思いますが、言っても無駄か」

「当然よ　お父様」

ビダーシャル…しっかりと健康管理はしてくれよ。

「まあ、真紅の醤油があれば肉料理でもいいかな。…え!?! なん
でそんなに驚いているの?もしかして、ラッパ飲みするつもりだっ
たとか?」

「…ま まさか、レディがそんな下品な飲み方するわけないじゃな
い」

今の一瞬の間はなんだ! そんな、飲み方はお父様が許しませんよ
!せめてティーカップに入れて飲みましょう!

うむ!?

今、小太りの非常に見覚えのある人物が少し先の店に入るのが見え
た。

どうやら、今日がその日らしいな。

「真紅、悪いけど先に買った物を持って戻っておいてくれ。ビダー
シャルには、虚無ご一行の到着と伝えておいてくれ。なーに、晩御
飯の時間までには帰るさ」

とはいっても、晩御飯を作るのは私だけどね!

「わかったわ。あまり、ハメを外さないようね お父様」

了解了解。

真紅に買い物かごを預け、私はマリコル又らしき人物の後をつけて行った。後をつけてみれば、予想通り旅芸人の格好をしたルイズ一行を難なく見つけることが出来た。

それにしてもこれだけ特徴的な人物達がどうやってここまでたどり着いたのか疑問だ。ルイズのピンクの髪なんて滅多に居ないだろうし、キュルケのような赤髪のゲルマニア人もあまりいないだろう。サイトを除き、一応全員貴族の為、よく見ればそこはかたなく品位が漂っている。一体、警邏の騎士達は何をしていたのだ。

私は、ルイズ一行が二階の部屋に入るのを見てから、すぐ横にあった空き部屋に入った。そこから、隣の部屋の会話を盗聴しており、風のメイジでない私は、遠くの音を聞くような芸当は出来ないが、喋る事で発生する微弱な振動を感知、増幅する事で一応盗聴まがいな事はできる。

フムフム

話を聞く限り、原作通りに進んでいるようだな。サイトをエルフ相手の切り札に使うとわね。相手が悪かったね！としか言葉がないぜ。それに、三女さんよ…いくら、「マントも姓も陛下に返してきたわ」と言ってもさ、それが公然の事実になっていない以上、効果は無いと思うよ。おまけに、『公爵家三女は、ガリアの王族を誘拐する直前にマントと姓を王家に返上している為、トリステインとは一切関係ありません』なんて言い訳がまかり通るわけないでしょう。

話も聞けた事だし早急に帰って晩飯を作るとしよう。やっぱり、この場合は私が闘う事になるのかな？きつと、そうだよね…。

今から深く考えても仕方がない。明日の事は、明日の私が何とかし

てくれるだろう！ とりあえず、今日もティファニアに電話を掛けることにする。

愛妻へのラブコールですよ！何か文句でもあるか！！

『あ、ティファニア。元気にしてるかい？』

『レイアさん、聞いてください。今日はですね…』

ティファニアの元気な声を聞き、私も少し元気になったよ。

翌日、アーハンブラ城の中にて。

中庭では、城の警備も者達が酒を飲んで楽しんでいる。

「随分賑わってきたね。それにしても、ここの警備の連中は何を考えているんだろうね。持ち場を離れて酒飲みとは…」

「蛮族の考えなど我には、分からん。それにしても、こつもレイアの予想が当たるとはな。…今は何も聞かん」

薄々、気がついていきますよね。いつか、ちゃんと話すから。それまでは御免ね。

「ありがとう、ビダーシャル。いつかちゃんと話すから…」

「ふん、チェックメイト。ここは引き受けよう。レイアは、下に行つてくるといい」

おっと、もうそんな時間か。では、私はルイズ一行に酌でもしてもらおうかね。

「ビダーシャル…あまり力を入れずに頼むよ。死なれるとまた面倒なんでね。適当にやりやっつて撤収の方向で」

さて、誰に酌をしていただこうかな。

中庭にて。

キュルケを筆頭にモンモランシーとルイズが露出度の高い服装で踊りをしている。キュルケは、持ち前の性格と才能でこの場を乗り切っているようだ。後の二人が駄目駄目だ。

「相席、よろしいですか？ミスコール男爵」

「ヴェーグル卿！こ、これはですね…」

ちなみに、私の立場はミスコール男爵より遥かに上だ。それでも、ガリアに仕官した際に色々と便宜を図ってもらい、爵位こそないが伯爵並みの権限を持っている。やはり、エルフの盟友でもある事と私の力を高く買ってくれたようだ。

もつとも、ミスコール男爵のような年上の方が私の様な子供に敬語を使うのは他にも訳がある。ミスコール男爵は、死刑囚を訓練場での惨劇を見ていた数少ない人物なのだ。そのせいもあって、私が来ると顔色が優れない。

「別に咎めるつもりはない。こんな僻地では娯楽の一つもないだろうし、兵たちも酒が恋しいだろう」

「お心遣い感謝いたします」

おや？

旅芸人ご一行様が私の存在に気付いたようだ。みんな、面白い顔をしているね。

ルイズとサイトは、親の仇を見る様な顔をしている。今にも殴りかかってきそうな雰囲気だな。キュルケは、顔色が少し優れないながらも踊りを継続している。タバサ救出プランに修正でも加えているのだろうか。モンモランシーとマリコル又は、特に変化なしだ。まあ、接点が皆無だからね。ギーシュは、援軍が来た！みたいな嬉しそうな顔をしている。

「そのの、金髪ドリル。私にも酒を注いでくれまいか」

「ド、ドリルって私の事!？」

ああ、そうだ、他にドリルヘアなんていないだろう。というか、ドリルで通じるのだね。

Side 金髪ドリル

ま、不味い事になったわ。

確か、彼はミスタ・ヴェーグル…彼とは殆ど面識は無いのだけど、噂位は聞いたことがある。

エルフと実家で仲良く暮らしているとか。ヴァリエール公爵を脅してエルフと貿易を始めたとか。盗賊狩りを趣味にしていたとか。彼に喧嘩を売った生徒が突如として行方不明になったとか。逆らう者なら誰であろうと容赦はしないとか。

他にもいくつも黒い噂が絶えない人物だ。

そんな彼がどうしてここに居るのだろう。それに、ミスコール男爵と名乗っていた人が頭を下げている。

ひよつとしなくても、私達って詰んだ？

「そのの、金髪ドリル。私にも酒を注いでくれ」

「ド、ドリルって私の事!？」

せめてロールパンと言って欲しいわ。私の髪の毛のどこが採掘機だっていうのよ！

だけど、今はミスタ・ヴェーグルの言葉に従うしかないわ。私が時間を稼いでいる間にキュルケが起死回生の名案を出してくれることを信じて。万が一の時は、一応期待しておくわよ。ギーシュ。

「お、お待たせしました。どうぞどうぞ」

「ありがとう」

私は、ワインをミスタ・ヴェーグルのグラスにワインを注いだ。

下手な事を発言される前にこちらから話題を振って場を流すしかないわ。可能ならば、ワインも飲んでもらってぐっすり眠ってもらえるとありがたいのだけどね。

「やはり、安物のワインだな…代わりに飲んでいいぞ」

「え…いえ、私は…その…喉は渴いておりませんし、これからダンスも披露しないとイケないので」

まずいわ。眠りのポジションだから害はないのだけど、この場で飲んでしまうと私は一時間後には夢の中だわ。

「どうした？まさか、毒でも入っているのかな？」

「ははははは、まさか…ゴクゴク！これで、ご安心いただけますか？ 貴族様」

ミスタ・ヴェーグルは、思った以上に性格が悪いわ。絶対に、ワインに何かある事に気づいてやったわ。

「それにしても、随分とお若い貴族様ですね。一体どうしてこのような場所に？」

「ヴェーグル卿に失礼だぞ！」

ヴェーグル卿？

彼は、トリステインの貴族のはず。それなのに、ガリアの男爵から敬意を払われている。一体どういう事なの？ガリアのスパイ？それとも、トリステインを裏切ってガリアに？

「構わないよ。私はね、マザリーニ枢機卿の頼みトリステインの大使として先日 ガリアを訪問したのだよ。なんでも、トリステインの貴族がガリアの貴族を誘拐しようとしているとの情報が入ってね。その弁明しに来たわけだよ。最も、その際にジョゼフ王に気に入られてね。しばらく、仕官する事になったのだよ」

嘘！？

ミスタ・ヴェーグルがトリステインの大使！？ それに、今言った事が本当なら私達の尻拭いを彼が…

「君は、どう思うかね？ 自国の迷惑も顧みず^{かえり}気の向くまま赴くままに行動する輩を？その連中のせいでトリステインが再び戦争になる事だつて十分にありえる。仮に戦争にならなくても十分に問題だ。なんせ、他国の貴族を誘拐するのだからね。犯人達は、自国に帰れば確実に極刑だろう。一族全員を巻き込んでのね…」

確かに、言われてみればそうだ。

こんな事をして自国に帰れば、間違いなく極刑のはず。いくら、子供がやったとはいえ許される事ではない。私のせいでお父様やお母様まで…

「ごちやごちや、うるせーんだよ！黙ってきいてりゃ、いい気になりゃがって。」

友達を助けるのに理由なんていらねーんだよ。それに、お仲間さん

は既に夢の中だぜ」

サイトが敵意をむき出してミスタ・ヴェーグルに突っかった。

お願いだから、落ち着いて！！

もしかしたら、話し合いで解決できるかもしれないじゃない。それに、一度もミスタ・ヴェーグルに勝てたことないんでしょ！？ 仮に勝てたとしても エルフも相手にしないといけないのよ。

私の女としての直感が言っている…彼は、笑いながら人を殺せる人物だと。

私の願いとは裏腹に…サイトが手直にあったワインをミスタ・ヴェーグルに投げつけた。

私…死んだかも（涙）

主人公は、再会する。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ルイズやサイトではなく、金髪ドリルsideを書いてみました。
たまには、一般人？sideもいいかなと思います。

次回は、レイアVSルイズ一行といきますかな@@

主人公は、救済策を提示する。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いていただいた方々、本当にありがとうございます。

作者のやる気は有頂天です。

しかし…なぜか、ギーシュとモンモンの救済願いが多かったのに対して

マリコル又救済願い全く無かったのは、存在感が薄かったのですよね！

作者は、そう信じております。

前話で次回予告…嘘ついてしまいました。

ごめんなさい。

では、レイアの優しい救済策を見てやってください。

主人公は、救済策を提示する。

三女一行に、自分たちが何をしているのかを紳士的に教えたのにも
変わらず切れられたレイアです。

「ごちゃごちゃ、うるせーんだよ！黙ってきいてりゃ、いい気にな
りやがって。

友達を助けるのに理由なんていらねーんだよ。それに、お仲間さん
は既に夢の中だぜ」

サイトが罵声と共に私目がけてワインを投げつけてきた。

回避する事や魔法で吹き飛ばす事は簡単だが：心優しい私は、避け
なかった。当然、A・Tフィールドを服の上から覆っておいた。

パリーーン

私の顔に命中し、中庭にビンが割れる音が響いた。割れたビンから
液体が流れ落ち、座って席がビチャビチャになった。

・
・
・

流星はガンダールヴだ：武器と認識してしまえばビンでさえ正確に
投擲ができるとはね。それにしても、なぜみんな黙っているのだ。
もしかして、私が避けなかったことを疑問に思っているのかね？そ
れなら、安心した前 後でキツチリと落とし前つけるからさ。

「理解していると思うが…私の立場は、トリステインの大使である。そして、今はそれに加えガリアで伯爵並みの権限…俗に言う宮中伯という物を持つているのだよ。その私に対して、瓶を投げつけて殺害しようとはね…これは、由々しき問題ですね」

貴族相手に殺人未遂は不味いよね。人間の構造上、瓶で殴られたら死ぬ事だつてあり得るのだからさ。

「ま、待ってくれ！ミスタ・ヴェーグル。 サイトがした事なら謝る。後で、土下座でもなんでもさせよう！！ 私達は君と争う気は無い。お願いだから、見逃してくれ」

「そういう事は、手を出す前に言うべきだったね ミスタ・ギーシユ。それに、当の本人は全くその気はないようだが…」

「あつたりめーだ。」

何度も言うが、下げたくねー頭は！下げられねえ！！」

いい加減、頭がたけーよ。

ギーシユも大変だね、こんなのが副隊長だっけ？ 今もそうだけど、こんなのを部下にしていると尻拭いで色々死ぬような思いをする事になるよ。友達は選ぶべきだよ。

私は、優しいからギーシユが言ったようにサイトが土下座をすれば見逃してやってもいいと思ったくらいだよ。但し、誠意の感じられる土下座に限定してだけだね。まあ、大甘設定で40秒くらい鉄板に頭をつけてくれればいいかな。

「だそーだ。 同じ学院の生徒のよしみで一つだけ忠告しておくよ。」

私のポリシーは、やられたらやり返す！　それが、女子供であつても一切手加減はしない。五体満足で国に帰りたければ大人しく傍観しておいてくれ」

全員を睨みつけた。

私が言っている事が嘘ではない事は、よく知っているはずだ。ウェールズ皇太子の一件やサイトをフルボッコにした事などがあるからね。

「どど、どうしようギーシュ。」

タバサの事も確かに大事だけど、このままじゃ実家にまで…」

「落ち着きたまえ。確かに、ミスタ・ヴェーグルが言っている事は正しいかもしれない、だけど今ここでタバサを救わなければ僕は一生後悔すると思う」

マリコル又が慌てているのをギーシュが諭した。

なかなか、かつこいい事をいうじゃないか。これが、リア充スキルというやつかな？

「ならば、親しくない友達を助ける為に自分の一族全てが極刑になった方が後悔しないと…。一時期の感情に身を任せると身を滅ぼすよ。」

それにさ、君達はサイトに利用されている事にまだ気が付かないのかい？」

「いくら、ミスタ・ヴェーグルといえ聞き捨てならない。」

サイトは、僕の親友だ。サイトが僕たちを利用する事なんてありえない」

本当にそうなのかね？ギーシュ。

「おい！でたらめな事を言うんじゃないぞ。どうせ、この野郎は俺たち全員を相手にするのは不利だと思って、仲間割れをさせようという算段だ。相変わらず、ゲスなやり口をしやがる」

たまには、良い感をしているじゃないか。でも、君たち程度、仲間割れをさせずとも指先一つでダウンさ（笑）

「ここで暴露されては困るのかな？それに、私の話を聞いて君達がどう考えるかは自由だ。そうだろう？」

現時点では、ルイズ一行が私の言葉とサイトの言葉では どちらを信じるか火を見るより明らかだ。しかし、僅かでもこの場でタネを植え付ける事が出来ればそれでいい。後々芽生えるだろうからな。

・
・
・

無言と言う事は、私の話を聞くという事だね。

「私は、君達がどういった経由でここに居るかは知らないが、恐らくサイトの勢いに乗せられたのではないかね？きっと、友達がピンチだとか正義感溢れる口ぶりでその気にさせられたのではないか？」

君達の様な年代は、そういうシユチエーションに弱いからね」

「言われてみれば」

「確かに…」

「そういえば…」

ギーシュとマリコルヌとドリルが思い出したかのように頷いた。

「その後に王宮に許可を取りに行ったのだろうか？」

そこで、駄目だしを食らったはずだ。本来ならここで諦めるはずだ。なんせ、王家に逆らって助けに行くなんて貴族としてありえないからね。

「ただ、君達の中には王家に命令を無視する事が出来る…いや、無視したとしても罪に問われない人物が居たのだよ」

「……」

全員がルイズを見た。

「な、なに出鱈目を言っているのよ！」

そんな訳ないでしょ。私は、姓もマントも王女殿下にお返ししてきたのよ。

タバサを助けて戻った際には、しっかりと処罰していただくわよ」

「何を言うかと思えば、そんな事か。それも全て作戦のうちだったのではないかな？」

他の人にも分かるように説明しよう。今回の一件は、流石に事が事だけにトリステインに帰れば誰かが処罰されるだろう…誰だと思ukai?ギーシュ」

いきなり、当たられた事に驚いたようだ。しかし、ギーシュは成績もよいし何より貴族社会の汚さをよく知っているはずだ。だからこ

そ、わかるはず…

「…それが、僕だと言いたいのかい？」

「流石だ ギーシュ。まさに、その通りだ。他の連中と比べて察し
がいい」

「訳が分からないわよ。一体どうしてギーシュだけが処罰されるの
よ！

私やキュルケ、マリコルヌやサイトはどうして何も無いのよ！！」

ドリルが甲高い声で叫んだ。

恋人が窮地に立たされるとなったら女は強いね。

「それは違うね…。確実に処罰をされないのはルイズ、サイト、キ
ユルケの三人だけだ。後の者は、少なからず処罰を受けるだろう。
中でも、一番重い罰を受けるのがギーシュだと言うのは確実だ。今
から、そのからくりを教えてあげよう」

私は、それから丁寧に説明してあげた。

まず、ルイズが罪に問われない理由から始めた。

答えは簡単だ。ルイズは、『伝説の系統』『公爵家の三女』『アホ
リエッタの幼馴染』などと言った地位的にとても裁き難い。そして、
ガリアに来る前に非公式とはいえアホリエッタに地位を返上してい
る。これが重要なポイントだ。そして、始祖を神としている連中が
『伝説の系統』であるルイズを裁く事など出来るはずも無いので無
実確定だ。

そして、サイトが裁かれない理由を教えてあげた。

あれは、先日アルビオン戦の功績で貴族の仲間入りをした存在だ。それも、周りの反対を押し切ったの事だった。アホリエツタが無理をして貴族にした者が一か月もしないうちに今回の様な不祥事を起こしたとなつては、アホリエツタの信用問題…下手をすれば平民がシユヴァリエになるといふ事 自体が問題視される可能性がある。それに、サイトは言うまでもなく『ガンダールヴ』 『公爵家の三女の使い魔』 『アルビオン戦の英雄』 など事もありルイズ同様に無実確定だ。

キュルケが裁かれない理由は…言うまでもなく他国の貴族だからね。トリステインで裁く以前の問題だから、トリステインでは無罪確定だ。ゲルマニアでは知らないけどね。

最後にギーシュだけが重い罪に問われる理由を教えてあげた。

今回の一件で国の汚いお偉いさん達は、建前上とはいえ誰かを処罰せねばならない。処罰対象は、平民であつては意味がない。貴族の中から選ばれるのは確実だ。そして、都合がいい事に王女直轄の近衛隊の隊長でもあり伯爵家の四男なんて非常に裁き易い人物がいる。

「近衛隊の隊長なんて責任のある職は、誰かに勧められたのではないか？」

そして、今回の一件も隊長の従うなんて決定権を委ねられたのではないか？

しかも、大勢の人が居る場所で『隊長が決定したので俺らもついてくぞー！』みたいな感じで担がれたのではないかね？

もしも、思い当たる節があるなら…君は嵌められたんだよ」

「……」

思い当たる節はあるだろう。現場は見ていないが、私は原作を知っ

ているからね。

後一押しかな

「それにさ……7万の大軍を相手に出来るサイト君が本当に君達の手助けが欲しくて、

一緒に来てもらったとでも思っているのかい？

サイトはね……責任を押し付けられる相手が欲しかったのだよ」

全く、えげつない事をするよね。

ルイズと二人の場合は、必然的にサイトに責任が来るだろう。そこにキュルケが加わっても同じくサイトに責任が来るだろう。だからサイトは二人より地位が低くて、自分より地位が高い誰かに来てほしかった。

つまり、そういう事だよ。

「……ミスタ・ヴェーグルの言う事は、推測の域を出ていない。仮にミスタ・ヴェーグルが言ったことが本当だとしても僕は自分の意志でここに居るんだ！だから、後悔はしない」

「君の性格まで読んだ上での作戦だと私は思うのだけどね。……まあ、ギーシュがそう思うならそれでもいいよ」

サイトと長く一緒に居たせいで大分感化されているな。もう少しで、真人間に戻せたのに残念だ。

「へへへ、仲間割れさせられなくて残念だったな　ゲス野郎。

今からお前を倒してタバサを救出してみせる。

しゃべれなくなる前に言いたい事があれば言っておいた方がいいぜ」

ほほう、それは親切だね。ならば、一言言わせてもらおう。

「では、お言葉に甘えて…サイトを殺した者には、ジヨゼフ王とマザリーニ枢機卿に口利きをしよう。

そして、協力者を含めて今回の一件について無罪を約束しよう。更に、タバサの無条件解放もおまけしてやろう。

…平民を殺して一族全員が助かるんだ。安いもんだろう。

ほらほら 急がないと、サイトがタバサと助ける為に自害しちゃうよ。

そうだったら、みんなの家族を助けられないぞ。

サイトが生きている内がチャンスだぞ」

悪い取引ではあるまい。

君達が欲しい物は、全て私が与えてやろう。

「て、てめえー！！！」

さあ、遠慮なく殺し合いたまえ。

主人公は、救済策を提示する。（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

作者なりに、サイトがギーク達を連れてきた理由を書いてみました。
というか…こういう理由で連れてきたんでよね？それ以外に思いつかないんだけど

次回は…どうしようorz

頑張って考えるので、来週くらいまでお時間ください。

主人公は、取り逃がす。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

最近感想板で、色々と厳しいご意見を頂きましたが作者の基本方針は変わらず、今後も執筆していきます。

原作キャラの扱い等で納得いかない面をあるでしょうが、書く人の数だけ色々な展開や思いがあると云う事で納得していただけると幸いです。

最後に次話以降のストーリーに関わる

簡単なアンケートがある為ご協力いただけると幸いです。

主人公は、取り逃がす。

ギーシュ達を救うべく、救済策を提示したレイアです。

さて、ルイズ一行はどう動くかな。

たった一人を犠牲にするだけで、全てが丸く収まるのだ。決して悪くない取引のはず。出来る事なら、キュルケかギーシュが率先してサイトを攻撃してくれば後はなし崩しにいけるのだがね。

さて、全員が私の発言に混乱している。ここで、更にサイトを殺す報酬を上乘せすれば、こちらに誰かは此方側につくだろう。

「ミスタ・ヴェーグル！！　いくら報酬を積まれようとも僕は友達を裏切らない！！　確かに、君が言っていた事はどれもこれも真実味が帯びていて何度も惑わされそうになった。しかし、君は重要な事を見逃している！！」

私が、追加報酬を言おうと思っただらギーシュに先手を取られてしまった。それに、重要な事を忘れていたって？この私が！？

「ほほう、何だね　それは？」

「それは…サイトが、底知れぬ馬鹿だという事だ！！　だから、サイトがそんな高度な事を考えられるはずがない。もしも、サイトがそんなに頭が良ければ君に喧嘩を売るはずがない」

・
・
・

「ふふふふはっはっはっはっ！　そうだね　彼は馬鹿だったね。いやー、参った参った！　これは一本取られたね。今度からは、馬鹿でも考え付く程度のストーリーにするよ。…それで、君達はどうするのだい？」

「いやー、普段は馬鹿のせいで痛い目を見るのに今回ばかりは馬鹿に救われたね。しかし、状況は何も好転してはいない。サイトの首には、無罪とタバサ解放という二つの報酬が掛けられているのだからね。」

「そんなの決まってるだろ！！　お前を倒してタバサを救出する！」

「違うだろう。お前がさっさと殺されるよ！！　友達思いなら死ぬだろう。それにな、お前と違ってギーシュ達には家族が居るんだよ。お前みたいに一人じゃねーんだからさ。」

「ええ、ダーリンの言う通りだね。誰かを犠牲にしてあの子を救出したとしても、あの子も喜ばないものね」

ちっ、キュルケが賛同したか…。

これで、残る駒はマリコルヌとモンモランシーだけか…しかし、ギーシュがこちら側に付いた以上　モンモランシーも向こう側に付いたとみて間違いないだろう。

「ああ、もう仕方ないわね！！　分かったわよ！　しっかり、守って頂戴よね　ギーシュ。一生牢屋で過ごすなんて真っ平なんだからね」

モンモランシーも予想通りか…残るは、マリコルヌだけだが、状況的にこちら側に来ることは無いだろう。

「わかったよ、僕だってやる時はやるんだ！」

はぁー、どうして君達は人が善意で差し伸べた手を無碍に払うのだ。

「そうか…君達の気持ちは、よく分かった。同じ学び舎の者に手を上げるのは忍びたいのだが…致し方ない。ミスコール男爵、近隣の基地へ赴き直ちに増援を連れてきてくれ」

「私も「問題ない」失礼いたしました。すぐに連れてまいります」

私は、男爵に指示をだして増援を頼んだ。一緒に居られても邪魔になるかもしれないからね…それなら、増員を頼んで包囲網を敷いた方がよいだろう。

「そう簡単に行かすわけないでしょ！！ ファイアー・ボール」

キュルケが男爵に向かって魔法を放った。背を向けている貴族に魔法を撃つとは流石に酷いんじゃない。

「私の事を無視しないでいただきたいですね…」

私は、キュルケが放った魔法の前に立ちふさがった。そして、1m近い巨大な火球が私に直撃した。

カーーーン

その瞬間、キュルケの放った魔法が放った本人に向けて跳ね返された。本来ならば、慌てふためき反射された魔法がキュルケに命中するはずだったのだが…予想通りと言った感じで跳ね返って来た魔法を回避した。

「やつぱり、ただのマントじゃないわね…何かのマジックアイテムかしらね」

『ありやあ、”カウンター反射”だ。厄介でいやらしい魔法だ』

やはり、以前に学院でタバサを戦った際の事をよく覚えているようだね。あの時見ていなければ自分の魔法で大火傷を負っていたのに…残念だ。

後、デルフさんよ…ネタバレするが少し早過ぎだろう。

「カウンター反射？」

『あらゆる攻撃、魔法を跳ね返す、えげつない先住魔法さ。どうやら、アイツのマントには、その反射カウンターの魔法が掛けられているらしいな。それも、今までに見た事ない位強力な…これは、ちょっとまずいぜ』

まあ、そりゃ『薔薇族』謹製のマントですからね。並みのエルフと一緒にされちゃー困るよ。

「ちっ！いつも勝てねー訳だ…あの野郎。だったら、あのゲス野郎が身に着けている武器や指輪に至るまで全部エルフのマジックアイテムかよ。何か手はねーのかデルフ」

いやいや、お前と闘った時は基本的に素手か土の魔法だけだろ！
確かに、この間は魔法を吸収するナイフやナニのサイズを削る槍や
ティファニアの指輪を使っただけだし、しかも指輪はお前の命を助け
る為だろう！！大体、デルフの方が知識もあつて ある意味チート
だろ。

相変わらず癪に障る野郎だ…その分厚い面の皮をひん剥いてやるぞ。

「^{デイスベル}解除”さ。先住魔法を無効化するには”^{デイスベル}虚無”の”解除”しか
ね」

「わかったわ。サイト、ギーシュあんた達は、全力であいつを抑え
込みなさい…なんなら、そのまま倒しても構わないわ。キュルケと
マリコル又は後方から援護して、モンモランシーは負傷した人から
直ぐに回復させてあげて。…1分よ、それまでの間 死ぬ気で時間
を稼いで」

ほほう、死ぬ気でね…

ルイズも随分と酷な事を仲間にありますね…死ぬ気でと言う事は、
私にみんなを殺す程痛めつけて欲しいと拡大解釈しても良いだろう。

「いくぜ！！ギーシュ、野郎の頭を狙え。頭だけは何もつけてない。
狙うならそこしかねー」

「あ、頭かい！？それだと、彼が死んでしまうのでは…」

「そんな甘い事で倒せる相手じゃないわよ。以前にタバサと二人で
闘った事があるんだけど、勝負にもならなかったわ」

こいつら…(怒)

確かに、頭は露出しているよ…だからといって最初から頭部狙って来るとか相当えげつねーよ。

「しねえええええー！！！」

サイトがデルフ使い、私の頭部を真っ二つにする勢いで切りかかって来た。確かに、早い…達人の域には達しているだろう。だが…このハイスペックボディをなめるなよ。

パシン

私は、デルフを左手で掴み取った。デルフといえど、A・Tフィールドは吸い取れまい。私は、掴む手に力を入れていった。

「いい加減、うざいよ。…馬鹿に刃物は危険だから、ここら辺でへし折らせてもらうよ。悪いなデルフ、恨むなら今代ガンダールヴの出来の悪さを恨んでくれ」

メキメキ

『ちげーえねーや…あばよ。相棒』

バリーン

そのままデルフの刀身を真っ二つにへし折った。

「デルフウウウウ！！でめえ、よくもデルフを絶対にする…があああ！！！」

私はサイトの顔面を右手で掴み上げた。サイト一人くらい持ち上げる事など造作もない。無駄に鍛えているわけでは無いのだからね。

「喋るな 臭いだろ。安心しろ、すぐにお前をしゃべれない様にしてやる。それにさ…目上の人には敬語を使う様に習わなかったのかい？語尾は、『です』『ます』『ございます』だよ。分かるかい？…言っても無駄か、じゃあさようなら リトル・クラッカー」

サイトの面の皮を爆弾に変化させてあげた。しかも、威力はかなり抑え込み…いい具合に顔の表面がレアな焼肉になる程度だ。

ポン

ポップコーンが弾ける様ないい音が響いた。

「ぎあああああああああああ！！」

サイトの悲鳴が響いた。そして、糸が切れた人形のようにぐったりとしている。…一応、指先が痙攣しているから死んではないだろう。

それにしてもサイトの顔は、見るも無残な顔になった。ほら…あれだ…むかし小学校とかにあった人体模型の顔が焦げたような顔つきになった。おまけに、毛根も死滅しただろう。

仕上げにこの顔を直せない様にティファニアの指輪を使って少し細工をする。ほら、ヒーリングって不思議でさ…怪我した箇所を元々あった綺麗な状態に治そうとするんだよ。だから、サイトの顔が元々あった今の顔だったと細胞に記憶させればどうなるか…わかるよ

ね？普通は、こんな芸当は無理だろうが…生憎と死者蘇生すら可能なこの指輪を持っているのでね。

喜ベサイト…顔の傷は、男の勲章だぜ。

「ワルキューレ！！ 悪いが、サイトを返してもらつよ。いけええええええ」

ギーシュが7体のワルキューレを全て突撃させてきた。いきなり本気で来るかい。…だけど、格上の土のメイジ相手のゴーレムは良くないと思うよ。こういう事が出来るからね。

「メデューサ」

ギーシュのゴーレムの表面を石に変えた。更に石に変えた部分から強固な固形化を掛けた。これで、ゴーレムは指一本動かせまい。

「ワルキューレ！！ どうしたんだ！？ワルキューレーー！！」

ギーシュは、必死に動かさそうとするがギーシュの力量では私の固形化を力技で解除は出来ないだろう。

「ギーシュ…私に向かって魔法を行使したな。非常に残念だ…そんなにも私の好意が気に入らないのかね？…悪いが、やられたらやり返すのが信条でね。＜＜指をへし折れ＞＞」

バキバキバキ

「がああああああああ！！」

ギーシュが自らの右手の指の骨をへし折った。

これでも大甘設定だ。ギーシュの攻撃は、私自身に届いて無かったからね。だからこの程度で済ませてあげた。モンモランシーが居るから骨折程度の怪我はすぐ治るだろう。

私は、右手で掴んだままであった半死状態のサイトをギーシュへ投げつけた。右手の負傷のせいで受け取る事ができず、サイトはそのまま地面へ直撃した。地面に落ちたサイトの顔を見たギーシュの顔色が急に青くなった。すぐさま、モンモランシーに治療をするように指示を出している。治療など無駄な事だ…せいぜい止血程度の効果しか望めないだろうに。

「よそ見しているなんて余裕ね。これでもくらいなさい 炎の蛇！」

キュルケが私と距離を詰めながらコルベールの十八番を使ってきた。だが…そんなの広範囲な魔法を撃つても意味は無いよ。全て跳ね返すからね。

カーーン

反射された魔法が今度こそキュルケに襲いかかった。効果範囲といひキュルケとの距離といい、今回は流石に回避が間に合わなかったのだろ。そして、キュルケに直撃した。

・
・
・

キュルケが自滅しただろうと思い、私は残ったギーシュ達を見ようとした。

その瞬間！！

自滅したと思ったキュルケが炎から抜け出した。そして、手には兵士の物と思われる剣を持っており、それを私の顔を突き刺そうとしてきた。

「よそ見なんかしてるからよ！！」

仰る通り、完全に油断した。

まさか、炎に包まれてもしばらく抜け出してこなかったのは私の隙をうかがっていたのか…あの高温の炎の中で！？その根性だけは、褒めてあげよう。

狙いもよかった。私がただの人間なら防げなかっただろう。だが、キュルケもサイト同様に私の身体能力を一般人と比べないで頂きたい！！

「あたああああ」

キュルケの剣を手刀で切断した。

そして、キュルケの腕を押さえつけて動けない様に拘束し地面に押し付けた。

「きゃっ！！ ちょっと、離しなさいよ！！」

当然離すわけもない。だから、無視した。

「いやー、危うく死んでしまうところだったよ。

私を殺そうとしたという事は、当然君も死ぬ覚悟はできているよね？
いや、すまない無粋な事を聞いたね。天下のツエルプストーが戦場で死を覚悟してないはず何て無かったね。

…安心しろ。顔は止めてやる」

「あら、意外と紳士ね。でも、私に手を出すと貴方も火傷しちゃうわよ」

火傷ね…実家にも報告するというのかね。一向に構わんよ。もし、戦争になったらお互い潰しあいましょう。

では、お仕置きタイムといこうか

「私は、とある武道…いや、拳法を学んでいてね。どうしても、試してみたい技があったんだよ。なーに、痛くも痒くもないさ…だから、少しばかり眠ってもらおう！！」
死環白しかんはく

ズブリ

「がはあっ！」

私は、キュルケの秘孔”
死環白しかんはく”を突いた。恋多き女性であるキュルケにお似合いの秘孔だ。これでいい、サイトという呪縛からも解放されて、身を固めてくれるだろう。そうすれば、もうこんなバカな事はしないはずだ。

万が一、サイトの顔を最初に見たら…それはそれで面白そうだ。あ

の顔に惚れるキュルケもまた滑稽だ。それにうまくいけば、ヴァリエールとつぶし合いも望めそうだからね。

ドサン

当面は、目覚す事は無い為 床に放置した。

「さて…まだ、やるのかい？主力のサイトは、既に撃沈。キュルケも同様に当面は目覚める事は無いだろう。ギーシュのゴーレムもあの通り…。マリコル又は…」

隅っこで盛大にゲロっていた。サイトの顔を見た事と人間が焼けた匂いにやられた模様だ。その治療を行っているモンモランシーを見習ってほしいものだね。こういう時の女性は、強いね。本当に尊敬できるよ。

「ギーシュ駄目だね！ さっきから魔法をかけているけど全然治らない」

「くっ。まさに万事休すか…」

「おえええ」

…あれ？誰か忘れてしているような気がするが。まあ、気のせいだろう。では、そろそろ最終警告といきますか。このまま闘っても何の得にもならない事は既に分かったはずだ。私一人倒せずして、タバサを救うなど不可能だ。それに、もうすぐ大量の増援が駆けつけて来る為 救出するにしても時間的余裕は最早少ない。

だけど、ギーシュ達にも建前という物があるから、優しい私は妥協案を出してあげよう。サイトの左腕一本で手を打とうじゃないか。あの腕についたガンダールヴのルーンは、一度研究してみたかったしね。

「どう」おねいさま、みつけたのね！！ 二階の東の塔にいるのね
「あつ」

…わ、忘れていた。こいつの存在を完全に忘れていた。だが、一人増えたところで状況など変わらん。ただの韻竜程度では、戦力の足しにもならないよ。もっとも、ビダーシャルの実家にいるシューテイングスタークラスになれば話は別だからね。

「みんな、よくやったわ。これから何が起きようともギーシュは、みんなを連れてここから離れなさい。イルククウ、あんたは私と一緒にタバサと母親の救出に向かうわよ」

あれ？原作でそんなの有ったけ？

「一体何をする気だい？…だが、ここは君を信じるよ」

「あんたもこれでおしまいよ！！」
解除！！
「」

ルイズが渾身の力で虚無の魔法を唱えた。

デルフに解除を掛けて攻めて来るならまだ分かるが…すでに奴は沈黙している。私に向けてはなつたわけでもなさそうだ。反射された形跡がないからね。

グラグラグラ

地震！？馬鹿な、こんな場所でこのタイミングで地震なんてありえないぞ！！

まさか！！

城に掛っていた固定化を解除したのか！？ 誰が掛けたかは知らないが、エルフの掛けた固形化をたかが虚無ごときが解除できるものなのか！？

「いや…城ではない。ならば、一体この地響きは…」

はっ！！

私は、すぐさまこの城の下…そう地中へと精神を集中させた。案の定、この城を支えていた人間の掛けた固定化が全て解かれていた。この城は、今は高台の上に不自然に建築されているが、昔…そう人間が占領する前はちゃんと丘の上に立っていたのだ。それを人間が基地として利用する為に丘を削り、今の様な不自然な物になったのだ。当然、丘を削る際には人間のメイジがしっかりと固形化を掛けていたお蔭で崩れ落ちる事は無かったのだ。

それを…こいつらは、解除しやがった。

「貴様等、一体なにをし…誰もいねえー」

ここが崩れるという事は、城下町が土砂とこの城で押し潰されるんだぞ。それに、ここに、まだ300人近い兵士も詰めているんだ！
！というか、お前らのせいで眠らされているんだ。

くっそー！！

流石に、ここまでの質量を同時に解除されたのでは私の固定化では支えきれん。

私は、すかさず携帯を取り出した。

『どうした？ようやく私の出番か？いい加減、誰も来ないから眠くなってきたぞ』

『ああ、悪いね。全員、こっちで足止めしていたからね。それよりも、少し不味い事になった。あのアホ等がこの丘に掛った固定化をすべて解除しやがった。私の固定化では、生憎と間に合わない。悪いが、少し力を貸してくれ』

『なるほど、確かにこの質量と崩壊速度では、今のレイアには厳しいな。ティファニアが居れば何とでもなっただろうが…それで、私は再度固定化を掛けて崩壊を止めればいいのか？』

『ああ、そうして…いや、待てよ。………ビダーシャルは、この城に残った兵士たちを全員安全な場所までお願い。私は、城下町の方を守りに行く』

『まあ、よいだろう。では、あの親子は放置していいのかな？』

『無論』

虚無の魔法で城の固定化が解かれ城下町に被害が出そうであった為、ビダーシャルと一緒に人命救助を優先した事にしよう…実際事実だし。それから、この被害に対する請求をジョゼフ王経由でトリスト

インに送りつけてあげよう。サイトの腕と奪い損ねた事とギーシュ達への優しい制裁の意味を込めてね。

なーに、たかが数百万エキユーだ。城の再建費用込みで考えれば、安い物だ。キユルケとルイズが居る以上 払えない額ではあるまい。そして、再建にはビダーシャルに精を出してもらおう為 私の懐に請求額の8割近いお金が流れ込む。

実に、おいしい作戦だ。

では、城下町の市民を守る為に頑張ってA・Tフィールドをはりますか。

「ゼルエル！」

私は、城下町に降りたち崩れ落ちてくる土砂と城から住民を守った。

Side マザリーニ

ふうー、これで何とかガリアとの戦争を回避できた。

ヴェーグル家からの税金を集金できなくなったのは、痛手ではあるが：戦争になって国家が消滅より何倍も良い。

それにしても、あの馬鹿どもには いい加減にしてほしい物だな。一体国家という物を何だと考えているんだ。人の命は、子供のおもちやではないのだぞ。今回だって、ミスタ・ヴェーグルがガリアに

赴かなければ恐らくは、戦争になっていただろう。

ガリア王は、世間では無能王など言われているが実際は違う。あの大国を纏め上げるだけの手腕を持った素晴らしい統治者だ。だからこそ、私は大使としてミスタ・ヴェーグルを選んだのだ。ガリア王ならミスタ・ヴェーグルの価値：いや、そういつては失礼だな。ミスタ・ヴェーグルの才能を気付き惹かれるだろうと思った。

そういう私も彼の力に惹かれた一人でもあるがね。彼は、優秀だ。こちらが支払った対価以上の成果を上げてくれるのだからね。

「どうなさいました？マザリー二枢機卿。
なんだか、随分と嬉しそうなお顔をしていらっしやいますね」

執務室に来た秘書官が話しかけてきた。

「ある者の事を考えていてな」

「もしかして、魔法学院の生徒にも関わらず、先日ガリア王から直々に宮中伯を頂いた生徒の事ですか？いやー、本当にすごいですよね。おまけに、マザリー二枢機卿の秘蔵っ子とも噂されていますよ」

ふっ。

ミスタ・ヴェーグルが私の秘蔵っ子か…あの馬鹿ども一行とは別の意味で気苦労しそうだな。

「あ…話を忘れておりました。

ガリアよりマザリー二枢機卿様宛てへ書簡が届いております」

既に国境越えの件と誘拐未遂の件については片が付いたはずなのに、このタイミングで…はつきりいつて、碌でもない予感しかしない。

「誰からだ？」

「噂をすれば何とやら…ガリアのヴェーグル卿からです。それも、ガリア王経由で送られてきております」

…絶対に見たくないでござる！！ガリア王経由で送ってくるなど、何を考えているんだ ミスタ・ヴェーグル。これでは、見ない訳にはいかぬだろう。それに、例のマジックアイテム…携帯電話といったかな？ アレで報告してこないと言う事は…碌でもない事間違いなしだ。

「何て書いてある？読んでみよ」

「親愛なるマザリーニ枢機卿へ、公爵家三女一行が行った破壊活動についての被害報告書とそれに伴い賠償金について纏めた資料を送ります」

は、破壊活動！？

一体、あの馬鹿どもは何をやって来たんだ！！

「っ、続けますね。まず……………」

・
・
・

それから、しばらく信じられないような報告が続いた。『男爵の殺人未遂』 『アーハンブラ城の破壊』 『ガリア兵士への睡眠薬の投与』 『アーハンブラ城下町への虚無を用いた破壊活動』 『ガリア王族二名の誘拐』 『ガリア兵士とアーハンブラ城下町住民への大量虐殺未遂』 e t c .

不幸中の幸いなのが、これだけの被害にもかかわらず死傷者が0だという事だ。報告書では、ミスタ・ヴェーグルとエルフが共に人命救助に尽力した為のようだ。

そして、最後に出てきたのが賠償金だ…その額1000万エキュー！！

城の再建に伴う費用、街の復興に伴う費用、兵士たちへの慰謝料 e t c

急に眩暈が…

そんな大金今のトリステインにあるはずも無い。いや、今でなくてもそんな大金常備していない。しかも、支払期限が月末になっている。ガリアへ行って…いや、私が行ったとしても、どうにかなる問題ではない。それに、書簡にはガリア王の印も押されている以上これを覆す事は出来ん。

「…ど、どどどどど…う…た…し…ま…し…よ…う…!!??」

「……ヴァリエール公爵、グラモン伯爵、それから…公爵家三女に付いていった者達全員の親を全員呼び集める！！ ツェルプストへは、書簡を出す」

子供のしでかした事の責任は親が取ってもらおうぞ。悪いがこの額を出せる程、王家は裕福ではないのな。

主人公は、取り逃がす。(後書き)

秘孔の説明

名称：死環白しかんはく

効果：一時的に意識を失くし、情愛を失わせる。そして目覚めた時、最初に見た者にすべての愛を捧げる。

今回は、新学期になるのでティファニアの入学編でもやろうと思います。ヨルムンガンドについては、ビダーシャルに全権を任す予定です。

よろしければアンケートにご協力をお願い致します。

締切は、6 / 8 (水) の24時です。

アンケート? (ティファニア入学について)
? エルフである事を隠して入学
? エルフとして入学

アンケート? (ヨムンガルドについて)
? 原作通り
? エヴァ量産機
? その他

アンケート? については、
票が多い方で行きたいと思います。
アンケート? については、

票が多い方で行きたいと思います。

但し、その他が多かった場合は
作者が原作を知っている物で獲得票が
多い物から選ばせて頂きます。

また、特にご希望などが無い場合は、
作者の方で選んで書いていきます！！

これからも未永くよろしくお願い致します。

主人公は、憐れむ。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

前話のアンケート結果のご報告をさせていただきたいと思ひます。皆様からたくさんのお応えを頂けて作者は、感無量です!!

アンケート? (ティファニア入学について)

? エルフである事を隠して入学 獲得票: 6

? エルフとして入学 獲得票: 57

アンケート? (ヨルムンガンドについて)

? 原作通り 獲得票:

9

? エヴァ量産機 獲得票: 34

? その他 獲得

票: 20

その他の中には、

『巨神兵』や『スパロボ系』や『エヴァ』・etc
たくさんアイデアを頂きました。

誠にありがとうございます。

アンケート結果から

『エルフとして入学』と『エヴァ量産機』で
今後の話を執筆していこうと思ひます。

さて、執筆頑張るぞ^-^

本話は、ティファニアの学院編をやるつもりだったのですが
ちょっと間に一話挟みます。

内容は、ギーシュ達の処罰内容とアーベの能力ネタです。

主人公は、憐れむ。

アーハンブラ城の再建に力を入れているレイアです。

もつとも、再建の方はビダーシャルがメインでやってくれる為、私がやる仕事は崩れ落ち土砂等を取り除き再度固定化を掛ける作業です。こんな作業で莫大な報酬が私の懐に流れ込むのだから美味しい事この上ない。

まあ、エルフの城を再建できるのは、エルフだけだから これは正当報酬である。

ちなみに、その報酬の出どころはルイズ、キュルケ、サイト、ギーシュ、モンモランシー、マリコルヌの実家からだ。当然どの家がこんな大金払いたくない訳で、負担額についてはかなりもめたそうさ。1000万エキューの内訳を言うと、ルイズ300万、キュルケ300万、サイト100万、ギーシュ150万、モンモランシー100万、マリコルヌ50万だそうさ。まあ、サイトの分は実質ルイズが肩代わりする事になるだろう。だってアレにそこまでの支払い能力があるとは到底思えないしね。

後、余談でマザリー二枢機卿から聞いたのだが、今回の一件での国内での処罰はないそうさ。これには正直抗議したいと思ったがマザリー二曰く、跡取りが他にもいる家にとってはお金を払うより、当事者を処罰して支払義務をうらむやにしようという魂胆があったようさ。もし、そうなれば王家が肩代わりしないといけなくなる為、仕方なかったそうさ。当然、処罰しない代わりに金を無理やりにでも徴収したそうさ。

私は、金さえしつかり貰えればどうでもいいが…今回の一件でマザリーニ枢機卿の更に老けたのだけは間違いないだろう。

マザリーニ枢機卿から首謀者達がどうなったかを聞いた。

三女は、今後一切の仕送り無しと言う甘々な罰で終わったそうさ。

本来なら、金持ちの家系に売られてもおかしくなかったのだが…虚無である事がばれた瞬間に手のひらを裏返したよう公爵の態度が変わったそうさ。何を考えたかは知らないが、碌な考えではないだろう。

キュルケは、実家からの罰は特になしだ。まあ、跡取りが居ない以上罰するわけにもいかないしね。それに、いまだに原因不明の昏睡状態らしい。うーん、秘孔を間違ったかな？

ギーシユは、学院卒業後に実家から勘当されるようさ。しかも、学院卒業後に賠償額の150万エキューの半分：75万エキューをギーシユ個人が返済する事に予定みたいだ。まあ、半分を実家が持つてくれただけでもありがたいものだな。

モンモランシーは、お金を工面する上で某大公国から返済能力を疑われていた。その為、先方から他の貴族（借金がなく、経済状況の良い）と婚姻をしなければ借金をさせてもらえず、矢も得なくモット伯爵と婚姻をしたそうさ。ギーシユの家は、まだ上の有能な兄弟がいるから借金の返済は安心できるが、モンモランシーは違うからね。いや…捨てる神居れば拾う神ありと言ったところだろう。容姿がモット伯爵好みでよかつたね。

マリコル又は…よく知らないが、実家が何とかお金を工面してくれようさ。借金したことには変わりはないが、ほかの連中より額が

低い分何とかなるだろう。

それにしても…憐れだ。

私の提案に乗っていれば、今頃日常を歩めていたのに…。
まあ、他人事だしどうでもいいか。

「ビダーシャル、こっちの作業は終わったから内装手伝うよ」

ビダーシャルのチート性能のおかげで、僅か四日で城が元通りになった。後は、内装の細かい部分をやれば再建完了。内装を含めて、一週間で城が立つってどういう事よ…これでもビダーシャルは余力がありそうだから、本気を出せば一夜で城が立つだろう。

「ああ、ならば……………」

私のビダーシャル工事責任者の元で作業を開始した。

さて…ただ指示通り内装作業に勤しむのもつまらないから…ここは私のセンスで銅像でも建てようじゃないか。ほら…エルフの城なのにエルフの銅像がないってどういう事だよね！！

城が完成後に訪れた男性は、皆こう言った。「あれがエルフか…銅像を見ただけで尻の穴がキュンとなった」と…それ以来、ハルケギニア中から趣のある趣味のいい男達のたまり場になった事は言うまでもない。

ビダーシャルと別れの日の夜。

城の再建が終り、ビダーシャルと食事をしているレイアです。

やはり、こうしてビダーシャルとつるんでいると楽しいな。

友は大事だ。

そうそう、今回の一件でジョゼフ王から城の再建が終わり次第、ヨルムンガンドというゴーレム？の作成を手伝えと指示があった。ジョゼフ的には、今回の一件の罰のつもりだろうが…私にとっては、待つてました！ですよ。

この日を待ちわびて、私のPCにはかねてより構想していたヨルムンガンドの仕様書を作っていたのさ。正直、私一人の力では難しいが…ビダーシャルが手伝ってくれる事になっているので寧ろ余裕だ。

もはや、原作のヨルムンガンドなど原形すらとめていない程の魔改造…いや、すでに別物だ。なんせ、作るうとしているのは私に縁のあるアレなのだからね。

「どうしたレイア？ やけに楽しそうだな」

「わかるかい？ 長い付き合いだから既に察していると思うけど、ジョゼフ王から依頼されたヨルムンガンドの件だよ。正直、今から楽しみで仕方がない」

「あら、お父様が自ら作成する気なの？」

当然じゃないか、真紅！！

私が指揮を執って作るに決まっているだろう。こんな面白…責任重

大な仕事を他人に任せられないよ。

・
・
・

なに、その二人揃って目で『こいつ完全に忘れてやがる』と言ってきている。

ジリリリン ジリリリン

懐かしの黒電話の着信音が響いた。

『こんばんは、ティファニア。どうしたんだい？』

今日は、飲み始める前に始める前に本日のお電話は終わったはずなのだが…何か問題でもあったかな？

『こんばんはレイアさん。実は、さっき言いそびれたのですが…い、一緒に学院に行ってもらえませんか？ 人が沢山居る場所に行くのは初めてで……お願いできませんか？』

最近色々と忙しかった事と入学してから碌に学院に行っていないせいですっかり忘れていたよ。

『も、もちろん一緒に行くに決まっているじゃないか』

引きこもりがちだったティファニアが学院に行くのだ。夫として当然、ティファニアを守る為にも一緒に行ってやらねばならん。

『ありがとうございます。では、明日は一緒に学院に行く準備をしましょうね。おやすみなさい』

『ああ、おやすみティファニア』

ピッ

二人の視線が…

「ビダーシャル…後は任せた！！ ヨルムンガンドの案については、後からメールで送るね。毎日報告はいらないけど、せめて週一で作業報告してくれ。ヨロシク頼みます」

「はあー、行ってこい。但し、ティファニアは何があっても守れよ。それが夫の務めだ」

愚問だ！！

手を出す輩が居れば、地獄を見せる事を誓おう。

その後は、結局三人で飲み明かした。そこでアーベの驚愕な能力を知る事ができた。まさか…某有名なアレと同じ能力を持っていたとは…流石統領。

今度、見せてもらおう！！

Side ビダーシャル

全く、嫁の事を忘れて仕事をするなど…神が許しても私が許さんぞ。彼女がレイアのいる学院に入学するというのに、レイアが居なくてどうする。

「そういえばさ…前々から疑問に思っていたんだけど。ビダーシャルとアーベってどういう関係なの？」

「どういう関係だと…」

「先に言っておくがレイアが想像しているような関係じゃないぞ。アーベとは、私が老評議員になる時からの付き合いだ」

「懐かしいな…」

「是非、聞かせてよ。ビダーシャルの過去とか興味津々だよ」

あまり人に自慢できる話でもないが…まあ、昔話をするのもいいだろう。

「話すとき長くなるが、夜は長いから構わないだろう。レイアは、老評議員になる為に一番必要なのは、なんだか分かるか？」

「個性…容姿…変態…チート…」

エルフの真髓をよく理解しているな。そう、我々老評議員も求められるのは、圧倒的な力なのだ。

「なんか、途中に変な単語が入っていた気もするが、まあ良い。老評議員に必要なのは、力！！これ一つだ」

なんだ、その呆れた顔は。

エルフをまとめ上げるにはそれだけの能力を必要とするのだ。

「まあ、話を続けるぞ。それでだ…力を示す為に老評議員になる者は、全員模擬戦を行う事になっている。選ばれる試験官は、現役老評議員か集落の統領と決まっている」

「なるほど、それでビダーシャルのお相手がアーベだったんだ」

その通りだ。

「ああ、そうだ。あの頃は、私もまだ青かったな…この力があれば、試験官など軽く潰せると思っていたのだがな…」

「え！？ ビダーシャルの力って、サイバディだね？ 確かに、アーベ相手に一体二体程度じゃ無理だろうけど、全サイバディ出せば負ける事はないんじゃない？」

確かに、自分で言うのも何だが…サイバディは強い。現役老評議員にも劣らぬ能力だと自負している。だが、アーベの能力は、その斜め上を行っているんだよ。

「レイアは、アーベの能力をまだ見た事がないのか？」

「いや…能力というか…あの卑猥な武器？なら見た事ある」

ああ…あれか。

あれも確かに、えげつない武器だった…サイバディに搭乗していなければ、色々な意味でやられていた。

「まあ、レイアになら教えても構わないだろう。アーベの能力は、
こう呼ばれている…」

ゲイト・オブ・バビロン
【男達の財宝】「」

「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）！！」

む？

なんか、発音が違った気がするが…まあ、気のせいだろう。

「ああ、もしかして知っていたか？」

「知っているというか、名前だけはよく聞くよ。それにしても、アーベの能力がそれだったとは…是非、見せてもらおう」

見せてもらおうか…。

レイアは、もっとノーマルな親友だと思っていたが…『薔薇族』で
色々な意味で染まってしまったか…すまな（涙）

主人公は、憐れむ。(後書き)

アーベの能力解説：

能力名：男達の財宝ゲイト・オブ・バビロン

元ネタ：無い

元ネタ能力者名： 無い

能力詳細：

未定

備考：

? 男性に対しては驚異的な威力を発揮する。

? 某金ぴか様とは、全く別物です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

Fateファンのかた…ごめんなさい。

一応名前が違うから許してください。

能力詳細は未定なので、何かアイディア等頂ければ幸いです。

次話こそ、ティファニアが入学するはず!!

主人公は、復学する。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

皆さまから寄せられたアーベの能力については、

頂いアイデアを元に作者の中で色々と検討した上で

次回アーベ登場時に発表させていただきたいと思えます。

今回は、実家のタンクのお話とティファニアの入学のお話です。

主人公は、復学する。

ビダーシャルと別れて速攻で帰宅したレイアです。

いやー、今日も大変だった。

まず、ティファニアの荷造りが終わっていないと言う事で、家族全員でティファニアの荷造りを手伝う事になったよ。実に大変だった。なぜか、手伝いをしていたはずの母上がティファニアを着せ替え人形にして遊び始めるし、しかもメイド達も混ざって大変だった。こういう時の女性は、強い。色々な意味で勝てる気がしなかった。

そのおかげで私と父上で荷造りをする事になったのは言うまでもない。まあ、いつもと違うティファニアが見れた事だし、良しとしよう。

ちなみに、ティファニアはエルフとして入学する。なんで、そんな騒ぎになりそうなことをするか？大した理由はないのだが。ジョゼフ王の耳に今回の一件が届いたようで面白そうだからエルフとして入学してこいだとき。入学に当たり、色々と煩い連中を黙らせる為にジョゼフ王が身分証を書いてくれた。

『マザリーニ枢機卿発行の直筆身分証』 『ジョゼフ王発行の直筆身分証』 『オスマン氏のサイン入り入学許可書』。まさに三種の神器である。これだけの物を前にして首を横に振る勇氣のある奴はそうは居ないだろう。

次に大変だったのが、私の出世祝いだ。

両親や執事、メイド達が私に内緒で開いてくれた。しかも、我が家の使用人の子供達から『いつもありがとう』と綺麗な薄ピンクの貝

殻をくれた。不覚にも、目から涙が…。ビターシヤルと徹夜で飲み明かしたにも関わらず、パーティーで更に飲みまくる事となった。

屋敷の『レイアの工房』にて。

私とアミバと水銀燈がテーブルを囲んでいる。

「良い木人形^{デク}は、手に入ったかい？」

「ふむ…まあまあだな。流石、罪人だけあつて活きがある」

どうやら、お気に召したようだね。それならば、良かった良かった。

「今何人、残っている？」

「数えてないな。水銀燈」

「その位、覚えておきなさい。生きているだけなら63人。ただ、使えそうなのは10人かしらね。なんせ、アミバが『俺に触れる事ができたら、ここから出してやる』なんて言うから…」

送られてきた当初の人数は、優に300は居たはずだが…まあ、気にする事でもない。所詮、罪人…人の役に立たない屑どもが、アミバの暇つぶしと新秘孔開発と我が領地の民の糧のなるのだ。一粒で三度美味しいとは、まさにこの事だ。あいつらも、報われただろう。

「十分だ。では、使えそうな人材は私の方で使わせてもらおうよ。…

そんな嫌そうな顔しないでくれよ…今度、ジョゼフ王にお願いして
活きがよいのを貰って来るからさ」

この間、ガリアで大分殺してしまったが…あれ程の大国ならばまだ
収容されている囚人はいくらでもいるだろう。ヨルムンガンドが完
成した際にも、お願いしてみよう。機嫌がいい時ならきつと色々
貰えそうだ。

では、マザリーニ枢機卿からの贈り物達とご対面と行くつじゃない
か。

レイアの工房最深部にて。

私の工房の地下にある無駄に広い空間…そう、ここは我が領地のタ
ンク部屋だ。壁際に設置された椅子にはゼルエルネットワークを脊
髄に接続されたメイジ達おり、全員が死んだように眠っている。一
般人が、こんな部屋に三日も居れば発狂しそう光景だ。

「諸君、今日は君達にいい話を持って来た。君達はあのアミバに殺
されなかったというある意味強運の持ち主だ」

まあ、実際は逆らわず…ただ死を待つだけだった奴らかもしれない
が、それでも現時点で五体満足なのは、素晴らしい。それだけで、
こいつ等には期待できる。

「……………」

なんだい、その死んだ魚の様な目は…もっと、喜べ…！

「お前達全員をここから出してやる。もつとも、いくつか条件はあるがな」

「一体、何をやればいい？」

「なに、死刑囚でも出来る…いや、死刑囚だから出来るお仕事だよ。」

「誰でもできる簡単な仕事さ…ある人物を始末する。それだけだ、簡単だろう？もちろん、やるかやらないかは君等の自由だ。私は、優しいからそこだけは尊重しよう」

「もし、断ったらどうなるの？」

「断る？おいおい、お前ら馬鹿か…」

「その時は、アミバに実験されて死ぬか…あの者達と同じ末路かね。別に今死にたければ私を殺しに掛けてきてもいいよ。ただ…アミバより殺すのが下手だから、少し苦しむことになるかもしれないけどね」

私はタンクの方を指差した。

「どうやら、全員私の誘いに乗るようだね。」

「賢明な判断だ。」

その後は、全員に今回のターゲットである公爵家の長女の写真を配った。あいつには、人様を賞金首にした報復がまだだったからね。こちらと同じようにお前の首に賞金を懸けてやるんじゃないか。自由と金をいう物をね。

当然、逃亡されても厄介なので色々と処置を施しておいた。

？ 我々の事を誰にも話さない事

？ 誰にも捕まらない事

？ 我が領地の民に手を出さない事

？ 一か月以内に仕事を終える事

以上四つの条件を提示して、支度金5000エキューを渡してから野に放った。もし、一つでも破られれば結果は、言うまでもないだろう。当然、裏切り防止の為に、アミバの秘孔とアキューズドを使っておいた。

後は、結果を待つだけだ。成功失敗に関わらず、長女にはよい薬になるだろう。

新学期の初日。

父上母上、そして使用人達に別れを告げて魔法学院までやってきました。それにしても、懐かしい建物だ：いや、まじで！ 一体、いつぶりの復学だろう。

ちなみに、荷物もあつた為 今回は馬車で来ております。私の時は、馬車何て用意してくれなかったのに酷いよね：：やっぱり、息子より娘の方が可愛いのねorz

「ティファニア：日差しが強いから、これを被ってなさい」

私は、用意しておいた帽子をティファニアに被せた。まあ。紫外線如きにやられるような肌でもないだろうが：一応だ。小麦色の肌のティファニアも悪くは無い：だけど、私は色白のティファニアが好

きなんだよ。

悪いか!!

「あら、お父様。私には、何もないのかしら？」

・
・
・

そういえば…なんで、ティファニアと一緒に馬車から降りているんだ!?! 一緒に来る事は、全然構わないよ。だって、以前は一緒に学院で生活していたからね。でもさ、もう学院の敷地内なのになんでトランクに入っていないんですか。

「どうかしたんですか? レイアさん」

「いやー、なんで水銀橙が平然と学園の敷地内を闊歩しているのかなど…」

「聞いてないの? 私もティファニアと一緒に入学する事にしたのよ」

聞いてないのって…初耳ですよ!!
というか、誰か教えてくれよorz

「学び舎に何て興味ないと思っていただけ…また、どうしてこの夕イミングで?」

「そりゃ、おも…お母様の事が心配だったからよ」
ティファニア

今、絶対に面白そうとかそんな発言しようとしたよね！

まあ、ティファニアの事が心配なのは確かだ。水銀燈がティファニアと一緒に居てくれるならば、何かあった時に抑える事はできるだろう。それに、ティファニアも一人だと心細いだろうから、見知った水銀燈がいれば過ごしやすいだろう。

「早く行きましょうレイアさん、水銀燈ちゃん」

ティファニアが向こうで手を振っている。

何人かがティファニアの声に反応して、こちらを見てきた。どこの餓鬼どもかは知らないが…あまり色目で見ていると、一生光が見えない様にしてやるぞ。

昼休みの三年の教室にて。

ティファニアと水銀燈の入学にあたり、ティファニアがエルフである事を話してきた。当然、オスマン氏は渋い顔をしていたが…マザリーニ枢機卿やジョゼフ王の身分証があったとなつて断れるはずも無い。念押しに、水銀燈にお願いして少し心を弄らせてもらった。

お蔭で新学期と新入生の挨拶では、オスマン氏直々に学院にエルフを入学させる旨が大々的に発表された。当然、騒ぎになったが…壇上で挨拶するティファニアを見た者達は、その神々しい容姿と持ち前に雰囲気から皆を黙らせた。これで良いのだ。最初からティファニアが素直に受け入れられるなど到底思つてはいない。

まずは、エルフが入学した事を全員に知ってもらうのが大切である。

ティファニアをエルフと知った上で受け入れてくれる…そんな奴らが居れば私としてもうれしい限りだ。もっとも、群がる蠅には用なしだがね。

「はあ~~~~」

目の前に席に座っているギーシュがため息をついている。

「どうしたのだい？ギーシュ。まるで人生終わったみたいなため息をついて」

まあ、見当はついているがね。

「ミスタ・ヴェーグルか…この間は、失礼した」

「謝らんでも構わんよ。私は、自分の仕事をしたただけだ。それに、私の今の立場は君と同じただの学生だよ」

「そうか…君は、そういう人だったね。愚痴なんだが聞いてくれな
いか。実は…」

それから、10分程ギーシュの苦労談を聞かされた。その内容は、主に実家から勘当される件やモンモランシーがモット伯爵と婚約する事になった件などだった。仮にモンモランシーをシエスタ同様に連れ去ったとしても、サイトの場合と違い問題は解決しない。そんな事をすればモンモランシーの実家が潰れてしまうだけだからね。

「話は、変わるのだがミスタ・ヴェーグル。彼女がエルフなのかい？
そして、ミスタ・ヴェーグルの関係者だったりするのかい？」

妙な所で鋭いな…思いつきり関係者だがね。

「言わずとも彼女の耳を見れば分かるだろう。そう、彼女こそが君達が恐れていたエルフだ。後、私の関係者かだったね…もし、そうだったどうするのだい？」

ティファニアへの手出しは、私に手を出すより遥かに重い処罰が待っているぞ。

「僕は、美しい女性を見かけたら勝手に口説いてしまう癖があつてね。だが、僕も前回の一件で学習した。だから、君の関係者なら一切手を出さない事を心に決めたのさ」

良い心がけだ。

馬鹿は死んでも治らないという言葉を少し訂正せねばならないね。あれは、あのアホ限定の諺だね。

ご紹介が遅れたが、サイトとルイズは 現在公爵家で治療を受けているらしい。治るはずも無い怪我の治療など無意味なのにね。そのせいで、学院には一週間後に復学する予定らしい。ぶっちゃけ、来ないでいいよ。

そして、キュルケの方はタバサが献身的な介護を行ったかいてもあり、目が覚めたそうだ。目覚めたキュルケは、理由は分からないが性転換のマジックアイテムを探しているらしい。その為、まだ学院には来ていない。一体、誰に使うのだろうか…いや、本人が使うのかな？まあ、どうやら本当の幸せが見つかったようで何よりだ。

モンモランシーは、学院の自室に引きこっているらしい。なんでも卒業と同時に結婚させられるらしいので、単位を足りない様にして

留年するらしい。全く、無駄な抵抗を…。

マリコヌルは、以前とあまり変わりはない。いや…タバサ救出の件を周りに自慢しているせいか、人気者になっっている。まあ、王家や公爵家や伯爵家が例の件を隠密に処理したせいで、真実を知る者は少ないと言ったところか。

「予想通りだよ　ギーシュ。彼女は「「キヤー！」「」…なんか騒がしいね」

「どうしたのだろう？　うら若き女性が悲鳴をあげるなんてただ事じゃないぞ」

廊下から悲鳴？　が聞こえた。

まったく、廊下で騒いだらいけないと教わってないのかね。

ガラガラガラ

そう思った瞬間、教室のドアが開けられた。

扉を開けて中を覗き込んでくる見知った二人が居た。まあ、予想はしていたさ…お昼時でもあるし、そろそろ来ると思っていたからね。

「レイアさんー、やっと見つめました」

「全く、どこのクラスに居るか位ちゃんと伝えておきなさいよ」

あ…そういえば、学年とクラスを伝えてなかったね。そりゃ、申し訳ない。

「すまなかつたね。代わりに、今日のお昼はデザートを一品追加しよう」

私は、周りに視線を無視して席を立った。

「私は、キャラメルプリンが食べたいです」

「なら、私は醤油プリンがいいわ」

前者は分かるが、後者はなんだ…そんな奇抜な料理作ったことないぞ。というか、デザートに醤油とか合わないでしょう。

「ああ、そうだギーシュ。紹介しておこう。彼女は、ティファニア・ド・ヴェーグル。私の嫁だ」

「…な、なんだって!!??」「…」

ギーシュだけではなく、周りにいた奴らもシンクロした。

「そして、こっちの銀髪の子が水銀燈。訳があつて家名はないが…私の娘だ」

水銀燈にヴェーグルの家名は、語呂が悪いからね。

「ミスタ・ヴェーグル!! うらやまけしからん!!」

ギーシュが私の両肩に手を置き、無駄に近代用語を使ってきた。しかも、血涙を流して言うほどの事か…。アーハンブラ城で闘った時より気迫がある。

「さっさと行くわよ、お父様」

「はいはい、ではまた食事後にギーシュ」

私は、そう言い残して部屋の入口へ向かった。

「あー、言い忘れる所だったギーシュ。二人に手を出したら…コレだからね」

クイ

私は、親指で指を落とすジェスチャーをした。当然、周りで見ていた者達は冗談だと思っっているだろうが…ギーシュだけは、真剣な顔をしていた。

それにしても…予想外にスムーズに受け入れられているね。おとこなんて、可愛ければ種族など関係ないという事なのだろう。実際、二人とも目に入れても痛くない程 可愛いけどね。

主人公は、復学する。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

初日は、平和的に終わりました。

やはり、ここら辺でティファニアや水銀燈を狙いの 命知らずの貴族が居てもいいよね！？ 国内の貴族（爵位は侯爵位）のガキか某大公国のお姫様か…どっちがいいかな。

主人公は、降りかかる火の粉を払いのける。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想を書いてくれた方々へ、

深く感謝いたします。

本当にありがとうございます。

さて、今回は、前話の後書き通り…喧嘩を売られるお話です。

主人公は、降りかかる火の粉を払いのける。

学院生活を初めて、早数日：今日も元気なレイアです。

早朝（朝日が昇っている最中）にて。

私の朝は、いつもの事だが早い。正直、自分でもここまで頑張らないでもいいのではないかと思うくらいだ。早朝トレーニングに始まり、朝ごはんの支度、そして汗を流してからティファニアと水銀燈を起こす…これが朝の日課だ。ちなみに。ティファニアと水銀燈とは同室である。

幸い、私の隣室の者が、過去に謎の行方不明になった以来、空室となっており、部屋を繋げせてもらった。もちろん、オスマン氏も嫌がったが、金を積んだら素直に許可してくれた。

おかげで、部屋には台所とお風呂が増設された。おかげで、不埒な輩が寄ってこなくなりすごく快適だ。

学院側にとってティファニアの存在は厄介者に近いだろう…もつとも、それは私にも当てはまりそうだがね。学院側が譲歩したのは、厄介者を一か所に纏めたと言う事だ。本来なら男女が同室など倫理的に問題だが、夫婦でもあるし問題ないと結論に至った。

「ティファニア、朝だよ。そろそろ起きて歯を磨いてきなさい。朝ごはんにするよ」

「むにゃむにゃ、後50年…」

スヤスヤ

起きる気配が全くない…仕方ない。

「水銀燈…悪いがティファニアを着替えさせて、着席させておいてくれ。私はその間に配膳を終わらしておく」

「はあー、お父様って本当にティファニアには甘いのね」

そういうな…惚れた弱みというやつだ。

水銀燈は、レビテーションを駆使してティファニアを寝間着から制服へ器用に着替えさせていく。そして、歯磨きをさせて顔を洗いテーブルに着席させた。

「…いただきます」

食事の合図とともにティファニアが覚醒…。

最近思うのだが、アルピオンでは、ティファニアが子供達の世話をしていたのではなく、子供達がティファニアの世話をしていたのではないかと…。

一年の教室前にて。

今日は中庭でお弁当を食べようと思いティファニアと水銀燈を誘いに教室にまできてみた。今更だが…無理をしても私と同じクラス

に編入させるべきだったかなと思った。色々な意味で心配だ。

教室の様子を覗いてみると…数人の男達が貢物をティファニアと水銀燈に差し出していた。ティファニアは、困った顔をしながら受け取りを拒否し、水銀燈は冷たくあしらっている様子だ。

どうやら、ある程度は原作を忠実に再現されているようだ。私は、ティファニア達の教室の扉を開けて、二人を呼んだ。

「ティファニア、水銀燈お昼にいくよ」

「今行きます、レイアさん」

「あら、今日はお弁当なのね」

二人が立ち上がり私の元へと移動しようとした時、取り巻き達私と二人の間に立ち塞がった。

「横から割り込んでくるとは、幾ら上級生とはいえ少し横暴ではありませんか？」

「そうだそうだ。今は、私達がお二人をお誘いしているんだ」

「何処の何方かは知りませんが、同じクラスでもない部外者は引っ込んでいてもらいたいですな」

なるほどね…確かに部外者は引っ込むべきだね。完全に同意する。

「では、君達には尚更そこをどいてもらわないといけないね。私は、妻と子を迎えに来ただけなのだからね」

・・・

・
・

クラス全体が沈黙した。

誰もが予想外と言った顔をしている。まあ、エルフを妻に迎えるなんて奇特な人物など私の知る限りは、ティファニアの父親と私の二人しかないからね。

「ほ、本当なのかい？」

取り巻きの一人が二人に対して質問した。

「はい。私は、レイアさんのお嫁さんです」

「本当よ。後、お父様の事を悪く言つと殺すわよ」

取り巻き達は、放心状態だ。そんなにショッキングだったのかね……まあ、お蔭で道が開けたからいいけどね。

私は二人を連れて教室を出て行った。教室の隅では、某大公国のお姫様と取り巻きが口を開けたまま固まっていたが……まあ、問題あるまい。

中庭にて。

外で昼食も悪くは無い。

美味しそうにお弁当を食べる二人をみて、幸せを感じた。この幸せ

が長続き…する事はなかった。先ほどから、遠目でこちらをチラチラと見ている空中装甲騎士団の連中は まだ許せる。だけど…わざわざ、空気を読まずに話しかけてくる奴は別だ。

しかも、団体さんでご到着だ。

「こんな所で食事をしているなんて、なんて貧乏くさいのかしら…まあ、”田舎者”にはお似合いだけどね」

某大公国の姫殿下…長いのもう金髪でいいや。

金髪が言つと、取り巻き達が一斉に頷いた。

「そうですねわそうですね。その上、未だにベアトリス姫殿下にご挨拶がないなんて！これだから田舎者は困りますわ！」

モグモグモグ

取り巻き達は、金髪に言う事に賛同し得意げな顔をしている。

「田舎育ちかもしれないませんが、”田舎者”なんて言ったら失礼だわよ」

私の事を悪く言うのは、構わないが…父上と母上が治める領地を悪く言わないでもらいたいね。あんまり、でかい口叩くと、その田舎の地下に永住する事になるよ。

「一家団欒を邪魔するのが、かのアリエッタと縁が深いクルデンホルフ大公国の教育ですか…色々な意味で残念です」

主に、血縁家系があるという時点でかわいそうだ。もう、残念過ぎ

て涙がでてくるよ。

モグモグモグ

「一家団欒ね…よもや、トリステインでエルフを娶る貴族が居ようとはね。トリステインも落ちぶれたわね。………ところで、さつきから私を無視して食事を続けている。ティファニア…えっと、家名は何だったかしら？」

ああ。トリステインの急降下ぶりにはマザリーニも真っ青だよ。本当に、落ちぶれた。結構、見る目があるんじゃないかこの子。

でも、同じクラスなのだしさ…最低限、ケンカを売る相手の家名くらいは覚えておきましょう。できれば、下調べもしていたら満点をあげられたのにね。

「彼女の名前は、ティファニア・ド・ヴェーグル。嫁がいつも世話になっているね。私の名前は、レイア・ド・ラシエール・フォン・ヴェーグル。しがいない男爵家の嫡男です。以後良しなに、ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ姫殿下様」

一応、形式上軽く会釈をしておいた。

この馬鹿な国をいち早く見切りをつけて独立した手腕は、実にすばらしい。賞賛に値する。

あれ？

何やら、金髪と取り巻き一行の顔が少々青ざめている。

体調不良かな？

今なら無料で、アミバ流の治療を行ってあげよう…ただし、成功率は5割程度だがね。

「おや、ミスタ・ヴェーグルじゃないか。奇遇だな、君達も外で食事かい？」

金髪と話していると、どこからかギーシュが現れた。

・
・
・

なんでギーシュの奴モンモンと一緒にいるんだよ。あれか！これが俗にいう主人公？補正というやつなのか。

「まあな…それよりも、いいのかいモンモランシーと一緒に食事をして」

一応、モンモランシーは既婚者だぞ。それを堂々と…ある意味男らしいが。

「別に問題ないさ。卒業まではまだ時間がある。僕がそれまでに借金を返せばいいのさ」

これまた、男らしいセリフだ。だけど、それはお金を貸した本人の居る前で言うセリフじゃないと思うけどね。

「お久しぶりですわ。ギーシュ殿」

「い、いやあ…これはこれは、クルデンホルフ姫殿下…」

だから、言わんこつちやない…。折角の見せ場が一瞬で台無しだよ。

「そうそう、少し聞きたいのだけど…彼がああヴェーグル家の者といのは本当かしら？」

「あ…と仰っておられるのが、どこのヴェーグル家か分かりませんが…恐らく、ご想像通りかと」

酷いな…このトリステインにヴェーグルなんて家は、確か我が家しかないはず。仮に他にもあったとしても全力で家名を変えろに違いない。

「ぐうぐう…、これより異端審問を致します！　ギーシュ先輩とモンモランシー先輩は、これから私が行う異端審問の証人になっていただきます。よろしいですね？」

いきなりすぎる展開だな。それに、なにやら唸っていたようだが…実家からヴェーグル家に手を出す事を禁じられているのかな？

恐らく、それもあるだろうが…クラスの人気を二人に取られたのが相当気に入らないのだろう。実家の言いつけを破ってまでティファニアと水銀燈に対して文句を言いたいらしいからね。

「しよ、証人ですか…」

「ど、どうしよう。モンモランシー」

この場に居合わせたのが不幸であったね。二人の心中は、さぞ混乱しているだろう。ここで、金髪にご機嫌を取らねば借金をしている

身として何かと大変だろうし…かといって、私と敵対すれば、サイトの二の舞になる可能性は十分にあるからね。

「これより、クルデンホルフ司祭ベアトリスの名において、今から異端審問を執り行います！敬虔なるブリミル教徒の皆さん、よくご覧になってくださいまし！」

ベアトリスが大きな声で叫んだ。周りにいた、生徒たちが異端審問と言っ言葉を聞き騒ぎ始めた。食事時と言っ事もあり、この話を聞いた者が皆を呼びに走って行った。

折角一家団欒で食事を楽しんでいたのに、この場には大勢の学生が集まってきてしまい。非常に煩わしい事この上ない。しかも、ベアトリスの護衛に空中装甲騎士団までもが集まって来た。

がやがや

「それで、誰が何の罪で裁かれるのですかね？」

金髪が偽物の司祭である事は、知っている。だけど、面白そうだし、知らないふりをして話を進めてみようと思う。だってさ…あの騎士団の連中なんてアミバへの手土産にちょうど良いじゃん。

「そ、そんなの決まっているじゃない。エルフを娶っただけでなく、魔法学院に入学させたのよ！！エルフが居るだけで周りの皆がどれだけ迷惑をかけているかご存じで？」

迷惑ね…誰もして無いんじゃないかね？

衣食住の面倒は、基本的に私が面倒を見ている…君達がティファニ

アに接する機会はせいぜい講義中のみだ。それに、ティファニアが今のところ問題を起こしたとは聞いていない。もっとも、問題が起これば学院の一つや二つ程度は軽く消えるがね。

「なるほどなるほど、それで罪状の方は？」

「罪を認めるので、いい心がけだわ。本来ならば、極刑だけど…貴方が素直に罪を認めた事に対して温情を与えます。貴方達が全員この学院を退学すれば、見逃してあげましょう。もし、ここを去らなというならば…分かっていますね？」

金髪がとても気分良さげに発言をした。

これほど、皆の注目を集めた事は無いだろうし…今回の一件を利用し、自分の人気や地位を確立するつもりもあるのだろう。

そして、お抱えの空中装甲騎士団がベアトリスの前に立ちはだかった。

「たかが子供の言い争いにお抱えの空中装甲騎士団までご登場とはね…。それで、私が去らない場合は具体的にどうするのですかね？なにぶん、”田舎者”の為、遠回りに言われても分からなくてね」

私がそういうと、騎士団の一人が近くの木をエア・カッターで切断した後ファイアー・ボールで燃やし尽くした。

「あれが貴方の運命よ」

切り刻んだ後に燃やすと…これは、酷いね。

「要するにだ…私達が学院を去らねば、騎士団に命令をして私、テ

イファニア、水銀燈を亡き者にすると」

「そ、その通りよ。もしも、許しを請うならばこの学院に残る事も考えてあげなくもないけどね」

たかが、民衆を味方に付けたくらいで私が屈服するとも思っただのかね。それに、実に面白い事を言うね…。この私を殺す？実に面白い！！

「だが、断「ストローパー！！」…」

ギーシュが割り込んで来たせいで大事なセリフを言い逃してしまった。おいおい、人の見せ場を取るのはいらないよ。

「ゴミヨゴミヨ…（お願いだから、話を合わせて。今、貴方がベアトリス姫殿下と事を起こせば、私とギーシュは立場上 向こうにかざる負えないのよ。だから、単刀直入に言うわ…お願いだから、私達が居ない時にやってちょうだい！！）」

やはり、モンモランシーは頭がいいね。それに、人を見る目がある。こういう人材は、世の為にも失うのは惜しいな。

ここは、ギーシュ達の恋仲復帰祝いに顔を立ててあげよう。

「ベアトリス姫殿下様、また明日続きをする事でこの場は収めませんか？この近衛隊長の言葉を無視して事を荒立てるのもアレでしょう。それに、騒ぎが大きくなり教師達もやってくるでしょう。私は逃げも隠れもしませんから、明日の同じ時間にここで皆の前で…」

感謝してくれよ ギーシュ。これで、以前に私に立てついた貴族を

探す際に秘孔を突いた一件はチャラだ。

「まあ、いいでしょう。明日まで猶予を与えましょう。よい回答を期待していますよ」

回答？そんなの既に決まっているよ…というか、既に断ると言ったよ。そして、お前等は私達に火あぶりにすると返答をしたよな。

集まっていた野次馬たちは、金髪がこの場を離れると同時に散って行った。

それにしてもさ、金髪は自分が言った言葉の重さを理解しているのだろうか。まあ、そんな事はどうでもいい。私達を殺害しようとした事には、違いないのだからね。

「さて、野次馬も居なくなっただしお昼の続きを…。あれ？ここにあった私のお昼は？」

キヨロキヨロ

何処を見渡しても私の食べかけのお弁当がない！！

「あそこよ」

水銀燈がティファニアのお腹辺りを指差した。

その夜。

夜更けの森の中でビダーシャルに電話をしているレイアです。ヨルムンガンドもといエヴァ量産機の開発状況が気になるからね。

『流石ビダーシャルだ。わずか数日で完成が目途が立つとはね』

『レイアが用意した資料があつたからな。お蔭でこちらも進めやすかつたさ。それにしても、問題であつた稼働時間の問題に対してこのような手を使うとわな』

ズブリ

「ゴフツッ!! お、お願いだ。もうこれ以上は…」

「おいおい、まだ二本目だぞ。空中装甲騎士団の名が泣いてしまうよ。後、五本で北斗七星の完成なのだから耐えてくれよ」

私は、深夜零時を回り明日になつたので、私に対して喧嘩を売つて来た空中装甲騎士団達と今お話し中だ。人目に付かない森に呼び出すのは手間取つたが、呼び出してしまえば後は楽勝だ。

総勢27名居た今や見る影もない。

半数が死亡しており、残る半数の命も風前の灯だ。一応、アミバにプレゼント分を5名ほど確保したので、今はその残りを処理中だ。

ズブリ

「ぎゃあああああああ…」

なんだ、二本目が限界だつたか…

『何やら悲鳴みたいなものが聞こえたが、そっちで何かあったのかレイア？』

『うるさい蠅が居たので、始末しているところだよ。それで、やはりアレを装甲に使った事と黒のコアを動力に使うのは正解だったようだね』

とある場所から回収した魔法を吸収する金属を装甲に用いる事で外部よりエネルギーを補充できるようにした。更に、体内で賢者の石を錬金し動力源として用いる機構に設計している。

『ああ、しかし蛮族一人を錬金しても精々稼働時間は30秒しか伸びんぞ』

『いや、30秒もあれば上等だよ。それに、戦争で使うんだ。人間など幾らでも補充できるさ』

『ならば、問題ない。後、空を飛ばすように羽を付けるという事だが…』

・
・
・

その後もビダーシャルと詳細を煮詰めた。

十数分後。

『では、その方向でお願いするよ』

『わかった』

プチ

ビダーシャルとの電話を終えた。

さて、残りのゴミどもを仮死状態にしてアミバに持っていくとしよう。

Side ベアトリス

明日になれば、クラスの注目は私一人に集まるわ。

お父様の心配し過ぎなのよ。たかが、男爵家相手に手を出す事を禁じるなんて何を考えているのでしょうか。王家やマザリーニ枢機卿、そしてヴァリエール公爵家ならまだ分からないでもないわ。

確かに、お父様から頂いた報告書では、ヴェーグル家に異常ともいえる金額が流れ込んでいる。それを調査する為に、内々に派遣した者達が悉く行方不明になり調査を断念したそうだ。エルフを領地内に住まわしているようだから、恐らくは殺されたのだろうとあつたと書いてあつた。

そして、報告書にはヴェーグル家嫡男の情報もあつた。正直、信じられないような経歴だ。幼い時にエルフが住まう土地にて数年在住、公爵家次女の病の鎮静薬を高額で販売、戦火の中アルビオン王家に秘薬を売りつけ王家の財宝を丸ごと徴収、ウエールズ皇太子の殺害、

マザリー二枢機卿の懐刀：報告書は数枚に続いた。そして、ついこの間ガリアの宮中伯になった事も記載されていた。

「まあ、どんな人物であろうとも空中装甲騎士団がある限り問題ないわ。エルフであるティファニアは脅威かもしれないけど：見たところ好戦的な性格でない為、何とでもなるでしょう。子供の方も：こちらで戦力として数える必要はなさそうね」

優男には割るけど、貴方達は私にとって目の上のたんこぶでしかないのよ。

「ベアトリス姫殿下、そろそろお休みにならないと明日に差しさわりがあります」

「ええ、そうするわ」

明日になれば、ようやく私の学院生活の再スタートだわ。今回の一件がうまく行ったら、空中装甲騎士団の連中にはボーナスをあげましょう。

ベアトリスがそう思っている最中、ご自慢の空中装甲騎士団がレイアの手には掛っているとは露にも思っていないだろう。

主人公は、降りかかる火の粉を払いのける。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次話は、ベアトリスの異端審問とトリステインーの問題主従が帰ってきます。

最後にお知らせ。

本SSは、現在終盤を迎えております。

まだ、どこ辺りをゴールにするかは決めてません。

なるべく綺麗に終わるようにエンディングを意識しつつ執筆していく予定です。

主人公は、無益な殺生は嫌いです。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

皆さまから感想を頂き

ベアトリスって意外と愛されていたんだなと思いました。

では、前回の続きで異端審問ネタをやります！！

主人公は、無益な殺生は嫌いです。

金髪に喧嘩を売られたレイアです。

約束通り、昨日の続きをしてあげる為に外でお昼を食べております。

「レイアさん、エンガワと炙りサーモンください」

「私は、大トロとカニみそ、後アナゴを頂こうかしら」

「…」

「了解」

にぎにぎ

何をしているかって？

みんなのお昼ご飯を握っているのですよ。真昼間の学院の中庭で馬鹿みたいと言われればそれまでだが…お寿司を食べたいと言われたので仕方なかつたんです。だから、即席だけど中庭にカウンター席が三席だけのお店を作った。

私は、金髪が近づいてくるのを察知したのでティファニアと水銀燈の注文を早々に作り上げお店の外へでた。

「待たせてしまったかね。すまないが手早く終わらせよう。大事な嫁と子がお腹を空かせて待っているのですね。それにしても、一人で来るとは予想外だったよ。昨日まで一緒に居たお仲間とお抱えの騎

士団はどうしたのだい？」

「何をしたのよ!!! あの子達は、みな体調不良で休みですし、昨日まで居た空中装甲騎士団は、居なくなるし。代わりに連れてこようと持ったギーシュは、居ないし。更に代理で連れてこようとした上級生は、ことごとく逃げ出したわ」

全く、自分の力で解決させようという意気込みがまるで感じられない。それにしても、ギーシュ達は雲隠れしたか…ここにきてまさかの成長ぶりだね。

「人聞きの悪い事は、止めていただきたいです。それとも何の証拠も無く、人の事を疑うのがクルデンホルフ大公国のやり方だと？もし、そうであるならばトリスティン同様に随分と落ちぶれましたな。まさか、お仲間が居ないと何もできないとでも？」

「くうー、いいわ。そこまで言うなら、クルデンホルフ司祭ベアトリスの名において貴方達を処罰します!!!」

さあ、どこからでも攻撃してくるといい。金髪が何のメイジでどのランクかは知らないが、最低限トライアングル以上で有ってくれよ。そうでないと、ただの弱い者いじめになってしまうからね。

「先に言っておきますが…私も命が惜しいので抵抗しますよ。何分スクエアな上、力加減を誤って五体満足で居られなくなっても恨まないでくださいね。もっとも、トリスティンにおいて司祭の名を語るのは火刑である為、万が一貴方が死んだとしても問題ないですけどね。あんな大勢が居る所で司祭の名を騙ったのです。言い訳はできませんよ」

「な、何を根拠にそんな事を仰っているのかしら」

金髪が慌ててみるのが手に取るように分かる。事情など知るまいと思っていたトリスティン貴族が疑い始めたのだから…それも確信を持って。

「では、貴方は司祭の免状をお持ちで？」

「ええと、その、実家にあるのよ！！」

「嘘と突き通せば真実になるとでも思ったのですか？ 大体、異端審問には、司祭の免状だけでなくロマリア宗教庁の審問認可状が必要なのですよ。次からは、もっと勉強してから来ましょう。…もつとも、貴方に次があればですが」

嘘についてまで、私達の平和を脅かし…あまつさえ殺害しようとした罪、しっかりと償ってもらいましょう。なーに、人目もあるから殺しはしないさ…。ただ、私の傀儡として生涯を過ごして貰う事はなりませんかね。

「も、持っているわよ！！ 両方とも実家に忘れていただけ、だから何の問題もありませんわ」

「ほほう、まだ言いますか…見苦しいですな。では、誰が貴方に司祭の免状と審問認可状を発行したのです？せめて、その位はお分かりになるでしょう？それが真実ならば」

•
•
•

金髪が沈黙した。恐らく、頭の中で実家と縁があるロマリア司祭で一番地位が高い人物を思い出しているのだろう。誰の名前を言うか実に興味深い。仮に、マザリーニ枢機卿と言い出したら、即刻電話で問い合わせをしてあげよう。

「サ、サンガリア大司祭よ!!!」

なさか、このタイミングで!!! ある意味とても空気が読める子だな。あるう事か、その名をこの場で使うとはね。

「それは、本当ですか?」

「もちろんよ」

なるほどなるほど。

では、直接本人に聞いてみようじゃありませんか。私の下僕であるサンガリア大司祭にね!!! ちなみに、元は司祭だったけど色々と便宜を図らせる為に以前より資金を援助し地位を向上させた。ロマリアなんて金があればいくらでも出世できますからね。

「では、ご本人に聞いてみましょう」

「えっ!?!」

パチン

私は指を鳴らして、カウンターで待機させていた、サンガリア大司祭を呼び出した。この日の為に前日アミバにお土産を届けた後、ロマリアまで寄り道をして連れてきました。

「お久しぶりです、ベアトリス姫殿下様」

おや、金髪の色がみるみる悪化していく。体調不良ですかね…最近の若い者は自己管理もできないとは…嘆かわしい。

「実に偶然ですな。何を隠そう、サンガリア大司祭とは切っても切れない仲でしたね。異端審問の件をご相談したところ、是非私の力になりたいと言う事でここまで来てくれたのですよ」

もつとも、昨日相談したとしても僅か一日でロマリアからここまで来ることは通常不可能！！だが…エルフと縁のある私にそんな常識が通じない事は周知のはず。何事も先住魔法といえば、都合がつくからね。

「非常に残念です。ベアトリス姫殿下様をこの手で裁かねばならないとは…」

「…してなのよ。どうしてよ！！なんで、私の言う事が聞けないのよ。私はね、偉いのよ！！あんた達なんかと違って偉いのよ。私に手を出せばお父様が黙っていいわよ！！」

自分が不利になったとたんにこれか…全く、どいつもこいつも。

「構わぬよ。では、これよりベアトリス姫殿下が司祭を騙った事についての処罰を執り行わせていただきますよ。焼き加減は、どのくらいがお好みですか？」

パチンパチンパチン

ドコン！ドコンー！！ドコーン！！！！

「左からレア、ミディアム、ウエルダンの焼き加減です。なんでも仰ってください。こう見えて料理は得意ですから、ご安心ください」

私は、フレイム・ピラーを披露した。

そして、指をはじく用意をして金髪へ向き直った。

「ヒッ！！　だ、誰か！！私を助けなさい！！　誰かー！！」

・
・
・

金髪の声が響く…しかし、誰も来ない！！

当然だ。ロマリア大司祭の名を使い犯罪行為を行った者に対して誰が救いの手を差し伸べるといふのだ。確かに、大公国の姫殿下を救えば謝礼はすごいだろう…だが、助けに入れば自分も異端扱いされて、一族含めて殺されかねない。

「誰も来ないようだね。では、このレイアがベアトリス姫殿下の介錯を仕る。焼き加減にご希望が無いようだから、こちらで適当にやらせていただきますね。ご安心ください。苦しいのは、ほんの数十分です」

金髪がとうとう状況を悟ったようだ。助けは来ない！！

そして…とうとう泣き崩れた。更に鼻水を垂らし、しょんべんまで漏らし始めた。

「た、たすけてよ…お願い。ほら、同じ生徒じゃないね。今回の事は、私が悪かったわ。じよ、冗談だったのよ、別に本気で貴方達を裁こうなんて思ってたわ。なんでもするから!!お願い…だずげてください」

もはや、昨日とは既に別人の様だ。そんな光景を見たら同情する人もいるだろう。しかし、命乞いなど、このレイアには効かん!!

「貴族らしく最後は堂々として欲しかったです。…サヨウ「待つてください!!」」

お別れを言おうとした時、ティファニアが止めた。

「貴方も私を笑いに来たの…。さぞかし惨めに映るでしょう。最後だから言っておくわ、私は貴方が羨ましかったのよ。エルフでありながら人気者であった貴方が!! でも、もうそんな事どうでもいいわ」

「そんな事ありません。私だってベアトリスさんが羨ましかったです。私は、エルフですから…お友達が居て。…よかったら、お友達になってもらえませんか?」

…え!?

何この流れ、確かに原作で友達になったような気もしたけどさ。そしたら、この私の憤りのない感情は何処に当てればいいの!?

「貴方達を裁こうとしたこの私を?」

「はい、学び舎で裁く裁かないのなんて、おかしいでしょ?それに、私はここにお友達を作りに来たの。敵を作りに来たんじゃないわ」

ティファニアが優しく金髪に伝えると…張りつめていた糸が解けたのか。ティファニアに泣きついた。

「ひ……、ひづ。ひづく、怖かったよー。本当に殺されるかと…」

「よしよし」

「う、うづ、うえーん」

泣きじゃくるベアトリスをティファニアが優しくなでている。

なんて、うらやま…！

翌日。

あの後には、ベアトリスを病欠だった従者に預けて解放した。当然、受け渡し前に金髪の頭にマジックアイテム…肉の芽を埋めておいた。焼き殺さないで上げたのだから、当然その位の保険は当たり前だ。

まあ、今回の一件で大公国ごと潰しても良かったのだが…無益な殺生は好みじゃないからね。もっとも、ベアトリスという人格は殺させてもらったけど。お陰様で随分と従順な姫殿下の誕生だ。こいつは、独立国の次期王女だ…そこら辺の貴族より断然使えるモノだろう。精々、ヴェーグル家の為に身を粉にして働いてくれよ。

「「「「「ちやー…！」「」」」」

・
・
・

いい加減、エルフを見たくらいで驚くのは止めて欲しい。既に、入学して何日たったと思っていやがる。

ガラガラ

そして扉を開けて入ってきたのは、トリステイン…いや、ハルケギニアーの問題主従であった。いやー、随分と重役出勤ですな。既に学院始まって一週間は経過するというのにな。それにしても、包帯男を見ただけで悲鳴を上げるなんて、情けない貴族達だ。

「やあ、おはよう。調子は、どうだい？」

私は、三女と犬に挨拶をした。人間挨拶は基本だよな。

「ああああ、あらあごご御機嫌よう。随分と元気そうね…ちっ」

「でねえのせいで…！ でねえのせいで…！（てめーのせいで…！ てめーのせいで…！）」

サイトが何か言っているようだがさっぱりだ。もしかして、声帯が死んだか…。そして、礼儀正しく挨拶をしたのにも関わらず、三女が握りこぶしにしてワラワラと震えているように見える。

「随分と変わった言葉だね…いや、世の中広い物だね、そんな言語があったとはね。ところで、君の従者はなんで包帯を巻いているの

かい？ 顔も見せないで貴族に挨拶するのは失礼だよ」

そう…サイトの顔には包帯がぐるぐる巻きにされており、志々雄とキャラ被りしている。似ているのは包帯だけだけどね。

「どれどれ、この私とその包帯を外してあげよう」

「やべえええろおおおおおおお！！」

クラスの皆が注目するなか、私は犬をレビテーションで持ち上げて包帯を解いていった。

少しずつほどけていく包帯の下には、犬の素顔が…そしてそれを見た者達が叫びだした。

「ば、化け物だあ」

「気持ち悪い」

「あれは、もう人じゃないわ」

クラスの奴らが思った事を口にしていった。みんな酷いな…先日まで同じクラスの一員だったのだろう。それをたかが顔が変わったくらいでこの態度…。

まあ、分からないでもない…だって、その顔はイオハザードに出てるリツーみたいな面構えになっているのだから。脳ミソは見えてないが…皮膚は剥げており、口はいい具合に裂けている。歯も剥き出しだ…男前になつたじゃないか。

「気分はどうだい？ 醜い化け物さん」

私は、抵抗できない犬へ話しかけた。

主人公は、無益な殺生は嫌いです。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

三女と従者が最後の方にしか登場せず
期待していた方々ごめんなさい。

次話は、ガリア辺りに出張しようと思います。
やはり、テストパイロットって大事なお仕事だと思っています。

主人公は、日頃の感謝の気持ちを込める。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

最初に…予告を裏切って申し訳ありません。

なぜか書いている内に予告と違う内容にorz

次話こそは、必ず…いや、多分

主人公は、日頃の感謝の気持ちを込める。

どうにも解せぬ光景を目のあたりにしているレイアです。

何が解せないかって？それは、アレだよ…。

私は、中庭から食堂内にいるサイトと視線を移した。

「はい、サイトさん」

「くちやくちやく」

食堂でシエスタが犬に食事を食べさせているのだよ。確かに、シエスタは犬に惚れていた。だけど、今の犬の面は千年の恋も冷める程の男前だ。そんな奴に甲斐甲斐しく世話をするなど、並大抵の事じゃない。

現にクラスの奴らや水精霊騎士隊の連中ですら、サイトと少なからず距離を取っている。要するに…これが普通の反応なのだ。誰だってあんなキモイ面の奴と仲良くなどしたくない。中身だけでなく、見た目も生理的嫌悪感を呼び起こす。

“顔より中身が大事” と言う言葉を前世で聞いたことがある。仮にその妄言が真実であったとしても、犬は中身も最低な存在だ。顔も中身も最低な奴が女性にモテるのが不思議でならない…主にシエスタと三女限定だけだよ。

言うておくが、決して嫉妬ではない！！

「水銀燈…犬は、どんな魔法を使ったのだ？」

「犬…ああ、あの化け物の事ね。いろんな趣味の人間がいるらしいから、たまたまあの顔が好きだったんじゃない」

「…本気で言っている？」

「冗談よ。あの化け物の傍に居る子…魔法薬を使われているわよ。見たところ…かなり持続性の高い物みたいね」

魔法薬…惚れ薬か！！

いや…確かに、そういう事なら納得がいく。通りで原作でも後半に行くにつれて女性関係が広がるはずだ。どういう経路で入手したかは知らないが…公爵家三女の使い魔とシュバリエの立場をフルに使えば無理な事は無いだろう。

「最低だな…で、二人ともお代わりは？」

「おかわりー」

「私は、もういいわ」

ティファニアのお昼ご飯の冷麦をよそいつつ、あんなのに惚れたシエスタに少なからず同情した。もっとも、助ける気など皆無だがね。一応、今度から食べる食材には全て、ディテクトマジックを掛けておくかな…何をされるか分からないからね。まあ、本家本元の水の精霊が居る限り、万に一つも犬が私の料理にばれない様に惚れ薬を混ぜる事は叶わないけど、用心するに越したことはない。

ティファニアにその程度の薬で効果があるとも思えない。だって…この間自分で作った料理を味見させたが、平然としていたんだもん。ちなみに私は、同じ料理を食べて半日ほど便器をお友達になっけきました。

その日の夜。

私宛に吉報が届いた。

そう、以前に送った刺客から目標の首を取ったと連絡が来たのだ！！

これを聞いた時は、正直喜びのあまりアーベと露天風呂に一緒に入ってもいいと思えるくらいの気持ちだった……ごめんなさい、やっぱりお風呂は許して（涙）

一応、どういう風に始末したかを聞いてみたら、全員で共同作戦だったそう。犯罪者みたいな連中は個人プレーに走るだろうと思っただが、完全予想外だ。長女のメイジとしての実力は知らないが…10対1では流石に勝ち目はないだろう。

私は彼らとの約束を守るべく学院の外にある森に來ている。そして、そろそろと6人ほどが集まった。10人はなっただから、ここに居ない4人は死んだか…。

「まずは、証拠を見せてもらおう。まさか、無いとは言つまい」

「当然だ。但し、中からこんがり焼けたから判別できるか 分から

ねーがな」

そういうと、盲目の男が首を私に差し出してきた。随分とコンガリ焼かれた為、これだけでは誰の顔なのかサッパリだ。

「本来なら、ここまで綺麗に焼かれた頭部を復元する事など水の秘薬を用いても不可能だが…私の手に掛れば」

キューーーーーン

まるでビデオの逆再生のように顔がみるみると復元されていく。

その様子に、生き残った一同が啞然！！

しばらくすると、あら不思議…さっきまでただの焼けた肉だったのが、元通り！！

高飛車の面構え、長い金髪。そして、どことなく公爵夫人と似た顔つきの女の頭部が復元された。そして、その顔は人の命をゴミの様に扱う憎き公爵家長女の顔であった。

「ふふふふはっはははははは！！ 実に愉快だ。あの公爵家長女ともあるう者のなりの果てを！！ これぞ、まさに天誅！！ 何の罪もない人間を金で殺そうとした罰が当たったのだ。さて…確認も取れた事だし、この見ているだけで腹が立つ顔は、明日の三女と犬の餌にでも混ぜておこう」

なーに、バレる事なんてないさ。普段から厨房に出入りしているだから、小細工など朝飯前だ。

これは、実の姉が不幸の事故にあったルイズに対するお見舞いの様なものだ。せめて、三女と犬の血と肉なり永遠に一緒に居られるようにと、日頃の感謝の気持ちをつぶりと詰めた贈り物だ。きつと、涙して喜んでくれるだろう。

「おいおい、約束を忘れちゃいないだろうな。こっちは、死ぬような思いでそいつを殺してきたんだ。今度は、そっちが守る番だ」

ああ、そうだったね。

「安心しろ。お前らが約束を守った以上、それを違える事は無い。もちろん、保険は掛けさせてもらおうよ…>>動くな<<」

「てめえ！！最初からそのつもりだったのか！？」

「ぶつ殺してやる」

「げすがああああ！！」

各位から様々な罵声が浴びせられる。いつもの私ならこんな発言を聞いたら手元が狂ってしまい、魔法を使ってしまうたり、秘孔を突いてしまったりしてしまうのだが…今日の私は機嫌がいい！！その位見逃してあげるよ。

「大丈夫だ。ここしばらくの記憶を奪わさせてもらおう。なーに、記憶を消した後はどこへなりと行くがいい」

ティファニアが私の圏内にいるから、忘却を使って記憶を消す予定だ。

「お前に一つ聞きたい。コルベールがどこにいるか知っているか？」

「ゲルマニアのツエルプストー領だ。居場所のメモをポケットにしまっておいてやる。…達者でなメンヌヴィル」

「ああ、またな。いつぞやの餓鬼」

私は、全員の眠らせたのちに記憶を奪った。そして、全員をゲルマニアの地に放逐した。それなりの支度金を用意してあげたから、当面の生活には困る事は無いだろう。本来なら、始末しても良いのだが…私は、約束は守る。これでも義理堅い漢だと自負しているからね。

翌日の朝食。

今日は、珍しくティファニアと水銀燈一緒に食堂で朝食をとる事にした。なぜかって？そりゃ…アレの見る為に決まっているでしょう。

「くっ…ぶっぶっぶ」

ある意味、ここまであの三女と犬に追い詰められたのは初めてだ。まさか、私をここまで苦しめるとは…実に恐ろしい。

それにしても、笑いを堪える事がここまで辛いとは思っても見なかった。だめだ…笑うな！！食事終了まで後10分！！それまではこの鍛え上げられた肉体をフルに使って防ぎきるんだ。

「あら、何のお肉かしら…変わった味ね」

「ああ、じえもぐげがあつでながながうまいぜ（ああ、でも癖があ

って中々旨いぜ）」

三女と犬の会話が聞こえた。

「ぶほっ」

なんて、きついボディブローだ。やめろ！！それ以上喋るな。私の腹筋が崩壊してしまうのではないか。

まさか、それが真の目的なのか！！このまま私を笑い殺す気か！？なんてこった：まさか無敵だと思っていたA・Tフィールドをこの様な手段を用いて突破してくるとは、実に恐ろしい。

「ちょっと、この料理は何を使っているのかしら？」

「申し訳ありません。なんでもシェフの方が、ミス・ヴァリエールに日頃の感謝をご用意した一品らしく、わたくしも詳しくは…。ですが、滅多に出回らない貴重なお肉だそうです」

三女が給仕に話しかけている。

ちなみに料理の方は、私が作った。そして近くにいた給仕には悪いが少しばかり記憶を操作させてもらった。まあ、代わりと言っては何だがそれなりの金を包ませてもらいましたよ。

「そうなの。そのシェフに伝えておいて、また食べたいわと」

「わかりました」

また、食べたいと…くつくつくくはっはっははははは！

いいだろう、その願い私が叶えてみせましょう。幸い、私に反抗的なのが二人もいる。そして、さらに食べたいというならば次女にも本当の意味で食卓の上に並んでもらおう。

「くつくく…ティ、ティファニア私はちょっと腹が痛いから外に行ってくる。ぷぷぷ」

「大丈夫ですか？お腹が痛い割に随分とお元気そうですね…」

「さっさと行ってらっしゃい」

二人に早々に別れを告げて、私は中庭の隅へ移動し盛大に大笑いした。はたから見たら中庭で大笑いする変人に見えるかもしれないが…今はそんなことどうでもいい。

今日の私なら犬に何を言われてもキレない自信がある。体を張って笑いを与えてくれた犬に賞賛の言葉を贈りたい位だ。

数日後の講義が終わった放課後。

なにやら、ギーシュ率いる水精靈騎士隊オンディーヌの行動が慌ただしい。こういう時は必ずと言っていいほど碌でもない事が起こるんだよ。

その時、不吉にも携帯の着信音が鳴った。かけてきた相手を見ると…マザリーニ枢機卿の名が表示されている。マザリーニが私に掛けてくるという事は、事態が緊迫している証拠でもあるし…出てあげ

るか。あの人に逝かれると何かを暮らしずらくなりそうだし。

だが、まずは第一声に…

『断る！！』

『まだ、何も言っていないのだが…元気そうで何よりだミスタ・ヴェーグル。いや、ヴェーグル卿と呼ぶべきですか？』

何も言わなくても分かりますよ。私とあなたの仲じゃありませんか。どうせ、碌でもない事を私に依頼するつもりでしょ？

『公式な場でもないので今まで通りミスタ・ヴェーグルと呼ばせてもらおう。今日は、お主に確認したい事と依頼したい事があつて電話してある。まず、確認したい事だが…ここ最近一人の女性が行方を眩ませており王宮の兵士を使って目下搜索してあるのだが何か知らぬかな？』

この情報化がなされていない世界で僅か数日のうちに行方不明が判明するなんて…しかも既に搜索を始めているとは予想外だな。恐らく、自分の身に危険が迫っている事を察していたのか。

それにしても、マザリー二枢機卿も犯人の目星を既につけているとは…恐れ入るわ。

『何処の何方か存じ上げませんが、お悔やみ申し上げます。それに、このご時世いつどこで誰が居なくなっても不思議じゃないでしょ』

『そうか、ならば構わん。本題だが…アンリエッタ王女殿下が先日ロマリアへお出かけになられた。そこで、何を考えたのか知らない

が水精靈騎士隊オンディーヌをロマリアに寄越すようにと申請がなされた。しかも、ロマリアまでどう頑張っても一週間以上かかるのに至急ときたものだ…』

ついに来たか…人数こそ違えど、原作通りに事が運んでいるな。

『アリエッタ王女殿下は、算数も出来ないのですかね。ロマリアまでの距離から計算して、普通10日くらいはかかりますよ。まあ、そんな事はどうでもいいか…それで本題と言うのは、恐らく戦争の事ですかね』

『…ああ、察しが良くて助かる。推測の域を出ないが、各国の動きから考えるにロマリアとトリステインの連合軍がガリアと戦争になるだろう』

全く、金も人もいないのに戦争なんて何を考えているのだろうね。早々に属国になるべきだよな。

『まさかと思いますが、戦争を止めるなんて無理難題を仰らないでよね？』

『もう、言わぬさ…ただ、私の部下達をヴェーグル家で雇ってもらえないかと思つてな。優秀な者達だ。君の助けになるだろう』

自分の部下を私に預けるとは、とうとう見限ったか。

まあ、マザリーニ枢機卿程聡明なお方なら、今後の展開など予想出来るという事か。ガリア相手じゃ、どうあがいても負けるしね。おまけに、ビダーシャルと私がガリアに味方している以上、ロマリア・トリステイン連合に万に一つも勝利は無い。

『それにしても、貴方が守ろうとした国が、僅か数年…しかもたった数人の愚行のせいで消滅する事になるとはかける言葉もありません。慰めになるとは思いますが、貴方の部下達は私が責任を持ちましょう。ただし、エルフも暮らす事を許容する人に限りませうね』

『その件については、全員承知済みだ』

流石、マザリーニ枢機卿が優秀だという人材達だ。柔軟な頭の持ち主の様だね。後、ご自身の身の事を言わないという事は、覚悟をお決めでいらっしやるんですね。

『もしも、あなた自身の気が変わった際は是非お電話ください。いつ、どこに居ようともお迎えにあがりますよ』

『ああ、その時はよろしく頼むよ』

ピッ

本当にトリステインが潰れる時は、マザリーニ枢機卿の説得を試みよう。それでも嫌がる場合は、せめてこの私の手で…。

私は、その後王宮に赴きマザリーニの部下達を連れて実家に戻った。念の為、アミバ式の方法で裏がないかしっかりと確認もしておいた。

翌日。

ギーシュ達が全員学院から居なくなっていた。なんでも、王女殿下の命令でロマリアへ急行せよとの事で、大急ぎで船を手配し向かっ

たそうだ。原作ならキュルケ所有のあの船があったのだが…彼女は既に脱落しているからね、多少時間はかかるだろうが問題あるまい。では、こちらでも向かうとしよう…例の物がおおむね完成したと報告があったからね。その最終調整に張りましよう。

「ティファニア、水銀燈。これからガリアに行く。二人とも準備してくれ」

「随分と急ね、お父様。でも、いいの？学院に復学したばかりなのでしょ？」

そんな事問題ないさ。なぜなら…

「遅かれ早かれ、卒業までにこの国は墮ちるだろう…そうならば、もはや学院どころではないさ」

「ええー、学院なくなっちゃうんですか？せつかくお友達が出来たのに…」

「心配しないでいいよ、ティファニア。君の友達も戦争になれば自分の国に帰るだろう。戦争が終われば、こことは違う学院になるかもしれないけど…そこで新しい友達を作ればいいさ。大丈夫、私も一緒に入学するからさ」

ナデナデ

残念そうなティファニアを手懐けた。なーに、嘘など言っていないさ。この国がなくなればガリアもしくはゲルマニアの魔法学校に行けばいい。ゲルマニアなら金で、ガリアなら権力を使えば入学など

容易い。

私は、実家にも戦争になるだろう旨を伝えておいた。そして、恐らく私がガリアの貴族として参戦するだろう事も…だから、父上達には何が起ころうとも領地からでない様にしてもらった。戦火に紛れで良からぬ事をしそうな連中がトリステインには存在するからね。

やはり、念の為保険はかけておくか。

戦争は、一騎当千の力より数が物を言う場も存在するのは事実だ。決してアミバや父上母上の実力を疑っているわけでは無い。だけど、領地はそれなりに広い…全域を数人の強者でカバーするには限界があるだろう。まあ、アミバに偏在を使ってもらい各村に一人いればお釣りがくるかもしれないけどね。

だが、アミバは気まぐれな面もあるからな…私が呼べる最高戦力を配備しておく。

『もしもし、何か実家の方が戦火に巻き込まれそうなので、良かったら一か月程でいいんだけどうちの実家に遊びに来ない？』

・
・
・

その後もしばらく雑談をした。

『じゃあ、翠星石と蒼星石にもよろしくね。後、金糸雀にも声をかけてきてくれ』

ピッ

さあ、どこからでも攻めてくるがいい。その時がお前たちの最後になるだろう。

主人公は、日頃の感謝の気持ちを込める。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ようやく、レイアに手を出してきた一人を片付けられました。残るはアホリエッタ、公爵、公爵夫人、ルイズ、サイトかな。綺麗に終わるように整理整頓をしていきます。

うーん、アホリエッタをどう始末しよう…

『蘇生ウェールズの手によって始末』

『某海賊王と同じく公開処刑』

等を考えているのですが、何かアイデアありましたら頂けると幸いです。

次こそは、ガリアで量産機とご対面させるつもりです。
(当たらない、次話予告で申し訳ありません)

主人公は、新しいおもちゃを手に入れる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回、やっと量産機とご対面です。

といっても、活躍の場はまだまだ先ですが^^

主人公は、新しいおもちゃを手に入れる。

ガリアのヨルムンガルド…もとい、エヴァ量産機製造工場に来ているレイアです。

ここに着いてからというものの、胸の高鳴りが止まりません。まさか、ゼロ魔の世界でエヴァに乗る事が出来るなんて予想していなかったからね。やっぱり、男の子は巨大ロボットに乗って悪を滅ぼす！！といった、ストーリーに憧れますもんね。当然、私もその一人だ。

さあ、この分厚い扉に向こう側には私の夢とロマンが詰まった兵器が待っている。

ボタン！！

扉を押し開けた。

そこには、純白の美しい装甲とサンシヨウウオ見たいな口を持った巨人がいた。

す、素晴らしい！！

何処からどう見ても、エヴァンゲリオン量産機だ。まじで、パーフェクトすぎる。しかも、一体だけでなくこの短期間で六体も作るとは、本当にチートすぎるよ。

だが…一つだけ言わせてもらおう。

「ビダーシャル！！　なぜ…なぜ、仕様書通りのサイズで作ってく

れたんかったんだ!!」

私は、現場で指示を出しているビダーシャルに詰め寄った。

酷いよ…酷過ぎる。仕様書には、ちゃんと200mと記述しておいたのにビダーシャルによつて作られた量産機は目測で50m程だ。確かに、50mといえば小さいサイズではない…だけど、私はエヴァに乗って山を飛び越えるシーンをやってみたかったですよ!!

「このエコの時代に、そんな無駄にデカイ物を作れるはずないだろう」

エコか…なら仕方な……くないよ!!

いつから、そんな環境に優しいエルフになったのだよ。そもそもエコを謳うなら、毎年やっているエルフの野球もどきをやめる方が遥かに環境に優しいよ。あのせいでどれだけ砂漠化が進んでいると思っっているんだよ。

「っ…やはり、私が監督しておくべきだった。念の為、確認しておくが他は仕様通りなのだろうね?」

「ああ、問題ない。……あっ」

「まだ、あるのか!?!?」

一体、どんな魔改造をしてくれたんだ。せめて、取り返しのつかない改造だけはやめてほしい。もっとも、人に丸投げしておいて言える事でもないがね。

「なーに、たいした事じゃない。レイアの仕様書では、汎用人型兵器となっていたから、少しばかり手を加えておいた。具体的には、人が搭乗せずとも動かせるようにしておいた。乗れる人を選ぶなんてナンセンスな兵器など、汎用ではないからな。あー安心しろ、レイアの仕様書の中には臨場感を味わう為にダメージ等のフィードバック機能が欲しいとあったから、それ機能は搭載されている。正直、汎用性という観点から考えるに、無くそうと思っていたのだがな」

・
・
・

て、手遅れだ。

乗れないエヴァなんて…ただのオブジェクトだ。だが興味本位で聞いてみよ。

「ちなみに、どうやって動かすんだ？」

「最近、エルフのとある集落で開発された新技術を使っている。なんでも、そこにあるスーツを着る事で、操縦者の動作を1/1000秒以下の誤差で正確に模倣して動くと同時に、五感全てを……」

・
・
・

数分後。

話を聞いてみると、トリのG T Oの丸パクリ技術じゃねーかよ。しかも、開発に至った経由を聞いてみると、引きこもりがちなエルフに外の世界の素晴らしさを知ってほしいという理由みたいだ。エルフの中でも、引きこもりは社会問題になっていたのか…まあ、P Cとかも出回っているし、そうなるのも仕方ないか。

ちなみに集落の名前を聞いてみたら『美食會』だった。もう駄目ぽ。だが、そんな話など今の私にはどうでもいい。とりあえず…

「ビダーシャル…全部とは言わん。せめて、私が乗る分だけでも元の仕様通り作り直すぞ!!」

「折角、最新技術を盛り込んで作ったのに何が気に食わなかったのだ…だが、明後日にはジョゼフがお披露目をやると言っていたぞ。テストも兼ねると時間的余裕はあまりないぞ」

時間が無ければ作ればいいだけだ。

「ビダーシャル、ザメクでゼロ時間を展開するんだ!! あそこなら、時間の事など関係ない」

「そういう事か。アレをやると疲れるのだが…仕方ない」

流石ビダーシャルだ。話が早くて助かるわ。

今度の戦争が終わったら、ぜひうちの領地に招待し、薔薇族総出でお礼をさせていただきます。

翌日。

もっとも、翌日と言ってもゼロ時間の中で三日過ごした為 実質四日目だ。作り直すのに思った以上に時間が掛ってしまったよ。

そして、待ちに待った初のテスト開始だ！！

この日の為に、ゼロ時間の中でせつせと休憩時間の合間にプラグスーツもどきを作ったのだよ。

『お父様、準備は大丈夫かしら？』

『レイアさん、頑張ってください』

エントリープラグ内に居る私に、ディスプレイ越しで水銀燈とティファニアが話しかけてきた。

『ああ、任せておいてくれ』

さあ、いつでも始めてくれ。

『じゃあ、お父様。これからLCLを注入するわね』

ゴボゴボゴボ

足元から真っ黒な液体が湧き出してきた。あっという間に、プラグ内が液体で満たされた。

『なんだが、血…ブハアツ！！ いや……気のせいだよ。なんか醤油の味がするのだが』

『当然よ！！ 私原液100%だもの』

ブツ!!

思わず嘔き出した。

肺を満たすんやなくて、胃を満たしてどうするんだよ。確かに、あの意味生命の源ともいえるかもしれないけどさ…何か違うよね。絶対に間違っているよね。

後さ、原液100%が醤油と言う事は 水の精霊はとうとう辞めたのね…

『出して!! ここから出してよ!!』

このままじゃ、冗談無しで醤油漬けだよ。プラグスーツを着ているから体はいいとしても、顔と髪がしょうゆ風味になっていちゃうよ。おまけに、こんな濃い醤油で胃が満たされたら、成人病まっしぐらだよ。

『いいなー、レイアさんだけ。私も乗ってみたいな』

ティファニアが苦しむ私を見て、涎を垂らしている。

次からは、先にティファニアを乗せようと決意したレイアであった。

S i d e ア リ エ ッ タ

正式にロマリアとトリステインで連合軍を作り、ガリアに対抗する事になりましたわ。だけど、当面の問題は軍備に掛かるお金をどうしましょう。

「何か良い案は、ありませんか？アニエス」

「やはり、ゲルマニアにお金を借りるのが一番良いかと…」

既に各国には限界まで借金をしているとマザリーニ枢機卿が仰っていたから、これ以上は何処も貸してはくれないでしょう。おまけに戦争の影響もあって税収が芳しくないと報告も受けました。

それにしても、私が率先して儉約な生活を送っているというのに、一部の貴族は大層金回りがよく豪遊していると聞くわ。特に、私からウエールズ皇太子を奪った憎きヴェーグル家がここ数年でハルケギニアでも5指に入る程のお金持ちになったと聞いたわ。

・
・
・

そうだわ！！

「この度の聖戦における戦費を賄う方法が浮かんだわ」

「それは、すばらしい。早速、トリステインに使者を出しましょう」

ヴェーグル家の嫡男：ウエールズ皇太子の仇は、確かガリアの爵位

を拝命した。という事は、今回の聖戦における敵国の者である。敵国の人間から財産を奪ったとしても問題などあるはずも無い。むしろ、敵の戦力を削ぐ有効な作戦ともいえましよう。

「すぐに紙とペンを用意してちょうだい」

「ただいま」

アニエスが部屋を退出していった。

噂では、エルフが一人住んでいるとの情報もあるので、念の為ヴァリエール公爵家にも手紙を出しておきましょう。もし、ヴェーゲル家から財産を没収できれば、褒美としてその何割かを差し上げても良いでしょう。

アリエッタの手紙が、数えきれない程の死者を生む事になるとは露ほども思っていなかったのである。

主人公は、新しいおもちゃを手に入れる。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

エルフの技術力な日進月歩です…もはや、地球の技術レベルを遥かに上回りました。そのおかげでエヴァも無事に開発完了しました。

次回は…考え中です。

主人公は、押し負ける。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

皆さまからの感想、いつも嬉しい限りです。

改めてこの場でお礼申し上げます。

ありがとうございます!!

実は…作者の中で、主人公とルイズ一行とヴェリエール&実家の時間軸が

こんがらがっており…おかしかったらすみません。生あったかい目で見てやってください。

今回は、量産機でも模擬戦とサイトの話をちよこつと書きました。

主人公は、押し負ける。

もう醤油漬けは勘弁して欲しいレイアです。

と…冗談はさて置き。今は、ジヨゼフ王が私のエヴァンゲリオン量産機を披露する為にコロシウムに来ております。そして、私の目の前には三体のゴーレムが立ち塞がっている。しかも、どいつもこいつも相当の使い手の様だ。ゴーレムをあそこまで器用に扱うなど、普通ではない。恐らく、ガリア屈指の土のスクエアと言ったところだろう。

「全て潰して構わん。ヨルムンガルドの力を見せつける」

『本気を出すと…コロシウム崩壊するかもしれないが構わないのか？』

念の為、確認しておかないとね。後から、修理代とか請求された日には目も当てられないね。さて…初の対人戦だ。せめて1分程度は、凌いでくれよ。

「構わぬ」

『では、ジヨゼフ王の許しも出たところで、西百合騎士団の皆さん…一分間だけ何もしないで上げましょう。その間に私を倒しきれたら貴方達の勝ちでいいですよ』

「なめるなよ…！」

「そのサイズじゃあ、ただの的だぜ」

この程度の余興くらいは、構わないだろう。

どうせ、傷一つ付ける事は叶わないだろうしね。なんせ、アーハンブラ城から回収したデルフを量産し、装甲として使っているから魔法で傷を付ける事は、まず無理だろうし、物理攻撃に至ってもビダールシャルが遊び半分でカウンターを付加してくれた。そのせいで、地球の科学力をもってしても傷つけるのは容易ではないだろう。

ちなみに私専用機の稼働時間は、無い！！なぜなら、指輪を介してティファニアの精神力を動力源にしている事もあるが…ラミエルのコアと発電力、そして私の心臓に埋め込まれているコアの力を使えばエヴァの一体や二体程度動かすのに十分なエネルギーを確保できるのだ。

それにしても…先ほどから大砲での砲撃や体当たりなどをしてくるが、震動すら来ない。まあ、量産機のサイズは相手の倍以上あるから仕方ないけどね。

そろそろ時間だ…

私は、片足を大きく振り上げた。

『君達は強い。だけど、私とこの子の方が何倍も強かったただけだから気に病む必要はない』

足元で体当たりを繰り返していたゴーレムに踵落としを食らわせた。

ドーーーーーン

けたたましい音と共に西百合騎士団のゴーレムが消滅した。地面に

はその威力を表すかのように地表が抉れている。自慢のゴーレムをこつと簡単に殺されてしまった事にシヨックを受けたのか相手は啞然としている。

まずは一体。

やはり、大人と子供程の体格差があると勝負にもならない…。まあ、量産機の強さを披露するんだし構わないか。では、量産機の破壊力を見せた事だし次は運動能力と武装を披露しましょう。

私は、量産機用に用意された大型の両刃刀を手に持った。この武器も当然、量産機の装甲と同じく魔法を吸収し動力へと変換する。切れ味についても、申し分ない。

『早く、ゴーレムを作り直さないと全滅しちゃうぞ』

煽るだけ煽って、私は量産機のパフォーマンスを見せるべく行動を開始した。

・
・
・

数分後。

「あまりにも一方的すぎるな…シエフィールド」

「はっ！！」

何やらシヨゼフがシエフィールドに指示を出しているのが見えた。

まあ、ちょうど良い。既に、西百合騎士団は全員が精神力不足でダ

ウンしているのだからね。結局、何度もゴーレムを作り直す、量産機によって瞬く間に蹂躪されていった。コロシウムでは、あちこちにゴーレムの残骸が散っている。

「どつやら、ただのゴーレム程度では役目不足の様だな…」

ジヨゼフが何やらやりたい事があるようだから待つてあげよう。

数分後。

ドーン

空から羽の生えた巨人が一人舞い降りてきた。

その姿は、私の搭乗する量産機と同じタイプの物だ…要するに、遠隔操作タイプでは無くエントリープラグを用いて操作する本物のエヴァだ。

ちっ!!

一体どういう事だ。人間がこの手の物を開発できるはずも無いし…
仮にできたとしても時間的に不可能だ。と言う事は…答えは簡単だ。

『ビダーシャル…どういう事だ これは!!??』

ディスプレイを通じてビダーシャルに文句を言った。

マジで不味いにも程がある…さっきまでの相手と違い今回の相手は明らかに格上!!しかも、私と同じく稼働時間が無限ときた。

『ああ・・・先ほど、シエフィールドというやつが来て レイアと模擬戦をする様に頼んでいたよ。なんでも、ガリア王宮の食堂フリーパス券（無期限）で引き受けたそうだ』

流石は、シエフィールドだ。マジックアイテムの使い方だけでなく、ティファニアの使い方まで理解しているとは恐れ入った。というか、ビダーシャルと水銀燈、それに真紅まで居るのになんてお前等止めたいんだよ！！絶対に面白そうだからとかそんな理由でとめなかつたんだらう。

『すごいですね レイアさん。思った通りに動くなんて・・・でも、醤油味じゃなくてちよつと残念です』

『ははははは！！ 塩分の取りすぎは、体に良くないよ ティファニア』

翼を折りたたみ、ストレッチをしている向かいの量産機に話かけた。それにしても、テスト型のプラグスーツは、ちよつと反則じゃないかな・・・色々な意味で。そんな恰好を誰かに見せるなんて許しませんよ。

『それで、ビダーシャル。なんで私と同じタイプのエヴァがもう一機あるのだ？』

『ああ、その事だがティファニアもレイアと同じ物が欲しいと希望していたからな。レイアに内緒で改造しておいた。なーに、一体改造するのも二体改造するのも対して手間は大差ないからな。感謝しなくていいぞ』

ちよおまw

ビダーシャルは、さらりと云ってくれるが…私は正直どうすればいいか困るよ。ティファニアはノリノリで両刃刀を新体操のバトンの如く振り回している。常日頃の運動神経が嘘みたいのように感じられる。

とりあえず、ティファニアと模擬戦をする事は避けて通れないだろう。ダメージのフィードバック機能を全面カットしておこう。ついでに、ティファニアの方のエヴァのフィードバック機能もビダーシャルにカットするように伝えておいた。

それにしても、ティファニアに何ておもちゃを与えるのだ…恨むぞビダーシャル。

『後で、ティファニアのフルコースをご馳走してやるからな…』

『全力で拒否する!! まあ、カタログスペックは同じだ…うまくいけば取り押さえられるだろう』

いやいや、カタログスペックが同じと言う事は扱う人間次第と言う事にじゃないか!! どう考えても私が詰んでいるだろう。

『ビダーシャル、念の為に聞いておくが…自分が手塩を掛けたおもちゃの性能を見たい為に、ティファニアを止めなかったとかないな…』

・
・
・

…あ！

今、眼をそらしたぞ

『し、仕方なかったんだ。作品の出来を見るには、並みの人間じゃ役不足だったのだ。私が悪いわけじゃない…人間が使い物にならないからいけないんだよ！』

なんて、自己中！！

もしも、私が死んだら化けて出てやるからな！！

『いつきますよ レイアさん。大丈夫ですよ、怪我をしても『無かつた事』にしてあげますから』

『くっそおおー！！ こうなりや、こっちもやけた』

ティファニアが操る量産機と私の量産機との模擬戦が始まった。

ガガーン

ガーン

お互いの両刃刀がぶつかりあい、火花が飛び散る。打ち合いの衝撃でお互いバランスを崩すがすぐさま持ち直し再び刃を交えた。最初は互角に思えた勝負だが…数手打ち合うと少しずつだが、私の方が押され始めた。

それもそのはず…お互い同じようにただ刃をぶつけていたかのように見えるが実は違ったのだ。ティファニアの斬撃は、先端を地面に

突き刺して威力の溜めを行っていたのだ。戦闘の最中その事に気づく事は、レイアにはできなかった。

『楽しいですね レイアさん』

『それは良かった。これを機に、ティファニアも毎朝一緒に体を鍛えてみるかい？』

『うーん、朝は眠たいのでやめておきます』

『はっはっは、そういうと思ったよ』

そして、私の両刃刀がついにティファニアの刃によって明後日の方向へ飛ばされた。

ズシューーン

おいおい、ティファニアって戦闘キャラじゃないだろう…なんでこんなに強いんだよ。もしかして、よくある漫画の主人公みたいに戦いの中でどんどん強くなっていくという主人公補正でもあるというのか？

だが、私にも男としての…いや、夫としてのプライドがある…！同じスペックの物を扱って負けるなどあってたまるかあ…！

ティファニアのエヴァを拘束し、プラグを強制排出させるしか手はなさそうだな…だが、問題は、あの両刃刀の猛攻をどう防ぐかだ。普通にやっては、無傷で取り押さえるなど夢のまた夢だな。

『やったあ…！ これでレイアさんは武器無しです。早く降参して

ください。今なら晩御飯のメインディッシュ一つでいいですよ』

おかずじゃなくメインディッシュとききましたか…。

『ティファニア残念だけど・・・男の子には、意地という物があるのです。だから、この勝負は負けられないよ』

好きな女の子の前で力でねじ伏せられるなんて、男としての矜持が許さん。しかも、ねじ伏せるのが好きな女の子ならなおさらだ。

エルフがなんぼのもんじゃい！！

私は、ティファニア目がけて突進した。はたから見たら無謀は突進だろう。しかし、我に策有！！そして、対するティファニアは、何を考えたのか地面に両刃刀を深く突き刺し、まるで杖を突いたような構えをしている。一体、その体制からどんな技が繰り出されるかは知らないが…私の勝ちだよ。

だけど、あの構えは前世で見た事がある。剣術漫画だったと思うが詳細は思い出せんな。

『これで、晩御飯は私に物です。えい！！』

『A・Tフィールド全開！！』

ドゴオーーーン

ティファニアの斬撃は恐ろしい程早かったが…A・Tフィールドによって遮られてその巨体ごとコロシム場外に吹き飛ばされた。いやー、まずかった…A・Tフィールドを使わなかったら左右に真つ

二つになっていただろう。

『きゆう〜』

ティファニアがプラグ内でのびているのを確認し、プラグを強制排出した。

それにしても、同型機を使って押し負けるとはな…ちょっとシヨックだったよ。いや、かなりシヨックだ。これが、ビダーシャルやアミバなら納得いくが相手は、運動とは無縁のティファニアだぞ…全く、エルフの性能は化け物か！！

30分後。

ティファニアが目を覚ました後に私が使徒の力を使った事がばれて結局メインディッシュを持ってかれる事になりました（涙）。その際にティファニアのさりげなく例の構えや剣技について聞いてみたら、なんでもアミバから貰った本を見て実践に使ったようだ。

ティファニアが私に『今日から貴方も虎眼流（入門編） 著者：ゲンノスケ&セイゲン』という本を私に見せてくれた…おいしいiiiiiiii！！

「なあビダーシャル。たまに…いや、いつも思っただけどさエルフってスゲーな」

「何をいまさら…当たり前だろエルフなんだから」

ああ、そうでしたね。

聞いた私が馬鹿だったよ。

ジリリリーンジリリリーン

ため息を着いていると電話が鳴った。

『またまた、久しぶりだなミスタ・ヴェーグル』

『いえ、この間もお電話したと思いますが…それで、とうとう王女殿下かヴァリエール三女辺りが何かしでかしましたか？』

『その通りだ。実は、たった今 王女殿下より手紙が届いてた。簡単に言くと、ヴェーグル家の財産を今回の戦費に当てるから没収してこいとの事だ。しかも、その徴収役がヴァリエール公爵家だ』

そりゃ…随分といきな計らいをしてきれますね。

『わかりました、こちらで対処致します。一つ確認しておきたいのですが…公爵家が一つ位なくなっても問題ないですよ？』

『好きにして構わん』

GJだ マザリーニ枢機卿。

もつとも、駄目と言われても売られた喧嘩は買いますけどね。

「というわけで水銀燈、真紅 二人は実家に帰って守備の方をお願いね。『薔薇族』の連中にも応援を頼んであるから、協力して撃退してくれ…」

くっそー！

やっぱり、あのゲス野郎にこんな面にされたせいで飯が食べにくい。それに、ギーシュを含む周りの連中もタバサ救出以来なぜか距離を感じる。俺とルイズが居たから無事に救出する事に成功したのに…。

やはり、あいつ等にも惚れ薬を…いや、男に何て使っても意味はねーな。それに、残り少ない薬はもっと大事に使わないといけねー。そう、例えば…あのゲス野郎が連れている嫁や娘とか言っやつらにな。そうすれば、あのゲス野郎も少しは堪えるだろう。

ぎゃっははははは

学院では、衣食住をほぼゲス野郎と一緒に過ごしていた為、隙が無かったが。この戦争が終わってから卒業までの間に計画を立てて狙えばいいぞ。

「ああ、サイト調子はどうだい？もうすぐロマリアに着くから準備しておいてくれよ」

「ああ」

ギーシュがそういうとすぐに立ち去って行った。

学院を出発して十日目にして、ようやく到着か…。全く、さて、ロマリアに到着するまでもう一人女を確保しておくかな。万が一に備えて惚れ薬を作れる人材を確保しておくのも悪くはないだろう。

「おっと…」

急に足が滑ってシエスタをベッドに押し倒してしまった。まあ事故だから仕方ない。

「きゃっ？もう、サイトさんだったら…駄目ですよ。こんな時間からルイズと違っていい体していやがるな。」

それに、金も程ほどに持っていて本当に役に立つ女だ。夏休みにはこいつに貯金を全額使って、カジノでボロ儲けさせてもらったからな。そのお礼に、惚れ薬入りの上等なワインをご馳走してやった。それ以来、もう俺に懐いて仕方ないぜ。

「ジエズダ…ずまないが、モンモランシーをづれできでくれないが（シエスタ…すまないが、モンモランシーを連れてきてくれないか？）」

「はい！！すぐに呼んでまいります」

ああ、そうしてくれ。ギーシュが戻ってくる前にカタをつけたいからな。

ロマリアに着いてからモンモランシーの様子が少しおかしい事にギーシュは疑問に思ったが…女心は秋の空とも言つ事だしあまり気にする事はなかった。

主人公は、押し負ける。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

そろそろ、両親、薔薇族、ヴァリエールを登場させようかなと思います。ついでに、実家編で薔薇乙女を全員領地に集合させようと思います。

主人公の父は、領地を守る（前編）（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は、本当に久しぶりの主人公の父のお話です。

領地戦と言う事もあり、ガリアにいるレイアでは話が難しいと思っ
たので…

主人公の父は、領地を守る（前編）

S i d e レイリー（主人公の父）

いつか、こうなるのではないかと思っていた。

しかし、ヴァリエールだけでなく、王家まで我が家を潰しに来るとは正直予想外であった。一体、我が家に何の恨みがあってそのような事をするのか見当もつかない。

エルフとの貿易やヴァリエール家との取引で得た利益もすっかりと計算し、国の法律に乗っ取った税を毎年収めていた。私が言うのもなんだが…収めていた税額は、侯爵家並といっても過言ではない。それに、レイアが魔法学院の二年生になった頃からは、息子が国の為にマザリーニの元で様々な無理難題を解決していたはずだ。

そのおかげで、今や大公ガリアの伯爵だからな…本当によくできた息子だ。ただ…目的の為に、手段を選ばない所が少しばかりの欠点だ。

「ヴァリエールが派閥の者達を連れて攻めてくるか。しかも、目的は我が家の…いや、レイアがしたたま溜めこんだ財産が目当てか。堕ちたモノだな　王家も公爵家も」

「ええ、そうね。だけど…事は急を要するわ。急いで領民たちをここに避難させましょう。ここは、世界の何処よりも安全だわ」

「うーん、それについては未だに微妙な気がする。」

確かに、ヴァリエールの進軍の際に村に人が残っていれば間違いないく殺されるだろう。だが、ここに避難してくれば生の危険は無いが、別の意味での性の危険にさらされる気がしてならない。

対面に座るエルフ：『薔薇族』統領アーベを見た。

ゾフリ！！

背筋が凍りつき、尻の穴が引き締まった。昔の女性関係がアリアにばれて、折檻を受けた時以上の恐怖を感じた。

く、喰われる！！

「どうしました。ヴェーグル男爵、気分が悪いようですね…ご安心ください。私が二人つきりで手とり足とり介抱してしんぜよう」

・
・
・

レイアよ…すまぬ。冗談半分で、『薔薇族』副統領に推薦する同意書にサインをしまして…すまぬ。

「はいはい、アーベ殿もあんまり夫をからかわないでください。話を戻しますよ…『薔薇族』の方には、各村と他領地との境の防衛をお願い致します。どこから攻められるか分からない以上、ある程度戦力は分散しておきます。もし、敵が侵入して来た際は雛苺にすぐに連絡させますので皆さん携帯はしっかりと持っておいてください」

私が、心の中でレイアに謝っているとアリアが代弁してくれた。

その作戦が無難であろう。『薔薇族』の統領含めて領地に来ていた
だいた方達を見たが…誰もが圧倒的強者である事が見ただけで分か
った。レイアが用意した指輪のお蔭で各系統魔法をスクエアクラス
まで使えるようになった今でさえ、彼らには傷一つ付ける事は叶わ
ないだろう。

「レイアとレイアのご両親の頼みだ。我々、『薔薇族』が責任を持
って貴方達の領地を守らせてもらおう。それにしても…なぜこんな
回りくどい事をするのだ？ レイアもその気になれば国の一つや二
つついつでも落とせるのにな…」

「理由は、分からぬが…レイアにはレイアの考えがるのだろう」

正直、私にもそれは分からない。レイアの持っている特殊な力を使
えば、例え国家を相手にしても勝てるだろう。だが、それを今まで
しなかったのには、きっと息子なりの理由があると私は思っている。
多分、くだらない理由だろうがな。

「我々『薔薇族』は、配置に着いて敵の進軍を待つとしましょう」
対面に座っていたエルフが立ち上がった。

立ち去られる前に言わねばならぬ…！！

「アーベ殿：我々、人間の争いごとにエルフの方達を巻き込んでし
まい申し訳ない」
「申し訳ありません」

本来なら、私達だけで片をつけるべきなのだ。それを、息子がエル

フの副統領だからといって甘えてしまった我々の不甲斐なさ…言い訳のしようがない。

「気にする事でもないさ…敵兵の処遇は我々に一任してもらっても良いだろうか？」

「ああ、問題ない。好きにしてくれて構わない」

この時私は、身の安全が確保できた事と敵兵の悲惨な末路を想像して何とも言えない気分であった。

私とアリアは、さっそく領民の避難と食料などの手配を始めた。先日、我が家で雇い始めた元マザリーニの部下達が存外優秀でありがたいかぎりだ。

「では、娘達にも手伝ってもらおうとしよう。すまないが、よろしく頼むよ」

私は、実家に集まった娘達に声をかけた。

「たかが、人間ごときに私達が負けるはずないわ。そうでしょう、おじい様」

「同感ね…それよりも紅茶あじさいが切れたわ」

「全く、仕方ないから手伝ってやるですっ」

「僕まで居る必要あったのかな…なんだか過剰戦力な気がするけど…」

「ローゼンメイデンの頭脳は、カナリアにお任せかしら？」

「雛もがんばるの〜」

ヴァリエールよ…我が領地に一步でも踏み入れた時が貴方達の最後となるでしょう。

Side ヴァリエール公爵

「ようやくだ、ようやく私に逆らったあのクズな家系に終止符を打つことができる」

王家もたまには、粹な計らいをしてくる。公行方不明になったエレオノールの弔い合戦を公然と出来るのだからな。

「ええ、そうね。既に参加の家には、兵を出すように指示しておきました。順調に集まれば凡そ1万5千人程になるでしょう。例えば相手にエルフが居ようと、時間稼ぎ程度にはなるでしょう。私達は、その間にヴェーグル家の者達を始末して家に蓄えている財産を根こそぎ奪えばいいのです。例えば、相手が財産を差し出してこようが、その場で始末してしまえばどうともなりません」

「男爵か男爵夫人は、生かしておくのだ。人質とカトレアを完治させる為の材料として使える。事が終わってから始末すればよい」

気持ちは分かるが…皆殺しにするのはまだ早い。薬の成分を変えら

れた事とエレオノールが行方不明…いや、殺害された為、研究していたカトレアの鎮静剤の一件が全て水の泡になったのだ。

だから、カトレアの治療を終えさせたくて人質を盾にあの餓鬼には、死んでもらおう。あの者が身内に甘いのは、調査済みだ。恐らく、親の命を盾にあの小僧には、エルフの撤退と自害を命じれば確実に応じるだろう。

それに、今回は切り札があるのだからな。

「カリヌ、例の人形は何体集まった？」

「約30体…まだ、各方面の商人に手持ちがないか問い合わせさせているわ」

30か…恐らく、増えても後数体だろう。

だが、それだけいけば十分だ。

幾らエルフと言えど、トリステイン最強と謳われた風使いを複数人は同時に抑えられまい。誰か一人でも、男爵か男爵夫人を抑えれば我々の勝ちなのだから…。

二日後にヴァリエールは傘下の貴族と共にヴェーグル領に進軍を開始した。この時、ヴェーグル領では領民の避難を終えて、各地のエルフが待機している事を公爵家は知るすべもなかった。

S i d e カトレア

「やはり、こうなってしまうのですねお父様」

ヴェーグル家に進軍するにあたり、私を通じて侯爵である夫に兵を出すように要請するなんて間違っているわ。それにお父様達は、あのヴェーグル家を甘く見過ぎだわ…人間？であるレイアさん一人にも勝てないのにどうやって領地を落とすというのです。彼も人の子ですから、もしかしたらスキを突けるかもしれませんが、エルフの方をどうやって抑えるつもりなんでしょう。

私は、過去に二人のエルフの方に会いましたが、二人とも人では及びつかない程の力を持っていると感じました。私が幼い時にあったビダーシャルさん。そして、レイアさんが連れていたティファニアさん…もつとも、彼女はフェイスチェンジのマジックアイテムで変装をしていましたが、雰囲気はビダーシャルさんに似ていたので恐らく間違いないでしょう。

「ヴァリエール公爵からの手紙には、何て書いてあるのだい？」

この手紙の内容を見せてしまえば、恐らく彼も出兵するだろう。だから、私に出来る事は、一つしかない。

「いいえ、ただ早く孫が見たいと…」

「その点は僕も同意だな。もう、一人の体じゃ無いのだから無理はしないでくれよ」

ごめんなさいお父様。

親不孝者と呪われても構いません。

「ええ、分かっているわ」

これから、生まれて来る子供に父親が居ない不幸を味わわせる事はできません。事が終わり次第、夫を連れてヴェーグル家に謝罪に行きましょう。せめて、子供が生まれるまでは鎮静剤を提供していただけるように、お願いをしなければなりません。その際に、彼が私の命を望むのであれば、子供を産んだ後に喜んで差し出しましょう。そのくらいの事を私の両親がしたのですから…。

主人公の父は、領地を守る（前編）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

これから1・2話程度はヴァリエール戦をやるつもりです。

主人公の父は、領地を守る（後編）（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

回収版と言うより…追記版です。

すこしだけ戦闘を追加しました。いやー、やっぱり戦闘シーンは難しい。

今回は、前回に引き続き主人公の父親 *side* のお話です。

さて…そろそろヴァリエールに引導をお渡ししましょう。

主人公の父は、領地を守る（後編）

Side 主人公の父^{レイジー}

「領地の北側から敵がいつぱい来たの〜」

雛苺が私室で待機している私、アリア、アミバ殿に敵の情報を教えてくれた。それから、数秒後に準備しておいたノートPC内の領地3Dマップに敵勢力が赤い点で表示された。なんでも、雛苺とレイアのゼルエルネットワークという物とノートPCとが三つが連携して表示しているらしい。詳しい原理は、聞いたところで理解できないが…敵の行動が手に取るように分かる。

「それにしても、男爵家を潰すのにここまでの数を集めて来るとはね…。公爵家もそうとうおかんむりと言う事かしら？」

「そうだろうな アリア。まあ、私に言わせてもらえば、公爵うんぬんより、それに従わらせられている兵士達が可愛そうでならないよ…（主に性的な意味で）」

きつと、攻め込んでくる兵士の大半は男だろう…。本来ならば、肉体面で女性より力がある男性の方が戦場では役立つだろう。しかし、今回ばかりはそれが裏目に出ること間違いなしだ。

「くつくつく、私一人の時に攻め込んで来れば方に一つ位は勝てたかもしれないが…『薔薇族』の連中が来た以上、奴らには敗北しかないな。私の出番は、なさそうだから工房に居るとしよう。何かあればすぐに駆けつけよう」

そう言つて、アミバ殿は部屋を出て行つた。

アミバ殿一人いれば、ヴァリエールが例え今の10倍の戦力で来ても瞬く間に殲滅できるだろう。アーベ殿といいアミバ殿といい…エルフの強さには本当に脱帽する。

「では、私達のそろそろ準備をしていきますわよ」

「ああ、そうだな。自分の領地を守るのに他人の力を借りっぱなしも良くないからな」

敵の大将…公爵と公爵夫人位は、せめて我々の手で始末を付けねばなるまい。それが、領主の務めだ。例え、相手がトリスティン屈指のメイジとタイマンを張つたとしても、私達の勝利は揺るがないだろう。なぜなら、全系統 スクウェアだけでなく、アミバ殿にお願ひして私とアリアの身体能力を通常の数倍にまで引き上げてもらったのだから…。

バキバキ

アリアが部屋を出ようとした時、何やら嫌な音がした…

「あら…最近のドアノブは、随分と脆いのね。後で交換しなくちゃ」

ドアノブが根元からねじ切られている。実に、恐ろしいパワーだ…あれが僕の大事な息子だつたらと思うと考えるだけでゾツとする。

S i d e e n d

Side とあるエルフ

「全く、人間というのはどうしてこう愚かなのでしょうか。相手の実力を正確に把握できないとは」

「そんな事は どうでもいい！！　なんで、『薔薇族』の性態を探る為に来た俺らがこんな戦に参加しなければならんのだ。それに、『薔薇族』の性態なんて調査して一体誰得だよ」

今更何を言い出すかと思えば…そんなの、うちの統領…いや団長の突拍子もない思いつきのせいに決まっているでしょう。

「誰も得しないんじゃないやありませんかね。今の私達の立場は『薔薇族』の一員なので、アーベ殿の命令を聞くのは至極当然。それともあなたは、アーベ殿やスズミヤさんの意向を無視できると？　正直、私はどちらもごめんです…命が幾らあっても足りませんから」

「そんなの俺だって御免だ。特に前者なんて明らかに死亡フラグだろ…あゝもう、分かったよ。適当にやればいんだろ。それにしても、なんで『薔薇族』なんだよ…他にも色々見るべき集落はあるだろう」

なんで『薔薇族』がですが…それは、僕の前身が『薔薇族』だった事をスズミヤさんに漏らしてしまったせいだとは口が裂けても言えませんね。

「はい。ですが、あまりやりすぎないで下さいよ。男性の数が減りすぎると、標的が我々になりかねませんから…」

「大丈夫だ。その時はコイズミ…お前を餌にして俺だけ逃げる」

はっはっはっは、何をいいます。その時は仲良く道連れですよ

「まっがれー」

その瞬間、前方に居た人間の兵士たちの首がねじれ切れた。

Side end

Side ヴァリエール軍の一般兵

「くっそおおおお！！ 話がまるで違うぞ！！」

何がエルフは私達が引き受けるから、貴方達一般兵士は男爵と男爵夫人を抑えなさいだ！！ エルフが現れた瞬間、俺等兵士を置き去りに幻獣に乗ってどこかへ行きやがった。

と、とりあえず隠れてやり過ごすしかない。戦争が終わったら何食わぬ顔でこの領地を抜けて実家に帰ろう。

ちようど森の中に小屋？らしき建物が見えた。石造りのとても丈夫そうな建物だ。入り口にWCとか訳の分からない記号が書かれていたが、そんなものを気にしている暇はない。迫りくるエルフから逃げる為に個室に飛び込んだ。

それが罾とも知らずに…

「ふう…、食料は少ないが。何とか三日位は持ちそうだ。それまで、

ここに隠れてやり過ごそう」

自分が逃げる為に置いてきた仲間の安否は気になるが…恐らく、捕まっただろう。一体、あのエルフはなんだよ。見ただけで恐慌状態に陥った兵士が沢山いたぞ…かくいう、私も腰が抜けそうになっただが、指をへし折り気合で持ち直した。

「ようこそ、我が性地へ。歓迎するよ」

ふと気が付けば、狭い個室に一人濃い顔にひげ面のエルフが音もなく現れた。

・
・
・

こりゃ、勝てねーわ。

しばらくして、森中に「アッーーーーー!!」と言つ男性の悲鳴が響いた。

S i d e e n d

S i d e ヴァリエール公爵夫人

ヴェーグル家手前の広場にて。

「捨て駒達も存外 役に立ったわね」

「そうだな。私とカリーヌ達がここに来るまでの餌になったのだからな」

気がかりな事は、ここに住んでいるエルフは数名と聞いていたけど……道中であつたエルフの数は最低でも100人は居た。だが、その誰も私達では無く連れてきた兵士を襲い始めた。その訳の分からない行動のお蔭で私達は無傷でここまで来られたのだから良しとしよう。

相手にどのような策があつたにせよ。この私がすべてを打ち砕いて見せましよう。

「お話は終わつたかしら、ヴァリエール公爵と公爵夫人。お久しぶりと言うべきですかね」

「あなた方と話す事は何もありません。大人しく私達に捕まるならよし、そうでなければ腕の一本や二本は覚悟してもらいます」

幸い、近くにエルフは居ないようね。一体、どんな考えがあるかは知りませんが、エルフを傍に置いていなかったことを後悔しなさい。

「あああら、腕の一本や二本なんて甘いわね……私達は、あなた方を生きて返す気は全くありませんよ。ここまでの事をしたのです、命を持って償ってもらいます」

ブチッ

「こ、この私に向かつていい度胸ですね。貴方も聞いた事はあるでしょう。『烈風』の二つ名を持つ風のスクウェアを……それが私で

す。しかも、私と同じ能力を持ったスキルニルが35体：貴方達如きがどうあがいても勝ち目はありません。これは戦争です、卑怯とは言わせません」

さあ、青ざめた顔で跪きなさい。私に対して大口を叩いた事を…その耳を削ぐ程度で許してあげなくもありません。

「言いませんとも。では、その自信：へし折って差し上げましょう。貴方、30秒だけ二人を抑えてください」

「任せておきなさい。30秒とは言わず何分でも抑えて見せよう」

男爵が私達と一人で抑える？何の冗談ですか。確か、土のトライアングルのはず：私の一人いればお釣りがくる程度の存在だ。

その程度の実力しか持っていない奴が…いい気になるな！！

「……………偏在！！」「……………」

私とスキルニルが一齐に偏在を唱えた。さあ、絶望しなさい。私は最高で6体の偏在を出す事が出来るのです。要するに今この場には252人の私がいるのです。

「見事な偏在です。流石、トリステイン最強と謳われた『烈風』殿です。ならば、こちらも…偏在！！」

なっ！！

ば馬鹿な…風のスクウェアアスペルを土のトライアングル如きが詠唱を成功させるなど不可能だ。しかも、私ですら6体しか出せぬと

言うのに、男爵は私が出した総数に当たる252体の偏在を出している。

ふ、不可能だ。そんな人間一人の精神力を優に超えている。絶対にありえない！！

何か秘密があるのは、確かだろうが…今なそんな事を考えている時間はないさそうね。

「どんな手品かは知りませんが、本家本元との偏在と言つのを見せてあげましょう」

「お手柔らかに、『烈風』殿」

こうして、ヴェーグル家とヴァリエール家との衝突が始まった。

ヴァリエール公爵と公爵夫人相手にヴェーグル男爵は、見事な立ち回りを見せた。有り余る精神力を駆使して、スクウェアアスペルを連発する事で相手を翻弄し、またアミバによって強化された肉体で公爵夫人の偏在共を文字通り握りつぶしていった。

そして30秒後。

「これが、私の切り札です…【ディスプレイ】！！今です、貴方」

「わかっている」

男爵夫人が呪文を唱えた瞬間、私が出していた全ての偏在とスキルニルがただの人形へと戻された。そして、男爵が懐から赤い液体が

げ場など与えんよ。公爵夫妻へ数百近い土の砲弾が襲い掛かった。

「カリーヌ!!!」

「わかっていきます!!! カッター・トルネード!!!」

ゴオオオオオオ---

やはり、腐っても伝説にまでなった風のメイジだ。

アリアの【デイスペル】により、スキルニルをこちらに手中に収めたものの、まだ抵抗してくるとは…。本当なら、先ほどと同様に偏在を使い一気に押し切りたいのだが…。どうやら、そこまでの精神力はストックが無いようだ。いくら、公爵夫人を抑えるためとはいえ、少々偏在を出し過ぎたかな。

「お二人とも粘りますね…。ですが、その頼みの綱のカッター・トルネードも後何分持ちますかね」

そう、公爵夫人がブレッドの嵐を防ぐために自らの周辺にカッター・トルネードを展開しているのだ。流星は、城壁すら削り落とすと言われた威力だ…。迫りくるブレッドを全て撃ち落とすとは恐れ入る。

「私は、このままブレッドで二人をブレッドで削り落とす。アリアは、万が一に備えていてくれ…。腐ってもトリステイン屈指の使い手だ。何をしでかすか分からんぞ」

「ええ、分かったわ。でも、貴方も気を付けて…。公爵は夫人程 疲弊していないわ」

ああ、重々承知しているよ。

数分後。

「はあはあ…くっ」

まさか、本当に数分間もスクウェアスペルを維持し続けるとは…。
そして、ついに公爵夫人のカッター・トルネードが途絶えた。

その瞬間、無数のブレットが公爵と公爵夫妻へ襲い掛かる。

ドドドドド　　ン

土煙が舞った…

何ともあつけない最期だ。まさか、避けもせず全弾食らうとは1・2発程度ならば食らっても死ぬ事は無いだろうが、生憎と今回は桁が違う。マトモに食らって生き残れるはずが無い。

だが、念の為死体は確認しておこう。

私とアリアは、死体を確認すべく…公爵夫妻が居た地点まで近づいた。土煙の中に倒れている公爵夫人に覆いかぶさるように死んでいる。

さて…夫人の方は…

「エ…エア・カッター!!」

ヒュン

風を切る音が聞こえた。その瞬間、私の右腕が宙を舞った。

「がああああああああ！！」

「あなた！！」

よ、よもやあのブレッドの中を生き残ったというのか。まさか…地面に身を伏せて公爵を盾に使って生き残ったのか！！ いや…公爵が自ら夫人を守ったのか！？

完全に油断した。

「よくも、夫の腕をおおおおおお！消し飛びなさい」

アリアが周辺の空気を圧縮し、公爵夫人の顔面を殴りつけた。そして、圧縮空気を解放…

パーーーーン

夫人の頭部が綺麗さっぱり消し飛んだ。

そして、アリアが公爵の方を向き心臓に指差した。

「エア・スピアー……。こっちは、大丈夫のようね。早く、腕を持ってアミバさんのところに行きましょう。水銀燈ちゃんが戻ってくるまで痛いだろうけど少し我慢してね」

ああ、そうだな。

公爵の遺体は、腕を直してから回収しよう。

やはり、慢心は遺憾な…思わぬところで痛手を負ってしまったわ。

この時を持って、何世紀にも栄えた一つの大貴族が潰えた。

主人公の父は、領地を守る（後編）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

公爵があっけなくて申し訳ありません。

作者の技量では、やはり戦闘シーンとか難しい

今回で、父親sideが終わったので次回は、『薔薇族』…主にアーベsideのお話を書こうと思います。そして、以前ちよこつとお話した。【ゲイト・オブ・バビロン】ネタを使おうと思います。

アーベは、領地を守る。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は、アーベと薔薇乙女の出番です。

何を書こうか迷っていたこともあり

ポリューム不足は否めませんが…ご容赦ください。

アーベは、領地を守る。

Side アーベ

「これぞ、我ら『薔薇族』の戦場…いい香りだ」

血と漢達の汗と漢汁が混ざり合った匂いが風に乗って流れてきた。この噎せ返る様な匂いがたまらない。

ああ…やっぱり、レイアを副統領に迎えて良かった。最近は、人間との争い事も無く退屈していたのだよ。それに、幾らミチシタが居るからと言ってもやはり、同じ相手ばかりでは少なからず飽きる。

本当なら副統領の就任祝いで、是が非でもレイアを食べてこっち側へ引き込もうとしたのだが…残念ながら結婚してしまった為 断念した。

もっと、早く手を付けておけば良かったな。

「まったく、冗談じゃないですう。こんな鼻が曲がるような匂いのする場所に居たら妊娠するですう」

・
・
・

そうか、あの変態レイアが作った人形だ。そのような機能があったとしてもおかしくない。いや、寧ろ…子供を産む機能が無い事自体有りえない。

「立派な男の子を生むんだぞ！！ 翠星石」

何やら、翠星石が肩を震わしている。

「な、何を言っているやがるんですう。そんなの言葉の綾に決まっているですう。いい加減にしないと、その腐った脳ミソがち割って洗淨してやるですう」

「相変わらず仲がいいね。いい加減 僕の方を手伝ってくれないかな…流石に取りこぼしちゃうよ」

おっと、それは勿体ない。

折角の収穫の際だというのに、一人たりとも逃がさない。

「うほw 相変わらずいい切れ味…」

恐慌状態に陥った人間兵士たちの足の筋を綺麗に切断してくれていた。また、腕を上げたな…以前なら足ごと切断していただろう。たった一人で、数百の人間を殺さずに戦闘不能にする手際、素晴らしい。

「その切れ味のいい鋏で傷一つ付かないエルフに脱帽するよ。誰かのセリフを真似するわけじゃないけど…色々とおかしいでしょ 常識的に考えて」

あの程度の切れ味で傷がつくようなら統領などやっくらんよ。

蒼星石の庭師の鋏は、高周波ブレードです。

さてさて、そろそろ『薔薇族』諸君も宴を始めたようだし、私も始めようとしてよう。日だしぶりの事だし…少々本気を出させてもらおう

う。

旨そうな獲物たちを前に心が躍る。

「た、頼む！ 助けてくれ…俺等は、騙されていたんだよ」

「こんな事をする気なんてなかったんだ。だけど、逆らうなら潰すと言われて仕方なく…本当だって！！ 誰だって、『烈風』を前にして逆らえるはずないだろう」

「俺、帰ったら結婚する約束がるんだ。頼む 見逃してくれ」

ああ…なんていい目をしているのだ あの子羊たちは。そんな目で見られると興奮するじゃねーか。

それに、嘘をつくならもう少し真実を混ぜるんだな。そんなんじやバレバレだぜ。なにより…レイアの実家を襲うという事自体いただけないな。人情に厚い『薔薇族』の肉親を襲うなど万死に値する。

ビクンビクン

おっと、そろそろ My son も我慢の限界のようだ。

そろそろ、ショータイムと行こうじゃないか。

「蒼星石、翠星石…悪いがここから離れておいてくれ。少しばかり本気をだす…後、レイリー殿とアリア殿にこちら辺一体に近づかない様に言っておいてくれ」

「わかったですう。はあ…なんで、こんなのがミーディアンムなんですう」

「それは、言わない約束だよ 翠星石。派手にやりすぎておじい様達に迷惑をかけないでね アーベ」

「……………善処しよう」

二人が戻っていくのを確認し、服の手を掛けた。

ジーーーーー

「な、なんで脱ぐ……」

「いかれてやがる」

服を脱ぎすて生まれたての赤子と同じ状態になった。ああ……この解放感がタマらない。さあ……お前達もその今すぐ楽にしてやろう。

「先に言っておくが、俺はノンケでも構わず食っちゃまう男なんだぜ。レイアと違って優しいから殺しはしないさ……そう殺しは。だから、安心してイクがいい」

「だっだれか、早くこいつを打ち殺せ……」

「お、おれんか食ってもうまくねー！。ほら、こいつの方が筋肉質で旨そうだろ……だから、おれは……」

「なっ……！。なんてこと言いやがる。ほら……あいつは、尻を見てみる。絶対安産型で締め具合なんて最高のはずだ。だから、俺だけは……！……」

はっはっはっは

実に元気がいい……！。これは楽しみがありそうだ。

また一人と染め上げて行った。ハルケギニアから時間・空間などあらゆる面で切離れた場所の為、この場所から脱出できるとすれば、時間や空間を操る事が出来る者だけなのである。

ちなみに…ビダーシャルは、ザメクを使い 命からがらこの空間から脱出した事だ。本人いわく、もう二度とあそこには行きたくないそうだ。

Side end

Side 真紅

「あら、これでお終いな…張り合いがないわ」

瞳孔が開き、口から泡を吹いて悶絶している男達に声をかけた。

「あ…あ」

「…っ」

「があっああ」

はあ…たかが、掘られる幻覚を見せられただけでこの始末。この程度の力でお父様の領地を落とせるとでも思っていたのかしらね。

この半生半死の連中は、『薔薇族』に任せて私は次のポイントに移動するわ。

『雛苺…街道から逃げようとしていた連中は、全員足止めしておいたわ。』『薔薇族』へ引き取るように連絡して頂戴。次は何処へ行け

「ばいいの？」

『分かったなの。次は、真紅の居る場所から西へ二キロ行った所から逃げようとしている人達がいるの』

『分かったわ』

ピッ

全く、『薔薇族』の人たちもお楽しみなのは、分かるけど…もうチヨットだけ真面目に働いてほしいわ。

Side end

Side 金糸雀

「なんで、こうなったのかしら」

「うるせーぞ 餓鬼！！ 死にたくなかったら、ここ領地から出る方法を教える。さもないと、顔の面ひん剥くぞ」

そもそも、『薔薇族』の人たちがお予想以上に働かなかったのが問題なのかしら。最初の勢いは何処に行ったのかしら。

それに、そんなオモチャじゃカナ達には傷一つ付かないかしら。

「はあ…カナは、頭脳派だからあんまりこういう事得意じゃないのだけど、お父様の為に頑張るかしら」

「くっそ…さつきから、話を通じねー餓鬼だな。こつなりゃ、こいつを盾にして…」

「汚い手で触ろうとしないで欲しいかしら…攻撃のワルツ!」

ヴォオオーーン

高周波の音波攻撃が兵士を襲った。

兵士が持っていた剣や辺りの物が原子崩壊し、金糸雀の周りには何も残っていなかった。。

・
・
・

「あつ!! 殺しちゃったら、駄目だったのかしら」

エルフやレイアならこの程度の音波攻撃など目覚まし時計と大差ないが…人間相手では、そもいかなかったのであった。

S i d e e n d

S i d e 水銀燈

「これで繋がったわよ。だから、私達かエルフを付けなさいと言ったのに…あんまり、手間を掛けさせないでくれる」

「うっ…面目無いの一言に尽きる」

これで少しは懲りたでしょう。

普段ならこんなミスはしないだろうけど…お父様の指輪のせいで少し油断したようね。慢心は行けないわよ お爺様。

「後、死体の方はこっちで回収しておくわ。お父様が所望していたわ」

「レイアちゃんは、一体何を考えているのかしらね？」

さあ…どうせ、あの馬鹿な子に対する当てつけにでも使うんじゃないかしら。確か…あの馬鹿な子の姉を始末した時は、料理して食わせていたわね。恐らく今回も…でも、この事は言わない方がよさそうね。

「さあ、知らないわ。じゃあ、領地に侵入した馬鹿どもも全員片付いた事だし、私はお父様のところに戻るわ」

「そうか…気を付けるんだぞ」

「来てくれてありがとうね。本当に助かったわ。それじゃ、レイアちゃんによろしくね」

「ええ」

Side end

アーベは、領地を守る。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとう。

色々迷った末に、アーベの能力は

『薔薇族』の方のコピー召喚と言う事にしました。

アーベと対峙するときは集落全員と対峙するのと同意義です。

後、男達の財宝（ゲイト・オブ・バビロン）の表記については

色々と皆さまからご意見も頂きましたが、やはり最初に書いた物をそのまま使う事にしました。アイディアを頂いたのに申し訳ありません。

これで、領地編は終了です。

次回からは、レイア編にもどり、アホリエッタと三女と犬を順に始末していきます。マザリーとカトレアの処遇は、作者の中で決まったので今後話に盛り込みます。

主人公は、選ばせる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

そして、感想や評価をくれた方々に深く感謝感謝です。

今回は、アホリエッタ編の為の下準備と言ったところでは。

主人公は、選ばせる。

ガリアのグラン・トロワで水銀燈から報告を聞いているレイアです。
ヴェーグル伯専用私室にて。

いやー、ジョゼフは気が利いているね。領地が無い代わりと言って、
宮殿の一角にある部屋を私にポンとくれた。しかも、台所・お風呂・
寝室と生活に必要な物は全て揃っているのが素晴らしい。

まあ、そんな事は置いておいて…

モグモグ

「父上と母上が言い出した事とは言え… エルフと娘達が居ながら、
なんて情けない」

「いい訳をする言葉も無いわ お父様」

しかし、不幸中の幸いとも言うべきなのだろうか。万が一、腕で
は無く致命傷になりうる箇所をやられる事になったら正直、私は怒
り狂うだろう。もちろん、水銀燈や『薔薇族』が居る以上、死んで
も生き返らせてもらえる事は分かっている。

だが…いくら、人類一 優しいと自負しているこの私でも許せない
事ってあるんだよね。その一つが、身内に手を出す者達だ。既に当
本人たちが死亡しているが、そんな事関係ない。

さて、どうしてくれよう。

「いや…私も当たってしまった悪かった水銀燈。少し気が立っていいよ」

「まあ、それはお互い様ね。それで、次は何をしたいのかしら？」
次ね…領地の防衛は終わり、公爵夫妻の死体は運んで貰った。特にないかもしれない…これからやる事は、ティファニアが居れば問題ないからな。

「もうすぐ、ガリアとロマリア・トリステイン連合との戦争が始まるからしばらく休んでいていいよ」

ちなみに、戦争はガリアからの宣戦布告と言う事に会議で先日決まった。理由は、ガリア貴族である私の実家をトリステイン王家の命令で侵略されたからだ。本来なら、昨今伯爵になったばかりの私の実家が襲われた程度では戦火を切る切っ掛けにはならないのだが…
ジヨゼフが量産機の性能を試したい為、戦争する事になったのだ。

「思ったより、早かったわね。ようやく、馬鹿な国に祭られなくて済むともうと清々するわ」

馬鹿な国か…まあ確かにそうだよな。いつも、秘薬の素材を提供していた割に見返りが全く無かったものね。あまつさえ、トリステイン貴族によってアンドバリの指輪まで盗み出される始末…本当に救いようがない国だ。

だが…それももうすぐ終わる事になるだろう。トリステインに住む人々の為に私がひと肌脱ぎましょう。そして、住みよい世界へ変えて見せよう。

「戦争の下準備に入るから、ビダーシャルには量産機の整備をお願いって伝言よろしく」

「その位なら構わないわ」

アホリエッタよ…お前は私に感謝するといい。領地を襲い、私の両親に怪我をさせる原因になったにも関わらず、私はお前の夢を叶えてやるのだから…今は無き最愛の人との再会という夢をね。

「ティファニア、君の力を貸して欲しい。一緒に来てくれるかい？」

私は、横でケーキを食べて満足げな顔をしているティファニアに声をかけた。

「はい！！ レイアさんの為なら頑張っちゃいます」

元気が良い返事はいいけど、口にクリームが付いているよ。

フキフキ

ハンカチで綺麗にふき取った。どこのラブコメみたいに舐め取るなんて出来ないぜ…チキンだから。

「これで、いつも通り綺麗になった。じゃあ、今すぐ出るよ」

「えへへ、はい！！」

ティファニアが少し照れている…そんな臭い事言ったかな。

「相変わらず馬鹿な二人…じゃあ、私はこの死体を冷凍したら暫く寝るわ。どうせすぐに帰ってくるんでしょ」

「ああ、一日もあれば十分だ」

公爵夫妻の死体の件は、一時的に水銀燈に任せて私はティファニアを連れてガリアを発った。

夜のトリステイン某所にある墓場にて。

うら若き美男女が腕を組んで夜の道を歩いている事をデートと言うならば、間違いなくデート中のレイアです。但し、デート場所は少し一般的な場所では無いけどね。

さて…マザリーニ枢機卿の情報では、確かこの辺りに埋葬されたはずなのだがな。

「レイアさん、夜の墓地ってなんだか少し怖いですね」

いえいえ、ティファニアの料理の方が私は怖いよ…いや、マジで。それに、さつきから笑顔いっぱい何かが怖いんですか、寧ろとっても嬉しそうにしか見えません。

探し回る事数分後。

目的の墓がありましたよ…だけど、正直言って有りえないだろう。

私は、てつきりこの間の戦争で亡くなった人たちの慰霊碑だと勝手に思い込んでいたものが、まさか個人のお墓なんて予想外だ。一体どこからお金捻出してこんなバカみたいな墓立てたんだよ!!

私は深夜にも関わらず、実家に居るマザリー二の部下に問い合わせた。

返って来た回答に正直脱帽した。

本来、戦争で慰霊碑を立てる為に集めたお金を自分の恋人であったウエルズ皇太子の墓へ変えたそうだ。マザリー二に許可を取らず独断で行った為、気付いた時には既に遅かったそうだ。

最低だな…あれだけの人数を戦死に追い込んでおいて、何の手向けたむもしないなんてどういう事だ。国家の為に死んでいった者達を何だと思っ*て*いやがる。

戦争で死んでいった者達の大半は平民だったとは言え、流石に苦情の一つや二つは来ただろう。それに、貴族だって少なからず死んだはずだ。もしかして、王家の名の元に黙らせていたのかな。確かに、有力な貴族は金を払って参加しなかったからな…弱小貴族相手なら黙らすなど簡単な事か。

真実がどうであれ…相変わらず胸糞悪い奴だ。

あんまり、長居をする所でもないからさっさと事を済ませて帰るとしましよう。

「ティファニア、君の力でここの墓でくたばっている奴を『死んで無かった事』にしてくれないか？」

流石に、以前ウェールズの死体を爆弾代わりにして四散させてしまったからね…あのLvになるとティファニアから貰った指輪でも難しいだろう。だからこそ、ティファニアの大嘘憑オルフィクションきが必要なのだ。

「なんでかよく分かりませんが…分かりました。その位、夜のおやつ前です!！」

それを言うなら朝飯前です…後、夜におやつはありませんよ。

「クシュ……………あ」

え!?! 今、ティファニアが『あ』って言ったよね!?

墓地の地中に凄まじい数の気配を察知した。

ボコボコ

辺りの墓地からつめき声が聞こえ、地中から腕が生えるように伸びてきている。なんてバイオハザード的展開だ。つか…埋めるならもつと深くに埋めるよ!！」

「ごめんなさい。少し力加減を間違っちゃって…ここの人達 皆『死んで無かった事』にしちゃいました…テヘエ」

可愛い顔して、とんでもない事してくれちゃいますね。まったく、上位エルフに負けず劣らずの能力だな こりゃ。

「これからは、気を付けるように…」

私は、ティファニアの額を突いた。

チヨン

さて、妻の不祥事は夫が取るのが当然だろう常識的に考えて。

生き返って早々で悪いが…お前等に用はない。エコ利用の観点からお前等には、指輪の糧にしてくれよう。

ゼルエルを呼び出し、墓場全体にゼルエルネットワークを敷き詰めた。

「生き返りおめでとう…そして、さよなら。錬金!!」

真夜中の墓地全体が真っ赤に輝いた。そして私の前に賢者の石が精製された。

お前等の死は決して無駄にしない…私が有効活用してやろう。どうせ、黄泉返りなどしたところでお前等には行く所など無いのだからな。

ごみ掃除も終わった事だし、そろそろ掘り起こしてやろう。

「これで三度目の生かな？人間でここまで生き返った人物は君が初じゃないかな ウェールズ皇太子…いや、今は亡国の王子だからただのウェールズかな」

私は、ゼルエルでウェールズの棺を掘り起し、中身を放り出した。

「ゴホゴツホ…そ、その声は…ミスタ・ヴェーグルか。どうやら、

「ここは天国では無く地獄の様だね」

「はっはっは!!」

「おいおい、まさか自分が天国にでも行けると思っているのか？」

「どのような理由があるにしても、部下を引き連れて神風特攻した奴が天国に行けるはずないだろう。」

「後さ…私の声を聞いた瞬間に地獄だと判断するのはどうかと思うぞ。私は、王家に秘薬を売ったり、ゾンビウェールズによるアホリエッタの誘拐を防いだり、ウェールズを蘇生したりと王家に尽しまくりだろう。」

「人の声を聞くなり失礼な奴だな…まあ、今は機嫌がいいから許してやろう。生き返って早々で悪いが、君には二つの選択肢がある」

「二つもあるのかい？ 死んだ僕を蘇えらせる位だから、選択肢など無いと思っていたよ」

「私とてそこまで外道じゃないさ。ちゃんと選ばせてあげるよ。」

「一つ目は、アホリエッタを始末するのに一役買え。うまく働けば、ヴェーグル家の地下で死ぬまで匿ってやってもいい。衣食住のどれも困らせない事を約束しよう」

「……二つ目は？」

「二つ目は、今すぐ死ぬ。死んだ後は、こちらで操らせてもらってアホリエッタを始末するに一役買ってもらおう。使い終わったら、今

度こそサヨウナラだ」

一度死んだ身で有りながら、現世で生きながらえる選択肢を与えてあげるなんて…やっぱり、優しすぎたか。

「自発的に殺るか、操られて殺るかの二者択一か…」

「悪い取引ではあるまい。一度…いや、二度も死んだ身でありながら再度現世に蘇える事が出来たのだ。どこに迷う必要があるんだ？それに、恋仲であったアホリエツタに再度まみえる事が出来る機会を得るのだ」

もつとも、会うのは殺す為だがな。

「選択の余地などない…君に協力しよう」

ああ、それが賢明だ。

「聡明な判断だ。別れの言葉を掛けるくらいは許してやるよ」

それにしても、ウェールズの顔が明るくないな…。元恋人にも会えて、現世で二度目の生を地下室で謳歌できるという特典を上げたのにな。

少し位、私に恩義を感じてもいいと思うのだが。

「あの一、レイアさん。この人誰ですか？」

ティファニアには、まだ教えてなかったっけ？

「ああ…彼は、元アルビオン皇太子でトリスティンのアホリエッタ
王女殿下の従弟…そして、君の従弟でもあるんだよ ティファニア」

ウェールズが大口を開けた口をパクパクしている。

なんだい？魚の物まねかね？

「そうだったんですか。私は、ティファニア・ド・ヴェーグルと言
います。短い間になると思いますが、よろしく願いします」

ウェールズは、なぜか驚いた顔をしつつ私とティファニアの顔を交
互に見てとても不思議そうな顔をしていた。

主人公は、選ばせる。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ウェールズの協力を取り付ける事に成功しました。

やはり、レイアの優しい説得に応じてくれると信じておりました。

次の殺害ターゲットは、アホリエッタの為

それに関係するお話を書こうと思います。

まだ何話で始末をつけるか決めておりませんので

下記ながら考えます。

ついでに次回は

ルイズ一行 *side* のお話も書こうと思います。

主人公は、願いを叶える。（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。

今回は、戦争の前段と犬に関するちよつとしたお話です。

犬の口調は、通常に戻っておりますが…濁音付きで発音している事にして脳内変換お願い致します。

主人公は、願いを叶える。

ウェールズを連れてガリアに戻ってきたレイアです。

まずウェールズには、今の世界情勢について学んでもらっている。ここ最近では、あほなトリステインのせいで世界情勢が乱れまくったからね。そして、現状を理解した上で心から協力願いたいと思っている。墓場で一応の約束は取り付けたが、アホリエッタの元恋人である以上、全面的に信頼しているわけでは無い。

「私が居ない間に随分と変わってしまったんだな……」

「そうだな……特に、アルビオンとの戦後からは酷い荒れようだ。労働力の大幅減少、税収の減少・etcと上げればきりが無い。そのしわ寄せは、平民達へ増税という形きている。しかも、貴族達は上乘せして増税を行っており、その余剰分を懐に入れて始末だ」

働き手が減ると本当につらいよね。もつとも、うちの領地は全く関係ないからどうでもいいけどさ。

「……アルビオンは、どうなったんだい？」

やはり、元アルビオンの王族だけあって気になるか。

「トリステインによって日々喰い物にされている。アルビオンとの戦費を賄うために、アルビオン貴族や平民達から金品を徴収し、今もなお過酷な税金と強制労働等が行われている。トリステインの借金、青天井だからな……ここまでして利息分だけでも返済するのがやっとという状況だ」

当てにしていたアルビオン王家の財産は、生憎と私に手中にあるからね。

「なんて事だ！！ アンリエッタは、手を差し伸べてくれなかったのか？」

元恋人が治めていた国の国民を助けるね…するわけ無いだろう。寧ろ、お前さんを見殺しにしたような連中がいた国などあのアホが鼻屑にする筈がないでしょう。

「ご冗談を…そのアホリエッタの命令でアルビオン国民は、虐げられているんですよ。きつと、今も何人も死んでいるんだろうね。元アルビオン王家の人としては、現状をどう思う？」

「私は…私は…」

ウェールズが迷っているようだ。まあ無理もない…自分が居なくなつてもアンリエッタが国を救ってくれる。アルビオン国民には少なからず迷惑をかけるかもしれないが何とかしてくれると信じていたのだろう。しかし、現実は違った。トリスティン王家と貴族による搾取される日々が続いており、何人ものアルビオン国民が死んでいく。

ふむ…もう一押しか。

「正直になれよ…アホリエッタの事が憎いんだろう？自分が居ない間に国民を蔑ろにし…あまつさえ、自分が死んで直ぐに平民と恋仲になるうとする尻軽女がさ。安心しろ、私は君の味方だよ」

「違う違う違う！！ 私は、アンリエッタを憎いなど思った事は無い！！！」

ウェールズが息を荒立てて抗議してきた。

そろそろ、とどめを刺すか…

「これを見ても同じ事が言えるかな？決して、目を逸らすな！！それがアルビオン王家としての務めだ」

アルビオンの現状（略奪・婦女暴行・人身売買・etc）とアホリエッタの悪行（慰霊碑の件・アルビオンへの命令・ルイズ一行に関する事・etc）をまとめ上げた数時間に及ぶ動画を見せる事にした。エルフに頼んだらすぐに用意してくれたよ…全く、どこで撮影していたのやら。

私は、ウェールズを部屋に残して退場した。ティファニアの従兄だから少し気を使ってあげよう。

さあ、君の為に用意したのだ楽しんでくれよ。

数時間後。

部屋に戻ってきてみると憔悴しきったウェールズが居た。床とテーブルには水滴が落ちたような跡が残っていた。

私は、ウェールズの方に手を置いた。

「君が本当に救いたいのは…誰なんだい？」

「…救えるだけの力が私には無い」

王国亡き今、ウェールズはただの平民メイジだ。権力など皆無だからね。仮に王家を者だと名乗り出たとしても公的に死亡している人物を語っただけの小悪党止まりだろう。

「そうだろう…君一人の力では、無理だろう。だが、私なら可能だ」

・
・
・

ウェールズがいきなり私の前に土下座した。

「頼む！！ 私は、どうなっても構わない。だから、アルビオンの民を救ってくれ」

「アホリエツタを殺せと命令したら？」

「どんな手を使っても殺して見せよう！！ それが彼女の罪であり、私がアルビオンの民に出来る唯一の事だからだ」

よく言った！！

「その願い叶えてやろう。ビダーシャル…真相は？」

「問題ない。どうやら本心からの様だ」

誰も居なかったはずの所に、ビダーシャルが突如として現れた。相

変わらず、素晴らしい隠密魔法だな。

「エ、エルフ!!!」

そう…ビダーシャルには、ウェールズが本心で私の命令に従うかを確かめる手伝いをお願いしたのだ。私と一緒に部屋に入ってもらい、ウェールズの言葉の真偽を確かめたかったのだ。

「では、改めてよろしく頼むよ ウェールズ」

私は、ウェールズに手を差し伸べた。

「こちらこそ」

ウェールズは、私の手を強く握り返してきた。

アホリエッタ抹殺の為の最高の駒を手に入れた瞬間で有った。

次は、犬用のゲストを招待しようじゃないか。

S i d e ルイズ

「そんな…」

「残念ですルイズ。まさか、この度の戦争に協力願おうと公爵に使いを頼んだのですが…まさか、エルフを率いて公爵を亡き者にするとは思いませんでした」

自分たちの力では、何もできないからってエルフの力を借りてお父様やお母様を亡き者にするなんて…貴族のやる事じゃないわ。

「王女殿下！！ この度の戦争が終わった際には是非ともヴェーグルを討つ機会を私にお与えください。このような貴族の風上にも置けないような連中を野放しに居ていては、死んでも死にきれません」

「貴方の『虚無』があれば例えエルフと言えど恐れをなして逃げたしまうでしょう……分かりました。戦争が終わり次第、魔法衛士隊を貸し与えましょう」

自らの近衛兵までお貸しいただけるなんて。

王女殿下のご期待に添えられるように頑張ります。そして、必ずやヴェーグルの首を王女殿下の前に差し出します。

私の『虚無』とサイトの『槍』があれば恐れることはない。

今度こそ、あなたの最後の時よ ヴェーグル。人の使い…恋人を散々いたぶった報いと親の仇を纏めて返してあげるわ。

泣きわめいても許さないんだから。

S i d e e n d

S i d e モンモランシー

「しっかりと、調べてくれよ。英雄様の大事な所なんだから」

「わ、わかつているわよ」

今晚部屋に来いっていうから、気合入れてきたのに…キスもなしにこの展開はないんじゃない。

それにしても…思っていたより随分と小さいわね。同じクラスの子の話じゃ…この数倍近くあるはずなのだけど、個人差かしら？

私は、全裸で椅子に座っているサイトの「ピーー」に手を…手を…

「どうした？ さっさとしろ…ああ？なんで泣いてんだ？」

頬に手をあつてみると涙が流れていた。

「あ、あれ。おかしいな…う、うれしいはずなのに、初めて部屋に呼ばれて色々気合入れてきたのに…どうして」

涙が止まらない…

うれし泣きなのだろうか…でも、こんな時でもギーシユの顔が脳裏から離れない。

「ちっ！！ 興が冷めた…こっちは、もういい。お前に頼んであった惚れ薬の件はどうなった？」

「戦争に備えて、どこの秘薬屋でも精霊の涙が品切れで…おまけに売っていたとしても高額で手に入らないわ」

兵士の人たちにも、私達の立場を説明して分けてもらえるかお願い

してみたけど、駄目だった。元から貴重な事と昨今では水の精霊が全くと言っていいほど『精霊の涙』を提供してくれなくなり…値段は天井知らずになっている。

「つかええーな。何の為に、貴重な惚…もういい！！ 金がないなら体でも売って稼いできやがれ！！」

「キャ！！」

部屋からつまみ出されてしまった。

どうしてだろう…彼の部屋から追い出されて悲しい筈なのに、なぜかホッとしている私が居る。

気持ち悪い…

まるで、自分に嘘をついているようなそんな気がした。

S i d e e n d

S i d e ギーシュ

いやー、サイトの居た世界の兵器はすごいな。あんな鉄の塊が馬…とまではいかないがそれなりの速さで動き回るとはね。極めつけは、あの大砲の威力だ。どんなスクウェアメイジが作ったゴーレムも破壊できるだろう。

他にもマシンガンという鉄の球を出す兵器などもあり、もう僕の理

解の範疇を超えているよ。だけど、あまり精巧に作られている為、複製の仕様がなという事が欠点だけだね。

あれは、愛しのモンモランシーじゃないか。最近、避けられているかのように会えないが…ここで会えたのも運命。

「モンモ……………」

声を上げて呼ぼうと思った。だが…踏みとどまった。

遠目ではつきりとは見えなかったが…泣いていた。顔を見る限り目にゴミが入ったとかでは無く、本当に悲しそうに顔をしていた。

もしかして、僕を避けていた事に関係があるのか…確か、モンモランシーが歩いてきた方には、僕たちの宿舎がある。

こういう場合、直接本人に問いただしたとしても回答はごまかされるだろう。

「何があったか知らないが…このギーシュが君の為に解決して見せよう…!!」

身内を疑うのは、好ましくないのだが…現状で一番怪しい奴から調査するのが理想的だろう。

「まずは、サイト…君にからだ」

こうしてギーシュの浮気調査が開始された。

だが、よもや調査して数日で証拠を掴む事になるとは思ってもいな

かっただろう。

S i d e e n d

S i d e ? ? ?

やっぱり、あの子からの返事が返ってきてないわね。

突然いなくなつて、もう一年近くだというのに…元気でやっているかしら。

あの子がいつ帰ってきててもいいように、毎日一品はあの子が好きな料理を用意してあげている。

どんな理由で、居なくなつたかは分からないけど…帰ってきたら、まず『おかえり』って言ってあげないとね。

それから、今までどこで何をしていたか あの子の気のすむまで聞いてあげるわ。

「そろそろ、お夕飯の時間ね」

ピンポーン

その時、インターホンが鳴った。

カメラ越しに見てみると…どこの芸能人？と言いたくなるような美少年が家を訪ねてきた。

あの子の知り合いかしら？

S i d e e n d

主人公は、願いを叶える。(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

これで、ウェールズが仲間になりました。

そして、サイト専用の特別ゲストも準備完了と……??が誰かは言
いませんが、犬の最後に大きく関係するかもしれません。

今回は、多分量産機に乗ってロマリアへ攻め込みます(予定)。

主人公は、責任を取らせる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

内容がなかなか進まない…。

主人公は、責任を取らせる。

Side レイア

戦争に向けて、お国の為に精魂尽して働いているレイアです。

とあるエルフの研究所にて。

今 私は、特別ゲストである平賀ご夫妻を連れてとネットで知り合ったエルフの元へ来ております。

周辺には、液体が満たされた筒状のカプセルが多数ある。カプセルの中には、ハルケギニア中の動物・幻獣・人間など様々な生物が詰められており、俗に言う標本というやつだ。うちの地下室と似ていい趣味している。

「こんな短期間での調整では、獣化したら半日と持たぬぞ」

機械の端末を操作しながら、一人のゴ年配エルフが私に話かけてきた。

「半日も持てば十分です。どうせ、死ぬのに変わりはないのですから」

ちなみに、獣化というのは人の姿から化け物へと変身する事である。もちろん、変身する事で様々な力を使う事が出来る。例えば、カメレオンと融合させた人間なら周りの風景に溶け込める等になったりする。

「それにしても、人間と幻獣を融合させて新たな生命を作ろうなど恐ろしい事を考えよるわ」

「何を仰いますかバルカス殿。アイデア自体は、私が出したかもしれませんが：研究自体の第一人者は貴方ですよ。それに、この研究がうまくいけば人間を使い勝手の良い労働力として活用できますよ」

エルフの中でPCとネットが普及したころ、私は前世の漫画知識等を書き記した物を公開した。もちろん、エルフのチート過ぎる技術力や戦闘力を考慮し、アイデアを元に研究や実験をしてくれるエルフが居るだろうと信じてね。

それにしても：まさか、ゾアノイド研究の第一人者までエルフに居るとはね。ゼルエルの殖装ネタがここに通じているとは思ってもみなかった。

「まあ、わしは研究が出来ればそれでいい。後一時間もすれば調整が終わる」

「ありがとうございます。お礼と言ってはなんですが：戦争が終わり次第、何人が生きのいい献体を持ってきます」

子供が責任を取れない場合は、親が責任を取るのは至極当然。頑張って働いてくれよ：その為に、わざわざティファニアの力まで借りてこのハルケギニアへご招待したのだから。

私は、試験管の中に入っている二人の人間に目を向けた。：いや、今の姿は獣化状態だから人間というのは程遠いな。

「恨むなら、我が子を恨むのだな。感動の再開まで暫く眠ってくれ
…エンザイムIIよ」

私は、調整室を後にした。

後日。

ガリアのヴェーグル伯専用私室にて。

「それでアホを呼び出す算段は付いたか？」

「完璧だ。前回同様、夜中に部屋を訪れる予定だ。そして、愛の囁
きを一つや二つ程度言えば確実に堕ちるだろう」

・
・
・

完璧じゃないか！！ 流石は、元恋人だ…アホの性格を知り尽くし
た作戦だ。

「道中の案内は、サンガリア大司祭にやらせよう」

これで、何の苦勞も無くアホの部屋にたどり着けるだろう。下手に
コソコソするより、大胆に正面から行こうじゃないか。

「まさか、大司祭まで手懐けていたとは…私は、彼女を連れだした

後にゲルマニアまで逃げればいいのかい？」

「ああ、その通りだ。ジョゼフ王を通じて既にゲルマニアの皇帝と話はついている。当日は、ロマリア首都郊外にツエルプストー家所有の船が到着するはずだ…それでロマリアから脱出するとよい」

ゲルマニアには、トリステインの半分を無条件で明け渡す約束している。そして、今回の戦争に介入しないようにしてもらった。ぶっちゃけ…何もしなければトリステインの半分が貰えるのだから、相手からボロの儲けもいいところだろう。

そして、ツエルプストー家には性転換の薬とタバサ母親の鎮静剤を定期的に販売する事でアホリエツタ死刑への手伝いをしてもらう事になっている。当初は乗る気ではなかったようだが…キュルケたつての希望で手伝いに参加する事になった。そこまでして、タバサとハッピーエンドを迎えたいのだろう。

ロマリアやトリステインならまだ、アホリエツタを助ける人物が居るかもしれないが…逃げた先がゲルマニアとなれば助ける人など居ないだろう。ゲルマニアでは、生かさず殺さず…じつくりと苦痛を味わわせてやる。

「わかった、必ずやり遂げよう。代わりに…」

「私は、約束は守る漢だ。見事役目を果たしたらアルビオンの民を救おう。私には、それだけの金と権力と力がある。但し…お前が裏切れば今以上辛い思いをアルビオンの民に強いる事になるだろう」

まあ…トリステインのアホ貴族は、アルビオンに派遣されている汚い貴族も含めて綺麗に掃除する予定だったから別にウェールズが約

束を破ろうが守ろうが関係ないんだけどね。と言う事は内緒である。
折角の働く意欲を失わせるのもかわいそうだからさ。

「裏切らないさ」

「念を押しただけさ。後、アホを攫った後にこれを現場に残しておけ…良い働きを期待している」

私は、ウェールズに手紙・平賀夫妻の身分証・平賀夫妻の携帯電話を渡した。相手がこちらの餌に気付かなければ餌の意味を成さないからね。

さあ…ロマリア侵略まで後数日。

戦争開始と同時にアホリエッタがウェールズと死の逃避行。

そしてルイズ一行は、嫌でも私の元へ来るだろう。両親を奪い取りにだ。

・
・
・

万が一来なかったらどうしよう(汗)

「息子に見捨てられないといいですね」

私は、別室で寝ている平賀夫妻に話しかけた。

ちなみに…平賀夫妻は、自身の体に起こった事は知らない。なぜなら、私が寝ている間に体を弄らせてもらったからね。」

Side end

Side ジョゼフ

「ジョゼフ様、あの者を野放してよろしいのですか？」

「シエフィールドよ…お前はヴェーグル卿に勝てると申すのか？」

勝てるわけがない…我が虚無を用いても無理であろう。エルフと人間との差が其処まで絶望的なのだよ。」

「……………」

「ヴェーグル卿は、基本的に自由にさせておいてよい。恐らく、ガリアの不利益になる行動はせぬだろう。それより…ロマリアとトリステインとの戦争の準備を急げ」

「はっ！！ 直ちに」

シエフィールドが心配するのも当然だ…万が一、ヴェーグル卿が反旗を翻せばガリアも瞬く間に蹂躪されるだろう。

だが、我とて この腐りきった世の中で伊達に王をやっているわけでは無い！！

その者の目を見た瞬間に、大体どのような人物か分かる。だからこそ…ヴェーグル卿が反旗を翻す事は無いと言い切れる。それも、こちらから手を出さない限りに限定してだがな。

仮に、あの者に出す奴が居るとすれば…それは相当なアホか馬鹿なのだろう。

そういえば、イザベラがヴェーグル卿に会いたがっていたな………
………うむ、許可は出せぬな。

Side end

Side ティファニア

最近レイアさんが戦争の準備とかあまり構ってくれません。

おまけに、最近あちこちを飛び回っているようで疲れているみたいです。いつも寝る時に色々とお話してくれるんですが…最近は、あまり話し相手になってくれません。

『「うづいう時は、どうしたらいいんでしょう？」』

『「そんなの簡単かしら」。男なんて手料理を食べさせれば、イチコ口かしら。』

金糸雀は、ティファニアの手料理について何も知りません。

手料理かしら。

最近、少し上達して来ている気はするけど、レイアさんには台所に入ると止められているんです。

手料理の腕は、変わっておりません。レイアの胃袋が使徒の力により進化しております。

『女は度胸DEATHう。男の命を^{ハート}ゲットするのはいつだって女の手料理と相場が決まっているDEATHう』

レイアさんのハート……ぽっ!!

『分かりました。これもお嫁さんの務めです!! 全身全霊でレイアさんの為にお料理を作ってみます。きっと元気にさせて見せます。相談に乗ってくれてありがとう 金糸雀ちゃん、翠星石ちゃん』

『お父様は、お母様の料理をいつも楽しみにしているDEATHう。だから、安心DEATHう……(ニヤリ)』

部屋の厨房だとレイアさんに見つかってしまっているので、王宮の厨房を借りる事にしよう。後…折角だから、私の従兄?のウェールズさんも是非ご招待してみます。

喜んでくれるかな?

その日の夜、ウェールズが再び冥界へ降り立った。

S i d e e n d

主人公は、責任を取らせる。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

サイト夫妻には、悪いけど…犬のしたことに対して責任は取ってもらおうかなと…どんな展開になるかは、エンザイムIIの事を知っている人ならわかるはず。

次回予告は、当てにならないのでやめておきます…
作者の気分で右往左往するので@@@

主人公は、再会させる。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

リアルの都合で二週間も空いてしまい申し訳ない。

最近忙しくて……

犬の声が元通りになっておりますが、進行上の都合の為
脳内変換して濁音で喋っている事にしてください。

主人公は、再会させる。

最高に気分いいレイアです。

実は、この度テュリユーク殿より仰せつかった三女監視の任が無事に解かれました。

先に言っておくが解雇^{くひ}じゃないぞ！！

これもアミバと水銀燈の協力があつてこそ成し得た偉業である。実は、地下室にいるコピールイズを使って虚無についての様々な研究レポートを作成し、幾度も提出していたのだ。実験内容は、非人道的な事も多々あつたが…何事にも犠牲は付き物だ。もっとも、コピールイズが人であるかの定義は定かではないから、非人道的ではないかもしれないね。

「とりあえず、おめでとうと言っておこう」

「ありがとうヒダーシャル」

これで何の憂いも無く抹殺できる。今では、エルフの命令と原作知識を役に立てる為に生かしていたが、もはやその必要はない。この世に肉片すら残さないよう、綺麗に消滅させてやろう。

くっくくく

「不気味に笑うのもいいが…準備は整っているか？」

「当然だとも。この私に抜かりはない！！」

そう…明日は、いよいよロマリアへ向けて出陣なのだ。量産機の初陣という事もありジヨゼフが自ら殲滅戦の指揮を執るようだ。しかも全機投入するらしく、過剰戦力過ぎて指揮の必要性が無いかもしれないがね。

それに、つい先ほどアホリエッタ誘拐に行ったウエルズから連絡があり見事誘拐に成功したとの連絡がきた。最初は、疑っていたようだが惚れ薬中和剤入りの濃厚なキスをしたら一発で堕ちたそうだと本人曰く、『チヨロイもんだ』だそうだと。

ゲルマニアに着いた瞬間に拘束されるアホリエッタの顔が目には浮かぶわ。後、ウエルズに黙っていたがアレには地下室に行く前に一仕事待っているのだ。ゲルマニアのアルブレヒト3世の縁者を孕ませるといふ重要な任務がね。もちろん、アホリエッタの前での公開プレイというおまけつきだ。死にゆくウエルズの為に用意した感謝の気持ちとアホリエッタへのちよつとした悪戯だ。

何気、かなり良い値段でウエルズの子種を買ってくれたのは内緒だけどね。

開戦前日に同盟国王女が他国へ逃亡。そして、虚無一行が平賀夫妻を救うべく戦車を用いて敵前逃亡。恐らく司令部は、混乱極まるだろう。ロマリアがどのように対応するか分からないが、楽しい事になるのは確実だろう。

平賀夫妻待合室にて。

「何か不自由は、ありますか？何か欲しい物とかあれば言ってください。可能な限り工面致しましょう」

なんせ、明日が命日なのだからな。死にゆく人への配慮も忘れない私の優しさに自画自賛だ。

「いいえ、大丈夫です」

「本当に何から何まで申し訳ない。あの馬鹿息子にはキツク言うて聞かせますので」

全く、こんなまともな親から何故あんな屑が生まれたか疑問だな。あんた等に恨みは…犬を産んで育てた事位しか無いが、恨むなら犬を恨むのだな。

次生まれ変わる時があれば自分の子供には最低限、『郷に入れば郷に従え』というルール位はしっかり教え込みましょう。

もちろん、圧倒的武力で自分がルールになれる位の存在なら話は別だがさ。

「そんなに叱らないでも構いませんよ。久しぶりの親子再開なので…抱きしめてあげるくらいがちょうど良いですよ」

そう、きつーく抱きしめてあげて下さい。その瞬間までが人間で居られる最後なのですから。

喜ベサイト！！ 私の優しさで死に際に感動の親子の再開をさせてやるっ。

お前は、泣いて私に感謝してすべきだからな。

「明日には、再開できる予定ですので今晚はぐゅっくりお休み下さい」

翌朝。

戦争当時と言う事もあり、爽やかな筈の空気が男達の汗の匂いと鉄の匂いが充満している。薔薇族の連中がいたら喜びそうだな。

「匂いはともかく、絶好の戦争日和だな」

雲一つなく綺麗な青空が広がっている。

こんな日に死ぬるとは、幸せな奴だな。

ジャリリリリーーン ジャリリリリーーン

やっと掛ってきたか。

ピッ

『喜んでもらえたかな?』

『てめえ!!! アレをどこで手に入れたああああ!!!』

そんなに叫ぶなよ。耳に響くだろう。

『アレと言つのは…両親の身分証と携帯電話の件かな？もし、その事なら実に簡単だよ…お前の両親をハルケギニアにご招待したからだよ』

『なっ！！なんだと！？　なんで、親父達がここに居る…どうやって！？』

なんでなんでと煩いな…それに、お前の声は聴いていて生理的に不快なのだよ。

『主導権は、こっちにあるんだ。いいから黙って聞け…黙らねーと今すぐお前の両親をミンチにしてテメーの胃袋に詰めるぞ』

『ぐっ……………』

ほほう…あの屑でも両親は、それなりに大事な存在らしいな。素直にこちらの命令を聞くとはな。

『一度しか言わないから良く聞けよ。本日正午に「虎街道」まで来い。なーに少々距離はあるが…戦車に乗れば間に合うだろう。そこで両親に会わせてやる。もし、一分でも遅れたら一分ごとに指を切り落とさせてもらおう』

『このゲスが！！　その首洗って待ってやがれ！！』

何て言い草だ。折角再開の手助けをしてあげたというのにね。

『おいおい、お前が会いたかった両親に会わせてやるのだ。感謝されど、罵声を浴びさせられるのはどうかと思うのだがな。それとも、生きたまま再開はしたくないと言つのなら話は別だがな……………で、

しつこい…一体、どれだけコールをならせば気が済むんだ。

もう、電話がかかってこないと思ったが一体何の用事だ。

はあ、気がならないが出てやるか。

ピッ

『何の用だ。あまりしつこいと両親との再会の前に死ぬ事になるぞ』

『待つてくれミスタ・ヴェーグル！！ 僕だ！！ ギーシュ・ド・グラモンだ！！』

なんでギーシュが犬に渡した携帯から掛ってくるんだ。

まあ、いいか。

『よく、ソレの使い方が分かったね。それで…わざわざ、私に掛けてきたという事は何か用事があるんだろう？』

『ああもちろんだ。実は…』

ギーシュからモンモランシーの身に起こった出来事の詳細を聞いてあげた。なんでも、モンモランシーは、犬に惚れ薬を作れと命令されるだけでは無く、夜な夜な部屋に呼び出されているようだ。もっとも、部屋に呼び出されて犬が性的な行為を起こす前にギーシュがタイミングよく犬の部屋に訪れて事なき終えさせているようだ。恋人を守る為に寝る時間すら削って24時間体制でモンモランシーを守っているらしい。

仲間に相談しようにも、犬は周囲から英雄扱いされている事と虚無の使い魔と言う立場がある為 誰も信じてはくれないと思ったそうだ。それに、万が一犬に告げ口されたらモンモランシーに危険が及ぶ可能性と思い踏みとどまっている。

何度も犬を殺そうと思ったが、惚れ薬を解かない状態で殺してしまえばモンモランシーがどんな行動に出るか分からない。下手をすれば後追い自殺なんて事もありえると思えば手をこまねいていたようだ。

そんな時、犬が私からの連絡で荒れているのを見て私に助けを求めてきたわけだ。

『今更こんな事を言えた義理じゃないのは、重々承知している。だけど、僕はモンモランシーを救いたい。その為なら何だってする！』

『アーハンブラ城で手を差し伸べた時は、断られたような気がするのだがね。それなのに、不測の事態が起こった時だけ助けを求めるのは都合がよすぎるんじゃないかね』

最初から私側に付いていれば何不自由なく過ごせたものを…ちよつとした冒険心で犬に着いていったばかりに不幸ばかりに巻き込まれるのだから。

『……………どうしても駄目かい。もし、君が助けてくれなかったらサイトを僕の手で殺す！それも、髪の毛一本すら残らない程に。君がサイトを殺す為に色々と準備している事は大体予想がつく。それを水の泡にする』

•
•
•

・
・

ふっ

私と誓すとはいい度胸じゃないか。確かに、今犬を殺されればこれまで準備をしてきたことが水の泡になる。しかも、髪の毛一本とまでなると流石に蘇生は難しいな…

いい具合に成長したじゃないかギーシユ。

『是非やってみろ………とりたいところだが、それをやれると私の苦勞が水の泡になってしまう。まあ、いいだろう。君の願いを叶えてやるう』

『ありがとうミスタ・ヴェーグル。ありがとうありがとう』

『そうそう、これは忠告だが…私は味方には寛大だけど敵対すれば容赦しないからね。もし、今後私に敵対する事があれば、残念な事になるから気を付けるんだよ。後、今後は私の事をヴェーグル卿と呼んでくれ』

いつまでも友達気分では困るからね。やはり、上下関係ははっきりとさせておかねば。

『わ、分かりましたヴェーグル卿。生涯、貴方に忠誠を誓います』

『では、最初の命令だ。犬と一緒に本日正午に「虎街道」まで来い。当然、モンモランシー連れてくるといい』

『イエス マイ ロード』

ギーシュの返事を聞き、電源を切った。

これ以上かかってくるとウザイから着信拒否設定にしておこう。

さてさて、面倒事も大体片付いたしこちらも出陣と行くかな。私とティファニアと水銀燈の三名が犬抹殺に行く為、抜けた穴を埋める程の人材もすっかりと用意している。本来ならビダーシャルにお願いしたかったのだが、生憎とビダーシャルは戦争に不参加を決めているから無理強いはいしない。

まあ・・・参加したらしたで困るけどさ。

だから、この二人に働いても居ましよう。私は、後ろで控えていた二人の男女に話しかけた。見た目は典型的な貴族だが、ただ一点だけが貴族と…人間と違ってしている。頭の部分がガラス張りになっており、脳ミソが丸見えなのだ。そして、その脳にはいくつもの機械的な部品が差し込まれており、一般人がみたら悲鳴を上げてしまうほどの容姿なのだ。

脳ミソ部分だけは、神のお声によりハカイーをモデルにして改造を施した。

「ワレラ ニ オマカセクダサイ」

「レップウ ニ ハジナイ ハタラキ ヲ チカイマス」

当然、嫌がらせ用の改造だけで終わらすつもりはない。脳が全身に

送る電気信号のデータ採取をふまえての実験だ。これがうまくいけば、私の【ブレイン】の魔法効率も更に上がるだろう。

「ええ、期待しておりますよ。トリステイン最高峰のスクエアメイジの力を存分に発揮するといい」

働く次第では、三女の死に際に会わせてやってもいいだろう。

では、私も行動を開始しましょう。

「ティファニア、水銀燈行くよ」

「いよいよ、なんですね。今日も頑張ります レイアさん」

新調したプラグスーツを着ているティファニアが元気に返事をした。プラグスーツは私とお揃いのカラル君カラー女性版だ。前回の様なテスト用のプラグスーツだと露出が激しい為、人前で着せるわけにはいかない。

「あんまり乗り気じゃないけど、お父様に逆らった馬鹿な子の末路を見るのもそれはそれで楽しいかしらね」

ああ…楽しい舞台になるように頑張るぞ。

正午の虎街道にて。

ガリア本体とは離れて虎街道に来た私達。

犬ご一行の到着まで、優雅に昼食をとっている。日差しが強かったので量産機の翼を広げて、日陰で美味しく冷麦を頂いております。こんな暑い日は、冷やし麺系に限るわ。

飯を食べ始めてしばらくすると…遠くに人間の集団が目に入った。

それにしても…私達がたった三人+平賀夫妻に対して犬ご一行は随分とお仲間を引き連れてきましたね。ロマリア軍から2個中隊程引き連れてきたようだ。しかも、武装をみると幾人かが銃などの近代兵器を持っている。

まあ、何人で来ようと結果は変わらない。

「約束通り、来てやったぞ！」

「ああ、よく来たね。それにしても随分とお仲間を引き連れてきたね」

こいつらも、犬に掛らなければもう少し長生きが出来たかもしれなののに。

「一人で来いとは言わなかったからな。どうした？怖気づいたか？さつさと、親父とお袋を解放しろ。今なら命だけは助けてやる」

私が憐れんだ眼をしているのを怖気づいていると勘違いしたようだ。

「サイト！！失礼な事を言うんじゃない。この人のお蔭で私達はお前に会う事が出来たんだ。後、体その包帯はどうしたんだ！？」

「心配したんだから」

平賀夫妻が涙を流している。

おお・・・これが感動の再開と言うやつか。平賀夫妻は、私を気遣ってか中々犬の方へ行かない。

「久しぶりの親子の再会なのだから、私達の事は気にせず逝ってきなさい」

私が二人に優しく声をかけると、平賀夫妻は犬の方へ歩いていき、熱い抱擁をしている

いやー、めでたしめでたし。

三人が抱き合っている最中、ふと犬と目があつた。

「そういえば、お礼がまだだったな」

ほほう、犬が私に感謝するとはね。

「何かくれるのかい？」

私がそういうと、犬が右手を挙げた。

「ああ、たっぷりとお礼をしてやるよ...この鉛玉でな!!」

犬が右手を降ろした瞬間、戦車の大砲が火を噴いた。

戦車から放たれた弾が私に直撃し、爆発音と共に砂埃を舞い上げた。

ロマリア側の誰しもが勝利を確信しただろう。スクウェアクラスのゴーレムですら木端微塵にする程の攻撃が唯の人間に直撃したのだから。

勝利の雄叫びを上げているロマリア軍には、申し訳ないが…君達もここで死んでもらうよ。

「目覚めよ”エンザイム?”」

主人公は、再会させる。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次週は、サイトVSエンザイム?をお送りいたします。

主人公は、慈悲深い。(前書き)

三週間近く更新せず申し訳ありません。

いかんせん、リアルが忙しく手が付きませんでした。

難産でしたが頑張りました><

主人公は、慈悲深い。

Side サイト

「何かくれるのかい？」

馬鹿かこいつ。

この状況下で素直に人質を解放するなんて、馬鹿以外の何物でもない。

親父とお袋をどんな方法でここに連れてきたかは、大方予想がついている。ロマリア教皇が使っていた虚無に近い魔法または、それに近い何かである事は間違いない。

おまけに、ゲス野郎の力でも無い筈だ。と言う事はだ…可能性があるのは、ゲス野郎の連れのどちらかだ。ミヨズニトニルンの主という選択肢も無くは無いが、俺の勘が違うと言っている。

だから、ゲス野郎にはここで死んでもらう。

ゲス野郎を始末した後、後ろにいる二人から事の詳細を聞けばいいだけさ。当然、手取り足取り入念に事情聴取をしてやるうじゃねーか。

ゲス野郎を始末するのにあたって両親の目があるのが、少々気が引けるが…そんな事を言っている場合じゃない。ゲス野郎の後ろにある巨大なゴーレムらしき物に出てこられたら、いくら戦車といえども危ないかもしれない。

と言う事で、両親を素直に解放した馬鹿には早々にあの世にご退場願おう。

「ああ、たつぷりとお礼をしてやるよ…この鉛玉でな!!」

上げていた腕を振り下ろした。

その瞬間、戦車から砲弾が発射されゲス野郎に直撃!!

爆音と砂埃が舞うのを見て確信した。

勝った!!

ゲス野郎がどれほど強かろうと所詮人間だ。少しだけ他の奴らより強いが、地球が誇る近代兵器の前には所詮ゴミ!!

はっはっはっはははははは

まさにか、こんな簡単に殺せるとはな。こんな雑魚だったなら、貴重な戦車の弾を使わず、連れてきたロマリア兵を使い、髑り殺しにしてやるんだっただぜ。

「…めよ……イム？」

砂埃の中から、確かに聞こえた。何を言っているかまでは定かではないが、確かにゲス野郎の声だ。

あ、ありえない!!

スクウェアアークラスのゴーレムですら木端微塵にする程の威力だぞ。それが直撃して生きているはずが無い。まさか、何かしらの魔法で今の攻撃を凌いだのか…いや、そんな時間は無かったはずだ。弾丸より早く詠唱を終えられる人間など居るはずが無い。

ゲス野郎が居た地点の砂埃が晴れると…そこには、何事も無かったようにただ立っている一人の男が居た。

く、くっそおおおおお！！

今ので殺せないならば…ルイズの虚無にかけるしかねー。タルブ村でやった時以上の威力をもってすれば、流石に生きてはいられまい。

そうと決まれば、こんな時の為に連れてきたロマリア兵達で時間を稼がせてもらおう。

グサッ

「サイトー！！」

「いっはあ」

ルイズの叫び声と共に右わき腹に激しい痛みが走った。周りには、俺等しかいないはずなのに一体誰が！？

視線を痛みのする脇腹に落してみると…直径5cm程の黒い棒状の物体が脇腹を貫通していた。その棒の先を辿ってみると………。

「な、何の冗談だよ…。その背中から生えている物は何なんだよ親父、お袋！！」

「あ…あ…な、何だ　これは!？」

「一体どうなっているの!？」

親父とお袋の背中が肌蹴て、お互いに先端が鋏みたいな触手らしき物4本生えている。そのうちの一本が俺の脇腹を刺していた。

「サイト!!　離れて」

残った触手が一斉に襲ってきた。

くっそ!!

脇腹を刺された状態だった為、強引に後ろに下がり脇腹から触手を抜き出した。離れた瞬間、元居た場所には複数の触手が地面を刺していた。

メキメキ

ビキビキ

親父とお袋が見る見るうちに人とは思えない姿へ変貌していく。見た目はシロクマ?で身長は3mを超え、顔はカマキリの様な形状になり、背中には四本の触手がある。

まるで、漫画やアニメで出てくる敵兵の化け物みたいじゃないか。

「」

「!!」

どういう事だ!?

あれは、確かに俺の両親だった……間違っ事などある物か。
だったら、答えは一つだ。

「て、てめえ……親父達に何をしゃがった!!」

S i d e e n d

S i d e レイア

「て、てめえ……親父達に何をしゃがった!!」

なにやら犬が吠えているが……気にする事でもないだろう。

それにしても、エンザイム?は美しいな。戦争が終わったら、うちの領民を任意でゾアノイド化させようかな。あの力が有れば自衛するには事足りるだろう。それにゾアノイド化すれば病気にも強くなるし、新陳代謝もすごく良いからね。一石二鳥じゃないか。

「それにしても、どうやったらあそこまで肥大化出来るのかしらね。明らかに質量が数倍になっているじゃない」

・
・
・

た、確かに…言われてみなければ何の疑問も持たなかったよ。

「よくそんな事に気付いたね水銀燈。まあ、結論から言うとエルフの力だからさ…色々と物理法則が無視されるのだよ」

「まあ、身近にもそのいい例がいるから分からないでも無いけどね」

そう言つて水銀燈は、ティファニアの方を見た。

エルフの理不尽さは、今に始まつた事ではないけど釈然としないよね。だけど…ゾアノイドの技術を用いたら、食糧問題が色々と解決しそうだな。例えば、松坂牛をゾアノイド化して肥大化させるとかまさにメシウマな技術だな。

「
」

おっと、我々が和んでいるとエンザイム？の叫び声が聞こえた。

犬は、死に物狂いでエンザイムの猛攻を回避しつつチマチマと手足に攻撃をしている。どうやら、致命傷になりえそうな攻撃は避けているようだが…そんなヘナチョコな攻撃では、一生かかってもエンザイム？は殺せないぜ。

それにさ…いくらお前が殺さないようにしていようと、お前が連れてきた連中は生き残る為に死に物狂いで殺しに掛っているぞ。ロ MARIA兵は、エンザイム？に驚きはしたものの、すぐさま体制を立て直して一体を取り囲むようにして過剰攻撃を仕掛けている。

この調子ならば、犬が連れてきたロ MARIA兵と引き換えにエンザイム？一体を失う事になりかねないな。

それでは…つまらん。ならば、ロマリア兵を少し間引こう。

「ギーシュ！！ 貴様の忠誠心を見せる時だ…殺れ^や」

私は、金髪ドリルの横で犬の状況を静観しているギーシュに声をかけた。その瞬間、ギーシュがワルキューレを作りだし、エンザイム？を包囲殲滅しようとしていたロマリア兵を次々と始末していった。

味方だと思っていた者からの不意の一撃…これを回避出来る者は、そうそう居ないだろう。

なにやら、「ギーシュが乱心した」「ギーシュが操られている」等の叫び声が聞こえてくる。全く、この状況を見てまだその程度の認識なのか…学生気分が抜けてないね。ギーシュを半殺しにして止める程度の覚悟のある奴は誰もいらんのか。

「あら？仲間割れ？」

「いいや、仲間割れじゃないさ。彼は、犬の仲間では無く先日から私の臣下になったのだよ。だから、ただ敵を殺しているだけさ」

そう、仲間同士で喧嘩や殺し合いをするならば確かに仲間割れだ。しかし、それが敵同士なら戦争…もしくは殺し合いだ。

今まで微妙な均衡を保っていたロマリア兵達は、ギーシュに手により崩壊させられた。残ったロマリア兵もエンザイム？に八つ裂きにされていった。あの巨体ながら思いの外素早い為、ロマリア兵を始末するのに一分もかからなかった。

そして、ギーシュが嫌がる金髪トリルと連れて私の元へとやって来た。

「離してよー！ サイトがー！ サイトが死んじゃう。お願いだから、ギーシュも助けて」

金髪ドリルの声を聞くギーシュの顔がとても辛そうに見えた。どうやら、相当来ているようだな。

「ヴェーグル卿。頼む……」

「安心しろ。私に付いた以上、君達の不幸もここで終わる。すぐにサイトという不幸の呪縛から解放してしんぜよう……水銀燈、後は任せた」

水銀燈に丸投げする。だってさ、デイスperlでも解除可能かもしれないけど……ここは専門家に任せる方がいいでしょう。

「そんな事だろうと思ったわ。まあ、いいわ。慈悲深い、お父様に感謝なさい」

なにやら、ギーシュが不安そうにこちらを見てくる。うちの娘の力を疑っているな……部下の不安を排除するのも上司の務めだ。

「水銀燈……どうやら、ギーシュは君が本当に治療できるか不安みただ。だから、本当の姿を見せてやるといい。そうすれば、安心するはずだ」

水銀燈がいかにも面倒くさいという風にため息を着いた。

その瞬間、水銀燈の羽から黒い水が立ち上り懐かしい姿を現した。

しかし…醤油臭い…;

「単なるものよ。その者をこちらへ…」

「み、水のせ…はい!! 直ちに」

ギーシュが金髪ドリルを水銀燈の前に差し出した。そして、醤油の精霊の手が翳すと金髪ドリルの急に倒れた。

「モンモランシー!!」

「案ずることは無い。今、単なるものに掛っていた魔法を解除した。しばらくすれば、目覚める」

「ありがとうございます。水の精霊様、ヴェーグル卿」

ギーシュが涙を流しながら、我々に感謝をしてくる。いい事をした後は気分がいいな。やはり、人助けは私の本分だな…。

「裏切ったな、ギーーシュ!!」

感動のシーンの最中、空気を読まない犬の声が響いた。

おいおい、エンザイム?二体の攻撃を避けながら大声を出すとは随分と余裕だな。だが…既に全身スタボロだな。三女も必死に失敗魔法で先制をするが…エンザイム?に与えるダメージは微々たるものだ。

持って後数分：

「う、裏切っただとおおお！！ よくもそんな事が言える！！
貴様のせいで一体どれだけの人間が不幸になったと思っっている。モ
ンモランシーに惚れ薬を飲ませた事を僕が知らないとも思っただか
！！ この屑があ」

いいぞ、ギーシュ。

憎しみで人が殺せるならば、犬はギーシュに何百回殺されているだ
ろう。眼には、その位の憎しみの炎が宿っている。

「そろそろ、部外者にはご退場願いましよう」

ロマリア兵が全滅し、残るは三女と連れのスエスタ。そして、戦車
を操る水精霊騎士隊のみか。

「た、助けってくれヴェーグル卿。俺達は、サイトに騙されていたん
だ」

「ヴェーグル卿を捕えたら、王女殿下に口利きをして爵位をやると
言われたんだ。決して敵意があつたわけじゃないんだ」

「サイトがあんな屑だなんて知らなかつたんだ」

はっはっはっは

ギーシュが寝返り、ロマリア兵が全滅、犬も三女もエンザイム？に
やられるのは時間の問題：それを見て急に手のひらを返したような
態度。

「そうかそうか：騙されていたなら仕方ない。だけど、先ほど戦車

の砲撃を私にお見舞いをしてくれたね。いやー、危なかった。一歩間違えば死んでいたよ…だからさ、君達が私の砲撃に耐えきれれば生かしてあげるよ」

そう・・・耐えきれればね。

「ラミエル」

懐からラミエルを取り出した。手乗りサイズからどんどん大きくなり、量産機と同じくらいのサイズにまでなった。

「久しぶりの戦場だ…全力を出して構わんよ ラミエル。但し、犬と三女には当てるな。狙いは、アレだ」

ラミエルがエヴァ序で都市の防護アーマーを破壊した形状へと変わった。相変わらず美しい形状ですな。

「ほ、本気なのか…」

「みんな、戦車の中に隠れる！！」

「どけええ！！俺が先だ」

戦車の中か…着眼点は悪くない。あの鉄の塊ならば、スクウェアメイジの魔法にもある程度は耐えられるだろう。だが、君達はラミエルの火力を甘く見過ぎだ。

「ギーシュ、別れの言葉はあるかい？」

「何もありませんヴェーグル卿」

良い返事だ。

「感謝するといい、痛みすら感じぬ間に死ねるのだから…薙ぎ払え
！！」

ズドドドドドーーーーー

ラミエルから極太の閃光が放たれ、地平線の彼方まで綺麗に消滅した。地面は熱で焼け焦げ、蒸気が立ち上がった。圧倒的熱量の前に、旧式戦車の装甲など紙も同然！！あの威力ならば、エヴァ量産機ですら蒸発させられるだろう。

「はっはっは、見たかギーシュ。これこそ砲撃の真髄よ」

すごいだろラミエルの荷電粒子砲は！！

なんだいその引きつった顔は、もっと喜んでくれよ。危うく、君も先ほどの連中と同じ末路を辿る事になったかもしれないのだからさ。さてさて、かなりの衝撃はあったが…あいつら生きているだろうか。

残る三女と犬とシエスタを見てみると、先ほどの衝撃で吹き飛ばされあちこちに擦り傷を作ってはいるが五体満足だ。

「な、なんなのよアレ！！」

そんな最中、聞き覚えのある三女の悲鳴が聞こえた。

S i d e e n d

S i d e ルイズ

「な、なんなのよアレ!!」

さっきまでそこにいた戦車が無くなった。

一体何の冗談よ…あんな鉄の塊を一瞬で消滅させる!? 「冗談でしょう。そんな私の虚無でも出来るか分からないのに。」

それに、なんでアイツは笑っているのよ。

同じ学院の生徒を何のためらいもなく殺せるものなの…この人殺し!!

お父様やお母様だけでは飽き足らず、私の周りにいる皆があいつの手で殺されていく…嫌!! なんて私だけこんな思いをしなきゃいけないの!! 一体、私が何をしたっていうのよ。

「サイトさん、危ない!!」

はっ!!

今は、サイトを助けないと!! どんな魔法を使ったか知らないけど…平民を化け物にするなんて絶対に許さないわ。私が必ず元通りにしてあげるからね。

しかし、そんな私の思いは神へ届く事は無かった。

「ぐああああああ!!」

悲鳴と共にサイトの利き腕が空を舞った。

今まで、ガンダールヴの力を駆使して避け続けていたが、先ほどの爆風でバランスを崩し化け物に腕を食いちぎられた。

「サイトオオオオ!!」

「サイトさーん」

嫌!! サイトまで失いたくない。お願い、もう私から誰も取らないで。お願い!!

怪我で動けなくなったサイトに二体の化け物が君の悪い口を大きく広げて襲い掛かろうとしている。

「やめ……」

「止まれ エンザイム？」

今まさにサイトを襲いかかるうとして二体の化け物がアイツの一声で止まった。アイツは、ゴミを見るかのような視線で私達を見下してきた。

「つまらんな…もう、逃げ切れなくなったか。しかし、人間にしてはよくやった。最後位は、褒めてやろう。昼飯のよい余興になったぞ」

ひ、人の命を何だと思っているのよ!! あ、あんななんか人間のクズよ。貴族の恥よ!! と言つてやりたい。だけど、だけど…ここでそんな事を言つてしまえばすぐにもサイトの命が。

「お…お願いします。どんなことでもします！…ど、どうかサイトとサイトのご両親の命を助けてください」

「私からもお願いします。ヴェーグル様。今までの非礼は、いかような処罰も受けます。ですから、サイトさんを助けてください」

例え、あいつが人間のクズでも人でなしでも今は只々頭を下げてくださいする事しかできない私が惨めで仕方がない。でも、あの怪我じやサイトが死んじゃう。今も苦しそうに息を吐いて目から涙も流している。

サイトの為なら例え親の仇にすら頭を下げるわ。

「良い心がけだ…最初からそうしていればお互い円滑に物事を進められたのですがね。まあ、今回だけは公爵家の三女が頭を下げた願までしたので特別に温情を与えても良いでしょう」

何が温情よ…私が頭を下げざる負えない場面を作っておいて恩着せがましく。

「くっ…あ、ありがとうございます。早く、サイトを助けてください」

その瞬間、今までにない位アイツの目が笑っていた。

ま、まさか…！

「苦しむ平民に救いの手を差し伸べるのも貴族の務めだ。すぐに楽にしてやるっ…」

サイトが居た場所を見つめる私達にあいつがやって来た。

「今更ながら自分を褒めてありたいね。あんなゴミを今まで生かしておいてあげたのだからさ。……そうそう、これで終わったと思うなよ。次は、お前の番だ。ルイズなんちゃらヴァリエール。ギーシュ、二人を捕えておけ。三女は、虚無の使い手だ。何をするか分からん以上、手足の数本削いでも構わん。絶対に逃がすな」

「分かりましたヴェーグル卿。ヴェーグル卿は、どちらに？」

「決まっているだろう。トリステインの功労者に挨拶に行くのだよ。きつと、苦勞から解放されて髪の毛がフサフサになっているに違いない」

誰か助けてよ……。

ギーシュが何故かワルキューレを召喚し私の方へ歩いてきた。

さっきと、あいつと同じ目だわ。

S i d e e n d

主人公は、慈悲深い。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次週は、トリステインへ舞い降ります。

アホリエッタの母親は、子供の責任を取らせるとして…
マザリーニはどうしようかな。出来れば救ってあげたいな。

今週は頑張って日曜日に更新を目指します。

素人小説で色々都合主義やイミフな展開が多いですが、
完結まで頑張りますので宜しくお願い致します。

主人公は、感服する。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想で、色々な方から犬の処理が

簡単すぎだったのではないかと厳しいご意見を頂いてしまいました。
作者の力不足です、申し訳ありません。

今回は、マリアンヌとマザリー二編です。

主人公は、感服する。

Side レイア

お空の旅を楽しんでいるレイアです。

今、私達はラミエルを足場にして、トリステイン王都がある遙か上空に居る。

虎街道から途中までは走って来たのだよ。だけど、音速以上の速度が出てしまいソニックブームが発生してしまった。そのせいで、あまりにも被害が出る為泣く泣くラミエルに運んで貰っております。

腐れ貴族の家を踏みつぶすとかなら問題ないのだが…善良な平民の家や畑を駄目にしてしまうのは、私の小さな良心が傷つくからね。

『じゃあ、ティファニア先に行っているから後からおいで』

『分かりました』

私は量産機の羽を広げて飛び降りた。

マザリーニ枢機卿は元気にしているだろうか…あの人には色々と便宜を図って貰い世話になったからな。是非とも私にもしくはガリアに仕えて欲しいね。あれ程有能な人物は、そうは居ない。だから、その能力を然るべき場所で発揮するべきだと私は思うのですよ。

しばらく滑空した後王都近郊へ降り立った。

さてさて…ティファニアは、まだ空の上にいるようだから先に行っちゃいますか。どうせ、王都防衛に当たっている人材など私達の敵ではないのだから。

案の定 王都の入り口には、ゴーレムを中心とした守りが形成されていた。しかも、なぜがその中にとても身に覚えのある土のゴーレムがいるのが目に入った。

………

………

…

何やっているだ…マチルダさんよ。あんた、元盗賊でしょ!! こうしては、埒があかない。とりあえず、マチルダに渡していた携帯に電話を掛けた。

『ちょっと、なんでトリステイン王都なんて防衛しているんだよ! ?』

『げっ!! やっぱり、目の前にいるゴーレムはあんたのかい。通りで悪寒が走るはずだ…いや、ワルドの野郎が聖地に行くとか言い出してさ。ちようど、トリステイン王都を徘徊していたら、傭兵募集と記事があつて二人で飛びついたのさ』

ワルドとまだつるんでいたの! ?

というか、いや…これはマチルダのゴールインフラグじゃないか! ! 義姉の幸せを実らす手伝いをするのも私の務めだ。

それにしても、性地に行きたいのか…それなら私に言ってくれれば

いいのにね。伊達に、性地の副統領をしているわけじゃないぜ。人間の一人や二人いつでも招待できる権限はある。

『まあ、傭兵にはどこと闘うまでは開示されていないだろうし仕方ありませんね。ガリアと闘うとなれば誰も集まりませんから』

『まあ、そういうことだ。うちらは、これで撤収させてもらうさ』

『そうしていただけると助かりますね。流石に、義姉にこの手に掛けるのは少しばかり気が引ける。そうそう、性地に行くなら後でうちの領地に来てください。喜んで送って差し上げますよ』

ちよつと、薔薇族の方もいらっしゃるので一緒にお送りしてあげましょう。

『そ、そうか…じゃあ、戦争が終わったらワールドを連れて向かわせてもらうよ』

『お待ちしております。後、撤収するなら早い方がいいですよ。もうすぐ、これの同系機がそこに降ってきます』

『え…まじーぞワールド。いいから、グリフォンに乗って逃げるぞ！早くしろ』

電話が切れると、防衛隊が居る地点から物凄い勢いで離れていくグリフォンに乗った二人組が見えた。

次の瞬間。

ティファニアの量産機が、文字通り降って来た。翼で優雅に滑空し

てくるとかでは無く…まさに急降下だ。

ドドドドオオooooooooooooon。

50m級のゴーレムが落ちてきた場所は、見事にクレータになっていた。当然、防衛隊などどこにも居ない。

『見てくださいレイアさん。10点満点の着地です。…あ、マチルダ姉さんだ』

確かに、これがオリンピックなら間違いなく10点満点だな。けど、せめて足元は見ましようね。私が警告しなかったら貴方の姉もお陀仏だったよ。

ジリリリ ンジリリリ ン

マチルダからお電話の様だ。

『おい！！ あれ絶対にティファニアが乗っているだろう。なんで物をあの子にあげてるんだよ。危うく、死ぬところだったぞ』

『いや、あげたのは私じゃないよ。親友のビダーシャルだよ。それに、ティファニアの操縦技術は私以上だから、着地の瞬間にマチルダ達だけ助ける事など訳ない…はずだ』

そう多分大丈夫だ。

万が一だけでも、ティファニアの能力で何とかすればいいしね。…
よくないか。

『はあ…もうアンタたちに付き合つのは疲れてきたよ。さっさと戦争終わらせてくれ。それまでこちらは、どっかに隠れているよ』

『そうしてくれるとありがたい。では、戦後に会いましょう』

『ああ、ティファニアにもよろしく言っておいてくれ』

相変わらず苦勞しているようだなマチルダは。

さて…蹴散らそうと思っていた防衛隊も居なくなってしまう王宮まで一直線だぜ。

王宮前にて。

流石に王宮内部にまで量産機に乗って突撃できないので仕方なく降りてあげた。正直、量産機に乗ったまま突撃すれば、それで戦争は終了するがマザリーニごとお別れになってしまうので控えておきました。

それにしても…人の気配がまるでないね。

恐らく、マザリーニが事前に逃がして置いたのかな。もし、そうだとするなら良い判断だ。歯向かう者は皆殺しにする様にガリア王からいわれている手前立ち塞がるならば、例えメイドであろうとも始末するつもりだったからね。

「私が来ることが事前に分かっていたなら、せめて王宮の門は開けておいてほしかったね。仕方ない…殖装!」

ゼルエルを全身に身に纏い、分厚い鉄の門を軽くノックした。

10m近い分厚い扉がねじ曲がりすごい勢いで後方へ飛んで行った。そして、柱を破壊しつつ、反対側の壁に刺さりようやく止まった。

もろい扉だな…これならラオウ様の鼻息一つでお城が吹き飛ばんじやないかな。

私が感知する限り、この王宮には王座がある部屋に二人の男女、そして部屋を守るかのように幾人かの間人がある。恐らく、王座の間にいるのがマザリーニとマリアンヌだろう。

「貴方の優秀な部下が今すぐ参りますよ」

自分で言うておいて難だが…私って優秀な部下だよな？

Side end

Side マザリーニ

先王には、色々世話になった。そのせめてもの恩返しと思い、この国に骨を埋めるつもりで頑張っては来たが…どうやら、それも今日までのようです。

ギリギリのラインで支えていた国家の状況がよもや、たった数人の手によってこつとも寛太に崩壊しようとする。だが国民にとっては、国のトップが変わるだけで何ら支障がないのがせめてもの救いだ。寧ろ、ガリアの属国になる事で様々な面でプラスになる可能性すらある。

「マザリーニ、状況はどうなっているのです」

「王都防衛の陣を突破され、既にこの城内部に侵入されました。ここまで来るのも時間の問題かと…」

もとより、あの程度の戦力では足止めなど出来るはずも無い。仮に、ヴェーグル卿に対抗するならば…エルフに支援を頼むしかないだろう。最もエルフの盟友とも言われているヴェーグル卿と闘ってくれる者など居るはずも無いがな。

それにしても…空から降り立った二体の巨大なゴーレムのうち一体がいまだに王都の外に居るのが気がかりだ。一体何をやっているんだ。

この時、ティファニアは量産機を使って水銀燈と xゲームをして遊んでいたのである。ちなみに、水銀燈は xゲームの絶対に負けない方法を取っている為 決して負ける事は無かった。

「なんとか、その者を味方に引き入れる事は無理なのですか？ 聞けば、顔見知りだと言う事ではありませんか」

「ふふふ、残念ながら既にそれは無理でしょう。確かに、彼はトリステイン貴族でもありますが同時にガリアの伯爵でもあるのです。現在の戦況や今後の事を考えればどちらに着くかなど自明の理です。後、こう言うっては何ですが…彼は、長い物には巻かれる主義です。で今のトリステインに着く事は天変地異が起こっても無いでしょう」

ピリリリリピリリリ

ヴェーグル卿から貰った電話が鳴り響いた。

相手を見ると…当然、ヴェーグル卿であった。

『久しぶりじゃの ヴェーグル卿』

『久方ぶりです。なんだか、今日のお声はいつもより元気そうですね。それにしても「長い物には巻かれる主義」ですか…確かにそうですね。だけど、少しだけ思い違いがありますよ。私は、金や権力が欲しいからガリアに着いているわけじゃありません。エルフの命令でガリアへ出向しているんです』

『エルフの命令だろうが、ガリアの命令だろうが、トリスティンに着いてもらえん以上大差ない。して、今の発言が聞こえたという事は既に近くまで来ているのだろう』

「錬金!!」

硬く閉ざされていたはずの扉が砂に変わった。

扉の向こうには、携帯電話を片手に不気味な仮面を着けた人型サイズのゴーレム？らしき物がいた。しかも、王座の間の入り口を固めていた貴族達が何処にもおらず…あるのは真っ赤に染まった床だけであった。

これで、また一つ私の仕事が片付いたな。

実は、ここの守りをさせていた貴族達は、脱税や重税などで平民から金を筆記り取るだけの害虫の様な奴らだ。もし、守りきれたら公爵にしてやると言ったら我先にと護衛を引き受けてくれたわ。

「早かったな…さあ、我々は逃げも隠れもせぬ。殺すがいい」

もはや、この世に未練などない。

S i d e e n d

S i d e レイア

「早かったな…さあ、我々は逃げも隠れもせぬ。殺すがいい」

王座の間に着いてみれば、いきなり殺してくれと言って来るマザリーニ枢機卿。

貴方の忠義には感服致します。

この国の奴らは、もっとマザリーニを称えるべきだと思う。「鳥の骨」など馬鹿げたあだ名をつけた奴を八つ裂きにしてやりたいよ。

この人相手には、ゴーレムを着たまま話しかけるのは無礼だな。

私は、ゼルエルを脱ぎ捨てマリアンヌでは無くマザリーニの前にひだを突いた。これが私に出来る最大級の事だ。

「お迎えにあがりましてマザリーニ枢機卿。是非とも私と一緒にガリアへお越しただけませんか。決して、悪いようには致しません」

貴方には、ぜひ戦後の統治をやってほしい。

シヨゼフも属国としてトリステインにマザリーニ王朝を作っても良

いと言っているくらいだ。後、出来る事なら新しいブリミル教の教皇にもなつて欲しい。ロマリアにいる信者どもは、まもなく跡形もなく消えてなくなるだろう。だが、各国に散っている信者が後釜を巡つて動き出す事は確実といえよう。どこに潜んでいるか分からない連中をしらみつぶしに始末していくのは骨が折れるのでね。だから、貴方にトップに立つてもらい上手にブリミル教を先導して欲しいのですよ。

「貴方が噂のヴェーグル卿ですか…アンリエッタを貴方に差し上げましょう。それで、貴方はこの国の王です。だから、今からトリステインに付いてガリアと闘いなさい」

・
・
・

空気読めよ　ババアが！！

マザリーニに話しかけているときに横からしゃしゃり出てきて何を言い出すかと思えば、アンリエッタをやるからお国の為に働けだ！！

ふ、ふざけるなああああ！！

あんなの不良物件、いくら金が積まれよう誰が貰うものか。それに、この国の王とか何処をどうとってもマイナスにしかならないだろう。腐れ貴族の大半は、始末したが…まだ、膨大ともいえる各国への借金が残っている。

後、これが一番重要なのだが…

私は、働くのとか大嫌いなんだよ！！

大声をあげて文句を言ってやりたいが…今は、マザリーニを優先だ。

「…残念だが、私は君と一緒にには行けぬよ。私は、マリアンヌ様を先王の元まで送らねばならぬからな」

今は無き先王の元へ送るという事は…既に、死を決意されている。

ここで、私が顔馴染みの冥闘士スベクターに電話をかけて三途の川の手前まで先王をマリアンヌの迎えに寄越す事は簡単だ。そうすれば、マザリーニは仮死で済む。

だが、そんな事をすればマザリーニの思いが…行動が全て締りのないまま終わってしまう。

そんな無粋な真似できるはずが無いだろう。

「もはや、何も言いません。せめて、このレイアが苦しまずに逝けるように介錯を仕ります」

「最後の最後まで世話になる。わしの分まで君は、幸せになるじゃぞ」

「言われずとも、私は十分幸せですよ…では、来世でお会いしましょう」

私は、人差し指をマザリーニ枢機卿の秘孔へと突き刺した。

マザリーニ枢機卿は、ゆっくりと眠るように床に崩れ落ちた。死に

顔とは思えぬほど、幸せそうな顔をしていた。

「これで、話の分からない頑固者は居なくなりました。さあ、トリステインの為にガリアへ赴きすぐに戦争を止めてきなさい」

・
・
・

ブチ

さ、流石に私の堪忍袋の緒が切れました。

それが、国の為に死ぬまで尽くした者に対してかける言葉か！！

そもそも、てめえーが王位を継がなかったせいで稀代のアホと言ってもいいアホリエッタが信じられないような事件を起こしまくったのだから。

ああ、もう駄目だ。マザリーニの顔を立ててせめて苦しまずに殺してやろうと思ったが、我慢する必要ないよね。

「貴様には、安らかな死など与えん！！
激振孔げきしんこう！！」

ズブリ

短い時間だが…自分が行ってきた事を振り返り反省しろ！！

「い、一体何をしたのです。やあ…あ、し、心臓が…はあはあはあ
ああ」

私は、マリアンヌの血管が浮き出るのを確認し、マザリーニの死体を持ち王座の間を退出した。

「ぎゃあああああああああ！！」

部屋を出た後、女性の苦痛の悲鳴が聞こえた。

さて…マザリーニのお墓は、うちの領地にでも建ててあげるかな。

事実上の支配者であった二人が死に、トリスティンと言う名の国はこの時をもって滅んだ。

S i d e e n d

主人公は、感服する。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は、ゲルマニアにいる部下を迎えに行こうと思います。

ロマリアへは…多分行かないかと思えます。

教皇の処分は、ジョゼフ任せw

今後もよろしくお願い致します。

主人公は、血の雨を降らす。（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

更新が遅くなってしまい申し訳ありません。

主人公は、血の雨を降らす。

マザリーニを実家の近くにある丘に埋葬して、ゲルマニアに来たレイアです。

ゲルマニア王都の大昼間にて。

ああ…それにしても、惜しい人を失った。

失った人を取り戻す事は……ぶっちゃけ、簡単だ。アンドバリの指輪、大嘘憑き、その他エルフの先住魔法と上げればきりがない。なんだか、命の価値がどんどん安くなっていくな。

おっと、マザリーニの事はとりあえず置いておくとしよう。

今は、この世界の珍味を味わおう。

私の目の前には、ハルケギニア中から集められた食材が溢れんばかりにある。もちろん、ゲルマニア誇る料理人が調理している為、味は1000点満点だ。

「美味しいですね、レイアさん」

「最高だな。将来的には、私もこの域に達したいものだ」

ティファニアもご満足の様だ。

「その様子だと、随分と張り切って仕事をしてくれたようだな？ウエールズ」

私は、疲れ切った顔で後ろに立っているウェールズに声をかけた。部下のメンタルケアも上司の仕事だからね。

「いえ、昨日も10人程相手をさせられまして色々疲れが溜まっておりまして…それよりも、お食事よりも式典に集中した方がよろしいではありませんか」

ひ、一晩で10人だと…アルビオンの王族は、化け物か！！

何の式典かと言うと、【ロマリア・トリステインとの戦争終結】と【ガリアとゲルマニアの平和条約】の二つを祝つての式典だ。当然出席者には、ガリア王とアルブレヒト3世をはじめに各国の重要人物が集まっているのだ。ちなみに、ガリアでも当然戦争終結のお祭りは行つ予定だ。

そんな重要人物の中に私とティファニアも混ぜられているのである。

既にロマリアとトリステインと呼ばれている国は消滅している。ロマリアもトリステインも指導者が居なくなり今は、ガリアの戦後処理待ちだ。ロマリアの状況は同じだがトリステインに比べると戦後処理は微々たる物だ。なんせ、生き残りが教皇ただ一人だからね。だから、戦後処理なんて物は 無いに等しい。

エルフを害悪と触れ回る宗教など、滅びて当然。ガリアが滅ぼさずとも私が時期を見て始末していただろうしね。

生き残った教皇についてだが、無論殺していない。死んでしまうと虚無が他の誰かに移ってしまうからね。だからm確保に当たり忠実な手駒になった元公爵夫妻を使つたよ。量産機だと、パワー的に殺

しかねないからね。

これで、私はジョゼフを除いた虚無を全て確保した。ジョゼフを確保するのは難しい話ではないが…先に手を出すのは私の信条に反するところもあるので、ジョゼフ確保は保留だ。だから、私は今回の戦果としてジョゼットを頂くとしよう。そうすれば、ジョゼフを排除せずとも寿命を待てば必然的に全ての虚無がエルフの管理下に置かれる。延命処置または、時間の牢獄にでも閉じ込めておけば問題あるまい。貰ったモノをどう扱おうと私の勝手だしな。

これで万事解決だ。

「これより、戦犯アンリエッタの公開処刑を執り行う！」

いよいよ、本日のメインイベントだ。

ゲルマニア王都の大広間で行われる為、当然 一般市民達も観客だ。しかも、舞台のセッティングには少なからず私も手伝いを行い某海賊王の処刑台を再現してあげた。ただし、ギロチン式だがね。

市民達がアンリエッタの処刑が発表された瞬間どよめきだした。

王家がどうか、始祖の血統がとか、異端だとか…ひそひそと言っているのが聞こえる。だが、その程度の事を気にする奴等おらんだよ。我々、ガリア・ゲルマニアの参列貴族にはね。

裁判官の様な男が、アンリエッタの罪状を読み上げていく。アルビオン戦の罪状、国内内戦での罪状、ガリア戦での罪状…大きな罪はこの位だ。他にも汚職貴族達を放置して罪状など上げればきりがない。ちなみに、国内内戦とか私の実家の事だ。

よくぞここまで罪を重ねられるなと思えるくらいの内容だ。既に10分ほど罪状を読み上げているがまだ終わらない。罪状の中には、犬を貴族にした事に対する任命責任に関係するものまで混ぜられている。

・
・
・

「以上が罪状である。よって、この場を用いて元トリステイン王国女王アンリエッタ・ド・トリステインの処刑を行う」

「ううー、ううううー!!」

なにやら、ギロチンに繋がれているアホリエッタが何か騒いでいる。最も、口枷があるせいで何を言っているか分からないがな。自分の罪状に文句でもあるのか、それとも命乞いか？

まあ、このまま罪状に対して文句も言わずに始末するのは少しばかり不公平感があるな。

私は、ジョゼフとアルブレヒト3世に許可を貰いアホリエッタの口枷を外させた。優しいから遺言位は聞いてやるよ。もちろん、聞いてやるだけだな。

「な、何をしているのです!! はやく、そこに座っている不屈き者を捕えて私を解放なさい!! あの者は始祖の血を引く王家に反逆したのです。それに、エルフを妻に迎えるなど異端者です」

口枷を外した途端に大声で民衆へ語りだした。

この状況に置いて、アホリエッタが何を言おうが無駄だ。ジヨゼフとアルブレヒト3世が処刑に同意し、この場にいるのだ。それを無視して、アホリエッタを助け出す愚行など保身に長けた貴族が行うはずも無い。無論、それは民衆とて同じ。貴族以上に命を軽んじられる平民が、大国の王を前に意見などするはずも無い。

「くっ、ウェールズ様！！　どうか目を覚ましてください。私です、貴方のアンリエッタです。覚えていませんか？」

ウェールズの絶対零度の視線がアホリエッタに送られる。

それにしても、「貴方のアンリエッタ」とかこんな公の場で吐くセリフじゃないよね。流石の私もウェールズに同情したよ。

「どうして何も言ってくださらないのです。このゲルマニアに貴方と逃げてきてからというものは…私は…」

他の女を抱いているのを見て興奮していたのですね。言わずとも分かりますよ…糞ビッチだもんな。

思わず口元がにやけてしまった。

すると、アホリエッタが何やら決意したような目で、私を睨みつけてきた。

「ウェールズ様を使って私を貶め。お母様とマザリー二枢機卿を手に掛けて一体貴方は何がしたいのです！！　あ、貴方なんて異端の極みです。もし、私が死んでも必ず天罰が貴方に下るでしょう。そ

れまで、その汚らわしいエルフと一緒にいるといいわ」

ソワ

私の殺気で大昼間を中心に虫や動物たちが騒ぎだし、一斉に王都から離れようと逃げ始めた。

アホリエッタよ…私の事を何て言おうが構わない。端的に見ればマザリーニに手を掛けたのも事実だからな。だけど、ティファニアの事を悪く言うのはいただけませんな。そう、実によくない。人には誰しも禁句タブーがあるのですよ…アホリエッタは、発言は見事に禁句タブーに触れた。

「レ、レイアさん。私ってそんなに汚らわしいですか？」

ティファニアがアホリエッタの言葉を気にしてか、涙目になりながら私に尋ねてきた。

「心配するな ティファニア。ティファニア…君は誰よりも美しい。もっと自信を持っていいぞ。愛してるよ ティファニア」

「レイアさん」

ナデナデ

ジヨゼフや周りの貴族から、何やら不快な視線を感じるが…まあ、問題ない。

私は、ティファニアを撫でつつ私の後ろで待機しているウェールズに命令した。

「ウエールズ…アレを物理的に黙らせて来い!!」

「はっ!! 直ちに」

ウエールズにより、リンチが始まった。

アホリエッタの顔面を生き活きた顔で殴るウエールズ。軍人としての訓練を積んでいるウエールズの拳は存外重く、一撃一撃が青あざになる威力だ。ウエールズは、自分の拳の痛みすら顧みず一心不乱にアホリエッタの顔をフルボッコにしている。

「これがアルビオンの民の分!! これは、ヴェーグル卿の分!!」

これは、私の従妹ティファニアの分!! これは私の分!! これも私の分!

!これも…」

なにやら、聞き覚えてのあるフレーズが沢山混じっているが気にするほどの事でもないだろう。

ウエールズが殴り疲れた頃には、アホリエッタの顔が見るも無残な青アザだらけのパンマンみたいになっていた。あれが、トリスティンのラフレシア? だっけな…と言われた花とはね。実にお似合いな顔じゃないか。

「ぐぼつつぼ、ご、ごべんなさい。ごめんなさい」

私に文句を付けたかと思えば、今度は許しを請い始めた。

おいおい、そんな醜い顔で謝るなよ…ぶち殺したくなるだろう。

「満足したか、ヴェーグル卿」

「まだまだ物足りないですが、あまり民衆を待たせるのも申し訳ないので続きを執り行ってください」

ジヨゼフが私の回答を聞き、指揮を進めるように促した。

式は、その後も滞りなく行われ誰も意義を唱える者はおらなかった。むしろ、アルビオン戦で親を失った子供達から石が投げつけられるなどのハプニングがあつたが…面白いので放置しておいた。人間とは、怖い物だな。一人が罵声を始めるとまた一人…また一人とどんどん増えていくのだからね。しまいには、殺せコールが大広間を覆った。

「被告人、最後に言い残す事はあるか？」

「…にたくない。しにたくない。わ、私は悪くないのよ、悪くない全部、あの悪魔のせいなのよ。そうよ、これは悪い夢なのよ」

既に、アホリエッタの耳には言葉はとどかないようだ。

性的にも肉体的にも疲れているウェールズには悪いが、ギロチンの刃を支えている一本の紐を切るといふ大仕事をやってもらおう。

ウェールズがギロチン台に上った。

私は、ウェールズに口パクで命令する。

ヤ・レ!!!

「さつさと、くたばね。このアバズレが!！」

ウエールズが渾身の掛け声と共に、ギロチンの刃を支える紐を切った。

当然、ギロチンの刃は重力によりアホリエッタの首へ一直線!!

「いやあああああああー……」

ボトン…プシャー……

アホリエッタの首があった場所から大量の血が吹き出し、血の雨を降らせた。

そんな光景を見て私は、最高にいい気分だった。これでまた一人、私に歯向かったものが消えたのだからね。

アホリエッタの首は、元トリステイン王都でさらし首にすべくゲルマニアの兵士によって運ばれていった。

これには、一件落着である。

さて…お昼の余興も見終えたし、次のごみ掃除に行くとしようかな。

「ウエールズ、お前は先に私の実家に帰っている。そこが、今後の君の職場だ」

そう…男なら誰にでも出来る簡単な仕事さ。

王家には、血族同士だけが行使できる専用のスペルがあるんだろう。

今後の事も考えて戦力強化は必要だと思っただよ。だから、頑張っ
て地下室で励めよ。地下室でタンクになっている者達には、少な
から女もいるからな。もつとも、ゲルマニアで抱いていたような美人
ばかりじゃない。中には、オークの様な女もいた気がするが仕事な
ら仕方あるまい…私から言う事は「抱け」の一言だ。

おっと、私もゲルマニアで長居をしているわけにもいけないのだっ
た。まだ、殺らねばならない事があったのだ。だが、その為には、
ギーシュに連絡を入れておかねばな。私は、携帯電話でギーシュに
すかさず連絡を取った。

『ギーシュか、モンモランシーの調子はどうだい？』

『ヴェーグル卿、もう式典は終わったのですね。モンモランシーは、
体の方は問題ないのですが心の方がまだ回復しておりません。くっ、
これも全てあの野郎のせいだ…』

そうか…まあ、記憶がある分辛いだろうな。

『君が望むのならば、モンモランシーの犬の事に関する一切の記憶
を消してやってもいいぞ』

それを可能にするだけの技術も私にはある。北斗神拳に不可能はな
いのだ。

『ほ、本当ですか！！是非、お願いしますヴェーグル卿』

『よかるう。では、モンモランシーの記憶を消す前に君にはやって
もらいたい仕事がある。出来るな？』

『このギーシュ。今ならば、不可能はございません』

良い返事だ。

なーに、簡単な仕事だよ。君が、確保している二人をトリステインのある屋敷まで連れてくる。ただ、それだけの事さ。

翌週、某貴族宅にて。

もっと早くに、訪れる事が出来ると思ったたら存外時間が掛ってしまった。なんで、どいつもこいつも私達を会食に誘うんだよ。ティファニアが飯に釣られるせいで大変だったよ。幾人か、殺しそうになったが…頑張って半殺しで許してあげたよ。特に、ティファニアに色目を使う輩や私に夜這い掛けてくる輩とか馬鹿者にはキツーク制裁を加えておいた。

「こちらで、奥様がお待ちです」

老執事に案内され、私とギーシュ、三女、そして元公爵夫妻を連れて部屋の扉の前に到着した。三女は、やせ細り目は虚ろになっている。ご自慢だったピンク髪も牢屋の埃で汚れ雑巾のような色だ。これでは、街に居る乞食と大差ないな。

きたねー身なりだ。これが、元公爵家の三女とはね。

後、両手は杖が持てない様にギーシュによって手首からすっぽりと切られたようだ。流石は、魔法使いだ。自分がやられて嫌な事をよく理解しているな。

ちなみに、ティファニアは実家に置いてきた。理由は特にないが、ティファニアが出張る程の事でもないからね。今頃は、雛苺と遊んでいるのではないだろうか。精神年齢が近そうだし…ちようどいい遊び相手だろうな。

シエスタは、とりあえず屋敷の外で待たせてある。完全な部外者だからな。始末するのは最後で十分だ。

前置きは、この位にしておいて久しぶりのご対面と行こうじゃありませんか。

バタン。

扉を開けると、中にはピンク色の綺麗な髪をした一人の女性が居た。他に特徴と言えば…不自然に膨らんでいるお腹だろう。

「お待ちしておりましたヴェーグル卿」

待たせてしまったか…女性を待たすとは紳士として行けないよね。やはり、最初にお礼参りに来るべきだったか。

それに…変わり果てた両親と妹をみて動じない精神力。素晴らしいぞ。

「よい、心がけだ。では、貴方の両親と姉妹のツケを清算してもらいましょうか」

なーに、命までは取らんよ…命はな。

主人公は、血の雨を降らす。（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

これで、アホリエツタも死に、残るは三女とおまけの侍女のみです。
さて…次週は、三女とお別れです。

作者の中では、後数話で完結目指せるように頑張ります。
もう少しですので、お付き合い願えたら嬉しいです。

主人公は、手を抜かない。(前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

感想をくれた方々ありがとうございます。
皆様の声を日々の糧として頑張ります。

主人公は、手を抜かない。

Side レイア

元公爵家次女のカトレアと対面しているレイアです。

テーブルを挟み私と次女が一对一になっている。私の連れは、皆後ろに立たせている。三女は次女の姿を見て助けを求め騒ぎ出しそうだったので、ギーシュのワルキューレにより口を塞がれ床に押さえつけさせた。

それにしても、三女とうって変わり 随分といいご身分ですな。両親、姉妹が惨めに生き恥を晒しているというのに、見て見ぬふりをしてノウノウと暮らすのは大層幸せであったでしょう。だが、その幸せも今日で終わるのですよ。ヴェリエール一族は色々やりすぎたのだ。本来であれば、親や姉妹のツケを一族に肩代わりさせようなどとは思わないが：お前等一族だけは別だ。

確かに、次女は何もしていない。だが、それが最善かと言うと生憎と違うのだよ。次女にとって最善だった行動は、自ら兵を率いて公爵を討つ：これが正しい選択であり、君が幸せになれるであろう唯一の選択であったのだ。

「私を待っているであろう。用件があれば、聞こうじゃないか。私の用事は大した事じゃないから後でもいいさ」

私は、ジェントルマンだからな。このような場においてもレディーファーストの精神を忘れないのだ。

「お気遣い感謝いたします。ご存じのとおり、私は病を患っております。私の両親や姉妹が多なご迷惑をおかけした事は深くお詫びいたします。どうか、今まで通り鎮静剤を今後とも売っていただけませんか。もちろん、値段はいい値を払います」

もしかして、謝れつて金を払えば私が薬を売ってくれるとも思っているのかな。確かに、金は大事だ。とある人の名言で「金は命より重い」といった言葉があるくらいだ。しかし、金が欲しい以上に私はお前の両親が父上の腕をもぎ取った事にご立腹なのだがね。

「いい値とは、大きく出ましたね。恐らく、お腹の子供が生まれるまでの期間なんとか無事に過ごそうという魂胆が見え見えですな。確かに、鎮静剤が切れたらお腹の子に悪影響がある事は火を見るより明らかですからね。お腹の子供には悪いけど、金なんて掃いて捨てる程あるので鎮静剤は諦めてくれ。運が良ければ、元気な子供を産めると思いますよ…たぶんね」

そう、運が良ければ鎮静剤無しでも子供は産めるだろう。ただ、次女の病は当初とは比べ物にならないくらい重い物になっているから、無事に子供を産める確率は砂漠に落とされたコンタクトを見つけない確率だがね。以前に、長女が鎮静剤の劣化品を作成している疑惑があったのでビダーシャルをお願いして、毎回薬の成分を変えて様々な病気を感染・治療する方向に変えたのだ。えっと、今は何の病原菌を保菌していたかな…確か、地球の医学でも難病と呼ばれる物だった気がするが実家に病状を書いたメモを忘れてしまった。

次女が静かに席を立ち、私の横に来て土下座した。

そんなお腹で土下座は止めてくれよ。まるで、私が妊婦をいたぶる悪代官みたいじゃないか。だが、そんな事されようとも…

「正直、貴方に鎮静剤を売るメリットがまるでない。元より、貴方の治療を引き換えにエルフの貿易を国に認めさせるが目的だったが…後ろにいる夫婦のせいで今の状況だ。まあ、お蔭で大分稼がせてもらったけどな。おっと、話がそれましたね。今の私はガリアの伯爵であり、エルフとの貿易はジョゼフ王から正式に許可も貰っているのだよ。すなわち、君はもう用済みなのだよ」

「そこを何とかお願いします！！ 子を産んだ後なら私はどうなっても構いません。ですから、お腹の子だけは…」

ふむ、本来なら「だが断る！！」と言つてやるのだが…

「…ねえさま、こんなのにあだまを…はあはあ…下げる事なんて…」

まだ、喋る元気があるかあ…。

私は、ギーシュに顎で命令をした。私の意図を読み、ギーシュのワルキューレによる無情は制裁が加えられた。ワルキューレの握力により、三女の腕が有りえない方向に曲がった。

「ギャアアアアアア」

応接間に良い声が響き渡った。

「ル、ルイズ…ごめんなさい。ごめんなさい」

目の前で実の妹が酷い目に合っているのを見て、ひたすら謝っている。自分では助けられないと悟っているのであろう。この場で三女を助けて欲しいなど懇願したら、どうなるかは火を見るより明らか

だからね。

「とんだ、邪魔が入ったね。話を戻すぞ。確かに、私としてもこの世に生も受けていない胎児を死なせてしまうのは非常に遺憾である。それに、一応とはいえヴェリエール家には色々世話になった事もあるんで、条件次第で鎮静剤と言わず病自体を治してやつてもいいと思っっている」

もちろん、それなりの対価は払ってもらいますがね。

「ほ、本当ですか！？ 本当にこの病を治していただけるのですか？」

「無論だ。これでも、約束を破った事など数えきれ程しかないぞ。…なんだい？ その疑いの眼差しは…あまり信じていないようだ。ならば、見せてやろう！！ お前の病など片手間で治せるという証拠を！！」

私は、ワルキューレに押さえつけられている三女に近づいた。そして、三女の頭の片足を置いた。次女は、少し頭を上げて三女の方を見ている。私が何をするのか気になるのであろう。

「喜べ… 大事な姉の為に役立てるのだからな。すぐ、呼び戻してやるから安心しろ。お前を殺るのは、私の仕事じゃない…じゃあな」

足に少しだけ力を入れて三女の頭を床に押し付ける。

「ま、まさか…冗談でしょう」

冗談？本気に決まっているだろう。

「ゲツホゲホ、ちいねえさま…い、今私…い…イヤア…。ヤダヤダヤダ、死にたくない死にたくない」

死にたくないと言われても、三女は既に何回か死んでいるだが…。今更何を恐れるのか理解できないよ。それにさ…案外あの世も楽しいよ。個性あふれる人達が多いからね。ただ…何分かなり力強い人達の為、対等に扱ってもらうにはそれ相応の力を示す必要があるけどさ。

「まあ、こんな感じに死者すら元通りに出来るというわけだ。これで、病を治せる事は証明できたかな？」

「本当にその為だけに、ルイズを殺したのですか！？ 人の…くっ、なんでもありません」

最後までセリフを言っていたら大変な事になっていたよ。よく、咄嗟に口を紡いだな。私に意見をしたいならば、私より偉くなってから言っしてほしいものだね。

「ウエールズ、例の物を」

「はっ！！」

ウエールズが手荷物から、大きめの万力を取り出した。ウエールズは慣れた手つきで、床に万力を固定し、ギーシュは三女を万力にセツトした。この道具が何なのか知らない次女と三女にとってはこれから何が起こるか分からないといった様子だ。

「では、準備も整ったことだし本題へ移ろうか。病を治す条件は実に簡単だ。そこにあるレバーを力の限り回せばいい。簡単だろうか？」

「…そのレバーを回すとどうなるのですか？」

私が出した条件があまりに簡単すぎた事に疑問に思っているのだから。

「三女の両脇にある鉄板が徐々に狭まってくる。当然、その間に頭のある三女は死ぬ事になるだろうが…それも致し方ないね」

「い、いやよ！！　なんで私が死ななきゃいけないのよ。こんなみじめな姿にされたっていうのに、なんでそんな酷い事までされなきゃいけないのよ」

安心しろ、お前以上に悲惨な末路をたどった平民など山ほどいるわ。そのほとんどが貴族絡みでな。だから、たまには自分でその痛みを受けてみる。

私は、いまだに床のひれ伏している次女に声をかけた。

「よく、考えるんだ。今、君にとって何が一番大事なのかを…。それに、三女はガリアに戻れば確実に極刑が下される。なんせ、今回の戦争を引き起こすのに一役買った事や以前にガリア所有の城を崩壊させた件など余罪が盛りだくさんだ。きっと、死刑になるまで想像を絶する拷問や死刑囚どもの慰み者になるのは目に見えているじゃないか。だったら…今この場で、三女の憧れの存在である君の手で手厚く葬ってあげ方が遥かに幸せだと思わないか？」

「私の大切なもの…ルイズの…幸せ…。この手で…」

人間なんて所詮自分が一番かわいいのさ。

次女なんて偽善者の皮をかぶった悪魔みたいなやつだ。三女を殺す理由をこちらで提供してやれば、あとはなし崩しに墮ちる！！

「そつだ、君の手で死ねれば三女の幸せ。そして、君も病気が治る。誰もが幸せになれる唯一の道じゃないか。元気な子を産みたいのだから？ 幸せになりたいのだから？ ならば、答えた簡単だ。そこにあるレバーをたつた何回転かさせれば、誰もが幸せになれる」

次女がゆっくりとだが手をレバーへと伸ばした。

「う、嘘よね ちいねさま。ね…ちいねさま！！ 私まだ死にたくないの！！ もう痛いのも嫌なの。お願い誰か助けてよ。私が悪かったからお願い！！」

「みんなの幸せ…そつ、これが最善なのよ。ごめんなさい…ルイズ…貴方を助けられなくて…」

今だけは、ヴァリエール族を応援してやろう。お前ならできる！！
今、がんばらなかつたら今まで両親や姉妹を見殺しにして、一人のうのと生きてきた努力が無駄になるぞ！！ 自分の幸せは自分の手で掴むのだ。

「そつだ…その手に持っているレバーを回すのだ。自分の幸せは他人から与えられるものではない！！ 自らの手で掴み取るんだ！！」

メリメリ

「ヒギャー…アアアアア、ア、ア、ア、ア、だづげでー」

レバーが回るにつれルイズの頭部がどんどん締め上げられていく。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

プチプチ

バキン

次女は謝りながらもどんどんレバーを回していく。

三女の顔からは、血がながれ顔は苦痛のあまり白目を剥いて泡をはいている。気を失うにも、頭部を襲う激痛で意識は覚醒する。しかも、次女も少なからず躊躇っているせいか少しずつしかレバーを回さない為、苦しみを長引かせている。

無意識とはいえ、実の妹になんて仕打ちをするのだろうね。

だが、三女の悲鳴を聞き飽きたな。

「少し手伝ってやろう>>全力で回せ!<<<」

「え!?!」

グッシャー

万力のレバーが一気に回され、三女の頭が見事に崩壊。先ほどのスイカ…じゃなかった。三女の頭部と同じ状況へと変わった。

「おおおおおえゝえゝえゝえええええ」

次女が吐いた…そりゃ、もう盛大にだ。

くさい…いや、マジでくさいから勘弁してよ。次女の返り血で汚れるわ、嘔吐臭にかがされるわ。踏んだり蹴ったりなんですけど…お前等私に恨みでもあるのかよ。それに、貴族なのだから、死体の一つや二つ見たくらいで吐くなよな。

まあ、仕事も終わったし早々に撤収しますかね。

「では、涙の再会と別れも終わったことですし我々はこれで…」

私が席を離れて立ち去ろうとした。

「ま、待ってください。や、約束は果たしました。だから、私の治療を…」

「何を言っているのですか？ 確かに、治療をするとは言いましたが今すぐ治してやるとは言っていない。そうですよね？」

「おっしやる通りですヴェーグル卿」

うむ、実に見事な回答だ 部下達よ。

「騙したのですね！！ 貴方は、それでも人間ですか！？」

「騙したとは、人聞きの悪いね。貴方が勝手に今すぐ治療してくれと勘違いしただけでしょ…それを私のせいになんては困りませぬよ。はっはっは、用事も済んだし帰らせていただきますよ。頑

張って元気なお子さんを産んでくださいね。陰ながら応援させていただきますよ。それと、ミズ・カトレア………最終警告だ。下に居る旦那に魔法を放たためるように言っておいた方がいい。放てば最後、先ほどの妹の様な末路を辿る事になるぞ」

私達がこの屋敷を訪れた時から、ずっと下で待機していた次女の旦那がしびれを切らしたようだ。我々の座席の真下でいつでも魔法を放てるようにしているとはね。それにしても、凄まじい熱量だな……噂では、トリステイン最強の火のスクウェアだとか聞いたことがあるが噂に違わぬな。

「わ、分かっております」

「では、我々はこれにて失礼するよ。伯爵にもなると色々と忙しくてね。そうだそうだ、言い忘れるところだった……私個人としての用事は済みましたが、ガリア伯爵としてのお仕事が残っていました。心して聞くがよい、ジョゼフ王からの伝言だ。『虚無の使い手を産む家系は、エルフと王家以外には必要ない』と言う事だ」

「……ど、どういう事です？」

「要するにだ……君達の処理は既に確定済みなのだよ。元トリステイン最強の夫妻VSトリステイン最強の火のメイジと行くこうじゃないか」

「この人でなし……！」

カトレアの一声と共に戦火が切られた。

我々は、窓から応接間の外へと飛び出た。私達が出た瞬間、座って

いた場所が床から見事に融解した。素晴らしい威力だな。人間にしては、かなりやるな…全盛期の烈風以上だと私は思う。

だが、私の手によって改造された公爵夫妻は、人間としてのリミッターを外しているから例え年を取っていても強いぞ。おまけに、経絡秘孔を突き身体能力や反射神経などは、ガンダールヴ以上だ。

我々が無事に外に出たら、下の階から怒り狂ったイケメソの男がこちらに杖を向けてきた。ほほう…あれが、次女の旦那か。ウェールズに負けず劣らず絵にかいたような王子様みたいなやつだ。最も、ウェールズは最近ダークアサイドに堕ちたかのように人相が邪悪になってきているけどね。

「屋敷にいる者どもを全員始末しておけ…それが終わればお前等も自害しろ」

「ワカリマシタ」

「オマカセクダサイ」

さあ、人類最強メイジ達の戦いは置いておいて…

「ギーシュ…トリステインが滅んだとは言え、クルデンホルフ大公国は健在だ。私の部下である以上、借金の踏み倒しなど恥ずかしい真似は許さん。ここからは、独り言だ…この屋敷に次女の鎮静剤の為に貯め込んである金はあるだろう。そんな中から数十万エキユーが減っていたとしても誰も分からないだろうな。金を管理している帳簿は、屋敷の火事で無くなってしまったのだからね。……ギーシュ、君にはこの戦いが終わり次第屋敷にある金品を押収し我が屋敷に持つてくる事を命ずる」

「ありがとうございます！！ このギーシュ必ずやヴェーグル卿のお役にたつて見せます。モンモランシーの事まで気にかけていただいていたとは、このギーシュ感激です」

良く働く部下にはそれなりの報酬を出すのは当然だろう。

我々が会話をしている間も、目の前では魔法の応酬が繰り返されている。まるでスクウェア魔法の見本市みたいな状態だ。草木は、夫人の魔法で切り刻まれ。大地は公爵のゴーレムにより大穴を開けている。そんな二人を相手に次女の夫…面倒なので男性Aとしよう。

男性Aも奮戦をするが…人間としてのリミッターを外され、痛みすら感じない二人にかなうはずも無く。戦闘開始僅か三分で虫の息だ。

「お願い！！ もうやめてください。お金でも好きな物を差し上げます。ですから…」

次女が屋敷を飛び出してきて男性Aの前に立ち、私達に懇願する。

悲しいけど…これって王様の命令なのよね。

「一家揃ってあの世で暮らせるように手配してやろう。もっとも、行先は地獄だがな…殺れ」

夫人ご自慢のカッタートルネードが放たれた。

ザシュザシュザシュ…

無論、二人には避ける術も無く。見事に肥料へと形を変えた。無論、二人を始末した後は屋敷の者達全員を一緒に送ってやった。その中

に、シエスタも含まれていたのは言うまでもない。ギーシュと同じく不幸な星の元に生まれた、女だったな…あれがメイジなら、使い道はあったんださ。

これで、やっと全員葬ることが出来たよ。今日と言う日を忘れない様に、ヴェーグル領でお祭りを行う事にしようかな。平和祈念式典みたいな感じの物で。

S i d e e n d

S i d e 水銀燈

ヴェーグル家の量産機格納庫にて。

全く、私を置いていくなんていい度胸じゃない。

お父様が居ないとティファニアが私の大事な羽をかじりに来るんだから、しっかりとご飯あげてから行きなさいよ。

「改めて見ると、人間にはもつたいたい位の機体よね。魔法を吸収するわ、物理攻撃を反射するわ 人間じゃ絶対に勝てないじゃない」
「ただ、世の中にはもっと理解不能な力を持っているエルフ…人間？ながらエルフと同等の力を持っているお父様もいるのだ。よくよく考えると、おかしな世界よね。」

それにしても無駄にデカいわね。

量産機…確か、お父様曰く S2機関内蔵型エヴァンゲリオン量産

機だったかしら？ お父様のセンスを疑う訳じゃ無いけど…どうにもあの顔が気に食わないわね。

「水銀橙ちゃん、みーつけた。ハグウ」

モグモグ

「ちょ、ちょっと何 抱き着くふりして私の大事な羽を食べているのよ！！ むしろ、そっちが本体なのだからいい加減やめてくれな
いかしら」

「ええー、美味しいのに…」

「美味しいからって…美味しいからって娘の大事な羽を食べるのはどうかと思うわ。で、そんな恰好をして何処に行こうっていうのかしら？」

「実は、レイアさんをお迎えに行こうともって着替えてきたんです。たまには、びっくりさせようと思って」

「そう、なら早く行きなさい」

あれで私やお父様より強いことから、エルフと言う種族は色々間違っているわね。一体、ドコをどう間違えばあなるのかしら。

「じゃあ行つてきますね。醤油の飲み過ぎは体に毒だから気を付けてくださいね」

失礼ね…醤油は万病に聞く万能薬よ。決して毒なんて事は、無いわ。

「気を付けて行ってらっしゃい。お母様」

量産機がゆっくりと歩きだし、お父様がいる領地の方へ向かって行った。

あれは、何かしら？

ティファニアの量産機が立ち去った場所に、人間の腕が落ちていた。しかも、切断されて一週間以上は経過しているだろう。

「よくわからないけど…ゴミね」

パチン

水銀燈の魔法により、腕は綺麗に焼かれ塵へとなった。

この腕が誰の腕なのかをもっと気にしていればと後々、水銀燈は後悔する事になる。もしくは、ティファニアの量産機の異変に気付いていたらと…。だが、機体が白く、また日中であつたことから量産機の左の手の甲にルーンが刻まれている事に気付ける人はいなかった。

S i d e e n d

主人公は、手を抜かない。(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

予想が付く方も多そうですが、あえて次回の内容は何も言いません。

今後もよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5159m/>

使徒の使い魔

2011年9月25日14時12分発行